

校註 風葉和歌集

新修 作者部類

和歌史年表

例言

一、本卷は、大系第二十三卷として、風葉和歌集、新修作者部類、和歌史年表を收めました。

一、本卷は、すべて沼波守が擔當しました。

一、風葉和歌集は、卷別は丹鶴本(二十卷)に從ひ、宮内省圖書寮本たる清水濱臣藏本(十八卷)を參照して校訂しました。

一、新修作者部類は、古來行はれたる各種の作者部類を本とし、これに本大系に收めたる勅撰集以外のものを併せ收め、索出に便ならしむる爲に字畫順に排列しました。

校註 國歌大系 第二十三卷目次

目次 終

解　題

風葉和歌集

これは物語のうちにある歌を勅撰集の體裁にならつて集めたもので、その成立年代は、序文に「ふみながしといふとしのやとせ」とある、即ち龜山天皇の文永八年（皇紀一九三一年）だといふのである。ところが序に「いまわが君、あめの下のくにのはゝと仰れがれましまして、はたとせあまりいつかへりになりぬるに。」とあるのは、何の意味であらうか。「くにのはゝ」は「くにのちゝ」の誤りとしても、龜山天皇ではない。龜山天皇は正元元年（皇紀一二九九年）の即位であるから、文永八年は十三年目である。それに「はこやの山の秋の月かなしささそふ光をもてあそびましますひまに。」とあるから、後深草天皇のことらしい。後深草天皇は寛元四年（皇紀一二四六年）に御即位で、正元元年に位を龜山天皇に御讓りになつてゐるが、寛元四年から文永八年までは二十六年目にあたつてゐる。そこでこの「わが君」を後深草院とすると、序によればこの集

は後深草院の仰せを承つて集めたといふことになる。

この序はすつかり古今集の序を摸してゐることは一々いふまでもあるまい、兩方を讀み較べてみればすぐわかる。風葉といふ名については「すべてちうたあまりをあつめてはた巻とせり。かのむくさのはじめによせて風葉和歌集といふ」と序に記されてゐる。即ち古今の序にいふ、歌の六義、風賦比雅興頌の風をとつて名づけたといふのである。部立は、春上、春下、夏、秋上、秋下、冬、神祇、釋敎、離別、羇旅、哀傷、賀、戀一、同二、同三、同四、同五、雜一、同二、同三、となつてゐる。

この集の價値は、歌の巧拙といふことよりも、物語の歌を集めたといふ點にある。即ち今は散佚して傳はらない物語の名がこの集によつて知られたり、又「とりかへばや物語」が古本と新本とある事が、この集によつて知られるといふやうな、文學史研究上の便宜があるのである。

今はもはや散佚したり、または殘つてゐてもその一部分であつたりする古物語の面影を、今日窺ふべき資料は、この風葉集と、拾遺百番歌合と、無名草子とが主なものであらう。

そこでこの集にのつてゐる歌は、どの物語が何首とられてゐるか、各の部にとられてゐる數を示して、分類表を作つてみようと思ふ。この表は、この集を文學史研究の資料としてみる上に於

いて、かなり便宜があらうとは思ふが、筆者の粗漏からや、又は輕卒から、一つの物語を二つだと思つたり、二つの物を一つだと思つて數へたりしたやうな事や、其の他種々な誤りもあるであらうが、これは大方の諸賢の御示敎を待つこととして、この表がいくらかの便宜を與へることが出來れば幸である。

風葉和歌集物語部類

〔あ〕

秋のよながしとわぶる
　神(二)　戀四(一)　戀五(一)

秋のよながむる
　秋下(一)

あさくら
　春上(二)　夏(二)　秋上(二)　冬(一)　旅(一)　哀(一)　賀(二)　戀三(一)　戀四(二)　雜一(一)　雜二(三)　雜三(一)

あさくら山

あだなみ
秋下(一)　旅(一)
あたりさらぬ
春上(一)　春下(一)　戀一(三)　戀五(二)　雜一(三)　雜二(一)
あづま
戀一(一)　雜二(二)
あはびがひ
神(一)
あひずみくるしき
冬(一)　釋(二)　戀四(三)　雜一(三)
あふぎながし
春下(二)　秋上(一)　雜三(一)
あふさか
戀二(一)
あふにかふる

春上(一)　秋上(一)　戀一(一)

あま人

雜三(一)

あまのかるも

春下(一)　冬(一)　釋(一)　戀四(一)

あまのもしほび

春上(一)　春下(一)　秋上(一)　神(一)　釋(四)　賀(一)　戀一(二)　雜一(四)

あまやどり

冬(一)　釋(一)

あらばあふよ

春上(一)　夏(二)

有明のわかれ

釋(一)　哀(二)　戀一(一)　戀二(五)　戀九(三)　雜一(四)　雜二(三)　雜三(一)

あれまく

釋(一)

雜一（一）

ことうらの櫃

雜二（一）

戀に身かふる

釋（一）

こまむかへ

[illegible]門（一）

こゆみ

秋上（一）　賀（一）

〔さ〕

さがの

釋（二）　哀（一）　賀（一）　戀一（一）

さごろも

春下（二）　夏（四）　秋上（三）　秋下（二）　冬（六）　神（五）　釋（一）　戀一（四）　戀二（四）　戀三（三）

戀四（六）　戀五（八）　雜一（二）　雜二（一）　雜三（一）

さゝわけしあさ

春上(二)　春下(一)　秋上(三)　冬(三)　賀(三)

五月

雑一(一)

さとのしるべ

戀一(一)　戀五(二)

〔し〕

式部卿の宮

雑二(二)

四季ものがたり

春上(二)　春下(三)　夏(二)　秋上(二)　秋下(二)　冬(五)　哀(一)　戀五(二)　雑一(一)

しぐれ

春上(一)　秋下(一)　冬(一)　戀五(一)　雑三(三)

しづくににごる

哀(一)　戀一(一)

「す」

すまひ
　別（四）　旅（三）　哀（一）　雜一（一）　雜三（二）
すみよし
　旅（一）　哀（一）　戀一（一）　雜三（三）
すゑはの露
　春上（一）　秋上（一）　秋下（一）　冬（一）　別（一）　哀（二）　賀（一）　雜二（一）

〔せ〕

せれう
　秋下（一）

〔そ〕

袖ぬらす
　夏（三）　秋下（一）　哀（二）　賀（二）　戀二（一）　戀五（二）　雜一（四）

〔た〕

たい
　戀五（一）

〔ち〕

〔つ〕

春上(一)　釋(一)　哀(一)　賀(二)　戀五(一)　雜一(一)　雜二(一)

なると

夏(二)　釋(一)　戀二(二)　戀四(一)　戀五(二)　雜二(一)　雜三(一)

なれてくやしき

戀二(三)　戀五(二)

〔に〕

西の海

雜三(一)

〔ぬ〕

ぬりごめ

戀一(二)

〔ね〕

ねざめ

春上(一)　春下(二)　秋上(一)　冬(一)　哀(二)　戀三(一)　戀四(二)　雜一(二)　雜二(六)　雜三(四)

「の」

「は」

〔ひ〕

〔ふ〕

〔む〕

〔め〕

〔も〕

ゆるさぬ中

戀二(一)

「よ」

よし野

冬(一) 戀二(二) 雜三(一)

吉野山

秋下(一) 雜一(二) 雜二(一) 雜三(一)

よその思ひ

春上(一) 夏(一) 秋上(二) 秋下(二) 神(三) 旅(一) 戀一(三) 戀四(一) 戀五(三) 雜一(三)

よつあし

戀一(一)

よもぎがはら

哀(一) 戀一(一) 戀三(一)

よなうち川

雜二(一)

〔わ〕

〔を〕

春下(二)　神(一)　戀一(二)　戀二(二)　戀三(三)　戀四(二)　戀五(一)　雜一(二)　雜二(一)

をのへ

秋上(一)

女すゝみ

春上(二)　秋上(二)　冬(一)　神(一)　別(一)　哀(四)　戀一(一)　戀二(二)　戀三(一)　戀四(一)

雜一(一)　雜二(一)　雜三(二)

女のすくせしらず

哀(二)　戀一(一)　戀五(三)　雜三(二)

右の他に所載の物語の不詳の歌が數首ある。即ち夏の部で、

あはれとも君はきかずや郭公たびねの空をなきてすぐなり

うかりける□いかでかしらむなでしこの花

の二首は脫字があるので、物語の名が解らない。

秋の上で、

あさつゆにしをれはすとも女郎花おぼろけならぬ人にをらすな

羇旅で、最初の

あふさかをこゆるとてよめる

と詞書のあつて歌のないものと、そのかへしの

もろともにたたましものをよそにのみ聞くぞかなしきしがのうら波

などである。

さて前揭の部類によつてみると、名のみ傳はつて本文の散佚してゐる物語の大部分の名が、この集に見えてゐる。そしてその大部分はこの集にのみ名が傳へられてゐるのである。またそれらの物語から取られた歌の數で、その物語の分量や、價値もいくらか想像されるであらう。この集にのつてゐる同一物語の歌をあつめてみれば、いくらかはその物語の面影の一斑をたどることが出來るであらうし、又何かの物語の斷片が、もしこの集にある歌を含んでゐれば、それが何の物語であるかを定める資料にもなるであらう。かくこの集にのつてゐる同一物語の歌を集めることは、かなり價値のある事ではあるが、本書としては紙數の關係上とてもゆるされない事であるので、前揭の部類で幾分でもその目的の助けともしようと思つたのである。

尙この集の卷數について、丹鶴本は二十卷となつてゐる。それは、序文に「ちうたあまりをあ

つめて、はた巻とせり。」とあるに一致してゐるが、卷第十は「羇旅三」となつてゐて、その一及び二がない。淸水濱臣の所藏本は、神祇(丹鶴本卷第七)と釋敎(同卷第八)とが卷第七に、離別(同卷第九)と羇旅(同卷第十)とが卷第八となり、以下卷第九より順を追うて卷十八を以て終り、二卷闕卷となつてゐるが、本大系では姑く其の卷別を丹鶴本に依り、淸水濱臣本(宮內省圖書寮本)を參照して校訂したのである。

解題終

風葉和歌集

やまとうたはやくもたつ出雲八重垣にはじまり、ならのはの名におふ宮にあつめられしより、言のはしのだの森の千枝よりもしげく、えらばるゝこともうらの濱木綿たび重なりぬるに、つくりものがたりの歌といふものなむ、いつはりなれたる人のいひ出でたることにのみなりて、まめなる所にはほにいだすべきにもあらざめれば、わかの浦のいそ隠れに、かきすつる藻屑むなしくつもり、あさか山の谷かげに、しらぬうもれ木くちはてぬべくなりにたり。そのこゝろを思へば、かかるべくもなむあらぬ世の中にある人、なすことしげきものなれば、見るにもあかず聞くにもあまることを、さだかにその人とはなけれど、のちの世にいひ傳へて、よきをしたひ、あしきをいましむる便りになりぬるばかり記しおけるなりければ、ひたぶるにそらごとといひ果てむも、ことの心たがひぬべくや。なかにも歌のさまを思ふに、花の色にへだつる霞をうらみ、おなじみかきに鳥のねをまち、あやめ草をひきてうきねをかこち、なでしこを見て露けきをそへ、ふるさとの荻の葉を思ひて夕風にことづけ、雲ゐをわたる雁の音にともをしたひ、霜がれゆく草の原にとふ

○ならのはの名におふ宮　大和國添上郡にあつた平城宮を指す。元明帝の和銅三年六月遷都をたてさせ給うたが桓武帝の御時平安京に遷させ給ふ。上の「八雲たつ」より下の「しのだの森」云々までは、歌の道は神代より御皇室と共に隆榮えきて、恰も信太の森のやうである。この集の存在的位置を示したのである。

○しのだの森　和泉にある。六帖「和泉なる信太の森の楠の木の千枝にわかれて物をこそおもへ」

○ほにいだす　秀にいづる。高くあらはれること。古今集序「まめなる所には花薄ほにいだすべき事にもあらずなりけり。」

○あさか山　朝香山。伊勢國に在る。往昔、童兒の手習ひの初めに習ひし歌「朝香山かげさへ見ゆる山の井のあさくは人をわがおもはなくに」難波津の歌と共に、歌の父母と稱せらる。

○みかき　御垣。禁中の周圍の垣。上の「なかにも歌のさま」云々より以下は、歌を思ふその折節の優雅な心の有様を叙したのである。

べき方をうしなひ、をしほ山の雪にふかきあとをたづね、峯のあさひに千世をちぎり、うつせ貝のむなしき殻をなげく。こゝろこと葉おほくは添歌のすがたにかなひて、うたのおやなる浪速津のながれにかよへれば、ほかにはあさき言葉をあらはして、花鳥の色をも音をもすてず、うちには深き心をこめて、をとこ女の戀もうらみも知らせむとよめるなり。夏ごろもたゞひとへならむよりも、うたかたのあはれなる心そひてやあらむ。かかるに今わが君、あめの下のくにの母と仰がれまし〳〵て、はたとせ餘りいつかへりになりぬるに、もゝしきの春のえだ〳〵咲きつゞく色に、たのしびはこやの山の秋の月、かなしさ誘ふひかりをもてあそびましますひまに、もろ〳〵のことを捨てたまはぬあまり、いにしへ今の物語のなかより、かきあつめられにける歌を、人しれぬみ山がくれに忍びてかよふ秋風の吹きおくれるにおどろけば、これをもととして更にえらびそへ、卷をわかち、ことばを調へてたてまつるべき仰せごとになむありける。あら小田のかへす〴〵も、片絲の思ひよらぬを、いなふねのいなともはたかしこければ、かりの列（つら）のかきつらねぬるなる

○をしほ山　山城國にある。古今集十七「大原や小鹽の山もけふこそは神代の事も思ひいづらめ」借しに云ひ掛けた。
○うつせ貝　萬葉十一「住の江の濱によるとふ打背貝みなき事もて我こひめやも」浮世の空しさを、身のない彼の貝に云ひ掛けた。
○うたのおやなる　古今集序に「そも〳〵歌のさま六つなり」云々とある。その一のそへ歌「難波津に咲くやこの花冬籠りいまは春べと咲くやこの花」の歌を指すのである。
○こやの山　攝津國にある姑射山來ぬやに云ひ掛けた。
○いなふね　稻の刈り穗を積みたる舟。古今集二十「最上川のぼればくだる稻舟のいなにはあらずこの月ばかり」下の「いなとも」に續く。
○かりの列　鴈のならびとぶをいふ、かりの玉章などいふより、「かきつらね」の序とした。

べし。うぐひすの初音をきくよりはじめて、神山の葵をかざし、鹿の音にふかき哀れをしり、よはの時雨を思ひやるにいたるまで、また神佛のちかひ、わかれ、たびのこゝろ、あしたの露、ゆふべの雲に世をかなしび、ちとせの鶴、ふたばの松に君をいはひ、なみだの色を袖にしのび、つらさに添へて憂きをなげき、いとたけの聲におもひをのべ、おやこの道に心をまどはし、あるは長歌、物の名、をり句、連歌などやうのくさ／＼のすがたまで、すべて千歌あまりをあつめて、はた卷とせり。かのむくさのはじめによせて、風葉和歌集といふ。さてもうつぼの、なすこそ神といへる歌は拾遺集にいり（拾遺集戀五。此の集戀二、思ふ事なすこそ神もかたからめしばしわするゝ心つけなむ）住吉の、これを入りあひの連歌とは、小一條院の御歌とかきこゆ（住吉物語、あかつきのかれの音こそきこゆなれこれを入あひとおもはましかば。後拾遺集雜二云、女のもとにてあかつきかれを聞きて、小一條院。）かかるたぐひ多かれど、いづれも物語やさきならむとてもるべきならねば、今これをのぞかぬなるべし。このものがたり長柄(1)橋のふるくつくれるも、あし垣のちかき世にいでくるも、はまのまさご數つもり、しぎの羽がき搔きあへぬまゝに、よもぎが島にあらねど、名のみをききてもと

○いとたけ　絲竹。夫木卷集十八「たちかへる雲居の庭の神あそびいと竹の音も月にすみけり」たの「つらさに添へて憂き」を受けた。

○かのむくさ　彼の繁榮。最初に註せる神代より歌の道の榮え來たことを指す。

○しぎの羽がき　鴫は諸鳥にもまして殊にせはしく羽を搔くので、事のあわたゞしさを云ふ。古今集十五「曉のしぎの羽搔きもゝはがき君が來ぬ夜は我ぞ數かく」

○よもぎが島　蓬島。蓬萊、仙人の栖む處。夫木集二十三「いにしへも名をのみききしわたつみの蓬が島をたづねてしがな」

めえぬもおほく、花のそのにいりながら手折りつくさぬ木ずゑもあれば、身のあやまりをのこし、人のそしりをおはむこと、のがるゝかたなく思ひしるものから、かくこのたびあつめえらはれて、よし野の瀧のたえずみづがきのひさしき世にと、まれらは物語をつくれる人は、かくれてもあらはれても、このことの時にあへるをなむ喜び、今の世にみおよびて聞きつたへむ人も、はじめてなき跡をおこされぬれば、しき島の道のさかゆくことを思ひて、大空の月日のかげものどかにめぐり、よものうみの波の音もしづかならむことをねがはざらめや。ふみながしといふ年のやとせ、ふりみふらずみしぐるゝ頃、これをたてまつりぬるとなり。

○みづがきの　瑞籬。崇神の帝の御在し宮にて久しき往古の御世なれば、下の「ひさしき」にかけて云ふ。萬葉十三「瑞垣の久しき時ゆこひすればわがおびゆるむあさよひごとに」
○このことの時　歌の道の最も盛んなりし時代。
○ふみながし云々　文永八年をいふ。

風葉和歌集　巻第一

春　上

はるたちける日よませたまひける　　なみのしゐゆふみかどの御歌

たちかはる春のしるしにけふよりは初鶯よこゑな惜しみそ

冷泉院行幸ありて御あそびども侍りけるついでによませさせ給ひける　　源氏の朱雀院のおほん歌

少女
こゝのへを霞へだつるすみかにも春とつげくる鶯のこゑ

左のおほいまうちぎみ春日にまうでてこれかれ歌よみ侍りけるにあし
たの霞といふ事をよめる　　うつぼの右少將仲賴

梅花笠
鶯の羽風をさむみかすが山かすみの衣けさはたつらむ

大納言たゞよりの七十賀なむすめのし侍りける屏風の歌　　讀人しらずおちくぼ

物語下
あさぼらけ霞みて見ゆるよし野山春や夜のまに越えてきぬらむ

だいしらず　　讀人しらずまよふ琴のね

○かすみの衣　霞を衣に見たてていふ。春を司る神の佐保姫の、その衣といふ意。

○夜のま　一夜のうちに。ちよつとの間に春が來たといふ意。

うちきえしさえし雪げに立ちはへりのどかに霞む春の空かな

いせなの一條院女三宮

春ながらまだ舊年のつらゝのみむすぼほれたる谷の下水

小野といふところにすみ給ひけるころ子の日に雪のふり侍りければ

はしたかの女院

小松原かすみばかりやたなびかむ雪かきわくる人しなければ

子の日に中宮のおほん方よりひわりごなどたてまつるとて五葉の枝に

うつる鶯に　源氏のあかしのうへ

初音
とし月をまつに引かれてふる人にけふ鶯の初音聞かせよ

御かへし　中宮

同上
引きわかれ年は古れども鶯のすだちし松のねを忘れめや

子の日に野にいでてよみ侍りける　しのぶもぢずりの右大臣

君が世をいとども野邊にひく松はねさへぞ深きためしなりける

だいしらず　しぐれの源大納言家宰相

君がため春のおほのをしめたれば千世のかたみにめづる若なぞ

山里にすみける頃いとあやしき女どもの若菜つむをみて　はまゆふの兵衛

○うちきえし　一本「うちきらし」とある。

○立ちはへり　立ち映へること。一本「たちかへり」とある。

○子の日　正月の初の子の日に當る日。公事根源に「子日遊、これは往古人々野邊に出でて子日するとて松を引けるなり。朱雀院、圓融院、三條院などの御時にもこの遊はありけるにや」

○ひわりご　檜破子。檜で作つた仕切のある器。今の辨當箱やうの物。

○まつ　松に待つを云ひ掛けた。

○あやしき女ども　賤しき女等。

○ひさげ　提子。酒を入れて杯につぐ器。
○くろばう　黒方。煉物の名。

○雪ま　雪の間。
○つみはやし　摘みながら、若菜をほめはやすのである。
○つむべき　積むに、摘むを云ひ掛けた。

霞たつ野邊の心もはづかしく何いま更に若菜つむらむ

右大將なかたゞうちにさぶらひけるにふぢつぼの女御しろかれのひさげに若菜のあつものいれてくろばうを蓋におほひてとるところに女(の)わか菜つみたるかたつくりたるをつかはし侍りけるにかきつけ侍る

うつぼのそわうのきみ

藐開中
君がため春日の野べの雪わけてけふの若菜を獨り摘みつる

源氏のをのの尼

うきふれの方へわか菜つかはしけるに

手習
山ざとの雪まの若菜つみはやし猶おひさきの賴まるゝかな

うきふれのきみ

同上
雪深き野べのわかなも今よりは君が爲にぞ年もつむべき

かすがの歌のなかに

うつぼの左の少將かずされ

梅花笠
みわたせば雪ふる山もあるものを野べの若なの老いにけるかな

右大將なかたゞ

同上
雪とくる春のわらびの萌ゆればや野邊の草木のけぶりいづらむ

六條院にわたり給へるに雪ふりける日「心みだるゝけさのあわ雪」ときこえさせ給へりけるに

源氏の二品內親王

○うはの空　上の空に、あなき意に云ふ、うはの空を云ひ掛けた。
○霞だに云々　霞さへ二人を隔てなければ、たとへ春の景色は眺められなくとも慰さまるものをと云ふ意。
○小野　山城國に在る。
○かた／＼　片々。
○霞こめたる　二人の間柄を疏遠にしたと云ふ意。
○ものゝねども　家うちや街上などに起る種々の物の音を云ふ。

若菜上
はかなくてうはの空にぞ消えぬべき風にたゞよふ春のあわ雪

よそながらだにけぢかきさまならばと思ふ人につかはしける　ひいこかしづくの頭中將

霞だに隔てざりせば春の色をよそに見つゝも慰めてまし

こゝろならず小野にすみける頃をとこの久しくおとづれ侍らざりければてならひに　うきなみの藤中納言女

かた／＼におぼつかなさもはれやらで霞こめたる春の山里

にほふ兵部卿のみこはつせまうでのかへさに宇治にとゞまりて侍りけるにものゝねども追風に吹き來るをききてかをる大將の侍りけるにつかはしける　源氏の八宮

椎本　拾遺　百番歌合四番
山風に霞ふきとくこゑはあれど隔ててみゆる遠の白浪

春のころ女のもとよりかへりてつかはしける　さゝわけしあさの關白

立ちいづる山路をだにも見るべきにつらきは春の霞なりけり

かへし　藤宰相のむすめ

おしなべて春の山べの空よりも憂き身ばかりを霞こめなむ

春宮女御宣耀殿にすみ侍りけるに遣はさせ給ひける　すゑはの露の皇后宮

九重のおなじみ垣のうちながら霞こめたる鶯のこゑ

むつきのころ里に侍りけるにうちより「ねぐらをこひぬ時のまぞなき」とのたまはせて侍りける御かへし　　あたりさらぬ麗景殿女御

花の枝にねぐらうつろふ鶯は思ひもいでじ去年のふる巣を

だいしらず　　はがための侍従

花のえにはやもなかなむ鶯の聲につけてぞ春も知らるゝ

雲ゐの月の女二のみこ

梅の花たゞ香ばかりも匂はなむ谷のうぐひす今や來なくと

右大將紅梅のなかしきあけぼのを見侍りけるに鶯もひとこゑなきたるに　　ひぢぬいしまの女三宮の中納言

をる人のあたりに匂ふ梅が香をあかずとやなく鶯の聲

右のおほいまうち君の軒ちかき紅梅のいとおもしろきを見てまづうぐひすのと聞えけるかへし　　にほふ兵部卿のみこ

紅梅

花の香にさそはれぬべき身なりせば風の便りをすぐさましやは

六條院のたきものあはせはてて御あそびありけるに梅がえなどいたしたりければ　　ほたる兵部卿のみこ

○み垣　禁中の垣を云ふ。

○おほいまうち君　大臣。太政官の長官で、左右の大臣を云ふ。

○たきものあはせ　薫物合。香あはせに同じ。禁中に於ての遊技。

○心しめづる　「し」は助詞。「ぞ」に通ふ。

○をりしらぬ　折ることすら氣づかずに、たゞ洸惚としてゐること。

○ふかき心　情のある心と云ふ意

梅枝
鶯の聲にやいとゞあくがれむ心しめづる花のあたりに

もろこしにて梅木おほかる山を行きて見侍りけるにまことにこと木まじらず一たびに咲きわたりければ　はま松の中納言

物語一
白妙にふりつむ雪とみえつるは梅咲く山のとほめなりけり

むすめのことを左大將にほのめかし侍るとて　女すゝみのさきの右大臣

しる人のしるべき色にあらねどもみせばや宿の梅の梢を

かへし

をりしらぬ心やいとゞまどひなむ木だかき宿の梅の匂ひに

女のもとにて軒ちかき梅を折りて　ひぢぬいしまの關白

さき匂ふ香をなつかしみ梅の花ちとせの春を君とこそ見め

かへし　中務卿のむすめ

風ふけばさそはれぬべき梅の花たゞ香ばかりの枝にこそ有りけれ

玉かつらの内侍のかみまうで侍りけるによませ給ひける　源氏の冷泉院御歌

槇柱　拾　百番歌合二番
九重に霞へだてば梅の花たゞ香ばかりも匂ひ來じとや

梅の花のしろきくれなゐあはせ侍りけるに紅のかたにてよめる　梅つぼの宮君

やへ咲けど匂ひはそはず梅の花紅ふかき色ぞまされる

女に梅の花を折りてみせ侍るとて

あふにかふる三位中將

紅に匂はざりせば梅の花ふかき心をよそへましやは

人の許へたきもの遣はすとて紅梅のえだにつけられける

あさくらの皇后宮

なれし夜の袖の匂ひによそへつゝをれば露けき宿の梅が枝

御かへし

皇后宮大納言

よそへつゝ折りたる梅の花みれば過ぎにし春ぞいとゞ戀しき

關白のきちかく梅を見侍りて「いにしへは先づぞ戀しき」と申し侍りければ

しのぶぐさの入道一品宮

としを經てかはらぬ梅の匂ひにも猶いにしへの春ぞ戀しき

梅つぼの花の色こき枝につけて東三條院女御につかはさせ給ひける

はぎにやどかるの中將

梅の花雲ゐになるゝ色よりも共に見し夜の春ぞこひしき

御かへし

ながむらむ雲ゐの花に思ひやれ見しよ戀しきもとの梢を

後夜にあか奉るとてつま近き紅梅を折らすればかごとがましく散るにあかざりし匂ひも思ひいで侍りければ

うきふれの君

○よそへ　なぞらへること。

○なれし夜の袖　常に着馴れた夜の衣といふ意。

○よそへつゝ　梅の花を意中の人の姿になぞらへつゝと云ふ意。

○をれば　折るに、居るを云ひ掛けた。

○後夜　夜の九つ時より八つ時までをいふ。

○あか　閼伽。佛に手向ける水を盛る器。

○つま近き　端近き。

○かごとがまし　かこつけるやうに。

手習　百番歌合九十二番
袖ふれし人こそ見えね花の香のそれかと匂ふ春のあけぼの

こぞの春もろともに月を御らんじける女のもとに又の年つかはされ侍りける　　はぎにやどかるの御門の御うた
月やあらぬ春や見しよのそれながら詠めしのみや忘れ果つらむ

中宮さとにおはしましける頃たてまつらせ給ひける　　おやこの中のみかどの御歌
眺むともおなじ心に誰かみむ思ひくまなき春の夜の月

御かへし
ながむれど心ははれず春の夜のつきせず物を思ふ身なれば

だいしらず　　いまとりかへばやの太政大臣四君
物語一
春の夜もみる我からの月なれば心づくしの影となりけり

あまのもしほびの大僧都
てりもせぬ春の慣ひのいとゞまたくもり果てぬる袖の月影

女のもとより歸りてつかはしける　　なんなすゝみの右大将
心さへやがてぞくらす春霞かすみわけつるあけぼののそら

もの思ひけるころあけぼのの空をながめて　　ねざめの前關白中君
物語
いつとだに憂き身は思ひわかれぬに見しにかはらぬ春のあけぼの

○月やあらぬ　伊勢物語「月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身ひとつはもとの身にして」とある歌の意をさすのであらう。
○思ひくまなき　月の限なく澄みわたるに、心の隔てなきを云ひ掛けた。
○つきせず　月を云ひ掛けた。
○我から　我ゆゑ。
○てりもせぬ　春の月は朧なるに云ふ。

○かりのつら　鴈のつらなりゆく樣。

○かたかりける女　まだ御目見えの恐はない女。

○こし路　越路。越前越中越後などをいふ。來し路に云ひ掛けた。

○ちしのおとゞ　致仕の大臣。

○かきたれ　搔垂。たゞ垂ると云ふに同じ。「かき」は助動詞、たゞ輕く添へたまで。六帖「かき垂れてふる白雪の君ならばあなめづらしといはましものを」

よし野の山におこなはせ給ひける頃よませ給ひける

風につれなきよしのの院御歌

古りにける昔をみるも哀れなり吉野の宮の春のあけぼの

かすがの歌の中にかりのつらといふ心を　うつぼの源のおほきおほいまうち君

梅花笠
ふる里にともに残らずゆく鴈はこゝにて雲をすぐさざらめや

また御らんぜられむ事もかたかりける女のもとよりいでおはしますに

歸る鴈のなくをきかせ給ひて　よその思ひのみかどの御歌

いまはとてこし路にかへる鴈がねも猶あき霧の空をまつらむ

源氏の大將と申しける時つの國すまといふ處にこもりおはしましける

にちしのおとゞ宰相中將に侍りける時たづねまゐりてかへり侍りける

須磨
拾　百番歌合三十二番
あさぼらけの空に鴈のつれてわたるによませ給ひける　六條院御歌

ふる郷をいづれの春か行きてみむうらやましきは歸る鴈がね

玉かつらの尙侍ひげぐろの關白のもとにわたりてのち雨のいたうふる

日つかはさせ給ひける

槇柱
かきたれてのどけきころの春雨にふる郷人をいかに忍ぶや

わかのうらの柳をよめる　讀人しらずまよふきんのね

岸ちかみ霞も浪もたち寄ればみだれずみゆる青柳の絲

人の語らへりける女を忍びてとりこめて侍りけるころ庭に柳のうちなびくをみて

あらばあふよの内大臣

つねよりもいとゞ亂るゝ青柳はもと見し人に心よるらし

四季ものがたりの中に

あなやさのみや

あだに散る花に契りをむすび置きて果ては亂るゝ青柳の絲

○つねより云々　いつぬ見る青柳ではあるが、その風に亂れるを見てゐると、いつか相見し人におのづと心が通ふといふ意。

風葉和歌集　巻第二

春　下

左のおほいまうち君春日にまうでゝこれかれ歌よみ侍りけるに花をいざなふといふ心を　　うつほの中務卿親王

梅花笠 わが宿に移してしがな野べに出でてみれどもあかぬ花の匂ひを

春のころ山里にて見そめて侍りける女を思ひやりて　　かはきりの内大臣

たちかくす霞は遠くへだつれど花のありかに心をぞやる

中宮清涼殿の花御覧じける儲を見たてまつりて　　あまのかるもの權大納言

拾百番歌合九十八番 九重の霞のまより花を見て哀れこゝろの亂れそめぬる

心にもあらぬ事のそのよになりけれどことにいそぎたれずながめ侍りて　　しのぶぐさの關白

春風はおもはぬかたに吹きよれど心うつらぬ花の色かな

右のおほいまうち君のもとにあひすみ侍りける頃關白のかたの花のさ

○移してしがな　「がな」は願ひの意を含む感歎詞。

○花のありか　思ふ人の在所に譬ふ。

○九重　禁中を云ふ。

○春風は云々　春の風は氣紛れに吹くけれど、いつも變らぬは花の色であると云ふ意。

かりを諸共にみてたつとてよみはべりける　　さゝわけしあさの中納言

のどかにぞ君は見るべき春霞たつ空もなき花のあたりを

春の除目にかずより外の權大納言になりたる人のまできて侍りけるに

ひおぬいしまの式部卿のみこ

春をだに知らで過ぎぬるわが宿に匂ひまされる花をみるかな

花の盛りにちゝおとゞ「よばひはふりぬ」など申し侍りけるに

なだえのぬまの皇太后宮

心ありて風ものどけき宿からや花も盛りに匂ふなるらむ

法皇六十御賀白河院にておこなはれ侍りけるによませたまひける

いはでしのぶの嵯峨院御歌

君がすむながれ久しき白河の花ものどけき匂ひなりけり

法皇の御歌

春をへてかひある花の光とはふりにしものをしら河の水

みかどの御うた

山ざくら木高き峯に咲くのみやふるにかひあるみゆきなるらむ

弘徽殿の御まへにうゑられて侍りけるさくらの咲きはじめたるに寄せ

○たつとて 「たつ」は歌題。此處では、立つ、經つ、發つ、裁つ、閉つ、絶つ等に通ふ。

○春の除目 除目は官人に官を授けられる公事で、往古は諸國の縣の官人は春に、京の官人は秋に行ふのであつたが、後には總じて秋に行はれる事になつた。

○よばひ 私通。忍びて出で逢ふこと。

○ふりぬ 古るに、經るを云ひ掛けた。

○みゆき 深雪に行幸を云ひ掛けた。

させ給ひけるによみ侍りける　　かくれみのの二のみこ

君が世ののどけき春に咲きそむる花のときはは今ぞみるべき

左衛門督

花にあかで何なげきけむ君が世ののどけき櫻ありけるものを

大納言たゞよりの七十賀の屛風にさくらの散るをあふぎて立てる人かけるところ　　よみ人しらずおちくぼ物語三

さくら花ちるてふ事はことしより忘れて匂へ千代のためしに

南殿のさくらを一枝大將のもとにつかはさせ給ふとて

ゆくへしらぬのみかどの御歌

九重の花のさかりを見にくやと惜しき匂ひをしるべにぞやる

この花を御らんじて　　白河院御歌

我のみぞ有りしにもあらずなりにける花はみしよに變らざりけり

參りて奏し侍りける　　左大將

百敷はたゞ〱しくもあらねども花のしるべはうれしかりけり

はるの院のいそぢの御賀に行幸侍りけるにうへに御かはらけ參らすとて　　みかきがはらの入道式部卿親王

○ときは　常磐。ものの永久に變らぬこと。

○見にくやと　見に來るかと。

○みしよ　曾て見た姿といふ意。

○百敷　もゝしきとは五百津磐城(ユツイハキ)を約めし語。五百津とは物の豐富を、磐城とは石を疊みて固く嚴しき城をいふ。主上の御在します宮は堅固なればこれを稱めたゝへいふ。延いて大宮人の枕詞。

さくら花匂ふは春とききしかどかかる行幸のけふはなかりき

とらせ給ふまゝに　　後はるの院の御歌

これぞこのよろづ世ふべき春ごとの櫻をかざす花のみゆきよ

南殿いさくらのさかりに東宮二のみこなど花なりてとのたまはせける

に參り侍りけるをみかど吹きよる風もうらめしきになさけなしとのた

まはせければ奏しける　　みたらしがはの內大臣

ゆくへなき風だにちらす花なれば君が爲には折らざらめやは

堀河院東宮におはしましける時櫻につけて「うゑおきし人しなければ

さき匂ふ春のみやまの花もかひなし」と宣はせたりける御かへし

風につれなきの宇治人道門白太政大臣

萬代と祈りおきてしはる山の花さきそへむ末をこそまて

しら河院の花御らんじに行幸侍りけるにあるじの院「花みすばけふの

みゆきにあはましや」ときこえ給ひければ　　行方しられぬのみかどの御歌

花ゆゑとあさくや人の思ふらむあるじがらなるけふの行幸を

白河の院おりゐさせ給ひて後こゝのへの花を人のたてまつれるを御ら

んじて　　雲ゐの月のおほきさいの宮

○あさくや云々　人々はなんでもないやうに思ふけれども云ふ意

○あるじがら　主人柄。主人らしいふるまひを云ふ。風雅集「移し植ゑし宿の梅ともみえぬかなあるじ柄なる花も咲きける」

○おりゐさせ　下居。天皇の御位をおりゐ給ふこと。

思ひきや峯の霞も立ちへだて雲ゐの櫻つてに見むとは

須磨にて若木のさくらほのかに咲きそめたるを御らんずるに一とせの花の宴などおぼしいでられければ　　六條院御歌

須磨 百番歌合九十五番
いつとなく大宮人のこひしきに櫻かざししけふもきにけり

にほふ兵部卿宮はつせまうでの歸さにうちにとゞまりて侍りけるにおもしろき花の枝を折りて「山のさくらにほふあたりにたづね來ておなじかざしを折りてけるかな」と侍りければ　　宇治の中君

椎本
かざし折る花のたよりに山がつのかきねを過ぎぬ春の旅人

ふるさとの花おぼしいでて一條院の中宮にさかきにつけてきこえ侍りける　　さごろもの齋院

物語四上
時しらぬ榊の枝に折りかへてよそにも花を思ひやるかな

女院一條院におはしましける頃南殿の櫻一枝たてまつらせたまひて　　いはでしのぶのさがの院御歌

九重の匂ひはかひもなかりけり雲ゐの櫻君が見ぬまは

女院御心とめさせ給ひけるさくらの枝をゝりて院にうつりわたり結びてのち忍びてたてまつりける　　おなじ一條院內大臣

○つて　傳。便りなどにも云ふ。

○大宮人　雲の上人に同じ。萬葉集十「百しきの大宮人はいとまあれや櫻かざしてこゝにつどへり」

○かざし折る　插頭にするために折るを云ふ。

○山がつ　山賤。山里に住む人。樵夫など。

○時しらぬ榊の枝　榊は常磐樹なので、季節を知らぬと云ふ。

思ひいづる人もあらじをふる鄕にわすれぬ花の色ぞ露けき

ひろさはに住み侍りける頃あさぼらけの景色にもみしよのほど思ひ出でられければ　　ねざめのひろさはの准后

拾　百番歌合三番

さき匂ふ花も霞ももろともに見しながらなる春の曙

山ざとにこゝろぼそくて侍りけるころ花をみてよめる　　けぶりにむせぶの姬君の宰相

しる人もなき山ざとに友とみる花におくれぬ命ともがな

をとこのさくらを一えだおこせて侍りけるに　　あふぎながしの[illegible]中納言

あだにのみ散りぬべければ櫻ばな風につけても物をこそ思へ

返し　　宰相中將

あだなりとなにかは歎く色深くのどけき春のかたみとをみよ

布のおほいまうちぎみ櫻の枝をおこせて侍りけるかへりごとに　　ゆめぢにまどふ大納言女

折るからに色やかはらむ山ざくらあだに移ろふ花の匂ひぞ

としの程などもにげなからむとおぼす女をかいまみせさせたまひて　　さごろものみかどの御歌

○ひろさは　廣澤池の略。山城國に在る。

○おこせて　遣はすこと。言葉などを言ひ寄越すことにも云ふ。

○くちきの櫻 朽木の櫻 古今集十七「かたちこち深山がくれの朽木なれ心は花になさばなりなむ」
○あかぬ匂ひ 花の匂ひを汚れない女に譬へていふ。

○わが事や 自分の事であると嘆き云ふ。「や」は詠歎詞。
○花のあたり 女に譬へいふ。鶯は自分に譬へた。

○よきなむ 避ける。

物語四上 折りみばやくちきの櫻行きずりにあかぬ匂ひは盛りなりやと

まだ年わかかりける女に給はせける　こゝろたかさの後冷泉院御歌

拾 百番歌合七十四番 花の色を思ひもわかぬ鶯にかすめわびぬる春にもあるかな

せちに思ひける女のあたりにたゞ大かたにてまかり侍りけるに花のこずゑに鶯のなくをききて　ねざめの關白

物語 わが事や花のあたりにうぐひすの聲も涙も忍びわびぬる

つれなき女のもとにて花のおもしろかりけるをみて　うつぼの中納言されたゞ

藤原君 さくら花匂ひこぼるゝ木隱れも猶うぐひすは鳴く／＼ぞみる

女のもとよりかへりてつかはしける　なだえのぬまの右大臣

あかず見る花のあたりは鴈がねのかへる空にも音のみなかれて

歸鴈を聞きてよめる　うつぼの中納言

あて宮 かへりゆく鴈の羽風にちる花をおのがたむけの錦とや見む

すゞしの卿のふさあけの家にまかりて人々あそび侍りけるに野にいでて花をみるとて　おなじ參議良岑のゆきまさ

吹上ノ上 花ちらす風も心あり駒なべてわがみる野邊にしばしよきなむ

修行し侍りけるにふきこしといふ處の花おもしろかりければ

あまのもしほ火の大僧都

殘らじな峯のあらしの吹き來しにけふは櫻の花と見るとも

六條院中將と申しける時わらはやみにわづらひ給ひてたづねおはしましたりけるに　源氏の北山の上人

若紫
おく山の室のとぼそをまれに明けてまだ見ぬ花の色をみるかな

北山にて紫の上ほつかに御らんじそめて歸り給ひて又の日遣はされける　六條院御歌

同上
おもかげは身をもはなれず山櫻心のかぎりとめて來しかと

御返しまたなにはづをだにはかぐしうつゞけ侍らぬほどなればかひなくてなむとて　按察大納言北方

同上
あらし吹くをの上のさくら散らぬまを心とめけるほどのはかなさ

花のちるころ人のまうできたりけるに　花さくらなる中將

堤中納言物語
ちる花を惜しみとめても君なくば誰にかみせむやどの櫻を

關白中將に侍りけるとき左大臣のかつらの山莊の花見にたち入り侍りけるにともなひてあるじは朝に侍りければつかはしける　かつらの兵衛佐

よそ人も移ろふ花を惜しむ宿にいかに目かるゝあるじなるらむ

○わらはやみ　病の名。瘧。

○とぼそ　樞。戸の鍵をさして閉す處。また扉をも云ふ。

○よそ人　餘所人。關係のない、知らぬ人。

○目かる　目離。別れるに同じ意。

軒のさくらを人の折りてみせ侍りければ　しのぶぐさの關白

限りありて散るだに惜しき花の色を心づからも手折る君かな

かへし　中納言

大空の風にまかせて散るよりは折りとめてこそ見るべかりけれ

春のすゑつかた山里にすみける女のもとよりかへり侍りける路すがら引きとゞめらるゝこゝちし侍りければ　河ぎりの內大臣

ちりまがふ花に心のうつりつゝ家路をさへも忘れぬるかな

にほふ兵部卿のみこ白河の院（家一本）に侍りけるに花見にまかりてよみ侍りける　かをる右大將

ちり散らす見てこそ行かめ山櫻ふる鄕人は我を待つとも

白河の花見ありき侍りけるにふる鄕の花もゆかしくいそぎ歸るとてよめる　あさつゆのあま

われながら思ひさだむる方もなしとまらぬ花にうつる心は

六條院にて池に舟うけて女房あまた乘りてあそび侍りける中に　讀人しらず　源氏

胡蝶　春の日のうらゝにさして行く舟は棹のしづくに花ぞちりける

○心づから　心からに同じ。後撰集「風をだに待ちてぞ花の散りなまし心づからに移ろふが憂さ」

○大空の風　浮世の漁色家を云ふ

○ちり散らす　戀を競ふ男女が、互ひに逢つてゐるかと思ふと、放れたり放されたりする事に譬へて云ふ。都人の遽しい心持を云ふ。

○棹のしづく　少しの情と云ふ意

吹上のはやしの院にて色をつくせる花風にきほひて散りかひ漕ぎわた
る舟もひとつにつゞきて見えければ　　うつほの右少將なかより

吹上ノ上
ゆく舟の花にまがふははる風の吹上の濱をこげばなりけり

花のころ宇治に侍りける女のもとより都に出づとてよめる
つまこひかねる三位中將

山ざくら飽かぬにほひをとゞめ置きて心にゆかぬ道の空かな

世をのがれ侍らむとて内にまゐりて南殿の櫻のさかりなるをみて大納
言に申し侍りける　　ふたばのまつの中納言

ちりぬとも又こむ春は思ひ出でよ心とゞめしはなの匂ひを

だいしらず　　讀人しらずみやまがくれ

散る花はのちの春をも待つものを人の心ぞなごりだになき

よし野よりいでて侍りける頃花のちるをみて　　はままつの師宮中宮

權中納言この雪のきえ去らむにとたのめて侍りけるもむなしくて花の
ころになりてはべりければ　　うきなみの權中納言の女

きえぬ間とたのめし人の名殘とや庭の花にも人を待つべき

○吹上　紀伊國海部郡に在る。
○きほひて　競ひて。

○はる風　春風に、張る風を云ひ掛けた。

○散る花は云々　花は散つても又その年の春を待つものを、去つた人の心は再び自分に歸つて來ないと云ふ意。

わかの浦にて花のちるをよめる　　讀人しらずまよふきんのね

咲き匂ふきしの櫻はうら風にちりても花の浪とこそなれ

四季ものがたりの中に　　はるこまの中納言

君が世の末はるかなる春の野につきせずあさるつるぶちの駒

玉葛の內侍のかみひげくろの關白のもとに移ろひてのちすみ侍りける

かたにわたり給ひて山吹のさかりなるを御らんじて　　六條院御歌

攝往
思はずにゐての中みち隔つともいはでぞこふる山吹の花

前齋院に山吹のえならぬ枝につけてきこえ侍りける　　ふくらすゞめの左大臣

くちなしのこは得も云はぬ色なれどさしてもいかゞやま吹の花

山吹のさかりなる處にたちどまりて侍りけるにうちわたりにて見侍り

ける女のもとなりければよめる　　やまぶきの三位中將

いはねども八重の山ぶき九重に折りしほどより思ひそめてき

一條院御くらゐの時ほのかに御らんぜさせ給ひてやへ山吹のひらけさ

して心もとなきを折りて色まさるらむと宣はせ侍りける御かへし　　あたりさらぬの女院

かずならぬみぎはに匂ふ山吹はやへにひとへをいかゞ重ねむ

○つるぶちの駒　肖斑。馬の毛の斑のつながり續いてゐる毛色を云ふ。

○思はずにゐての　居てに、井手を云ひ掛けた。井手は山城國に在る地名。

○いはで　陸奥國（攝津國にも在る）に在る岩手に、ものをいはぬを云ひ掛けた。山吹の花は、くちなし色なれば、口の無い事に云ふ。夫木集二十一「問へどこのいはでの岡のいはつゝじ紅ぞめのわが衣手に」

○さしても　かざしても。

○九重に折りし　重ねた契りを云ふ。

藤の花の宴に侍りけるに六條院いまだ宰相中將と申しける時きこえ侍りける　　源氏の二條院のおほきおほいまうち君

花宴 わが宿の花しなべての色ならば何かはさらに君を待たまし

わかの浦におはしましけるとき右大將まゐりて「ふぢ浪のたちかへるべきこゝちこそせれ」と申し侍りければ　　まよふきんのれの春宮

日をへつゝたち歸らずば藤浪のまことに深き色と知りなむ

夕ぎりの左大臣藤のさかりに致仕のおとゞの家にてあそびなどし侍りけるに　　源氏柏木の權大納言

藤末葉 たをやめの袖にまがへる藤の花みる人からや色もまさらむ

女二のみこにさだまりてのちかの住み侍りけるふぢつぼの花の宴せさせ給ひけるに御かざし折りて　　かをる大將

宿木 すべらぎの插頭に折ると藤の花およばぬ枝に袖かけてけり

みかどの御歌

同上 萬世をかけて匂はむ花なればけふをもわかぬ色とこそみれ

吹上にて人々うたよみ侍りけるにふぢの花を　　うつぼの紀伊權守

吹上ノ上 藤の花かゝれるまつの深みどりひとつ色もてそむる春雨

○日をへつゝ云々　泊りに行つて幾日も經て歸らないならば眞に情深いと知つてくれるであらう。

○みる人からや　見る人ゆゑに。萬葉集六「ふるさとは遠くもあらず一重山こゆるがからにおもひぞわがせし」

○およばぬ枝に　目差す枝に手が屆きおよばなかつたといふ意。

○かゝれるまつ　掛かるに宿るを待つに松を云ひ掛けた。

四季ものがたりの中に

つくしの木工頭

あかねさす入日の影に色はえて見るもかゞやく岩つゝじかな

かすみの女御

立ちかへる道もわすれぬ春霞花ちるほどの心づくしに

さがにすみ侍りけるにやよひのつごもりごろ関白たづねまうできて君閑消永日などうちずし侍りけるに

しのぶぐさの中納言御息所

花もちり春もくれなむ古郷にながむる人の心をやしる

吹上ノ上

やよひの晦の日ふき上にて春を惜しむ心を人々よみ侍りける

うつぼの在原時蔭

いづかたに行くとも見えぬ春ゆゑに惜しむ心の空にもあるかな

同上

きよはらのまつかた

ゆく春はとむべきかたもなかりけり今夜ながらにちよは過ぎなむ

○ゆく春は云々　春の逝くのは止める事は出來ないばかりか、こよひ一夜の思ひ出もそのまゝに永久に過ぎるであらうの意。

○けふたちかふる　人の立ち歸るに、蟬の羽のたち變るを云ひ掛けた。

○過ぎにし春　逢瀨を重ねた思ひ出を云ふ意。

○うの花　卯の花に、憂きを云ひ掛けた。

風葉和歌集　卷第三

夏

やよひのつごもりのよ右大將御とのゐして侍りけるをあけはてていとま給はすとてよませ給ひける　　よその思ひの御門の御歌

かさねつる袖の名殘もとまらじなけふたちかふる蟬のは衣

冷泉院御息所いまだまゐり侍らざりけるにうづきの朔日ごろに申しつかはしける　　源氏宰相中將

竹川

花をみて春はくらしつけふよりや茂き歎きのしたにまどはむ

關白のもとにまかれりけるに右大將のをさなく侍りけるをみて庭の櫻の一むらのこれるをおし折りてよめる　　しのぶぐさの宮の中將

さくら花梢に殘るひとむらや過ぎにし春の形見なるらむ

四季ものがたりのなかに　　ほとゝぎすのみかどの御歌

立ちかへり見れどもあかず山賤の垣根に浪をかくるうの花

○臺盤所　みだいどころ。大臣の北の方を指して云ふ。

○鳴きて待ち云々　郭公を女に譬へて久しく訪はないのでさぞ侘しく思つてゐるであらうの意。

御かへし　　うの花の女御

匂ひなきうの花垣の梢には人のこゝろの浪や越ゆらむ

大納言たゞよりの七十賀屏風に子規をまてるところ　　讀人しらず おちくぼ物語二

ほとゝぎす待ちつる宵の忍び音はまどろまねども驚かれけり

夏の初めつかた夜ふけて中宮の臺盤所にたち寄りたりけるに女房のこゑどもしければよめる　　ふせこの頭中將

寐ざめする人もあらなむ郭公しのびかねたること語らはむ

かへし　　侍從内侍

忍び寐はさてこそあらめ時鳥なべての空にいかゞかたらむ

題しらず　　ながれてはやきあすか川の春宮

わび人の心をや知るほとゝぎす空にともなふしのび音の聲

女のもとにひさしく罷らで思ひたち侍りけるにほとゝぎすのほのかになけば　　うきなみの權中納言

尋ね來ぬ我を憂しとや忍びねに鳴きて待ちける郭公かな

こゝろならず宮仕にたちいでて侍りけるころ時鳥のなくをきゝて　　みれどもあかぬの中將

○いつさと馴れし　いつ里に馴れ初めたのだと云ふ意。

○かく語らはむ云々　から思ふやうになつたのも、契つたからであるとの意。

○葵ぐさ　雨葉草。御辛（ヒキノヒタヒ草）の嫩葉の時を云ふ。また普通の葵に同じとも云ふ。逢ひに行つた事を云ひ掛けた。

○注連の外　祭の時に垣を廻らす注連縄の外と云ふ義であるが、此處では、うるさい他目を避けた處と云ふ意である。

○諸葉草　葵草に同じ。

○そのかみ　當時、昔。

○もろかづら　雨葉。嫩葉葵を云ふ。一説と葵を添へたものとも云ふ。

○かつ見つゝ　かつは、且。その上に、かたはら等に云ふ。

○おぼめく　おぼろげなる事。後拾遺集「おぼめくな誰ともなくて宵々に夢に見えけむわれぞそのひと」

思はずにみ山をいづるほとゝぎすいつさと馴れし心なるらむ

これをたちききて

関　白

思はずにみやま出でしも時鳥かく語らはむ契りとを知れ

まつりの日近衛のつかさの齋院にまゐるをうらやましく見おくらせ給ひてよませ給ひける

さごろものみかどの御歌

物語四下　百番歌合九十八番

引きつれてけふはかざしし葵ぐさ思ひもかけぬ注連の外かな

あふひてふ名を掛けてみせなむと申して侍りける女の返し

みかはにさける前關白

拾　百番歌合四十三番

もろ人になべてあふひの名を惜しみ掛けしやけふの插頭なりとも

祭の日さきの齋院にきこえ侍りける

しのぶぐさの中納言

今までもよそにやは見む諸葉草そのかみ山に馴れし插頭を

かへし

もろかづら注連の外にはなりながら同じ插頭を我や掛くべき

藤典侍まつりの女つかひし侍りけるにつかはしける

夕霧左大臣

藤末葉

なにとかや今日のかざしよかつ見つゝおぼめくまでもなりにけるかな

祭のころ大将うちへまゐりて侍りける車の中にしのびていれさせ侍り

けろ　宇治の川なみの藤中納言女

名をだにも聞かて年ふるくさなれど心に今日はなほぞかけつる

あけゆく空にほとゝぎすのほのかに鳴くをきかせ給ひて　さごろものみかどの御歌

物語一上　百番歌合五十五番
よもすがらものや思へる郭公あまの岩戸を明けがたに鳴く

ほとゝぎすの忍び音あらはれて語らひゐたる聲も夏山にあられどうらめしうて　みかきがはらの内大臣

心あらば名のらで過ぎよほとゝぎす物思ふとは我も知られど

久しく訪はざりける女をたづねてなのなる處に隠れりけるに時鳥のなくを聞きて　うきなみの權大納言

なぐさむや又もよほすや時鳥もの思ふやどにき鳴く一こゑ

返し　藤中納言女

忍びあまる聲を聞くにも郭公なくねは誰もおとりやはする

しのびたる女の許にてほとゝぎすの鳴きければ　はままつの中納言

物語三
時鳥はな橘に木がくれてかかるしのびの音だに絶えじな

とほき所へ思ひたちける女にもの申していでける曉まちかき橋にほと

○くさ　品、種などをいふ。此處では女の種類とか性情とかを云ふ

○あまの岩戸　天にあるといふ窟の戸。

○聲も夏山に云々　夏山は草木が茂つてゐるから、騒がしい話聲に譬へたのである。

○なのなる處　返事の聞えた處。「をを」は答への聲。著聞集八「人の召す御いらへには、男は、よと申し、女は、をと申すなり。」

ときすのなくを聞きて　　いはがきぬまの頭中将

ほとゝぎす花たちばなのかばかりも今ひと聲はいつか聞くべき

だいしらず　　いせなの左大臣府一本

ひところゑや鳴きて過ぎぬる郭公はなたちばなの匂ふあたりを

ゆくへ知らずなして侍りける女をたづねいでて盧橘などとり　　なるとの中納言

しるべする花たちばなのなかりせば昔の袖をいかで知らまし

みかど未だたゞ人におはしましけるとき五月四日の夕つ方うちよりまかで給ひける道に檐のあやめをひきおとしてさしきよりいだし侍りける　　狹衣の中務卿のみこの家小宰相

物語一上　百番歌合十番
しらぬまの菖蒲はそれと見えずとも蓬が本はすぎずもあらなむ

五月五日女のもとにつかはしける　　いはし水の社の大將

物語上
思ひつゝ岩がき沼に袖ぬれて引ける菖蒲のねのみなかるゝ

かへし、むすめにかはりて　　兵部卿のみこ

同上
沼ごとにけふは引くなる菖蒲草なべての袖も萎れやはせぬ

だいしらず　　み山がくれの式部卿のみこの女

長き根をかくるに知りぬ菖蒲ぐさ我が身の憂きにおふるものとは

○かばかり　香ばかりに、少しばかりと云ふ意を云ひ掛けた。

○しるべする花たちばな　古今集三「五月まつ花たちばなの香をかげば昔の人の袖の香ぞする」を指すのであらう。

○たゞ人に云々　帝の御位に即く前の事を云ふ。

○しらぬま　知らぬ間に、知らぬ沼を云ひ掛けた。あやめに適はしていふ言葉。

○岩がき沼　垣のやうに廻った岩の間にある沼。

○引ける菖蒲　五月の節句に用ひる菖蒲を女に譬ふ。

○ね　根に音を云ひ掛けた。

ものれたみの登華殿御息所

ともすれば思ひ入江のあやめ草うきねをかくる身こそつらけれ

あしのやへぶきの按察大納言女

引かでだにやみなましかば菖蒲草袖にうきねはかゝらざらまし

家少將

なかれてのためしに引ける菖蒲草君がよどのはいつかかれせむ

院姫宮の根合のうた　　讀人しらずあらばあふよ

君が世にひきくらべたる菖蒲草これをぞ永きためしとはする

菖蒲草かかる袂のせばきかなまだしらぬまの深きねなれば

さつき五日いみじうながきねを皇后宮に奉らせ給ふとて　あさくらの三條院御歌

あやめ草深き入江をたづねつゝ長きためしにけふは引くかな

玉かつらの尙侍の許にためしにも引きいでつべき根につけてつかはしける　ほたるの兵部卿のみこ

雙 百番歌合二十番

けふさへや引く人もなきみがくれに生ふる菖蒲のねのみなかれむ

むすめの許にしのびて侍りける文を見てちゝの左大臣返事してかければ又たちかへしつかはしける　はしたかの關白

○うきね　浮根に、憂き音を云ひ掛けた。

○よどの　淀野。山城國に在る。夜殿、臥すところとを云ひ掛く。拾遺集「しげることとまこもの生ふる淀野には露の宿りを人ぞかりける」

○かれせむ　枯れるに、離れるを云ひ掛けた。

○みがくれ　水隱。古今集「河の瀨に靡く玉藻のみがくれて人に知られぬ戀もするかな」

しのびしに聲あらはれて時鳥けふはあやめのねにぞたてつる

あらばあふよの姫宮の中宮

五月ほとゝぎすをききて

つねよりも濡れそふ袖は時鳥空になく音のかかるなりけり

袖ぬらすの准后

山ざとに住みはべりける頃おほきおほいまうち君たづねまうで來てつれづれに語らふ人もそはぬ身をと申し侍りければ

語らはむ里に來なかで郭公み山かくれをなにか尋ぬる

きぶねにこもりて侍りけるにほとゝぎすの鳴くをききてとなりのつぼねにつかはしける（本ノマゝ）（も）

あはれとも君は聞かずや郭公たびねの空を鳴きてすぐなり

もろこしにて村雨うちそゝぎたる宵の間に時鳥のこゑのかはらぬをききて

松浦宮參議氏忠

（語下）郭公なれをぞたのむ村雨のふるさと人はとひも來ぬよに

中河のほどすぎ給ふとてひとめ御らんじける女の家を見いれ給ふにほとゝぎす鳴きて渡るももよほしきこえがほなれば

六條院御歌

（花散里）をちかへりえぞ忍ばれぬ郭公ほのかたらひし宿の垣ねに

御かへし

讀人しらず

〇あやめ　菖蒲草に、文目、あや、いろめに云ひ掛けた。

〇きぶね　貴船。山城國に在る。夫木集「さよ深ききぶねの奥の松風にきねが鼓のかたおろしなる」

〇もよほし　催。きざす。ものの起らうとするしるし。

〇をちかへり　元にもどる。又、初めにかへる事。

同上
ほとゝぎす語らふ聲はそれながらあなおぼつかな五月雨の空

中納言されたゞな左大臣になすべきよし申し侍りけるにさみだれにな
りにけりと申しければ　　うつぼの源太政大臣

祭使
子規なく音ひさしくなりぬるは五月雨ながらいく夜ふればぞ

だいしらず　　ふる郷たづぬるの權大納言

はる來べき方こそなけれつれ〴〵とながめくらせる五月雨の空

みれどもあかぬの關白

さみだれの空とおぼゆる心かないつの雲まにはれむとすらむ

五月雨のころ女の許につかはしける　　心たかきの大右臣

かきくらしふれば涙のそふものをたゞ五月雨と人やみるらむ

女につかはしける　　うつぼの彈正尹親王

祭使
ながめする五月雨よりもなげきつゝ月日をふるぞ袖はぬれける

さつきばかり女のもとにまかりて歸らむとしけるあかつき郭公のなき
ければ　　くもゐの月の左大臣

五月雨にぬれてやまなく時鳥あかぬなごりの袖にたぐへて

さつきのころ女のもとにつかはしける　　かくれみのの左大臣將一本

○かきくらし　掻暗。暗きに同じ。「かき」は添語。暗しに、暮しを云ひ掛けた。
○ふれば　降るに、經るを云ひ掛けた。
○ふる　經るに、振るを云ひ掛けた。
○たぐへて　添へて。ともなうて。

夜とともに鳴くさみだれの郭公しづくの山はわが身なりけり　中納言宗宰相

かへし　しのぶの新大納言

名ばかりやしづのの山の時鳥涙ならねばぬれじとぞ思ふ

題しらず　はぎに宿かるの院女御のはゝ

つれもなき命のほどを歎く身ぞ語らひてゆけ山ほとゝぎす

思ひ出でて昔をこふる我にしも哀れともなふほとゝぎすかな

ふぢつぼの女御の方のすのこにゐてあやしうあかしかれたるに郭公のあまたたびなくを聞きてなくひと聲にといふものをと人のいひければ　うつぼの侍從なかずみ

藤原君
一聲にあくなるものを郭公こゝらなく音に晴きしのゝめ

女にいさゝかもの申し侍りけるにほとゝぎすの鳴きければ　やなかはのゑもんのすけ

時鳥こと語らはむほどだにもなくて明けぬる夏の夜半かな

六條院わたり給へるに水鷄のはじめてなきければ　花ちるさとのきみ

澪標
くひなだに驚かさずばいかにして荒れたる宿に月をいれまし

○しづくの山　雫山。近江國坂田郡にある。涙に濡れた自分の身を譬へ云つたのである。夫木集「はるさめの雫の山にちる花は木の本ことのみぞれとぞ見る」

○つれもなき　情のない事に、連れのないを云ひ掛けた。

○すのこ　簀子。竹を敷き並べて縁のやうにしたもの。

○こゝら　幾許。數の多い事。

○くひなだに云々　和泉式部集の「夏の夜は槇の戸たゝき門たゝきひと頭めなる水鷄なりけり」の歌をさして云ふのであらう。

御かへし

同上
おしなべてたゝく水鷄に驚かばうはの空なる月もこそいれ

飛鳥井のやどりに御車ひきいれたるにかやり火さへけぶりてわりなければ

さごろものみかどの御歌

物語一上　百番歌合十一番
わが心かねて空にやみちぬらむゆくかた知らぬ宿のかやり火

なでしこにつけて女につかはしける

朝倉式部卿のみこ

露けさを思ひやらなむ歎きつゝ獨りおきゐる牀夏の花

ゆくへ知らずなりけるむすめを年月ありてきき出でたりけるになでしこにつけてつかはしける

いはしみづの中關白

物語上
たねまきて植ゑし垣ねのあれしより涙つゆけき牀夏の花

冷泉院うまれさせ給ひてのち前栽のなかにとこ夏のはなやかに咲きたるを折らせ給ひて王命婦につかはせ給ひける

六條院御歌

紅葉賀
よそへつゝみるに心は慰まで露けさまさるなでしこの花

御かへし

薄雲女院

同上拾　百番歌合四十八番
袖ぬるゝ露のゆかりと思ふにも猶うとまれぬやまと撫子

むすめた

○わが心　かねて〳〵後生を願ふ佛心をいふ意。

○王命婦　王氏にして命婦なるを云ふ。源氏「暮るれば王命婦を責めありきたまふ」命婦とは、五位の女官を呼ぶ稱である。但し五位より上の官人の妻を外命婦といひ五位の女官は内命婦といふ。また内侍司の雜仕の女。
○よそへつゝ　見くらべる。ものに准ふこと。

○うつせみ　空蟬。たゞ蟬といふに同じ。又、この世にある人の現身をいふ。世とか果つとかの枕詞。萬葉集三「うつせみの代は常なしと知るものを秋風さむみしのびつるかも」

○けつ　消す。

○身をのみこがす　螢の歎きに譬ふ。

〔　　〕

うつぼの兵部卿の宮

うかりける〔　　〕いかでか知らむなでしこの花

藤つぼの女御いまだまゐり侍らざりける頃つかはしける

祭使　袖ぬらすおほきおほいまうち君

よそにのみ思ひけるかな夏山のしげき嘆きは身にこそありけれ

だいしらず　六條院御歌

もろ聲になきあはせたるうつせみも果ては空しくなりこそはせめ

幻　拾　百番歌合七十一番

よるをしる螢を見てもかなしきは時ぞともなき思ひなりけり

玉かつらの尙侍のもとに立ちよりて侍りけるに六條院几帳のかたびらに螢をつゝみ置き給ひてうちかけたまへばにはかに光るをほどなくまぎらはしかくしければ

螢　ほたるの兵部卿のみこ

なく聲もきこえぬ蟲の思ひだに人のけつには消ゆるものかは

かへし　尙侍のかみ

同上

聲はせで身をのみこがす螢こそいふにもまさる思ひなるらめ

ものおもほしけるころ夜もすがらもえあかす螢のひかりも明けゆけばきえぬるをうらやましく御覽ぜられて

ながれてはやきあすか川の院御歌

○つり殿　釣殿。池の上などに作り架けたる殿。涼みなどするに用ゐる。

○大ぬさ　大麻。大祓の時の幣をさした串で、祓へ果ててのち、諸人のひきとりて、その身をなでる事がある。

○なごし　なごやか。おだやか等に、夏越を云ひ掛く。夏越とは、水無月朔日に行ふ大祓を云ふ。

身をこがすたぐひにみゆる夏蟲もあくれば消ゆる思ひなりけり

こゝちそこなひて侍りけるが少しおこたりて池にはちすの花の咲きわたれるに露の玉のやうなるを見いだして　　むらさきのうへ

若菜下
きえとまる程やは經べきたまさかに蓮の露のかゝるばかりを

延命寺供養に侍りける日はすの葉にかきつけ侍りける　　うつぼの左大臣

年ふれどすまぬ入江の濁りには淸き蓮のいかで生ふらむ

あつき日つり殿にすゞみて式部卿のみこに遣はしける

祭使
枝しげみ露だにもらぬ木隱れに人まつ風のはやく吹くかな

みな月のつごもりにはらへしに河原にいで侍りて　　なるとの中務卿のみこのむすめ

みそぎするけふは河せのしら浪も大ぬさにこそ立ちわたりけれ

わかの浦にてみな月はらへし給ふとて　　まよふきんのれの東宮

神もみなけふはなごしと聞くものを猶ある磯は浪さわぎけり

その夜更けて風の音もすゞしくなりければ

手なれつる扇も今は夏過ぎて露よりさきに置かれぬるかな

○世さへ露けき　人を思ひやる寂しい心持を云ふ。
○まのの浦　眞野は近江國滋賀郡に在る。
○吹きすぐる云々　身に覺えのある風聞に譬ふ。
○秋の初風　心の寂しさを云ふ。

風葉和歌集　巻第四

秋上

ふ月のはじめつかた風すゞしく吹き出でたる夕によませ給ひける

うつぼの朱雀院の御歌

初秋上
めづらしく吹きいづる風の涼しきはけふ初秋とつぐるなるべし

わかの浦におはしましける頃よませ給ひける

まよふきんのれの春宮

みぎはなる葦のうら葉の音きけば一夜の程に秋ぞきにける
もしほやく煙ひまなきわかの浦に霧の立ちそふ秋も來にけり

だいしらず

女すゞみの前右大臣の三の君

ほしわぶる袖より外におきそへて世さへ露けき秋はきにけり

左大將まのの浦にこもりゐて侍りけるころつかはさせ給ひける

おなじき中宮

吹きすぐる音につけてもいかならむまのの浦わの秋の初風

女のもとに罷れりけるにをぎ吹く風のこゝろあわたゞしきまで聞えけ

れば　　　心たかきの右のおほいまうち君

拾　百番歌合八十二番
いとゞしく荻のうは風ふきみだり心まどはす秋の夕ぐれ

七月七日のゆふべ荻の風になびくをきゝて　　　いせをの前關白中君

つねよりも心して吹けたなばたのつま待つ宵の荻の上風

七月七日かはらに出でてこれかれ歌よみ侍りけるに　　　うつぼの中務卿のみこの北方

藤原君
秋をあさみ紅葉もちらぬ天の川なにをはしにてあひ渡るらむ　　　藤つぼの女御

同上
たなばたの逢ふ夜の露を秋ごとにわがかす絲の玉とみるかな

ないしのかみつれなき樣にみえ奉りければ七日宣はせける　　　しのび音のみかどの御歌

けふさへやたゞに暮さむ棚機の逢ふ夜は雲のよそに聞きつゝ

心にかけて侍りける人の文を七日よそながら見てよみ侍りける　　　道心すゝむる右大臣

ゆきあひの空までをこそかけざらめふみだに見ばや鵲の橋

宣旨さとに侍りけるに給はせける　　　心たかきの後冷泉院御歌

○心して吹け　吹く風に願ひをいふ言葉で、どうか優しく吹いてくれ、注意して吹いてくれといふ意。

○はし　橋に、緣、便りなどを云ひ掛けた。

○わがかす絲　織女の逢ふ夜の露を自分の貸す絲の玉と見たてたのである。

○かけざらめ　下の、文に通はして、文に踏みを、渡くに、鵲の橋を架けるを云ひ掛けた。

○夜とゝめに　夜の明けるまでに

○身につみて　身にひき比べて。

○折れかへり云々　戀の歎きの樣を云ふ。

○露きえわびし　情の絶たれたに譬ふ。

夜とともにあかぬ別れを身にしれば行きあひの空も哀れなるかな

みこにおはしましける時大將の女御に給はせける　のちくゆるのみかどの御歌

思ひきや稀にあひみる棚機に契りおとれるなげきせむとは

梅つぼの女御心ならずまゐり侍らざりけるに七日つかはさせ給ひける　ゆるぎのみかどの御歌

棚機の逢はぬ嘆きを身につみてけふの契りを我にかさなむ

おなじ日いとせちにおぼしめしける女につかはさせ給ひける　さゝわけしあさの八條院御歌

別れてのあすをばかけし棚機のけふの心を我にかさなむ

御心ならず一條院の一品宮にわたり給ふべき由聞え侍りける頃女二の宮にきかせ給ふこと侍らむをなどかとて　さごろものみかどの御歌

物語三中
折れかへり起きふし侘ぶる下荻の末こす風を人のとへかし

この御文のかたはらに　嵯峨院の女二のみこ

同三中　百番歌合十五番
下をぎの露きえわびし夜な／＼も訪ふべきものと待たれやはせし

同三中　同歌合三十一番
うき身には秋ぞしらるゝ荻原や末こす風の音ならねども

忍びてしら河の院に侍りけるにもの思ふ秋はあまたありしかどいとか

○ふる里の荻の葉　心の奥に潜んでゐる意中の女を云ふ。

○昔をかけて　過ぎ去つた年月の數々の思ひ出を掛けての意。昔とは、一日でも過ぎた事にも云ふ。

○こ萩が本　古今集十四「宮城野の本あらの小萩露をおもみ風を待つごと君をこそ待て」を指して云ふのであらう。

うはあらざりきかしとながめわびて　　　　れざめのひろさはの准后

拾　百番歌合九番
しをれわび我がふる里の荻のはに見たるとつげよ秋の夕風

一品宮に繪ども奉るなかにせりかはの大將のとをきみの女一宮思ひかけたる秋の夕かきたるに思ひよせらるゝ事やありけむかきて添へまほしかりける　　　　かをる大將

蜻蛉
荻の葉に露ふきむすぶ秋風も夕はわきて身にぞしみける

人のわづらひけるとぶらひにまかりてむかし思ひ出でらるゝ事や有りけむ荻の上風のわたるにしたがひてほろ／＼とこぼるゝ露になみだもさそはれぬるこゝちして　　　　風につれなきの太政大臣

秋風や昔をかけてさそふらむ荻の上葉の露もなみだも

かくわたれる由きこえければ　　　　冷泉院一宮

憂しとのみ思ひはてにし秋風にそよめく荻の音ぞかなしき

野分たちたる夕きりつぼの更衣のはゝの許につかはさせ給ひける

桐壺　百番歌合五十六番　　　　源氏のさがの院御歌
宮城野の露ふきむすぶ風の音にこ萩が本を思ひこそやれ

關白すゝみわたりてのち皇太后宮にあからさまにまゐりて侍りけるあ

したかの宮より「露ぞこぼるゝあき萩の花」と宣はせて侍りける御返
し　　あさくらの皇太后宮大納言
宮城野のこはぎが花の露みれば鹿たちなれし秋ぞ戀しき

四季もの語のなかに　　月のみかどの御歌
篠原や露分ごろも袖ぬれてうつりにけりな萩が花ずり

一條院のみやす所小野にすみ侍りけるにまかりて侍りけるを心あるさ
まに思ひてしをるゝ野べをいづくとて申して侍りければ　　夕ぎりの左大臣
夕霧　秋の野の草のしげみを分けしかどかりねの枕むすびやはせし

さがの院に行幸ありけるに野の花のさかりなる中に女郎花の霧のたえ
をみなへしをよませ給ひける　　うつぼの朱雀院御歌
初秋一　うすく濃く色づく野べのをみなへし植ゑてやみまし露の心を

まもわりなげなるを御らんじて　　さごろものみかどの御歌
物語ハ下　立ちかへりをらで過ぎうき女郎花はなの盛りを誰にみせまし（なほやすらはむきりのまがきに[illegible]）

とりてなやむをききて（脱文あるか）　　内大臣
あさ露にしをれはすとも女郎花おぼろけならぬ人に折らすな

うちわたりにてつれなかりける女のあらぬさまにいひなしてほかに侍

○露分ごろも　露の茂き處を分けゆく時に著た衣。
○花ずり　花摺。花を摺りて色を染めたもの。

○わりなげなる　無理。すぢなし、すべなし、仕方なしなどの意。古今集「わりなくて寐てもさめても戀しきかなをいづちやらば忘れむ」

りけるうしろでなあやしう見しこゝちするものかなとて　よその思ひの右大將

をみなへしいかなる野べの草葉にてよそふる袖に露こぼるらむ

野分のあしたに藤ばかまにつけて女につかはしける　うつせみしらぬの宰相中將

藤ばかましをるゝ色によそへても物思ふ袖の露やまさらむ

四季ものがたりの中に　あききりの中將

たちこむる霧のまがきの藤ばかま露のためとてしめし色かは

前栽の中にをばなのまた秀にいでさしたるも露をつらぬきとむる玉の緒はかなげにうちなびきたる夕　にほふ兵部卿のみこ

宿木　拾　百番歌合八十二番

ほにいでぬもの思ふらししのすゝき招く袂の露しげくして

ものまうでの處にていさゝか見て侍りける女に薄にかきてつかはしける　こゆみの大納言

花すゝきほのかにみつる秋よりもいかに忍びに結びてしがな

あれたる家にをばなの折れかへりまねくを見てよみ侍りける　うつぼのおほきおほいまうち君

後藤上

ふく風のまねくなるべし花薄われよぶ人の袖とみつるは

せんざいのかるかやのにはかに吹きすぐる風にみだれてうれへ顔にな

○うしろで　後手。うしろ姿、うしろ影など。
○野べの草葉　世の情に譬ふ。

○しのすゝき　篠薄。普通いふ薄におなじ。

○花すゝき　女を云ふ。
○結びてしがな　契りたいものだ「がな」は願ひを云ふ感歎詞。

びくを御らんじて　　　かやがしたをれの嵯峨院中宮

露けさは秋のならひを刈萱のわきてしもなど亂れ初めけむ

六條院御息所のもとより出でさせ給ひけるあした前栽の色々みだれたるが過ぎがてにやすらひ給ふに中將の御もとにまゐるをしばし引きすゑさせ給ひて　　　六條院御歌

（夕貌）さく花に移るてふ名はつゝめども折らで過ぎうきけさの朝貌

あさがほの咲きわたれるあけぼのをもろともにみ侍りける人のたちかへりて「こひしさまさる朝がほの花」と申して侍りける返し

あさくらの皇太后宮大納言

おく露も光そひつる朝がほの花はいづれの曉か見む

御賀のおりみかどしらかはの院などみゆき侍りけるによませ給ひける

みかきが原の嵯峨院御歌

君とてはいくよのあきの野べの花露の光もこよひこそみれ

左大將おほうち山にすみ侍りけるころこれかれ尋ねまかりてあそび侍りけるついでに　　　みづからくゆるの源宰相

聞きしより見てこそいとゞまさりけれ大内山の秋のけしきは

○つゝめども　隱せども。

○曉か見む　いく夜か明かした曉の別れのうち、どんな曉の別れを見るであらうといふ意である。

○君とては　君としては。

○大内山　禁中を云ふ。

○思ひしる　心に知るを云ふ。
○袖のけしき　露に濡れた袖の有樣を云ふ。
○きたる　來たるに、著たるを云ひ掛けた。
○小倉　山城國に在る。

宰相中將

いかで君いままでかかる山ざとの秋のさかりをひとり見つらむ

八月ばかり女のもとにたゝずみて笛ふき侍りける　露わけわぶる右大將

思ひしる人にみせばや淺茅生の露わけわぶる袖のけきしを

小鷹がりのついでにまできたる人のまたをぎ原の露にまどひぬといひけるかへし　けんしのをののあま

手習 秋の野の露わけきたるかり衣むぐら茂れる宿にかこつな

忍びて小倉にいで侍りけるによもすがら置きわたせる露も袖の上にたぐひてみえければ　をぐら山たづぬるの女院大納言

わが袖に亂れにけりなはるぐゝと玉かと見ゆる野べの白露

だいしらず　すゑはの露の右大臣

いかにせむ淺茅が原に風ふきてなみだの玉の露もとまらず

小野にすみ侍りけるに秋の夕ぐれ思ひ出づる事おほくて　うきふねの君

手習 拾 百番歌合二十五番 こゝろには秋の夕とわかねどもながむる袖に露ぞこぼるゝ

冷泉院の后の宮の御方にて春秋いづかたに御心よせ侍るべからむときこえ申させ給ふにいつとなき中にもあやしときゝしゆゑこそと宣はせ

けれは　　六條院御うた

薄雲　百番歌合八番　君もさは哀れをかはせ人しれずわが身にしむる秋の夕風

にほふ兵部卿のみこ夕ぎりのおとゞの許にわたりぬる後よろづ思ひみだれてのどかに吹きくる松風の音もあらましかりし山おろしにはおとりて思ひくらべられければ　　うちの中君

宿木　百番歌合七十二番　おく山の松の陰にもかくばかり身にしむ秋の風はなかりき

野分のあしたによめる　　あかしのうへ

野分　百番歌合三十一番　大かたの荻のはすぐる風の音もうき身ひとつにしむ心ちして

中宮の里におはしましける頃しのびがたき秋のゆふべに奉らせ給ひける　　よその思ひのみかどの御歌

身にぞしむたゞ夕暮の秋の風大かたにとは思ひなせども

もころしにてかへりなむとし侍りけるころ河陽縣のきさきの女王のきみの許にまかりけるに見もしらぬかほにこたへ侍りければ　　はま松の中納言

物語一　拾　百番歌合二十五番　哀れしる人こそ更になかりけれ今はと思ふあきのゆふべを

物おもはしき心のうちをも語らはむとて右大將のもとにまかれりけるに爰にも夕の空をながめ侍りければ　　いはでしのぶの左衛門督

○君もさは　君もそのやうには。
○哀れをかはせ　哀しみを互に分けること。

○人もあやしき　人も思ひはかることの出來ないといふ意。

○千里　多くの里。六帖「はるばると千里のほどを隔てては稀の使もうれしかりけり」

○よそ　餘所。此處では遠き所といふ意。

○いたく　甚だしい意。

ながめつる心よいかに我ならぬ人もあやしき秋の夕ぐれ

かへし

大かたに眺むる秋の夕をも心にかへてあやしとやみる

風につれなきのよしのの院御歌

秋のゆふべ吉野の宮にてよませ給ひける

なほ古りし千里の外の雲のよそにふる郷とほき秋の哀れは

風あらゝかに吹き時雨したる夕けふのあはれは見しるらむとおぼす人のもとにつかはさせ給ひける

六條院御歌

葵　拾　百番歌合七十六番

わきてこの暮こそ袖は露けけれもの思ふ秋はあまた經ぬれど

もの思ひける秋のころ袖を風のふき返すに

水あさみの承香殿女御

夕さればいとゞ露けき衣手になにと知らする風のけしきぞ

なぐるまの麗景殿女御

かばかりと身のうき程をしらざりし秋の夕も涙なりしを

あふにかふる梅壺の女御

もの思ふ袖の涙にうちそへていたくな置きそ夜半の白露

あふぎながしの源中納言

いとゞしくあれたる宿は秋の夜にもの思ふ袖ぞ露けかりける

うき舟の君小野に住みけるころ月いでてをかしき程にたちよりて侍る
におくふかく入りにければ　　源氏のむかしのむこの中將

手習
山里の秋のよ深きあはれをもの思ふ人は思ひこそ知れ

女のもとにまかりて獨り明かしてよめる　　おやこの中の内大臣

しるらめや片しく袖をしぼりつゝ明かしわづらふ秋の夜な／＼

法輪にすみ侍りけるころ月をみて　　雲のうちの梅つぼの女御

草の庵に光さし入る月をのみ友にて明かす秋の夜な／＼

だいしらず　　夢のかよひぢの中君

いつもかく秋は露けき袖なれど月みる程ぞしをり侘びぬる

なのへの按察大納言家少大輔

音に聞くこやをば捨の月ならむ見るにつけつゝ物ぞ悲しき

水のしらなみの冷泉院御歌

もの思ふ涙にかげや曇るらむ光もかはる秋の夜の月

うちより涙にくもる月かげはやとゞめてもやぬるゝがほなるいかやう
にてか只今は御覽ずるらむなど聞えさせ給へる御かへし　　さごろもの齋院

物語四下　百番歌合六番
哀れそふ秋の月かげ袖ならで大かたにのみながめやはする

○片しく袖　獨り寢の袖を云ふ。

○法輪　法輪寺を約して云ふ。大和國生駒郡に在る。

○こやをば捨云々　姨捨山は信濃國に在る。古今集「わがこゝろ慰めかねつ更級や姨捨山に照る月をみて」の意を酌んだもの。

八月ばかりしやうの琴に忍びてかきならし侍りける　ちゞにくだくる按察御息所

月影もながむるからの秋の空こゝろづくしの風ぞ身にしむ

賀茂のいつきおり給ひて後帝御たいめんありけるに月さし出でてをかしき程なりければ　みかきが原の一品宮

今夜こそ君が光をさしそへて神世も知らぬ月はすみけれ

皇后宮内にいらせ給ひて出でさせ給ひけるに　おなじ中宮

諸共に影をならべぬ雲の上はすむ空もなし秋の夜の月

御位おりさせ給ひて八月十五夜六條院に聞えさせ給ひける　源氏冷泉院御歌

鈴蟲 雲の上をかけ離れたるすみかにももの忘れせぬ秋の夜の月

八月十五夜月くまなきにさがの院にまゐりて　わが身にたどるの宮大将

まづぞ思ふみやこの秋の月みても君すむ宿の松風のこゑ

おなじ夜女御更衣まうのぼらせて御あそび侍りけるついでによませ給ひける　岩うつ涙の朱雀院御うた

數多とし秋の今宵は見しかどもまだかばかりの月はなかりき

宰相更衣

笛の音も八重のうき雲吹きはらひ常よりことにすめる夜の月

○しやうの琴　箏。さうの琴。十三絃の琴を云ふ。

○賀茂のいつき　賀茂神社の齋。伊勢の大御神と賀茂の大神にいつき仕へ給ふ皇女を申す。

○影をならべぬ　天皇は御一人なれば、並ぶ影もないと、神聖の意を云ふ。

○すむ空　澄む空に、住むあきもないを云ひ掛けた。

○まうのぼらせて　參上し給ひてといふに同じ。

大僧都いまだわらはに侍りけるとき八月十五夜にゆるし給はせたりけるをもてなしあそび侍りける杯のついでに　　あまのもしほ火の仁和寺の親王

いつも見る秋の半の空に猶ひかり添へたる夜半のさかづき

さがの院のきさいの宮の六十賀の屏風に八月十五夜かり飛べる處

うつぼの侍從なかすみ

菊宴
秋ごとにこよひの月を惜しむとて初雁がねを聞きならしつる

○わらは　童。召使の子供。

○杯のついで　酒宴のかたはら。

○きさいの宮　皇后宮。后の在ます大宮を云ふ。

○聞きならしつる　聞くことに習はされてゐる。

風葉和歌集　巻第五

秋　下

だいしらず　風につれなきのおほきおほいまうち君

物語
雲居ゆく鴈の音にさへいかなればもの思ふ袖はかかる涙ぞ

夕霧の左大臣

少女　拾　百番歌合七十四番
小夜なかに友よびわたる鴈が音にうたて吹きそふ荻の上風

おやこの中の内大臣

かきくらしわがごと物や思ふらむかりのねざめのこゑ聞ゆなり

はぎにやどかる大将

もの思ひの今は限りの夕まぐれ雲居に鴈のつげて過ぐなる

大内山にこれかれまうで來てかへる程に鴈の鳴きてわたるによみ侍りける

みづからくゆる左大将

立ちどまれ雲居に渡る鴈がねよ八重たつ霧のはれま待つほど

○うたて吹きそふ　風のます〳〵吹きつのつてゆくこと。

○かりのねざめ　鴈の音ざめに、假の寐ざめを云ひ掛けた。

○限り　もの事のきはまる事に云ふ。

だいしらず　　袖ぬらすの准后

拾　百番歌合六十八番
蟲の音もあはれぞまさる淺茅原なかば過ぎゆく秋と思へば

女の許のいたく荒れたるを分けいるとて　　うつぼの右大臣

俊蔭上
蟲だにもあまた聲せぬ淺茅生に獨りすむらむ人をこそ思へ

帝たゞ人にておはしましける時、一條院一品宮にわたり給へるあした
に女二の宮に葎の宿をゆきすぎてと聞え給へる御かへし　　さごろもの嵯峨の院御歌

物語三上
ふる郷は淺ぢが原となりはてて蟲の音しげき秋にやあらまし

はやうすみ侍りける處の荒れにけるを年ごろありて見てよめる　　せれうの中納言

わが宿はうづら鳴く野とあれ果ててあるじがほなる蟲の聲々

あはれ知られぬべき夕暮あれたる所にすむ女のもとにつかはしける　　もとのしづくの大將

ながむらむ淺茅が原の蟲の音をもの思ふ人の心とを知れ

かへし　　おほきおほいまうち君のむすめ

おく露のしげき淺茅に鳴く蟲はなべての秋のさがとこそ聞け

一かたならずもの思ひけるころ蟲のねを聞きて　　おやこの中の内大臣

○獨りすむ云々　佗しい自分を意中の人に訴へる意。
○人をこそ思へ　「こそ」は願ひの言葉。

○うづら鳴く　鶉は荒れ果てた野に棲む鳥。古り、荒れ、などの枕詞。

○さがとこそ聞け　ならはしであると聞かれたいといふ意。後撰集「鶯の雲居にわびて鳴く聲を春のさがとぞ我はききつる」

思ふことちぐさに繁く蟲の音に亂れまされるわが心かな

身のありさまを繪にかきたりけるに夕ながめたる所にかきつけ侍りける　　淺ちが露の尙侍

夕暮は蓬がもとの下露に誰とふべしとまつ蟲のこゑ

きりつぼの更衣のはゝのもとに御つかひにてまかでたるに風いとすゞしく草むらの蟲のこゑ〴〵もよほしがほなれば　　源氏のゆけひの命婦

桐壺　拾　百番歌合五十一番
すゞ蟲のこゑの限りをつくしても長き夜あかずふる涙かな

秋のころ女につかはしける　　うつぼの中納言まさあきら

嵯峨院
秋の夜のさむきまに〳〵きり〴〵す露をうらみぬ曉ぞなき

だいしらず　　かいばみの右大將

秋の夜の長き思ひもきり〴〵すいつまで共にならむとすらむ

山ざとに物思ひける人を思ひやりてつかはしける　　にほふ兵部卿のみこ

椎本
をじか鳴く秋の山ざといかならむこ萩の露のかゝる夕暮

をとこのおろかなる樣にみえ侍りければ山里にわたりて侍りけるに鹿のなくをききて　　みづあさみの右大臣中君

つま戀ふるおなじ音にこそあらねどもしか鳴き暮す秋の夕暮

○ちぐさ　千種　草の茂りに、思ひの憂悶を云ひ掛けた。

○まつ蟲　待つを云ひ掛けた。

○ふる　經るに、上の鈴蟲に通はして、鈴の振るに云ひ掛けた。

○きり〴〵す　蛬に、思ひの切れ切れになるのを云ひ掛けた。

○をじか鳴く云々　鹿の萩に臥せるならひを、自分の現在に移して云つたのである。

家の辨

知らざりし都のほかの住まひしてしか諸共に音こそなかるれ

石山にこもり給へるに鹿のいとあはれになきければ　風につれなきの一品宮

里とほき深山の奥の鹿だにも秋の哀れはしのばざりけり

女二宮

かくばかりふかくはいまだ知らざりき鹿の鳴く音に秋の哀れを

さがに住み侍りけるに鹿のなくを聞きて「我もしかこそねをつくしけれ」と人のいひければ　はつれのしかまの太政大臣女

小倉山うき身に秋はしられつゝしかばかりこそ聲も惜しまね

だいしらず　しぐれの源大納言のむすめ

人しれぬ袖の時雨もひまなきにおなじ心に鹿もなくなり

霧ふかきあしたに女につかはしける　にほふ兵部卿宮

椎本　あさ霧に友まどはせる鹿の音を大かたにやは哀れともきく

宇治にまかれりけるに霧いと深くたちわたりて峯の八重ぐも思ひやるへだておほくあはれなりければ　かをる大將

橋姫　百番歌合七十五番　朝ぼらけ家路もみえず尋ね來しまきのを山は霧こめてけり

○しか　鹿に、然かを云ひ掛け、妻を慕うて鹿の鳴きつゞけるそのやうに、自分も侘び暮すことよと嘆じたのである。古今集「みわ山を鹿もかくすか春がすみ人に知られぬ花や咲くらむ」

○ふかく　深くに、不覺を云ひ掛けた。

○さが　山城國に在る嵯峨。

○大かたにやは　「やは」は、意を倒さまにする言葉、古今集二「春の夜の闇はあやなし梅の花いろこそ見えね香やはかくるゝ」

○まきのを山　槇雄山。山城國に在る。

○霧な隔てそ　「な」は願ふ意を含む感歎詞。霧よ相逢ふ間を隔ててくれるなと云ふ意。

○そよめく　そよ〳〵と風の吹くさま。

○しら菊の花　女によそへて云ふ

六條御息所齋宮に具しきこえてくだり侍りける日霧いたうふりてたゞ
ならぬ朝ぼらけにひとりごたせ給ひける　　六條院のおほむうた

賢本
ゆく方を眺めもやらむこの秋はあふ坂山を霧なへだてそ

一條のみやす所小野にすみ侍りけるに尋ねいりて女二のみこの方にて
霧のたゞこの軒のもとまで立ちわたれるにまかでむ方もみえずなり行
くはいかゞすべきとて　　夕ぎりの左大臣

夕霧　拾　百番歌合六十二番
山ざとの哀れをそふる夕霧にたち出でむ空もなき心地して

女　二　宮

夕霧
やま里の籬をこめて立つ霧もこゝろ空なる人はとゞめず

あれの許にいでてやがて立ちかへりけるに荻のうは風あらゝかに吹き
まよふに　　末葉の露の東宮宣旨

夕霧に道やまどはむ荻の葉のそよめく宿に心とまりて

みこにおはしましける時きくの宴せさせ給ふに前中宮いまだ里におは
しましける御まへのきく關白にめされければひともと奉れりける後に
さしおかせ給へりける　　あだなみの院の御歌

一本菊物語上
わが心君がまがきに移ろふは猶やのこれるしら菊の花

ものおぼしける頃きくの花を御らんじて　六條院御歌

幻　百番歌合六十四番　ゐ物語百

諸共におきふしきくの朝露もひとり袂にかゝる秋かな

右大臣の女御きさきに立ち給ひて後みどか菊のえだのおもしろきを給はせたりければ　めもあはぬの后宮の辨

朝夕に露分けわびししら菊も秋のみやこの光とや見し

みかどみこと申しける時きくの枝をみよとて給はせたりければ　のちくゆる大將の女御

うつりぬる色は憂くとも朝霜のおきてや見まし白菊の花

長月ばかりゐ明かしたる曙に菊を折りて人の見せ侍りければ　うつぼのふちつぼの女御

嵯峨院

露ならぬ人さへおきてきくの花うつろふ色をまづも見るかな

冷泉院の行幸侍りけるにきくを折らせ給ひてむかしの青海波の折をおぼしいでて　六條院御歌

藤末葉　百番歌合九十八番

色まさる籬の菊もをり〳〵に袖うちかけし秋を戀ふらし

九月十三夜内にまゐりてよめる　まよふきんのれの按察大納言

すべらきのよも長月の月みればのどかにのみぞすみ渡りける

○おきふし　起き臥しに、露の置き伏しを云ひ掛けた。
○きく　菊に、聞くを云ひ掛けた。
○青海波　雅樂の曲の名。
○をり〳〵に　時々の意に、折り重ねた意を掛けた。
○すみ渡り　澄み渡るに、住みわたるを云ひ掛たけ。

○みつる　滿つるに、見つるを云ひ掛けた。
○宿からに　宿ゆゑに。
○伏見　山城國添下郡、また紀伊郡にも在る。
○ふしみ　地名に、臥し見るを云ひ掛けた。
○かつら　桂。山城國に在る地名。
○桂の里　月の中の桂の傳說を云ひ掛け、下の「月は云々」は、自分を云ふ。
○内　禁中を云ふ。
○世をうぢ山　憂きに、宇治山を云ひ掛けた。山城國宇治郡に在る。古今集「わが庵は都のたつみしかぞ住む世をうぢ山と人はいふなり」

中納言

雲の上はすみまさりけり古郷によを經てみつる秋の夜の月

おなじ夜一條院にて御あそび侍りけるついでによめる

いせをの右衛門督

秋の夜のくまなき空の月影もたゞ宿からにすむとこそ見れ

よし野にて月を御らんじて

吉野山の中宮

歸りても忘られじかし秋深きよし野の山にすめる月かげ

世をそむきて伏見に住み侍りけるに權大納言夜ふかき月に尋ねまできて侍りければ

みかきが原のさきの左大臣の三君

身の憂さを歎かぬ人も尋ねけりふしみの里の秋の夜の月

かつらにすみ侍りけるころ月を見て

かつらの關白北方

秋はなほ桂の里のさびしさを人こそ訪はね月はすみけり

内におはしましける頃月を御らんじてよませ給ひける

よその思ひの中宮

さとの名もわが身ひとつの秋風を愁へかねたる月の色かな

おなじ頃うちの御返事に

みし秋の月も雲ゐの空ながら世をうぢ山の影ぞかはれる

朱雀院の御時うす雲の女院内にいらせ給へるに月はなやかなるにむか

しの事おぼし出でられければこゝのへに霧やへだつると聞え給へる御

かへし　六條院御うた

匿木 月影は見しよの秋にかはらぬを隔つる霧のつらくもあるかな

九月ばかり山へのぼるとておほたけといふ所にてやすみ侍りけるに月かげに鹿のこゑあはれに聞え侍りければ　風につれなきの關白

月のすむ峯をはるかに尋ぬれどうき世をおくる鹿の音かな

右大臣

きくぞ憂き秋をしのばぬさを鹿のみ山の奥の月になく聲

四季ものがたりの中に　月のみかどの御歌

山の端にかたぶく月のなになれば哀れはかはる鈴蟲の聲

御かへし　すゞむしの少將

君だにも共に有明の影ならばなにかは蟲の聲よわるべき

ながめの末つかた笛ふきすさみけるに　いはでしのぶの關白

ゆく秋の露に涙をおきかへて袖を草葉にやどる月影

かいばみの右大將

いつとても有明の月は見しかども心にとまる秋の空かな

○鈴蟲の聲　意中の人の嘆きの聲に譬ふ。

○有明の影　有は、上の「共に」に云ひ掛けた。有明は、月の空にありながら夜の明けるを云ふ。十六日以後の夜明を云ふ。その影を、曉まで共寐した人に譬へて云ふのである。

○なにかは　「は」は感歎詞に働かす。

かへし　　太政大臣のむすめ

知らざりき秋の空をば見しかどもかかる有明の心づくしは

秋悲不倒貴人心といふこゝろを　　道心すゝむる右おほいまうち君

あきの野も御らんじがてら雲林院におはしましけるころ紫の上につかはさせ給ひける　　六條院御歌

賢木　百番歌合十三番
淺茅生の露のやどりに君をおきて四方の嵐ぞしづごゝろなき

かへし

賢木　拾　百番歌合八十一番
風ふけばまづぞ亂るゝ色かはる淺茅が露にかゝるさゝがに

うつぼの兵部卿のみこ

祭使
おく露に萩の下葉は色づけど衣うつべき人のなきかな

有明の月のまだ夜深きにうちへまかりけるにあらましき風のきほひにほろ〳〵とおちみだるゝ木の葉の露ちりかゝるもいと冷やかに人やりならずぬれて　　かをる大將

橋姫　拾　百番歌合六十六番
山風にたへぬ木の葉の露よりもあやなくもろき我が涙かな

風あらく吹きけるあした人につかはしける　　玉もにあそぶ關白

○四方の嵐　世間のいろ〳〵の風評に譬ふ。
○しづごゝろなき　心の穩かでないこと。
○さゝがに　笹蟹。蜘蛛に同じ。蜘蛛が著物についたり、自分の目のあたりに見る事は親しい人の來る前兆になつてゐる。それで蜘蛛の絲の掛け具合で、その吉凶を占ふのである。允恭紀「わが背子が來べき宵なりさゝがにのくもの行ひかねてしるしも」くもの枕詞。
○あやなく　無文。甲斐なし、すべもないなど。古今集「春の夜の闇はあやなし梅の花いろこそ見えね香やはかくるゝ」

ふき拂ふ風に亂るゝ白露ももの思ふ袖に似たるけふかな　うつぼのみかどの御歌

ふぢつぼの女御いまだ參り侍らざりけるころ給はせける

嵯峨院 いつとても賴むものから秋風の吹く夕暮はいふかたぞなき

おなじ女御のもとにとかく申すこと侍りて　右大將仲忠

初秋一 秋風の萩の下葉を吹くごとに人まつ宿はとこやしくらむ

さがの院のきさいの宮の六十御賀の屛風にもみぢ見る人山邊にあらた刈りつめる所　參議されより

菊宴 お り敷ける秋の錦に圓居して刈りつむ稻をよそにこそみれ

いかなる折にか秋のけしきもしらずがほに青き枝のかた枝いと濃くもみぢたるを女につかはすとて　かをる大將

總角 おなじ枝を分きて染めける山姬にいづれか深き色と問はばや

かへし　うちのあれぎみ

同上 山姬の染むる心はわかねども移ろふかたや深きなるらむ

紫のうへ春に心よせ侍りけるに長月ばかりはこの蓋に色々の花もみぢをこきまぜてつかはさるとて　冷泉院后宮

少女 心から春まつ園はわが宿のもみぢを風のつてにだに見よ

○ものから　ものながら。なれど等。古今集「今はとて返すことのはひろひおきておのがものからかた見とや見む」
○とこ　牀、ふしど。

○山姬　秋の山を司る女神を云ふ

○こきまぜ　扱雜。色々の物が扱き混つてゐる。
○風のつて　風の傳手と云ふ意。便りなどにも云ふ。

物おぼして御らんじ出したるに木々の梢も色づきわたる頃なりければ
よませ給ひける　　さごろものみかどの御歌

物語一下
せく袖に漏りて涙や染めつらむ梢色ますあきの夕ぐれ

志賀にこもりて出で侍るとて色こき紅葉を折りて　　右大将なかたゞ

菊宴
山苞を見すべき人はなけれどもわがをる枝に風もよきなむ

思ふ事侍りてはつせにまうでてなるべきさまの夢見侍りてまかでける
道にてよめる　　しづのをだ巻の左近府生

佐保山の紅葉の錦たちいでてしるしを深く見るよしもがな

右のおほいまうち君こゝろあくがれたる樣なりける頃手習ひにして侍
りける　　心たかき後冷泉院宣旨

拾 百番歌合八十一番
秋深きあを葉の山のこきまぜにいろ／＼物を思ふころかな

これを見て　　右大臣

いろ／＼に人の心ぞうつるらし青葉の山は秋も知らぬに

秋の末つかた大ゐ川にてせうえうしてかへり侍りけるにしぐれに袖の
ぬれければ　　みふねのおほきおほいまうち君

やよ時雨紅葉にあかぬ色ぞとやことぞともなき袖ぬらすらむ

○せく　堰く。塞ぐなどに云ふ。
○あき　飽きに、秋を云ひ掛けた。
○志賀　近江國に在る。
○山苞　山のみやげ物。
○よきなむ　避けなむに同じ。
○佐保山　大和國に在る。
○しるし　兆。豫め心に描いてゐた物の現はれを云ふ。また、驗、かひ、きゝめ。
○やよ　人を呼びかける聲。時雨を擬人的に取扱つたのである。
○ことぞともなき　何事ともなし　新古今集「夕されば荻のはむけを吹く風にことぞともなく涙おちけり」

○かごとばかり　言ひわけばかりしるしばかり。
○まだき　時に先だちて。六六「露わけて秋ほすひまもなきものをなど秋風のまだき吹くらむ」
○かれ〴〵　離れ〴〵に。

○あきはつる　秋果つるに、飽き果つるを云ひ掛けた。

きさいの宮さとにおはしましける頃うちしぐれたる夕にたてまつらせ給ひける　　みかきがはらの春院御歌

そむれども木の葉は風に誘ひけり袖の色こそしぐれわびぬれ

御かへし　　皇太后宮

秋深きかごとばかりの袖の色にまだき時雨の空な恨みそ

みかどみこと申しける時かれ〴〵にならせ給へりければ長月ばかりによめる　　のちくゆる大将の女御

風さむみ人まつ蟲の聲たててなきもしぬべき秋の暮かな

だいしらず　　風につれなきのよしのの院御歌

蟲の音も秋果てがたの草の原かれ葉の露はわが涙かも

わたらぬ中の承香殿女御

わがごとく鳴き弱りゆく蟲の音はあきはつる身や悲しかるらむ

おやこのなかの中宮母

下草にあるかなきかに鳴く蟲のよをあき果つる聲の哀しさ

秋の暮に法輪にまうでてもみぢの水にながるゝをみて　　秋のよながむる少将

散りつもる紅葉をながす水にこそ問ふべかりけれ秋の行方は

○さこそ　然かこそ。さやうにこそ。

神無月にまゐるべしときこえける人に秋の暮にたまはせける

風につれなきのよしのの院御歌

物語
暮れぬべき秋をや人は惜しむらむさもあらぬ露のかゝる袖かな

九月つごもりつれなかりける女の許にまかりてよめる　　たゆみなきの中將

いでて見よさこそ辛さはつきずとも今夜に限る秋のけしきを

風葉和歌集　卷第六

冬

神無月のついたちに「たぐひなく憂きわかれ路の袖の上にいとゞふりそふ初しぐれかな」といへる人のかへし　たゆみなきのふぢつぼの女御

たぐひなく物思ふ人の袖の上に今朝をわきける時雨ともみず

だいしらず　あさくらの皇后宮内侍

いつとなくしぐるゝ袖に神無月空さへいとゞはれぬ頃かな

女のもとより返りてあしたにつかはしける　かいばみの右大將

神無月しぐれざりせばから衣けさの袂をいかに（いは一本）知らまし

まのの浦にこもりゐて侍りけるころ時雨がちなる空の氣色思ひのこす事なくて　なんなすゝみの左大將

ふりふらず時ぞともなき時雨かなうき世の中にあき果てしより

神無月ついたち頃うちにてせうえうし侍りけるに入宮のすみ侍りける

○今朝をわきける　昨夜よりの二人を別れさした今朝の時雨といふ意。

○から衣　唐衣。唐の樣に習ひて作つた衣。衣といふので、著る、紐、裁つなど、衣に關する總ての物に掛けて云ふ。

○時ぞともなき　時のさだめもなく、いつといふ時なく。

處の梢ことにおもしろう遠めさへすゞろなるに　　にほふ兵部卿のみこ

（總角）秋はてて寂しさまさる木のもとを吹きな過ぐしそ峯の松風　　右衛門督

いづくより秋はゆきけむ山里の紅葉の影はすぎ憂きものを

だいしらず　　とりかへばやのみてもののひじり

秋はてて四方の嵐にさそはるゝ木の葉にたぐふ我が身ともがな

なげく事侍りける頃もみぢの散るを見て　　あまやどりの太宰權帥重康

風に散らず碎くるもみぢ葉はもの思ふ人の心なりけり

四季ものがたりの中に　　しぐれの式部卿のみこ

色深くそめし紅葉は散りぬるを何と世にふる時雨なるらむ

かみな月ばかりしぐれいたうする日女につかはしける　　とりかへばやのさきの太政大臣

もの思ふ心も空に亂れつゝしぐれにそふる我が涙かな

いとせちに思ふこと侍りける頃うちくもりしぐれければ　　うもれ木の少將

はれまなき心や空にまがふらむ涙しぐるゝ袖のうへかな

たゞ人におはしましける時さがの院の皇太后宮れいならで里におはす

○吹きな過ぐしそ　「な」は願ふ意に用ゐる感歎詞。「そ」もおなじ。

○四方の嵐　前註。

○ふる　降るに、經るを云ひ掛けた。

○れいならで　心持や體が常でないこと。

る頃わたり給へるに俄にくもりしぐるればよませ給ひける　さごろものみかどの御歌

物語二上　百番歌合七十番
人しれずおさふる袖もしぼるまで時雨とともにふる涙かな

式部卿のみこ嵯峨にこもりゐて侍りける頃しぐれかきくらす夕につかはせ給ひける　なが月のわかれのみかどの御歌

思ひくらす夕の空やいかならむさもあらぬ袖もかゝる時雨に

山里にすみける女のもとに常よりもしぐれ明かしたるあしたにつかはしける　ねざめの関白

物語二
つらけれど思ひやるかな山里の夜半のしぐれの音はいかにと

だいしらず　おもかげこふる三位中将

もの思ふ心のうちを知りがほにたえぬ時雨の音ぞかなしき

みかどみこと申しける時ひさしうおとづれさせ給はざりけるころしぐれの音まどほに聞きなされさせ給ひて　うたゝねのきさいの宮

音たえぬしぐれにつけて思ふかな契りし人のかからましかば

をとこの絶えにける頃しぐれを聞きあかして　をぐるまのれいけい殿の女御

音づれの絶えぬなさけの時雨にもなどかく袖のぬれ増さるらむ

○まどほ　間遠。絶え〳〵に。

○たゞにて　何事もなくてといふ意。

○うはの空　上の空に、心ない意を言ひ掛けた。

○みなせ　水無瀨。攝津國に在る。古今集「ことに出でていはぬばかりぞ水無瀨川したにかよひて戀しきものを」

○苫をうすみ　苫の薄いことを、獨り寢のつれない意にいふ。

○草の原　源氏花宴「うき身世にやがて消えなば尋ねても草の原をばとはじと思ふ」に思ひよせた歌。

もの思ひけるころ月のにはかにかき曇りてしぐるゝを見て

あひすみくるしき源大納言三君

なぐさみに眺むる月もかきくもりいとゞ時雨にぬるゝ袖かな

しのびたる女の許にまかりてたゞにてかへり侍りける道に月をみて

みふれの太政大臣

かげとめし露のやどりも霜さえてうはの空にもめぐる月かな

左大將みなせにすみ侍りける冬のころつかはしける

みなせ河の新中納言

聞きなれし峯の嵐もいかならむ都もかはる風のけしきに

少將なかよりみづのをにこもりゐて侍りけるのち「松風のさむきまにまに年をへてひとり臥すらむきみをこそ思へ」と申し侍りければ

うつぼの修理太夫思章女

國譲下　獨りぬる夜さむも今や苫をうすみ霜おく山の嵐をぞ思ふ

女の行方おぼつかなくおもほしなやみける頃尾花がもとの草も霜ふかくなり行くを御らんじて

さごろものみかどの御歌

物語二上　百番歌合三番　尋ぬべき草の原さへ霜がれて誰にとはまし道芝のつゆ

四季ものがたりのなかに

はぎの内侍のかみ

花のうへに結びし露は夢なれや萩のふる葉をうづむ朝霜

女の許よりかへりたる人にかはりてあしたにつかはしける　参河にさけるの關白

拾　百番歌合四十二番

あさ霜のおくればくるゝ冬の日もけふこそ長きものと知りぬれ

かへし　女院のみくしげ

冬の日のくるゝもしらず消えかへる朝の霜に身をたぐへばや

嵯峨院のきさいのみやの御賀の屏風にあじろある河に舟どもこぎうけたる所　うつぼの權中納言忠能

菊宴

こぎ列ねひを運ぶとて網代木に多くの舟を見なれぬるかな

うちにてよみ侍りける　かをる大將

總角　百番歌合七十六番

霜さゆる汀の千鳥うちわびて鳴く音かなしき朝ぼらけかな

かへし　うちの中君

總角　拾　百番歌合九十六番

曉の霜うちはらひなく千鳥もの思ふ人のこゝろをや知る

女のゆくへ知らでなげきけるころ千鳥のなくを聞きて　しぐれの中將これすけ

さ夜ちどり友まどはせる聲すなりおなじ心に物やかなしき

物思ひけるころ水鳥のこゑをあはれに聞きて　もにすむ蟲の權中納言

片敷きの袖さへ冰る冬の夜は鴛鴦のうき寐をよそにやは聞く

○おくればくるゝ云々　起きたかと思へば早暮るゝ短い冬の日も。

○ひを　氷魚。堀川百首「かゞり火のなからましかばひをのぼる網代のほどをいかで知らまし」

○物やかなしき　「物」とは、その時に直面してゐる物を云ふ。人待つ身を歎く樣を云ふ意。

○片敷き　獨り寢を云ふ。

恨むる事ありてあひ侍らざりける女の獨り明かして池の水鳥のつがひ離れぬを羨ましく見て

おやこの中の內大臣

水の上に氷とぢたる鴛鴦だにもつがひ離れて明かすものかは

池に水鳥どものあそぶを御らんじいでてしたやすからざらむ程おぼし知られければ

うたゝれのみかどの御歌

水の上に鴨のうきよをいつまでかした苦しくて過ぎむとすらむ

女二のみやのすみ給ひける一條に忍びておはしましたるに池にたちゐるをしのおとなひも同じ御心におぼされて

さごろものみかどの御歌

物語二下　百番歌合七十六番

われ ばかり思ひしもせじ冬の夜に番はぬをしの浮寢なりとも

女のもとにまかれりけるにつれなかりければ池のをしのなくを聞きて

はしたかの按察大納言

諸共に羽うちかはす鴛鴦よりも冱ゆる霜夜はたえずなくなり

あひそひて侍りける女のはなれゐて侍りけるころつかはしける

われからのはりまのかみ

冬の夜にならはぬ鴛鴦の獨り寢は上毛の霜をいかにせよとぞ

四季物語のなかに

にほのきみ

○池の水鳥　鴛鴦を指す。鴛鴦は雌雄常に番ひゐて離れない鳥。
○したやすからざらむ　心おだやかでなく、恨しく思ふと云ふ意に同じ。拾遺集「水鳥のしたやすからぬ思ひにはあたりの水も冰らざりけり」
○した苦しく　心苦しく。
○おとなひ　消息。おとづれ。

波かくる鴉のうき巣の磯づたひよるべ定めぬ契りかなしな

かもの齋宮

人め漏るつらゝのとこゐうき枕心くだくる浪のうへかな

女を親にとりこめて侍りけるに忍びてまかりながらなげきあかして

さゝわけしあさの關白

いかにせむ片敷きわぶる冬の夜のとくる間もなき袖のつらゝを

女につかはしける

ゆふぎりの二のみこ

おちつもる涙は袖に氷りつゝとけて寝らるゝ宵の間もなし

雪のふりつもれるに月くまなくさし出でてひとつ色に見え渡されたるにやり水もいたうむせび池の氷もえもいはずすごきに

むらさきのうへ

こほりとぢ石間の水はゆき惱み空すむ月の影ぞながるゝ（朝顏）

八條院の冬の御方にて雪ふり月おもしろき夜詩歌などたてまつり侍りけるに

さゝわけし朝の關白

さえわたる池の氷も月かげもおなじ鏡と見ゆる夜半かな

頭中將

譬べき方なきものは冬ふかみ雪ふりしける夜半の月かげ

○つらゝ　氷。下の「とこゐ」は氷のゐるに、寢所を云ひ掛けた。○うき枕　浮枕に、憂き枕を。○親にとりこめて　親の監視の下に禁足されてゐること。

○おなじ鏡　相思ふ一つの心と云ふ意。上の、「氷も月影も」は、男女に譬ふ。

だいしらず　　つまこひかぬる三位中將

なげき侘びうち寢る牀の寂しきに哀れをそふる冬のよの月

うす雲の女院かくれ給ひてのち思ひいでてきこえさせ給ひつゝ大殿ごもれるに恨みたるさまにて夢にみえさせ給ひければ　　六條院おほんうた

朝顔　百番歌合三十六番

とけてねぬ寢覺めさびしき冬の夜に結ぼほれつる夢のみじかさ

たゞ人におはしましける時こがはにまうで給ふに吉野川の邊りにてみぎは氷のとぢこめておほん舟もえすぎやらぬに　　さごろものみかどの御歌

物語二下　百番歌合七十八番

わきかへり氷の下にむせびつゝさも侘びまさる吉野河かな

女の許にたび〳〵まかりて獨りあかしてよみ侍りける　　おやこの中の内大臣

獨り寢の夜を重ねたる寂しさにとこさへ冱ゆる片しきの袖

五節のまひ姫につかはしける　　夕ぎりの左大臣

少女

日陰にも著るかりけめや少女子が天の羽袖にかけし心を

とよのあかりの節會にをみにて侍りけるにまうづとて有明の月おもしろくさえわたれるに　　みかさがはらの右大將 臣イ

めづらしき豐のあかりの日陰草かざす袖にも霜はおきけり

まことに置きたりけるにやうち拂へるけはひをかしかりければ　　大納言典侍

○大殿ごもれるに　夜の殿に入ること。
○とけてねぬ　疑ひの解けないで寢た時を云ふ。
○こがは　粉河寺の略。紀伊國那賀郡に在る。
○おほん舟　御舟。貴き方の舟を指して云ふ。
○とこ　牀に、常を云ひ掛けた。
○五節　往昔、十一月の中の丑の日に行はれた女樂で、五人の舞姫を選んだ。
○天の羽袖　羽衣の衣、天人の衣の袖。源氏少女「ゆふけにも著るかりけめや少女子が天の羽袖にかけし心は」
○とよのあかり　豐明。節會の時などの酒宴を稱していふ言葉。
○をみ　小忌。青き草摺の衣で、新嘗會、大嘗會などに仕へる人達の著る衣。その人を小忌人といふ。
○日陰草　葵の異名。續古今集「けふにあふ豐の明の日陰草いづれの代よりかけはじめけむ」

ひかげ草かざすにいとゞ霜さえて氷やむせぶ山あゐの袖

忍びたるをとこの臨時の祭の舞人にてわたりけるに車より扇をさし出でたりければ馬をうち寄せたるに　　五　せ　ち

小忌の著る山藍の衣めづらしく只ゆきずりにけふは見よとや

夕ぐれの空のけしきいとすごうしぐれたる日にほふ兵部卿宮「ながむるはおなじ雲ゐを」と申して侍りけるに　　うちの中君

總角
あられ降るみ山の里は朝夕に眺むる空もかきくらしつゝ

世をのがれむとて出でけるに江侍從内侍が許のものに見あひてことづけ侍りける　　あまのかるもの權大納言

霰ふるみ山の里はいかにぞと來る人ごとの便りすぐすな

女院ゆく方しらでなげきけるころ木がらしの荒くしぐれうちして叉ふきかへしあられの音のおどろ／＼しきをききて　　末葉の露の右大臣

こひわぶる冬の夜すがら寢覺して時雨が上の霰をぞ聞く

いとつれなき女の許にまかりて叩きかれて侍りけるにあられの降りければ　　水あさみの左兵衞督

うらやましうはの空なる霰だに槇の板戸の內にいるなり

○山あゐの袖　山中に自然と生える一種の藍で、それで染めた袖をいふ。
○臨時の祭　賀茂社と石淸水社との祭をいふ。賀茂は十一月下の酉の日、石淸水は三月の中の午の日に行ふ。
○ゆきずり　道などの行きちがひに、人や物などに逢ふことをいふ。夫木集二十七「たび人のはたごの馬のゆきずりに夏野の草をすさめやはせぬ」
○しぐれうち　時雨の雨に風が加はつて、戸などに打ちつけるを云ふ。
○おどろ／＼　凄く恐ろしき樣にいふ。
○うらやまし云々　心なく降る霰さへ、女の居る部屋中に入るものを、かうして訪ねて來た自分は入りかねてゐるといふ意。

○けふなれ初むる　けふより嵐の吹き初めたといふ意。

○ふりはへて　ことさらに、わざわざなどにいふ。

冬のころ小野にうつろひ給ひけるに日頃心もとなかりける雪かきくらし降りて風の音もいとはげしければ　　めもあはぬの右大臣

山深くけふなれ初むる嵐よりやがて烈しくある〻雪かな

よし野山にこもりゐて侍りけるころ雪のふりければ　　濱松中納言

物語四
冬ごもり吉野の山の雪ふみていとゞ人めや絶えむとすらむ

よし野にすみ侍りける人につかはしける

同上
きえかへり思ひやるとは知るらめやよし野の山の雪の深さを

大納言たゞよりの七十賀の屏風に山に雪たかくふれる家のある所　　讀人しらず

落久保物語三
雪深くつもりてのちは山里にふりはへて來る人のなきかな

雪のあしたにあはれといふ事を置きて歌あまたよみけるなかに　　ふたよのともの上人

道たゆることや憂からむ降る雪を哀れとみても人の待たれば

ふる雪のけさの哀れにさそはれていかなる人に誰を待つらむ

中宮のださなくおはしましけるを六條院にわたしきこえむと思ひけるに雪かきくらしふり積るにかやうならむ日ましていかにおぼつかなか

○めのと　乳母。

○身もさえわたる　獨り寢のわびしく寒き身をいふ。
○高野　紀伊國に在る。風雅集「忘れてもくみやしつらむ旅人の高野の奥の玉川の水」

らむとてめのとに申し侍りける　　あかしのうへ

薄雲
雪ふかき深山の里は霽れずとも猶ふみかへよ跡たえずして

よし野山にて雪のふる日よませ給ひける　　よし野の女院

ふみ分けてくる人あらば問ひてまし都もかくや雪つもるらむ

おなじ山にすみてことに心ぼそかりけるによめる　　はままつの帥宮中宮

物語　拾　百番歌合三十五番
みよし野の雪のうちにも住みわびぬいづれの山を今は尋ねむ

女の行方しらずなりて侍りけるふるさとに雪のふる日ひぐらし眺めて
かへるとてよめる　　かはほりの少將

尋ぬべき方もなくてぞ歸りぬる雪ふる郷に跡も見えねど

四季ものがたりの中に　　ゆきのみかどの御歌

しら雪のいかでか涙をむすばましむすぶ氷の便りならでは

内侍のかみ様かへて侍りける後雪のあしたにつかはさせ給ひける　　玉もにあそぶの朱雀院御歌

哀れとは思ひおこせよ片敷きて身もさえわたる雪の夜な〳〵

新大納言世をのがれて高野にすみ侍りけるに雪のふる日つかはさせ給
ひける　　しのぶの院の御歌

都だにきえあへずふる白雪にたか野の奥を思ひこそやれ

この御歌を見ても雪御らんぜし御とも仕うまつれりし事など思ひ出でられ侍りければよめる　　新大納言

むかし見し小鹽の山のみゆきまで思ひ出でても袖ぞぬれける

六條院太政大臣にものし給ひける時大原野の行幸に仕うまつり給ふべくかれて御けしきありけれど物忌の由そうせさせ給ひてさも侍らざりけるに雉一えだ奉らせ給ふとて　　冷泉院御歌

行幸　百番歌合九十九番
雪ふかき小鹽の山に立つ雉のふるき跡をもけふは尋ねよ

御かへし　　六條院御歌

同上
小鹽山みゆき積れる松原にけふばかりなる跡やなからむ

雪のうちにかをる大將まできて兵部卿宮にかへりてとはいづかたに聞ゆるとひ侍りければ　　うちのあれぎみ

椎本　百番歌合七十八番
雪深き山のかけはし君ならで又ふみかよふ跡を見ぬかな

まゐるべきよし聞えける人に雪いたくつもりてえもいはずしみ氷りたるくれ竹の枝につけて給はせける　　さ衣の後一條院御歌

物語二下　百番歌合九十七番
頼めつゝいくよ經ぬらむ竹の葉にふる白雪の消えかへりつゝ

○小鹽の山　山城國に在る。古今集十七「大原や小鹽の山もけふこそは神代の事も思ひいづらめ」
○みゆき　深雪に、行幸を云ひ掛けた。
○大原野　山城國に在る野。
○御けしき　天皇の御有樣、御容子などを云ふ。
○物忌　心に祈願するところあつて、日常を愼んでゐる。もののつゝしみ。
○ふみかよふ　文に、踏むを云ひ掛けた。

御かへし　　　齋　院

同上　百番歌合二十八番　ちぎりやはするくれ竹のうはの雪をたにたのむらむ百

末のよもなに賴むらむ竹のはにかゝれる雪のきえも果てなで

こゝち例ならず侍りけるころ關白しのびてまできて雪のつもりたる曉の空をいざなひてみせ侍りける　　かやがしたなれの宣耀殿女御

憂き事は身にのみつもる白雪のきえかへりてもふるぞ悲しき

かへし

誰もみな消え殘るべき身ならねばふりそふ雪を何か厭はむ

山ざとに侍りける女のもとに雪のふる日つかはしける　　ふきこす風の宰相中將

さびしやと思ひこそやれ雪深きみ山の里の雪のけしきを

佛名など今年ばかりにこそはとおぼしめして御導師の杯のついでによませ給ひける　　六條院御歌

幻　春までのいのちも知らず雪の內に色づく梅をけふかざしてむ

御かへし　　御導師

同上　千世の春みるべき花と祈り置きてわが身ぞ雪と共にふりぬる

さがの院のきさいの宮の御賀の屛風に佛名したる所　　右大將なかたゞ

菊宴　かけて祈る佛の數し多ければ年に一たびちよも增すらむ

○消え殘るべき身ならねば　どんな人でも決して生き殘るわけのものでないの意。
○ふりそふ　降りに、經り添ふを掛く。

○佛名　公事の名。陰曆十二月十九日より二十一日までの間に行はれる儀式。
○杯のついで　酒宴の折。

〇むかしの遠く　年の暮れるたびに、思出の多い懷かしい昔から遠ざかつてゆくことは悲しいと云ふのである。

としの暮によめる　　　　　わが身にたどるの皇后宮宰相

雪ふりて暮れゆく年の數ごとにむかしの遠くなるぞ悲しき

風葉和歌集　卷第七

神祇

契りとて結ばずもなき白絲を絶えぬばかりや思ひ亂るゝ

これは餘所の思ひのみかど中宮の御事をおぼん心ひとつにふかくおぼしめして夜な／＼大神宮を拜し奉らせ給ひ大殿ごもるともなき御夢につげ給ひけるとなむ

やすみしるわが皇（すべらぎ）にしたがはで誰が誠をか神はうくべき

御夢のうちの御託宣たのもしくおぼしめされければ關白春宮大夫に侍りけるとき勅使にてみてぐら奉らせ給ひけるに事なくかへりのぼり侍りける道にてこれも夢につげ給ひけるとなむ

八幡にこもりてこと事なく祈念することと侍りてかきて柱におしつけける　　いはしみづのいよのかみ

物語下

深くのみ賴みをかくる石清水ながれあふせのしるべともがな

○結ばずもなき白絲　風雅集十七「むかしたれ人のこゝろを白絲の染むれば染まる色になきなむ」を指すのであらう。

○やすみしる　「る」は助詞で「らる」に同じ、やすみしし、は、安見知之。天皇の安らかに、政を見たまふ、知り給ふ、をさめ給ふ事などを約めて云ふ。大君、すべらぎ、などに掛けて云ふ言葉。

○みてぐら　幣。神に奉るものを總ていふ。また神樂歌の曲の名。

○八幡　山城國に在る。

○石清水　山城國と近江國とに在る。石の清水に掛けて云つたのである。

寶殿よりけだかき聲にて御かへし

同上　夢ばかり結びおきける契りゆゑ長き思ひに身をやこがさむ

物語二下　神世より注連引きそめし榊葉を我より外に誰か折るべき

これはさごろもの源氏宮内へ奉らむとし給ひけるに堀川院の御夢に賀茂よりとて侍りけるとなむ

人しれずわが注連さしし榊葉を折らむといかで思ひよるらむ

これはみたらし河の大臣さい院の未だちゝみかどにもしられ聞え給はざりける頃ほのかに見きこえて心にかゝりて寝たる夜賀茂よりとてさか木につけたる文にかかれたりけるとなむ

物語　雲ゐなる程はみあれの葵ぐさ照る日のよそに思ふばかりぞ

これはよその思ひのみかど思召しなげく事を心ぐるしく見奉りて宰相のすけ賀茂にまうでて祈り申しける夜の夢にみ侍りけるとなむ

物語　あきらけく照らさむこの世後の世も光をみする露や消えなむ

これは風につれなき吉野の院の中宮の御産近くなりて宇治入道關白春日にまうでて侍りけるに夢うつゝともなくいとけ高きさまなる人のつげ侍りけるとなむ

○わが注連さしし　自分より外は足踏みさせないように注連繩をさしておいたといふ意。

○みたらし河　御手洗河は、山城國愛宕郡、賀茂の神山より流るゝ川。

○みあれ　「み」は美稱。阿禮。賀茂の祭に用ゐる物。大きなる榊に色々の絹や鈴などを付けたもの。

○葵ぐさ　日陰草に同じ。

なほ頼め歎きなき世をまつの葉にかゝれる藤の花の盛りは

　これは夢がたりの前の關白女を亡くなして世をそむかむと思ひ侍りけるもとかく障りがちに侍りければ春日にまうで妨げあらせ給ふなど祈り申しけるあかつき方にうちねぶりたる夢にふぢの花を給はすとて宣はせけるとなむ

物語中　なみのほか來しもせざらむ里ながらわが國人に立ちは離れず

　これはまつらの宮の右大辨宰相のうちたゞ遣唐のそへ遣ひに渡りて侍りける時いくさ起りて世の亂れいで來にけるをかのおほやけの軍にまじはりて我が國の神佛を念じけるに馬鞍までわが姿に變らぬ人九人いで來て諸共にたゝかひて事なくしづめ侍りにければうちやすみたるより夢にみえ侍りけるすみよしの御歌となむいひつたへたる

あふ事はいざしら雲のかたくとも立ちかへり見つしるしあらじや

　これはかいばみの右大將女のゆくへ知らぬ事を住吉にまうでて申し侍るとて「思ふ人よにすみよしと思ほせばたちかへり來む岸の白浪」とよみ侍りけるにえもいはずけ高きをとこのけはひにてつげ侍りけるとなむ

○世をそむかむ　世を遁れんといふに同じ。
○春日　大和國に在る。
○住吉　攝津國に在る。

秋の夜の松ふく風の音よりも哀れ身にしむ法の聲かな

これは岩垣沼の頭中將すみ吉にこもりて讀經などして行ひ侍りける曉つぼれにたてぶみにてさしおきて侍りける歌なりさるべき人もまうで侍らざりければ神の御しわざにやと思ひてひとりごちける

かくばかり物思ふ人はあらじよに誰か身にしむ哀れなるらむ

左大將かたちをかくしてところ／＼見ありきけるころ前齋宮に大貳まさかれが近づきよりけるを太神宮と思はせてさま／＼申しけるに畏れておこたり申して出でにければよみ給ひける　かくれみののさきの齋宮

わが爲に天てる神のなかりせば憂くてぞ闇に猶まどはまし

やはたに詣でてよみ侍りける　をだえのぬまの右大臣

誓ひおきし神の心を賴むかな人の人にはあらぬ身なれば

女一宮齋院にゐ給へるもはゝは知らずやあらむとおぼされてよませ給ひける　秋のよながしとわぶるみかどの御歌

ゆふ懸けて知らずやあるらむ思ふ人神のいがきに注連ゆひつとも

賀茂の御告げにてみかどにしらせ奉り絶えてさかき葉のさしてをしふる人なくばと宣はせける御かへし　おなじ齋院の母后のみや

○たてぶみ　立文。捻り文に同じ。源氏少女「むらさきの紙、たてぶみさぐよかに藤の花につけたまへり」

○かたちをかくして　姿、有様などを平生より著しく變へたことを云ふ。

○人の人には　上の「神の心を」を通はせて、現身と心境とを交叉さして云ふのであらう。

○こや　これは。

○木綿襷　楮（かうぞ）の皮を剝いで織つた白き布、それで造つた襷。

○ふる聲　古聲。昔の聲と云ふ意

○須磨　攝津國に在る。

○引きつれ云々　彼の子の日に、野に出でて小松を引きて祝ふことと賀茂の祭の時、祭に關はる人の冠に葵の花をかざす事を云ふ。當時のいろ／＼の追憶を云ふのである。

かはるなよ榊葉さして祈るらしこやそのかみのしるしなるらむ

御出家おぼしめしたたせ給ひて賀茂にまうでさせ給ひてよませ給ひける　風につれなきよしのの院御歌

今はとて禱りかけつる木綿襷わが世の後は神にまかせつ

賀茂のいつき未だかはり侍らざりけるとき花のさかりに内大臣まうでて「散らでも花の千世をへよかし」と申し侍りければ　みたらし河の齋院中納言

榊葉も花の匂ひもたぐひなきをる人からに千世もへぬべし

みかどたゞ人におはしけるとき祭の日み社にて都には音なきほとゝぎす御垣のわたりにはふる聲になりけるをきかせ給ひてかもの岩垣たづねきにけりとのたまはせけるに　さごろもの齋院女別當

（物語下三）語らはば神もききなむほとゝぎす思はむかぎり聲な惜しみそ

六條院須磨にうつろひ給はむとて故院の御墓にまうで給ひける御ともにさぶらひて賀茂の下のみ社をかれとみわたすほど齋院の御けいにかりの御隨身にて仕うまつれりしこと思ひいでられて下りて御馬のくちをとりて聞えける　源氏の衛門大夫

（須磨　百番歌合八十七番）引きつれて葵かざししそのかみを思へばつらし賀茂の瑞垣

やがて馬よりおりてみ社のかたを拜み給ふ神にまかり申したまふとて

六條院御歌

同上　百番歌合四十五番
うき世をば今ぞ別るゝとゞまらむ名をばたゞすの神に任せて

兵部卿のみこのむすめ宇治にまゐるべしと聞えけるに俄に賀茂のいつきに定まりにければをみなへしにつけてつかはせ給ひける

みかさがはらのみかどの御歌

神垣に咲きまじるともをみなへし露ばかりをば思ひ忘るな

御かへし　齋院

木綿襷かけても人の忘れずば露のなさけを頼みこそせめ

神無月十日ごろ平野に行幸侍りけるに齋院のわたりの紅葉いみじう盛りなるに御らんじわたさせ給ひて

さごろものみかどの御歌

物語四下
神垣は杉の梢にあらねども紅葉の色もしろく見えけり

だいしらず

うつぼの參議すけすみ

藤原君
目に近くおりて祈れと春日野の森の榊は色もかはらず

龍吟出家し侍りて又のとし春こそのむ月に稻荷の御幸の御供つかうまつりて侍りけるかざしの杉に雪のふりかゝりたりしなどおぼしめし出

○たゞす　正すに、山城國愛宕郡に在る糺の森を云ひ掛けた。

○神垣に　賀茂の齋を指して云ふ

でられければ　　あまのもしほびの院御歌

祈りこし神さへつらし稻荷山いづらは杉のしるしありけり

六條院すみ吉にまうでさせ給ひけるにしのびてまゐりてよめる

源じのあかしのあま

若菜下
昔こそまづ忘られね住吉の神のしるしを見るにつけても

おなじをり二十日の月にはかにすみて海のおもておもしろくみえ渡る
に霜のいとこちたく置きて松ばらも色まがひてよろづの事そゞろさむ
きに　　むらさきのうへ

同上
住吉の松に夜深くおく霜は神のかけたる木綿かづらかも

六條院内大臣と申しける時すみ吉に御願はたしにまでさせ給ひけるに
神の御とくをあはれにめでたしと思ひて申し出で侍りける

參議惟光

拾遺拾　百番歌合六十三番
住吉のまつこそ物はかなしけれ神世の事をかけて思へば

すみ吉の御しるしあらたに侍りけるかへり申すにまうでてよみ侍りけ
る　　かいばみの右大將

しるしありと頼む心は住吉の松のみどりのいつか變はらむ

○稻荷山　山城國に在る。
○いづら　いづれ。

○こちたく　わづらはしく。或はおびたゞしく。

○木綿かづら　木綿で作つた鬘。

○あはれにめでたし　しみ〴〵と嬉しく思ふの意。

○あらた　あらたかに同じ。

○ことわれ「れ」は、過去を示す「る、り」などの動詞の變化。條理をときて善惡を分ける事。また否む意の、斷り。此處は二つの意をかけてゐる。
○あはぢ島　上の意に通はして、逢はじに、淡路島を云ひ掛けた。

○とよをか姫　豐還迦姫。拾遺集「幣帛はわがにはあらず天にます豐岡姫の宮のみてぐら」
○注連　注連繩は境の標に廻らすものの意から、自分の心ざしたその注連を忘れるなと云ふのである

みかどてる月の中納言の事きかせ給ひて「月かゝりけむ住よしの松」と宣はせければ　　はつれのせり河の御息所

住吉の神もことわれあはぢ島月かゝれとは眺めざりしを

かひの物語のなかに八月十五日すみ吉にまうでてよめる　　あはびがひの左大辨

いかばかり神の心もすみぬらむ今夜に似たる月しなければ

少女　拾　百番歌合四十一番

五節のまひ姫をみてつかはしける　　夕霧の左のおほいまうち君

天にますとよをか姫の宮人もわが心ざす注連を忘るな

登華殿女御にしのびて物申して出でける曉に明殿のわたりをすぐとて内侍所のおぼしめすらむ事もおそろしくて　　女すゝみの左大將

神も見よかかる嘆きに結びける契りはけふの我が心かは

須磨にて彌生のついたちに出できたる巳の日御祓せさせ給ふとて　　六條院御歌

須磨　百番歌合八十八番

やほよろづ神も哀れと思ふらむおかせる罪のそれとなければ

齋院のみそぎの日はらへ仕うまつるをきかせ給ひていとかうぐしく物おそろしうおぼされて　　さごろものみかどの御歌

物語三下　百番歌合八十八番

禊するやほ萬代の神もきてもとより誰か思ひそめてし　（われこそ下に思ひそめしか物語）

たゞ人におはしましけるとき御出家おぼしめしたたせ給ひけるを賀茂の大明神堀河院につげ聞え給ふことありて御ほいも解けさせ給にてみ社にてさま／＼御いのり侍りけるをきかせ給ひて御心のうちに

芦言四上

神も猶もとの心をかへり見よこの世とのみは思はざらなむ

風葉和歌集　卷第八

釋　教

昔より心つくしの契りにて歎かむ事もこの世ばかりぞ

これはあまのかるもの權大納言思ふこと侍りて初瀬にこもりてかかる思ひやめ給へと申しける夢にいぬふせぎよりうるはしき僧のさしいでて申しけるとなむ

こひわぶる心は闇にくらすとも雲ゐの月をよそにながめよ

これはちゞにくだくる左大臣もの申しける女の后にたち給ひにけるを知らでなげきける頃の夢に石山よりとて卷數のふだに書きつけたりけるとなむ

影ならべすまむことこそ難からめいりがた近き山の端の月

これも石山の觀音のみたらし河の内大臣の夢につげ給ひけるとなむ

待てしばしみち來る潮の時の間をかひもなぎさとなに恨むらむ

○初瀬　大和國に在る。

○いぬふせぎ　犬防。佛壇の前に立てる低き格子。

○ふだ　札、簡。

○かひもなぎさ　櫂に、詮方なき意のかひを、汀に、無きを、いづれも掛けて云ふ。

これはちくまの川の中の君おとゞひともところ〴〵にまでて身のゆくへ祈りけるに姉のきよ水にてあらたなるしるし侍りけるを聞きて石山にこもりて「起こしけるひろき誓ひのなかにしも我が身ひとつのなど漏れにけむ」とよみ侍りける御かへしの夢の中にとなむ

かれ果てむ後をうらみよ埋木も花さく春もありとこそきけ

これは空蟬しらぬの内大臣の中宮の行方知らぬさまになり給ひ頭中将も世をかしこまる事など侍りける頃清水に籠りてかれたらむうゑ木もと經よみ侍りけるをききて「花さかむ事をいのりし埋木はさてだに朽ちてねさへかれめや」と思ひていさゝかまどろみて侍りけるにこの寺の師の大とくとおぼしきが申し侍りるとなむ

はかなしや夢ばかりなるあふ事に長き愁へをかへてしづまむ

これはかさぬる夢の大將いとせちに思ふこと侍りて法輪にこもりて行ひ侍りけるに夢うつゝともわき難き聲にてつげ侍りけるとなむ

しばしこそ堰もとゞめめ妹せ川つひに末には流れあひなむ

これは鳴戸の侍從いもうとの行方知らぬ事をなげきて鞍馬にこもりたりける夢に[illegible]侍りけるとなむ

○かれ果て　木の枯れ果てるに、思ふ人に離れ果てるを云ひ掛けた

○世をかしこまる　世を畏れ謹んでゐること。

○とゞめめ　末の「め」は助動詞「む」の變化。とゞめむに同じ。

ところ〳〵見ありき侍りけるころ法師の女の手をとらへて侍りけるに佛の宣ふやうにてに耳にいひいれ侍りける　　かくれみのの左大將

たもたずて過(あやま)つとがをみる時ぞ教へし法もくやしかりける

八月十五日夜によみ侍りける　　雪のうちのひじり

いかでなほ鷲のみ山にすむ月をこの見るばかりさやかにも見む

かへし　　うめつほの女御

はれがたきいづくの雲をはらひつゝ君ぞ心の月はすむべき

なき人のために普賢菩薩つくりあらはし奉りておこなひ侍りける夜あかつき方の月くまなうさし入りて御かざりどもきら〳〵見え給ひければ　　風につれなきの關白

誓ひあらばかかる光をさし添へてまよはむ闇を照らさざらめや

きよ水にこもらせ給ひけるにむれのみてはたてまつりぬといふ夢み給ひて賀茂にまうでさせ給ひて院の御車にたてまつるとて　　ちくまがはの女院

夢の中に授くと見えしむねのみての誓ひたがはぬ時至りぬる

おなじ寺にこもりて思ふ事かなふさまに侍りければ　　戀に身かふる頭中將

あなたふとかれたる木にも花さくととける誓ひは今ぞ知らるゝ

○たもたずて　僧の戒律を保たないでといふこと。
○くやしかりけり　悔い歎くこと
○鷲のみ山　近江國に在る。天竺にもある。往昔、釋迦牟尼の道を說いた處。後拾遺集「わしの山へだつる雲や深からむ常にすむなる月を見ぬかな」
○御かざり　普賢菩薩の御飾をいふ。
○あなたふと　噫たふとし。「あな」は感歎詞。
○かれたる　枯れるに離れるを云ひ掛けた。

雀のものがたりの中に方便品若人散亂心乃至以一華供養於畫像漸見無數佛

何となく手向けし花の一ふさにかずの佛をみる身とぞなる

人記品

かれ果てて深き山への埋れ木に思はず花の咲きにけるかな

觀持品

心ぐま我は隔てて思はぬになにゆゑ人の恨みがほなる

神力品

いひおきしこの言の葉を思ひ出でてなからむ跡の形見にもせよ

院のふだん御經ちやう聞して侍りけるにいづくか殊にたふときと人の申し侍りければ　あまのもしほびの院新中將

水の沫の浮かではかなき世の中を厭へと說ける法ぞうれしき

兵部卿のみこのはてに樣かへ給はむとて　なみのしめゆふの冷泉院女一宮

涙のみくもる袂にかけて見よこころものうらの玉や濁さむ

女院の御ことにここち限りになりて侍りけるにいのりの僧の若人有病得聞是經といふわたりをよむを聞きて　いはでしのぶの一條院内大臣

○かずの佛を云々　手向けた一華の善果に依つて極樂淨土へ行かれると云ふ意である。

○心ぐま　心の隅を云ふ。

○この言の葉　この歌を指して云ふ。

○かけて見よ　量り比べて見よと云ふ意である。

○玉や濁さむ　折角の美しさを汚すとの意。

○限り　きはまること。臨終を云ふ。

聴きえたる御法のかひもあらじかし絶えにし人に限るいのちは

なにはえの宮に八講おこなひて聴聞せさせ給ひけるに　おのれけぶたき右大將

君が爲つとめもとめてこと更にひろむる法の心しらなむ

この世を別ればやのほいもさすがなる身の程に思ひわびて車にのるとて　水あさみの內大臣

何せむに思ひの家を惜しむらむみつの車にのりを願はで

經よむは忌むなりと人のいひければ　あまやどりの女御

高瀨舟のりも知らではしら浪のきえなむ後ぞ悲しかるべき

右大將の母のために宇治に堂たてて供養し侍りてよめる　ひぢぬいしまの關白

さりともと頼まるゝかなさしわたる御法の舟の道のしるべは

をはりにのぞみて善知識の心にかなふべき事とて七重寶樹のありさまなど說き聞かせ侍りければ　あれまくの大納言大君

七重なるうゑ樹を知らでもみぢ葉のやしほになどか心染めけむ

いり日を見はべるとて　つゝらこの式部卿宮北方

極樂を思ひやりつゝ今いくか西にいりひの影をたのまむ

さがの池の中宮の御數珠をとりて半座のうへにてかへし奉らむとて

○つとめもとめて　佛道に精進する事をいふ。
○ほい　本意。
○みつの車　三車。佛の道と云ふに同じ。この語は、法華經にある譬の語で、羊車、鹿車、牛車といふ三車を云ふ。月詣集「この世をばうしと心にかけつればみつの車に導かれなむ」
○のり　法に、乘りを云ひ掛けた。
○高瀨舟　河舟の小さくて底の淺き舟。玉葉集「修行し侍るとて高瀨舟に乘りてよみ侍りける。いづくとも指しても行かず高瀨舟うき世の中を出でしばかりぞ」
○善知識　善き道に導く尊き法師の稱。
○七重寶樹　佛語。黃金の根、紫金の莖、白銀の枝、瑪瑙の條、珊瑚の葉、白玉の華、眞珠の果、の七重竪立した寶樹を云ふ。
○やしほ　八入。染汁に幾度も入れて染めるを云ふ。

かやがしたなれの關白

同じ世のつらさもさてや忘れなむともとまつべき契りくちずば

大僧都御加持にさぶらひけるに扇にかきてさしいでさせ給ひける

あまのもしほびの皇太后宮

結びつるたゞかばかりをかごとにて沈まむ後の世をだにもとへ

だいしらず　　みふれの皇后宮

幾度かゆきては返るむつの道くるしみならぬ處あらじを

いひわたり侍りける女の佛事しけるに捧げものてうしてつかはし侍るとて

さがのの二のみこ

せばからぬ蓮の花と聞くものをもらすべしやはかゝる露まで

かへし　　中務卿のみこのむすめ

濁りなき池の蓮の花なればこの世の露はすゑぬなるべし

おこなひなどし侍りけるを妨げゆく末ながきことをちぎりける人に

こゝろ高き後冷泉院の宣旨

この世にはゆく末とても限りあるを長く蓮のうへを契らむ

おこなひすとてれぶると人の笑ひければよめる

うたゝねのかつらの尼

○かごと　嘆きなどを、そのものの仕業のやうに云ひなすを云ふ。

○むつの道　六道。冥途の行きわかるべき道で、地獄、餓鬼、畜生、人間、天人、修羅の六つを云ふ。

○いひわたり　言渡。交渉のあつたこと。

○すゑぬ　据ゑること、坐らすこと。

きえぬべき露のわが身を夢にてもはちすの上に置くやとぞ思ふ

しのびて物申しける女の亡くなりてつみ深きさまにみえければ世をのがれておこなひて思ひつゞけ侍る　　かばれたづぬる三のみこ

うきしづむ池の水屑となし果てて空にひらくる花ときかばや

住みわたりける女かくれてのち曉の念佛の回向にもいま更もよほされ侍りければ女の母に申しつかはしける　　おひすみくろしきの內大臣

いつかまた蓮のうへにあひも見む露のやどりに心まどはで

式部卿の宮の北方

今はとて蓮のうへを思ふにも露けきは猶この世なりけり

さまかへてのちよみける　　いせをの前關白三君

にごりなき蓮のうへの露ばかりいかでこの世に心とゞめし

さごろものみかどあすかゐ亡せにけりときかせ給ひてのちの事など弔はせ給ひてうちまどろませ給へるに在りしながらの樣にてみえ奉りけるうた

物語三下
くらきより暗きにまどふ死出の山とふにぞかかる光をもみる

わらはにて心とゞめたりける女の暗くておそろしきにしそくさしてと

○死手の山　冥途の山。古今集「しでの山麓をみてぞ歸りにしつらき人よりまづ越えじとて」○しそく　指燭、紙燭、紙を捻りて油などつけて燈す。蠟燭の代りに用ゐる物。

○印　眞言宗の僧の、灼を觀ずる時、咒文を稱へて兩手を組むを云ふ。

いふと夢に見てなくなりにけるにやとて光明眞言よみてその印結びて思ひやるとて

あまのもしほびの大僧正

なか空にたゞよふ闇は深くとも光をかはせ山のはの月

あづまの方に修行し侍りけるに頼義朝臣が攻めけむ衣川のたちに思ふ心ありて卒堵婆たてなどして

すくはむと思ふ誓ひをたておけばうべも佛のすがたなりけり

入道前關白太政大臣さがにてわづらひ侍りけるに行幸ありて常行堂のみあかしの事などおほせくださせ給ひてまよせ給ひける

有明のわかれのみかどの御歌

末の世を久しく照らせ挑げおくけふの行幸の法の燈火

風葉和歌集　巻第九

離　別

中宮のをさなくおはしましけるぐしきこえでむすめのみやこに上り侍りけるによめる　　源氏のさきのはりまのかみ

松風
行くさきをはるかに祈る別れ路にたへぬは老の涙なりけり

おなじ中宮六條院にわたり給ひけるときよめる　　あかしのうへ

薄雲
末とほき二葉の松に引きわかれいつか小高きかげを見るべき

をさなきむすめを都におきてあづまへ下り侍りけるによめる　　讀人しらずのしま

思はずなまだ二葉なる姫小松ひき別れゆく歎きせむとは

よし野に侍りけるころあれを關白のむかへ侍りければ父みこ別れ惜しみ侍りけるついでに　　いまとりかへばやのよしののみこの中君

物語四
いづかたに身をたぐへましとゞまるも出づるも共にをしき別れを

○思はずな　「な」は願ふ意を表はす時の感歎詞。
○姫小松　自分の娘を譬へて云ふ
○たぐへまし　伴ひ行きたしといふ意。「まし」は、動作を未來に計りて云ふ助動詞。やゝ願ひの意を含めて用ゐる時もある。

須磨にうつろひ給はむとする頃きやうだいに寄り給ひてこよなうこそ衰へにけれとて　條院御六うた

須磨　拾　百番歌合八十六番
身はかくてさすらへぬとも君があたりさらぬ鏡の影ははなれし

かへし　むらさきのうへ

須磨　拾　百番歌合八十六番
別れてもかげだにとまる物ならば鏡を見ても慰めてまし

そのあかつきになりて　六條院御歌

同上
生ける世のわかれを知らで契りつゝ命を人にかぎりけるかな

御かへし　むらさきのうへ

同上　百番歌合四十六番
惜しからぬ命にかへて目のまへの別をしばしとゞめてしがな

中納言もろこしへ思ひたち侍るとていとまきこえけるに月いと明かかりければ　はま松の東宮

いかばかり涙にくれて思ひ出でむ西に傾く月を見つゝも

御かへし

古郷のみかさの山を思ひいでて我もいかゞは月を見るべき

参議うぢたゞ遣唐のそへつかひにわたり侍りけるにしたひ下りてまつらの宮にとまりてよみ侍りける　まつらのみやのあすかのみこ

○西に傾く　唐に行く人を、月に擬へて云ふ。

○古郷の歌　古今集「天の原ふりさけ見れば春日なる三笠の山にいでし月かも」を指したのであらう。

物語上
けふよりや月日の入るを慕ふべき松浦のみやにわが子まつとて

同じたびかの宰相にしのびてつかはしける　かむなびのみこ

同上
もろこしの千重の波間にたぐへたる心も共に立ちかへりみよ

もろこしに渡るとて道より女のもとにつかはしける　はままつの中納言

かさねけむ事ぞくやしきから衣袖のみ濡るゝつまとなりけり

かへし　山の僧正の母

から衣たち離れなば我のみぞうらむる袖もくち果てぬべき

すまひの節すぎて筑紫にかへり下らむとてすけの中將のもとにまかりてよめる　すまひの修理のすけ

數ならぬ身こそゆくともしたがはね心は君にたちも離れじ

かへし　右中將

とゞむるも心はみえぬ物なれば猶おもかげぞ戀しかるべき

あけむ年も又のぼるべき由など申して

都いでてまた來む秋の空までもおぼつかなくぞ待ちわたるべき

かへし　修理亮

なか〳〵に都の月をみそめては心つくしにわれぞながめむ

○月日の入るを　異郷の空に見る月日の入る樣と、早く月日の經つて、任はてて歸り來た意とを云ひ掛けた。

○かさねけむ　契りを重ねたといふ意。

○つま　緣に妻を云ひ掛けた。

○たち離れなば　唐へ、發ち離れるに、衣の、裁ち離れるを云ひ掛けた。「裁ち」は、上の、「から衣」の枕詞から受けたのである。

○すまひの節　相撲の節は禁中に催される七月の公事。

○つくしに　盡しに、筑紫の國を云ひ掛けた。

石山にこもらむとて出で侍りけるあかつきに女に　みなせ河の左中将（大イ）

今こむと思ふものから心をばとめてぞ出づるあかつきの月

かへし　入道一品宮中納言

かへり來む程をも待たずきえはてばこの曉や限りなるべき

もろこしより歸りわたり侍りけるにかのくにの人どもおくりにまで來てふみつくりなどしけるついでによめる　はままつの中納言

物語二
おなじよのしばしの程と思ふだに別れてふ名はいかゞ悲しき

かへし　もろこしの宰相

同　拾百番歌合三十三番
あふごなみ雲のきはめを隔てにていつともあらじ君を戀ふらく

あすかのみこを筑紫におきてかへり上るとてよみはべりける　まつらのみやの大將冬明

物語上
知らざりし別れてそへる別れかなこれもやよゝの契りなるらむ

かへし　あすかのみこ

同上
いかなりし夜々の別れのむくいにて命にまさる物思ふらむ

參議っちたゞかへりわたらむとし侍りけるによませ給ひける　まつらのみやもろこしの后

○あふごなみ　また逢ふ期はなくなる。

〇身をわけて　體を二つに分けてといふ意。

〇つげの小櫛　告げに、黃楊を云ひ掛けた。萬葉集九「君なくばなぞ身よそはむくしげなる黃楊の小櫛もとらむと思はず」
〇せきこゆ　關を越ゆるに、淚のせきくるを云ひ掛けた。

物語下
秋風の身にしむ頃を限りにて又あふまじき世の別れかな

かへし

同上
ゆく舟のあとなき方の秋の風わかれてはてぬ道しるべせよ

つくしに下る人にのたまはせける　おちくぼの中宮

物語下
惜しめどもしひて行くだにある物をわが心さへなどかおくれぬ

かへし　大納言たゞよりの四君

同上
身をわけて君にし添ふるものならば行くもとまるも思はざらまし

吹上に人々まうで來て日ごろあそびてうづきの朔日頃にかへり侍りければよめる　中納言すゞし

吹上ノ上
語らはぬ夏だにも來るけふしもや契りし人の別れゆくらむ

齋宮をきこえ給ひぬときこし召してよませ給ひける　ひとる（りごとイ）かたのみかどの御歌

別れてふつげの小櫛もさしてしを又せきこゆと聞くぞ悲しき

みや仕へに出でたち侍りけるにあれのふる里にとゞまりて侍りければ　すゑはの露の中納言典侍

拾　百番歌合九十五番
忘るなよ心にもあらで別れぬるこの夕暮ぞかたみなるべき

母御息所のすみ侍りける所をほかへうつろひ侍るとて　しのぶぐさの先帝姫君

なき人のかたみと見つる宿をさへ又別れぬるけふぞ哀しき

をとこの心かはれるさまに侍りければ外にわたるとてかのをとこのいもうとなる人に　ゆめぢにまどふ大納言女

ゆく末にたち返るべき身なりせば別れもかくは思はざらまし

かへし　関白のむすめ

千年まで住むべきものを君がため別れといふ名はかけずもあらなむ

左大將眞野の浦にこもりゐて侍りけるころまかりてかへるとてよめる　女すゝみの中宮權大夫

君をおきてかへらぬ旅の空にだに露けかるべき袖の上かな

心ぼそくおぼえけるころ少しへだゝりぬべき人に　みなせ川の入道一品宮中納言

風をまつ露のいのちはえぞ知らぬたゞ假初の別れなりとも

たゞにもおはしまさざりけるにほど近くなりていでさせ給ふとて　風につれなきよしのの院中宮

物語／かり初と思ふべきかは別れなばさだめなき世の命まつまに

宇治にすみ侍りけるが心ならず都へいづとて　宇治の河なみの式部卿宮北方

いのちをぞ限りと思ひし宿なれどさらで別るゝ方もありけり

○わたる　移る。

世の中はしたなきことどもありて女二宮うちにいり給ふにきこえける

みなせ川の左大將

なにせむとさらぬ別れを嘆きけむかかる限りの道もありけり

ちゝ大貳になりて具して下り侍りける女をえとゞめ侍らでよめる

つゆのやどりの權大納言

行末のさらぬ別れを思はずば嘆かざらましこゝろづくしを

つれなかりける女の筑紫へ下りけるにこがれしてかまど山の型を作りてあたりをこがしてをとこのうちみあげたるをつかはすとて

いはやの左兵衞督

かまど山もゆる思ひもひとしくて我は煙に立ちおくれぬる

かれのつかひにて陸奥に下りてのぼりけるにかしこなる女に

うらみしらぬの所の衆

花がづみかつ見てだにも戀しきに淺香の沼をいかでゆかまし

天の迎へありてのぼり侍りけるにみかどに不死のくすりたてまつるとて

たけとりのかくやひめ物語

今はとてあまの羽衣きるをり(ときイ)ぞ君を哀れと思ひ出でける

御かへし

○はしたなき　寄る邊なし、頼りなし、情なし等に云ふ。

○さらぬ別れ　遁れ難き別れ。

○かまど山　竈山。筑前國に在る六帖「都より西にありてふ竈山けぶり絶えせぬ戀もするかな」

○花がつみ　花勝見。水草の名、花あやめに似てゐる。

○きるをりぞ　天へ迎へられてゆくのを云ふ。

同上
あふことの涙にうかぶわが身には死なぬ薬も何にかはせむ

とて不死のくすりもこの御うたに具して空近きをえらびふじの山にてやかせさせ給へりけるとなむ

風葉和歌集　巻第十

羇旅　三

あふさかを越ゆるとてよめる

かへし　　按察大納言女

諸共にたたましものをよそにのみ聞くぞかなしき志賀の浦波

伊勢のみてぐらの使にて下りけるとき鈴鹿山にてよみ侍りける　　よその思ひの關白

まだき秋のしぐれ降りぬる鈴鹿山ならはぬ袖に色ぞうつらふ

あづまへまかりける時みちにてよめる　　のじまの三位中將

物ごとにあはれなりける旅の空いづれと人に語らむ

讀人しらず

ながめ侘ぶる旅のあはれの限りかな月かげかすむ曙の空

○鈴鹿山　伊勢國鈴鹿郡に在る。

○まだき　時に先だつこと。

うちなげきいく宵々の草まくら末こそ露はふかくなりけれ

だいしらず　　右大將仲忠

たび人の日もゆふぐれの秋風は草の枕の露もほさなむ

とりかへばやの新中納言

拾遺歌合八十九番
あさぼらけゆふつけ鳥ともろ共になく〳〵こゆる相坂の關

石山にまうでけるに逢坂をすぐとて　　風につれなき兵部卿のみこ

又こえむ人にも語れあふ坂の關のしみづは袖に濡れしと

陸奥に下らむとてしはつといふ所にとゞまりて侍りけるに水うみのおもてに月のいみじう明かきを見ても思ひいづることおほくて

あさくらの皇太后宮大納言

知らじかし沖より遠(をち)にかけはなれ見し有明の月をこふとは

母そひていせに下るべきにて侍りけるにわづらふ事ありて留りにければ近江たち給ふ日つかはしける　　ひとりかとの齋宮女御

あふみてふ名を頼めども獨りけふ立つはかひなし志賀の浦波

色そむる木の葉はまきて旅人の袖にしぐれの降るぞわびしき

野島にまかりて月まちいでたる折しも鹿のなきけるに思ひいづること

○草まくら　旅寢を云ふ。

○ゆふつけ鳥　木綿著鳥、鷄の異名。世の中に騷亂ある時に四境の祭として、鷄に木綿を著けて京城四境の關に於いて祭らせるを云ふ　古今集「逢坂のゆふつけ鳥もわが如く人や戀しき音のみ鳴くらむ」

○石山　近江國に在る。

○知らじかし　「かし」は、念を押して云ふ意の時の感歎詞。

○あふみてふ　逢ふ見に、地名の近江を云ひ掛けた。

○野島　淡路國にも安房國にも在ると云ふ。

○面影を云々　別れ來た人の面影を月になぞらへて云ふ。
○をじか鳴くなり　牡鹿の鳴くを上の「名殘」に通はして、惜しに云ひ掛けた。
○このはの衣云々　木の葉を衣とし、苔をむしろとしてわびしく寢るとの意。
○なにしおはば　古今集「名にしおはばいざこと問はむ都鳥わが思ふ人はありやなしやと」に寄せていつたのであらう。

侍りければよめる　　のじまの三位中將
面影を浪よりいづる月に見てあかぬ名殘ををじか鳴くなり
笙のいはやにこもりてよめる　　はなの宰相のみご律師
遠ざかるいはやの中の旅寐にはこのは（をイ）の衣苔の（をイ）さむしろ
旅に侍りける夜ふる鄕の女の夢にみえ侍りければ　　ひぢぬいしまの內大臣
古鄕のながめやすらむ草まくら旅の夢にも見ゆる面影
吹上よりかへらむとし侍りけるにみやこ鳥のなくを聞きて　　うつぼの右少將仲賴
（吹上ノ上）なにしおはばせきをも越えし都鳥こゑするかたを百敷にして
兵衞佐に侍りける時さつまの國にうつされけるに伊豫のみなとといふ
所にてみやこ鳥をみてよみ侍りける　　あだなみの中關白
（一本菊物語中）都鳥戀しきかたの名にはあれどわがふる鄕の言づてもなし
こゝろにもあらずふる鄕をはなれてさすらへけるに初鴈のなくを聞き
て　　ふせやの關白北方
鴈がねよしばしとまりて旅の空こひ鳴くかたの物語りせよ
住の江に侍りけるを關白にいざなはれて都に上りけるに霧のたえまよ
り松の木ずゑはるかにみえければ　　すみよしの關白

はかなくて我がすみなれし住のえの松の梢のかくれぬるかな

すまより明石にうつろはせ給ひてみやこなる人につかはさせ給ひける　六條院御うた

明石 拾 百番歌合三十一番
遙かにも思ひやるかな知らざりしうらより遠(をち)に浦傳ひして

えがたかりける女のゆゑにすまにこもりゐて侍りけるころかの女のもとにつかはしける　はつねの入道太政大臣

引きかさねうらみし袖の涙にもいとかくばかりしづまざりしを

父に具してつくしへ下りけるに舟子どものあら／＼しきこゑにてうらがなしくも遠く來にけるかなとうたふを聞きてこひしき人もありければよめる　源氏のさきの小貮女

玉葛
舟人もたれを戀ふとかおほしまのうら悲しげに聲の聞ゆる

つくしより上るとて　玉かつらの内侍の督

同上
行くさきも見えぬ浪路に舟出して風にまかする身こそ憂きたれ

もろこしへわたりける道にて　松浦宮參議氏忠

松語上
天の原おきつしほあひに泛ぶ泡を伴ふ舟の行方しらずも　參議安倍仲丸

○うらみし　恨みに、裏見ゐ云ひ掛けた。

○おほしま　思ふを、大隅國の大島に云ひ掛け、それを序として「うら悲し」とつゞけた。

○浪路　海路に譬へ云ふ。

○おきつしほ　沖津潮。沖の潮と云ふに同じ。
○あひ　間。

同上
かすがなる三笠の山の月影はわが舟のりにおくりくらしも

世の中いとわづらはしき事ありて高麗といふ國にはなち遣はされける途にてよめる　ゆめがたりの宰相中將

なみ枕しらぬ旅寐のかなしさにいく世を限る道の空ぞも

つくしへかへり下りける道にて海のわたりを下りてみる貝などをてまさぐりにして右中將のなつかしうかたらひしを思ひ出でて　すまひの修理亮

漁りつるあら磯よりも都にてみるかひありし君ぞ戀しき

舟よりおりたるに浪の高くうちかくればよめる

來し方も又ゆくさきも遙かなる浪の中にもまじりぬるかな

もろこしにてふる里の女を夢にみて　はま松の中納言

物語 拾 百番歌合二十一番
日の本の三津の濱まつ今夜こそ夢に見えつれ我を戀ふらし

秋の夕をながめて

同上
おく露も霧たつ空も鹿のねも雲ゐの鴈もかはりやはする　ちぎりけり物語

おなじ國にて月をみてよめる　まつらのみやの參議氏忠

物語中
見るごとに姨捨山の歎そひて知らぬさかひの月ぞ悲しき

雨のふる日

○みるかひ　海松貝に、見る甲斐を云ひ掛けた。

○三津　攝津國に在る。

○おく露も云々　何處の空とて秋の風物の殊更に變つたところがあらうか、變りはしない。と表面いひ放つたところに、旅の風物の一きは身にしむことを現はした歌である。

○姨捨山の歎そひて云々　古今集「わが心なぐさめかねつ更級や姨捨山に照る月をみて」とある歌の意をどれ程歎へ加へても、この異郷の空で眺める月の方が悲しいと云ふ意。

知らざりし思ひをたびの身にそへていとゞ露けきよるの雨かな

風葉和歌集　巻第十一

哀傷

父みこのおもひにおはしましけるに年もたちかへり侍りにければ

いはでしのぶの皇后宮

いかなれば暮れても年の歸るらむ別れはいとゞ月日隔てて

おなじころ皇后宮にきこえ侍りける

關白

あらたまる春につけても墨染の袖に霞の色やそふらむ

母がおもひに侍りけるころ梅壺の紅梅のおもしろさを見てよめる

われからの兵衛佐ィ

霜がれし冬の枝ともみえぬかな戀しき人を花になさばや

關白中宮の母におくれてなげき侍りける頃梅の花につけてさしおかせける

かやがしたなれの宣耀殿少納言

あはれとて見る人からや萎るらむ花は物うき色ならねども

○おもひ　喪中。

○墨染の袖　喪に居る事を云ふ。

○見る人からや　見る人ゆゑに、「や」は强めの詞。

かしは木の權大納言みまかりて後すみ侍りける處の櫻のいとおもしろきをみて　夕霧の左のおほいまうち君

柏木
時しあればかはらぬ色に咲きにけり片枝かれにし宿の櫻も

彌生の朔日ころ春院に行幸ありて花のさかりを御覽ずるにも故院の御賀の折おぼしめし出でられければよませ給ひける　みかきがはらの春院御うた

萬世とたのみし君は霞にて花こそ春の色はかはらね

御かへし　皇太后宮

みしをりの花は匂ひもかはらねど人ぞ昔の春となりぬる

さがの院かくれさせ給ひての春きさいの宮だちのおはします所にすみ侍りける春のかたの花ざかりいにしへにかはらぬを御らんじて　八條院御うた

幼　百番歌合六十三番
今はとてあらしや果てむなき人の心とゞめし春の垣根を

かしは木の權大納言身まかりて後夕の雲のけしきにび色にかすみて
花のちりたる梢どもを見て　源氏の致仕太政大臣

柏木
木のしたのしづくに濡れてさかさまに霞の衣きたる春かな

紅梅右大臣

同上
うらめしや霞の衣たれ著よと春よりさきに花の散りけむ

○霞にて　春の霞のはかなきに、人の命に譬へ云ふ。
○あらしや　あらじに、嵐を云ひ掛けた。
○にび色　染色の名。色の錫のやうなのを云ふ。
○した　下に、心のうちを云ひ掛けた。
○花の散り　亡くなつた人を指す

○みあれ　陰暦四月の中の申の日に當る賀茂の祭をいふ。
○しかま　飾磨。播磨の國に在る

○御服　御は敬稱。喪中を服と云ふ。

さがの院かくれさせ給へりけるころまつりの日一とせ使して侍りしな思ひいでてかのふるき院にきこえ侍りける　かやがしたなれの按察典侍

ありし世のけふのみあれを思ひ出でて神の齋垣もかなしかるらむ

一條の大おほいまうち君かくれ侍りてのころ菖蒲につけてしかまの太政大臣のもとにつかはしける　はつれの入道太政大臣

袖よいかに干るまもあらじ夏衣さらでもかかるねをとどめつゝ

むらさきの上かくれ侍りて後ほとゝぎすの鳴きけるをきかせ給ひて　六條院御うた

な（幼）き人をしのぶる宵のむら雨に濡れてやきつる山郭公

女二宮の忌にこもり侍りてほとゝぎすの鳴きわたるも催す心ちして　あさくらの關白

時鳥こと語らひし君ならで忍びもあへず鳴きわたるかな

御服におはしましけるころ人の御返事に　ねざめの中宮

さらでだに涙ひまなき墨染の袖におきそふ秋の夕露

むらさきの上はかなくなり侍りける秋夕ぎりのおとゞの母のかくれにしもこの頃の事ぞかしと思ひいでられて六條院にきこえさせ侍りける

贈法　百番歌合六十六番

いにしへの秋さへ今の心ちしてぬれにし袖に露ぞこぼるゝ　おきそふ物語

致仕太政大臣

一條院かくれさせ給へりけるに冷泉院の一品宮とぶらひ給へりければ

玉もにあそぶの一條院女一宮

ありとてや人のとふらむ消えはてて露もとまれる草の原かは

袖ぬらすの女院

弘徽殿女御わづらひ侍りけるに御こゝろも例ならで遣はされける

とゞまらば草の原まで訪はましをあらそふ露の哀れなるかな

おなじ太政大臣

宣旨なくなりて後女院にまゐりてよみ侍りける

ありし世の草の原ぞと見るからにやがて露とも消えぬべきかな

左のおほいまうち君も身まかりて後女の思ひに侍りける人のもとに淺

うつぼの左大臣北方

茅につけて遣はしける

忠こそ

こゝのみや淺茅は茂きと思へどもまた葎おほす宿もありけり

かへし、ながき葎に

橘右大臣

同上

人はいさかなしとぞ思ふ頼めおきて露の消えにし宿の葎は

御こゝち限りにおぼえさせ給ひけるに女御に宣はせける　女すゝみの先帝御うた

○ありとてや　ありとしてもの意
○草の原　墓所を云ふ。
○かは　疑ふ意の言葉。

○あらそふ露　露の命といふ意から、いま生死の境に立たせられてゐる身を云ふのである。

○ありし世の云々　現世の果敢なさを云ふ。

○葎おほす宿　葎が育てられたやうに生ひ茂つてゐる宿。

○人はいさ　人は知らず。
○露の消えにし宿　人のうせたる宿といふ意。

はかなくも契りけるかなあさぢ原葉末の露の常ならぬ世に

ねざめの關白

まねけども君なき宿は花すゝき涙さへこそとまらざりけれ

白河院の皇后宮かくれさせ給ひて秋女院の御かたにまゐりてひもとき
わたれる花の色々もこの秋うらみまほしうて　いはでしのぶの關白

みし人はあらしに迷ふ野邊の露よもの草木も萎れだにせよ

入道關白みまかりて侍りけるにうちにこもりゐてよめる

風につれなきの太政大臣

秋ならであらましだにも山里の君なきあとの夕暮の空

關白

哀れいかに人はふりにし山里に秋をなごりの夕にはして

左大臣

わきてこの露をば袖にかけよとや秋を名殘にとゞめ置きけむ

きりつぼの更衣うせてのち月の明かなりける夜ふるさとをおぼしめし
やらせ給ひてよませ給ひける　さか本の院の御歌

桐壺　百番歌合五十四番

雲の上も涙にくもる秋の月いかですむらむ淺茅生の宿

○ひもとき　花の莟を開くこと。

○人はふりにし　人は既に逝つて居ないと云ふ意。

○雲の上　亡くなつた人が雲上人であつたので云ふ。

八月十五日三位中將の母におくれ侍りて一めぐりの果てに出家し侍らむとて

かやが下をれの大將

限りなく憂かりし秋の半こそ且はうれしき月日なりけれ

宇治のあれ君の忌にこもりて侍りけるに月くまなかりける夜よめる

かなる大將

總角

おくれしと空ゆく月を慕ふかなつひに住むべきこの世ならねば

しのびて通ひ侍りける女の亡くなりにける後にまかれりけるに蟲のなきければ

かばれたづぬる三のみこ

今更に心とめじと思ふ世に惜しみがほなる蟲のこゑかな

女のおもひに侍りけるころ弱りゆくきゝ〳〵すのこゑも心ひとつなとふ心ちして

なが月のわかれの式部卿のみこ

別れにし秋も末はの蟲の音におのがよすがの露や悲しき

中納言身まかりにける法事を秋の末つかたにし侍りけるに

ゝのふぐさの關白

行方なき別れの空にくらぶれば過ぎぬる秋はことの數かは

十月ばかり前坊の御服ぬぎ侍りけるに空のけしきも思ひしりがほにうちしぐれければ

なげきたえせぬ麗景殿女御

○且は云々　且は、また、その上に、傍ら等に云ふ。出家する日を迎へた事を云ふ。

○空ゆく月　亡くなつた人に譬ふ

○心ひとつ　心ばかりと云ふ意。

○よすが　便り、縁り、處などを云ふ。

○前坊　前の春宮を指す。

○御服ぬぎ云々　御喪中の果てたるを云ふ。

朽ちはつる袖をかへてもしぐるればいつか干す間のあらむとすらむ

左大將身まかりける頃しぐれのする日女院にきこえ給ひける

末葉の露の一品宮

歎きつゝ眺むる空もかきくもりしぐるゝ袖や涙なるらむ

御かへし

しぐるなる空だにも見ず堰きかぬる涙の河に身はながれつゝ

六條院の御いみ果てて東宮うちへいらせ給ひて殘る木の葉を思ひこそやれと宣はせたる御かへし

あしたづの前齋院

思へたゞ梢にのこる木の葉さへ散り亂れ行く心ぼそさを

四季ものがたりの中に

もみぢのきみ

思ひ出でて訪ふ人あらば山河のそこの水屑をあはれとは見よ

女三の宮のおもひに侍りけるころ夜もすがらながめてよみ侍りける

風につれなきの關白

思ひきや獨り寐られぬ夜半の霜はらはぬ袖に消えかへれとは

せうとの身まかりにけるを日頃さだかにも聞き侍らざりけることを思ひて雪のふる日よめる

すまひのとさのかみのむすめ

○ながれつゝ　泣かれるに、流れるを云ひ掛けた。

○梢にのこる云々　父君に別れ給ひし春宮の御心持を敍したのである。

○せうと　兄人。

人しれず消えにけむこそ哀れなれ世にふる雪を見るにつけても

女のおもひにて侍りけるに年の暮れはてぬるも驚かれて　　夢がたりの前關白

年くれて憂かりし日をば隔つれどありしにまさるわが涙かな

病おもくなりてまかでむとしけるにうべさりともうち捨てはえゆきやらじと宣はせけるに　　源氏のきりつぼの更衣

桐壺　百番歌合四十四番

限りとて別るゝ道の悲しきにいかまほしきは命なりけり

御こゝち例ならずおぼしめされけるに中宮に聞えさせ給ひける　　女すゝみのみかどの御歌

限りあらむ今一ときの命をば君にとゞむるこの世ともがな

御かへし

惜しむにもよらぬ命を今はたゞ慕ふに絶ゆるこの世ともがな

中宮をよその事に聞き奉りけるにこゝちかぎりになりてしのびて奉りける　　有明のわかれの內大臣

思ひおく君だに今は哀れしれこの世にかかる中はありやと

御かへし

いかなりしこの世のさきも辿られず思ひしる身ぞ置きどころなき

○ありしにまさる　その當時にも増してといふ意。
○うべ　げに、もつとも、ことわりにて等に云ふ副詞。
○いかまほしき　容易に望まれぬの意。

○わたり河　三途川に、渡るを云ひ掛けた。
○うき瀨　浮瀨に、憂きをいひかけた。
○この世のほか　來世を指して云ふ意。
○煙りけむ　亡骸はやがて煙になるのでさう云ふ。
○よそへつゝ　それとなくなぞらへること。
○立ちおくれ　死に遲れた事を歎き云ふのである。

病してよわうなりにける時しのびてをとこに申し侍りける

やみのうつゝの大納言更衣

頼めてもこの世はよしやわたり河後のうき瀨をとはむばかりぞ

心ちかぎりにおぼえ給ひて關白にしのびてつかはしける扇にかきつけられ侍りける

風につれなきの冷泉院一品宮

名殘とは知らずいづれの野山にも朽ちなむ苔のしたを尋ねよ

皇后宮にいさゝか近づきまゐりてさびしうかしとおぼしいでよと御耳にきこえおくとて

みかきがはらの宮大將

今はたゞそれかとばかり棚引かむ夕の雲の空をながめよ

この世のほかになりなばあはれと思ひなむと申し侍りける人に

はままつの左大將のむすめ

煙りけむ人を誰とも知らぬだに夕の雲はあはれならずや

女のゆくへ知られ奉らぬをおもほし歎きけるに果敢なくなりにけると聞かせ給ひて夕の雲かすみをかれにてこそのぼりにけめとながめさせ給ひて

よもぎがはらの春のみや

よそへつゝ眺むる空のうき雲に立ちおくれぬる身をいかにせむ

中納言のわざの夜よそに思ひやり侍りけるも人しれぬ心ざしかひなくて　　てしのぶくさの關白

時の間もおくれぬものとならび來て別れ路にしもそはぬ悲しさ

先帝の御わざの夜よみける　　女のすゝみの中將

限りあればそはぬ煙をよそに見て猶おなじ世に立ちやかへらむ

やがて頭おろして北山にこもりけるとなむ

あふひの上の果敢なくなりにけるを鳥部野におくり給ひてのち空のみながめられ給ひて　　六條院御うた

葵

上りぬる煙はそれとわかねどもなべて雲ゐるに哀れなるかな

おなじころ風あらゝかに吹きしぐれする暮れつかた六條院の御方ーまうでたるに雨となりにけむ今にしらずと獨りごち給ひければ　　致仕の大おほいまうち君

同上　百番歌合六十六番

雨となりしぐるゝ空のうき雲をいづれのかたと分きて眺めむ

冷泉院一品宮のわざの夜邊野のかたに雲の一むらたな引きたりければ　　風につれなきの關白

はかなしやそれかとばかり眺むるもむなしき空にきゆる白雲

○わざの夜　法事の夜。
○ならび來て　互に暮らして來た事を云ふ。
○別れ路　生死の別れ路を云ふ。
○煙をよそに見て　亡き人の煙になるのを餘所に見てと云ふ意。
○頭をおろして　頭髮を剃りおとして、尼になつた事を云ふ。
○鳥邊野　山城國愛宕郡に在る。人を葬る處。

○いにしへも今も　この前と今と二つの追憶を云ふ。
○ふく　喪中。
○染めぬ衣　喪服でない著物を云ふ。
○くろき衣　喪服。

○ふぢ衣　上の「涙」に淵を通はして、藤衣を云ひ掛けた。喪中には藤色の衣を著る。
○御ぞ　御衣。御は敬稱。

○ふち　淵に縁を云ひ掛けた。

○すきかげ　透影。すいて見える影。

年へて後おなじ野に女三のみこをおくりきこゆとて

いにしへも今もけぶりに立ちおくれなく／＼はらふ鳥邊野の露

世の聞えをはゞかりて一品宮のふくも著侍らでよめる

思へどもこはいかなりし契りにて染めぬ衣をそむる涙ぞ

冷泉院の大きさいかくれさせ給ひて一品宮のくろき衣にやつれ給ひけるを見ておとり聞えさすべくもなきにかぎりありけるこそとて

たまもにあそぶ關白

かきくらしおつる涙のふち衣きる人わける色ぞかなしき

あふひの上かくれて後にそめる御ぞ奉れるにつけてもわれ先だたましかばふかくそめ給はましとおぼされて

六條院御うた

葵

かぎりあれば薄ずみ衣淺けれど涙ぞ袖をふちとなしける

大きさいの宮いまだまゐり給はで入道關白のみやにおはしましける頃きこえさせ給ひける八のみこ隱れて後かをる大將まうで來てくろき几帳のすきかげも心ぐるしければ墨染にやつるゝ袖をと獨りごとのやうに侍りけるに

宇治のあね君

椎本　百番歌合八十九番

色かはる袖をば露のやどりにてわが身ぞ更に置きどころなき

せちに思ひける女のうせて侍りける後紫苑のきぬの侍りけるを誦經に
せむとし侍りけるに涙のかゝりけるにや色のかへりたるを見て　とこ中の關白
涙には衣の色もかへりけりなどや別れし人は見えぬぞ
入道攝政身まかりけるに權大納言のもとにつかはしける　露のやどりの中將內侍
思ひやる袖だにいまだ乾かぬに朽ちぬや君がけふの袂は
乳母のなくなりたる四十九日のわざし侍りけるにうちぎ遣はすとてか
きつけける　すみよしの關白北方
物語 から衣しでの山路を尋ねつゝわがはぐゝみし袖にかさねよ　をとひなむ物語
父の服ぬぎ侍るとてよめる　水あさみの承香殿女御
なき濡らすふぢの袂はくちにけりうき身ながらやぬぎも捨てまし
紫の上かくれ侍りける一めぐりの終りに扇にかきつけてはべりける
六條院中將
幼 君こふる涙はきはもなきものをけふをば何のはてといふらむ
これを御らんじて　院の御うた
同上 人こふるわが身も末になりゆけど殘りおほかる涙なりけり
しのびて內侍督のいろ（きイ）にて侍りけるをはてにもぬぎ侍らでよめる

○紫苑のきぬ　襲の色目の名。表は濃き薄色に、裏は青きもの、その衣。
○うちぎ　袿。女官などの衣の上裝束の下に著る物。
○くちにけり　歎きの涙で袖の朽ちたのを云ふ。
○きは　際。ほど、はて、かぎり。
○はて　果て、極み、終りなど。
○いろ　倚廬。喪の時に籠りてゐる處。

はつねのしかまの太政大臣

限りあればけふをばはてといふなれどわが身に染むる色は變らじ

中務のみこ身まかりて後むすめの許につかはしける　　さが野の頭中將

いかにして君をとはまし哀れてふ事をば人の古るしてしかば

前齋院の忌にこもりて侍りけるに皇后宮のとぶらひ宣はざりければ聞えさせ侍りける　　いはでしのぶの關白

とまる身の憂きにつけてや亡き人の哀れをだにも訪はれざるらむ

父の左のおほいまうち君こゝち限りになりてみかどのかゝる折だにあはれとも宣はせぬ事となげき侍りけるに亡せて後おほん文給はせ侍りける御返事にたてまつる　　うつぼの宣耀殿女御

（國讓）見し世にぞかくもいはまし歎きつゝ又はみる世のなきぞ悲しき（なくしでの山路をいかでこゆらむ物語）

兵部卿のみこ隱れてのちに夢にみえ侍りければ　　なみのしめゆふの淑景舍女御

夢のうちに見ゆる別れの悲しさもありし現に劣りやはする

大きおほいまうち君のすみ侍りける三條にわたりてすまひ侍りけるにやり水のみくさもかきあらためて心ゆきたるけしきなれば　　夕霧の左のおほいまうち君

○わが身に云々　たとへ喪が果てても自分は少しも變らぬ歎きにゐると云ふ意。

○古るしてしかば　たみ〳〵に云ひ古してしまつたからであると云ふ意。

○とまる身　殘つてゐる身。生き存らへてゐる身を云ふ。

○見し世　生きてゐた時の世を云ふ。

○又はみる世の云々　賜つた御文をさして、それをも見る世を失つたと云ふ意である。

○みくさ　水草。

汝こそは岩守るあるじ見し人の行方は知るや宿の眞清水

おほ君かくれて後宇治にまかりてやり水のほとりなる岩にゐて　かをる大將

東屋

たえはてし清水になどか亡き人の面影をだにとゞめざりけむ

しのびたる女の墓にまゐりて　おもかげこふる三位中將

とまる身のつれなかりける命かな思ひ消えなで道芝の露

やみのうつゝの大納言の母衣の墓の草しげく侍りけるに左大將のゆめにみえ侍りける歌

うらめしや往來の道となしはてて茂る草葉は拂ふともなし

贈皇后宮にうちとけずながら見馴れ侍りけるがかくれ給ひてのち軒のしのぶを見て　しづくににごるの中納言

まことには結びやはせし忍ぶ草などあやにくに露けかるらむ

權大納言のまかりて後をさなき子の侍りけるを見てよめる　露のやどりの辨少將

つみおきし忍ぶの草を見てもまづ哀れかたみとねをのみぞなく

暗中納言としかげ亡くなりて後よめる　うつぼの內侍のかみ

常陸に

わび人は月日のゆくぞ知られける明けぐれ空を獨りながめて

○思ひ消え云々　女の生きてゐた時の付つての思ひ出を云ふ。

○見馴れ　まだ深くは交際しなかつたの意。

○忍ぶ　忍草に云ひ掛けた。
○などあやにくに　「など」は副詞どうにも思ふやうにならずの意。

○忍ぶの草云々　忍草は苔の成長した草なので、幼き子に譬ふ。下の「ね」は、根に音を云ひ掛けた。

○さむるよなく　悲しみから覺むる時なくの意。

○露も　少しもと云ふ意。
○よしなき　はかなき。

弘徽殿女御かくれて後さむるよなくおぼしめしなげかせ給ひて御てならひに

女のすくせしらずの第一のみかどの御歌

悲しさはけふの別れの心ちして幾とし〳〵をながらへぬらむ

いもとの事をせちにおぼせとられけるにこの御手ならひをみて聞えさせ侍りける

右衛門督

とし經ぬる別れは露も慰までよしなき袖のくちや果てなむ

女におくれて年月ありて後かの女のね侍りける帳をうちはらひて臥すとて

うつぼの橘右大臣

年ふれど忘れぬ人と寐しとこぞ獨り臥すにも嬉しかりける

風葉和歌集　巻第十二

賀

今上一宮うまれさせ給へりけるうぶやしなひにちごの御ぞてうじてきこえ侍りける　　おやこの中の春宮女御

亀山の岩根の小松おひそひてこれこそ千世の初めなりけれ

いぬみやのうまれて侍りけるに　　うつぼの右大将なかただ

（藏開）みどり子の多かる中に二葉より萬代みゆる宿のひめ松

春宮のわか宮のいかまゐり侍りける夜よませ給ひる　　ひちぬいしまの朱雀院御歌

君が世の千年のはじめ今夜にて雲ゐにたづのすまむとすらむ

皇后宮うまれ給へりける七夜に女院よりちごのきぬに結びつけて「ちよふべき鶴の毛衣いつしかと雲ゐになれむほどをまちみむ」と侍りける御かへし　　末葉の露の關白母

生ひたちて雲ゐになれむ鶴の子の千世の契りも君のみぞ見む

○うぶやしなひ　産養。子の生れたる祝ひ事。三夜、五夜、七夜、五十日、百日などに祝ふこと。

○いか　五十日。子の生れて五十日に當る日、この日祝ひ事がある。

○鶴の毛衣　鶴の毛を混ぜて織つた衣。後拾遺集「雲の上にのぼらむまでも見てしがな鶴の毛衣とし經とたらば」

○きれる杖　竹を切つて杖に作るので云ふ。
○つぎて　次第。
○くらゐ山　飛驒國にある。拾遺集「位山峯までつける杖なればいま萬代の坂のためなり」を指して云ふのであらう。
○若葉の松　小兒を指して云ふ。
○いかに久しき　いか即ち五十日の祝にかけてゐる。
○おとね　乙子。正月の末の子の日。
○葦鶴　鶴の葦邊にゐるを云ふ。今はたゞ廣く鶴の事として云ふ。
○もゝか　百日。
○わりご　破子。食物を入れる器。

宇治入道關白むそぢの賀し給ひて　風につれなきの女院

君が世のなほ萬世と祈るかなあかぬ心はかぎり知られず

大納言たゞよりの七十賀のつゑのうた　讀人しらず

（物語）やそ坂を越えよときれる杖なればつぎてを上れくらゐ山にも

ちごのいか子の日にあたりて侍りけるによみて侍りける　われからの式部卿親王

今年生の若葉の松をためしにて千世の子の日にたれも引かなむ　侍従のめのと

けふよりはいかに久しき例をか子の日の松に引かむとすらむ

さがの院のきさいの宮の六十賀正月のおとれに女一のみこたてまつり給ひけるに御かざし小松の枝に鶴すゑて　うつぼのさきの內侍のかみ

（菊宴）己れだによはひ久しき葦鶴のねの日の松の陰にかくるゝ

いぬみやのももかおとれにあたりて侍りけるわりごども藤つぼの女御につかはすとて　おなじ仁壽殿女御

（藏開下）萬世のゆくへも知らず生ひいづる小松にけふはねの日しらすな

六條院よそぢにみち給ふ年をさなき子どもなど具して若菜たてまつるとてよみ侍りける　たまかつらの尙侍

○野邊の小松云々　まだ世に出ない子供を云ふ。
○もとの岩ね　先祖を云ふ。
○さかづき　酒宴を云ふ。
○けしき　氣色。
○腰結はせ　腰を結ぶ人。裳着の祝。裳着とは、男子の袴着に應して女子の裳を著そむる祝ひ事である。

若菜上
わか葉さす野邊の小松を引きつれてもとの岩ねを祈るけふかな

御かへし　　六條院御うた

同上
小松原すゑの齢に引かれてや野邊の若菜も年をつむべき

おほきおほいまうち君のむすめのうぶ屋にまかりて侍りけるにさかづきのついでに　　とりかへばやの中將

二葉より千世のけしきの著るきかな木高かるべき宿のひめ松

梅花笠
かすがの歌の中にときをたどらぬ松といふ事を　　うつぼの侍從忠風

みる人のよはひは千代のあなたをや緑の松は春と待つらむ

右大將うまれ侍りけるにちごのきぬつかはさるとて　　みかきが原の二品宮皇太后宮

かすが野の若葉の松やちぎるらむ峯の朝日の千代の光を

御かへし　　二品宮

契りおく峯のあさけの光こそ二葉の松の千代もてらさめ

宇治入道關白むすめどもにもきせ侍りける腰結はせ給ふとて　　風につれなきの冷泉院女御

いづれをも木高かれとて春日山松に千年をいはひそへつる

しほやき中將のはかまぎ侍りける夜よめる　　いはやの按察大納言

常磐山生ひそふ松の末のよは人より越えてこ高かるらむ

わか宮坊に定まらせ給ひて後うまれさせ給ひしよりのこと思ひいでられてよめる　　のちくゆる大將女御の大夫

祝ひおきし心も著るく高砂の松のこ高き末をみるかな

中宮のいかによみ侍りける　　ひいごかしづく內大臣

千年へむみどりの松の行末をみるべきほどの齡ともがな

中納言すゞしの吹上のふぢゐの宮にて藤の花の賀し侍りけるに藤の花なりて松の千年を知るといふ事をよめる　　うつぼのさきの紀伊守

吹上上
藤の花かざせる春を數へてぞ松の齡もしるべかりける

參議亘峯行尹

同上
圓居していづれ久しと藤の花かゝれる松の末のよを見む

やよひ二十日ごろ冷泉院の中宮きさきに立たせ給ひけるに池のなか島の藤の松にかゝりてなべてならぬにこれかれ歌よみ侍りける　　袖ぬらすの源中納言

松風も枝をならさぬ宿なればかゝれる藤の影ぞのどけき

うちのおとゞ

○はかまぎ　袴著。小兒の三歲又は五歲又は七歲になりて初めて袴をつける祝を云ふ。
○常磐山　山城國に在る。
○坊　春宮。
○高砂　播磨國に在る山。また催馬樂の曲の名。
○松のこ高き云々　春宮の前途をお祝ひ申す言葉。

影さへぞなべては見えぬ紫の雲たちそへる池のふぢ浪

關白をのこ女ごかうぶりしもき侍りける夜さかづきのついでに

ひちぬいしまの前關白太政大臣

二葉なる綠の松と見しものを枝しげるまでなりにけるかな

六條院御元服の折ひきいれのおとゞに御けしきたまはせ給ふ御さかづきのついでに

さがの院の御歌

桐壺

いときなき初元結に長き世をちぎる心は結びこめつや

うききの內大臣なさなく侍りけるを入道太政大臣に申しつけ侍るとて

はつれのしかまの太政大臣

諸共におなじ梢をみどりなる松に千とせの影をならべよ

かへし

小松原二葉ながらに引きうゑて千世をならべむ影をこそ見め

むすめのはかまぎに中宮腰ゆはせ給ふとて雲ゐまで枝かはすべきと宣はせける御かへし

かはぎりの中宮新中納言

雲居まで生ひ上るべき若松のこや枝かはす初めなるらむ

中宮のねあはせに

讀人しらずあふさかこえぬ

○雲たちそへる云々　女御の中宮になつた事を喜び云ふのである。

○かうぶり　加冠。元服をすること。

○枝しげる　成長した事に云ふ。

○初元結　元服のこと。

○見め　見む。「め」は助動詞。むの變化。

○こや　これや。

○ねあはせ　根合。あやめの根の長き短きを鬪はせる遊び。

○九日の宴　菊の宴を云ふ。
○こもればか「か」は疑ひ、また問ひをかける言葉。
○露の底より　衷心からと云ふ意
○布達　禁中からの布告。

堤中納言
君が世の長きためしに菖蒲草千尋にあまる根をぞ引きつる

相撲節の日倚侍まゐりて琴ひき侍りけるにいかでかそこにも此處にもよはひ久しくてなどのたまはせて　　うつぼの朱雀院御歌

初秋二
千年ふる松より出づる風の音は誰か常磐に聞かむとすらむ

かへし　　ないしのかみ

同上
こゑ絶えず吹かぬ風には松よりも齢久しき君ぞすゝまむ

吹上にみゆきありて九日の宴をせさせ給ひけるによみはべりける
おなじ中つかさ卿のみこ

菊の苑にいくらの齢こもればか露の底より千世をのぶらむ

なが月布達ありける秋高陽院にて菊の宴せさせ給ひけるに菊の下行く河水のこゝろばへを　　讀人しらずはつね

君が世はなほ長月の秋までも汲みてぞ見ゆるきくの白露

九月十三夜うへの御あそびのついでによみ侍りける　　はしたかの左大臣

幾千世と君がみ代をばかぎらねば月みむ秋の數ぞ知られぬ

さがの院の五十御賀の御あそびの夜月やうやうさしいでて隔のいと近くつられたるに　　あまのもしほびの院御うた

雲居ゆく鴈のつかひに言傳てて月のみやこの人や訪ふらむ

さがの院御歌

めづらしき五十路のけふにあはざらば思ひ出でなきわが身ならまし

ふゆの御かたにて雪ふり月おもしろき夜人々詩歌など奉りけるついでによませ給ひける

さゝわけしあさの八條院御歌

池水も月ものどけく見ゆるかな千年すむべき宿のしるしに

左大臣

すみわたる月の光も池水に君が千年の影をならべて

左大辨

雲の上にのどかに澄みし月なれば宿かはれどもさやけかりけり

みかど御いかの日おほちおとゞみ奉りけるにたまはせける

一品宮のさきのみかどの御歌

色かへぬときはの山の小松原千世の梢は君のみぞ見る

關白權中納言うまれて侍りけるにつかはされけるきぬの袂につけられ侍りける

あさくらの皇太后宮

鶴の子のすだちはじむる毛衣は色もかはらぬ例なりけり

○月みやこ　月の中に在ると言はれる都。

○鶴の子　貴人の子を云ふ。鶴を仙鳥と云ふ意から云ふ。

御かへし　　皇太后宮大納言

色かへぬためしにたてる毛衣はまちとる袖ぞ置きどころなき

中納言みちたか子うまれて侍りける七夜にちごのきぬやるとてよめる

こゆみの彈正のみこの女

萬世を君にゆづりてこれぞこの雲居にすだつ鶴の毛衣

子どものわれも〳〵と年をこひければ　　としあらそひの母

羣れゐつゝ千年あらそふ鶴の子にわが萬世をゆづりても見む

左のおほいまうち君にさがの院の女一宮ゆるし給ひて三日の夜御かはらけ給ひけるによみ侍りける　　うつぼの橘の右大臣

藤原君
岩の上の苔のむしろに栖む鶴は代をさへ長く思ふべきかな

中納言ゆきたゞ

藤原君
あし鶴のうつる千歳の宿りには今やいさごの岩となるらむ

右大將仲忠に女一宮ゆるさせ給ひてみかの夜めして御かはらけ給はすとて　　朱雀院御歌

田鶴村鳥
なでおほす松の林に今夜より千世をば見せよ鶴のむら鳥

源のおほきおほいまうち君

○置きどころなき　歡喜の念を表はす。
○七夜　子の生まれて七日に當る夜、この夜に祝ひをする。
○群れゐつゝ　多くの子供等を指して云ふ。
○かはらけ　杯。
○いさごの岩　砂の岩。上の「千歳の宿り」に通はして、幾末も盡きぬ契りと云ふ意である。
○なでおほす　撫育。撫でいたはり育てたと云ふ意。

〇こがねのきじ　金雉。鷹狩の時鷹の獲つた牡の雉の事を云ふ。
〇むら鳥　群をなした鳥。古今集「村鳥の立ちにしわが名いま更にことなしぶともしるしあらめや」この引歌は次ぎの註に役立つ。
〇つるのこほり　甲斐國都留郡。この甲斐の、かひと云ふ意に、むら鳥の引歌中の「ことなしぶとも」（註、何事もなき）と云ふ意を掛けたのである。雉は、いぬ宮を指す。
〇眞名鶴　單に鶴と云ふに同じ。また丹頂を云ふ。
〇雲の上まで云々　后になられるやうにお育てしたいと云ふ意。上の、雛鶴は、幼き女御に譬ふ。

同上
姫松をねたく見るらしあし鶴はおのが齢に老やますとて

いぬみやのうぶやしなひにこがねのきじにかきてつかはしける　ふぢつぼの女御

雲閣上
むら鳥のつるのこほりに棲む雛は松の枝にぞけふはとびける

おなじうぶやによみ侍りける　參議されより

祭使
人ごとに千年の春をそふるまつ幾世かぎれる齢なるらむ

一宮のいか里にてまゐりけるに給はせける　ちよのはじめのけふぞゆかしき　波のしめゆふのみかどの御歌

雲ゐにも立ちのぼるべき眞名鶴のしばし汀にあそぶ聲する

御かへし　入道左大臣

とび立たば千世をかねたる眞名鶴のしばし汀に遊ぶ聲する

中宮のをさなくおはしましける時よめる　あしすだれの中宮亮

雛鶴の澤邊にしばしやすらふを雲の上まですだててしがな

さがの院きさいの宮の御賀の屏風に子の日したる所にいはに松おひ鶴あそべり　右大將なかたゞ

菊宴
岩の上に鶴（たづ）の落せる松のみは生ひにけらしな今日にあふとて

人の家花苑ありいま植木する處　民部卿されまさ

菊宴
植ゑなむる人ぞ知るべき花の色は幾世みるにか匂ひあくとは

人の家にたちばなの木にほとゝぎすなり　参議すけずみ

同上

わが宿の花たちばなを時鳥千世ふるさとと思ふべきかな

大納言忠賴の七十賀の屏風にみな月はらへしたる處　讀人しらず　おちくぼ

物語下

禊する川瀬の底のきよければ千年の蔭をうつしてぞ見る

風葉和歌集　巻第十三

戀一

女にはじめてつかはしける　　かしは木の權大納言

（小集 百番歌合九番）

思ふとも君は知らじなわきかへり岩もる水の色し見えねば

とこなかの關白

世の常のことの葉ぞとやいひなさむいかで知らせむ思ふ心を

ゆめがたりの前關白

いかにしてかかる涙のつゆばかり思ふこゝろをもらし初めまし

はないしるべのつま君（一本 あ）

物思ふといふは何とも知らざりき袖に涙のかゝるなりけり

中宮いまだ内のおとゞの許におはしましけるころ聞えさせ給ひける　　人たがへのみかどの御歌

いかばかり涙の數のおつるをかもの思ふとは人のいひけむ

○わきかへり　思ひのわくに、岩水のわくを云ひ掛けた。

○いひなさむ　この劇しくして匿しい心持をどのやうに表現しても世の常の言葉と君は云ふであらうの意。

○物思ふと云々　物を思ふといふことは、切なさに袖を涙で濡らすことであつた。

女院の大納言にのたまはせける　　をぐら山たづぬるの院の御歌

うちつけの契りと人や思ふらむ心のうちを知らせてしがな

あひ思ひ侍らざりけるをとこの許につかはしける　　さとのしるべの式部卿のみこの大君

知るらめや戀しとだにもいへばえに思へば胸のさわぐ心を

女をひきとゞめてよみ侍りける　　ただえのぬまの春宮大夫

忍ぶべき心ちやはする數ならぬ身につゝめどもあまる思ひを

心に思ふ事を忍びかくすとみかどの恨みさせ給ひけるに　　みかきがはらの内大臣

誰にかはもの思ふともなか〳〵にうきは例のある身ならねば

御かへし　　みかどの御うた

憂きは例なからむ下の思ひにも我ばかりこそ知りてこかれめ

つれなく侍りける女につかはしける　　かはほりの少將

かからでもありにしものをなぞもかく思ひにもゆるわが身なるらむ

女をみえぬべしやとぬりごめに入りゐて侍りけれどみえざりければよめる　　ぬりごめの少將

かげ見えぬ人を戀ふればいとゞしく苦しき闇にまどはるゝかな

○うちつけ　ふと、ゆくりなく、たゞちになどを云ふ。

○知るらめや　「らめ」は、らむの變化、助動詞。「や」は感歎詞。

○いへばえに　言ふには云はずの意。

○かからでも　さらでなくともの意。

○ぬりごめ　塗籠。家の一部の周圍を土で塗り廻らした處、主人などの寢所に用ゐる。

かぎりぞと思はぬ程は忍ばれし涙もいまぞ色に出でぬる

一條女三のみこきこえ侍りける　風につれなきの太政大臣

いかにせむ色かはるまで堰きかへし漏らしかねたる袖の涙を

しのびて女につかはしける　道心すゝむる右大臣

あはれ知る人もあらなむ漏らさじとつゝむ袖よりあまる涙を

きぬの袖になみだのかゝりてうつりたるを取り放ちてそれにかきつけて女につかはしける　うつぼの參議ゆきまさ

嵯峨院

ときてやる衣の袖の色を見よたゞの涙はかかるものかは

その傍らにかきてかへし侍りける　ふちつほの女御

嵯峨院

袖たちてみせぬ限りはいかでかは涙のかかる色も知るべき

梅つぼの女御に思ふ心の程いひしらせ侍るとて　あふにかふる三位中將

忍びあまり色に出でぬる袂かな人しれずこそしぼり侘びしに

なとこのから衣かさねはいかに嬉しからましといへりけるかへり事に　よつあしの大臣のむすめ

よそながら思ひは染めよから衣襲ねはかへる色もこそあれ

大納言すけうち解けたてまつらぬさまに侍りければ宣はせける

○うつりたる　うつり染つた事の意。

○ときて　解くこと。

○かかる　涙のかゝるに、斯やうなことであらうかの意をかけた。

○かさね　襲。上の衣と下の衣と二つ合はせたもの。

○かへる色　襲は裏表二色あるので、裏返る色もあると云ふ意。心變りに譬ふ。

みかきが原の御門御歌
我ならぬ人にもうとく慣はすはかさねてなかの袖も恨みじ

女なうちとぬけさまにておかさせ給ひける後こひしうおぼし出でられてよるの衣なかへしわびさせ給ふ夜な〳〵もさすがにあやしうおぼされければ　さごろものみかどの御歌
物語四中　百番歌合九十六番
片敷きに重ねぬ衣うちかへし思へば何を戀ふる心ぞ

中宮宇治におはしましけるころ聞えさせ給ひける　よその思ひのみかどの御うた
片敷きの袖は我のみくち果ててつれなさまさる宇治の橋姫

こゝろざしありて言ひわたりける女うちにまゐるべしとききてよみ侍りける　いはうつ涙の内大臣
あふ事のあらばつゝまむと思ひしに涙ばかりをかくる袖かな

つれなかりける女の遙かなる程へまかりけるに近き程まで送りてひとへの袖のぬれたるをひきほころばして　いはやの兵衛佐
思ふこととげにおろかなる涙かなかかる袂を見ても知らなむ

ふぢつぼの女御いまだまゐり侍らざりける頃つかはしける　中納言されたゞ
梅花笠
涙さへなき世なりせばわが戀の身よりあまるたいづちやらまし

○かさねて　重ねてに、襲を云ひ掛けた。

○宇治の橋姫　宇治川の橋の下に在ます橋を守り給ふ姫神で、離宮と申す神通はせ給へりとも、また住吉の神とも云ふ。けれどこの言葉後にはたゞ姫君などの上を云ふ言葉となつた。古今集「さむしろに衣かた敷きこよひも我を待つらむ宇治の橋姫」

○つゝまむ　隱さんに同じ。

祭使
しつみぬる身にこそありけれ涙川うきても物を思ひけるかな　　源宰相

右大将なかたゞ

菊宴
涙川うきてながるゝ今さへや我をば人の頼まざるらむ

しのびたるをとこの返事に　　ふくろかけの女御

堰きかぬる涙の河と聞くからにわが身さへこそうきて流るれ

みかどせちに宣はせける御かへり事たてまつり侍りける　　こうばいの關白三君

せきかぬる涙の色は變るとも逢ふといふ名をいかゞ流さむ

だいしらず　　しつくにゝごる贈皇后宮

つゝめども袖のしがらみ堰きわびぬ涙の川やうき名ながさむ

女のつれなく侍りけるにかゝるを見てなか／＼ひたぶるに心もつきぬべきとて　　夕霧の左のおほいまうち君

夕霧
せくからに淺くぞみえむ山河の流れての名をつゝみ果すは

だいしらず　　おやこの中の內大臣

歎きつむ蜑の鹽屋にあらねどもたゞ我がやくともゆる戀かな

しのびたる女にあふぎにかきて見せける　　はつねのくもゐの關白

○うき　浮くに、憂きを云ひ掛けた。

○しがらみ　水の流れを防ぐ爲に杭を打ち竝べて、横に竹を渡したもの。

○歎きつむ云々　「なげき」を「木」にかけて、それを「つむ」といひ、「やく」「もゆる」と緣語を用ゐた。

我からと焚く藻の煙そでなれて絶えぬ思ひに身をこがすかな

かへし、この歌の上にかけつけける　　しかまの太政大臣のむすめ

かき消たむ藻鹽の煙なほ立つな下にほのめく思ひなりとも

だいしらず　　ちゞにくだくる左大臣

もしほ燒く浦吹く風に立つけぶり一かたにだに靡りわびばや

女のもとにつかはしける　　すみよしの關白

（物語）世と共にけぶり絶えせぬ富士の峯の暗きやみにも惑はるゝかな（したの思ひやわが身なるらむ物語）

しのびたる女につかはしける　　かやがしたなれの關白

思ひあまり人め忘れて迷へとや誰もしのぶの山の通ひ路

だいしらず　　いはがきぬまの頭中將

わが戀は岩垣沼の水よたゞ色には出でず漏るかたもなし

玉もにあそぶの左衞門督

いはがきや沼のみごもり漏らし侘び心づからや碎け果てなむ

女のもとにつかはしける　　うつぼの中納言されたゞ

（藤原君）みごもりて思ひしよりも池水のいひての後ぞ苦しかりける

中務卿のみこのむすめ春宮にまゐるべしと聞えけるにつかはしける

○ばや　願ふ意の感歎詞。

○しのぶの山　陸奥國に在る。信夫山。忍びに云ひ掛けた。○通ひ路　戀の通ひ路。

○みごもり　水隱りに、懷姙を云ひ掛けた。○心づから　心からに同じ。

○なみ　並。普通のと云ふ意に、波を云ひ掛けた。
○下草　木の下の露に生きてゐるつまらない下草と、自分を卑下して云ふのである。
○御垣が原　禁中の御垣の傍にある原。詞花集一「ふる里は春めきにけり三芳野の御垣が原は霞こめたり」
○ねにだになかで　根に音を、無いに、泣くを、いづれも掛け言葉

みなせがはの新中納言

數ならぬなみの下草浮き沈みことわり知らぬ音ぞなかれける

人しらず御こゝろに物のかなはざりける頃よませ給ひける

みかきがはらのみかどの御歌

數ならぬ昔ならでもあやしきは御垣が原の思ひなりけり

かくひとりごたせ給ふをききて我もあるまじう心づくしなることな思ひ侍りければこゝろのうちに

内大臣

つむ芹のねにだになかで朽ちやせむみかきが原の下のうき草

身よりあまれる人をほのかに見てよめる

あづまのものゝふ

かくまでは思はざりけむ古の芹つみ侘びし人の心も

わらはに侍りける時院の中納言三位古今をかかせ侍りける「くれなゐの色にはいでじ」といふ歌のかたはらにいさゝか書きておしつけける

あまのもしほびの大僧都

したの思ひやわが身なるらむ

かへし

按察大納言三君

ふじのねの煙ときけばたのまれずうはの空にや立ちのぼるらむ

齋院に雪にてふじの山つくられて侍りけるを御らんじて

さごろものみかどの御歌

物語二下 百番歌合三十二番
もえわたるわが身ぞふじの山よたゞゆきつもれども煙たちつゝ
（にもきえず百）

おぼすこともいさゝかもらさせ給ひつる女に

物語一上 百番歌合三十二番
わればかり思ひこがれて年ふやと室の八島の煙にも問へ

しろがねのひとりにくろばうをまろがしてけぶりなどして女のもとに
つかはしける

中納言されたゞ

藤原君
ひとりのみ思ふ心の苦しきに煙も著るく見えずやあるらむ

中宮一品宮と申しける時いでさせ給ひつるにしのびて聞えさせ給ひけ
る

みかきがはらのみかどの御歌

忍ばずばむなしき空もゆく方を誰がため見ゆる下の煙ぞ

一條院の女一のみこにしのびつゝきこえ侍りけるをいまはさしもあら
じと思ひなりて

たまもにあそぶ關白

下もえに身をのみこがすわが戀の煙やけふは空にみちぬる

あふむがへし（本ノ）

一條院の御うた

下に焚く思ひは絶えじ雲の上に立ちのぼりぬる煙なりとも

○ゆきつもれども　雪積るに、往きつもるを云ひ掛けた。
○室の八島　竈。除夜に民の竈をさらひて、來年の吉凶を占ふ事がある。その時の竈を云ふ。
○ひとり　薫爐。香爐。
○くろばう　黑方。薫き物の名。
○まろがして　圓くすること。又は轉ばすこと。
○ひとりのみ　香爐に、獨りを云ひ掛けた。
○さしも　さやうにもの意。
○空にみちぬる　表むきに現はれた事を云ふ。
○あうむがへし　鸚鵡返。和歌に云ふ語。いひ掛けられた歌を少し變へて直ぐに返歌する事を云ふ。鸚鵡の人語を眞似るに譬へて云ふ

いもうとの中宮の御事をおもひて「かなしきは誰ゆゑもえし煙とも知られぬ山にたな引きやせむ」この恨みなだにいかではるけてしかなと右大將申し侍りけるに　　みかきがはらの内大臣

消えぬべきこれは思ひの煙ともかひなき空にほのめかせとや

月の夜かいばみて侍りける女のもとにつかはしける　　なだえのぬまの春宮大夫

知らじかしほのみし月のかけてだにおぼろけならず戀ふる心を

關白北方をほのかに御らんじてよませ給ひける　　ところかのみかどの御製

いかにして木のまの月の仄かにもみつとばかりを人に知らせむ

これを聞きたてまつりて　　關白家侍従

ほのかにも木のまの月の漏らしては心盡しの物やおもはむ

をとこのはじめて「これやさは入りては茂き道ならむ山口しるく惑はるゝかな」といへりけるかへり事に　　とりかへばやの前關白四君

拾 百番歌合八十四番
麓よりいかなる道にまどふらむ行方も知らずをちこちの山　ぬ拾

營華殿女御石山にこもれりと聞きてしのびて詣にまうづとてよみはべりける　　女すゝみの左大將

これも又いかなる道のはじめとて端山繁山なほまどふらむ

○はるけてし　遥かなるに同じ。
○かいばみて　垣間見に同じ。
○かけて　心にとめて。忘れずに。
○木のまの月　深窓の女に譬へて云ふ。
○みつ　月の満つるに、見つを云ひかけた。
○これやさはの歌　自然の風光に譬へて、暗に男女の道引の消息を云つたのである。
○麓よりの歌　これも男女の道に迷ふを云ふ。
○端山繁山　新古今集「つくばやま端山繁山しげけれど思ひいるにはさはらざりけり」

いと忍びたる女のあたりを佇ませ給ふにもかひなければ

よその思ひのみかどの御歌

いとゞしくあふ坂山ぞはるかなる人のこゝろの關をへだてて

よそながら明かして侍りける女のもとにあしたにつかはしける

かくれみのの先帝の三のみこ

くればとく往かむとぞ思ふ越えつともこえずともなき相坂の關

辛うじて一たび返事したる女のまだともし侍らざりけるに

さか野の四位侍従

東路の佐野の舟橋はじめよりふみも通はであらましものを

女のもとにかきつくし侍りけれどゝ返事を一たびもみ侍らで

道心すゝむるの中納言

難波潟數ならぬみをつくしてもみつとばかりの一こともがな

かへり事もせざりける女につかはしける

あじろの宰相

石見潟いかゞうらみぬ白浪のかへる跡さへ絕えぬと思へば

つれなく侍りける女のもとに

かくれみのの左大將

つらしとも恨みじ更に思ふこと言はぬをまさるかたになしつゝ

○越えつとも云々　越えたとも越えないとも、どちらつかずと云ふ意。
○佐野　上野國にも紀伊國にも在る。
○ふみ　文に、踏みを云ひ掛けた。
○みをつくしても　身をつくすに澪標を云ひ掛けた。
○みつ　滿つに、攝津國に在る三津を云ひ掛けた。
○かた　方。人。それと指して云ふ時の言葉。

いはやの兵衛佐

我ならぬ人にもかくやつれなきと心みがてら身をやかへまし

あるまじきことを思ひけるころよみ侍りける　　有明別左大臣

身を砕く戀の行方をたづぬればあふを限りのはてだにもなし

宣耀殿女御いまだまゐり侍らざりけるころつかはしける　　女のすくせしらずの右大臣

すててばや惜しからぬ身の存へてつらさに絶えむおなじ命を

いかなりける折にか女にたまはせける　　よもぎが原の春宮

戀ひわびぬ命にかふるものならばわが身をすててあひも見てまし

中宮のいまだまゐらせ給はざりける頃しのびてたてまつらせ給ひける　　みかきがはらのみかどの御歌

つらからば誰が名か惜しき命だに逢ふにしかへば露のためしを

つれなかりける女のもとにてよみ侍りける　　あたりさらぬ内大臣

涙こそさきにもたため命さへ人よりもろき名をや流さむ

ほのかに見て侍りける女のいとせちにおぼえければつかはしける　　水あさみの右中將

○心みがてら　ためしついでにと云ふ意。

○すててばや　捨ててしまひたいものだ。

○おなじ命　初めに捨てようと思つた命をさして云ふ。

○名をや　うき名をや、の意。

○玉の緒　玉をぬきつらねた緒と云ふ意から、ながし、たゆ、みだる、あひだ、などに掛けて云ふ。又その玉は、ぬき移す事もあるので、うつすにも掛けて云ふ。
○みだる　此處では、しどけなき樣になる意。

○いにしへ　年月の長短に拘らず過去の事を云ふ。

命さへ思ひにやがて絶えぬべしあふには更にかへぬものゆゑ
身をさらぬ見し面影のなかりせばなににかくべき命ならまし

參議氏忠琴の音をたづねまうで來て夜な／＼にならひとりてわかるゝ
曉いといたく思ひいれたるけしきをあはれみて　まつらのみやの華陽公主
物語上
玉の緒のたゆる程なき世の中を猶みだるべき身の契りかな

かむなびのみこに聞え侍りける　參議うちたゞ
同上
戀しなばこひもしぬべき月日へていかに物思ふわが身とか知る

いと有り難きひまにいさゝか物申しける女にほどなく引きわかるると
て　あさくらやまの秀才
物思ふと何いにしへを歎きけむかく言ひしらぬ折もありけり

だいしらず　よその思ひのみかどの御歌
下紐の解けても馴れぬ名殘よりやがてぬる夜の夢も結ばず

しのびたる女をうち解けぬさまにて明かしてよめる　あたりさらぬ内大臣
みしや夢なげくやうつゝいかなりし夜半の名殘に我まどふらむ

おなじさまにて明かせ給ひつる女のもとにつかはせ給ひける　さごろものみかどの御歌

物語四中　百番歌合十三番　身をぞはなれぬ物語

面影は身をもはなれずうち解けて寐ぬ夜の夢はみるとなけれど

しのびたる所にて情なからぬさまにもてなしていづとて　ちゞにくだくる左大臣

世の常のわかれと人や思ふらむこはたぐひなき袖の涙を

かへし　按察御息所

たぐひなき袖の涙をかけてだにみし夜の夢と人に語るな

○こはたぐひなき云々　逢ひながらも、残思もなく別れて来た事をいふ。

風葉和歌集　巻第十四

戀　二

賀茂の行幸に上のみ社に御ぼらへ仕うまつるとてさま〴〵祈りたてまつるなきかせ給ひてもそのかみの御こゝろのうちは皆たがひておぼしめされければ　　さごろものみかどの御うた

物語四下
やしま護る神もききけむあひもみぬ戀まされてふ御禊やはせし

つれなくみえける女につかはしける　　よみ人しらず拾遺　うつぼの右少將なかより

祭使　拾戀五
思ふことなすこそ神のかたからめしばし慰む心づけなむ

前齋院にきこえ侍りける　　はつれの入道太政大臣

さかき葉のさしてつれなき代々をへて神もゆるせる注連の外かな

あさがほの齋院なり給ひて後もおなじさまにうごきなきけしきに侍りければ　　六條院のおほんうた

朝貌
つれなさを昔にこりぬ心こそ人のつらさに添へてつらけれ

○心づけなむ　心づくこと、心にさとること。

○うごきなき　靜かでない事。此處では、相變らず好色でと云ふ意。

○こりぬ　懲りぬ、凝りぬ。二つともこの意に當るので、いづれにも解せらる。

○うらむる　恨む事に、葛の葉は風に吹かれると際立つて裏返るもので、その裏見に掛けて云ふ。

○こしらへ　慰めすかす、さとしすかす等の意。

つれなかりける女のもとにまかりてえなむあはでかへりてつかはしける　　わが身にたどるの關白

つれなきに思ひもこりぬ心からいくたび人の憂さを見つらむ

しのびたる女のもとにてさまぐ\うらみて　　ふくろかけの大將

つれなきをうらむる葛の下葉こそ涙の露の置きどころなれ

中宮かくれさせ給ひて後おなじさまに女院に聞えさせ給ひけるにつれなくのみ見え奉らせ給ひければ　　風につれなきよし野の院御歌

絶えざらむ命こそあらめ同じ世にありてもつらき人の心よ

御かへし

存へてあるにもあらぬ身の憂さをなきが恨みの數になさばや

おなじ女院にちかづき奉らせ給へりけるにおぼしいりて無下になきさまにならせ給ひていでさせ給へる後によませ給ひける　　よに野の院の御歌

あさましやさてもいかなる憂さぞとも恨むばかりの契りだになき

戀しとも憂しとも何に思ひけむかかるつらさを限りける世に

女の言ひのがれてつれなき樣なりけるが又もさのみこしらへ侍りければ　　にほふ兵部卿宮

つらかりし心をみずば頼むるをいつはりとしも思はざらまし

さがの院女二のみこの事御けしき侍りける頃かのみこのあたりにたち寄らせ給ひて　さごろものみかどの御歌

物語二上　百番歌合二番
死に返りまつに命ぞ絶えぬべきなか〳〵何にたのみ初めけむ

なとこの返事につかはしける　みかはにさける皇后宮中納言

拾百番歌合三十七番　さても拾百
頼めずばさても寐なましなぞやこの暮るゝ夜な〳〵待たせがほなる

なとこの頼めたる夜のふけ侍りければ　あさぢが露の兵衛督の中君

あひ見むと頼めぬ夜半はなか〳〵にくるしからずも更けゆくものを

大將ひさしく立ちより侍らざりけるに見つべきところにさしおかせ侍りける　なげきたえせぬの中宮の宰相

まだしとは思ふものから槇の戸をささで明けゆく空を見しかな

久しうまからざりける女のもとにつかはしける　女すゝみの右大將

かた敷きに待つらむ牀のさ席をかけて忍ばぬ時の間もなし

かへし　前右のおほいまうち君の中君

うき沈み片しく袖に浪越えてやがて身ながら朽ちや果てなむ

女のもとに罷りてたゞに歸るとてよめる　おとしふみの中將

○死に返り　死ぬばかりに、心に絶え難くなること。
○頼めずば　豫て悩ましい心を訴へた事を云ふ。
○くるしからずも　苦しくないに暮れるを云ひ掛けた。
○まだしとは　來るか來ないかはつきりわからぬの意。
○うき沈み　憂き沈むに、浮き沈むを云ひ掛けた。
○身ながら　我ながら。
○たゞに歸る　枕をかはさずして歸るを云ふ。

○知られぬ　思ふ心を知られぬを云ふ。

○杣河　杣木を流す河。

○飛鳥川　大和國に在る。古今集「世の中は何か常なる飛鳥川きのふの淵ぞけふは瀨となる」

來たれども知られぬ夜の衣手を濡らしわびつゝ歸りぬるかな

あづまに侍りけるころ相撲なりける女のもとにたづねまかりて

野じまの三位中將

見せばやな野原篠原尋ねきて逢はぬ恨みにぬるゝ袂を

おやも心ざし侍りける女のもとにつかはしける

一品宮の殿中納言

杣河におろす筏にあらずとも我が思ふ瀨を引きなたがへそ

おやの人にたのめける女に忍びてたまはせける

のちくゆるのみかどの御歌

けふやなほ身をなげてまし飛鳥川あすのあふ瀨を人し渡らば

御かへし

大將女御

あふ瀨をも人し渡らばあすか河流れて世にもすまじとぞ思ふ

いと忍びたる女のもとにていみじうあかぬけしきにうちながめて

有明別の關白

たまさかに人めまち出づる夜の間だに涙のひまのなどなかるらむ

女院の御ゆくへしばし知りきこえ給はざりけるに聞いてたてまつらせ給ひてきこえさせ給ひける

はしたかの三條院の御歌

涙河ながれあふ瀨を待ちいでていとどもさわぐ袖のしがらみ

しのびたる女に御心よりほかに隔つる夜な〳〵のわりなさなど宣はせ
てよませたまひける　　さごろものみかどの御歌

物語一下　百番歌合二十五番
あひ見ては袖ぬれまさる小夜衣ひと夜ばかりも隔て（は白）ずもがな

御かへし　　あすかゐ

同上
へだつれば袖ほしわぶるさよ衣つひには身さへくちや果てなむ

ほのかに御らんじける女のひとへをたてまつり返させ給へとて　　あふさかのみかどの御うた

かたみとてかく脱ぎかふるから衣我ならざらむ人に重ぬな

ぬになるとてよめる　　なるとの姉

うち重ねあかしも果てぬさよ衣きてもかひなき物とこそ思へ

かへし　　致仕大納言のむすめ

きぬ〴〵に引き別るれどあひ見てはいとゞ重ねて物ぞ悲しき

はじめてもの申しける女のいとせちにおぼえ侍りければ　　なれてくやしき左大将

つらしとて憂しとも人を知らざりき何のむくいの今夜なるらむ

いさゝかもの宣はせける女に　　あしたづの春宮

夢よりも見るほどもなきうたゝ寝に長くも物を思ふべきかな

○へだつれば　相見ぬ事を云ふ。

○ひとへ　裏のついてゐない一重の衣。

○かたみ　著物の片身に、形見を云ひ掛けた。

○きぬ〴〵　後朝。男女の朝の別れを云ふ。昔は夫婦でも離れ〴〵にゐて、夕にあつて朝に別るゝ慣ひがあつた。その別るゝ時は、同衾の著物の別れ〴〵になるので、きぬ〴〵と云ふのであると云ふ。

いとしのびたる處におはしましたりけるにあやにくなるみじか夜にて

あさましうなか／＼なりければ　　六條院御歌

若紫　百番歌合一番

みても又あふ夜まれなる夢の中にやがてまぎるゝわが身ともがな

御かへし　　うすぐもの女院

同上　拾　百番歌合二十二番

世がたりに人や傳へむたぐひなく憂き身をさめぬ夢になしても

年をへて思ひわたりける女にしのびて物申して侍りけるあしたに

ゆるさぬ中の中納言

そのまゝの夢路にやがて紛れなで逢ふにし變ふる命なりせば

しのびたるをとこの出でける曉「しばしとなかぬ鳥の音ぞうき」といひ

侍りけるに　　鳥のねうらむるの兵部卿のみこの女

うたゝ寐の夢路にまよふ明暮にさめて消えぬるわが身ともがな

誰とは知らずながらおのづからあひ見る事はたえざりける女に

まつらの宮の參議氏忠

物語中

思ふにもいふにもあまる夢のうちをさめて別れぬ長き夜もがな

しのびたる女のもとより我にもあらでいづとてよめる

夢のかよひぢ　讀人しらず

いかにして今より後も尋ね見む人に知られぬ夢の通ひ路

○世がたり　世の噂と云ふ意。

○夢路　思ひ續けた年月を云ふ。

夢のやうにて夜な〳〵み馴れける人に今はかやうにもえあるまじきよじ申して　　夢ゆゑ物思ひのあめわかみこ

哀れとも思ひ出でしや人しれぬ夢の通ひ路あと絶えぬとも

御かへし　　中宮

これやさは限りなるらむうば玉の夜な〳〵みえし夢の通ひ路

しのびたる女のもとにまかれる曉よめる　　はつねのしかまの太政大臣

明けぬとて鳥のそらねやはかるらむ猶せきかへす相坂の山

關白たちよりて侍りけるが曉ほかへなどやうにいひなして夜ふかくいでむとし侍りければ　　いはでしのぶの白川院御息所

別るれどたぐひもあらじ小夜深き鳥よりさきの心づくしは

いとしのびたる所にて鳥の聲もたび〳〵聞えければ　　みなせ河の左大將

待てしばし鳥の音つらき曉もまたはこの世にあらむものかは

いらへもし侍らざりける女のあかつき鳥の鳴くを聞きていまだに早う出でねといひければ　　とりかへばやの前のおほいまうち君

つらけれど鳥のねならでいかでかは明けぬとつぐる聲をきかまし

鳥のなくを聞きてこの音はいかゞ聞くと申しけるをとこに

○うば玉　ぬば玉とも云ふ。射干玉。からすあふぎと云ふ草の實で圓く堅く色黑いので、黑し、暗しなど總て夜のもの、又は隱れ事などの枕詞に用ゐる。

○そらね　空音。後拾遺集「夜をこめて雞のそら音ははかるとも世に逢坂の關はゆるさじ」

○せき　關に、せくを云ひ掛けた。

○心づくしは　女が妬んで云つたのである。

三舟の式部卿のみこの女

憂きながら鳥の音ごとに思ひ出でむあかず明けぬる夜半の名殘を

女のもとよりいでけるあかつきよめる　みかはにさける關白

拾　百番歌合四十四番

なきぬべしあかぬ別れの曉を知らする鳥の聲のつらさに

あさぢが露の入道關白

しのびあへず八聲の鳥にうち添へて音にたてつべきけさの別れ路

かへし　尙侍

曉のやこゑの鳥も人しれず憂き身しらるゝ音をやなくらむ

六條院御かたたがへのついでに忍びていりおはしましたりけるに鳥もしば／＼なくに御心あわたゞしくてとりあへぬまでおどろかすらむと宣はせければ　源氏のうつせみのあま

帚木

身の憂さを歎くにあかで明くる夜はとり重ねてぞ音もなかれける

しのびたる女の許よりいづる曉よみはべりける　はきにやどかる大將

思ひ出でよ夕の空の雲だにも命にかへし明けくれの夢

これを聞きてこゝろのうちに　院　女　御

ながらへて憂き世に月のすまばこそ思ひも出でめ明暮の空

○八聲の鳥　鷄の明方にしば／＼鳴くを云ふ。千載集「思ひかね越ゆる關路に夜をふかみ八聲の鳥に音をぞ添へける」

○かたたがへ　方違。中古に流行した方角に關する迷信で、他行の方角が天一神にあたる時、又はおのれの住む方角の塞がる時、他に一泊して方向をかへることをいふ

○とり重ねて　鳥の又鳴くに、苦勞の取り重なることを云ひ掛けた。

○有明　月の空に在りながら夜の明けるを云ふ。
○ひが〳〵し　ひがみたり、心ねぢけたりなど。
○このくれ　木陰の暗き處。
○かゝる　動詞の、斯くありに、自動の掛かるを云ひ掛けたり。

忍びて御らんぜられける女にあかつき宣はせける　　露のやどりの一條院御歌

拾 百番歌合九十二番
ながらへて世に有明の月すまば又めぐりあふ契りともがな

れいけい殿わたりにて女にわかれける曉よみ侍りける　　今とりかへはやの關白

なごりのみなほ有明の月影を又あふまでのかたみとは見よ

女院大將にてつかへ給ひけるをひが〳〵しきもてなしと御らんじおはす折にやありけむ　　有明の別の院御歌

いかにせむたゞこのくれと頼みても行く方しらぬ有明の月

御かへし

つれなくてなほ有明の影とめば身の世語りになりや果てなむ

忍びたるところにて有明の月の隈なくすみ渡れるをもろともに見てよめる　　ゆくへしらぬ左大將

諸共に有明の月と思はばやなど山の端にかゝる契りぞ

女のもとより歸りけるあかつき　　みふねの左（右一本）のおほいまうち君

曉のわかれにおつる袖の雨に光もぬるゝあり明の月

飽かずおぼされける女を曉いざなひでさせ給ひてまだかやうなる事ならはざりつるを心づくしにもありけるかなとのたまはせて　　六條院御歌

○しのゝめの道　曉のほの暗い道に、まだ戀愛に經驗の薄い事を譬へいふ。

○雲居の外　禁中の外を云ふ。

○あらばこそ　命があるからこそ
○いなば　往き去らばの意。

○消えななむ　「な」は助動詞。過去の助動詞の「ぬ」の變化。

夕顔百番歌合十一番
古もかくやは人の惑ひけむ我がまだ知らぬしのゝめの道

もろこしにて河陽縣のきさきを心よりほかに見たてまつりて飽かずわりなきに立ちいでむこゝちもせざりける曉よめる　はまゝつの中納言

物語一
わが世にはまだ知らざりし曉のかかる別れに惑ひぬるかな

御かへし

同上　拾　百番歌合二十二番
うしと思ひ哀れと思ふしらざりし雲居の外の人の契りを

又はおひかたく侍りける女にわかるとて　ちゞにくだくる左大臣

このくれと賴むるだにも曉の別れは惜しきものとこそ聞け

しのびたる處にて心ならずいで侍りける程いはむかたなくて　我が身にたどるの關白

限りありて命たえずばいかゞせむ契らぬ暮のけふの思ひよ

おなじさまなりける曉よめる　うもれ木の少將

あらばこそ物も思はめ出でていなばやがて消えななむ命ならずや

しのびたるをとこの出でなむとするあかつきよめる　有明のわかれの中務卿みこの北方

かくてたゞ厭ふ命の消えななむ絶えず悲しきこゝろ碎かで

白川院に行幸ありけるついでに中宮たみそめ奉らせ給ひてあしたに聞えさせ給ひける　ゆくへしらぬのみかどの御歌

死ぬばかり思ふものから後にまたあひ見む事にかゝる命よ

しのびたるところにて明けはてぬさきにと人のおどろかし侍りけるにえいでやり侍らで　にほふ兵部卿のみこ

浮舟
よにしらず惑ふべきかなさきに立つ涙も道をかきくらしつゝ

かへし　きぶねの君

同上　拾　百番歌合七十五番
涙をもほどなき袖に堰きかねていかに別れをとゞむべき身ぞ

とほき程にはべりける女のもとにまかりてさのみもえ泊り侍らで雨のふる日かへるとて　夢路にまどふの式部卿みこ

諸共に思はましかばかくばかり露けき道をとゞめやはせぬ

かへし　大納言のむすめ

堰き止めむかたこそなけれ涙河袖のしがらみくち果てしより

あひがたく侍りける女にからうじて行きあひたりけるあした遣はしける　うきなみの權中納言

あふ瀬にもなほ淀まねば涙川いかゞはすべき袖のしがらみ

○よ　世に夜を云ひ掛けた。

○露けき道　雨の降る道に、涙おほい戀の道を云ひ掛けた。

○袖のしがらみ　涙の袖に塞ぎとめかねるを、上の、河に通はして云ふ。

○なほ淀まねば　涙の淀まぬに、相逢ふ事のきまらぬを云ひ掛けた

をとこの起き別れけるあかつき重ねむ夜にの數ぞおほかると云ひければ　　水あさみの大納言のめのと

かさぬべき夜はも知らねばから衣やがて涙に朽ちや果てなむ

しのびて女にもの申してあしたにつかはしける　　玉もにあそぶ關白

解きやせし結びやしけむ下紐の亂れて戀ふるけさのわびしさ

一條の女三のみこに通ひそめてのあしたに　　かぜにつれなきの太政大臣

別るとてうらみもなれず曉をえぞ知らざりし斯かるものとは

しのびたる處よりいでてあしたにつかはしける　　うき浪の權中納言

人はいさうつゝ顏にや醒めぬらむまだ明けぬ夜の夢の通ひ路

御かへし　　皇后宮

身をかふるこのよの外と思ふまに今こそ辿れ夢の通ひ路

女二のみこの許にしのびてたち寄らせ給へりけるあしたに　　さごろものみかどの御歌

物語二上　百番歌合三十八番
うたゝ寢をなか〳〵夢と思はばや醒めておはする人もありやと

もろこしにてはづかなる女にわかれ侍るとて　　まつらの宮の參議氏忠

物語上
さめぬ夜の夢のたゞぢをうつゝにていつを限りの別れなるらむ

○たゞぢ　直路。すぐな路、その路。

春宮の宣耀殿女御いまだ参り侍らざりけるにいさゝか往きあひてあしたにつかはしける　ねざめの右大將

宵のまの夢ばかりにて立ち別れ今朝はいかなる心ちかはする

女のもとより歸りてつかはしける　みかはにさける前關白

拾 百番歌合四十五番
問はばやないかなる夢を見つる夜の名殘の袖のくがはぬるゝと

やせかはの右衞門督

あやしくもけさの袂の濡るゝかな今夜いかなる夢を見つらむ

宇治のなかのきみに通ひて又のあしたにつかはしける　匂ふ兵部卿のみこ

總角 拾 百番歌合四十二番
世の常と思ひやすらむ露しげき道のしの原分きて來つるを

先帝女一のみこにかよひ初めてあしたに聞え侍りける　なれてくやしき左大將

古りにけるけさの心もかくばかり誰かは知らむ道芝の露

かへし

馴れにけむその道しばの露よりも置きどころなき袖の上かな

女のもとよりかへりてあしたに　ひとりごとの彈正のみこ

分け來つる野原の露もまだ乾ぬに袖さへ濡れてかへりぬるかな

心ざしある女をおきて外に泊りてかへりける道にてよめる　おのれけぶたき大將

○くが　陸。水のない處。「名殘」を餘波とも書くので、殘りの波と云ふ意から、袖のくがと云つたのであらう。

○道芝の露　女の許に通ふ歎きを云ふのである。

露けくもなりにけるかな獨りのみ片しく袖もかくや濡るらむ

冬のころ女のもとより歸りてあしたにつかはしける　なだえのぬまの春宮大夫

いつのまに置く朝霜のきえかへり戀しきことを歎くなるらむ

かへし　按察大納言女

わが身にぞ今朝はよそふる消えかへり草葉の上の霜と見しかど

六條院たれとも知り給はで名のりせよかうでやみなむとは思はじと宣はせければ　おぼろ月夜の尚侍

花宴　百番歌合三番

うき身世にやがて消えなば尋ねても草の原をばとはじとや思ふ

后宮まゐり給へりけるあしたに奉らせ給ひける　袖ぬらすの後朱雀院御歌

たぐひ世にありやと人に尋ねばや暮るゝ待つ間のほどの心を

中宮の新中納言にものいひ初めていで侍るとてよめる　河ぎりの内大臣

類ひなき心ばかりをとゞめ置きて又あふまでのしるべともせむ

女のもとより歸りてあしたにつかはしける　有明別左大臣

袖のうちにわが魂やまどふらむかへりて生くる心ちこそせね

あさぢが露の入道關白

魂は飽かぬ夜牀にとゞめ置きてあるにもあらず暮らすけふかな

○露けくも云々　女の許から歸つて來た自分を云ふ。○獨りのみ云々　自分を待つてゐる別の女の獨り寐を云ふ。

○よそふる　なぞらふること。

○かうで　かやうにての意。

○草の原　墓所を云ふ。

○しるべ　よすが、縁などに云ふ。

○袖のうち　女の袖の内と云ふ意

あしたにおともせざりけるをことのもとにつかはしける　おなじ兵衞督のむすめ

今朝とはぬつらさはさても契りなくこの夕暮をなほ頼むかな

一條院内大臣夕ぐれにいづとて「おきわびしなに曉をなげきけむ夕にわきてとまる心を」と聞え侍りければ　いはでしのぶの皇后宮

かばかりもとまる心の變りなばこれやかたみの夕暮の空

たゞ一たびあひて侍りける女に　みかはにさける前關白

拾百番歌合三十六番

けふも暮れあすも過ぎなばいかゞせむ時のまをだに堪へぬ心を

いとたはれたる女をとゞめてかへし侍りけるあしたに「夢にだになきうかるべきとこの上に」といひ侍りければ　おなじ關白

一かたに心を寄すと思はばや哀れもかけむとこのうらなみ

しのびてあひて侍りける女の許へ又まかりてあしたに　おとしぶみの中將

あふ坂は馴れこし關の道なれど往くたびごとに惑はるゝかな

麗景殿女御ともなひて忍びて石山にまうで侍りけるにこれなむあふ坂のせきと申すなりとて　なげき絕えせぬ大將

つひにかく越えけるものをともすれば人わびさせしあふ坂の關

内侍督みそめて侍りけるあしたにつかはしける　玉もにあそぶ關白

○おともせざり　後朝の消息を寄せない事を云ふ。

○契りなく　緣のないこと。

○たはれたる女　淫らなる女。

○とこのうら　とこの浦は疊浦ともいひ、石見國にある。こゝでは「牀の上に」といふ歌に對する返し歌として、この地名に云ひ寄せ浦波に裏なきことをかけた。

○しづ心なき　動搖のする心。おちつかぬ心。古今集「久方の光のどけき春の日にしづ心なく花の散るらむ」

こえて後しづ心なきあふ坂をなか／＼關のこなたなりせば

風葉和歌集　巻第十五

戀　三

おろかなるさまに思ふらむとおぼゆる女にもののみ心ぼそき由かたらひ侍りけるついでに

みづからくゆる左大将

命だに世に存ふるものならば君に心のほども見えまし

かへし

右のおほいまうち君の女

ながらふる我が身のうきを思ふより外には人を恨みやはする

しのびて御らんぜられける女に給はせける

女すゝみの先帝の御歌

君があたりしばし離れぬ心こそ我がものからに羨まれけれ

女にのたまはせける

よもぎかはらの春宮

いかにせむ後の世までと契りても猶あやにくに飽かぬ心を

藤壺の女御ひさしく參り侍らざりける頃おほん心ち例ならずおぼされければ給はせける

うつぼの御かどの御うた

○もののみ　戀の道のみと云ふ意である。

○心のほど　戀ふる心のほどの意

○我がものから　我がものながら

○かくてはなぞや　斯くして何故にの意。「や」は感動詞。男の病牀にあるのを歎いたのである。上の「よゝ」は、世々に夜々を云ひ掛く。

○あす知らぬ命　頼まれぬ人の命の果敢なさを云ふ。

○心をば　相逢ふ心を云ふ。

○ことなしび　何事でもないさまに、知らぬふりに。

○はしたなく　なさけなくて。

○こちたく　亂れがはしくの意。

圖讀中
諸共にありてぞよゝも惜しまれしかくてはなぞや露の命も

忍びてかよひける處にてをとこ女の諸共にそひ臥したるかたを書きて
つれ〴〵に斯くてあらばやなどいひて
にほふ兵部卿のみこ

浮舟　拾　百番歌合四十番
長き夜を頼めてもなほ戀しきはたゞあす知らぬ命なりけり

かへし
うきふれの君

浮舟　拾　百番歌合四十番
心をば歎かざらましいのちのみ定めなき世と思はましかば

こゝろ變れるをとこのたち寄りてことなしびに契ることども侍りける
かくれみのの源中納言女

憂きながら消えぬべきかな行末をちぎる心はいのち知らねば

世の中はしたなくて里に侍りけるころ春宮みこと申しけるとき忍びて
おはしましてゆく末こちたく契らせ給ひけるに
なだえのぬまの尙侍

目の前にかからずもがな頼めおく行末までは定めなくとも

おなじころ曉いでさせ給ふとて惜しからぬいのちにかへていかでわれ
と宣はせければ

思へどもこの世にあまる身の憂さを知らぬ昔の契りつらしな

月ごろありてまうで來るをとこのちゝのやしろをひきかけてゆくさき

○たゞ目の前に云々　命が旦夕に迫つて來てゐるを云ふ。

○あれば憂し　命があればあるでつらいと云ふ意。

○けしきとりけるに　その氣色を伺ひたるの意。

長きことを契り侍りければ　うちの中君

（總角）來し方を思ひ出づるもはかなきを行末かけて何たのむらむ

心ち限りにおぼえけるにをとこの行末をちぎり侍りければ　石山の大僧都母

行末をかけてもなにか契るらむたゞ目の前になりぬるものを

女のえあひがたく侍りけるに　かぜにつれなきの右大將

消えねたゞ戀にわが身よあれば憂し又あふまでの契りならねば（ず一本）

右大將つらきさまに侍りければ行方もしられ侍らざりけるを尋ね出でてたち歸りうらみわび侍りければ　みづからくゆるの尚侍

涙のみかゝる契りは憂けれどもつらかりしさへ形見とぞ思ふ

をとこのさま〴〵契ることも侍りければ　讀人しらず（のじま）

忘れじとたれか契らぬちぎれどもさてこそかはれ人の心は

二品内親王わたり給へるころ手習にして侍りける　むらさきのうへ

（若菜上）めに近くうつればかはる世の中を行末とほく頼みけるかな

うちの中君の許にまかれりけるにかをる大將のうつり香の深くしみたるをあやしとがめいでてけしきとりけるにともかくもいらへ侍らざりければ　にほふ兵部卿のみこ

○しめて　染めて。又心にしつかりと。

○うち返し　重ね〳〵にする。

○きぬころも　着ぬ衣に、來ぬ頃を云ひ掛けた。

○うらみけむ　恨みに、裏見を云ひ掛けた。

○ことなほる　事直。もとのやうになること。

○浪のぬれ衣　浪に浸つたやうな涙に濡れ盡した衣。

宿木　拾　百番歌合四十九番
また人に馴れける袖のうつり香を我が身にしめて恨みつるかな

たえて久しくなりにける女につかはしける　ただこのぬまの内大臣

うち返し歎きぞあかす交しけむ折りも知られぬ夜半の衣を

久しう罷りかよはずなりにける女の許につかはしける　うつほの右のおほいまうち君

藤開中
よそながら多くの年も隔てきぬ（けり）ころも恨みし時はいつぞも

かへし　さがの院の女三のみこ

同上
うらみけむほどは知られでから衣袖ぬれわたる年ぞ經にける

いつはれる事により女院も院にわたらせ給ひにければこもりゐて侍りけるを觀朝の行幸に仕うまつるべき由せちに宣はせければことなほるべきにやと思ひてつかうまつれりける後もかひなく侍りければ　いはでしのぶの一條院内大臣

あふことの浪のぬれ衣たち出でて干すやと待ちし程ぞはかなき

内大臣もの思はしげなる手習を見つけて思ひたえにし中宮の御事を思ひてそばに書きつけ侍りける　みかきがはらの右大將

思ひ知れこれだにありなみずもあらず見もせぬ戀の下に燃えしを

こと人のもとに住みつきて侍りけるをとこのたち寄りてとかく言ひけるに答へ侍らざりければなど御返事だにせぬといひ侍りけるに

古郷たづぬる源大納言女

空にのみ心はなりて憂き事を思ふばかりも身にはとまらず

みかどの御返事にたてまつらせ給ひける　　おやこの中の中宮

ひたすらに消えも果てなで存ふる身をばつれなく人や見るらむ

宮大將身まかりて後みかどの忍びてとぶらひ給はせたりける御かへり事に　　みかきがはらの女二のみこ

つれなさの命はうきに消えやらであればこの世の歎きそひつゝ

いとつらかりける女につかはしける　　かやがしたをれの關白

つれなさを添へてやいとゞ厭ふらむ我だに憂しと思ふ命を

つれなくのみ見え奉りける女のもとに近づきよらせ給へるに御答へも聞えざりければ大かたの世をもかぎりにおぼしめし閉ぢめさせ給ひてあしたにつかはさせ給ひける　　さごろものみかどの御うた

物語三下　百番歌合四十四番

命さへつきせず物を思ふかなわかれし程に絶えも果てなで

後のあふせを頼め侍りける女のほかざまになりにける夜つかはしける

○あれば　生きてをれば。

たまもにあそぶ關白

今日までも存へましや忘れじと言ひしにかゝる命ならずば

だいしらず　ちゞにくだくる左大臣

さりともと思ふ心のなぐさめに今も消えせぬ命なりけり

宰相中將大貳がむすめに心にもあらず通ひける頃かくはならはざりつるにと心ぼそくてよみ侍りける　あし火たくやの源大内言女

我ながらなど思ひけむ目の前にかかる心は見せじものぞと

かへし

かばかりの心を人に見せながら今日まで生ける身をいかにせむ

とき／＼物いひわたりたる女に又こと人かよひけりと聞きて後にはつかに往きあひて　いはでしのぶの一條内院大臣

立ち返り見ても哀れのいかならむ人はかはらぬ心なりせば

みこかへの内侍のかみ

石橋におとらぬ中の途絶えをば誰がつらさとか思ひわたらむ

右大將かれ／＼になり侍りにければ　しのぶのこ少將

露ばかり哀れをかくる程ならばかく掻き絶えしさゝがにの絲

○言ひしに　後日を約した女の言葉を指す。
○かゝる命　懸かる命で、賴りとする命の意である。
○さりともと　然うであつても。

○かかる心　自分ながら恥しいと思ふ心を云ふ。

○立ち返り　言ひ交はした昔に立ち返つての意。
○哀れ　忍ぶ戀を云ふ。
○人は　戀路を通ふ人と云ふ意。
○石橋　久米路橋に同じ。大和國久米川に架かる橋。昔、役ノ小角といふ者、呪術を使つて大和の葛城山より金峯山にかけて石橋を渡す事から、一言主神を縛つたと云ふ傳説があつて、それより中の絶えたる事に云ひならす。
○さゝがにの絲　蜘蛛が着物につけば親しき人が來ると云ふ諺がある。允恭紀「わがせこが來べきよひなりさゝがにのくもの行ひこよひ著るしも」又くもの枕詞。

三條院御こゝろとめぬさまに見えさせ給ひければたてまつり侍りける

はしたかのきりつぼの御息所

數ならぬ身をば軒端のさゝがにのいかにかすべき心ぼそさを

みかどたゞ人におはしましけるころ忍びてかよひ給ひける所をわれにもあらず外へうつろひける曉たゞいまなむとは聞えまほしきに鳥もなければ

あすかゐ

物語一下　百番歌合四十八番

天の戸をやすらひにこそ出でしかと木綿著鳥よ問はば答へよ

關白いまだ三位中將に侍りけるころ忍びてもの申しけるをつゝましき事ありていでける途にかの車のあひて侍りければ

あさくらの皇太后宮大納言

拾　百番歌合五十五番

玉鉾の道ゆきずりのかばかりも哀れいづれのよにか見るべき

みかどみこと申しけるとき通ひ給ひけるがかれ〲に見えさせ給ひければ外へうつろひ給ふとてかきおかせたまひける

うたゝねのきさいの宮

何方(いづかた)へゆくともいはじなか〲に訪はずば人のつらさ見えなむ

をとこのこと女むかへむとしけるを見て山里なるところへ罷りけるにおくりのもののいづくにとまりぬるとかいふべきと云ひければ

讀人しらずはゝすみ

○いかにかすべき　蜘蛛がどんな行ひをするか、眺めてゐる樣を云ふ。

○たゞ人　天皇の御位に卽く前を云ふ。

○やすらひ　ためらふ、心によろめく事。

○つゝましき事　愼しみゐること。うち解けぬこと。

○玉鉾　玉で飾つた鉾。鉾に身があるので、總て「み」の音にかける枕詞。

堤中納言

いづくにか送りはせしと人とはば心もゆかぬ涙河まで

は物語

驚かされてまうで来りけるをとこの「わすられず思ふ心を知らればや
いとかく人のうらみ果つらむ」といひけるにいたう泣きて

みづからくゆるの彈正のみこの女

涙だに思ひしらずば忍びつゝふかくは人を恨みざらまし

風葉和歌集　卷第十六

戀　四

てりみち姫とりかへされ給ひてよませ給ひける

はこやの平のふとだまの帝の御歌

厭へ／＼いふに心は慰まず戀しくのみもなりまさるかな

中宮をほのかに見たてまつりてむかしのがれ侍りけるをくやしく思ひつゞけて

いはうつ涙の內大臣

身をしらば人につらしと見えましやなど待つものを思はざりけむ

關白のむすめを思ふ心ありていはせ侍りけるをうちに奉らむとし侍りけるにひき違へてあれの參りけるに御つかひにまうで來てそなたへつかはしける

人たがへの春宮のすけ

思ふより外なる（こと一本）人の（や同上）くるしきは今やはじめて君も知るらむ

內大臣心かはりたるさまに見え侍りけるころよませ給ひける

おやこの中の中宮

○待つもの　自分を云ふ。

かはり行く人のつらさも別れぬにいかに知りてか袖のぬるらむ

をとこのほかへそゝのかしやりてさすが袖もぬれにければ

しのびにぬるゝ内大臣北方

我ながら心のうちを知らぬかないかなるかたに袖の濡るらむ

夕霧左大臣おちばの宮に通ひはじめ侍りけるころ致仕のおとゞのむすめの許につかはしける

藤内侍従

夕霧　百番歌合二十三番

數ならば身にしられまし世の憂さを人の爲にもぬらす袖かな

よづかぬ御身のありさま見あらはされ給へりける人の御かへり事に

今とりかへばやの中宮

物語二

まして思へ世にたぐひなき身の憂さを歎き亂るゝ程の心を

恨みたてまつりぬべき事を思ひしらぬさまに侍りけるにいかなる折にかあやしう心のかはりて見ゆるはとみかどの宣はせければ

とこなかの弘徽殿女御

知られにし身のうさなれば今更につらさもなにか思ひわくべき

心とめぬさまなりけるをとこの嘆くことありて例よりもおろかに思はれぬべき事といひ侍りければ

あしびたくやの大貳女

○人のつらさ　心變りしてゆく人の情なさと云ふ意。

○數ならば　數ならぬの反對の意。數に入れるならばと云ふこと。○世の憂さ　男女の語らひを云ふ　○よづかぬ　女心なきこと。まだ男女の道を辨へぬことに云ふ。

○知られにし　もう自分に經驗し盡したと云ふ意。

○さてだに　さうしてすらもの意

○見き　見しに同じ。「き」は過去の意を示す助動詞。

ありしよりまさらむ程のつらさにもまた行末を思ひやるかな

だいしらず　　女すゝみの登華殿女御

つらきをも憂きをも逃る身ともがなさてだにしばし物を思はじ

一條院内大臣こゝろにもあらずはなれ聞えて後さまぐ〳〵うらみ奉りて

侍りければ　　いはでしのぶの女院

思はぬと人は知りけり別れにし憂さも哀れも限りなければ（ど一本）

忍びたるをとこの返りごとに暇なき由をいひて侍りけるにさらばまた

はえ聞ゆまじあまり人わろき心ちすと申したりければ　　みかはにさけるの尙侍

拾　百番歌合四十六番

憂きに又つらさを添へて歎けとや（き拾）さのみはいかゞ物を思はむ

いかなりける折にか内の御文にてならひにし給ひける

さごろものさがの院の女二のみこ

物語三中　百番歌合二十三番

夢かとよ見しにも似たるつらさかな憂きは例もあらじと思ふに

しのびたる男のいといたく恨み聞えければ　　我が身にたどるの水のなの女三宮

今はたゞ見きとばかりの夢をだに忘れむのみぞ情なるべき

内大臣「みしかども忘れぬ夢をとふ人は泣く〳〵すぐるうき世なりけり」と聞えて侍りけるかへしに　　みかきが原の女二のみこ

○庚申　かのえさる。また庚申の日に祭る星の名。庚申の夜、眠る時は禍ひがあると云うて終夜起きてゐて星を祭る習ひがあつた。
○逢ふや云々　逢ふ時は共に寐る償ひを云ふのである。

存へてあるだに命つれなきを見しかと問はむ程の夢こそ

しのびたる女にたまはせける　　おなじみかどの御うた

忘られぬ夢だになくばおのづから冷むる涙のひまもあらまし

庚申しける夜かきて女にみせ侍りける　　うつぼの侍従なかずみ

〔祭使〕寐るまなく歎く心も夢にだに逢ふやと思へばまどろまれけり

いとせちに思ひける女の亡せにけるがまた人のむすめにうまれぬと夢にみ侍りければ　　しのぶもぢずりの右大將

忘らるゝ折のあらばやまどろまむいかでか見けむ思ひ寐の夢

みかどにほのかに御らんぜられ給ひて後ゆくへ知られたてまつらせ給はざりける頃の手習に　　いふのしるべの中宮

いかなりし夢の名殘のさめやらで今も乾かぬ袂なるらむ

女の行方しらで歎き侍りけるころ　　あさくらの關白

明けぬ夜の中にもやがて惑ふかなはかなき夢を見るとせしまに

はるかなるほどに侍りける頃みやこに思ひおきける女のつらきさまに夢にみえ侍りければつかはしける　　はつねの入道太政大臣

戀ひわびて慰めかぬる夢路にもいかに見えつるつらさなるらむ

物思ひけるころ扇にかきつけ侍りける　　やみのうつゝの左大将

長き夜をまどろまでのみ明かすとも知らでや人の夢をみるらむ

女をたゞ一たび忍びて御らんじて後よませ給ひける　　うきなみの一條院御歌

いかでまた思ひあはせむ宵の間に見もあへざりし夢のみしかな

はづかに御らんぜられたりける女の御夢に見えたてまつりて侍りければ　　わたらぬなかのみかどの御歌

うば玉の夢ばかりなるあふ事を語りあはせむうつゝともがな

おやの護りていと逢ひがたかりける女のもとに忍びてつかはしける　　人にかはれるの大將

みし夢をいかにしてかは語るべき逢ひ見む事のこの世ならねば

だいしらず　　なるとの中納言

哀れてふ人だにあらば語らばや見はてぬ夢の忘れがたさを

いと忍びて侍りける女に遣はしける　　あひすみくろしきの内大臣

思ひいづやあるか無きかに見し夢はいかならむ夜に語り合はせむ

かへし　　源大納言三君

ほのめきし曉がたにちかへてし夢よかけても語らざらなむ

○語りあはせむ云々　夢の中で逢つたことなどを語り合ふ現實もないものかと云ふ嘆きの言葉である

○見はてぬ夢　男女の睦事を云ふ

○かけても　心になくいさゝかるつゆばかりも等に云ふ。

みかどにほのかに御らんぜられて侍りける後心ち限りになりてよめる

みかきが原の前左大臣三君

後の世と契りしばかりたのまれて絶えにし中の夢の浮橋

いとせちに思ひける女にたゞしばし添ひて侍りけるが行方しらずなりにければ

ちゞにくだくる左大臣

夢とのみ思ひなせども見しまゝの面影にこそ忘れわびぬれ

御心ざしありて宣はせける女のあらぬさまになりにければ

いはでしのぶのさがの院御歌

忘ればやと憂きに幾たび思へどもなほ面影の身をも離れぬ

つれなくみえ侍りける女の「いのちの後をたのめても見む」と聞えけるをおぼし出でてよませ給ひける

よその思ひのみかどの御歌

もの思ふ命をのみも厭ふかな契りし後の世をたのみつゝ

中納言よそながら語らひける女をつひには見るべきものに思ひて侍りけるにおやひき違へごと人につけて侍りかければ「くり返しなほかへしても思ひ出でよかくはれとは契らざりきな」と申して侍りければ

はま松の大貳女

○心ち限り　一處懸命になること

○たのまれて　頼はれてに同じ。

○夢の浮橋　もと大和國の吉野川に夢の和太といふ名所があつた。そこに渡せる浮橋を云つたのだが後には世の憂きに歎くに譬へでもいひ、また夢の和太の夢をとりてたゞ夢の事にのみもいひ慣れて來た。また行幸の道に架ける橋を、浮橋と云ふ。

○心ひとつ　心ばかりに同じ。續後選集「あひ見ては心ひとつを河島の水の流れて絶えじとぞ思ふ」○しづのをだまき　倭文の苧環。布の文ある織物の名。苧環とは、績長く續けて紡ました絲の圓く手毬のやうに卷いたもの。伊勢物語「古の倭文の苧環くり返し昔を今になすよしもがな」

○同じ世に云々　お互ひに待ち焦れる時間ではあるが、どうか慰めを持って過ぎてくれろと云ふ意である。

○なげくべき事　戀愛の道に譬へて云ふ。

物語三
契りしを心ひとつに忘れねどいかゞはすべきしづのをだまき

ひのもとの中納言かへりわたらむとゝ侍りけるに八韻の詩にそへて

おなじもろこしの大臣五君

物語一拾　百番歌合二十六番
今や訪ふとくや見ゆると待ちつゝも同じ世にこそ慰めて經れ

けふ物語

御こゝろにもあらず右大將の許におはしましける頃おもほす事ありて

めもあはぬの右大臣の皇后宮

同じ世にかばかり物を思ふとも知らでや人の忘れゆくらむ

ちゝみこ我なむ世に久しうあるまじとて右大臣にねんごろに申しおきて程なくかくれ侍りにける後おとゞ久しかれ果てにければつかはしける

うつぼの式部卿のみこの中君

寢覺中
結び置きてわが垂乳根は別れにきいかにせよとて忘れ果てしぞ

右のおほいまうち君ほかに遣はせりける文を後冷泉院たづねとらせ給ひてしのびて給はすとて「いかにして思ひ知らせむと思ひしをこれこそ神のたすけなりけれ」人なぞともに宣はせて侍りける御かへし

心高き宣旨

限りぞと思ひ絶えにしそとの日より又なげくべき事もなき身を

忍びて物いひわたりける女のこと人に迎へられにければつかはしける

ねざめの關白

限りとて思ひ絶えにし世の中に涙しもなど盡きせざるらむ

誰とも知らで物申しける女のいとたぐひなくおぼえ侍りければ今すここを尋ぬべきさまに語らひおきける所にゆきても空しうたちわづらひて笛ふきうたなどうたひける末つかた返しなどはおろかならずとふたかへりばかりの後神うたに歌ひ侍りけるを

ただえぬよの春宮大夫

あふ事はまたなき中にいかなれば涙ばかりの絶えぬなるらむ

これを聞きゐたるもいと堪へがたくて心のうちに

ないしのかみ

人はかく涙ばかりを（本ノ）かこちけり我は命も絶えぬべき身ぞ

をとこの見まうくはまで來し心になむあるべきといひけるに

ひとりごとの按察大納言女

いかにせむ絶えなむも憂し青葛（あをつづら）くるはくるしと思ふものから

御門おもほし忘れたるにやとおぼえ給ひけるころ

秋のよながしとわぶるの齋院の母后

いつのまに契りしことは忘草しげれる中となし果てつらむ

○涙しもなど　「しも」は調子に添へた付語で意はない。又、「し」は「も」の強語で、單に、もと云ふに同じ。

○見まうく　見ることのもの憂いと云ふ意。

○青葛　青かづらに同じ。蔓草なので、下の「くるはくるし」の繰るに、來るを云ひ掛けた。

○ものから　ものゆゑ。

〇竹など近き云々　古今集「木にはあらず草にもあらぬ竹のよのはしに我が身はなりぬべらなり」とあれば、竹のうつろで、節があるのに思ひよせたのもであらうか。

〇よゝ　竹の節々に、夜々を云ひ掛けた。

〇うら　浦に、心を云ひ掛けた。

右大臣の一條の家にこれかれ住ませ侍りける心かはりにければみな便りにつけつゝちり〴〵になりけるに竹など近きはしらにかきつけ侍りける　　うつぼの橘右大臣のいもうと

譜閑下
こぬ人を待ちわたりつる我ならでまがきの竹も誰を拂はむ

ものおもほしけるころ竹の風にそゝめくを御らんじいだして　　こまむかへのみかどの御歌

思ひ出でよおつる涙にくれ竹のよゝにもかかる歎きありきや

尙侍心にもあらずうちに參り侍りける頃「たのみ來しことぞかなしきくれ竹の」と書きて侍りけるを見て　　たまもにあそぶ關白

吳竹のよゝに絕えじと思ひしをいかで空しき中となりけむ

内に參らむとし侍りける後のおふせたさま〴〵契りて「いはほに生ふるまつほどは」と申しける人の返しに　　おなじ春宮のはゝ女御

契りきと我はわすれず思ふともいはほに生ふるまつ人もあらじ

六條院あかしの上の事ほのめかし宣はせたりける御かへし　　むらさきのうへ

明石
うらなくも思ひけるかな契りしをまつより浪は越えじものぞと

もの申しける女の許にこと人のまかり通ふと聞きてつかはしける

浮舟 百番歌合三十三番
なみ越ゆる頃ともしらず末の松まつらむとのみ思ひけるかな　　かをる大將

飛鳥井のこと更に思ひ忘れず底のもくづまでたづねまほしうおぼされけれぱ　　さごろものみかどの御うた

物語二上 百番歌合六十四番
思ひやる心いづくにあひぬらむうみ山とだに知らぬ別れに

關白いとせちにいひ寄りて人たがへしたるさまに見え侍りければ　　みかはにさけるの女院御匣

拾 百番歌合三十八番
歎きこり道まどひける山人のきゝてにかかる物を思ふよ

山里に人を知りおきて通ひけるにたび重なりければ宿直のものなど起きてまもらする事になりてえあはでかへり侍るとて　　にほふ兵部卿のみこ

浮舟 百番歌合四十二番
いづくにか身をば捨てむとしら雲のかゝらぬ山もなく／＼ぞ行く

いとつれなく見えたてまつりける女のはては病にさへなりにければよませ給ひける　　風につれなきのよし野院御歌

ありしよの憂きにはたゞに消えなまし何に命の長き思ひぞ

○なみ越ゆる　自分の思つてゐる女に通ふ男を、浪に譬へて云ふ。後拾遺集「契りきなかたみに袖を絞りつゝ末の松山浪こさじとは」

○飛鳥井　催馬樂の曲の名。

○歎きこり　歎きを「木」にかけて樵るといつた。

○たゞに　むだに、むなしく、ただちに、まのあたり等。

○亂れし玉　歎いてゐる自分に譬へて云ふ。

○影とめし　その面影を心に抱いてゐたと云ふ意。

○こととへ　言問。ものいひ、語らひ。

○内わたり　禁裏のうち、おほうち。

○露のかごと　戀の歎きを云ふ。

心ちそこなへりけるにいさゝかおこたりてのち女のもとにつかはしける

ひぢぬいしまの關白

たえぬべく亂れし玉の誰ゆゑにけふまでかゝる命とか知る

心ならず隔たりてあひがたくなりにける女に病にわづらひける頃つかはしける

おやこの中の内大臣

さりともと思ふばかりに影とめし命も今は限りなりけり

心ち限りになりて侍りけるに女院しのびてわたりおはしましたりければ聞え侍りける

いはでしのぶの一條院内大臣

こととへよ戀も恨みもはれやらで誰ゆゑならず闇にまどはば

みかどにはつかにみえ奉りて侍りける後こゝろならぬ事もありぬべかりけるを思ひわびて世をそむきて侍りけるが限りの樣にさへなりにければ内わたりにさぶらひける人につかはしける

みかきが原の前左大臣三君

背けどもこの世ながらは忘れぬに身をかへてこそ慰みもせめ

この文をみかどに見せたてまつるとて

ふぢつぼの中納言

夢にだに知らぬも悲し君にこそわきてかくべき露のかごとを

ときはに忍びてすみ侍りけるに心ちかぎりになりて

あすかゐ

○命　戀の命を云ふ。

○あくがれ云々　夢に見た人に思ひを寄せるを云ふ。

○なからなむ　半ばぞと云ふ意。

○袖のうら　浦に裏を云ひ掛く。袖の浦は出羽の國に在る。○うつせ貝　石花貝。せがひの殼。身のないのを我が魂の空しさに譬へた。

○みつせ川　三瀬川。三途の川を云ふ。

物語古本四下　百番歌合六十八番
存へてあらば逢ふ夜を待つべきに命はつきぬ人はとひ來ず

ねざめのひろさはの准后こゝろにもあらずおい關白にむかへられてな
げき侍りける頃わか關白の夢にみえ侍りけるうた、

物思ふにあくがれ出でてうき身にはそふ魂も泣く〳〵ぞ經る　心高き後冷泉院御歌

宣旨ゆくへしられ奉らずなりてのち「今はむなしきからとしらずや」と
聞ゆると御夢に御らんじて

拾　百番歌合七十七番
戀ひわびて惑ふわが魂ことならば空しきからの行方尋ねよ

だいしらず　うつぼの侍從なかずみ

葉末君
人を思ふわが身の魂になからなむ空しきからは歎きしもせじ

拾　百番歌合七十九番
あひ難かりける女のあたりなる人にいひ侍りける　あまのかるもの權大納言

袖のうらに浪よせかくるうつせ貝むなしきからになりや果てなむ　といつかなるべき

しのびて物申しける女のこと人に定まりぬべく聞き侍りければ　うきなみの權中納言

この世にて絶えはてぬともみつせ川いま一たびの逢ふせあらじや

生けらしと身を厭ひても同じよを別れむことは猶ぞ戀しき

かへし　帥宮のむすめ

いかで猶わたり初めけむわたり河いま一たびの逢ふせばかりに
たぐひなく憂き身ながらも同じよにいま幾世かはありときかれむ

いまはの際にあはれなる歌どもかきて皇后宮に奉らせ給へとて一品宮に聞えさせ侍りける　　みかきがはらの宮大將

涙河この世の外にながれぬと袖よりもらせ水莖のあと

をとこの絶えはてにければ尼になりて侍りけるが身をつゝみて彼のをとの車のみえけるにしのびて入れさすとて書きつけける　　たまがしは

うき沈み戀ふる涙のうみなれば今はあまとぞ我はなりぬる

心よりほかの舟の中にて身をかぎりに思ひなりにけるにみかどの「わたる舟人」とかかせ給ひつる扇にかきつけける　　あすかゐ

拾遺物語一下　百番歌合三十四番
楫をたえ命も絕ゆとしらせばや涙の海にしづむ舟人

同じなり海にいりなむとてかきそへ侍りける

同上　同歌合九十一番
早き瀨のそこの水屑になりにきとあふぎの風に吹きも傳へよ

あはれと思ひける女のあはづの濱のほとりにて身をなげにけりと聞きて石山にまうで侍りけるにうちいでのほど過ぐとてよみ侍りける

あさくらの關白

○わたり河　これも三途の川を云ふ。
○身をつゝみて　身を隱してに同じ。
○涙のうみ　歎きの涙に身を浸してゐるのを、海に譬へて云ふ。
○あま　蜑に尼を云ひ掛けた。
○ほかの舟　外の女と云ふ意。
○うちいで　打出の濱。近江國にある。

○こがは　粉河寺。紀伊國那賀郡に在る。

○浮舟　頼まれないこの世を、風のまに〳〵漂ふ浮舟に譬へて云ふ

○そこ　底に、自から志す其處を云ひ掛けた。

拾　百番歌合五十七番

戀ひわびぬ我もなぎさに身をすてて同じ藻屑となりやしなまし

讃一女

故中納言たよりのついでに一夜とまりて又ともとひ侍らざりければ身をなげむとしける所に蝶貝を見つけて袴の腰をひきやりてかゝりの松のすみしてかきてかの中納言に傳へよとてとらせ侍りける　かたのの大領が女

かつ消ゆるうき身の沫となりぬとも誰かは訪はむ跡のしら浪

たゞ人におはしましける時こがはにまうでさせ給ふによし野のあたりにて飛鳥井の事おもほし出でられてかばかりのふかさをだに思ひいりがたげなるこゝいかばかり思ひてかなどおぼしめされて　さごろものみかどの御歌

物語二下　百番歌合五十番

浮舟の便りにゆかむわたつみのそこと教へよ跡のしら浪

あすか井のもの書きて侍りける扇を御らんずるに涙のあといと〳〵著るく給どもにあらはれておちたるを又ながしそへさせ給ふとて

同上　同歌合九十番

涙河ながるゝあとはそれながらしがらみとむる面影ぞなき

○梅が香　女の在所に譬へて云ふ
○たゞち　直路。すぐき路。萬葉集十一「月夜よみ妹に逢はむと直路から我は來れども夜ぞ更けにけろ」
○ほそどの　廊下。

風葉和歌集　卷第十七

戀　五

年を經ていひわたりける女にむつきの朔日につかはし侍りける

うつぼの參議よしみれ行まさ

菊宴
立ちかへる年と共にやつらかりし君が心もあらたまるらむ

宣耀殿女御いまだまゐり侍らざりける頃給はせける

女のすくせしらずの第一御門御歌

九重の霞のよそになげきつゝはれぬ思ひに世をつくせとや

梅のさかりなる所にてもの申して侍りける女の行方しらぬ事をなげきてよめる

まつらの宮の參議氏忠

物語中
とはばやなそれかと匂ふ梅が香にふたゝび見えぬ夢のたゞちを

弘徽殿のほそどのに立ちより給へるにおぼろ月夜に似るものぞなきとうち眺めける女をふととらへさせ給ひて

六條院御うた

花宴　百番歌合二十

ふかき夜の哀れをしるもいる月のおぼろけならぬ契りとぞ思ふ

こゝろならぬこと侍りけるあかつきよみ給ひける

なれてくやしきのかつらのみこ

春の夜のはかなき程の契りゆゑ人のつらさを見つる夢かな

女の許よりかへりてあしたにつかはしける

み山がくれの宰相中將

みるほどもなくて明けぬる春の夜の夢路に惑ふわが心かな

かへし

讀人しらず

春の夜の見はてぬ夢はさもあらばあれ人の心のかからずもがな

はやう見侍りける女のこと人につきて後ものまうでの所にまゐりあひて侍りけるに忍びてつかはしける

時雨の中將これすみ（すけ一本）

みしや夢これやうつゝと辿るまに亂れてあかす春の夜な／＼

右のおほいまうち君またとも問ひ侍らざりけるにおしなりて出でにけるかつらの木の父の年もえいでたるを見て

うつほの內侍督

俊蔭上

忘れじと契らぬ枝は萌えにけり賴めし人ぞ木の芽ならまし

なとこの柳につけて「下にのみ思ひ亂るゝ青柳を」といひて侍りけるかへりことに

ほど／＼のけさうの式部卿宮姫君侍風（從カ）

○いる月　靡き寄つた女に譬へて云ふ。

○みるほども云々　春の夜の淺い契りを歎いて云ふ。

○木の芽　木の芽に「來ね」意をかけた。

一すぢに思ひもよらぬ青柳は風につけつゝさぞ亂るらむ

かしは木の權大納言とかく言ひおこすること侍りける返事に

二品内親王家小侍從

若菜上 いま更に色にないでそ山ざくらおよばぬ枝に心かけきと

女院をはつかに見たてまつらせ給ひて櫻につけてきこえさせ給ひける

あたりさらぬの一條院御歌

今さらに霞み隔てば山櫻ひと目みてきと人にかたらむ

御かへし

春をへて霞はれせぬ山ざくらいかなる折か遠目にも見む

女の許につかはしける

うつぼの中納言雅明

梅花笠 水まさる淀の眞菰の老の世にふかく物思ふ春にもあるかな

山吹を折りて齋院にみせきこえさせ給ふとてくちなしにしもさき初めけむ契りこそと宣はせて

さごろものみかどの御歌

物語一上 百番歌合十六番 いかにせむいはぬ色なる花なれば心のうちを知る人ぞなき

藤の花を女に賜はすとて

はしたかの三條院御歌

あふ事をまつにかゝりて年ふれば袖のみ濡るゝ池のふぢ浪

○風につけつゝ　風に靡く意。風は、上の青柳に配して男に譬へて云ふ。
○言ひおこす　言ひ寄越すこと。

○およばぬ枝云々　心にかけて手折らうとした枝は、つひに届き及ばなかつたと云ふ意。

○霞み隔てば　春の深くなつたのに、人戀ふ心の深くなつた事を譬ふ。山櫻は、前條と同じに戀人を指して云ふ。

○淀　山城國に在る。
○眞菰　草の名。女に譬ふ。古今集「眞菰かる淀の澤水あめ降れば常よりことにまさるわが戀」

○いはぬ色　黄色を云ふ。黄色はくちなしの色で、口なければ言はずと云ふ意より出た言葉。

○袖のみ云々　池水の上にすれすれに垂れ下つた藤衣の房を云ふ。

四季の物語の中に　ほとゝぎすのみかどの御うた

心には猶かゝりけりもろかづら思ひ絶えにしあふひなれども

御かへし　あふひの齋院

言の葉にかけてもなにか思ひ出づる齋の宮の注連の下草

六條院まつり御らんじける御車に奉りける　源典侍

葵

くやしくもかざしけるかな名のみして人だのめなる草葉ばかりを

祭のころ葵かけわたして思ふことたげなるを御らんぜさせ給ひて　よそのおもひのみかどの御歌

草の名をかけても更にかひなきは神のゆるさぬ插頭なりけり

忍びて御らんぜられける女の許にて曉ほとゝぎすの鳴きわたるをきかせ給ひて　たいの先帝の御歌

時鳥なきていづくに過ぎぬらむ我のみつらきしのゝめの空

妹かはりたるはらからあまた侍りける女どもの中につかはしける橘いへ女に　あさつゆの權中納言（將一本）

匂ふともかひやなからむいたづらに我が袖ふれぬ軒の橘

かへし

○もろかづら　兩葵。二種の葵を云ふ。また桂に葵を添へたのも云ふ。後撰集「足引の山に生ふてふもろかづら諸共にこそいはまほしけれ」

○齋の宮　齋のみこの在す所。伊勢の大御神と賀茂の大神にいつき仕へ給ふ皇女を云ふ。また齋王のみこに同じ。

○下草　逢ふ時の臥牀に譬へて云ふ。

○人だのめ　ひとの我に頼みに思はしむるを云ふ。

○草葉ばかり　思ふ花のない事を云ふ。

○草の名　逢ふに云ひ掛けた、葵を指して云ふ。

○軒の橘　兄妹たちの戀心を云ふ橘は妹をかねてゐる。

○忘られて云々　古今集三「五月待つ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする」を云ふのであらう。

○みごもり　水隠に、身ごもるを云ひ掛けた。

○深き蓬云々　蓬は生ひ茂るものなので、戀の深きに譬ふ。「もとの心」とは、その相逢つた當時の心を云ふ。

○ながめ　霖雨に、眺めを云ひ掛けた。

忘られて昔にならむいたづらにわが袖ふれし軒の立花

さごろものみかどの御時
五月五日女の許につかはせ給ける

物語一上　百番歌合二十番
思ひつゝ岩垣沼のあやめ草みごもりながら朽ちはてねとや（やはてなむ百）

たえて久しうおはしまさゞりける所なるものの便りにおもほしいでてたち寄らせ給へるに更にえわけさせ給ふまじき蓬のつゆけさになむ侍る
と申しければ　　六條院御歌

蓬生　百番歌合七十九番
尋ねても我こそとはめ道もなく深き蓬のもとの心を

女のすくせしらずの第二御門御歌
先帝の宣耀殿女御いまだ參り侍らざりけるに五月雨のはれ間なきころ給はせける

人しれぬながめもいとゞ暮らされて慰めがたき頃の空かな

みかはにさける前關白
もの思ひける頃さつきになりてはいとゞひまなき空の景色につけても思ひやるかたなかりければ

我おもふ人に見せばや五月雨の空にもまさる袖のしづくを

こけのころもの一品宮
久しうおとし侍らざりける人にさみだれのひまに遣はされ侍りける

思ひやれ霽れまもみえぬ五月雨に訪はで程ふる袖のしづくを

登華殿女御まかり出でて侍りけるに給はせける　はな宰相のみかどの御歌

夏の夜の夢のたゞぢに往きまよひ出でし有明の影ぞ戀しき

御かへし

有明のわかれし空を眺むれば秋よりさきの露ぞこぼるゝ

女につかはしける　うつぼの右大將すゑふさ

菊夏　夏草におく露よりも果敢なきは君にかゝれる命なりけり

物おもほしける頃ほたるのとびかふを御らんじて　みかきが原の御門の御歌

身を交ふるひとつ思ひの夏蟲もいと我ばかりこがれやはする

六條院なほ人がらのと宣はせたる片つ方に　うつせみのあま

空蟬　百番歌合十九番　うつせみの羽におく露の木がくれて忍び／＼にぬるゝ袖かな

だいしらず　さごろものみかどの御歌

物語一下　同歌合十九番　こゑ立ててなかぬばかりぞ物思ふ身は空蟬に劣りやはする

女の許にうつせみの身にかきつけてつかはしける　うつぼの右大將なかたゞ

祭使　ことのはの露をのみ待つうつ蟬も空しき物と見るがわびしさ

忍びたるをとこのほかざまになりぬべく聞きければみな月の末つ方つかはしける　なれてくやしきの式部卿宮女

○有明の影　有明とは月の空にありながら夜の明けるを云ふ。十六日以後の夜明を云ふ。てその影を思ふ人に譬へて云つたのである。

○秋より云々　秋は涙多いものとされてゐるが、その秋よりも先に涙がこぼれるの意。

○ひとつ思ひ　同じ思ひに同じ。螢も人もと云ふ意。

○ことのは　言、やまとうた。「は」に葉を云ひ掛けた。

○うつ蟬　自分を譬へて云ふ。上の露は、歌に託した情と云ふ意である。

○なごしの月　夏越月。水無月晦日に大祓をする夏越の祓のある月を云ふ。

○ならひ來し　昔は夫婦互ひに離れてゐて、夕に逢ひ朝に別れるのが常であつた。それを指して云ふ。

夏蟲のひとつ思ひにもゆれども待たれぬ秋の風ぞ涼しき

あるまじき事を思ひけるにその女の許に「なごしの月のわびしきは忌むてふ事のなきにぞありける」と人のいひおこせたるを見て傍らにかきつけ侍りける

うつぼの侍従なかすみ

（祭使）人はいさなごしの月ぞ頼まれし瀬々の禊に忘らるゝやと

秋の初めつ方などこのかへりけるあしたに

いはでしのぶの皇后宮

ならひ來し袖の別れも秋はなほ身にしむ色の露ぞこぼるゝ

心ざしありける女に離れて又のとし七月ばかり秋といふ名もわきて身にしむ風の音にいとゞ思ひくだけてよみ侍りける

おなじ一條院内大臣

別れにし名には古りぬる秋なれど猶おどろかす風の音かな

中宮いでさせ給ひていと寂しうおはしましけるに聞えさせ給ひける

みかきが原の御かどの御歌

干さでまた秋にあはむと思ひきや別れし袖の露のふかさを

藤つぼの女御いまだ參り侍らざりけるに七月七日給はせける

うつぼのみかどの御歌

（祭使）つれもなき人を待つまに七夕のあふ夜もあまた過ぎにけるかな

○露の亂れ　狂はしいほどの戀と云ふ意。
○あだ人　浮氣の人、心の定まらぬ人。
○とまる　宿る、止る等に云ふも此處は宿る意を延引して、住みると云ふ意であらう。
○下荻　下葉の荻で、自分を卑下して云ふ。

うち解けては御らんぜられざりける女に給はせける　　なだゝのぬまの春宮

吹きむすぶ露の亂れもなかりしを何と身にしむ荻の葉風ぞ

ものの便りに御らんぜられたりける女の有樣さだまりにけるに高やかなる荻につけてつかはさせ給ひける　　六條院御うた

夕顏 百番歌合十五番
ほのかにも軒端の荻をむすばずば露のかごとを何にかけまし

思ひむすぼゝる事ありて端つ方に眺むるに折知りがほにこたふる荻のうは風もけにあやしき程なりければ　　有門前中務卿みこの北方

あだ人の心の秋のみえしより我が身にとまる荻のうは風

と獨りごちけるを立ち聞きてふとさしよりて　　左大臣

下荻のわれにし靡く風ならばあだなる秋のこゝろは知らせじ

みかど御心かはり世のつねならで年へぬる秋の夕ながめて風にとまらぬ露もうらやましうといひかれ侍りければ　　よその思ひの蓬華殿女御

きえねかし袖の涙の露とだにうき身をはらふ秋風もがな

野分のまぎれに皇后宮を見たてまつりてのち心ち限りになりにければ　　みかきが原の宮大將
中務内侍につかはしける

身にしみて思ひ出づるも戀しきにその秋風の露と消えなで

○そよ　物の風に吹かれ、又搖れ相觸れて鳴る音に、それよ、その事よ、などの意を云ひ掛く。風のそよぐ音に、女の同意する返事を掛けたのである。

○かたみ　契つた思ひ出を云ふ。露は、涙の意。

○秋風　憂鬱の情に譬ふ。

秋の野かきたる扇をもちて侍りけるにみかどいもうとの事をおぼして「心には注繩結ひおきし萩の枝を」と書きけがさせ給へりければ　さ衣の宰相中將

物語三下
おしなべて標繩結ひわたす秋の野に小萩が露をかけじとぞ思ふ

その後いもうとの許に　みかどの御うた

同上
一かたに思ひ亂るゝ篠すゝき風の便りにほのめかしきや

女のもとにつかはしける　いはやの左兵衞督

花すゝき末こす風のほのかにもそよとこたふる聲を聞かばや

左大將かたみにとて單衣をきかへて侍りけるに久しうおとづれ侍らざりける頃すゝきにつけてつかはしける　いせをの式部卿のみこの中君

忘るなと言ひしかたみを思ひおきて招く尾花の袖ぞ露けき

いとつれなき女に秋の頃つかはしける　うつぼの中納言雅明

招くかと見る程だにも慰めむ野べの尾花に風は吹かなむ

かへし　ふぢつぼの女御

身にさむみ人の物思ふ秋風に靡く尾花を賴まざらなむ

たち花の右大臣かれ果てて侍りけるころ薄のまねくをみてよめる

うつぼの左大臣北方

忍乙
まつ人の袖かとみれば花すゝき身の秋風に靡くなりけり

おなじ頃さま〲恨みつかはしけれどなほざりなる返事ばかりして侍りければ

同上
しら露に色かはりゆく秋萩は玉(たま)巻く葛の(一本物語も)かひなかりけり

みかど久しう訪はせ給はざりけるによませ給ひける　うたゝねのさいのみや

秋の夜の草葉におきてあかせどもつゆ哀れとて訪ふ人もなし

秋のころ山里なりける女のもとに籠りてたゞに歸りてよめる　たゆみなきの中將

いたづらに秋の野山の露わけてさも干しわぶる袖の上かな

返事せぬ女に　なるとの中納言

玉札(たまづさ)のあとも見えねば初鴈の思ひつらねてねをのみぞなく

かへし　大納言女

初鴈のうはの空なる玉札は書きつらぬともあとやなからむ

中宮いまだ參り給はざりけるに聞えさせ給ひける　かやがしたなれのさがの院御歌

何にかは命をかけむつれなくてあきのみまさる風のけしきを

○玉卷く葛　普通の葛のこと。葛は蔓の末の方は圓くなつて玉を卷いたやうに見えるのでさう云ふ。萩の異名を玉見草と云ふから、つひに君と逢へなかつた事に掛けて云ふ。
○草葉　果敢ない獨り寐の狀に譬ふ。
○たゞに歸り　契らずに歸ること。
○露わけて　女の許を訪ねゆく道すがらを云ふ。
○玉札　玉章に同じ、手紙。
○初鴈の云々　唐土、漢の代に蘇武といふ詩人、手紙を鴈につけて故國に送つた、その舊事から、鴈の使、鴈の玉章などの言葉が生れたのである。
○風のけしき　風聞に譬ふ。上の「あき」は、秋に飽きを云ひ掛けた。

○凩の云々　世間をよそに見てゐる意を云ふ。
○ひま　乾かす間。
○いつまでか云々　世の中の風評なんかと思つてゐても、時には心を傷めることがあるの意。山の風は世の風評に譬ふ。
○ならはぬ　經驗のない意。
○さや　「や」は感歎詞、呼びかける言葉、また疑ふ言葉。さうはの意。

御返し、かはりてたてまつりける　前大おほいまうち君の北の方

大かたの秋のならひの風の音をつれなき色に何かこつらむ

いさゝか物申して侍りける女のあたりにつかはしける　はぎにやどかる大將

もらさばや身にしむ秋の風の音に下葉の露のたえて消えぬと

野分しける日女のもとに遣はしける　夕ぎりの右大臣

（野分 百番歌合十八番）風さわぎむら雲まよふ夕にも忘るゝ間なくわすられぬ君

風のあらくしき日女に袖をかはして　袖ぬらす大おほいまうち君

凩の風もよそにぞ聞きわたるかはせる袖のひましなければ

かへし　准后

いつまでかよそにも聞かむともすれば身にしみぬべき山の嵐を

秋の頃はなれて侍りける女につかはしける　とりかへばやの内大臣

（百番歌合八十七番）戀ひわびて長き夜すがらねざむればならはぬ秋の風をしるかな（月をみる同上）

かへし　檻中納言（一本母女）

君はさや思ひ知るらむ我はたゞいつともわかずあきの心は

八十五夜中宮をはつかに見たてまつりて　いはでしのぶの左衞門督

おなじ夜の月のくもりて侍りけるにこそ隈なかりしが思ひ出でらるゝ

事はべりければ　　雲ゐの月の左大将

戀ひわぶる涙や空にくもるらむ見し夜にも似ぬ秋の月影

だいしらず　　さごろものみかどの御歌

物語一下 百番歌合六十三番
敷妙の枕ご斐きて流れぬるいもなき牀の秋の寐覺に

六條御息所むすめの齋宮に具して下らむとし侍りけるにながつきの初めつ方たちよらせ給へるに明けゆく空のけしきこと更につくりいでたらむやうなれば　　六條院御歌

鬻木 百番歌合三十九番
曉の別れはいつも露けきをこはよにしらぬ秋の空かな

御かへし

同上
大かたの秋の別れも戀しきになく音なそへそ野べのまつ蟲

忍びたる所よりいでける曉よみ侍りける　　よその思ひの右大將

君ゆゑのつらき別れは馴れぬれど猶まどはるゝ秋の空かな

女の許にまかりける路に霧のふもとをこめてたちわたりければ　　河霧の内大臣

川霧は行くべき方を隔つれど心のかよふ道はたどらず

いとしのびたる女のもとより歸り侍りける路に霧のたちこめたりける　　うきなみの檣中納言

に

○見し夜　曾つて見た夜の意。「月影」は、思ふ女に譬ふ。

○敷妙　寐牀に布くもの、敷布。また織目しげき妙なりとも云ふ。敷妙は、衣、袖、牀、枕、家などの枕詞。

○つくり　拵へた様に、繪のやうに美しいの意。

○こはよに云々　これは世に覺えのないと云ふ意。賞めた言葉である。

○まつ蟲　人を待つ自分に譬ふ。

○まどはるゝ　秋の空の移りやすき意に、男の顧みがたい心を云ふ。

今朝の間の川せの霧の隔てだに立ち別るゝはくるしき（はかな一本）ものを

思ふ事はべりて石山に詣で侍りけるに山のもみぢのいとおもしろきを見て　道心すゝむる右大臣

もみぢ葉の色はものかは涙のみかゝる袖こそ濃さまさりけれ

志賀に詣でて紅葉の露にぬれたるを折りて女につかはしける　うつぼの中納言實忠

嵯峨院

わが戀は秋の山べにみちぬらし袖より外に濡るゝ紅葉ば

だいしらず　むらさきのうへ

若菜上　拾　百番歌合七十三番

身に近く秋や來ぬらむ見るまゝに青葉の山も移ろひにけり

みかどとかへる山の椽きらせ給ひけるを思ひいでてきこえけるにやと

常磐に侍りける頃はしらにかきつけける　あすかゐ

物語三下　百番歌合三十七番

言の葉を猶や頼まむはしたかのとかへる山は紅葉しぬとも

あすかゐ常磐にわたり侍るとて「變らじと言ひしばしは待ちみばや常磐の杜に秋や見ゆると」と申し侍りけるをうせて後きかせ給ひて　さごろものみかどの御歌

物語三上　百番歌合六十六番

秋の色はさもこそ見えめ頼めしをまたぬ命のつらくもあるかな

○濃さまさり　紅葉の色よりも、涙にぬれた袖の方が濃いと云ふ意

○見るまゝ　見るうちに。

○はしたか　鷹の一種。

○とかへる　鳥屋返。羽毛の生え代るを云ふ。鷹に云ふ詞。鷹の、と歸る意に、更に越前國に在る歸山を云ひ掛けた。拾遺集「はしたかのとかへる山のしひしばの羽がへはすとも君は歸せじ」

○またぬ命　頼み多き秋に先立つた命の意。

吉野の院宇治入道關白のむすめ神無月に參るべしとて心もとなく待たせ給ふ御けしきみえさせ給ひければ　　風につれなきのさがの入道后宮

うつり行く人の心の秋の色にしぐれも待たずぬるゝ袖かな

橘の右大臣かれ／＼に通ひ侍りけるも絶えはてにければつかはしける　　うつほの左大臣北方

我が宿にとき／＼吹きし秋風もいとゞあらしとなるが侘びしさ

女にたまはせける　　玉もにあそぶの東宮

秋深き萩の上吹く風の音のそよなぞかかる物思ふらむ

だいしらず　　讀人しらず 有明別

君とはで幾よへぬらむ淺茅原はすゑの露の色かはるまで

道賴卿臣すゝきの枯れたるを結びてこれ見よとておこせて侍りければ　　秋のよながしとわぶる弘徽殿左近

ほに出でていはねどつらし花薄秋はてがたにかゝるけしきは

神無月の初めつかた女につかはしける　　あさくら山の中將

いつのまに今朝は袂のしぐるらむ朽ちにし袖も昨日かへしに

物思ひける頃しぐるゝ空をみて　　道心すゝむる右大臣

○しぐれも待たず云々　その秋の時雨もまたずに、泣く涙でぬれぬれる。秋に「飽き」を云ひかけた。

○おこせて　寄越したこと。

○ほに出で　物事のおもてに顯はれ出ること。薄の穗に云ひ掛けた。

○けしき　自分に喩らへた薄の枯れ果てた有樣に云ふ。

○朽ちにし袂　涙に濡れつくした袂と云ふ意。

かきくらす空の時雨はしぐれかは身よりあまれる夜半の涙を

神無月ばかり女のもとにまかりて人たがへしてかへる朝にもとこゝろざし侍りける人につかはしける　　さとのしるべの大將

それと見し雲まの月のさてもなどよその時雨にかき暮すらむ

かへし　　式部卿宮三君

しぐれける雲まの月のよそながら誰が面影を思ひいづらむ

右大將夜かれして歸りたるあした霜枯れゆく前栽のけしきのあはれなる樣などきこえければ　　いはでしのぶの女四のみこ

契りこし露のかごとはかれ果てて尾花か袖に霜むすべとや

皇后宮こゝろならず久しうまゐり給はざりけるころ御袖の氷もいと解けがたう明かしかねさせ給ひて聞えさせ給ひける　　おなじさがの院の御歌

片敷のさゆる霜夜の衣手にかゝる涙のほどを見せばや

をとこの夜深く出でにける曉をながめて侍りける女の許にたち寄りたるをもとの人と思ひて「いかでかくたち歸るらむ夜をこめて明かしもはてずいづるみちより」と申し侍りければ　　みかはにさける前關白

拾 百番歌合四十番

えぞ行かぬまだ霜深き明暮の別れの道はたち歸りつゝ

○しぐれかは　「かは」は疑ふ言葉。果してそれが時雨といへようか。それよりも我が身の涙こそ眞の時雨である。

○しぐれける雲まの月　歎き暮す女に譬ふ。

○露のかごと　情事を云ふ。
○かれ　離れに、枯れを云ひ掛けた。
○袖の氷　泣き暮したので、袖の涙が凍りついて氷のやうに見えることを云ふ。

をとこのこと人に定まりにけるにつかはしける　　かいばみの兵部卿のみこの女

みるまゝに野べの淺茅もかれ果てぬうき身しもなど消え殘るらむ

みこにおはしましける時御心ならず夜をへだてさせ給ひける女のもと
につかはさせ給ひける　　なみのしめゆふの御門の御歌

知らざりきしづ心なく浪騷ぐ汀にをしのうき寐せむとは

うちに久しうさぶらひてえ罷でざりけるころ女一のみこに聞え侍りけ
る　　右大將なかたゞ

藏開中
から衣たちならしてし百敷の袖冰りつる今宵なになり　りけ物語

五節の舞姫のすぐれて見えけるにつかはしける　　かほよきまひびめの藏人少將

いかにせむ少女の姿こひしくば天つ空をやいとゞながめむ

かへし　　とばりあげの君

あまつ空をとめの姿ながむとも雲の袂はまだ見えむかも

五節のころ大納言典侍のざうしに立ちよりて　　みかきがはらの右大將

つれなくてさて山藍の袖の色冰れる上に結ぼほれつゝ

忍びたるをとこの師走ばかりにこと女に定まるべしと聞きてつかはし
ける　　露のやどりの修理大夫女

○汀　汀は水の端なので、自分の心の隅に、かすかに思ひ起された記憶に譬ふ。下の「をし」は鴛鴦に惜しを云ひ掛けた。

○たちならし　上二字の、「たち」は、から衣の枕詞を受けて裁ちに云ひ掛けた。たちならしとは、下の百敷に通はして、雲上人である女の許へ親しく訪問に出掛ける意を云ふ。

○天つ空云々　古今集「天津風雲の通ひ路ふきとぢよ少女の姿しばしとゞめむ」の意を指して云ふのである。

○雲の袂云々　夫木集十九「大空に覆くおほふ雲の袖ロうるふ雨くだるなり」の意を指して云ふのである。

○山藍　山中に自生に生え出る藍の一種、萬葉集九「山藍もてすれる衣きてたゞひとりいわたらす子は若草の夫かあるらむ」

隙もりしことだに絶えて忘水こほりとぢめむ程ぞ戀しき

雪ふかく降りつみたるころ山里に住みける女のもと語らひて　にほふ兵部卿宮

浮舟　百番歌合三十二番
峯の雪みぎはの氷ふみ分けて君にぞ迷ふ道はまどはず

なとこの雪のふる日出でけるをかくるゝまで見送りてよめる　うきなみの藤中納言女

頼めなく程をいつともしら雪の待たで消ぬべきけふの暮かな

先帝宣耀殿女御いまだ參り侍らざりける頃たまはせける　女のすくせしらずの第二御門御歌

わりなしや山のしら雪ふりぬとて深き思ひのきゆるものかは

女四のみこの常磐に籠れりけるに遙々と見え渡れる池の面にふりいる雪はやがて氷にとぢ重なれるも思ひよそへられければ　みなせ川の宰中納言

水の面にかつ氷りゆくしら雪のいつまでとけぬ物を思はむ

雪のふりける夜心にもあらずまからずなりにける女の許にあしたにつかはしける　源氏のひげくろの右大臣

槇柱　拾百番歌合四十番
心さへ空に亂れし雪もよに獨りさえつる片敷きの袖

○忘水　物の陰などに隠れこゐて人に知られぬ水。忘れられてしまつた自分に譬へて云ふ。詞花集「住吉の淺澤小野の忘水たえ〴〵ならで逢ふよしもがな」

○雪もよ　たゞ雪と云ふに同じ。上の「亂れ」は、心と雪に掛けて云ふ。

風葉和歌集　卷第十八

雜一

水末にかはる女院はじめうちにけたてる樣に御らんぜられ給へりける

あしたむ月の朔日なりければ聞えさせ給ひける　はつれい高陽院の御歌

昨日までしたはむせびし池水にけさは千とせの影ぞのどけき

御返し、かはりてたてまつり侍りける　入道おほきおほいまうち君

池水ものどけき御代の驗にや春たつ今朝はすみまさるらむ

紀伊國に侍りける春のはじめに鶯のなくを聞きて　あまのもしほびの大僧都

新まる今日もよそなる谷の戸になに鶯の春をつぐらむ

だいしらず　いちゐひろひの大納言北方

數ならぬ賤が垣根の梅が枝に身をうぐひすの音をのみぞ鳴く

内大臣かくれて後一條院の紅梅も時を忘れずさきぬらむと人のいふをきかせ給ひて　いはでしのぶの女院

○昨日まで云々　憂國の情を池水に譬へて云ふ。「した」に、下に心を云ひ掛けた。

○谷の戸　谷の口、谷の入口などを云ふ。

○身を云々　鶯の、「う」に、憂を云ひ掛けた。

鶯も春やむかしと忘るなよ荒れまく惜しき花のふる里

大將におはしましける時内大臣の入りける所を忍びてかいばみ給ひけるにおとゞ程なく出でにければ女になつかしきさまに語らはせ給ひて

有明のわかれの女院

袖かけて折りもみてまし梅の花人の標繩ゆふ插頭(かざし)ならずば

御かへし　讀人しらず

しめゆひし昔の影のかれしより人も尋ねぬ宿の梅が香（え一本）

宇治の中君

姉なくなりてのち人の蕨をおこせたりける返し

早蕨　拾　百番歌合六十七番

この春は誰にかみせむなき人のかたみにつめる峯のさ蕨

もの思ひけるころ木々の梢の靑みわたれるを見て　老人のかたみの源大納言女

人しれぬ歎きはいつもたえせねども萌え出づる春は侘しかりけり

土佐國室ふといふ所にすむ頃かへる鴈をききて　すまひの修理亮

鴈がねにことやつけまし君がすむ都もおなじ方とこそ聞け

御位のとき女院の一條院におはしましけるに聞えさせ給ひける

いはでしのぶのさがの院御歌

思ひきや雲居に月の影たえて霞の中にながむべしとは

○荒れまく惜しき　「まく」は未來をいふ助動詞、むに同じ。荒れるを惜しむ意。

○袖かけて云々　同じ手折るのでも、その人が女なので、袖かけてと優しく云つたのである、梅の花は男に譬ふ。

○標繩ゆふ　注連繩は境に引くもの。前に詳した。

○插頭　髮にさして飾りとするもの。

○かたみ　形見に、筐を云ひ掛けた。

○ことや　便りを云ふ。

○霞の中　遠方と云ふ意。

○馴れし名殘　情事を指して云ふ
○月と花と　何かにつけてもと云ふ意。
○花のあたりの月影　逢引の有樣に譬へて云ふ。
○雨露　憂き世に譬ふ。「枝」は、自分を指して云ふ。

この御文のかたはしに書きつけさせ給ひける　女院

涙のみ霞の遠(なら)にふりまがひ(よ一本)光も見えず夜半の月影

前坊わづらひて出でさせ給ひけるに聞えさせ給ひける　水のしら濱の朱雀院御歌

年を經てのどかにてらせ雲の上に影ならべつる春の夜の月

御子のみやと申しける時いでさせ給ふ事ありけるに右大將に宣はせける　よその思ひのみかどの御うた

誰もまた馴れし名殘は忘れじな月と花との折につけても

世をそむかむと思ひたちて后のみやに詣でて女房に申し侍りける　二はの松の中納言

心しむる花のあたりの月影もこれや限りのながめなるべき

中納言すゞし宮つかへもせで吹上といふ所にこもりゐて侍りけるころ人々まうで來てあそびけるにいだしけるものの中にかきつけて侍りける　うつぼの紀伊守たれ松が女

(吹上上)さくら花春はくれども雨露に知られぬ枝とみるぞ悲しき

はやうおはしましける所に年月ありてたちかへらせ給へるに花の盛りなるを御らんじて　はしたかの女院

古郷の花もいかにと思ふらむ憂きをも知らず歸りきぬれば　辨内侍

限りなき花の盛りはありけるをうき古郷と何おもひけむ

心にもあらず春宮の御あたりもかけ離れて山里に侍りけるころ　ただえのぬまの内侍督

いかにしていづれの世にか霞はれ春の都の花をみるべき

だいしらず　おなじ右大臣

たぐひなき花の匂ひを身にしめていま幾とせの春を數かむ

さまかへて日野といふ所にまかりける道に花のおもしろかりければ　こざうしきの大納言女

この世をばうしとて家をいづる身の花に心をとゞむべしやは

世の中はしたなきころ冷泉院にうゑて侍りける花のさかりを見すてて出で侍るとて　みなせ河の左大將

うゑそめし我まづ先にちり果てて今年の春は花や忍ばむ

病おもくなりにける春中納言花の枝を折りてかやうなる梢にてこゝちも慰みなむやとてみせ侍りければ　かさぬる夢の大將

〇霞はれ云々　思ふ人に再びあへる事を云ふ。

〇花の匂ひ　心に包んだ面影に譬へ云ふ。

〇心の松　心に頼もしく思ふ人と云ふ。

〇いう　停止の事を云ふ。

〇霞ゆゑ云々　袖にこめつてゐる有様を云ふ。

あだなりと歎きし花のちらぬ間にさきだちぬべき我ぞ悲しき

こゝち例ならずおぼえけるころ手習に　　袖ぬらすの准后

拾　百番歌合六十七番

さきてちる物とみしかどこの春は花やおくれて我を忍ばむ

これをみて　　おほきおほいまうち君

風の音もよそにきかせて花盛りかくて千年の春をこそ見め

入道兵部卿のみこに藤の花を折りてむかしこの花によそへられ侍りけるをおぼしいでゝつかはさせ給ひける　　露のやどりの一條院御歌

戀しさによそへて見れど慰までなるにもの憂き宿の藤浪

常葉院の御位の時ふぢの花につけて「心の松にかゝる藤なみ」と聞えさせ給へる御かへし　　夢ゆゑもの思ふの中宮

數ならぬ身には雲ゐの藤の花こゝろの松もいかゞしるべき

春の暮つかたこゝちの頼もしげなくおぼえければ　　かすみへだつるの左大將

幾かへり春の別れを惜しみきてうき身をかぎる暮にあふらむ

中宮御いうにて里におはしましけるに彌生のつごもりに聞えさせ給ひける　　よその思ひの御門の御歌

霞ゆゑ厭ふ日數の袖の色に春を惜しまぬ春もありけり

だいしらず　　ひらぬいしまの關白

うち添へて我も聲にやたててまし山時鳥なきわたるなり

ねざめの左大將

うき世には我すみわびぬ郭公しでの山路のしるべやはせぬ

五月の源大納言の女

死出の山しるべと頼む時鳥夜にまどひたるこゑの聞ゆる

一條院かくれさせ給ひて後花橘のかをれる程にほとゝぎす近くこゑすればよませ給ひける　　とこなかの御門の御うた

むかしのみ戀ふと知りてや郭公はな橘をとめて來つらむ

父みこの亡せてのち五月にあやめ葺くをみて　　あたりさらぬ式部卿宮の女

しのぶ草茂りかはれる我が宿になにのあやめを今日しらすらむ

久しう消息もし侍らぬをとこにをさなき子などありければ撫子の花を折りてやるとて　　源氏の夕がほの君

（哥本）山賤の垣穗あるともをり〳〵に哀れはかけよ撫子の露

忍びたる女の許にちごのいで來て侍りけるを人のものに聞きてつかはしける　　藤のうらはの右衛門督

○しでの山　冥途の山に、時鳥の異名の「死出の田長」を云ひ掛けた。古今集「死出の山麓を見てぞ歸りにし辛き人よりまづ越えじとて」

○むかし云々　君と共に在りし日ばかり慕つてゐる自分の心持を知つてか、時鳥は鳴きながら花橘の木陰尋ねて來たのであらうの意。「とめて」は尋ねての意。

○しのぶ草　忍ぶを云ひ掛けた。下の「あやめ」も、菖蒲草に、ものの文理を云ひ掛けた。

○垣穗　垣の末を云ふ。古今集「あな戀し今もみてしが山賤の垣穗に咲ける大和なでしこ」

○よそ　餘所。自分の他にの意。
○露かゝり　戀知り初めたの意。
○いづみ　いつ見に、泉を云ひ掛けた。
○枝ごと　親子もろともを云ふ。
○まつのふるね　松の古根に待つの經る音を云ひ掛けた。
○岸に靡く　親子の情實を云ふ。

人しれず思ひこそやれ撫子のよそにしめ結ふ花の姿を

なでしこの大夫父の大將にしられ侍らざりける頃たゞかくと言ひてむと內侍督にのたまはせてよませ給ひける　　なでしこの院の御歌

なでしこを思ひ出づらむ草葉に露かゝりとも知らせてしがな

四季ものがたりの中に　　いづみのひめ君

忍ばるゝ人はいづみに影たえて拂ふ水草ぞかはりゐにける

左のおほいまうち君子ども具してつり殿にて涼み侍りけるにもろともならぬを聞え侍りけるに　　うつほの嵯峨院の女一御子

葉便 枝ごとにわかずや風の吹きつらむこもれるねさへ涼しかりつる

かへし

同上 奥山にまつのふるねを殘しても岸に靡くぞかひなかりける

七月朔日頃をとこのたち寄りて侍りけるに風の音もなかしう聞えければ　　ひちぬ石まの中務卿宮女

涼しさの常よりもげに知らるゝは我が身に秋の來るなりけり

かへし　　關白

涼しさはなべての風と聞くものをいかにならひし秋のしるしぞ

〇露の身　人を待ちこがれて果敢ない思ひにゐる身に譬ふ。

〇たゞに云々　なんとなしに、心静かに聞いてゐられぬと云ふ意。〇あだし野　仇野。亡骸を葬る野邊を云ふ。徒然草「あだし野の露消ゆる時なく、鳥邊山の煙、たちさらでのみすみ果つるならひならば。」

大將身まかりて後星合を見てながきためしにひきたてしも思ひ出でられければ　　川霧の中宮新中納言

棚機の行きあひの空も別れにし人にもかゝる契りともがな

もの思ひ亂れける氣色をみて心ぼそげに思ひたる人に　　清水にゐるゝ内大臣北方

荻原や末葉における露の身の風まつ程を賴まざらなむ

内大臣の心いかなる樣にみえける折にか御手習にし給ひける　　袖ぬらすの朱雀院女二宮

思ひわく心もなきをいかなればこの秋風のたゞに聞えぬ

うきふしの昔に忍びてあひ住み侍りけるに中將あだし野の風になびくなど云ひて入りたりけるを返事そゝのかしかれて　　小野のあま

手習
移しうゑて思ひ亂れぬをみなへし憂き世をそむく草の庵に

前栽のなかに朝顏のはかなげなるを見て　　しのぶぐさの關白

はかなさはいづれまされる朝顏の日影を待つと假のこの世を

かへし　　中納言

朝顏は日影まつまもあるものを猶うき世こそはかなかりけれ

人を行方しらずなして歎き侍りけるころ尾花の風になびくを見て

○分けつる道　別れ來た道頭を云ふ。
○昔おぼゆる　往時を云ふ。
○風吹けば　君を思へばの意。
○荒れたる宿　古今集「露[illegible]す荒れたる宿の跡のうへに哀れいくよの宿かりしつらむ」の意を指して云ふのであらう。

はま松の中納言

たつぬべき方しなければふる郷の尾花が袖にまかせてぞ見る

うちの中君のもとにて曉ちかくなるまで物語し明かしてあしたにつかはしける　　かをる大將

宿木　拾　百番歌合十番

いたづらに分けつる道の露しげみ昔おぼゆる秋の空かな

前關白女さまかへて侍りけるを語りて恨みけるに蟲の聲あはれに聞えければ　　袖ぬらす太政大臣

拾　百番歌合七十一番

よもすがら思ふ心を知り顔にとぶらふ蟲の聲ぞ悲しき

御作をみそめて又ともえ語らざりけるころ蟲のこゑ亂れたるを聞きても思ひやられ侍りければ　　うつぼの右大臣

俊蔭一

風吹けば聲ふりたつる蟲の音に我も荒れたる宿をこそ思へ

だいしらず　　ふもとの大將

なく蟲の諸共にこそたてねども涙は袖にあまりぬるかな

夕霧左大臣たちよりて侍りけるを柏木の權大納言身にそへてもてあそび侍りける笛を贈りものにして侍りけるをふきならして侍りければ　　一條院御息所

遺　拾　百番歌合六十八番
露しけきむぐらの宿に古の秋にかはらぬ蟲の聲かな

さうの琴に秋風楽をひきて侍りけるを聞きて女御の方より「よそなる人の袖もぬれけり」と申して侍りけるかへし　　煙のしるべの兵部卿宮の女

秋風のふく夕暮の蟲のねに忍ぶることもいざなはれつゝ

秋の夕ちゝ（はゝ一本）のさうのことをひき侍りけるを聞きてさしもあらぬだにすぢは絶えぬものなるになどかとの關白の聞え侍りければ　　我はづかしきの女院

まだしらぬ松ふく風の聲にさへ秋はうき身に先ぞ聞ゆる

世をそむかむと思ひたちて秋にもなりぬるに夕の空をながめて　　いはでしのぶの右大將

山深く身をあき風にさそはれてさこそはなれぬ露も時雨も

父御子かくれての父の年の秋あれの許に遣はしける　　うぢの河浪の師御子の三君

常よりもむかし戀しき夕暮にことの外なる風の音かな

かへし　　式部卿のみこの北方

あさ夕に風に亂るゝ下荻のおどろかすにも露ぞこぼるゝ

野分の後思ひまさるゝ事ありてよめる　　みかきが原の右大將

思ひ草さらでも末の露の身をいかに吹きつる秋のあらしぞ

○むぐらの宿　新古今集四「絶えてやは思ひありとも如何せむ葎が宿の秋の夕暮」を指すのであらう。

○露も時雨も　命も戀もと云ふ意

○思ひ草　をみなへしの異名。思ひに暮す女に喩ふ。

○雲ゐの外云々　御位を下りさせ給ふ事を云ふ。

○山の端　月は山の端に隱れるもので、山を思ふ人に譬へて云ふ意である。

冷泉院のかしこまりゆるさせ給ひてのち女三宮もろともに秋の夕ながめてよみ侍りける　　ねざめの右大將

存ふる命をなどて厭ひけむかかる夕もあはれなりけり

おほん位おりさせ給ひなむ事ちかくおぼしめされける秋清涼殿に月な御らんぜさせ給ひて　　あさぢが露の常世院御製

みるまゝに面がはりすな秋の月雲ゐの外に影はなるとも

八月十五夜つれよりも隈なきに式部卿みこの世をそむきにけむ行方おぼつかなく思ひつゞけられて　　くもゐの月の左大將

世にすまばいづれの山の麓にて今宵の月の影をみるらむ

かしはぎの權大納言のすみ侍りける所な物よりまうでけるついでに見いれければ月の遣水のおもてなあらはに澄ましたりけるに　　夕ぎりの左大將

夕霧
みし人の影すみはてぬ池水に獨りやどもる秋の夜の月

なとこの諸共に月をみてよの果敢なき樣など語らひけるに　　あまのもしほびの中宮新宰相

色かはる我が身の秋はつらけれど月は今夜にかはるあはれを

出家ののち月なみて思ひつゞけける　　おなじ大僧都

これのみやかはらぬ友と眺むればあらぬ袂を月やたどらむ

もの思ひけるころ曉ちかくなるまで月をみ明かして

あひすみくるしき源大納言三君

みるまゝに西にかたぶく月影をうき身の果てと思はましかば

おなじ夜女ともだちと語らひて

影とめてあるべくもなき世の中にのどかにすめる夜はの月かな

かへし　左大辨女

すみのぼる月の影だになかりせばうき世をいかで我すごさまし

女院久しくいらせ給はざりける頃奉らせ給ひける　有明の別れのみかどの御うた

まちかぬる月の光のおそければ雲居の庭の秋ぞかひなき

女二のみこ承香殿にすみ給ひけるに前栽の菊を折らせ給ひて關白に御子のかけものに給はすとて

ひぢぬいはまの朱雀院御歌

わきてをる心もふかし九重にうつろひ果てよ白菊の花

中宮うちにおはしましける頃よみ侍りける

よその思ひの中宮宣旨

おのづから言問ふなみも袖ぬれぬ世をうぢ山の秋の寐覺めに

むすめの許にとき〴〵おとづれけるをとこの「秋はたのめし頼みあれ

○あらぬ　思はぬの意。

○影とめて云々　心に思ひとめる人もないと云ふ意。

○すみのぼる　宿り行く意をも云ひ掛けた。

○月の光　待つ人の忍び來るに譬ふ。

○わきてをる　下の、心も深しに通はして、とりわけて折つたと云ふ意。居るに云ひ掛けた。

○うつろひ云々　自分の傍へ來てくれと云ふ意。「九重」は禁中を云ふ。

○言問ふ　ものいひ、語らひ。

○世をうち山　世の憂きに、宇治山を云ひ掛けた。

○久かたの　ひさかたは、瓢形と云ふを約めた語で、それを天に掛けて云ふのは、天は圓くうつろなので、瓢の内の圓くうつろなるに思ひ寄せたと云ふ。總て空のものにかけて云ふ枕詞。また都に冠らせて云ふのは、都は天皇の在ます處なので、崇みて天になぞらへて云ふ。
○名ふみ　雲上に居らるゝを指して云ふ。
○山伏　山に宿り居るを云ふ。
○みづのを　丹波國に在る水尾。
○そめし色　紅葉を云ふ。襲の色目の名。表は紅裏は青。

ば」と申して侍りける返し　心やりの式部卿の宮の北方

ひたぶるに音はせねども小山田のたのみ空しくなさむものかは

桂におはしましけるに冷泉院より月のすむ河のをちなる里なればと聞えさせ給へりける御かへし　六條院御歌

松風
久かたの光にちかき名のみしてあさ夕霧もはれぬ山里

女のおもひに侍りける頃さがの院へまゐりけるに色づきわたれる楢をみて　こけの衣の右大將臣一本

小倉山みねのもみぢば色づきぬ歎きのみこそ常磐なりけれ

秋のなかばに青葉のちるをみて　とりかへばやいみて物のひじり

秋はまだ深からねども山伏の涙にそふは木の葉なりけり

右少將なかより頭おろしてみづのをに紅葉の頃これかれまかりて歌よみ侍りけるに　うつぼのときかげ

國讓下
古は君が衣にそめし色の今は山路にちりまがふかな

思ひのほかなる事ありて山の中におはしましけるに鹿のなくをきかせ給ひて　よし野山の中宮

我ばかり憂きを覺えぬ鹿だにも山ひゞくまで音をこそはなけ

だいしらず　　まよふ琴のねの中納言

わか事や世をあき果てておく山に妻こひわぶるさを鹿の聲

（式一本）民部卿のみやかくれて後かの家のらに（蘭）をおし折りてよみ侍りける　　あたりさらぬの内大臣

主なくて荒るゝ籬の藤ばかまをるに露けき秋の暮かな

長月のつごもりごろ心ちわづらひてよわく覺えけるによめる　　あまのもしほびの中宮新宰相

たが爲に秋のなごりを惜しむらむけふをすぐべき命ともなく

忍びて御らんぜられける女の行方しらせきこえざりける（れ一本）を亡せぬときこしめし告げける頃しぐるゝ空をながめおはしまして　　みかきが原の御門の御歌

しぐれ行く空をかたみと見るよりはなど同じ世をしらで過ぎけむ

右のおほいまうち君すまひの歸りあるじ侍りけるとき右大將なかたゞ侍從にて琴ひきけるにうなじの寒げなるもかかればぞかしとてあこめをぬぎてかづくとて　　うつぼの右大臣

（俊蔭二）みな人をうづむ紅葉のかゝらぬは風ふくまつと思ふなるべし

もの思ひけるころ風のあらゝかに紅葉を吹くを見出して

○同じ世　同じ歎きと云ふ意。

○あこめ　袙衣。女の童の著る衣。

とこなかの右衛門督の中女

あかず見る紅葉ばよりもかくばかりうき身をさそへ木枯の風

煙のしるべの兵部卿みこの北方

むすめの事を思ひ亂れけるころ

木の葉さへおつる涙にまがふかな心のうちに嵐やは吹く

さごろものさがの院の女二宮

ものおぼしめす頃いろ／＼散りかふ梢をみいだして

物語二上　百番歌合八十九番

ふき拂ふよもの木枯心あらば憂きよを隱す隈もあらせよ

な物語

涙のしめゆふの淑景舍女御

だいしらず

いかにして冬の夜すがらうち拂ふ鴛鴦の上毛の霜と消えなむ

我からのさぬきの守が女

氷のきえゆくをよめる

朝日さす汀の氷人ならば今まで消えぬ歎きせましや

有明のわかれの女院

初雪のあしたに大將にてつかへ給ひしよに仕うまつりし隨身どもの思ひ萎れてさぶらふを遙かに御らんじいだしてかやうなりし折々はおぼしいでられければ

我やそれ見しよは夢にふりにけり尋ねしものを野べの初雪

關白三位の中將に侍りける時山に登りける歸るさに雪のふりければ立

○隈　すみ、かげ、暗き處など、みな此處の意に適ふ。

○いでぞやられぬ　「いで」は感歎詞、誘ひ立つ時、思ひ立つ時に云ふ聲。「ぞ」は動作を禁じる語。いやもう遣られぬと云ふ意。○豐のあかり　豐明。節會の時などの酒宴をたゝへて云ふ言葉。あかりとは、神祭などはてて大御酒を賜ふに、群臣百寮の顔のあかからむ故に云ふと。

ち入りて侍りけるに　　　我が身にたどるの中納言の北方

人とはぬ岩のかけ路の雪のうちにならはぬ月の影をみるかな

かへし

飽かなくにいでぞやられぬ古の名殘とまれる庭の月影

うちにこもりゐて侍りけるころ豐のあかりはけふぞかしと思ひやりて

よめる　　　かたる大將

總角

かきくらし日影もみえぬ奥山に心をくらす頃にもあるかな

父かしら下して行方しられ侍らざりけるに雪のふる日山ぶしはかかる

折こそれなくなれと人のいふを聞きて　　　あさくらの皇太后宮大納言

拾　百番歌合五十二番

行き別れいづれの山に跡たえておつる涙の色かはるらむ

雪のふりつもれるに父の世をそむきにける住居を思ひやりてよめる

われからのさぬの守が女

年ふかきまきの山人いかばかり雪うづもれて思ひきゆらむ

中將出家して後思ひかけすみあひて侍りけるに雪の中にまた出でける

をかくるゝまで見送りて　　　とりかへばやの前關白四君

遠近のしらぬ山路にあくがれてかゝる雪まをいかで分くらむ

心ち例ならず侍りけるにみかど行末とほく契らせ給ひけるに

女すゝみの登華殿女御

この世をばいま幾日ともしら雪の消えなむ後の身を賴めとや

右イ一本
左大將みなせに籠りゐて侍りけるが雪のふる日「きえはてぬべき雪の中かな」と申しつかはしたりければ

水無瀨川の前關白太政大臣北方

さらでだに迷ふ心の雪の中は思ひやるさへ消えぞしぬべき

母のおもひにおはしましける年のくれに雪のふりかさなりて消えやるべくもなきを御らんじて

さごろもの中宮

物語四中
ことわりの年の暮とはみえながらつもるに消えぬ雪もありけり

○みなせ　水無瀨。攝津國に在る。

○思ひやる云々　夫の籠つてゐる憂き日を思ひやる心持である。

○つもるに云々　母の身の上をとめどもなくうち案じてゐる心持を雪の降り重つてゆくのに、少しも消えてゆく雪のないのに譬へて云つたのである。

風葉和歌集　巻第十九

雜　二

もろこしのしやう山にて華陽公主琴などしらべ侍りて又のよもと賴め侍りければ山のかげに宿りてよめる　　松浦の宮の參議氏忠

物語上

大空の月に賴めし暮待つと山のしづくに袖はぬれつゝ

もろこしより歸りわたらむとしける頃一の大臣のもとに立ち寄りて侍りけるに夜ふかき月にむすめども琵琶さうの琴などひきあはせて遊びけるに　　はままつの中納言

物語一　拾百番歌合二十八番詞書

ひの本の山より出でむ月みてもまつぞ今夜は戀しかるべき

かへし琵琶にひき侍りける　　一の大臣五君

同上　同歌合二十八番

かたみとて暮るゝ夜ごとに詠めても慰めやはなかばなる月

中納言もろこしより歸りてまゐれるに月いとおもしろかりければ御あそびありけるついでに宣はせける　　おなじみかどの御歌

○ひの本　遥かに故郷の日本を指して云ふ。
○まつぞ　待ちわびてゐる人に、「さきに」「とくに」等の意のまづを云ひ掛けた。
○なかばなる月　一つの月を居所を別にして、半分づゝ眺める月と云ふ意。

物語二　同歌合三十四番
別れては雲居の月もくもりつゝかばかりすめる影も見ざりき

御かへし

同上
古郷のかたみぞかしと天の原ふりさけ月を見しぞかなしき

世をはゞかりて水無瀬といふ處にこもり給ひて侍りけるころ月をみて
水無瀬川の左大將

關わかず見しにかはらぬ月のみや馴れし雲ゐのかたみなるらむ

内よりまかでさせ給ひけるにみかど身を分くるものならませばと聞えさせ給ひければ
花ざかりの中宮

諸ともに眺むるやどはかはるとも同じ雲居の月をこそ見め

二位中將に侍りける頃ふぢつぼに立ちよりて女房に物語りけるに月くまなくさし出でてぬるゝ顔なれば
あさぢが露の入道關白

數ならぬ袂も露のふかきには雲居の月のかげ宿しけり

かへし
讀人しらず

大空の月のひかりをやどしてもかこち顔なる露とこそきけ

人の許に更くるまで法文など申してたち出でて侍りけるに月の明かかりければ
ふたよのとものひじり

○別れては　唐土にゐた時を云ふ
○雲居の月　日本に待ちわびてゐた、その妻を指して云ふ。

○ふりさけ　遙かに遠く仰ぐこと

○馴れし雲居　月の雲に居馴れてゐることに、自分の禁中に居馴れてゐたことを云ひ掛けた。
○内　禁中を云ふ。大内山を約めて云ふ言葉。

○法文　經文に同じ。

今はまたこと葉のこりていでさらば更けてさえたる月を見ましや

得智すさめけるを聽きて　　不斷念佛のあま

殘るらむその言の葉の末きかば今夜ばかりの月は見ずとも

にほふ兵部卿のみこむすめに賴めて侍りけるに十六日の月やう〳〵さしあがるまで心もとなく侍りければつかはしける　　夕ぎりの左大將

宿木　拾　百番歌合九十番
大空の月だにやどる我が宿にまつよひ過ぎてみえぬ君かな

なにとなく見なれ侍りける女を行方しらずなして侍りける所にて月をみて　　はままつの中納言

思ひいづる人しもあらじ古郷に心をやりてすめる月かな

世を厭はしくおぼしめしけるころ入りがたの月の隈なくさし入りたるを御らんじて　　さごろものみかどの御歌

物語三下　百番歌合七十五番　しばし同上
まてしばし山のは廻る月だにもうき世に獨りとゞめざらなむ

世をそむかむとて中宮にかきおきて聞え侍りける　　とりかへばやの中將

戀しくばうき世の中にすみわびて入る山の端に月を眺めよ

頭おろさむとて出でけるにはしらに書きつけける　　あづまのもいゝふ

かぎりぞと思ひ入りぬる山路にも月や變らぬ友となるべき

○更けて云々　眞如と照る月を、說話を超絕した佛の境地に譬へて云ふのである。
○得智　佛智を得ること、また得たること。
○今夜ばかり云々　永劫の月が見られるとの意。月は佛に譬ふ。

○古郷　遠い昔と云ふ意。

關白いまだ若く侍りける頃うちふして物語し侍りて「あやしくおそく出でける月かな」と申しければ　　あさくらの宣耀殿中納言乳母

みるまゝに月もうき世にすみわびて山より山にいりやしにけむ

世になきさまに聞えてのち右大將北山にこもれりと傳へ聞きて月の明かゝりける夜ながむらむ面影もみるこゝちして思ひやられければ　　ねざめの廣澤の准后

拾　百番歌合八番

知らざりし山べの月を獨りみて世になき身とや思ひいづらむ

だいしらず　　末葉の露の關白母女一本

在りしにもあらずうき世にすむ月の影こそ見しに變らざりけれ

しのぶべき縁(ゆかり)ならねど月みれば過ぎぬる事ぞ忘れわびぬる

廣澤の方にまかりて月をみて　　野じまの三位中將

住み馴れしむかしの人の面影を月にぞ見する廣澤の池

うき舟の君具してうちに籠れりけるに辨の尼「むかしおぼえてすめる月かな」といひて侍りければ　　薫大將

東屋　拾　百番歌合八十七番

さとの名も昔ながらに見し人の面がはりせる閨の月影

○みるまゝに　見てゐるうちにの意。

○世になきさま　世間にためしのない事と云ふ意。

○山べの月　寄り添つてゐた女を云ふ。

○廣澤　廣澤池の畔。山城國葛野。

忍びて宇治にすみ給ひけるころ月いと明かう水のおもても澄みわたれるいとゞおぼしいづる事おほくて　今とりかへばやの中將

物語三、思ひきや身をうぢ河にすむ月のあるかなきかの影を見むとは

大將弘徽殿のかたざまを過ぎ侍りけるに　讀人しらず

をしめどもしばし止まらぬ月影をなにしか袖に宿し初めけむ

大將にて仕へ給ひけるころ承香殿の前をすぎ給ふに時々もの申しける戸口を閉さざりけるにかやうの交らひも今いく程かとおぼしめされて　有明の別れの女院

忘るなよ夜な〳〵みつる月の影めぐりあふべき行方なりとも

須磨にうつろはせ給はむとて故院の御墓にまうで給へるに月も雲がくれて杜の木立こぶかくかへり出でむかたなくおぼされて　六條院御歌

須磨　拾　百番歌合十七番　なき影もいかにみるらむよそへつゝ眺むる月も雲がくれつゝ

こゝろならず山里に侍りけるころ月をみて　川霧の中宮の新宰相

思ひかね眺むる空もかきくらし涙にくもる夜はの月影

小野にすみけるころ月の明かき夜ながめて　うきふねのきみ

手習　百番歌合三十四番　我かくてうき世の中にめぐるとも誰かは知らむ月の都に

○うち河　上の、「身」を憂に通はして、宇治河を云ひかけた。

○影　昔契りし女に譬ふ。

○みつる　見つるに、滿つるを云ひかけた。

○眺むる空　追憶してゆく心を云ふ。

○あまをとめ　蜑女。萬葉集三「君をまつ松浦の浦のをとめらはとこよの國のあまをとめかも」

○ゆく月　御位をお讓り給ひて、下り給ふ院を指して云ふ。

○つきもせぬ　思ひの盡きないこと。思慕の情のまだ名殘をとゞめてゐること。

○さやけき月　明かな月を、相思の女に譬ふ。

○今こむと　やがて來ようと。

もの思ひけるころ琴にひきける　　ことうらの煙の中納言更衣

あまをとめ月の都に誘はなむ跡とゞめじと思ふこの世を

一の宮を坊にたて奉らむとおぼしめされけるを一條院の三のみこにこの度は猶ゆづり奉らせ給ふべき由かの院より懇ろにきこえさせ給ひければさるべきになりて　　あたりさらぬ冷泉院御歌

ゆく月の光を君にゆづりてむ我も心の闇にまどへど

一の御子内に入り給へるなごり曉までながめてよみ侍りける　　涙にしめゆふの淑景舍女御

雲ゐにも數く心やかよふらむ有明の空に迷ふたましひ

法師にならむとて出でける曉むすめの方にまかれるに月影いとをかしげなるを見て　　あさくらの前三河守

つきもせぬ心の闇にくるゝかなさやけき月の影みえぬまで

又の年その夜に廻りあひてさやけき月のといひしも思ひ出でられければ　　おなじ皇太后宮大納言

拾　百番歌合五十一番

今こむといひて別れし君により有明の月を幾夜みつらむ

吉野の宮に參りていでける曉よみ侍りける　　風につれなきの左大臣

○よな　感歎詞の、「よ」になを添へた詞でよと云ふに同じ。頼政集「さればよなかくても同じ苦しさを云はぬさきより思ひかへさで」

○有明の云々　有明は、月の空にあるまゝ夜の明けるのをいふ、ここでは男女のきぬぎぬの別れを意味す。

○疊紙　ふところ紙。

○妻戸　開き戸。貞丈雑記「妻戸の事、これも主殿にある戸なり、両方へ開く舞戸なり。」

○天の戸　空にある戸。常には天皇や貴人の住居や出入などに云ひ又それに冠らせて用ゐる語であるが、此處はわざとめでたい意で使つたのである。

○そらめ　空目、見あやまり、見違ひ。

人はよな心にもあらず出でにきと月にはかたれ曉の空

だいしらず　　しのぶの源大納言

有明の殘れる月の影よりも我世にすまむ程ぞはかなき

法輪に詣でて出でける曉よめる　　をだえのぬまの春宮大夫

有明の月に心はすみぬるを何とうき世にかへるなるらむ

世を背かむと思ひたちけるころ中宮中納言の局にたちよりて恨むる事ども侍りて　　いはでしのぶの左衞門督

みるたびに憂しとな云ひそいつまでか同じ雲ゐにあり明の月

中納言むすめを抱きていで入り侍りけるを見てうちにまゐりあひ侍らで疊紙にをとこの女を抱きて妻戸に入るかたを書きてみせ侍るとて　　式部卿宮の四位少將

身にそひてふたりあり明の月の影入る天の戸を見きと知らずやかへし

月影は入る天の戸もなかりしをそらめを誰か見たるなるらむ

だいしらず　　我からの兵衞佐

吹く方の風にしたがふうき雲は心に身をぞまかせざりける

冷泉院をいで給ひてのち院そひ奉りて大内山にものし給ひける頃

嵯峨の女三のみこ

しら雲のまだ知らざりし奥山にかかるべき世と思ひかけきや

心ならず侍りけるに御門にきこえ奉り侍りける

女すゝみの登花殿女御

忘れずば夕の雲によそへてもむなしき空をそれと眺めよ

山里よりいでけるに入道のみこの住み侍りける堂の末より遙かにほそき煙の立ちいづるを見やりて

ふもとの后宮世

君がすむ宿の煙りをそれとみて立ちはなれ行くことぞ悲しき

嵯峨の奥に兵部卿のみやおこなふと聞ゆる所に煙のわづかに立つをみて

けぶりのしるべの中將

見渡せば煙たな引く山里に思ひ離れる人や住むらむ

高麗といふ國にはなち遣はされける道にて蜑の鹽やく煙のたなびくを見て

夢がたりの宰相中將

神もきけ藻鹽の煙こがれてもとかむばかりの思ひありきや

一條内大臣もの思ひけるとき雨のふる日つかはしける

いはでしのぶの關白

わきて思ふことしなけれど夕暮の雨にも袖の萎れやはせぬ

○しら雲　空の高き處にある雲、「まだ知らざりし」の序詞。○かかる　雲の掛かるに、斯かるを云ひ掛けた。

○忘れずば　契つたことを指す。○むなしき空　現在目の前に見る空を云ふ。下の「それ」とは、「忘れずば云々」までの内容を指すのである。

○思ひ離れる人　佛の道にいそしむ人。

○神もきけ　神明に誓ひを立てる意に云ふ。○とかむ　解くに、說くを云ひ掛けた。

忍びて女の許にまかれりけるをとかく云ひてうちにもいれ侍らざりけろほどに雨やゝ降りきて空いと暗きに簀の子の端つかたにゐて　かをる大將

東屋　百番歌合七十七番

差し止むる葎や茂きあづまやのあまり程ふる雨そゝぎかな

北山におはしましたりけるに曉がたにせんぼふのこゑ山颪につきて瀧の音にひきあひたるに　六條院御歌

若菜　百番歌合七十番

吹きまよふみ山おろしに夢さめて涙もよほす瀧の音かな

左大將よし野の宮にまゐりて嵐のおとを聞きならはず心ぼそげにおぼえて侍りければ　風につれなきの按察大納言

君は知らじかかる嵐の峯ふかく木の葉の末に夢はたえつゝ

かへし

今夜來てよし野のあらし身にしみて又なく物ぞ悲しかりける

御出家おぼしめしたたせ給ひけるころ宇治入道關白のもとにて峯の松風をきかせ給ひて　おなじよし野の院御歌

山深くやがてなるべき松の風いたくな吹きそまなく身にしむ

左大將大內山に侍りけるころ松の梢ふく風の音のみ耳にとまりて

みづからくゆるの尚侍

○あづまや　東屋。催馬樂の曲の名。「あはれわが妻あづまやのまやのあまりのあまそゝぎ、われたち濡れぬその戸ひらかせ」の意を指すのである。
○雨そゝぎ　雨滴、雨の雫など。

○物　現在直面してゐる物、又は心の對照に云ふ。此處は戀の意味を云ふ。

○なるべき　鳴るに、豫て志す出家に、なるを云ひ掛けた。

○まだ人の云々　まだ人から戀ひされた事のない自分だと云ふ意、「松風」は、その焦燥の意を現はす。

○夜をならべ　毎夜と云ふこと。

○をしほ　小鹽山に、惜しくも顯はれた事を云ひ掛けた。

○草の葉　頼りない自分にいふ。「露の身」は、戀の身。○消えて悲しき云々　消息の絶えた意。「風の音」は、男に譬ふ。

○あさ茅が云々　たとへ果敢ない身になしてもと云ふ意。

まだ人のしらぬ山べの松風は言とふさへぞ身にはしみける

桂なる處に侍りけるに松風のおそろしう聞えければ　ひらぬ石まの中務卿御子女

夜をならべ聞きもならはぬ奥山の峯の嵐に音をぞたぐふる

小鹽といふ處にすみ侍りけるころ　なるとの中務卿の女

心してもの思ふ人にきかせなむをしほの山の峯の松風

右大將にて仕へ給ひける頃にこもりゐさせ給はむ事ちかくなりて吉野の宮におはしまして御子のむすめに宣はせける　今とりかへばやの中宮

物語三

またも來て憂き身かくさむよしの山みねの松風ふきな忘れそ

忍びたるをとこの如何なる事を申しける折にかよみ侍りける　ねざめの老關白の中君

草の葉にかゝるもつらき露の身の消えて悲しき風の音かな

右大將冷泉院にかしこまること侍りていでけるに忘るなと申しければ　同女三の御子の中納言

拾　百番歌合十三番

嵐吹くあさ茅が末の白露の消えかへりてもいつか忘れむ

かへし

同　歌合十四番

ふき拂ふ嵐にわびて淺茅生の露殘らじと君につたへよ

○よしや　ほしいまゝに、感動詞の「や」を添へた言葉。たとひ、まゝよ、などの意。
○さゝの葉　笹に、少しの意を云ひ掛けた。
○あれまさる云々　訪ふ人もない軒のしのぶに自分を譬ふ。

○四方の嵐　世間の無情に譬ふ。

○おききや　末の「き」は過去の意を示す助動詞。し、しか等と働く。おほかた過去の事を人に告げていふに用ゐる。やは疑ふ意の詞。
○よごと　竹の節のよと云を夜に云ひ掛けた。
○起きふし　竹の節を云ひ掛けた

だいしらず　　夢ぢにまどふ大納言女

よしやたゞ幾夜もあらじさゝの葉におく白露にたぐふ身なれば

六條院すまにおはしましける頃きこえさせ給ひける　　花ちるさとの君

あれ（須磨）まさる軒のしのぶを眺めつゝ茂くも露のかゝる袖かな

世を背きて吉野に侍りける人の今すこし深き山に入る由きこえて侍りける御かへりごとに　　よし野山の中宮

尋ぬらむ草の庵にさそはなむおき所なき露のわが身を

頼みたりける人を行方なきさまに人のもてなし侍りけるにともなひてよめる　　よをうぢ川のあはぢ

露の身を四方の嵐のさそひ來ていづれの野べにおかむとすらむ

病にてわづらひけるが怠りて女に遣はしける　　かくれみのの左大將

消えぬべき亂れし露の下草をしたに哀れと思ひおききや

だいしらず　　はまゆふの宰相女

呉竹のよごとに露を袖の上に起きふしものを思ふ頃かな

琴をひき侍りけるに稲妻しきりにして雲のたゝずまひたゞならざりければ　　松浦宮の華陽公主

物語
稲妻のさやかにてらす雲の上にわが思ふ事は空にみゆらし

院の御賀に春宮の御笛の音雲居にすみ上りておもしろきに雲のけしきかはり月の光まさりて樂のこゑおなじ調べにふきあはせたるに女院御琵琶をひきすまさせ給へるに花の女七人雲のかけ橋よりおりて一返まひたるに春宮「をとめごが花の一えだとゞめおけ末の世までのかたみにもせむ」とふかせ給へるに堪へぬにや花のかつら一ふさ折りて女院の御袖のうへに奉るとて　　有明の別れのあまをとめ

この世にはいかゞとゞめむ君と我むかし手折りし花の一枝

御かへし　　女院

花の香は忘れぬ袖にとゞめおけ馴れし雲居にたち歸るまで

一條院にて女院内大臣こと彈きあはせてあそび給ひけるに笛ふきなどして月は入りなむとしければ　　いはでしのぶの關白

音にかよふ秋のしらべの松の風月をも空にふきやとゞめむ

八月十五夜としたならべて夢のうちに天人の琵琶をしらべけることゝ思ひいでられて　　ねざめのひろさはの准后

物語一・拾百番歌合一番
あまの原雲の通ひ路とぢてけり月の都の人も訪ひ來ず

世をそむかむとて内をまかでけるに御門御琵琶のね左衛門陣まで聞え侍りければ右衛門督参りけるにことづけて　露のやどりの入道兵部卿宮

同 歌合九十一番

雲の上を思ひ離れていづれとも心ぞとまるなかばなる月

左大臣春日に詣でて侍りけるに藤つぼの女御琴ひきけるをまうであひて聴き侍りけるを下人のとがめ侍りければよめる　うつぼの眞言院僧都

旋花笠

めづらしく風のしらぶる琴の音を聞く山人は神もとがめじ

思ひ歎く事はべりける頃ひはを彈きさして　わたらぬなかの大納言

思ふこと慰みはせでいとゞしく歎きくははる音にこそありけれ

世をはなれむと思ひたちけるころ箏をかきならして　おやこの中の中宮母

今はとて掻きなす箏の果ての緒に心細くもなりまさるかな

思ひのほかなる身の振舞をもとの姿にあらため侍らむとて出でけるに年ごろもてならしける笛をふきたてて　とりかへばやの權中納言母

拾 百番歌合八十六番

忍ぶべきふしもあらじな笛竹のこのよを限る音はつくすとも

左大將御あそびに笛つかうまつりて侍りけるあしたに給はせける　霞へだつるの御門の御歌

たぐひなく心にすみし笛のねは月の都もひとつなるらむ

○左衛門陣　衛門府に左右二府ある。その左衛府に、節會の時、禁中にて官人たちの列坐する時、陣の名稱をつけて、左衛門陣と云ふ。

○なかばなる月　片身わけにみる月。

○果ての緒　十三絃のうち、巾と云ふ緒を云ふ。

○ふし　何々の節にと云ふ意に、笛の節を、下の「よ」は、竹のよに、夜を、いづれも云ひ掛けた。

御かへし

笛の音は月の都にとほけれど淸き心は空にすみけむ

幼きうまごに笛ふかせなどして遊びける夜よめる　おのれけぶたきなにはのみこ

末遠くまだ音こもれる笛竹の更け行くよはの惜しくもあるかな

夕霧の左大臣かしは木の權大納言の笛をつたへて侍りける夜夢にかの大納言思ふかたことなりしよし申して

百番歌合八十四番

驪笛

笛竹にふきよる風のことならば末のよ長きねに傳へなむ

○うまご　孫。
○末遠く云々　孫の人と成るの遠い日を思ふ意。
○更け行く云々　自分の明日をも知れぬ命を一刻も惜しまれるを云ふ。

風葉和歌集　巻第二十

雜　三

仁和の御時芹河行幸の繪を御らんじて左のおほいまうち君に給はせける　　女のすくせしらずの第三御門御歌

せり川の絶えぬながれになく鶴に古き跡をも尋ねてしがな

御かへし　　左大臣

せり川の古きながれを尋ねても千歳の後は君ぞ嗣ぐべき

入道前關白太政大臣のさがの家に行啓ありてかへらせ給ふとてよませ給ひける　　有明の別れの東宮

大井川井堰の浪よ汝も開けわれ世にすまば又かへりこむ

冷泉院に行幸ありける時もとの中將にて青海波まひておなじく正三位ゆるされて侍りけるに殿の中將すゝみて中納言になりにければいひつかはしける　　二子の宮の中納言

○芹河　山城國に在る。
○古き跡云々　後撰集「さがの山みゆき絶えにし芹川の千代の古道跡はありけり」を指すのであらう。
○大井川　山城國にある。
○井堰　田に引く水をせき止める處。

もろともに登りしものを位山などこのたびは誘はざりけむ

かへし、中納言にかはりて　　關白

諸ともに立ちのぼるべき位山まづ先だちて道しるべせむ

右大將なかたゞの京極の家に從ひゆきありけるむかし御らんぜられける櫻の木の蔭の上にさし蔽ひていかめしうなりにければよませ給ひける　　うつぼのさがの院御歌

樓上下　春きてはわが袖かけし櫻花いまはこ高きかげとみるかな

おなじ行幸に仕うまつりて子の日に引きうゑし岩根の松も木だかくなりにければ　　宮内卿かねみ

同上　引きうゑし子の日の松は老いにけり千世の末にもあひみつるかな

この歌なさがの院いみじうあはれがらせ給ひてこの御返事には民部卿になさるべしとなむおほせ給はせける

左大臣なに（皆一本）はに祓しに出で侍りけるに伴なかて松原に潮のみちけるをよめる　　おなじ藤宰相

菊宴　深緑みち干てそむる浦の松いづれのしほに色まさるらむ

いその上の中納言つばくらめの子やす貝とり侍らで限りになりぬと聞

○位山　飛驒國に在る。上の、「登りし」に通はして云ふ。

○しほ、潮に、時、折などの意のしほを云ひ掛けた。

○蜑のたく繩　蜑拷繩。蜑の網につけたたく繩。夫木集三十五「朝夕の蜑の栲繩いとまなみこの世ばかりたくるしとや思ふ」

○くる人　繩をくるに、人の來るを云ひ掛けた。

○かひ　貝に、甲斐なき意などのかひを云ひ掛けた。
○荒磯浪　憂き世に喩ふ。

きてとぶらひに遣はすとて　　かくやひめ

物語
年を經て波たちよらむ住の江のまつかひなしと聞くは眞か

忍びて住吉に侍りけるころ松風をききて　　住よし關白北方

物語
尋ぬべき人もなぎさの住の江に誰まつ風の絶えず吹くらむ

關白北方しのびて出で侍りける舟のうちにてよめる　　おなじあま

同上
住吉の蜑となりては過ぎしかどかばかり袖を濡らしやはせし

吹上に人々まうでさて遊び侍りけるに大なる釣舟に蜑のたく繩を繰りおきたるを見て右少將なかよりが心ざしよりはみじかからむかしとい

ひければ　　うつぼの中納言すゞし

吹上上
くる人の心のうちは知らねども賴まるゝかな蜑のたく繩

おなじたび人にかへりなむとし侍りけるに帶調じておくり侍りとて宰

相中將ゆきまさにこがれのいさご入れたるに　　紀伊守たね松が女

同上
君がため思ふ心はありそ海の濱の眞砂に劣らざりけり

心にもあらず土佐の室といふ處にすみける頃よめる　　すまひのすりの亮

世の中に生きたるかひも拾はぬに荒磯浪に袖の濡るらむ

かへし　　內記のひじり

荒磯をみつゝすぐさば自から生けるかひにもあらざらめやは

忍びたる女のさま變へてけるを聞きて罷れりけるにあひ侍らざりければ歸りてあしたに　　みふねの大おほいまうち君

岸近く寄りにし浪のかひなくて立ちかへる袖のくちぬとを知れ

人々つどひ侍りて歌合し侍りける處に敗けなむずと幼きものゝ歎きけるに誰ともなくていひける　　かひあはせの藏人少將

堤中納言
かひなしとなに歎くらむ白浪も君が方には心よせてむ

和歌の浦は歌合よしあし定むべきよし申し侍りけるを狂言綺語のあやまちひろ（り一本）がへしがたくやといひ侍りて　　西の海のあまかひ

みづはさす汐干に漁る蜑がひは思ひもよらずわかのうら浪

眞野の浦にこもりて侍りけるころ登花殿の女御草子かきてと申して侍りけるに　　女すゝみの左大臣

憧るゝみるめなぎさの濱千鳥跡かきとめむかたも覺えず

やまぶきといふわたりに移ろひけるに海のおもて心ぼそく小さき舟どもの見えければ　　かはほりの中務卿宮女

あるかひもなぎさに寄する浮舟の下にこがるゝ身をいかにせむ

○岸近く　忍んだ女の身近き意にいふ。

○立ちかへる　果たさずして歸つて來たのを袖の緣語としていつた

○かひなし云々　歌合して負けた意を云ふ。貝を云ひ掛けた。

○みるめなぎさ　見る事なきに、海松の流れくる汀をいひ掛けた。

○濱千鳥　文字を云ひ掛けた。往昔、唐土の蒼頡と云ふ人、鳥の足跡を見て文字を作ると傳へられてゐる。それより出たのである。

關白入道太政大臣の姉むすめにすみ渡りけるにそのおとゝなはやう見侍りけるを誰とも知らで行方きかせよとせめ侍りければ　　ねざめの女院新少將

物語一 拾 百番歌合五番
漕ぎ歸り同じ港による舟のなぎさをそれと知らずやありけむ

いみじき樣にて蜑の岩屋に侍りける頃あまの久しく見えざりけるにちひさき舟なかれにあらむとみやりて　　いはやの內大臣北方

浪間わけうき沈みくる蜑舟を待つこそわたれ袖はぬれつゝ

浪速わたりにて見あひける人の宿なとひ侍りければよめる　　あま人のむすめ

新古今雜下 朗詠遊女
白浪の寄する汀に世をへつゝ蜑のこなれば宿も定めず

むすめの女御左大將に名だちて樣かへて侍りけるに前代かくれさせ給ひて後登花殿女御にすみ渡ると聞きて大將の許につかはしける　　女すゝみの內大臣

しほたるゝ蜑の袖のみ朽ち果てていかなるうらにみるめ生ふらむ

わかの浦にすみ侍りけるが都へ出づとて　　まよふ琴のねの先帝姬宮

磯菜つむ蜑のみるめに潮なれていかでか浪の立ちはなるべき

伊勢より昇り給ひて後手習に　　かくれみのゝ前齋宮

かくて經るかひこそなけれ鈴鹿川八十瀨の浪の何かへりけむ

○同じ港　上の「漕ぎ歸る」に通はした語で、親戚關係を云ふ。下の「よる舟」は、それを知らずに言ひ寄る人と云ふ意である。

○浪速　攝津國に在る。

○名だちて　うき名の立つを云ふ

○しほたるゝ　潮垂るに、思ひに沈むを云ひ掛けた。

○うらにみるめ　浦に心を、海松に見ることを、いづれも云ひ掛けた。

○鈴鹿川　伊勢國鈴鹿郡に在る。また催馬樂の曲の名。「鈴之川やそせのたきを、みな人の」とある意を、この歌の全體に通はすのである。

○八十瀨　數多い瀨を云ふ。

中納言のもとに曉たちよりて侍りけるにいみじくたふとく經をよみすまして居明かしけるにやと見えければよめる

はままつの宰相中將

獨りしも明かさじと思ふとこの浦に思ひもかけぬ浪の音かな

行方しられ侍らざりけるをとこに石山にこもりゐて侍りける後に聞きてそのをり哀れとは思ひけむやと申しければ

あさくらの皇太后宮大納言

吹きよりししがのうら風いかばかり我が身にしみしものとかは知る

住吉へ詣でける舟のうちにて

かいばみの大將

さらぬだに憂世と思ふにいとどしくしらせ顏なる跡の白浪

心ち例ならず侍りけるに讀まる

時雨源大納言のむすめ

きえぬれば又うちいづる水の沫やあるかなきかの我が身なるらむ

けぶりにむせぶの姬宮新宰相

堰きやらぬ涙の川にうく沫のとまらず消えむ程の悲しさ

我からのさぬきの守が女

だいしらず

流るればかず〳〵消ゆる水の沫を物思ふ人の命ともがな

宇治にてもの思ひ亂れける頃

うきふねの君

浮舟　拾　百番歌合三十五番

里の名を我が身にしれば山城の宇治のわたりぞいとどすみ憂き

○とこの浦　床に、近江國に在る鳥籠浦を云ひ掛けた。
○浪の音　誦經に譬ふ。自分の泣いた意をも含む。
○吹きよりし　風に譬へて、便りの來たことを云ふ。
○しがのうら　哀れを寄せて來たそのやうな心と云ふ意に近江國に在る志賀の浦を云ひ掛けた。
○しらせ顏なる云々　「白浪」は山賊の別名。古今集「風ふけば沖つしらなみたつたやま夜はにや君が獨りこゆらむ」の意を云ふのである。
○水の沫　とめどもない歎きの涙に譬ふ。
○あるかなきか　果敢なさを云ふ

宇治より都へいづとて　　うき浪の院の女御

たち歸り又や渡らむ住みなれし身をうぢ川の夢の浮橋

初瀬に詣づとて泉河のほとりに休みてよみ侍りける　　わたらぬ中の關白北方

ひたぶるに流れもやらぬいづみ河水屑にかゝる泡ぞわびしき

うき事どもありて父の大納言の許を忍びていづとてかきつけける　　住吉關白北方

我が身こそながれもゆかめ水莖の跡はとゞめむ形見とも見よ

だいしらず　　うきふれの君

手習　百番歌合九十番
身をなげし涙の川の早き瀨をしがらみかけて誰かとゞめし

小野のあま初瀬へいざなひ侍りけるに來し方の事ども思ひつゞけられて手ならひ

同上　拾　百番歌合六十五番
はかなくて世にふる河のうき瀨には尋ねもゆかじ二本（ふたもと）の杉

忍びて物へ詣りける途にかれ〴〵になりにけるをとこの許に侍りけるものにあひてことづけける　　時雨源大納言の女

尋ぬべき三輪の山べは遠くとも我すぎがてに言やつてまし

父御子醍醐にこもり行ひ侍る頃うちよりいでける途にてかれこそだい

○夢の浮橋　たゞ夢と云ふに同じ
○泉河　山城國にある。
○ひたぶる云々　頻りに思ひの心を通はすの意にいふ。
○水屑　戀の殘骸に、「泡」は、その涙に譬ふ。
○ながれ　憂き世を移りゆくの意
○水莖　上の「ながれ」を受けた詞。文字の跡を云ふ。
○早き瀨　移りやすい憂き世を云ふ。
○三輪　大和國にある。
○すぎがて　「がて」は接尾語。かた、とき等の意。過ぎたときの意に、杉を云ひ掛けた。古今集「わが宿は三輪の山本こひしくば訪ぶらひ來ませ杉たてる門」
○つてまし　傳へむ。
○醍醐　醍醐寺の略、山城國宇治郡にある。

○ほい　本意。眞の心を云ふ。
○しら雲の云々　遠く離れゆく哀愁の意を云ふ。

この南の山などいひあへるをききて　　うき浪の院の女御
いづ方と知らぬも悲し聞くもうし思ひ入りけむ山の行方を
せちに思ひける女に心にもあらず隔たりにければ世を背かむとていささかたち寄りて　　しのびねの中將
行末をなに契りけむ思ひいる山路に雲のかゝりける世を
ほいとげての後おなじ人の許にさしおかせける
哀れとも思ひおこせよ白雲のたな引く山に跡たえぬとも
山里にまかりけるときかせ給ひける女に給はせける　　ねざめの冷泉院御歌
物語　拾　百番歌合十九番
何事をいかに恨みてしら雲の八重たつ山に思ひ入りけむ
はやう住みけるをとこの世をそむかむとて出でにけるを聞きていひつかはしける　　わたらぬなかの關白北方
契りこしよし野の山を忘れずばひとりは君がいらじとぞ思ふ
かへし　　大納言
おくれじと契りし事のかはらずば山路に獨り惑はざらまし
法皇よし野に住み給ひけるに御子と申しける時たづねおはしまして後に聞えさせ給ひける　　よし野院御歌

○さればぞ　「ぞ」は助詞。それと確かに押へて云ふ詞。

○みよし野の山　見よしに云ひ掛けた。風雅集「慰めに見つゝもゆかむ君が住むそなたの山を雲な隔てそ」

○ふるまゝに　降るに、經るを云ひ掛けた。

○蜀山　唐土にある山。

○しをらで　栞しないでの意。うき世を辿りながらも、そこに慰めと云ふ栞を入れないでの意。で隱遁の心を起さないことにいふ。

ひまもなく心にかゝるよしの山さればぞ人も思ひ入りけむ

院吉野山にこもらせ給ひて後いづ方にかとおぼされて

風につれなきさがの入道姫宮

君が住むそなたの空をながむれば雲も幾重のみよし野の山

左大將かの御山にたづね參りて侍りけるに宣はせける　同じよしの山の院御うた

おなじ世の心ながらや住みなるゝよし野の峯の岩のかけ道

中納言よし野の山の雪の深さを申して侍りけるかへし　はま松の帥宮中宮

物語四　ふるまゝに悲しさまさる吉野山うき世厭ふと誰尋ねけむ

蜀山といふ處にこもりおはしけるころ日本の中納言たづね參りけるに

おなじ河陽縣后

同一　拾　百番歌合二十四番　世の憂さにしをらで入りしおく山に何とて人の尋ね來つらむ

志賀に詣でてつれなき女の許につかはしける　うつぼの中納言實忠

續原日　うき事を思ひ入るとはなけれども深き山べをいくら見つらむ

世を遁れむと思ひける道にてよめる　よしの山の中將

ひたぶるに思ひ入りぬる山道にさきだつものは涙なりけり

雲ゐの月の左大將

さきにたつ袖の涙やひとり行く知らぬ山路の道芝の露

なとこのかれ〴〵に見えければたふの峯の麓にわたるとて故郷にかき
つけける　　扇ながしの源中納言女

思ひあまり深き山べにいりぬともありやなしやと誰かとふべき

大将心かはれる様に侍りければほかに移ろひ給ふに懸樋の水の氷とぢ
たりければ　　むぐらのやどの女

住みわびて宿の主もあくがれぬかけひの水も絶えざらめやは

母に具して父おとゞの許をいづとてひはだ色の紙に書きて柱のひわれ
たるにおしいれ侍りける　　源氏の紅梅右大臣北の方

（眞柱）今はとて宿離れぬとも馴れきつるまきの柱は我を忘るな

常磐に侍りける頃こゝち例ならざりけるに常にゐたりける所の柱にか
きつけける　　あすかゐ

（物語三下　百番歌合七十七番）なほ頼む常磐の杜のまき柱忘れなはてそ朽ちはしぬとも

しばし住み侍りける處のありうき事ありてほのかにわたるとて朝夕む
かひたる戸に葦手にて書きつけける　　ふもとの后宮母

明暮に馴れつる槇の戸ばかりも世にありふべき心ちこそせね

○ありやなしや　果して世を遁れる心のあるか無いかを云ふ。

○あくがれぬ　憧れに、飽き離るを云ひ掛けな。

○ひはだ色　檜の皮で作つた黄色の名、うすい赤色。

○まきの柱　萬葉も二「眞柱ふとき心はありしかどこのわが心しづめかねつも」の意を指すのである。柱は太きを尊ぶもので、「ふとし」に掛けて云ふ。

○朽ちはしぬとも　自分に云ふ言葉。

○葦手　文字の書き方の名。葦の生えたやうにちらし書くを云ふ。

○世にありふべき云々　とても存へて年月を經るやうな心持はしないと云ふ意。

右のおほいまうち君一條の家には住ませながらかれ果てにければ遣はしける　　うつぼの橘右大臣いもうと

藏開中
古の忘れがたさに住み馴れし宿をばえこそ離れざりけれ

おなじ樣に侍りけるころ右大將なかたゞ立ちよりてせうとのなかより水の尾にこもれる事を申しいでて「むつましき疎きといもをふり捨てて山べに獨りいかですむらむ」と申しければ　　同朱雀院女一宮按察

同下
たのみしもみえしも更に忘られて獨りは里も住みうかりけり

をとこの心變りければ山里にうつろひ住みけるをそことも知らで物まうでの歸るさに立ちいりたりけるをほのかに見て　　おなじ中納言實忠北方

菊宴
古鄕のつらき昔を忘るやとかへたる宿も袖はぬれけり

左大將の大内山にこれかれまかりて遊びていみじきあさぼらけに立ちかへらむかたなうて　　身づからくゆるの宰相中將

歸りてはいかゞ眺めむ山里にさのみ哀れをつくし果てては

山里に侍りけるが歸りてかしこなる女の許につかはしける　　かたる大將

曉は袖のみぬれし山里に寐ざめいかにと思ひやるかな　　一品内親王家三位

○せうと　兄人。

○みえ　外見。

○つらき昔　振り捨てられた當時を云ふ。
○かへたる宿　現在住む山里の宿を云ふ。

○曉は云々　自分の居た時と違つて、獨り起きする曉は、涙に濡れるであらうと云ふ意。

松風をおとなふものと頼みつゝ寐覺めせられぬ曉ぞなき

小野にすみ侍りけるころ別れにけるをとこの夢にみえければ　時雨の源大納言女

山里のふかき寐覺にいとゞしく見し夜の事をみつる夢かな

思ひのほかにしばし添ひたる人に別るとてよめる　あさぢが露のひじりが母

幾夜かは苔のむしろに寐覺して君を戀しと思ひ明かさむ

山寺にこもりて女の許につかはしける　かやがしたをれの三位中將

君やさはうき世そむかむ心みにいでつる道のほだしなるべき

世を遁れ侍らむとて中宮にたよりあらば見せたてまつれとてかきおき侍りける　うつせみしらぬの宰相中將

君をのみつらきながらも絆にて今ぞふみ見る岩のかけ道

これを御らんじて　中宮

今はとて入りけむ道のかけぢにも心ひとつやおくれざるらむ

だいしらず　ねざめのひろさはの准后

世の中に經れば憂さのみまさりけりいづれの谷に我が身すててむ

朱雀院よりおなじ處を君も尋ねよと聞えさせ給へるかへし　源氏二品内親王

横笛
うき世にはあらぬ所のゆかしくて背く山路に思ひこそいれ

○松風を　訪ひ來る男に譬ふ。待つを云ひ掛けた。
○見し夜　契つた夜を云ふ。
○苔のむしろ　獨り寢の果敢なさにたとふ。
○さは　さやうにはの意。
○ふみ見る　文に、踏むを云ひ掛けた。
○岩の陰道　險道の有樣を云ふ。
○心ひとつや　心ばかりに同じ。「や」は感歎詞。
○ゆかしくて　それとは解らないけれども、何となく慕はれると云ふ意。
○背く山路　世に背く人は山へ入るので、さう云つた。

宇治八宮につかはさせ給ひける　　　おなじ冷泉院御歌

橋姫　拾　百番歌合十九番

世を厭ふ心は山にかよへども八重たつ雲を君や隔つる

御かへし　　　うぢのあねぎみ

同上　百番歌合七十一番

あと絶えて心すむとはなけれども世をうぢ山に宿をこそかれ

さま〴〵物を思ひ亂れけるころ鳥のなくを聞きて

總角

鳥のねも聞えぬ山と思ひしを世の憂き事は尋ね來にけり

行方しられ侍らじとて山里に侍りけるを聞きつけたりける人のかへり事に　　　なるとの中務卿のみこの母

谷ふかみ思ひ入りにし道なれどうき身はそれも隱れざりけり

入道關白宇治にて千部經供養し侍りけるとき吉野の宮よりいでおはしましてよませ給ひける　　　風につれなきよしのの院御歌

先立ちてすみならしける山水を背くうき世と誰うらみけむ

御かへし　　　宇治入道關白太政大臣

老が世の憂きめをみつの山道に君おくれしと思ひかけきや

七そぢの齡をむすめの賀し侍りけるとき中宮の行啓など侍りけるによみ侍りける　　　ねざめの入道太政大臣

○世をうぢ山云々　古今集「わが庵は都のたつみしかぞすむ世をうぢ山と人は云ふなり」の意を指すのである。
○鳥のねも　忘れようとする心の歎きにいふ。
○尋ね來にけり　自分の方で避けてゐるのに、思ひ出は胸に浮び來るの意。

○谷ふかみ云々　世を厭つて隱れ住みゐることを云ふ。

○すみならし　住み馴るに、澄むをいひ掛けた。

○みつ　見つに、水をいひ掛けた。

今はとて戸ぼそ閉ぢてし草の庵にさやけき空の光をぞみる

○戸ぼそ云々　樞。鎖をさして閉ざす處。世に望みのないことに譬ふ。
○空の光　中宮の行啓をいふ。

風葉和歌集終

新修 作者部類

新修作者部類（字畫順）

かな

おほつふね　左兵衛棟梁女　〔後撰〕戀二・三

こわかきみ　惟喬親王に同じ

しげのの内侍　小貳命婦に同じ

よの子　鵜殿　〔佐保川〕三九〇　長歌八

一畫

【一】

一心院關白　冬通公に同じ

一響　上人　〔新後拾〕雜下・一

【一宮】

一宮駿河　祐子内親王家駿河に同じ

一宮紀伊　祐子内親王家紀伊に同じ

【一條】

一條　貞平親王女　〔後撰〕戀五・一　〔拾遺〕雜春・一

一條内大臣　内實公に同じ

一條太政大臣　實家公に同じ

一條右大臣　恆佐公に同じ

一條左大臣　雅信公に同じ

一條左大臣室　左中將源定有女　〔新勅〕雜三・一

一條左大臣雅信女　〔拾遺〕雜戀・一

一條前太政大臣女　〔新千〕戀三・一　〔新拾〕戀五・二　〔新續古〕戀五・一

一條院　諱懷仁。圓融帝御子（一六四〇―一六七一）　〔後拾〕哀・二　一條院御製　〔詞花〕戀上・一　〔新古〕哀・一　〔續古〕春下・一　戀二・一　賀・一　〔新千〕旅・一

一條院皇后宮　尊子一條院女御。粟田關白道兼公女　〔後拾〕哀・一　〔詞花〕別・一　〔千載〕雜上・一　〔新古〕雜下・一　〔續古〕別・一　哀・一

一條攝政　伊尹に同じ

【乙】

乙　遠江介壬生益成女　〔古今〕旅・一　おと

乙麿　忍坂部　〔萬葉〕卷一・一

乙麿　丹比　〔萬葉〕卷八・一

乙麿　從三位中納言。左大臣石上麿男　〔拾遺〕戀三・一　石上乙麿　〔萬葉〕卷三・三　卷六・一　長歌卷六・一　〔古今和歌六帖〕

二畫

【二品】

二品法親王　〔千載〕覺法親王に同じ

二品親王　〔千載〕守覺法親王に同じ

【二條】

二條　長門介源有女　〔古今〕雜下・一　〔玉葉〕戀五・一　女藏人二條

二條大宮別當　〔續詞花〕戀下・一

二條大宮衞門佐　〔續詞花〕戀中・一

二條太皇太后宮大貳　〔金葉〕雜上・一　〔詞花〕夏・一　〔千載〕戀二・一　〔新勅〕夏・一　神・一　戀四・二　雜五・四　物名二。折句二　〔續後撰〕秋上・一　〔續拾〕旅・一　〔玉葉〕春上・一　春下・一　秋上・一　賀・一　戀五・一　〔續後拾〕物名・一　〔新千〕戀五・一

二條太皇太后宮式部　〔金葉〕夏・一　戀上・一　〔千載〕雜中・一

二條太皇太后宮別當　左衞門佐藤原基俊女　〔金葉〕戀上・一　〔千載〕雜中・一

二條太皇太后宮肥後　京極關白家肥後に同じ

二條太皇太后宮堀川　〔風雅〕雜下・一

二條太皇太后宮攝津　〔金葉〕春・一　秋・一　冬・一　雜上・一　〔詞花〕春・一　〔玉葉〕釋・一　〔續千〕秋上・一　〔續詞花〕雜上・二

二條后　高子。皇太后。贈太政大臣長良公女　〔古今〕春上・一　戀五・一　典侍藤原直子朝臣

二條關白内大臣　後二條關白に同じ

二條關白太政大臣　大二條關白に同じ

【二條院】

二條院　一品准后章子内親王冷泉院后。後一條帝御女　〔玉葉〕雜三・一

二條院　諱守仁。後白川帝御子（一八〇三―一八二五）　〔千載〕春下・一　冬・一　賀・一　戀一・一　戀二・一　戀三・一　戀四・一　〔玉葉〕雜二・一　〔續後拾〕春上・一　〔風雅〕戀五・一　〔新千〕戀三・一　〔新拾〕冬・一　〔新後拾〕戀三・一　賀・一　〔續詞花〕春下・一

二條院中納言典侍〔玉葉〕雜四・一

二條院内侍三河 加賀守藤原爲業女 〔千載〕戀二・一　戀四・一　雜中・一　〔新古〕賀・一　〔玉葉〕雜四・一　雜五・一　〔風雅〕春下・一　秋下・一　雜上・一　〔新拾〕秋上・一　〔新續古〕秋上・一　戀三・一　〔續詞花〕秋上・一　秋下・一　戀中・一　戀下・一　雜上・一

二條院宣旨〔玉葉〕戀三・一　〔新續古〕釋・一

二條院前皇后宮常陸〔千載〕戀一・一　〔新勅〕夏・一　戀三・一

二條院讃岐 從三位源賴政女 〔千載〕戀二・一　戀四・二　戀五・一　〔新古〕春下・一　夏・二　秋上・一　秋下・一　冬・二　戀二・三　戀三・一　戀四・一　雜上・二　雜中・一　釋・一　〔新勅〕春上・一　春下・一　秋上・二　冬・一　釋・一　戀一・一　戀四・一　戀五・二　雜一・一　雜二・二　〔續後撰〕春中・一　秋下・一　戀三・一　〔續古〕春上・一　春下・一　夏・一　冬・一　旅・一　戀二・一　〔續拾〕雜秋・一　戀三・一　〔新後撰〕秋上・一　冬・一　戀・五　〔玉葉〕春下・一　夏・一　秋上・一　秋下・二　賀・一　雜二・一　雜三・一　〔續千〕夏・一　秋上・二　〔續後拾〕冬・一　戀四・一　〔新千〕春上・一　戀三・一　〔新拾〕春下・一　秋上・一　戀四・一　〔新後拾〕雜下・一　〔新續古〕春上・一　夏・一　冬・一　雜中・一

【七條】

七條后 宇多帝后温子。昭宣公第三女 〔後撰〕雜一・二 〔新拾〕雜上・一

七條院大納言 中納言藤原實綱女 〔新古〕秋上・一 冬・一 雜上・一 〔新勅〕雜四・一

七條院權大夫 左京權大夫光綱女 〔新古〕秋上・一 〔續古〕哀・一

【八】

八千島 秦 〔萬葉〕卷一七・三

八代女王 〔新古〕戀五・一 〔萬葉〕卷四・一 〔古今和歌六帖〕

八束 藤原 〔萬葉〕卷三・一 卷六・一 卷八・四 旋頭歌卷八・一 〔古今和歌六帖〕

【八條】

八條入道太政大臣 〔續詞花〕秋上・一 冬・一 神・一

八條入道太政大臣北方 〔續詞花〕秋上・一

八條大君 〔拾遺〕雜下・一

八條內大臣 公秀公に同じ

八條前太政大臣 實行公に同じ

八條院高倉 法印澄憲女 〔新古〕春上・一 夏・一 秋下・一 戀二・一 戀三・一 戀四・一 雜下・二 〔新勅〕秋上・一 秋下・二 冬・一 旅・二 釋・二 戀三・二 戀四・一 雜三・二 〔續後撰〕春下・一 釋・一 戀五・一 雜中・二 雜下・一 〔續古〕戀四・一 〔續拾〕雜春・二 〔新後撰〕釋・一 〔玉葉〕春上・一 雜一・一 〔續千〕春上・一 冬・一 〔續後

拾戀〕一・一〔新千〕釋・一　戀三・一〔新拾〕戀一・二　戀二・一〔新後拾〕春下・一〔新續古〕雜下・一

八條院六條 中納言源師仲女 〔千載〕雜上・一〔新古〕秋上・一〔新勅〕春上・一　秋下・一　戀一・一〔玉葉〕雜四・一〔續後拾〕別・一

八條贈左大臣 長實公に同じ

【九條】

九條太政大臣 信長公に同じ

九條左大臣 道良公に同じ

九條左大臣女 道良公女 〔續拾〕戀一・一　戀五・一　後撰〕春下・一　秋上・一　戀三・一〔玉葉〕春上・一　春下・三　夏・一　秋下・一　冬・一　旅・一　戀二・一　雜三・一　神・一〔續千〕春上・二　釋・一　戀四・一〔續後拾〕哀・一〔風雅〕春上・一　春下・一　秋下・一　雜上・一〔新千〕戀三・一〔新拾〕秋上・一

九條右大臣 師輔公に同じ

九條內大臣 良通公

九條前攝政右大臣 忠家公に同じ

九條院 近衞院皇后呈子。大宮伊通公女 〔新古〕哀・一

【十】

十佛 法師 〔新後拾〕旅・一

【入】

入上 犬養縣 〔萬葉〕卷三・一

入上 粟田 〔萬葉〕卷五・一

人名 三手代〔萬葉〕卷八・一
人足 坂門〔萬葉〕卷一・一
人足 三國〔萬葉〕卷八。一
人眞 五位上佐守。酒井。至延喜十四年〔古今〕戀四。一
人麿 丈部造〔萬葉〕卷二〇・一
人麿 贈正一位柿本〔古今〕夏。一 秋上。一 冬。一 旅。
一 戀三・二 雜上。一〔拾遺〕春。二 夏・一
秋・二 冬・三 別・一 雜上・十二 雜下・四
旋頭二長一 神・二 戀一。六 戀二・七 戀三。十八
戀四・十一 戀五・九 雜春。一 雜秋。八 雜賀。
一 雜戀・五 哀・七〔新古夏〕・一 秋上。二 秋
下・六 冬。二 哀。一 旅。二 戀一。三 戀三。一
戀五。二 雜中。二 雜下・一〔新勅〕秋上・一
秋下・一 戀四。三 雜三・一〔續後撰〕春上。一
春中。一 春下。一 秋上。一 秋下・二 冬。一
戀一。一 戀二。一 戀五。一 旅・一〔續古〕春上
・三 春下・二 秋上。二 秋下・一 別。一 旅・三
戀一。二 戀二・一 戀四・五 雜上。一 雜中。二
雜下。二〔玉葉〕春上。三 夏・一、秋上。二 秋下
。二 冬。二 旅。四 戀一。二 戀二・三 戀四。一
戀五・二 雜二。三 雜五。一〔續千〕春上・一 秋
上。一 雜體。一旋頭 戀二。一〔續後拾〕春上。一
春下。一 秋上。一 秋下。二 冬。一 別。一 戀
一。一 戀二。二 戀三。二〔風雅〕春上。三 春中
。三 旅。一 戀五。一〔新千〕春上。一 夏。一
秋上。一 秋下。一 冬。一 戀一。二 戀二。二

戀三・一　〔新拾〕春上・一　春下・一　秋上・一　秋下・二　旅・一　哀・二　戀一・二　戀四・二　雜上・一　〔新後拾〕雜秋・一　旅・一　〔新續古〕春上・一　秋上・一　秋下・一　〔萬葉卷〕一・二一　卷二・二二　卷三・一九　卷四・七　卷七・三三　卷九・一〇　卷一〇・六八　卷一一・一四九　卷一二・二八　卷一三・一　長歌卷一・四　卷二・一〇　卷三・二　卷一三・二　〔三十六人集〕三〇六　旅一　〔古今和歌六帖〕

【入道】

入道內大臣　〔續拾〕土御門入道內大臣に同じ　〔新千〕八條內大臣に同じ

入道左大臣　〔新古〕三條入道左大臣に同じ

入道右大臣　〔續拾〕後花山院入道右大臣に同じ

入道前太政大臣　〔後拾〕法成寺入道前攝政太政大臣に同じ　〔詞花〕同上　〔千載〕妙音院太政大臣に同じ　〔新勅〕西園寺入道前太政大臣に同じ　〔續古〕常磐井入道前太政大臣に同じ　〔新後撰〕後西園寺入道前太政大臣に同じ　〔玉葉〕同上　〔續千〕同上　〔續後拾〕三條入道前太政大臣に同じ　〔新千〕中園入道前太政大臣に同じ

入道前太政大臣女　實兼公女　〔玉葉〕雜三・一

入道前內大臣　〔新千〕八條內大臣に同じ　〔新拾〕竹林院前內大臣に同じ　〔新續古〕西山內大臣に同じ

入道前左大臣　〔玉葉〕竹林院入道前左大臣に同じ

入道前右大臣　〔新葉〕　春上・一　春下・三　秋上・二　冬・三　神・一　戀一・一　戀二・二　戀三・二　雜中・一　雜下・一

入道前右大臣　〔續古〕後花山院入道右大臣に同じ　〔續後拾〕金光院入道前右大臣に同じ

入道前關白太政大臣 〔千載〕松殿攝政關白に同じ 〔新古〕釋一 雜中・一 〔續後拾〕釋・一 〔新千〕釋・一
後法性寺入道前關白太政大臣に同じ 哀・一

入道前關白左大臣 〔新後撰〕香園院關白に同じ 〔風雅〕三 緣
院前關白左大臣に同じ

入道前關白左大臣 藤教基歟。二條師基男 〔新葉〕春下・一
夏・一 秋上・一 冬・二 戀一・一 戀三・一 戀
四・一 戀五・一 雜上・二 雜下・一 賀・一

入道前攝政左大臣 〔續後撰〕光明峯寺入道前攝政左大臣に同じ

入道攝政 〔後拾〕東三條入道關白太政大臣に同じ

【了】

了雲 法師。國造濟氏子 〔續千〕旅・一 〔續後拾〕旅・一 〔新
千〕雜中・一

了然 上人。中納言定家子 〔新後撰〕釋・二 〔續千〕旅・一

三 畫

己心院前攝政左大臣 師教公に同じ

子首 佐氏 〔萬葉〕卷五・一

万雄 五位。難波 〔古今〕別・一（大系圖考。南家武智麿子豐成號二難波大臣一又横佩大臣云々豐成六世万雄。從五位下右中辨也此人歟）

【川】

川相 丈部 〔萬葉〕卷二〇・一

川原 兵部 〔萬葉〕卷九・一

【弓】

弓削皇子 天武帝皇子（一一三五九） 〔萬葉〕卷二・五 卷三・

二　卷八・一

弓削倭文子　寶暦二年、文布歿二十　〔散りのこり〕九六

【下】

下野　下野守源政隆女　〔後拾〕雜二・一　〔金葉〕春・一　〔新勅〕戀五・一　雜一・一　〔玉葉〕雜二・一　〔風雅〕冬・一　戀二・一　〔新續古〕別・一　〔續詞花〕冬・一　戀上・一

下野　下野守貞正澄(イ隆)女　〔後撰〕戀三・一

【上】

上宮聖德皇子　〔萬葉〕卷三・一

上總大輔　後一條院女房。春宮大進成行女　〔後拾〕雜二・一

上總侍從　〔金葉〕戀下・一

上總乳母　朱雀院梅壺女御乳母。越前守源致益女　〔後拾〕秋上・一

【上西】

上西門院兵衛　神祇伯顯仲女　〔千載〕春上・一　別・一　哀・一　戀一・一　戀三・一　戀四・一　戀五・二　雜中・一　〔新古〕冬・一　哀・一　〔新勅〕雜九・一　○長歌　〔續後撰〕春中・一　戀三・一　〔續拾〕雜秋・一　〔玉葉〕雜三・一　雜四・一　〔續千〕夏・二　秋下・一　〔續後拾〕釋・一　〔風雅〕雜下・一　〔新千〕哀・一　〔新拾〕夏・一　秋上・一　秋下・一　〔新續古〕雜上・一

上西門院武藏　〔新勅〕雜二・一

上西門院冷泉　〔續詞花〕秋上・一

【上東】

上東門院　彰子一條院后後一條朱雀帝母。法成寺道長公女(一六五八—一七三四)　〔後拾〕哀・一　雜三・一　〔金葉〕別・一　雜上・一

〔千載〕哀・二 神・一・〔新古〕哀・二 雜上・一 雜下・一 釋・一〔續後撰〕神・一 雜上・一〔續古〕春上・一 秋上・一 〔玉葉〕旅・一 雜一・一 雜三・一 雜四・二〔續後拾〕神・一〔新千〕別・一 賀・一 〔新拾〕哀・一〔新續古〕別・一〔續詞花〕釋・一 雜上・一

上東門院少將 參議源扶義女 〔新古〕夏・一 秋上・一 〔新勅〕冬・一 雜一・一

上東門院中將 左京大夫源道雅女 〔後拾〕春上・二 秋下・一 雜三・一 雜五・一

上東門院五節 〔風雅〕雜下・一

上東門院新宰相 三條院女房。參議廣業女 〔後拾〕雜四・一

【女】

女三宮治部卿 禎子内親王家治部卿に同じ

女四のみこ 〔後撰〕勤子内親王に同じ

【女御】

女御仁善子 三條右大臣定方公女 〔後撰〕雜一・一 むすめの女御 〔續古〕哀・二 延喜女御

女御熙子女王 保明親王女 〔新古〕戀四・一

女御徽子女王 齋宮女御に同じ

女御藤原生子 大二條教通女 〔新古〕哀・一 戀四・二 〔玉葉〕戀二・一 雜四・一

【女藏人】

女藏人二條 〔玉葉〕二條に同じ

女藏人内匠 〔新古〕雜下・一

女藏人三河 〔拾遺〕別・一

女藏人兵庫〔拾遺〕哀・一

女藏人萬代　後醍醐院女藏人萬代に同じ

【山】

山口女王〔新古〕戀五・二〔續後撰〕戀三・一〔玉葉〕戀四・一〔萬葉〕卷四・五　卷八・一〔古今和歌六帖〕

山口重如女〔續詞花〕釋・一

山代　丈部　〔萬葉〕卷二〇・一

山田〔後撰〕雜四・一〔新古〕雜下・一〔續後撰〕秋上・一〔玉葉〕雜二・一〔續千〕雜上・一〔續後拾〕雜上・一〔風雅〕雜下・一〔新千〕春上・一

山田中務　小一條皇后女房。因幡守藤原致貞女　〔後拾〕哀・一

山本入道前太政大臣　公守公に同じ

山本入道前太政大臣女　公守公女　〔玉葉〕戀四・一　戀五・一〔續千〕夏・一　雜上・一〔風雅〕戀三・一　雜中・一　釋・一

山前王（―一三八三）〔萬葉〕卷三・二長歌卷三・一

山背王〔萬葉〕卷二〇・一

山部王〔萬葉〕卷八・一

山階入道前左大臣　實雄公に同じ

【土】

土岐茂子〔筑波子歌集〕八一　長歌二

土師　多治比　〔萬葉〕卷一九・一

土滿　栗田。文化八年歿七十五　〔岡屋歌集〕四九九　長歌四〇　旋頭歌一

土佐〔後撰〕戀一・一　戀二・一　戀三・一　戀五・一

雜二・一　雜三・二
土佐内侍　〔金葉〕秋・一

【土御門】

土御門入道内大臣　通成公に同じ
土御門内大臣　通親公に同じ
土御門右大臣　師房公に同じ
土御門右大臣女　〔後拾〕哀・一　〔新古〕哀・一
土御門院　諱爲仁。後鳥羽帝御子（一八五五―一八九一）〔土御門院御集〕
四五四　〔續後撰〕春上・四　春中・一　春下・一
夏・一　秋上・一　秋中・二　秋下・二　冬・二　神
・二　戀二・二　戀三・一　戀四・二　雜中・二　雜下
・二　土御門院御製　〔續古〕春上・三　夏・四　秋上・三
秋下・二　冬・五　神・一　釋・一　旅・三　戀一・二
戀二・一　戀三・一　戀四・一　雜上・四　雜中・二
雜下四　〔續拾〕春上・二　夏・二　秋上・一　冬・三
雜春・二　雜秋・一　戀一・一　戀二・一　戀四・一
戀五・一　雜中・一　〔新後撰〕春上・一　秋上・二
冬・一　戀一・一　戀五・一　雜中・一　賀・一
〔玉葉〕秋上・二　秋下・一　冬・三　雜三・一　雜五
・一　〔續千〕春上・一　旅・三　戀三・一　戀五・一
雜上・二　賀・一　〔續後拾〕春上・一　冬・一　戀一・
一　雜上・一　雜中・二　〔風雅〕春上・二　春中・二
戀二・一　雜上二　〔新千〕春上・一　夏・一　旅・一
戀二・一　雜上・四　〔新拾〕夏・一　秋上・一　冬・
一　別・一　戀二・一　戀三・二　釋・一　〔新後拾〕
春上・一　雜秋・三　別・一　雜下・一　〔新續古〕

春上•一　春下•二　秋下•一　冬•二　戀一•一
雜上•一　雜下•一　神•一

土御門院小宰相　從二位家隆女　〔新勅〕秋下•一　雜•一
承明門院小宰相　〔續後撰〕秋上•一　秋中•一　戀一•二
戀二•一　戀五•一　〔續古〕春上•一　夏•一　秋上•二　秋下•一　冬•一　戀三•一　戀四•一　戀五•二　雜上•一　雜下•一　〔續拾〕春下•一　雜春•一　雜秋•一　戀一•一　〔新後撰〕秋上•一　秋下•一　〔續千〕春下•一　戀二•一　〔續後拾〕戀三•一
〔風雅〕賀•一　〔新千〕雜中•一　〔新拾〕春上•一
春下•一　秋上•一　戀一•一　〔新續古〕秋上•一
冬•一

土御門御匣殿　三條院皇后宮女房　大藏卿藤原正光女　〔後拾〕春下•一

雜二•一

土御門齋院中將　〔千載〕戀五•一　〔續詞花〕戀下•一

【久】

久世　四位。從二位賀茂氏久男　〔續拾〕神•一　〔新後撰〕戀一•一　戀三•一　雜中•一　〔玉葉〕冬•一　〔續千〕戀三•一　〔續後拾〕神•一　〔新千〕雜上•一

久世太政大臣　具通公に同じ

久米女王　〔萬葉〕卷八•一

久米女郎　〔萬葉〕卷八•一

久良親王　式部卿久明親王御子　〔風雅〕雜下•一　〔新千〕戀•一

久我太政大臣　雅實公に同じ

久我內大臣　雅通公に同じ

久宗　四位。神主 賀茂久世男　〔新後撰〕戀五・一　〔玉葉〕雜一・一

久明親王　一品式部卿 征夷大將軍　〔新後撰〕秋上・一　冬・一　〔玉葉〕春下・一　秋下・一　戀四・一　雜一・一　〔續千〕秋下・一　戀一・一　戀四・一　哀・二　〔續後拾〕秋下・一　戀一・一　雜中・一　〔風雅〕雜上・一　〔新千〕秋下・一　冬・一　釋・一　哀・一　〔新拾〕哀・一　〔新後拾〕戀二・一

久時　[illegible]位前橋武藏守。駿河守平義宗男　〔新後撰〕旅・一　戀三・一　雜中・一　〔玉葉〕雜一・一　〔續千〕秋上・一　〔風雅〕雜上・一

久曾　源作女　〔古今〕雜體・一　誹諧歌

久須麿　藤原　〔萬葉〕卷四・二

久盛　栗川。新葉集歌詞書云後醍醐御陵植千木櫻云々　〔新葉〕哀・一

【千】

千文　大舍人部　〔萬葉〕卷二〇・二

千古　位伊豫守。參議大江音人五丸男。延喜二五年二十九卒　〔後撰〕冬・一　戀一・二　〔新古〕神・一　〔古今和歌六帖〕

千包女　〔後撰〕秋下・一

千年　持車　〔萬葉〕卷六・二　長歌卷六・二

千里　六位兵部大丞。參議大江音人男。延喜三年任兵部大丞　〔大江千里集〕一二五　〔古今〕春上・一　夏・一　秋上・一　秋下・一　物名・一　戀二・一　戀三・一　哀・一　雜下・一　雜體・一 誹諧　〔後撰〕秋上・一　雜一・一　〔新古〕春上・一　秋上・一　別・一　〔新勅〕春下・一　〔續古〕春下・一　〔玉葉〕旅・一　〔續千〕春上・一　〔續後拾〕

雜中・一〔風雅〕雜中・一　雜下・一〔新千〕哀・一〔新拾〕雜下・一〔新續古〕雜中・一〔古今和歌六帖〕〔寛平后宮歌合〕秋・一

千室　大伴〔萬葉〕卷四・一　卷二〇・一

千乘　五位肥前守。左京大夫藤原忠房男、至康保二年〔後撰〕戀二・一

千國　刑部直〔萬葉〕卷二〇・一

千景　五位筑前守藤原崇範男。千蔭。越前守至延長七年〔拾遺〕春・一

千惠　法師俗名堀川中將基時〔新千〕雜上。一

千種入道前太政大臣　通相公に同じ

千蔭　加藤。文化五年。歿七十四。萬葉集畧解。〔うけらが花〕一五八八
長歌二二五

千觀　法師〔新勅〕釋。一〔續千〕釋・一〔續後拾〕釋・一〔新千〕雜上・一

【三】

三中　大伴〔萬葉〕卷三・二　卷一五・二　長歌卷三。一

三中　日下部使主〔萬葉〕卷二〇・一

三中が父　日下部使主〔萬葉〕卷二〇・一

三位　中納言顯隆女〔千載〕哀・一

三成　大田部〔萬葉〕卷二〇・一

三形王〔萬葉〕卷二〇・二

三河內侍　二條院內侍三河に同じ

三依　大伴〔萬葉〕卷四・四　卷九・一　卷八・一〔古和今歌六帖〕

三原王〔萬葉〕卷八・一〔古今和歌六帖〕

三宮　輔仁親王に同じ

三宮大進　輔仁三宮大進に同じ

三島王〔萬葉〕巻五・一
三野 刑部直 〔萬葉〕巻二〇・一
三國町 仁明更衣紀名虎女。貞登母 〔古今〕夏・一
三縁院前關白左大臣 道教公に同じ

【三條】

三條入道內大臣 公親公に同じ
三條入道左大臣 實房公に同じ
三條入道前太政大臣 實重公に同じ
三條大宮式部〔續詞花〕雑中・一 雑下・一
三條小左近 贈從三位祇子家女房 〔後拾〕秋上・一
三條太政大臣室 實重公室。內大臣通成女 〔玉葉〕雑一・一
雑五・一〔續千〕雑中・一 雑下・一
三條太皇太后宮 圓融院后遵子。廉義公女 〔拾遺〕別・一
雑戀・一〔新千〕雑上・一 太皇太后宮
三條內大臣〔續後撰〕後三條內大臣に同じ 〔新拾〕同上
三條右大臣 定方公に同じ
三條右大臣 實親公に同じ
三條右大臣女〔新拾〕戀四・一
三條右大臣女の女御 女御仁善子に同じ
三條町 更衣靜子惟喬親王母。刑部卿紀名虎女。〔古今〕雑上・一
三條院 諱居貞。冷泉帝御子（一六三六－一六七七）〔後拾〕雑一・一
雑三・一 雑五・一 三條院御製 〔詞花〕秋・一〔新古〕
秋上・一 雑上・一〔新千〕戀四・一〔新拾〕雑中・
一〔續詞花〕秋上・一
三條院女藏人左近〔拾遺〕戀三・一 雑秋・一 雑
賀・一 春宮左近 〔後拾〕春上・一 賀・一 雑一・一

雜三・一　雜六・一 誹諧。小大君　〔千載〕戀三・一　〔新古〕戀一・一　戀三・一　雜上・一　〔續後撰〕戀三・一　〔續拾〕戀二・一　〔續後拾〕釋・一　〔風雅〕戀三・一　〔新千〕戀五・一　〔新拾〕冬・一　〔新續古〕戀五・一　雜下・一　〔續詞花〕戀下・一　雜中・一　雜下・一　戲・一　〔三十六人集〕二二九 長歌一 補遺三

三條院皇后宮五節　〔千載〕夏・一

三條關白　廉義公に同じ

【小】

小一條太政大臣　貞信公に同じ

小一條左大臣　師尹公に同じ

小一條院　諱敦明後一條御時春宮。三條帝御子　〔後拾〕雜二・一 小一條院　〔金葉〕戀上・一 小一條院御製　〔詞花〕雜上・一　〔玉葉〕雜四・一 小一條院

小八條御息所　民部卿昇公女　〔後撰〕戀二・一

小大君　三條院女藏人左近に同じ

小大進　〔續詞花〕戀下・一　物・一　戲・二

小少將　後光嚴院小少將に同じ

小左近　〔後拾〕秋上・一　哀・一　雜一・一　〔續古〕夏・一　〔續詞花〕春上・一　夏・一

小式部　祐子内親王家女房。下野守藤原義忠女　〔後拾〕雜一・二　〔千載〕戀四・一

小式部内侍　上東門院女房。陸奧守橘道貞女　〔後拾〕雜三・一　〔金葉〕雜上・一　〔詞花〕雜上・一　〔續後撰〕春下・一　秋下・一　〔玉葉〕春下・一　〔新千〕戀四・一　〔新後拾〕旅・一

小町姉 〔古今〕戀五・一 〔後撰〕戀二・一 戀五・一 雜四・一

小町孫 〔後撰〕雜四・一

小侍從 太皇太后宮小侍從に同じ

小侍從命婦 加賀守藤原正光女 〔後拾〕哀・二

小貳 小貳命婦に同じ

小貳命婦 〔後撰〕春中・一 〔拾遺〕春・一 戀四・一 雜賀・一 連歌。しげのの內侍 〔天德內裏歌合〕一

小貳乳母 〔後撰〕雜二・一

小馬命婦 攝津守藤原棟町女 〔拾遺〕戀四・一 〔後拾〕雜二。一 〔新古〕雜下・一 〔玉葉〕戀三・一 戀四・一 雜上・一 〔新千〕戀四・一 〔六女集〕五三

小黑栖 津守宿禰 〔萬葉〕卷二〇・一

小歲 大伴部 〔萬葉〕卷二〇・一

小龍 占部 〔萬葉〕卷二〇・一

小辨 祐子內親王家女房。越前守懷伊女 〔後拾〕春上・三 夏・二 秋上・二 戀一・一 戀四・一 雜一・四 雜三・一 雜六・一 釋教歌 〔千載〕秋上・一 秋下・一 哀・一 〔新古〕秋上・一 戀一・一 雜上・一 〔新勅〕秋上・一 〔續後撰〕夏・一 秋上・一 戀三・一 戀四・一 〔續古〕夏・一 冬・一 〔續拾〕旅・一 〔玉葉〕春上・一 秋下・一 冬・一 旅・一 戀一・二 神・一 秋上・一 哀・一 〔續後拾〕雜上・一 〔風雅〕春上・一 〔新千〕雜上・一 〔新拾〕春上・一 神・一 〔新後拾〕雜春・一 〔續詞花〕春上・一 秋上・一 秋下・一 戀中・一 〔古今和歌六帖〕

小辨〔萬葉〕卷九・一

【小野】

小野千古母〔古今〕別・一

小野小町 小野良貞女 〔古今〕春下・一 戀二・四 戀三・五 戀四・一 戀五・三 雜下・一 雜體・一誹諧 〔後撰〕戀三・一 雜一・一 雜三・一 旅・一 〔新古〕秋上・二 哀・二 戀五・一 雜下・一 〔新勅〕秋下・一 戀一・二 戀四・二 雜四・一 〔續後撰〕秋上・一 雜下・一 旅・一 〔續古〕戀三・二 戀四・一 戀五・一 雜上・一 雜中・一 雜下・一 〔玉葉〕戀一・二 戀三・一 戀四・一 〔續千〕旅・一 〔續後拾〕戀二・一 雜上・一 〔風雅〕夏・一 戀四・一 〔新千〕戀二・三 戀四・一 〔新拾〕秋下・一 哀・一 戀四・一 戀五・一 〔新後拾〕春下・一 雜下・一 〔新續古〕戀五・一 〔三十六人集〕一一五 長歌一 〔古今和歌六帖〕

小野氏 淡理 〔萬葉〕卷五・一

小野好古女〔後撰〕戀三・二

小野宮太政大臣 淸愼公に同じ

小野宮太政大臣女〔後拾〕戀一・一

小野宮右大臣 實資公に同じ

小野遠興女〔後撰〕戀三・一

【大】

大二條關白 敎通公に同じ

大夫典侍 神祇伯顯仲女 〔金葉〕春・一 賀・一 〔續詞花〕

大平 本居。天保四年。藤垣内集。歿七十八 〔稻葉集〕一〇二九

大宅女 〔萬葉〕卷四・一 卷六・一 〔古今和歌六帖〕

大伯皇女 〔萬葉〕卷二。六

大成 葛井 〔萬葉〕卷四・一 卷五・一 卷六・一

大和宣旨 三條院太皇太后宮女房。中納言惟仲女。大和守義忠爲妻之故號大和 〔後拾〕哀・一 戀三・一 戀四・一

大首 拔氣 〔萬葉〕卷九・三

大津皇子 天武帝皇子（一三二三―一三四六） 〔萬葉〕卷二・二 卷三・一 卷八・一

大浦 閒人 〔萬葉〕卷三・二

大神女郎 〔萬葉〕卷四・一 卷八・一

大倭 式部 〔萬葉〕卷九・一

大隅國郡司 〔拾遺〕雜下・一

大貳三位 山城守宣孝女 〔後拾〕春下・一 夏・一 秋上・一 秋下・一 冬・一 戀二・一 戀四・一 雜三・一 雜五・一 〔金葉〕雜下・一藤原賢子 〔詞花〕雜上・一 〔千載〕秋下・一 哀・一 戀九・一 雜下・一 〔新古〕春上・一 秋上・一 賀・一 哀・一 雜中・一 雜下・一 〔新勅〕春上・一 春下・一 秋下・一 〔續古〕秋上・一 〔續拾〕雜春・一 〔玉葉〕夏・一 秋下・一 〔續千〕雜體・二 〔新千〕冬・一 〔風雅〕戀一・一 雜下・一 〔新千〕秋上・一 〔新拾〕釋・一 〔新後拾〕戀二・一 〔新續古〕戀一・一 〔續詞花〕秋下・二 戀中・一 戀下・一 物・一

大道 志氏 〔萬葉〕卷五・一

大頴 六位菅博士。宗岳。大系圖考菅家祖宇庭五世宗岳從四位上三河守大內記延喜六年卒勘解由次官善主

子云々此人歟　〔古今〕戀二・一　雜下・一

大織冠鎌足公　鎌足公に同じ

大將御息所　菅眞公女　〔後撰〕春中・一　〔玉葉〕戀五・一　女御慶子

大齋院　〔續詞花〕雜上・一　雜下・一

大藏卿有敎女　〔續拾〕戀二・一

【大中】

大中臣行廣女　〔新後拾〕戀四・一

大中臣輔弘女　〔金葉〕戀下・一

【大原】

大原　史氏　〔萬葉〕卷五・一

大原野　〔玉葉〕神・一

【大島】

大島　高安　〔萬葉〕卷一・一

大島　仲田舍人　〔萬葉〕卷二〇・一

【大歳】

大歳　丸子連　〔萬葉〕卷二〇・一

大歳　丈部直　〔萬葉〕卷二〇・一

【大輔】

大輔　但馬守源弼女　〔古今〕雜體・一　〔後撰〕秋中・二　戀二・一　戀四・三　戀六・一　雜一・一　雜二・二　雜三・三　別・一　哀・二

大輔　〔續詞花〕戀中・一　戲・一

大輔命婦　〔後拾〕戀二・一

【大江】

大江玉淵女　〔後撰〕雜一・一

大江忠成朝臣女 〔新後撰〕雜中・一 〔玉葉〕戀一・二 〔續千〕旅・一 〔續後拾〕戀二・一
大江政國女 〔新後撰〕戀四・一 〔續千〕冬・一 戀三・一 雜上・一 〔續後拾〕戀一・一
大江致國女妹 〔續千〕戀五・一
大江維順女 〔千載〕戀二・一

【大宮】

大宮小侍從 〔續詞花〕夏・一 釋・一 戀中・一
大宮太政大臣 伊通に同じ
大宮內大臣 宗能公に同じ
大宮右大臣 俊家公に同じ
大宮院權中納言 従二位藤原雅平女 〔續古〕秋下・一
大宮越前 越前守源經宗女 〔後拾〕秋下・一

【大炊】

大炊御門太政大臣女 〔續千〕秋下・一
大炊御門內大臣 冬忠公に同じ
大炊御門右大臣 公能公に同じ
大炊御門左大臣 經宗公に同じ
大炊御門前內大臣 冬信公に同じ
大炊御門前內大臣母 冬信公母大納言經長女 〔新千〕哀・一
大炊御門贈太政大臣 經實公に同じ

【大納言】

大納言典侍 〔續後撰〕後嵯峨院大納言典侍に同じ
大納言忠家母 近江守源高雅女 〔後拾〕戀三・一 〔續後撰〕旅・一
大納言師氏女 〔新勅〕雜三・一 〔後撰〕雜下・一

大納言後賢母　九條右大臣師輔公女　〔新古〕戀一・一

大納言道綱母　右大將道綱母に同じ

大納言經信母　播磨守藤原國盛女　〔六女集〕二一　〔後拾〕秋上・一　〔新古〕戀五・一　〔續古〕秋上・一　〔續詞花〕秋上・一　戀中・一

大納言顯實母　爲道朝臣女　〔新千〕春下・一　夏・一　神・一　戀二・一　戀四・一　戀五・一　雜中・一　哀・一　〔新拾〕秋上・一　戀三・一　戀四・一　雜中・一　〔新後拾〕雜秋・一

【大伴】

大伴女郎　〔萬葉〕卷四・一

大伴女娘　〔續後撰〕戀三・一　〔玉葉〕戀三・一

大伴安麿の妻　〔萬葉〕卷四・一

大伴坂上郎女　〔拾遺〕夏・一　戀五・四　雜戀・一　〔續古〕秋下・一　〔玉葉〕春上・一　旅・一　戀一・三　〔新千〕戀四・一　〔續後拾〕戀一・一　〔新續古〕戀九・一　〔萬葉〕卷三・四　卷四・三一　卷六・二九　卷一七・六　卷一九・一　長歌卷三・二　卷四・二　卷六・一　卷一九・一　旋頭歌卷四・一　〔古今和歌六帖〕

大伴皇子　天武帝御子　〔玉葉〕戀二・一　〔古今和歌六帖〕

大伴眞足女　檜前舍人石前の妻　〔萬葉〕卷二〇・一

大伴家持　家持を見よ

大伴家持の妹　〔萬葉〕卷一九・一

四　畫

五百麿 忍海部 〔萬葉〕卷二〇・一

木如 法師 〔續千〕雜上・一 〔風雅〕旅・一

方見 イ像見 大伴 〔拾遺〕戀二・一 雜春・一 〔萬葉〕卷四・四 卷八・一 〔古今和歌六帖〕

月花門院 一品綜子。後嵯峨帝御女 〔續古〕春下・一 夏・一 秋上・一 秋下・一 冬・一 別・一 戀四・一 雜中・一 〔續拾〕春上・一 雜春・一 〔新後撰〕春下・一 雜上・一 〔玉葉〕秋下・一 賀・一 雜一・一 雜三・一 〔新千〕春上・一 〔新拾〕秋上・一 戀四・一 雜一・一

尹明 藤原 〔續詞花〕戀下・一

手持女王 〔萬葉〕卷三・三

片野尼 〔風雅〕釋・一

之盛 四位。紀 〔新續古〕戀四・一

六鯖 〔萬葉〕卷一五・二 長歌卷一五・一

【允】

允仲 四位。禰宜祝部成仲男 〔新古〕雜上・一 〔續後撰〕雜中・一 〔續拾〕釋・一 〔新續古〕雜上・一

允恭天皇 諱雄朝津間。仁德帝御子 〔續古〕戀三・一 允恭天皇御歌

【牛】

牛甘 上毛野 〔萬葉〕卷二〇・一

牛麿 有度部 〔萬葉〕卷二〇・一

【友】

友則 六位大内記。宮内權少輔紀有朋男（一五〇五—一五六五）古今集撰者 〔古今〕春上・四 春下・一 夏・三 秋上・二 秋下・四 冬・二 別・一 物名・五 戀二・十一 戀三・三 戀四・二

戀五・四　哀・二　雜上・一　雜下・一〔後撰〕春上
・一　秋上・一　秋下・三　戀二・一　戀四・二　雜
一・一〔拾遺〕冬・二〔續古〕秋上・一　秋下・一
〔玉葉〕戀一・一〔續千〕春上・一　戀四・一〔續後
拾〕物名・一〔新千〕秋上・一〔新拾〕秋下・一
〔三十六人集〕七九〔古今和歌六帖〕〔寛平后宮
歌合〕春・一　夏・三　秋・一　冬・一　戀・二
友景　五位使石見前司 中原　〔續後撰〕雜中・一

【水】

水通　土師　〔萬葉〕卷四・二　卷五・一　卷一六・一
水通　石川　〔萬葉〕卷一七・一

【丹】

丹比大夫〔萬葉〕卷一五・一
丹生女王〔萬葉〕卷四・二
丹生王〔萬葉〕卷三・二　長歌卷三・一
丹波大女娘子〔萬葉〕卷四・三

【井】

井戸王〔萬葉〕卷一・一
井手尼〔後拾〕雜三・一
井手左大臣　諸兄公に同じ

【天】

天武天皇　大海人皇子（一二八二―一三四五）〔萬葉〕卷一・二　卷二
・二　長歌卷一・一
天智天皇　諱葛城。舒明帝御子（一二八六―一三三一）〔古今〕戀四・一
天命左書近江の采女に給ひける御歌　追加第十三・一　同名〔後撰〕秋中
・一　御製天智〔新古〕雜中・一〔玉葉〕秋下・一〔新

千〕戀四・一 〔萬葉〕卷一・二 卷二・一 長歌卷一・一〔古今和歌六帖〕

【天曆】

天曆中宮 冷泉院御母安子。九條師輔公女 〔新勅〕雜三・一 〔新古〕雜下・一 天曆帝太皇太后宮 〔新千〕哀・一

天曆帝 村上天皇に同じ

天曆御乳母少納言 〔拾遺〕別・一

天曆贈太皇太后宮 天曆中宮に同じ

【心】

心也 法師 〔續詞花〕物・一

心阿 法師世保七郎左衞門親宗 〔新千〕戀五・一

心海 上人阿彌陀院 〔續古〕哀・一 〔續拾〕釋・一 〔新後撰〕旅・一 釋・一 雜中・一 〔新拾〕釋・一 〔新續古〕雜中・一

心圓 法師。正三位知家子 〔續古〕雜下・一 〔續拾〕雜秋・一 雜中・一 〔新後撰〕雜中・一 〔玉葉〕冬・一

心覺 阿闍梨。兵部少輔源信綱子 〔詞花〕戀上・一 〔千載〕雜下・一 諱誹諧 〔續詞花〕春上・一 夏・一 雜下・一

心覺法師母 〔續詞花〕春上・一 秋下・一

【内】

内大臣 〔後拾〕後二條關白に同じ 〔金葉〕花園左大臣に同じ 〔詞花〕宇治左大臣に同じ 〔新勅〕常盤井入道前太政大臣に同じ 〔續後撰〕三條入道内大臣に同じ 〔續古〕大炊御門内大臣(冬忠)に同じ 〔續拾〕淨明寺關白前右大臣に同じ 〔新後撰〕一條内大臣に同じ 〔玉葉〕後淨妙寺右大臣に同じ 〔續千〕後花山院内大臣に同じ 〔續後拾〕西園寺内大臣に同じ 〔風雅〕後野宮内大臣に同じ 〔新千〕千種入道前太政大臣に同じ 〔新拾〕後常盤井右大臣に同じ 〔新後拾〕

稱名院入道内大臣に同じ

内大臣公清公室　〔風雅〕戀五・一　雜下・一

内大臣家小大進　花園左大臣家小大進に同じ

内大臣家越後　花園左大臣家越後に同じ

内侍平子　〔後撰〕戀五・一

内經公　從一位内大臣芬陀利花院前關白一條藤原内實男　〔玉葉〕秋下・一
雜三・一　權大納言　〔續千〕春下。一　夏。一　秋下。一
戀二・一　雜中。一　關白内大臣　〔續後拾〕冬。一　戀二
・二一　戀三・一　芬陀利花院前關白内大臣　〔風雅〕冬・一　雜下・
二一　〔新千〕夏・一　秋下・一　戀四・一　戀五・一
〔新拾〕春上・一　秋下・一　戀二・一　〔新後拾〕春
下・一　〔新續古〕春上・一　夏・一　戀四・一

内實公　正二位一條内大臣後光明峯寺藤原家經男　〔新後撰〕夏・一　戀一
・一　戀三・一　戀五・一　雜中・二　内大臣　〔玉葉〕
冬・一　戀二・一　雜三・一　一條内大臣　〔續千〕神・一
雜中・一　賀・一　〔續後拾〕賀・一　〔風雅〕秋中・
一　〔新千〕秋上・一　雜中・一　一條内大臣　〔新拾〕春上
・二　夏・一　冬・一

【六條】

六條入道太政大臣　頼實公に同じ

六條内大臣　有房に同じ

六條左大臣　顯房に同じ

六條右大臣　六條左大臣に同じ

六條右大臣室　右大臣北方に同じ

六條院宣旨　民部卿藤原顯良女　〔千載〕雜中・一　〔新勅〕神
・一　禖子内親王家宣旨　〔玉葉〕夏・一　宣旨　〔續後拾〕秋上・一

〔新千〕釋・一　〔新續古〕哀・一

六條宮　〔續詞花〕春下・一　秋上・一

六條齋院宣旨　禖子内親王家女房。左馬頭源賴國女　〔後撰〕雜四・一　雜五・一

【文】

文成　橘　〔萬葉〕卷六・一

文武天皇　諱輕。草壁皇子御子（一三四三―一三六七）　〔古今〕秋下・一

左書にならのみかどの御歌なりとなむ申す　〔古今和歌六帖〕

文貞公　藤師賢。花山院内大臣師信男　〔新葉〕春下・一　夏・一　秋下・二　冬・一　離・四　旅・五　戀一・一　戀二・三　戀三・二　戀四・三　戀五・一　雜上・一二　雜中・五　雜下・五　哀・三

文貞公女　〔新葉〕秋上・一　秋下・一　雜下・一

文時　從二位式部大輔。右大辨菅原高規男。天元四年九八卒　〔拾遺〕雜上・一　式部大輔

文雄　井上。明治四年。伊勢の家づと。歿七十二　〔調鶴集〕　九二七　連歌二　長歌二

文幹　四位信濃守。參議紀淑光男。至天曆七年　〔拾遺〕春・一

文範　從二位中納言。參議藤原元名男　〔新續古〕春上・一　民部卿

【日】

日向　〔續詞花〕物・一

日並皇子命　〔萬葉〕卷二・一

日置長枝娘子　〔萬葉〕卷八・一

日藏　上人笙岩屋　〔新古〕釋・一

【日吉】

日吉　〔新古〕神・一　〔新拾〕神・一

日吉十禪師　〔新續古〕釋・一

日吉地主權現　〔風雅〕神。一　〔新拾〕神・一

日吉聖眞子　〔玉葉〕神・一

【太】

太上天皇　〔新古〕後鳥羽院に同じ　〔續後撰〕後嵯峨院に同じ　〔續拾〕龜山院に同じ　〔新後撰〕後宇多院に同じ　〔風雅〕光嚴院に同じ　〔新後拾〕崇光院に同じ

太田垣蓮月　明治八年歿八十五　〔海士の刈藻〕三二〇

太政大臣　〔後撰〕小一條太政大臣に同じ　〔金葉〕久我前太政大臣に同じ　〔詞花〕八條前太政大臣に同じ　〔新後撰〕後德大寺太政大臣に同じ　〔續千〕三條入道前太政大臣に同じ　〔新後拾〕後普光園院攝政前太政大臣に同じ

【太皇】

太皇太后宮　〔新千〕三條太皇太后宮に同じ

太皇太后宮　近衞院二條院后多子。右大臣公能公女　〔千載〕雜中・一　〔玉葉〕雜。一　近衞太皇太后宮

太皇太后宮大貳　二條太皇太后宮大貳に同じ

太皇太后宮小侍從　石淸水別當光淸女　〔千載〕旅・一　戀三・一　戀四。一　戀五・一　〔新古〕夏・一　冬・二　戀三・二　雜中・一　釋・一　〔新勅〕秋上。一　秋下・二　戀三・二　〔續後撰〕夏・一　戀三・一　〔續古〕夏。一　戀三・一　戀四・一　戀五・二　雜下・一　〔續拾〕冬・二　〔新後撰〕春上・一　釋・一　戀二・二　〔玉葉〕春下・一　秋上・一　秋下・一　戀一・一　戀二・二　戀三・一　戀四・一　雜五・二　〔續後拾〕旅・一　〔風雅〕春中。一　戀四・一　〔新千〕戀三・一　雜下・一　誹諧　〔新拾〕戀一・一　戀二・一　雜上・二　〔新後拾〕冬。一　〔新續古〕雜上。二　雜

中・一

太皇太后宮甲斐 〔詞花〕別・二

太皇太后宮肥後 京極關白家肥後に同じ

【今】

今上 〔後撰〕村上天皇に同じ 〔續古〕龜山院に同じ 〔新後撰〕後二條院に同じ 〔玉葉〕花園院に同じ 〔續千〕後醍醐院に同じ 〔風雅〕光明院に同じ 〔新續古〕後花園院に同じ

今城 大原 〔萬葉〕卷八・一 卷二〇・七

今道 五位參河介。布留。至昌泰元年 〔古今〕秋上・一 雜上・一 雜下・一 〔古今和歌六帖〕

【今出川】

今出川入道前右大臣 兼季公に同じ

今出川左大臣公直母 藤原爲基朝臣女 〔風雅〕秋上・一 戀三・一 雜下・一 藤原公直母 〔新千〕賀・一 權大納言公直母

今出川前右大臣 公顯公に同じ

今出川前大臣室 〔續千〕雜下・一 前右大臣室 〔風雅〕戀五・一 今出川前右大臣室

今出川右大臣實直母 〔新千〕戀一・一 左近中將實直母 〔新拾〕戀一・二 戀二・一 戀四・一 〔新後拾〕秋下・一 權大納言實直母

今出川院近衞 大納言藤原伊平女 〔續古〕雜上・一 中宮權中納言 〔續拾〕戀一・一 戀五・一 〔新後撰〕釋・一 戀一・一 戀四・一 〔玉葉〕雜一・一 〔續千〕夏・一 秋下・一 戀四・二 雜上・二 〔續後拾〕夏・一 秋下・一 雜體・一 戀一・一 戀四・一 〔新千〕戀二・一 雜上・一 雜下・一 〔新拾〕秋下・一 旅・一

戀四・一　戀五・一　〔新後拾〕戀四・一　〔新續古〕
春・一
今出川院權中納言　左中將藤原雅平女　〔玉葉〕秋下・一

【少】

少老　日置　〔萬葉〕卷三・一
少足　丹波　〔萬葉〕卷三・一
少納言　加賀守後生女　〔拾遺〕雜賀・一

【少輔】

少輔　兼房女母江侍從　〔後拾〕冬・一　旅・一
少輔命婦　〔玉葉〕戀五・一

【少將】

少將公教母　後三條內大臣母。修理大夫藤原顯季女　〔金葉〕春・一　戀
上・二

少將內侍　〔後撰〕戀五・一
少將內侍　白川院女房。能登守實房女　〔後拾〕雜二・二　〔金葉〕
雜上・一
少將井尼　〔後撰〕雜一・一　雜五・一　〔新古〕雜中・
一　〔續詞花〕雜下・一
少將更衣　〔拾遺〕戀五・一
少將乳母　〔續詞花〕神・一

【仁】

仁上　法師　〔千載〕雜下・一　折句
仁明天皇　諱正良。嵯峨帝御子（一四七〇―一五一〇）　〔新拾〕釋・一　仁明天皇御歌
仁昭　法師。織部正親仲子　〔千載〕戀一・一　〔續詞花〕釋・一
仁俊　法師　〔續後拾〕神・一

仁祐 律師。若狭守通宗子 〔詞花〕戀下・一

仁敎 僧都。但馬守藤原敎守子 〔後撰〕賀・一

仁譽 二品親王龜山院孫恒明親王男、聖護院 〔新葉〕春下・一 秋上・一 秋下・一 冬・二 旅・一 釋・一 雜上・三 雜中・二 哀・一

仁覺 叡山大僧正天台座主。堀川右府師房公子 〔金葉〕雜上・一

【仁德】

仁德天皇 諱大鷦鷯。（九五〇｜一〇五九）應神帝御子 〔新古〕賀・一 仁德天皇御歌

仁德天皇妹 〔萬葉〕卷四・一

【仁和】

仁和寺一宮母 〔續詞花〕哀・一 雜上・一

仁和寺入道法親王 〔千載〕覺性法親王に同じ

仁和帝 光孝天皇に同じ

【氏】

氏久 從三位。神主賀茂能久男 〔續古〕神・一 五位 〔續拾〕冬・一 戀五・一 神・二 〔新後撰〕夏・一 秋上・一 冬・一 旅・一 戀三・一 雜下・一 從三位 〔續千〕春下・一 秋上・一 冬・一 神・一 釋・一 雜上・一 雜下・一 哀・一 〔續後拾〕戀一・一 雜上・一 神・一 〔風雅〕雜上・一 〔新千〕秋上・一 神・二 雜上・一 雜中・一 雜下・一 〔新拾〕夏・一 神・一 〔新續古〕雜・二

氏之 五位。神主荒木田氏忠男 〔續千〕戀五・一 〔風雅〕神・一 〔新千〕神・一

氏元 五位。大江 〔新後拾〕雜秋・一

氏光 五位今峯左馬頭。彈正少弼源賴遠男 〔新千〕戀三・一

氏良　四位。荒木田　〔新古〕夏・一
氏村　五位。東平時常男　〔續千〕旅・一　雜中・一　哀・一
〔續後拾〕旅・一　〔新千〕夏・一　雜上・一　雜中・一
〔新後拾〕夏・一
氏成　從三位　〔風雅〕雜上・一　從三位
氏直　五位源　〔新後拾〕雜下・一
氏忠　四位。荒木田延季男　〔新後撰〕雜下・一　〔新千〕秋・一
氏定　前中納言　〔新葉〕夏・一　秋上・一　秋下・一　戀一
・二　戀二・一　雜下・一
氏春　五位細川淡路守。淡路守源師氏男　〔新後拾〕雜春・一
氏胤　五位千葉介。修理大夫平貞胤男　〔新千〕戀一・一
氏兼　五位一色宮内少輔。左京大夫源直氏男　〔新拾〕戀五・一
氏清　五位山名伊豆守。伊豆守源時氏男　〔新後拾〕戀三・一
氏經　四位左京大夫。尾張修理大夫源高次男　〔新千〕雜上・一　五位　〔新拾〕
戀一・二　雜上・一　雜中・一　四位　〔新後拾〕冬・一
戀四・一
氏綱　五位宇都宮下野守。兵部少輔藤原公綱男　〔新千〕戀三・一
氏數　五位[illegible]。中務丞。中務丞平師氏男　〔新續古〕旅・一
氏賴　五位六角左衞門尉。左衞門尉源時信男　〔新拾〕雜上・一　〔新後
拾〕冬・一　戀三・一

【元】

元方　六位。筑前守在原棟梁男（一一七一三）　〔古今〕春上・一　春下・二
秋上・二　秋下・一　冬・一　戀一・三　戀五・一
雜體・一　〔後撰〕春下・一　秋下・二　戀二・一　戀
三・三　戀六・一　〔拾遺〕春・一　物名・一　〔新古
今〕雜中・一　〔新勅〕冬・一　〔續古〕春下・二　〔續千〕

夏。一 〔續後拾〕夏・一 戀四・一 〔新千〕戀一・一 〔古今和歌六帖〕〔亭子院歌合〕季春。一 夏。一

元正天皇 諱飯高。草壁皇子御子（一三四〇―一四〇八） 〔新拾〕賀。一 元正天皇御製 〔萬葉〕卷八・一 卷一八。二 卷二〇・二

元平親王女 〔後撰〕戀三・一

元可 俗名藥師寺次郎左衛門尉公義。橘範隆子 〔新千〕戀三・一 〔新後拾〕冬。一 雜秋。一 戀一。一 雜上。一 〔新續古〕釋。一

元任 五位少内記。能因法師橘永愷子寛徳三年十一月十二日敍依内親身 〔後拾〕春上。一 秋上・一 〔金葉〕秋・一 雜下・一 〔詞花〕秋・二

元吉 五位。橘 〔新續古〕雜下。一

元良親王 三品兵部卿。陽成帝一御子。天慶六年薨五十四 〔後撰〕春下・一 戀一・一 戀二・三 二イ 戀五・一 雜二・一 〔拾遺〕春上。一 戀三。一 兵部卿元良親王。此歌後撰戀五にあり 〔新勅〕戀四・一 〔續古〕戀二・一 〔玉葉〕戀二。一 〔續千〕戀一。一 戀五・一 〔續後拾〕戀一。二 戀三・一 〔新千〕戀四。一 哀・一 〔新後拾〕戀三・一 〔古今和歌六帖〕

元秀 五位三善 〔新續古〕戀二。一

元妙 法師俗名松田 〔新千〕雜上。一

元政 深草（一二八三―一三二八） 〔草山和歌集〕一五〇

元法 法師 〔新後拾〕雜秋。一

元明天皇 諱阿閇。天智帝御子（一三二一―一三八一） 〔新古〕旅・一 〔萬葉〕卷一・二

元夏 四位東宮學士。式部大輔。三統理平男。至康保三 〔拾遺〕雜秋。一 五位

元康　五位。藤原　〔新續古〕戀五・一
元盛　法師　〔新千〕夏・一
元善　四位宮內卿。右京大夫藤原是法男。至承平七年　〔後撰〕秋上・一　雜三・一　四位
元見　五位左衛門尉。播磨介平中興男。至延喜八年　〔古今〕別・一
元義　平賀慶應元年歿六十六　〔元義歌集〕四一六　長歌二四
元慶　法師大山寺別當。對馬守藤原茂規子　〔後拾〕夏・一
元眞　五位丹波介。甲斐守藤原清雅男　〔後拾〕春上・二　戀四・三　雜二・一　雜三・一　〔詞花〕春・一　〔新古〕夏・一　秋上・一　戀一・二　戀二・一　戀五・三　〔續古〕戀二・一　〔玉葉〕秋上・一　〔續拾〕秋上・一　別・一　戀二・一　〔風雅〕春下・二　戀一・一　〔新千〕戀一・一　〔新拾〕雜上・一　〔新後拾〕戀二・一　〔三十六人集〕三三四　〔補遺〕三　〔天德內裏歌合〕二一
元輔　五位肥後守。下野守清原顯忠男（一五六八—一六五〇）梨壺五人の一　〔拾遺〕春・三　秋・三　冬・三　賀・四　別・一　物名・一　雜上・六　雜下・一　神・三　戀二・一　戀三・一　雜春・五　雜秋・五　雜賀。八　一長歌　雜戀・一　哀・二　〔後拾〕春上・三　春下・二　秋上・三　秋下・二　冬・一　賀・三　哀・一　戀二・一　戀三・二　戀四・三　雜一・二　雜二・一　雜三・一　雜四・一　〔詞花〕賀・一　戀下・二　雜上・一　雜下・二　〔新古〕春下・一　冬・一　賀・一　戀一・一　戀三・一　雜下・一　〔新勅〕賀・二　雜四・一　〔續後撰〕戀四・一　賀・一　〔續古〕別・一　〔玉葉〕春上・一　雜一・二　〔續千〕秋下・一　雜上・一　〔續後拾〕雜中・一　〔風雅〕雜上

・一〔新千〕春上・一　秋下・一〔新拾〕秋上・一
〔新後拾〕春下・一〔新續古〕賀・二〔續詞花〕春上
・一　春下・一　賀・四　哀・一　別・一　雜中・三
雜下・一〔天德内裏歌合〕一〔三十六人集〕三〇〇

元輔　正四位下參議。富小路右大臣藤原顯忠男。天暦五藏人少將天德二右大將康保四左中將天祿三參議治部卿天延元年〔後撰〕雜上・一　藤原元輔

【中】

中正　五位肥前守。右衛門佐源幸年男〔後撰〕秋上・一　戀二・一
戀三・一

中臣女郎〔萬葉〕卷四・五〔古今和歌六帖〕

中忻　法師〔新後拾〕雜下・一

中皇命〔萬葉〕卷一・三

中御門右大臣　宗忠公に同じ

中興　五位左衛門權佐。右大辨平季長男。(イ内膳正忠望王子)至延長八年卒〔古今〕雜體・二誹諧〔後撰〕戀三・一　雜一・一

中園入道前太政大臣　公賢公に同じ

【中原】

中原長國妻〔後拾〕雜一・一

中原賴成妻〔後撰〕春上・一　戀四・一

【中將】

中將内侍〔後撰〕戀五・一

中將尼　大和守源清時女〔後拾〕雜五・一

中將更衣　參議伊衡女〔後撰〕戀二・一

【中院】

中院入道一品　源親房に同じ

中院入道右大臣　雅定公に同じ

中院内大臣　通重公に同じ

中院右大臣家夕霧　左近將監宗賢女　〔新勅〕雜三。一

中院前太政大臣　通雄公に同じ

【中納言】

中納言〔續古〕典侍親子親臣に同じ

中納言女王〔後拾〕秋上・一〔金葉〕夏・一　中納言女王母
冬・一〔千載〕春上。一〔續詞花〕春下・一

中納言定家母　若狹守藤原親忠女〔新古〕戀三・一〔新勅〕
雜二。一

中納言定頼母　昭平親王御女〔後拾〕哀・一〔千載〕冬・
一　イ定頼女〔玉葉〕雜四・一

中納言爲秀女　前參議爲秀女〔新拾〕戀二・一　戀三・一

前參議爲秀女

中納言敦忠母　左兵衞佐棟梁女〔後撰〕雜一・一

【中宮】

中宮〔續千〕後京極院に同じ

中宮〔新葉〕春上。三　夏。二　秋上・一　秋下。一
離。一　戀三・二　戀四。二　雜中。一　雜下。一
賀・一

中宮大夫公宗女　權大納言公宗女に同じ

中宮大夫公宗三女〔新千〕戀一。一

中宮大夫公宗母　昭訓門院春日に同じ

中宮上總　堀川院中宮上總に同じ

中宮權中納言　今出川院近衞に同じ

中宮少將　藻壁門院少將に同じ

中宮内侍〔拾遺〕中宮宣旨に同じ

中宮内侍 伊賀守藤原有家女 〔後拾〕冬・一 哀・一 雜二・一 雜三・一 〔續詞花〕哀・一

中宮但馬 藻壁門院但馬に同じ

中宮宣旨 〔後撰〕秋中・一 雜二・一 〔拾遺〕雜春・一 中宮内侍

中宮宣旨 〔續千〕 後京極院宣旨に同じ

【中務】

中務 敦慶親王御女 〔後撰〕春下・一 戀一・一 戀三・一 戀四・一 戀九・一 雜一・二 〔拾遺〕春・二 夏・二 雜上・二 神・一 戀一・一 戀三・一 戀四・一 雜秋・二 哀・二 〔詞花〕賀・一 〔新古〕春上・一 戀四・一 雜上・一 雜中・一 〔新勅〕春上・一 戀四・二 雜三・一 雜四・一 〔續後撰〕春上・一 冬・一 戀三・一 戀四・一 戀五・一 雜上・一、雜下・一 〔續古〕冬・一 戀四・一 雜中・一 〔玉葉〕秋下・一 旅・一 戀五・一 〔續千〕春下・一 旅・一 戀一・一 〔續後拾〕春下・一 別・一 〔風雅〕春上・一 春中・一 春下・一 賀・一 〔新千〕春上・一 夏・一 別・一 〔新拾〕春下・一 神・一 雜上・一 〔新後拾〕別・一 〔新續古〕雜上・一 〔三十六人集〕一八七 〔天德内裏歌合〕五

中務典侍 三條院皇后宮女房。大和守藤原興方女 〔後拾〕雜一・一

中務命婦 〔續古〕夏・一

【中務卿】

中務卿宗良親王家京極 〔新葉〕戀二・一 戀五・一 雜中・一

中務卿宗尊親王家三河　佐藤玄蕃頭基綱女　〔新後撰〕旅・一　雜下。一　〔玉葉〕雜中。一

中務卿宗尊親王家小督　〔續古〕戀三・一　戀四。二　〔續拾〕戀二・一　〔新後撰〕戀三。一　雜上・一

中務卿宗尊親王家右衞門督　左少將藤原業遠女　〔續古〕雜中・一　〔續拾〕雜中・一

中務卿宗尊親王家備前　玄蕃頭基綱女　〔續古〕戀五・一

中務卿宗尊親王家新右衞門督　左少將實遠女　〔新續古〕戀五・一

中務卿恆明親王家按察　資緒王女　〔續千〕戀二・一

中務卿親王　〔續古〕　宗尊親王に同じ

【公　四、五畫】

公什　叡山座主般若院大僧正、從三位實隆公子　〔新後撰〕釋・二　〔玉葉〕釋・一　神・一　〔風雅〕雜下・一

公世　從二位。右中將藤原實俊男　〔續拾〕雜中・一　雜下・一　〔新後撰〕秋上・一　侍從

公冬　前左近大將　〔新葉〕春上・一　春下・一　秋下・一　戀一・一　雜上・一　雜中・一　賀・二

【公　六畫】

公名公　從一位觀音寺太政大臣。慶秀院藤原實永男　〔新續古〕冬・一　戀三。一　雜中。一　左近大將

公有　正二位中納言。正二位藤原實連男　〔新千〕雜中・一　前中納言

公守　從一位山本入道前太政大臣山階藤原實雄男　〔續拾〕春下・一　秋上・一　戀五・一　權中納言　〔新後撰〕春下・一　釋・二　神・二　戀四・一　雜下・一　賀・一　前太政大臣　〔續千〕雜體。一名物　神・一　戀五・一　雜中・二　哀・一　〔續

後拾〕哀•一 〔風雅〕雜二•一 〔新千〕秋上•一 戀二•一 戀三•一 戀五•一 〔新拾〕戀二•一 〔新後拾〕冬•一 山本入道前太政大臣

公任 正二位大納言。藤原廉義公男（一六二七―一七〇一）新撰髄脳、和歌九品、和漢朗詠集 〔拾遺〕秋•一 冬•二 別•一 雜上•一 雜春•四 雜秋•一 雜賀•二 哀•三右衛門督 〔後拾〕春上•二 秋上•二 秋下•一 冬•二 賀•一 別•一 旅•一 戀一•一 雜三•三 雜四•一 雜五•二 雜六 釋教二。前大納言 〔詞花〕秋•一 賀•一 戀上•一 雜下•一 〔千載〕秋上•一 別•一 哀•一 戀一•一 雜上•一 雜中•四 釋•二 〔新古〕秋下•一 冬•一 哀•一 戀一•二 雜上•一 〔新勅〕雜一•一 〔續後撰〕春中•一 釋•一 戀四•二 〔續古〕夏•一 釋•二 哀•一 〔續拾〕春下•一 雜下•一 〔玉葉〕春下•一 夏•一 秋上•一 秋下•一 賀•一 戀五•一 雜四•二 釋•一 〔續千〕夏•一 旅•一 賀•一 〔續後拾〕春下•一 秋下•一 〔風雅〕春下•一 冬•一 〔新千〕春上•一 戀一•二 別•一 〔新拾〕秋下•一 〔新後拾〕戀二•一 戀四•一 〔新續古〕秋上•一按察使 〔續詞花〕釋•一 戀上•一 雜下一 〔藤原公任集〕五〇一 旋頭歌一

公光 正二位中納言。大納言藤原季成男 〔千載〕春上•一 夏•一 秋上•一 冬•二 雜中•一前左衛門督 〔續古〕春上•一 〔玉葉〕戀三•一左衛門督

公光公 從一位後白川院右前大臣。後三條藤原實冬男 〔新續古〕夏•一 戀三•一前右大臣

公行　從一位後今出川左大臣今出川藤原實直男　〔新續古〕賀。一後今出川左大臣

公行　從二位參議。八條大臣藤原實行公男　〔詞花〕春。一右兵衞督　〔千載〕春下。一　雜中。一　〔新勅〕夏。一　秋下。一　〔續詞花〕春下・一　秋上・一　哀・一　雜下・二

【公　七畫】

公成　從二位中納言。中納言藤原實成男　〔後拾〕戀。一中納言　〔金葉〕夏。一

公秀　正二位八條内大臣大納言藤原實躬男　〔新千〕夏。一　哀・一　入道前内大臣　〔新拾〕戀二・一　雜上・一　雜中・一　〔新續古〕雜下・一

公孝　從一位後德大寺太政大臣。德大寺藤原實基男　〔新後撰〕秋上・一　冬・一太政大臣　〔玉葉〕春下・一　〔續千〕冬・一

【公　八畫】

公明　正二位大納言。民部卿藤原實仲男　〔續千〕冬・一　戀四・一參議　〔續後拾〕秋上・一　雜上・一權中納言　〔新千〕春下・一　秋下・一　戀一・一　戀三・一　雜中・一權大納言　〔新拾〕冬。一　賀・一前大納言　〔新續古〕釋・一

公宗　正二位大納言。西園寺内大臣藤原實衡男　〔續後拾〕戀三・一權中納言　〔風雅〕春中・一　夏・一　秋上・一　冬・一　戀一・一　戀二・一　戀四・一權大納言　〔新千〕春下・一　夏・二　秋上・一　冬・一　雜上・一中宮大夫　〔新拾〕春下・二　〔新後撰〕旅・一　〔新後拾〕夏・一　旅・一

公宗　從三位中納言。山階左大臣藤原實雄男　〔續古〕戀二・一權中納言　〔玉葉〕賀・一

公長　從二位。散位大中臣公定男　〔金葉〕春・二　秋・一　冬・一　戀上・一大中臣

公長 左近大將〔新葉〕夏•一 冬•一 戀四•二
公忠 四位右大辨。大藏卿源國紀男(一五四九—一六〇八)〔後撰〕雜一•一
別•一 四位〔拾遺〕夏•一 賀•一 雜春•一 雜賀•
一〔新古〕春上•一 雜上•一〔新勅〕秋上•一
冬•一 賀•一 神•一〔續後撰〕秋下•一〔玉葉〕
春上•一 春下•一 旅•一〔新千〕秋上•一〔續
後拾〕秋上•一 冬•一〔續千〕秋上•一〔新續古〕
秋上•一〔古今和歌六帖〕〔三十六人集〕五一
公忠 五位大外記。三統。至天暦三年〔後撰〕戀一•一 別•一〔續
後拾〕神•一
公忠 從一位後押小路內大臣後三條藤原實忠男〔新千〕秋下•一 旅•一
戀二•一 雜中•一 權大納言〔新拾〕春下•一 秋上•一
戀四•一 雜上•一 雜中•一 前內大臣〔新後拾〕秋下•
一 戀二•一〔新續古〕戀一•一 戀二•一 戀三•
一 戀五•一 雜中•一 雜下•一 押小路前內大臣

【公 九畫】

公茂公 從一位押小路前內大臣。三條藤原實重男〔續千〕戀四•二 雜中
•一 前內大臣〔新千〕戀五•一 押小路前內大臣
公胤 三井寺僧正。右少將源憲俊子〔新古〕釋•一
公相公 從一位冷泉太政大臣。常磐井藤原實氏男〔續後撰〕夏•一 秋
上•一 戀二•一 戀三•一 戀五•一 旅•一 右近大將
〔續古〕夏•一 秋上•一 冬•二 神•一 戀一•
一 戀三•二 賀•一 前太政大臣〔續拾〕秋上•一 冬•
二 賀•三 冷泉太政大臣〔後撰〕春上•一 秋上•一〔玉
葉〕秋上•一 秋下•二 冬•一 雜二•一〔續千〕
夏•一 戀四•一〔續後拾〕秋下•一〔風雅〕夏•一

秋下•一　冬。一　戀三•一　賀•二　〔新千〕春下•
一　秋上•一　〔新拾〕春下•一　秋上•一　戀二•一
雜上•一　〔新後拾〕雜上•一　〔新續古〕戀四•一
戀五•一

公後公　從一位後野宮太政大臣。野宮藤原實時男　〔新續古〕旅•一　後野宮入道前太政大臣

公保公　從一位後稱名院內大臣。權中納言藤原實淸男　〔新續古〕春上•一
賀•一　戀一•一　神•一　按察使　〔續詞花〕夏•一
戲•一

公重　四位少將。大納言藤原通季男。至永萬元年　〔詞花〕雜下•一　四位　〔千
載〕秋下•一　雜中•一　〔新勅〕冬•一　〔風雅〕旅•
二　〔續詞花〕秋下•一　冬•一　雜上•一

公重公　從二位竹林院前內大臣　西園寺藤原實衡男　〔風雅〕春中•一　春
下•一　秋中•二　秋下•一　戀一•一　戀三•一
前大納言　〔新拾〕賀•一　入道前內大臣　〔新續古〕戀二•二
竹林院前內大臣

公信　從二位中納言。藤原恆德公男　〔後拾〕雜二•一　左兵衛督

公信　五位　源　〔新拾〕戀五。一

【公　十畫】

公泰　正二位大納言。後山本左大臣藤原實泰男　〔續後拾〕戀一•一　左衛門督　〔風
雅〕夏•一　冬•一　旅•一　雜中•一　前大納言　〔新續古〕
夏•一　秋下。一　賀•一　戀三•一　戀五•一　哀
•二　秋中•一　〔新葉〕春上•六　春下•五　夏•四
秋上•四　秋下•二　冬•六　戀一•五　戀四•二
戀五•二　雜上•五　雜中•二　賀•一

公夏　權大納言　〔新葉〕新春上•一　春下•一　夏•一　秋

下•二　神•一　戀二•一　戀三•一　戀四•二　雜
中•一　雜下•一　賀•一
公兼　正二位大納言。右大臣藤原實俊男　〔新後拾〕雜秋•一　前中納言
公能　正二位大炊御門右大臣。德大寺藤原實能男（一七七五—一八二二）　〔詞花〕戀上•
一　右兵衛督　〔千載〕春上•一　春下•一　夏•一　秋上•一
秋下•一　冬•二　旅•一　賀•一　戀一•一　大炊御門右大臣
〔新古〕戀二•一　〔新勅〕夏•一　秋上•一　戀二•一
戀五•一　雜五•一　名物　〔續後撰〕秋上•一　冬•一
戀四•一　雜上•一　〔新後撰〕釋•一　〔續千〕冬•一
〔續後拾〕春下•一　夏•一　〔新千〕春下•一　〔雜
下•一　長歌　〔新拾〕春上•一　秋下•一　旅•一　〔新
〔後拾〕戀三•一　〔新續古〕春上•一　〔續詞花〕春下
•一　賀•一　戀中•一

公時　從一位中納言。大納言藤原實國男　〔千載〕春上•一　秋上•一　四位
〔新後拾〕冬•一　〔新續古〕旅•一
公時　從二位大納言。後八條藤原實綱公男　〔新拾〕戀四•一　四位　〔新續
古〕哀•一　雜中•一　權大納言

【公　十一畫】

公基公　從一位万里小路右大臣常磐井藤原實氏男　〔續後撰〕夏•一　神•
一　戀五•一　權大納言　〔續古〕秋上•一　戀一•一
雜中•一　前右大臣　〔續拾〕春上•一　賀•一　戀一•二
万里小路右大臣　〔新後撰〕春下•一　〔玉葉〕雜二•一
公紹　醍醐權僧正。中納言實世子　〔新後撰〕釋•一　法印　〔續千〕釋•一
雜上•二　法務
公清公　正二位後野宮內大臣。權中納言藤原實孝男　〔風雅〕秋下•一　冬
•一　內大臣　〔新千〕春下•一　秋上•一　戀四•一　雜

中。一　雜下。一 前内大臣 〔新後拾〕戀三。一 後野宮前内大臣 〔新拾〕夏。一　戀。一 德大寺前内大臣

公教公 正二位後三條内大臣。八條藤原實行男 〔金葉〕戀上。一　雜上。一 藤原公教 〔詞花〕夏。一 大納言 〔千載〕秋下。一　賀。一　神。一 後三條内大臣 〔續後撰〕春中。一 三條内大臣 〔續拾〕秋下。一 後三條内大臣 〔新拾〕賀。一 三條内大臣 〔續詞花〕神。一

公敏 正二位大納言。後山本左大臣藤原實泰男 〔續千〕戀四。一 左衛門督 〔新千〕秋下。一　冬。一　戀一。一 按察使 〔新拾〕冬。一　雜中。一 〔新後拾〕旅。一 〔新續古〕冬。一

公通 從二位大納言。中納言藤原通季男 〔千載〕夏。一 按察使 〔新古〕夏。一　哀。一　神。一 〔新勅〕秋上。一　秋下。一 〔續後撰〕夏。一 〔續拾〕春上。一 〔玉葉〕春上。一　秋下。一 〔新拾〕哀。一　雜中。一 〔續詞花〕秋上。一　賀。一　哀。一

公脩 正二位中納言。大納言藤原實教男 〔續千〕戀四。一 前中納言 〔續後拾〕戀三。一 〔新千〕夏。一　秋上。一　冬。一 〔新拾〕戀五。一 〔新續古〕秋上。一

【公　十二畫】

公景 五位隼人正。散位大江公盛男。至元久元年 〔千載〕雜上。一　雜中。一

公惠 日吉別當法印。三條實房公子 〔續千〕戀一。一　戀三。一 〔續後拾〕釋。一

公顗 三井寺法印 〔續千〕神。一 〔續後拾〕雜上。一 〔新千〕戀二。一　雜上。一 〔新拾〕旅。一

公朝 大僧正。遠江守朝時子 〔續古〕秋下。一　戀三。一　雜下

・二權少僧都〔續拾〕雜春・二 雜秋・一 雜中・一 法印〔新後撰〕春下・一 秋下・一 釋・一 戀九・一 雜上・二前僧正〔玉葉〕秋下・一 釋・一〔續千〕秋下・一 旅・一 戀一・一 雜中・一〔續後拾〕雜中・一 釋・一〔風雅〕雜上・一〔新千〕夏・一 雜下・一〔新後拾〕冬・一 雜春・一

公勝 正三位中納言。大納言藤原實村男 〔新後拾〕雜秋・一 權中納言

公雅公 正二位紹宏院贈內大臣。權大納言藤原實時男 〔新續古〕夏・一 冬・一 賀・一 紹宏院贈內大臣

公雄 正二位中納言。山階左大臣藤原實雄男 〔續古〕秋上・一 左近中將〔續拾〕秋下・一 戀二・一 戀三・一 戀五・一 雜中・一〔新後撰〕春上・一 春下・一 秋上・一 旅・一 釋・一 戀六・一 雜上・四 雜中・一 雜下・一〔玉葉〕春下・一 夏・一 秋下・二 冬・二 雜一・三〔續千〕春上・一 春下・一 秋上・一 秋下・二 冬・一 戀一・二 戀二・一 戀三・二 戀五・二 雜上・二 雜中・三 雜下・二〔續後拾〕春上・二 春下・一 夏・一 秋上・一 秋下・二 物名・一 別・一 戀二・一 戀三・一 雜上・一 雜中・一 雜下・二 神・一〔風雅〕夏・二 冬・一 戀三・一 雜上・三 雜下・一〔新千〕春上・一 春下・一 夏・二 秋上・一 冬・一 旅・一 戀一・一 戀二・一 戀三・一 戀五・一 雜下・一 哀・一〔新拾〕春上・一 春下・一 夏・一 秋上・一 秋下・一 冬・一 戀一・二 戀四・一 雜上・一 雜下・二誹諧〔新後拾〕秋下・一 冬・一 雜春・一

戀一・一　雜上・一　〔新續古〕春上・一　旅・一
戀二・二　戀四・一　雜中・一　雜下・一 誹諧

【公　十三畫】

公猷　律師。寂津法師子　〔新古〕秋上・一　〔新勅〕秋上・一 權律師
〔續後撰〕秋下・一　〔續拾〕冬・一

公圓　僧都心如院。中納言經家男　〔金葉〕戀下・一　〔續詞花〕雜上
・一

公圓法師母　二條關白女。母小式部內侍　〔後拾〕戀四・一

公資　大江　〔續詞花〕雜中・三

公資　四位兵部大輔。薩摩守大江清公男、長久元十一七卒　〔後拾〕夏・一　秋
上・一　冬・一 四位　〔金葉〕秋・一　戀上・一　雜下・
一 連歌　〔千載〕雜中・一

公經　四位少納言。宮内少輔藤原成尹男　〔後拾〕春上・一 四位

公經公　從一位西園寺入道前太政大臣。坊城藤原實宗男　〔新古〕春上・一
春下・一　夏・二　秋上・一　秋下・二　戀四・三 權中
納言　〔新勅〕春上・一　春下・二　夏・一　秋上・一
秋下・三　冬・一　賀・四　旅・一　戀一・一　戀二
・三　戀四・三　雜一・三　雜三・二　雜四・四 入道前太
政大臣　〔續後撰〕春上・二　春中・一　春下・二　秋
中・一　冬・一　神・一　戀二・一　戀三・一　戀五
・一　雜上・一　雜中・一 西園寺入道太政大臣　〔續古〕春上・
一　秋下・二　冬・二　旅・一　戀一・一　戀三・一
雜上・一　雜中・一　〔續拾〕春上・四　夏・一　冬・
一　戀五・一　雜上・二　〔新後撰〕春上・一　戀一
・二　戀二・一　雜上・一　賀・三　〔玉葉〕春上・一
春下・一　秋下・二　旅・三　雜一・一　雜五・一

〔續千〕春下・三　秋下・一　冬・一　雜上・二　雜
中・一　〔續後拾〕秋下・一　別・一　戀一・一　雜
中・一　〔風雅〕冬・一　〔新千〕春上・一　春下・一
秋上・一　秋下・一　釋・一　賀・一　〔新拾〕春下
・一　賀・一　〔新後拾〕戀四・三　〔新續古〕戀四・一
〔續詞花〕雜上・一　雜中・一

【公　十四畫】

公種　正二位大納言。大納言藤原實名男　〔新續古〕冬・一　前大納言
公綱　五位宇都宮兵部少輔。尾張守藤原貞綱男　〔新續古〕雜上・一
公誠　五位周防守。陸奧守平元平男。至寬弘八年　〔拾遺〕夏・一　戀一・一
雜春・一　雜賀・一　〔詞花〕戀下・一
公豪　叡山天台座主大僧正。三條左大臣實房公子　〔續古〕釋・一　〔續拾〕
雜春・二　釋・二　神・一　〔新後撰〕雜上・一

〔新拾〕哀・一　〔新續古〕哀・一
公寬　法師　〔新拾〕雜中・一
公實　從二位大納言。大納言藤原實季男　〔續拾〕春上・一　秋上・一
左近中將　〔金葉〕春・五　夏・四　秋・七　別・一　戀上
・五　戀下・二　雜上・一　春宮大夫　〔詞花〕春・一　戀
上・一　雜上・一　大納言　〔千載〕秋下・二　冬・一
別・一　戀二・一　戀三・二　〔新古〕秋下・一　權大納言
〔新勅〕春下・一　旅・一　戀一・一　〔千載〕戀三・一
〔續後撰〕冬・一　雜上・一　賀・一　〔續古〕秋上・
一　戀三・一　雜上・一　〔續拾〕夏・一　秋上・一
〔新後撰〕春下・一　冬・一　〔續千〕戀二・一
〔續後拾〕春上・一　賀・一　〔新千〕春上・一　〔新
拾〕秋下・一　戀二・一　〔續詞花〕秋上・一　秋下・

一 戀上・一 戀中・二

【公 十五畫】

公澄 叡山大僧正 〔續拾〕雜上。一 釋・一 法印 〔新後撰〕秋下・一 釋・二 神。一 雜上・一 前大僧正 〔續千〕釋・一 〔新千〕雜中・一 〔新拾〕釋・一

公蔭 正二位大納言。大納言藤原實明男 〔玉葉〕雜一・一 藤原忠兼朝臣 〔風雅〕春上。一 春中。二 夏。二 秋上。一 秋中・二 冬。二 旅・一 戀一・三 戀三・三 戀四・四 雜中。一 雜下・一 神。一 權大納言 〔新千〕秋上・一 秋下。一 冬。一 戀二・二 雜上・一 雜中・二 前大納言 〔新拾〕夏・一 秋上。一 冬。一 賀・一 戀二・一 戀五・一 雜上・二 〔新後拾〕夏・一 雜下・一 〔新續古〕戀二・一

公賢公 從一位中園入道前太政大臣。山本藤原實泰男 〔續千〕秋下・一 冬・二 戀二・一 春宮大夫 〔續後拾〕秋上。一 〔風雅〕春中。一 夏。一 秋中・一 雜下・三 神・三 賀。一 前左大臣 〔新千〕春上・一 夏。二 秋上・二 冬・二 釋・一 神。一 戀一・二 戀三・一 雜中・二 雜下・一 諱諸入道前太政大臣 〔新拾〕春下・一 秋下・二 戀二。一 戀四。一 戀五・二 雜中・三 中園入道前太政大臣 〔新後拾〕春上。一 雜下・一 〔新續古〕春上。一 春下・二 夏・一 秋上・一 冬・二

【公 十六畫】

公篤 五位遠江守。江島遠江守平篤時男 〔玉葉〕雜一・一

公賴 從四位上中納言。贈中納言橘廣相男。延喜廿一中將延長二參議承平十一帥天慶二中納言二年薨六十五 〔後撰〕戀二・一 橘公賴朝臣 〔新勅〕雜四・一 大宰帥

公衡 従三位。大炊御門右大臣藤原公能男 〔千載〕春上・一 春下・一
夏・一 戀二・一 戀三・一 雜中・一 四位 〔新古〕
冬・一 戀五・一 雜上・一 雜下・一 左近中將 〔新
勅〕夏・一 秋上・一 戀二・一 戀四・一 戀五・二
雜一・一 雜二・一 〔續後撰〕春下・一 冬・一
〔續古〕戀四・一 戀五・一 哀・一 〔續拾〕秋下・一
冬・一 雜中・一 〔新續古〕雜下・一

公衡公 従一位竹林院入道前左大臣。後西園寺藤原實兼男 〔玉葉〕賀・一 入道前左大臣
〔風雅〕雜下・一 竹林院入道前左大臣 〔新續古〕賀・一

【公 十七畫以下】

公禪 法印 〔玉葉〕雜五・一

公親公 正二位三條入道内大臣。白川藤原實親男 〔續後撰〕戀五・一 内大臣
〔續古〕春下・一 冬・二 賀・一 前内大臣公 〔續拾〕春上・

一 戀四・一 雜上・一 神・一 〔新後撰〕秋上・一
秋下・一 戀二・一 雜下・一 三條入道内大臣 〔續千〕春下
・一 戀一・二 〔續後拾〕秋上・一 〔新千〕秋下・一
〔新拾〕神・一

公豐公 正二位稱名院内大臣。後八條藤原實繼男 〔新拾〕雜上・一 權中納言
〔新後拾〕秋下・一 雜秋・一 戀三・一 雜上・一
内大臣 〔新續古〕春上・一 秋上・一 旅・一 戀三・
・一 戀四・一 雜中・一 雜下・一 稱名院入道内大
臣

公壆 叡山楞嚴院權僧正。左中將實平子 〔續拾〕釋・一 法印 〔玉葉〕
賀・一 前僧正

公繼公 従一位野宮左大臣。後德大寺藤原實定男 〔新古〕夏・一 秋下・
二 戀二・一 神・一 春宮權大夫 〔續古〕戀一・一 野宮左大臣

〔續拾〕秋下•一　旅•一　〔新後撰〕神。一　〔玉葉〕春上•一　秋上。一　〔續千〕春下。一　夏。一　〔續後拾〕秋上。一　〔新千〕夏。一　〔新拾〕雜上。一　〔新續古〕雜上。一

公顯公　從一位今出川前右大臣。後西園寺藤原實兼男　〔新後撰〕秋上。一　秋下•一　戀四•一　戀五。二（權大納言）　〔玉葉〕春上•一　夏•一　秋上•一　戀一。一　戀四•一　雜四•一（前右近大將）　〔續千〕夏•一　旅。二　神。一　戀一•二　賀。一（前右大臣）　〔續後拾〕戀三。一　〔風雅〕秋中。二　戀一。一（今出川前右大臣）　〔新千〕夏•一　戀四•一　〔新拾〕冬•一　〔新續古〕戀五。一

五畫

乎刀良　物部　〔萬葉〕卷二〇•一

出羽辨　加賀守平季信女　〔後拾〕春下•一　哀。二　雜五。二　〔金葉〕戀下•一　〔詞花〕秋•一　雜上•一　〔新勅〕雜三。一　〔玉葉〕春上。一　賀。一　雜四。二　〔續後拾〕雜中•一　〔新千〕戀一•一　〔新拾〕哀。一　〔新續古〕雜上。一

以言　四位文章博士、大隅守大江仲宗男　〔詞花〕雜下。一（四位）

可良麻　倭文部　〔萬葉〕長歌卷二〇。一

印性　大僧正。右京大夫長輔子　〔千載〕旅•一　哀•一（僧都）

生阿　法師　〔玉葉〕秋下。一

只阪　法師　〔風雅〕雜上•一　〔新千〕釋•一　〔新拾〕戀五•一

玉津島　〔新續古〕神•一

市原王 正四位下治部大輔。安貴王御子 〔玉葉〕雜三・一 〔萬葉〕卷三・一 卷四・一 卷六・三 卷八・二 卷二〇・一

兄麿 角 〔萬葉〕卷三・四

【古】

古麿 上 〔萬葉〕卷三・一

古麿 物部 〔萬葉〕卷二〇・一

【巨】

巨老 川上 〔萬葉〕卷二〇・一

巨勢女郎 〔萬葉〕卷二・一

【世】

世良親王 河端宮太宰帥。上野太守。後醍醐帝御子 〔續後拾〕旅・一 〔新千〕冬・一

世泰親王家右京大夫 〔新葉〕雜下・一

【示】

示空 上人 〔新後拾〕戀五・一

示證 上人 〔續千〕雜下・一 〔風雅〕釋・一 〔新千〕雜中・一 〔新後拾〕釋・一

【弘】

弘法大師 釋空海入唐、佐伯氏直氏子（一四三三—一四九五） 〔新勅〕釋・一 〔續千〕釋・一 〔風雅〕雜中・一

弘賢 僧正鎌倉若宮別當 〔新後拾〕戀二・一

【尼】

尼西蓮 〔新續古〕哀・一

尼敬信 〔古今〕雜上・一

【民】

民部內侍 〔詞花〕別・一

民部卿資宣女　〔新後撰〕戀五。一　〔玉葉〕雜二。一
〔續千〕秋下。一　〔續後拾〕戀四。一

【仙】

仙慶　法師　〔拾遺〕物名。一　哀。一
仙覺　律師（一八六三―一九三三）萬葉集註釋　〔續古〕雜上。一　〔續拾〕
雜秋。一　〔新拾〕雜上。一　〔新續古〕雜上。一

【加】

加賀少納言　〔新古〕哀。二
加賀左衞門　加賀守丹波泰親女　〔後拾〕春上。二　雜一。一
雜三。一　〔詞花〕秋。一　〔新古〕別。一　雜上。二
雜下。一　〔新拾〕雜上。一　〔續詞花〕戀上。一

【田】

田主　大伴　〔萬葉〕卷二。一
田村家大孃　〔萬葉〕卷四。四　卷八。五
田原天皇　施基皇子光仁帝御父也。天智帝御子（一三三九―一三七六）　〔新古〕春上
・二　志貴皇子　〔新勅〕夏。一　旅。一　田原天皇御製　〔續古〕旅。
一　戀三。一　〔萬葉〕卷一。二　卷三。一　卷四。一
卷八。二　〔古今和歌六帖〕

【白】

白女　江口遊女。大江玉淵女　〔古今〕別。一　しろ女
白川院　諱貞仁。三條帝御子（一七一三―一七八九）　〔後拾〕秋上。三　御製
秋下。一　冬。一　戀一。一　雜四。一　〔金葉〕春二
院御製　夏。二　秋。一　〔詞花〕春。一　白川院御製　〔千載〕
春下。一　〔新古〕夏。三　神。一　〔續古〕秋下。二
〔新後撰〕旅。一　〔玉葉〕賀。一　〔續千〕春下。一
〔續後拾〕夏。一　冬。一　〔風雅〕春中。一　〔新千〕

春上・一　冬・一　〔新後拾〕春下・一　〔續詞花〕冬

一

白河女御越中　〔金葉〕戀上・一

【北】

北野　道眞公に同じ

北野贈太政大臣　房前公に同じ

北邊左大臣　信公に同じ

【左】

左大臣　〔古今〕本院贈太政大臣に同じ　〔後撰〕小野宮太政大臣に同じ　〔拾遺〕法住寺太政大臣に同じ　〔後拾〕堀川左大臣に同じ　〔千載〕大炊御門左大臣に同じ　〔續古〕深心院關白前左大臣に同じ　〔續拾〕香園院關白に同じ　〔新後撰〕己心左前攝政左大臣に同じ　〔玉葉〕岡本關白に同じ　〔續千〕後山本前左大臣に同じ　〔續後拾〕後圓光院關白に同じ　〔新後拾〕鹿苑院太政大臣に同じ

〔新續古〕普光院左大臣に同じ

左大辨俊雅母　源頼綱朝臣女　〔詞花〕雜上・一

左中將基冬母　〔新拾〕雜上・一

左中將實直母　今出川右大臣實直母に同じ

左近中將顯氏母　〔新葉〕戀二・一　雜中・一　哀・一

一

左衞門督北方　大納言俊賢卿室。宇治關白賴通公女　〔後拾〕雜四・一

【本】

本康親王　一品式部卿號八條宮。仁明帝御子　〔續後撰〕神・一　兵部卿本康親王

【本院】

本院右京　重親女　〔後撰〕戀二・一

本院兵衞　〔後撰〕戀三・一

本院侍從　左兵衛佐棟梁女　〔後撰〕戀三・一　〔拾遺〕雜戀二・一　〔新古〕戀一・二　〔新勅〕春下。一　戀一。一　戀二。一　戀五。一　〔續後撰〕戀三。一　〔續古〕戀四・一　戀九。一　〔玉葉〕雜四。一　雜五・一　〔續千〕戀四・一　〔續後拾〕戀三・一　〔新千〕戀二・一　〔新後拾〕戀三・一　〔天徳内裏歌合〕一

本院贈太政大臣　時平公に同じ

本院藏　〔後撰〕戀五・一

【四】

四辻左大臣　善成公に同じ

四綱　大伴　〔玉葉〕雜二・一　〔萬葉〕卷三・二　卷四・一　卷八・一　〔古今和歌六帖〕

【四條】

四條中宮　四條太皇太后宮に同じ

四條太皇太后宮　花山院女御諟子。廉義公女　〔後拾〕秋上・一　四條中宮　〔詞花〕雜下・二

四條太皇太后宮信濃　〔玉葉〕秋下・一

四條宮甲斐　〔新續古〕戀五。一

四條皇太后宮主殿　〔風雅〕雜上。一

四條御息所女　小野宮實頼女　〔後撰〕雜一・一

四條宰相　四條中宮女房　〔後拾〕雜一。一

四條贈左大臣　隆資に同じ、隆實男祖父隆顯爲子云々

【正】

正三位通藤女　〔新千〕戀二・一　〔新拾〕雜上・一　〔新後拾〕秋上。一　雜春。一　戀一・二　雜上・一　〔新續古〕雜上・一

正三位經朝女　〔新後撰〕春下・一

正光　從三位參議。藤原忠義公男　〔新古〕雜上・一　參議

正言　五位大學大允。大隅守大江仲宣男。至寛仁五年　〔後拾〕春上・一　別。

一　〔詞花〕雜下・一　此歌拾遺別部に弓削よし時歌とあり

正季　五位二宮大進。駿河守藤原親信男　〔金葉〕雜上・一

正家　五位。出羽守平正濟男。至延久五　〔後拾〕雜五・一

正家　四位左大辨。式部大輔藤原家經男。天永二十一十一卒　〔金葉〕戀上・一　四位

〔千載〕秋下・一　〔續後撰〕夏・一　〔續詞花〕冬・一

戀中・一　〔高陽院歌合〕五

正清　四位左中將。有明親王御子　〔新古〕戀三・一

正通　四位。少納言橘以利男　〔詞花〕秋・一　四位

正親町院右京大夫　〔續拾〕冬・一　旅・一　〔新後撰〕戀五・一　〔新千〕戀五・一

【玄】

玄上　從二位參議。左大臣藤原三守男。承平三年正廿一薨七十八　〔續後撰〕春上・一

參議

玄守　三井寺法印　〔續千〕雜下・一

玄全　法眼　〔新後拾〕神・一

玄惠　法印　〔續千〕雜中・一

玄勝　俗名齋藤加賀守基兼。藤内左衞門尉基能子　〔新千〕戀一・一　〔新拾〕雜上・一

玄圓　叡山大僧正　〔新千〕冬・一　釋・一　戀一・一　〔新拾〕哀・一　〔新續古〕釋・一　雜中・一

玄賓　僧都　〔續古〕釋・一　雜上・一

玄輝門院右京大夫　〔玉葉〕春下・一　雜四・一

玄範　法師醍醐　〔詞花〕別。一　〔續詞花〕雜中。一　戲。一

玄覺　律師　〔續拾〕旅。一　戀三。一　〔新後撰〕雜上。一　〔新續古〕釋。一

【右】

右衞門　加賀守源兼胤女　〔後撰〕雜一。一　〔拾遺〕別。一

右京大夫　〔家集〕三五四

【右大】

右大臣　〔後撰〕九條右大臣に同じ　〔拾遺〕廣幡左大臣に同じ　〔詞花〕中院入道右大臣に同じ　〔千載〕後德大寺左大臣に同じ　〔續後撰〕九條前攝政右大臣に同じ　〔續拾〕報恩院攝政關白に同じ　〔新後撰〕後稱念院前關白太政大臣に同じ　〔玉葉〕後光明照院前關白左大臣に同じ　〔續千〕金光院入道前右大臣に同じ　〔續後拾〕今出川入道前右大臣に同じ　〔新千〕後深心院前關白に同じ　〔新拾〕千種入道前太政大臣に同じ　〔新續古〕後知足院關白太政大臣に同じ　〔新葉〕春上。二　春下。一　夏。一　秋上。一　冬。一

右大臣北方　源顯房公北方、權中納言源隆俊女　〔後拾〕春上。二　哀。一　〔金葉〕雜上。二　〔新古〕戀五。一

右大臣家讃岐　後照念院關白太政大臣家讃岐に同じ

右大將道綱母　陸奥守藤原倫寧女　〔拾遺〕夏。一　雜下。一　戀四。一　雜賀。二　哀。一　〔後拾〕戀二。二　戀四。一　雜一。三　雜二。一　雜六。一誹諧、大納言道綱母　〔詞花〕雜上。二　〔新古〕戀四。二　〔新勅〕雜一。二　雜三。一　〔續後撰〕羇旅。一　〔續古〕雜上。一　〔玉葉〕春上。一　賀。一　戀二。一　戀四。三　雜三。一　〔續千〕戀三。一　戀四。二　〔續後拾〕戀四。一　雜中。一　〔風雅〕戀二。一　〔新千〕戀三。一　哀。二　〔續詞花〕春上。一　神。一

【右近】

右近 右近少將藤原季縄女 〔後撰〕秋下・一 戀二・一 戀三・一 戀六・二 〔拾遺〕戀四・一 雜春・一 雜戀・一 〔新勅〕戀四・一

右近大將長親母 〔新葉〕春下・二 秋上・一 秋下・二 離・一 旅・一 戀一・二 戀二・一 戀四・二 戀五・二 雜上・二 雜中・三 哀・四

右近大將通忠女 〔續拾〕 雜上・一 〔玉葉〕雜五・一

右近大將通忠母 宗賴卿女 〔續千〕哀・一

右近大將通基母 通時朝臣女 〔續拾〕戀三・一

【石】

石上乙麿の妻 〔萬葉〕長歌卷・二

石守 三野 〔萬葉〕卷八・一 卷一七・一

石足 門部 〔萬葉〕卷四・一 卷五・一

石島 弘部 〔萬葉〕卷二〇・一

石清水 〔新古〕神・一 〔玉葉〕釋・一

【石川】

石川夫人 〔萬葉〕卷二・一

石川命婦 〔萬葉〕卷二〇・一

石川郎女 〔萬葉〕卷二・一

石川郎女 〔萬葉〕卷二・三 卷三・一

石川郎女 〔萬葉〕卷二・二

石川郎女 〔續後撰〕戀二・一 〔新後拾〕 戀二・一

〔古今和歌六帖〕

石川賀係女郎 〔萬葉〕卷八・一

【冬】

冬平公 従一位後照念院前關白太政大臣。圓光院藤原基忠公男 〔新後撰〕春下。一 夏。一 秋下。一 戀一。一 戀二・一 戀六。一 右大臣 〔玉葉〕春上。一 春下。三 夏・一 秋上。一 秋下。一 冬。一 賀。一 戀二・一 戀五・二 雑三・一 關白前太政大臣 〔續千〕春上・一 春下・二 夏。二 秋下・一 戀一・二 戀三・一 戀四。二 戀五・二 雑中・一 前關白太政大臣 〔續後拾〕春上。一 夏・一 秋下。一 冬。一 物名・一 戀一・一 戀三・一 戀四。二 雑上。一 雑中・一 雑下・一 神・一 關白太政大臣 〔風雅〕戀二・一 雑上。一 後稱念院前關白太政大臣 〔新千〕春上・二 春下・一 夏・二 秋上・一 秋下・一 冬・一 戀一・一 戀二・二 戀五・一 雑上・二 雑中・一 雑下。一 賀・一 〔新拾〕春上・一 春下・一 夏・一 賀。一 戀三・一 〔新後拾〕春上。一 旅。一 〔新續古〕春上。一 春下。一 夏・二 秋下。一 戀二・一 戀三・一 神・一

冬長 五位。藤原 〔新拾〕戀三・一

冬定 正二位中納言。中納言藤原宗冬男 〔新千〕秋上。一 前中納言 〔新拾〕戀二。一

冬忠公 正二位大炊御門内大臣。嵯峨藤原宗嗣男 〔續古〕春下。一 戀二・一 内大臣 〔續拾〕戀五。一 大炊御門内大臣 〔新後撰〕戀一・一

冬信公 従一位大炊御門前内大臣。光福寺藤原冬氏男 〔風雅〕冬・一 雑下・一 前内大臣冬信

冬時 五位。大江 〔新後拾〕戀三・一

冬教公 従一位後圓光院關白。後照念院藤原冬平公男 〔玉葉〕秋上・一 權大納言

〔續千〕秋下・一　戀四。一　〔續後拾〕夏・一　旅・一
戀四・一 左大臣　〔新千〕夏・一　秋上・一 後圓光院前關白左大臣

冬通公 從一位左大臣一心院關白照光院師平男　〔風雅〕雜中・一 春宮權大夫
〔新千〕秋上・一　戀一・一　戀三・一 左近大將　〔新拾〕
夏・一 前關白左大臣　〔新後拾〕戀四・一　戀五・一

冬基 正二位大納言。圓光院藤原基忠男　〔新後撰〕冬・一　戀三・一
戀五・一 右近中將　〔玉葉〕秋下・一　戀四・一　雜一・一
雜三・一　神・一 權大納言　〔續千〕戀一・一 前大納言

冬嗣公 正一位閑院左大臣。右大臣藤原内麿男（一四三五―一四八九）　〔後撰〕春上
一　戀三・一　雜二・一　哀・一 閑院左大臣　〔古今和歌
六帖〕

冬隆 四位宮内卿。散位藤原後隆男　〔玉葉〕戀四・一　雜二・一
〔續千〕戀二・一　戀五・一　雜下・一 四位　〔續後拾〕
秋上・一　戀三・一　〔風雅〕雜中・一　〔新拾〕雜中
・一

冬綱 四位。刑部卿藤原爲信男　〔玉葉〕秋下・一 四位

冬頼 五位。藤原　〔風雅〕雜上・一

【平】

平中興女 〔後撰〕戀四・三　〔新勅〕戀四・一

平伊望女 大納言伊望女　〔後撰〕秋下・一

平守時朝臣女 〔新拾〕雜中・一　〔新後撰〕戀二・一

平宣時朝臣女 〔續千〕雜下・一

平胤行女 〔新續古〕戀三・一

平城天皇 諱安殿。桓武帝御子（一四三四―一四八四）　〔古今〕春下・一

奈良御門御歌 秋上・一　秋下・一 左書ならのみかどの御歌也と　〔續後
拾〕秋上・一 平城天皇

平高遠妻　〔後撰〕别・一
平時夏女　〔續千〕雜上・一
平教盛朝臣母　〔續詞花〕戀下・一
平康貞女　〔金葉〕雜上・二
平康貞孫女　〔金葉〕雜上・一
平群氏女郎　〔萬葉〕卷一七・一二
平群朝臣　〔萬葉〕卷一六・一
平親清女　〔續古〕戀二・一　雜上・一　〔續拾〕雜春・一　戀三・一　戀四・一　雜中・一　〔新後撰〕秋上・一　戀五・一　雜上・一　〔風雅〕雜上・一　〔新拾〕冬・一　戀四・一　戀五・一
平親清女妹　〔續拾〕雜秋・一　戀五・一　雜下・一　〔新後撰〕旅・一　釋・一　雜上・一　〔續後拾〕戀二・二　〔新拾〕戀五・一　〔新續古〕戀四・一
平親清四女　〔續千〕戀一・一

【永】

永手　藤原　〔萬葉〕卷一九・一
永光　正五位。大夫進　藤原邦兼男　〔新勅〕戀三・一　戀五・一　雜一・二　〔續後撰〕戀二・一　戀三・一　雜上・一　旅・一　〔續拾〕戀四・一　〔玉葉〕秋上・一　雜五・一
永行　正三位參議。參議藤原永季男　〔新後拾〕雜春・一　五位　〔新續古〕雜上・一　前參議
永成　阿闍梨。越前守源孝道孫　〔後拾〕戀一・一　〔金葉〕賀・一　雜下・二　連歌
永助入道親王　一品。御室。後光嚴帝御子　〔新續古〕春下・一　秋上・一　秋下・一　釋・一　戀三・一　雜中・一

雜下・一　神・一
永胤　四位。大中臣　〔續千〕雜上・一　四位
永胤　左馬助榮光子　〔後拾〕春下・一　冬・一　雜一・一
永能　五位。藤原　〔新續古〕戀一・一
永尊法親王　圓滿院。後二條帝御子　〔續後拾〕雜下・一
永陽門院少將　法印源全女　〔續拾〕戀一・一　春宮少將　〔新
後撰〕雜中・一　永陽門院少將　〔玉葉〕秋上・一　冬・一　戀
一・二　戀二・一　〔續千〕戀五・一
永陽門院左京大夫　〔風雅〕冬・一　雜上・一　雜
下・二　〔新拾〕哀・一　〔新續古〕秋上・一　旅・一
永緣　花林院權僧正。大藏大輔永相子　〔金葉〕春・一　夏・一　秋・二
冬・一　戀下・二　雜上・一　雜下・三　〔詞花〕別・
一　〔千載〕雜中・一　〔新古〕秋上・一　冬・一　旅・一

〔續後撰〕旅・一　〔續拾〕雜下・一　〔風雅〕冬・一
雜下・一　釋・一　〔新千〕雜中・一　〔新拾〕賀・一
〔新後拾〕雜下・一　〔新續古〕釋・一　戀一・一　〔續
詞花〕賀・一　哀・一　釋・一　旅・一　雜下・一
永源　肥後守藤原敦舒子　〔後拾〕春上・一　春下・一　秋上・
一　戀一・二　戀二・二　雜一・一　〔金葉〕雜下・一
連歌　〔詞花〕秋・一　〔續詞花〕物・一
永實　五位信濃守。太皇太后宮大夫藤原清家男。永久二年正五日敍從五位上　〔金葉〕春・
一　冬・一　〔戀下・二〕イ長實一　〔詞花〕戀上・一　〔續詞
花〕夏・一　旅・一　物・一
永輔　大中臣　〔續詞花〕冬・一
永範　正三位。文章博士藤原永實男　〔千載〕賀・一　釋・一　神・二　宮內卿
〔新古〕賀・一　〔新勅〕賀・一　〔續古〕賀・一　〔風雅〕

賀・一　〔續詞花〕賀・一　哀・一

永嘉門院周防　〔續千〕戀二・一

永觀　律師東大寺。文章生源國經子　〔千載〕釋・一　〔續古〕釋・一　雜下・一　〔新後撰〕釋・一　禪林寺の住僧のゆめにみえける歌　〔續千〕釋・一　〔續後拾〕冬・一　〔新拾〕雜中・一　〔新續古〕戀一・一

【永福門院】

永福門院　伏見院后鐘子。後西園寺實兼公女　〔新後撰〕夏・一　冬・一　神・一　〔玉葉〕春上・四　春下・五　夏・二　秋上・六　秋下・二　冬・三　戀一・一　戀二・六　戀三・三　雜一・一　雜二・六　雜四・二　雜五・二　〔續千〕春上・一　夏・一　秋上・二　旅・二　戀二・一　戀三・一　戀四・一　雜上・一　〔續後拾〕秋下・一　戀四・一　〔風雅〕春上・二　春中・三　春下・二　夏・二　秋上・三　秋中・五　秋下・四　冬・五　戀一・四　戀二・十二　戀三・四　戀四・八　戀五・十　雜上・一　雜中・三　雜下・三　〔新千〕秋下・三　冬・一　戀二・一　戀四・一　雜上・一　雜下・三　〔新拾〕春上・一　春下・一　冬・一　戀二・一　雜上・二　〔新續古〕冬・一

永福門院二條　〔玉葉〕秋下・一

永福門院小兵衛督　〔續千〕戀二・一

永福門院内侍　從三位藤原基輔女　〔玉葉〕春下・一　秋上・一　旅・一　戀二・一　戀三・一　戀四・一　戀五・二　雜二・二　雜四・一　雜五・一　〔續千〕秋下・一　哀・一　〔續後拾〕雜中・一　〔風雅〕春上・一　春中・

三　春下・一　秋中・二　秋下・二　冬・二　旅・一　戀二・三　戀四・二　雜上・四　雜中・一　雜下・二　釋・一　〔新千〕釋・一　戀三・一　雜上・一　〔新拾〕春下・一　戀四・一　雜中・一　〔新後拾〕雜上・一

永福門院左京大夫　〔風雅〕戀五・一　〔新千〕戀五・一

永福門院右衞門督　〔風雅〕春中・三　冬・一　戀一・一　戀三・一　戀四・二　戀五・一　雜下・一

永福門院治部卿　〔玉葉〕冬・一

六畫

成　七畫を見よ

臣　山上　〔萬葉〕卷一八・一

自性　法師　〔玉葉〕戀四・一

共政妻肥前　イ爲政妻　〔拾遺〕雜上・一　哀・一　〔金葉〕別・一

羽栗　〔萬葉〕卷一五・一

多麿　丸子連　〔萬葉〕二〇・一

行誠　福田。明治二十一年歿八十三　〔落葉集〕八〇〇　長歌五

刑部卿賴輔母　加茂神主成經女　〔千載〕夏・一　戀下・一

名物

名實　六位大內記。矢田部　〔古今〕物名・一

因幡　因幡守基世王女　〔古今〕戀五・一　〔續詞花〕戀中・一

任辨　法印　〔玉葉〕旅・一

列樹　六位文章生壹岐守。雅樂頭春道新名男、延喜廿年任壹岐守　〔古今〕秋下・一　冬・一　戀二・一　〔後撰〕春中・一　戀一・二

地藏菩薩　〔新古〕釋・一　〔玉葉〕釋・一

【百】

百世　五位兵部少輔。大伴　〔拾遺〕戀一・一　〔續古〕戀三・一
〔萬葉〕卷三・一　卷四・五　卷五・一

百村　土氏　〔萬葉〕卷五・一

【羊】

羊　大伴部子　〔萬葉〕卷二〇・一

羊　若麻續部　〔萬葉〕卷二〇・一

【向】

向　日振　〔萬葉〕卷九・一

向阿　俗名武田大膳大夫信繁。伊豆守源満信子　〔新千〕雜上・一

【衣】

衣通姫　允恭帝妃　〔古今和歌六帖〕

衣笠前内大臣　家良公に同じ

【朱】

朱雀院　諱寛明。延喜帝御子　（一五八三―一六一二）　〔後撰〕春上・一院御製
雜賀・一連歌　〔拾遺〕哀一　〔新古〕戀四・一　雜上・一
朱雀院御製　〔玉葉〕雜四・一　〔續千〕雜上・一　〔新千〕
秋上・一　雜上・一　〔新續古〕哀・一

朱雀院兵部卿親王　盛明親王に同じ

【江】

江本明神　〔新古〕神・一

江侍従　大江匡衡朝臣女　〔後拾〕秋上・一　賀・一　哀・一
雜一・二　雜四・一　〔金葉〕夏・一　戀下・一　〔詞
花〕雜上・一　〔千載〕哀・一　雜下・一誹諧　〔新拾〕
哀・一　戀四・一　〔續詞花〕戲・一

【吉】

吉田内大臣　定房公

吉男　縣犬養　〔萬葉〕卷八・一

【竹】

竹林院入道前左大臣　公衡公に同じ

竹林院前内大臣　公重公に同じ

【年】

年足　安都　〔萬葉〕卷四・一

年足　石河　〔萬葉〕卷九・一　卷一九・一　〔古今和歌六帖〕

年魚麿　若宮　〔萬葉〕卷三・一

【宅】

宅守　中臣　〔萬葉〕卷一五・四〇

宅麿　雪　〔萬葉〕卷一五・一

宅嗣　石上　〔萬葉〕卷一九・一

【池】

池主　萬云民部丞。大伴　〔新勅〕冬・一　〔萬葉〕卷八・一　卷一七・一三　卷一八・九　卷二〇・二　長歌卷一七・四

池田朝臣　〔萬葉〕卷一六・一

池田廣津娘子　〔萬葉〕卷八・二

【好】

好古　從三位中納言。小野篁男。天慶元年正右少將二年正五位下四年五月二從四位下天暦元參議天徳三左大辨康保四年致仕八十四同七七卒　〔後撰〕戀三・一　戀五・一　雜一・一　別・一　小野好古朝臣　〔拾遺〕賀・一　雜賀・一

好忠　六位丹後掾。曾根　〔曾丹集〕五九〇　長歌三　〔拾遺〕

秋・二　別・一　雜下・一　戀三・一　雜秋・四　〔後拾〕春上・一　夏・四　秋上・一　冬・一　戀四・一　雜一・一　〔詞花〕春・一　夏・三　秋・五　冬・四　戀上・一　戀下・一　雜上・一　雜下・一　〔新古〕春上・一　夏・二　秋上・三　秋下・三　冬・三　戀一・三　雜上・一　〔新勅〕春上・四　秋上・二　秋下・一　冬・二　〔續後撰〕戀四・一　雜上・一　雜下・二　〔續古〕冬・一　戀一・一　戀四・二　戀五・一　〔續拾〕戀四・一　雜上・一　〔續千〕雜體・二　戀二・一　〔續後拾〕春上・一　夏・一　物名・一　戀四・一　雜下・一　〔風雅〕夏・一　〔新千〕秋上・一　秋下・一　〔新拾〕春上・一　冬・一　〔新後拾〕春上・一　夏・一（此うた風雅夏）　秋下・一　〔新續古〕冬・一　戀三・一　雜下・一（物名）　〔續

詞花〕春上・二　春下・一　夏・一　秋上・一　秋下・一　戀中・一

好風　五位出羽介ｲ良風。左中將藤原滋實男　〔古今〕春下・一　〔古今和歌六帖〕

【全】

全仁親王　三品中務卿太宰帥恆明親王御子　〔新千〕戀四・一　〔新拾〕戀左・一

全成　四位大膳大夫。典藥頭和氣國成男　〔風雅〕雜上・一（四位）

全玄　叡山双林寺大僧正天台座主。少納言實明子　〔風雅〕雜下・一

全眞　當都　〔玉葉〕旅・一　雜四・一

【伏】

伏見院中納言典侍　大納言俊光女　〔玉葉〕戀三・一　戀・
五・一

伏見中務内侍〔玉葉〕春下・一　戀五・一

伏見院　諱熙仁。後深草帝御子　〔新後撰〕春上・一　春下・二　夏・二　秋上・一　秋下・一　冬・一　神・一　戀・一一　戀二・一　戀三・二　戀六・二　雜上・二　賀・一　院御製　〔玉葉〕春上・五　春下・七　夏・一　秋上・八　秋下・四　冬・四　賀・二　旅・四　戀一・二　戀二・六　戀三・四　戀四・四　戀五・五　雜一・一　雜二・一〇　雜三・七　雜四・一　雜五・一　釋・一　〔續千〕春上・二　春下・三　夏・二　秋上・一　秋下・二　神・一　戀三・一　雜上・二　哀・一　賀・三　伏見院御製　〔續後拾〕春上・一　春下・一　秋上・一　秋下・一　冬・二　戀一・一　戀二・二　戀三・一　雜上・一　雜中・二　〔風雅〕春上・五　春中・一　春下・四　夏・四　秋上・四　秋中・五　秋下・三　冬・一　戀二・二　戀三・五　戀四・五　戀五・七　雜上・七　雜中・三　戀下・一　釋・一　〔新千〕春上・一　春下・二　夏・三　秋上・二　秋下・四　冬・一　別・一　釋・一　神・一　戀一・四　戀三・一　戀四・一　戀五・一　雜上・一　雜中・一　哀・一　賀・一　〔新拾〕春上・二　春下・一　夏・二　秋上・一　秋下・二　冬・一　旅・二　戀二・一　戀四・一　戀五・一　神・二　雜上・四　雜中・一　〔新後拾〕春上・二　春下・二　秋上・一　秋下・三　戀五・三　雜下・一　〔新續古〕春下・一　秋上・一　冬・一

伏見院新宰相　左中將藤原親忠女　〔玉葉〕春上・一　夏・二　秋下・一　旅・一　戀二・二　戀四・一　戀五・一

雜二・一　雜五・一〔續千〕旻・一　雜下・一　哀・一〔風雅〕夏・一　秋中・一　冬・三　戀一・二　戀三・一　戀四・三　戀五・一〔新拾〕春下・一

【有】

有果　法印。從二位源有通子〔新勅〕秋下・一〔續後撰〕戀一・一

有淳　法印〔風雅〕雜下・一

有雅　法印〔新後拾〕雜下・一

有慶　東大寺東南院法印。參議有國子〔千載〕雜下・一　物名〔續詞花〕物名・一

有禪　法橋〔詞花〕別・一

【匡】

匡長　五位。禰宜祝部國忠男〔玉葉〕神・一

匡房　從二位中納言。從四位下大江成衡男（一七〇一—一七七）〔後拾〕春上・一　哀・一大江匡房朝臣〔金葉〕春・三　夏・一　冬・二　賀・一　雜下・一大藏卿〔詞花〕春・二　夏・一　秋・二　冬・二　賀・一金葉賀詞　戀上・一　雜上・三　雜下・二大藏卿〔千載〕春上・四　春下・四　夏・二　秋下・一　冬・二　別・一　哀・一　賀・一　神・一前中納言〔新古〕夏・二　秋上・一　秋下・二　冬・一　賀・二　別・二　旅・一　雜上・二　雜中・一　雜下・一〔新勅〕冬・一　賀・二　旅・一　戀一・一　雜一・一〔續後撰〕春上・一　夏・一　冬・一　戀四・一　旅・二　賀・二〔續古〕秋上・一　別・一　戀二・一　戀三・一　賀・一〔續拾〕春下・一　戀四・二〔新後撰〕夏・一　戀一・二〔玉葉〕春上・一　春下・一　秋下・二　冬・一　賀・

一　旅・一　戀一・一　戀四・一　雜四・一〔續千〕神・一　賀・一〔續後拾〕春上・一　夏・二　物名・一〔風雅〕春中・一　秋上・一　秋下・一　賀・一〔新千〕秋上・一　賀・一〔新拾〕春上・一　秋上・一　賀・一　戀二・一〔新後拾〕夏・二　冬・一　戀・五一　賀・一〔新續古〕春上・一　冬・一　賀・一　神・一〔續詞花〕春下・一　夏・一　秋上・二　秋下・二　哀・一　戀中・一　旅・一　雜上・一　雜下・一〔高陽院歌合〕五

匡房卿妹　信濃守大江成衡女　〔金葉〕雜下・一

匡遠　四位。左京大夫小槻千宣男　〔新千〕神・一〔新後拾〕雜秋・一〔新續古〕戀三・一

匡衡　四位式部大輔。左京大夫大江重光男。長和元七月十六卒　〔後拾〕秋上・一

戀三・一　雜一・一　雜二・一　雜三・一　雜五・一　雜六・一　誹諧四位　〔新古〕哀・一　戀一・一〔續古〕冬・一　哀・一〔新續古〕戀四・一〔續詞花〕戀下・一　雜中・一

匡範　四位左京大夫。式部少輔大江雅光男。至建仁三年八月十四日卒六十四　〔千載〕雜中・一　五位

【在】

在仲　大藏卿　〔新葉〕旅・一　戀二・一

在匡　四位刑部卿。從二位藤原在章男　〔續拾〕冬・一　四位

在良　四位攝津守北野小神三位殿祐是也。和泉守菅原定義男　〔新勅〕秋上・二　秋下・一　四位　〔續千〕釋・一〔續後拾〕雜上・一

在夏　四位菅原　〔新拾〕戀三・一　四位

在原業平母　〔古今〕伊豆内親王に同じ

在藤　四位。陰陽少允賀茂在春男　〔新後撰〕雜中・一　四位　〔玉葉〕賀・一

【宇】

宇合　正三位參議。藤原淡海公男(一三三九—一三九七)　〔新古〕雜中・一　式部卿　〔續古〕雜中・一　〔新拾〕戀四・一　〔萬葉〕卷一・一　卷三・一　卷八・一　卷九・一　〔古今和歌六帖〕

宇多天皇　諱定省。號寛平法皇。光孝帝御子(一五二七—一五九一)　〔古今〕雜上・一　法皇　〔後撰〕秋中・一　亭子院　雜三・一　法皇御製　別・一　旅・一　亭子院御製　〔新古〕戀一・一　戀三・一　〔續後撰〕戀三・二　〔續古〕秋下・一　戀四・一　雜下・一　〔新千〕戀一・一　戀三・一　〔新拾〕雜上・一　雜中・一　〔新後拾〕戀五・一

宇多院の女五のみこ　依子内王に同じ

宇多麿　壬生　〔萬葉〕卷一五・四

宇佐宮　〔新古〕神・一

宇治左大臣　賴長公に同じ

宇治忠信母　諸陵頭高階資長女　〔後拾〕雜一・一

宇治前關白太政大臣　賴通公に同じ

宇遲部黑女　椋椅部荒蟲の妻　〔萬葉〕卷二〇・一

【如】

如月　法師　〔新後拾〕釋・一

如空　上人北小路大念佛　〔續千〕釋・一　〔風雅〕釋・一　〔新千〕釋・一　〔新後拾〕雜下・一

如法三寶院入道前内大臣　通顯公に同じ

如寂　法師　〔新拾〕冬・一

如淨　法師　〔風雅〕雜上・一

如雄 法師〔新千〕旅・一〔新拾〕戀三・一

如圓 法師。深草寺。如信上人子〔續拾〕雜春・一〔新後撰〕雜下・一〔風雅〕雜下・一〔新拾〕哀・一

如願 法師俗名出羽守秀能。河内守藤原秀宗子〔新古〕春上・一 秋上・二 冬・二 哀・一 旅・二 戀二・二 戀三・二 戀四・二 雜上・二 雜中・一 藤原秀能〔新勅〕夏・一 秋下・二 冬・一 戀一・一 戀二・一 雜一・二 雜二・一 如願法師〔續後撰〕春上・一 春中・一 秋中・一 戀一・一 雜上・一〔續古〕雜下・一 秀能〔續拾〕夏・二 秋下・一 冬・二 雜秋・一 旅・二 戀一・一 如願〔新後撰〕春下・一 旅・一 戀二・一 雜上・二〔玉葉〕夏・一 雜一・一 雜三・一〔續千〕冬・一 雜上・一 雜中・一〔續後拾〕秋上・一 秋下・一 戀四・一〔風雅〕夏・一 秋上・一 冬・一 雜中・三 雜下・一 賀・一〔新千〕冬・一 戀一・一 雜中・一〔新拾〕春・下一 冬・一 旅・一〔新後拾〕秋下・一 雜秋・一〔新續古〕秋上・一 秋下・一 冬・一 旅・一 戀一・一 戀五・二 雜中・一

如覺 高光の法名也。たの部にあり

【式】

式子内親王 齋院。後白河帝御女(一一八六一)〔式子内親王集〕三〇〇〔千載〕春下・一 夏・一 秋下・一 賀・一 戀一・二 戀二・一 雜上・一 釋・一 神・一〔新古〕春上・三 春下・三 夏・六 秋上・八 秋下・四 冬・四 賀・一 旅・二 戀一・四 戀二・一 戀三・二

上・一 〔新千〕秋下・一 戀二・一 〔新拾〕夏・一

秋上・一 戀二・一 戀四・一 〔新後拾〕秋下・一

〔新續古〕春上・一 春下・一 秋下・一 冬・一

式乾門院右京大夫 〔續拾〕雜春・一

式部命婦 〔後拾〕哀・一 雜二・一 〔續詞花〕雜中・一

【老】

老 春日 〔萬葉〕卷一・一 卷三・四 卷九・二

老 間人 〔萬葉〕卷一・一 長歌卷一・一

老 穗積 〔萬葉〕卷三・一

老 小野(一三五三―一三九七) 〔萬葉〕卷三・一 卷五・一 卷六・一 〔古今和歌六帖〕

老 高氏 〔萬葉〕卷五・一

老 葛井子 〔萬葉〕卷一五・二 長歌卷一五・一

老人 阿部 〔萬葉〕卷一九・一

老夫（オキナ） 石川 〔萬葉〕卷八・一

老麿 神社 〔萬葉〕卷六・二

老麿 境部 〔萬葉〕卷一七・一 長歌卷一七・一

【西】

西山內大臣 滿季公に同じ

西三條右大臣 良相公に同じ

西日 法師。和泉守源雅隆子 〔新古〕雜中・一

西行 法師俗名兵衞尉則淸。散位藤原康清子(一七七八―一八五〇) 〔山家集〕一五四九 〔千載〕春上・一 秋上・一 旅・一 哀・二 戀四・二一 戀五・一 雜上・二 雜中・五 釋・一 神・一

圓位法師 〔新古〕春上・五 春下・一 夏・四 秋上・四

秋下五・　冬・七　哀・四　別・三　旅・五　戀二・四
戀三・七　戀四・六　雜上・七　雜中・一四　雜下・
一三　神・三　釋・二
西行
〔新勅〕春下・二　秋上・二
秋下・二　冬・二　戀一・一　戀三・一　雜一・一
雜二・三　〔續後撰〕春上・一　夏・一　秋上・一
秋中・一　冬・一　戀三・一　戀四・一　雜中・一
雜下・一　旅・二　〔續古〕神・二　戀一・一　戀二・
一　戀五・三　哀・二　雜上・二　〔續拾〕春上・一
春下・一　秋下・一　雜秋・一　旅・一　戀一・一
雜上・一　釋・一　神・一　〔新後撰〕春上・一　春下
・二　秋上・二　秋下・一　別・一　釋・一　雜上・一
雜下・一　賀・一　〔玉葉〕春上・二　春下・四　夏・
一　秋上・二　秋下・五　冬・五　旅・五　戀一・一
戀二・一　戀三・二　戀四・二　戀五・一　雜一・五
雜二・一　雜三・四　雜四・五　雜五・二　神・一
〔續千〕夏・一　冬・一　釋・二　〔續後拾〕戀二・一
哀・一　〔風雅〕春中・二　春下・一　秋中・四
雜上・一　雜下・二　釋・一　神・一　〔新千〕戀二・
一　雜下・一　諸誹　哀・二　〔新拾〕春上・一　秋上・一
秋下・一　冬・一　旅・一　哀・一　雜中・一　雜下
・二　諸誹　〔新後拾〕夏・一　秋下・一　雜下・一　〔新
續古〕春下・一　哀・一　雜上・一　〔續詞花〕秋上・一

西住　法師俗名季政
〔千載〕冬・一　別・一　戀二・一　雜中・一

西音　法師
〔續古〕雜下・一　〔新後撰〕釋・一　〔玉葉〕
雜一・二　〔續千〕雜上・一　雜下・一　〔續後拾〕
戀四・一　〔新千〕哀・一

西宮左大臣　高明公に同じ

西院皇后宮　馨子内親王齋院後三條后。後一條院皇女　〔續古〕戀四・一　〔續後拾〕雜中・一　〔續詞花〕戀下・一

西華門院　後二條院實母基子。内大臣具守公女　〔新千〕釋・一　〔新拾〕哀・一

西園　法師俗名宇都宮播磨　〔新後撰〕戀二・一

西園寺入道前太政大臣　公經公に同じ

西園寺内大臣　實衡公に同じ

西園寺前内大臣女　〔風雅〕秋下・二　戀一・一　戀二・二　戀五・三　雜中・一　雜下・三　〔新千〕釋・一　戀二・二　〔新拾〕戀一・一　〔新後拾〕夏・一　雜上。一　雜下・一　〔新續古〕夏・一　秋上・一

【守】

守子内親王　彦仁王御女　〔風雅〕雜上・一

守文　五位。右馬介藤原有教男　〔後撰〕秋上・一　戀六・一　哀・一

守正　五位修理亮。中納言藤原兼輔男、天慶九年十一十九卒　〔後撰〕戀三・一

守長親王　上野大守　〔新葉〕春上・一　夏・二　釋・一　戀一・一　戀二・一　戀三・一

守時　四位。鎌倉執權北條久時男　〔新續古〕戀二・一

守部　橘嘉永二年稜威の言別、稜威の道別歿六十九、長歌撰格、短歌撰格　〔守部歌集〕六七七　長歌四七

守部王　〔萬葉〕卷六・二

守尋　法印　〔新千〕釋・一　〔新拾〕雜中・一

守遍　法印　〔新拾〕釋・一　〔新後拾〕戀四・一　〔新續古〕冬・一　戀五・一　雜上・一

守親　前大納言。新葉集歎詞書云任陸奥云々　〔新葉〕夏・一　戀三・一
雜下・一

守禪　法印。中納言爲經子　〔新後撰〕旅・一　〔續千〕釋・一
〔續後拾〕釋・一

守覺法親王　號北院二品仁和寺御室。後白川帝御子(一八一〇ー一八六二)　〔千載〕
春上・一　夏・一　秋上・二　冬・一　旅・一　雜中
・三 二品法親王守覺　〔新古〕秋下・一　冬・二　雜上・一
雜下・一 守覺法親王　〔新勅〕雜一・一　雜四・一 仁和寺二品法親王
守覺　〔續後撰〕雜中・一　〔續古〕冬・二 二品守覺親王　〔續
拾〕戀五・一 仁和寺二品法親王守覺　〔新後撰〕秋上・一　〔玉葉〕
春上・一　夏・一　秋上・一　冬・一　雜一・一 二品法親
王守覺　〔續千〕春下・一　冬・一 仁和寺二品法親王守覺　〔續後拾〕
戀二・一　雜下・一　〔新千〕夏・一　〔新拾〕旅・一
〔新後拾〕秋下・二　雜下・一　〔新續古〕春上・一
春下・一　哀・一　雜上・二 二品法親王守覺

守譽　仁和寺成菩提院大僧正。大納言實藤子　〔新後撰〕夏・一　釋・一
戀四・一　〔玉葉〕冬・一　〔續千〕雜中・一　雜下・一
〔風雅〕雜下・一　〔新千〕雜上・一

守藤　五位。荒木田　〔新千〕神・一

【仲】

仲文　正五位上野介。改司茂。陸奥守藤原公葛男。至貞元八年(一五六八ー一六二八)　〔拾遺〕
雜上・一　雜下・二　〔新古〕雜五・一　〔新千〕哀・一
〔新拾〕戀三・一　雜下・一 誹諧　〔新後拾〕雜下・一
〔三十六人集〕四八　〔補遺〕三三一

仲正　五位兵庫頭。三河守源頼綱子。至天承元年　〔金葉〕夏・一　秋・二
〔詞花〕雜上・一　〔千載〕春上・一　春下・一　夏・二

雜上・一　雜中・一　雜下・一旋頭　〔風雅〕冬・一　雜中・一　〔新拾〕春下・一　旅・一　〔續詞花〕雜下・二　戯・一

仲平公　正二位枇杷左大臣に同じ藤原昭宣公男　〔古今〕戀五・一四位　〔後撰〕秋中・一　冬・一　戀二・一　戀三・一　戀四・一　雜二・二枇杷左大臣　〔續後撰〕雜上・一　〔續後拾〕春下・一　〔新千〕戀一・一　〔古今和歌六帖〕

仲光　從一位大納言。儀同三司藤原兼綱男　〔新後拾〕秋上・一　戀四・一太宰權帥　〔新續古〕秋上・一前大納言

仲成　四位宮内卿。施藥院和氣隆成男　〔風雅〕旅・一四位

仲宣　四位右衛門督。大納言源貞恒男。延長八右少將承平六四位至天慶七　〔後撰〕春下・一四位

仲胤　〔續詞花〕戯・一

仲能　四位。藤原　〔續古〕雜下・二四位

仲敏　六位。藤原　〔續千〕雜下・一　〔續拾〕雜春・一

仲麿　藤原　〔萬葉〕卷一九・二

仲盛　參議　〔新葉〕雜上・一

仲遠　五位播磨守。下總守橘佐清男　〔新勅〕神・三　〔續後撰〕神・一

仲業　五位藏人イ仲成。遠江守源仲兼男　〔續古〕哀・一　〔續拾〕雜中・二

仲算　法師　〔拾遺〕賀・一

仲實　四位宮内卿。備後守藤原能成男。至天仁元年　〔金葉〕秋・一　冬・一　戀下・一　雜上・一　〔詞花〕戀下・一　〔千載〕春下・一　秋下・一　冬・二　戀四・一　〔新古〕春上・一　〔新勅〕戀一・一　〔續後撰〕秋中・一　〔玉葉〕戀二・一　〔風雅〕夏・一　〔新千〕雜上・一　〔新拾〕別・一

雜下・一　折句　〔新後拾〕秋下・一　冬・一　別・一
〔新續古〕釋・一　〔續詞花〕夏・一　秋下・一　釋・一
戀中・一

仲綱　五位伊豆守。從三位源賴政男。至安元二年　〔千載〕春下・二　旅・一
戀四・二　雜上・一　〔玉葉〕春下・一　〔新千〕雜下
・一　誹諧　〔新拾〕夏・一　〔新後拾〕雜下・一　〔新續
古〕旅・一　〔續詞花〕戀中・一

仲賴　五位筑後守。左衛門尉源資遠男。至久治三年　〔千載〕冬・一　戀五・
一

仲麿　入唐。中務大輔安倍船守男（一三六一―一四三〇）　〔古今〕旅・一　〔玉
葉〕一　〔續後拾〕一　〔古今和歌六帖〕

仲覺　叡山法印。中納言仲兼子　〔玉葉〕雜一・一

仲顯　法印。源邦長朝臣子　〔新千〕雜中・一　〔新拾〕雜上・一

【安】

安子　柳原　〔月桂一枝〕

安法　内藏頭源適趁子　〔拾遺〕秋・一　神・一　雜春・一〔後
拾〕秋上・一　雜四・一　〔新古〕雜上・二　雜中・一
〔續古〕秋上・一　〔續千〕夏・一　〔續後拾〕雜上・一
〔新拾〕雜上・一

安法法師女　〔新古〕戀三・二　〔續詞花〕戀下・一

安性　俗名時元　〔千載〕雜下・一　誹諧

安國　五位左衛門權佐。伊豫守藤原連永男。至天元二年　〔後撰〕夏・一

安宿王　〔萬葉〕卷二〇・二

安麿　大伴（―一三七四）　〔萬葉〕卷二・一　卷四・一　〔古今
和歌六帖〕

安麿　板持　〔萬葉〕卷五・一

安倍公 佐保左大臣。高市皇子御子 〔續古〕旅・一 佐保左大臣
安都扉娘子 〔萬葉〕卷四・一 〔古今和歌六帖〕
安貴王 從五位下。春日王御子 〔拾遺〕秋・一 〔新勅〕雜四・一
〔萬葉〕卷三・一 卷四・一 卷八・一 長歌卷四・
一 〔古今和歌六帖〕
安樂寺 〔新古〕神・一
安藝 〔續詞花〕戀下・一

【安嘉門院】

安嘉門院大貳 從三位藤原爲繼女 〔續古〕哀・一 〔續拾〕雜
上・一 雜下・一 〔新後撰〕釋・一 戀三・一 雜下
・一 〔玉葉〕旅・一 〔續千〕戀九・一 〔續後拾〕雜
中・一 哀・一 〔新千〕雜下・一 〔新拾〕夏・一 哀
・一 〔新後拾〕雜秋・一

安嘉門院四條 但馬守平度繁朝臣女阿佛尼（一九四三）十六夜日記 〔續古〕
旅・一 雜上・一 雜下・一 安嘉門院右衛門佐 〔續拾〕秋下
・二 雜秋・一 戀三・二 戀四・一 戀五・一 〔新
後撰〕夏・一 〔玉葉〕秋上・二 旅・四 戀一・一
戀二・一 戀四・一 戀五・一 雜四・一 〔續千〕
春下・一 〔續後拾〕 雜下・一 〔風雅〕春上・一
春下・一 秋上・一 冬・一 旅・一 戀二・四 雜
上・三 雜下・三 〔新千〕雜中・一 雜下・一 〔新
拾〕秋下・一 戀一・二 戀五・一 〔新後拾〕戀一・
一 〔新續古〕 春上・一 夏・一 秋上・一 別・一
戀四・一
安嘉門院右衛門佐 安嘉門院四條に同じ
安嘉門院甲斐 〔續後撰〕冬・一 〔續拾〕旅・一

〔新後撰〕戀二・一　〔續千〕戀四・一　〔續後拾〕戀二・一　〔新千〕戀四・一

安嘉門院高倉　〔續古〕戀四・一　戀五・一　〔續拾〕戀三・一　戀四・一　〔續後拾〕神・一　〔風雅〕秋下・一　雜中・一　〔新千〕戀二・一　〔新後拾〕秋下・一　戀四・一

【伊】

伊尹　太政大臣正二位一條攝政謙德公。右大臣師輔男。天祿三年薨（一五八四—一六三二）　〔後撰〕戀三・二伊尹朝臣　〔拾遺〕戀一・一　戀二・一　戀五・一　雜春・一　雜賀・一　哀・一一條攝政　〔新古〕戀一・五　戀三・二　戀四・一　戀五・二謙德公　〔新勅〕旅・一　戀二・一　戀三・三　戀四・一　戀五・一　雜二・一　雜三・一　〔續古〕戀一・一　戀四・一　〔玉葉〕雜四・一　〔續後拾〕秋上・一　秋下・一　賀・一　〔風雅〕戀四・一　〔新千〕・別一　賀・一　〔新拾〕戀二・二〔新後拾〕春下・一

伊平　正二位大納言。中納言藤原賴平男　〔新勅〕秋下・一左近中將　〔續後撰〕春下・一　戀二・一前大納言　〔續古〕旅・一　戀三・一　雜上・一　雜下・二　〔續拾〕雜下・一　〔玉葉〕秋上・一　冬・一　〔新拾〕雜上・一　〔新續古〕秋上・二

伊光　五位。中務大輔藤原伊綱男　〔新勅〕秋下・一　〔續後撰〕戀三・二

伊行　藤原　〔續詞花〕戀上・一

伊成　從三位。左中將藤原底忠男　〔新續古〕秋上・一　〔續後撰〕戀二・一侍從

伊豆内親王 イ伊登。兼子内親王。桂内親王也。桓武帝御女 〔古今〕雜上・一 業平母のみこ

伊周 正二位准同三司帥前内大臣。中關白藤原道隆公男 〔後拾〕旅・一 雜五・一 帥前内大臣 〔詞花〕雜上・一 雜下。一 帥前内大臣 〔續古〕哀・一 儀同三司 〔玉葉〕雜四・一

伊定 四位。藤原 〔新續古〕冬・一 四位

伊長 四位左中將。從三位藤原伊時男 〔續後撰〕雜中・一 〔續古〕冬・一 雜上・一 〔續拾〕戀五・一 〔新續古〕冬・一 戀四・一 哀・一、

伊房 正二位中納言。參議藤原行經男（一六九一―一七五七） 〔後拾〕雜・六神一。治部卿 〔金葉〕秋・一 中納言 〔千載〕戀一・一 前中納言 〔新勅〕賀・一 〔續後撰〕神・一 太宰權帥 〔續詞花〕神・一

伊俊 從三位。從三位藤原伊家男 〔新千〕戀四・一 從三位

伊信 四位右馬頭。從四位藤原爲繼男 〔續古〕雜上・一 四位 〔續拾〕戀二・一 釋・一 〔新後撰〕秋上・一

伊香 甘南備 〔萬葉〕卷二〇・四

伊保麿 〔萬葉〕卷九・一

伊家 五位右中辨。周防守藤原公基男 〔後拾〕春下・一 〔金葉〕秋・三 〔詞花〕夏・一 秋・一 戀上・一 〔千載〕秋上・二 〔新古〕神・一 〔續詞花〕秋下・一

伊通 正二位大宮太政大臣。大納言藤原宗通男 〔金葉〕春・二 秋・二 戀下。一 右兵衞督 〔詞花〕雜下・一 大納言 〔千載〕春下・一 哀・一 賀・一 戀一・一 雜上・一 大宮太政大臣 〔玉葉〕春下・一 〔續後拾〕冬・一 〔續詞花〕春下・一

伊賀少將 後冷泉院御乳母。縫殿頭藤原顯長女 〔後拾〕春上・一 雜二・一 〔金葉〕戀下・一

伊經　四位太皇太后宮亮。宮内少輔藤伊行男。至建久九年　〔千載〕戀三・一　〔新勅〕戀二・一

伊嗣　四位左中將。藤原　〔續後撰〕秋下・一　四位

伊勢　七條后宮女房。大和守藤原繼蔭女（一一五九九）　〔古今〕春上・五　夏・一　物・一　戀三・一　戀四・三　戀五・四　雜上・二　雜下・三　雜體・二長歌一。誹諧一。　〔後撰〕春上・一　春中・二　春下・三　秋中・四　秋下・二　冬・一　戀一・三　戀二・一　戀三・四　戀四・七　戀五・六　雜一・二　雜二・一　雜三・一　雜四・一　別・八　旅・二　哀・六　〔拾遺〕春・一　夏・二　秋・三　冬・二　賀・三　別・一　物・一　雜上・四　雜下・一　戀四・三　戀五・一　雜賀・一　雜戀・一　哀・二　〔新古〕春上・一　春下・一　賀・二　別・一　戀一・三　戀三・二　戀四・二　戀五・二　雜下・一　〔新勅〕春上・二　戀二・一　戀三・一　雜五・二　物名　〔續後撰〕春上・一　秋上・一　戀一・一　戀二・一　戀四。一　雜下。一　〔續古〕春上。一　秋上・一　秋下・一　戀一・一　戀四・一　戀五。一　雜上・二　〔玉葉〕釋・二　旅。一　戀二・一　戀三。一　戀四・一　雜二・一　雜四・一　雜五・一　〔續千〕春下・二　夏・一　〔續後拾〕春下・一　戀一・一　雜下。一　〔風雅〕秋上。一　雜上・一　〔新千〕秋上・一　戀一・二　戀四・二　雜上・一　〔新拾〕夏・一　戀一・一　雜上・一　〔新後拾〕春上・一　賀・一　〔新續古〕秋上。二　〔亭子院歌合〕初春・二　戀・一　〔古今和歌六帖〕〔三十六人集〕五一六　長歌二　〔補遺〕三九　長歌一

伊勢大神宮 齋宮女王託宣 〔後拾〕神・一 〔玉葉〕神・一

伊勢大輔 上東門院女房。祭主輔親女 〔後拾〕春上・二 夏・四 秋上・二 秋下・三 賀・一 哀・三 戀二・一 戀三・一 雜三・二 雜四・一 雜五・四 雜六・三 釋教 〔詞花〕春・一 賀・一 〔新古〕夏・一 冬・一 賀・一 雜上・二 雜下・一 釋・一 〔新勅〕旅・一 雜一・一 〔續後撰〕秋下・一 〔續古〕別・一 賀・一 〔玉葉〕戀四・一 〔續千〕雜體・一 〔續後拾〕春上・一 戀一・一 〔新千〕釋・一 雜下・一 誹諧 〔新拾〕戀二・一 神・一 雜上・一 〔新續古〕戀五・一 〔續詞花〕物・一

伊綱 五位中務大輔。刑部大輔藤原家基男。永曆二年正月五日敍爵 〔千載〕戀一・一 釋・一 〔新古〕釋・一

伊實 正三位中納言。大宮太政大臣藤原伊通男 〔新勅〕秋上・一 權中納言

伊實 藤原世尊寺行房孫行實男 〔新葉〕冬・一

伊衡 正四位參議。左中將藤原敏行男。延喜十六年右少將七年藏人頭延長八年正四位下兼内藏頭承平四年參議七年右兵衞督天慶九年十二十七卒 〔後撰〕春中・一 賀・一 藤伊衡朝臣 〔拾遺〕賀・一 雜下・五 雜春・一 參議 〔續古〕雜中・一 〔玉葉〕賀・一 〔古今和歌六帖〕

伊豫 〔玉葉〕雜一・二

伊豫三位 讃岐守顯綱女 〔千載〕戀四・一

伊繼 四位 〔玉葉〕雜五・一 四位

【有 四畫—八畫】

有文 五位伊勢守。右大臣藤原氏宗男。至天慶八年 〔後撰〕戀二・一

有氏 藤原 〔新葉〕神・一

有仁 從一位花園左大臣。輔仁親王御子 〔金葉〕春・三 夏・二

秋・一　冬・二　戀下・一（内大臣）　〔詞花〕春・一（花園左大臣）
〔千載〕春上・一　春下・一　賀・一　戀一・一　戀二
・二　〔新古〕夏・一　戀一・一　戀二・一　〔續古〕
雜上・一　〔玉葉〕春下・一　雜一・一　〔續詞花〕春
下・二　賀・一　戀上・一

有功　千種嘉永七年、和漢草、日枝の百枝、薨五十八、ふるかゞみ　〔千々廼舍歌集〕
一二七一　長歌三

有恒　從二位。大炊權助安倍泰吉男　〔新續古〕雜中・一（從二位）

有光　正二位中納言。中納言源有忠男　〔風雅〕雜中・一（前中納言）　〔新千〕
戀一・一　雜上・二　〔新拾〕夏・一　神・一　雜上・
一　〔新後拾〕雜秋・一

有仲　五位。顯仲卿孫。齋院長官源有房男　〔新勅〕雜五・一（物名）　〔續後撰〕
釋・一

有安　五位筑前守。内藏助中原賴盛男。至建久五年　〔千載〕釋・一

有好　五位左馬介。大納言藤原定国男。至延長元年　〔後撰〕戀三・一　戀五・一

有岑　紀　〔寛平后宮歌合〕夏・一

有助　六位左衛門尉。御春。河内國人　〔古今〕戀三・一　哀・一

有佐　イ有祐四位皇后宮亮。讃岐守藤原顯經男。至嘉承三年　〔金葉〕雜下・一（藤原有佐朝臣）

有忠　正二位中納言。六條内大臣源有房男　〔玉葉〕夏・一（從三位）　〔續千〕
秋下・一　戀三・一　雜中・一（春宮權大夫）　〔續後拾〕戀
四・一（前中納言）　〔風雅〕雜上・一　雜下・一　〔新千〕秋
上・二　冬・一　戀一・二　雜上・一　〔新拾〕旅・
一　哀・一　〔新後拾〕雜下・一　〔新續古〕春上・一
戀一・一　戀二・一

有季　六位。文屋。康秀同人歟可考　〔古今〕雜下・一

有明　イ有友五位宮内少輔。紀本道男。元慶四年卒　〔古今〕春上・一　雜體・

一　誹諧歌

有宗　四位。右馬頭源資定男　〔新續古〕秋上•一　四位

有長　四位播磨守。刑部大輔源長俊男　〔新勅〕戀二•一　戀三•一

雜中•一　四位　〔續後撰〕戀四•一　雜中•一　〔續古〕

戀二•一　〔續拾〕夏•一　戀四•一　〔新後撰〕釋。

一　戀三•一　雜中•一　〔續千〕秋下•一　釋。一

雜中。一　〔續後拾〕冬。一　戀三•一　〔風雅〕神•一

〔新千〕釋•一　戀四。一　哀•一　〔新拾〕秋下•一

賀•一　雜下•一　旋頭　〔新後拾〕冬•一

有房　從一位六條内大臣。右少將源通有男　〔新後撰〕秋上•一　旅•一

戀六•一　前中納言　〔玉葉〕夏•一　前大納言　〔續千〕春下。一

秋上。一　旅•一　戀二•二　戀五。一　雜上•一

〔續後拾〕冬。一　戀四•一　〔新千〕春上。一　春下

•二　夏•一　戀四。一　雜中•一　〔新拾〕春下•一

冬。一　雜中。一　〔新後拾〕雜秋。一　〔新續古〕戀

三。一

有房　四位左中將。大藏卿源師行男　〔新勅〕戀一•一　雜三•一　四位

有房　五位齋院長官。神祇伯源顯仲男　〔千載〕春下•一　戀一•一

戀五•一　〔新續古〕戀二•一　雜上•一

【有　九畫—十六畫】

有信　四位右中辨。式部大輔藤原實綱男。至承德三年　〔詞花〕雜下•一　四位

〔千載〕哀。一　〔續詞花〕哀•一

有貞　五位淡路守。式部大輔藤原實綱男　〔金葉〕別•一

有時　五位左馬介。左少將藤原恒興男　〔拾遺〕戀五•二

有商　六位左衞門尉。伊豫守藤原貴重男　〔續千〕旅•一　〔新續古〕戀

三•一

有家 從三位。刑部卿藤原重家男 〔千載〕雜中・一四位 〔新古〕春上・三 夏・一 秋上・一 冬・二 旅・二 戀二・一 戀四・四 雜上・二 雜中・三 〔新勅〕冬・一 戀三・一 戀五・一 雜四・一大藏卿 〔續後撰〕秋上・一 秋下・一 賀・一 〔續古〕春上・一 釋・一 戀一・一 戀三・一 戀四・一 雜中・一 雜下・一 〔續拾〕賀・一 戀二・一 神・一 〔新後撰〕春下・一 秋下・一 戀一・三 〔玉葉〕春上・二 秋上・三 冬・二 〔續千〕賀・一 〔續後拾〕春上・一 夏・一 秋下・一 〔風雅〕戀二・一 雜中・一 〔新千〕秋下・二 〔新拾〕秋下・一 冬・一 旅・一 戀二・一 〔新後拾〕秋上・一 秋下・一 戀五・一 〔新續古〕秋下・二 賀・一 旅・一大藏卿

有馬皇子 孝德帝皇子 (一一三一八) 〔萬葉〕卷二・二 〔古今和歌六帖〕

有常 四位雅樂頭。刑部卿正四位下名虎男。貞觀十九年正月廿三日 〔古今〕旅・一五位 〔新古〕雜上・一四位

有基 五位大隅守。神主津守國基男。至永久六年 〔千載〕旅・一 〔新古〕神・一 〔續詞花〕神・一

有教 從三位。從三位源有通男 〔新勅〕雜四・一四位 〔續後撰〕雜上・一 雜下・一兵部卿 〔續古〕戀四・一 〔續拾〕旅・二大藏卿 〔新後撰〕戀一・一兵部卿 〔玉葉〕春下・一

有範 正三位。從二位藤原藤範男 〔風雅〕旅・一四位 〔新千〕雜下・一從三位 〔新拾〕雜中・一正四位

有親 五位内匠頭。伊豫守藤原定尹男。至長保三年 〔後拾〕戀四・一

光之 四位。右京大夫惟宗光吉男 〔新千〕冬・一 戀一・一 四位 〔新後拾〕秋下・一

光正 五位今峯駿河守。彈正少弼源頼遠男 〔新千〕戀二・一 〔新拾〕雜中・一 〔新後拾〕雜春・一 雜下・一 〔新續古〕夏・一 旅・一 戀一・一 雜中・一

光任 前大納言。右中辨從三位藤光方男(系圖云光任本名光雄也) 〔新葉〕春上・一 春下・一 夏・三 秋下・一 冬・一 戀一・一 戀三・四 雜上・二 雜中・二 雜下・一 哀・一

光西 法師 〔續後撰〕雜上・一

光吉 四位右京大夫。惟宗 〔續古〕旅・一 戀一・一 五位 〔續後拾〕冬・一 戀二・一 〔風雅〕雜上・二 四位 〔新千〕秋上・一 戀一・一 雜上・一 雜中・一 〔新拾〕秋上・一 戀三・一 神・一 〔新後拾〕夏・一 戀・一 雜下・一 〔新續古〕賀・一 釋・一 戀三・一

光有 前大納言。今上第二御子御乳父 新葉歌詞云 〔新葉〕春上・一 春下・一 秋上・二 冬・一 戀三・二 雜上・一 賀・一

光行 五位河内守。豐前守源光季男。治安三十一三任大膳進。建暦三四・七任大監物。水源抄作者 〔千載〕冬・一 戀二・一 戀三・一 〔新古〕雜上・一 〔新勅〕雜一・二 雜二・一 〔續後撰〕雜中・一 〔續古〕雜中・一 〔續拾〕雜春・一 〔新後撰〕雜上・一 〔玉葉〕春下・一 〔續後拾〕雜下・一 〔風雅〕秋下・一 〔新千〕雜下・二 〔新拾〕冬・一 戀三・一 〔新後拾〕雜下・一 〔新續古〕雜上・一

光孝天皇 諱時康。號小松帝。仁明帝三御子(一四九一―一五四七) 〔古今〕春上・一 御子の御時 賀・一 仁和御時 〔新古〕戀五・三 光孝御時 〔新勅〕春下・一 戀五・二 〔續後撰〕戀三・一 戀四・

一〔續古〕春上・一〔玉葉〕戀四・一〔續後拾〕戀一・一〔風雅〕戀四・一〔古今和歌六帖〕

光成　從三位。大貳藤原光俊男　〔續後撰〕雜中・一 四位〔續拾〕秋上・一 旅・一 戀九・一 雜上・一 雜下・一 從三位〔新後撰〕釋・一 戀三・一〔續千〕戀九・一

光成　六位。越後守源致忠男　〔後拾〕別・一

光忠　正二位大納言。六條内大臣源有房男　〔續千〕戀三・一 源忠光朝臣〔新千〕冬・一 彈正尹

光房　五位大原野神主。神主猶秀房男　〔風雅〕神・一

光明后宮　聖武帝后。孝謙帝國母。不比等公女(一三六一—一四二〇)　〔拾遺〕哀・一

光明峯寺入道前攝政左大臣　道家公に同じ

光明院　諱豐仁。後伏見帝三御子　〔風雅〕春上・一 夏・一 秋下・一 冬・一 戀一・一 戀二・一 雜中・一

光明院新宰相　〔風雅〕戀一・一 戀二・一 雜下・一 新宰相

光明臺院入道前關白左大臣　藤師基就。二條兼基男　〔新葉〕秋下・一 雜上・一 賀・一

光圀　德川元祿十三年薨七十三　〔常山詠草〕一〇一六

光俊　四位右大辨。按察使藤原光親男　〔新勅〕夏・一 秋上・一 雜二・二 雜四・一 四位〔續後撰〕春下・一 冬・二 釋・一 戀三・二 戀五・一 雜中・一 雜下・一〔續古〕春上・一 春下・一 夏・二 秋上・二 秋下・二 冬・二 神・一 釋・一 旅・三 戀一・一 戀二・三 戀三・一 雜上・二 雜中・一 雜下・五〔續拾〕春下・二 夏・一 秋下・一 冬・一 雜春・一 雜

秋•二　旅•一　戀二•一　戀四•二　戀九•一　釋•二〔新後撰〕春上•一　春下•一　秋下•一　釋•一　戀一•二　戀三•一　戀六•一　雜上•三　〔玉葉〕秋上•一　戀五•一　雜一•一　雜二•一　釋•一〔續千〕秋下•一　雜體•一　戀二•二　雜上•一〔續後拾〕戀三•一　戀四•一　雜中•一　〔風雅〕雜下•一　賀•一　〔新千〕戀二•一　戀五•一　哀•一〔新拾〕春中•一　雜下•一　〔新後拾〕春上•一　秋下•一　冬•一　雜秋•一　戀九•一　雜下•一　〔新續古〕冬•一　戀三•一　雜五•二

光俊　五位　平　〔新後拾〕戀二•一　〔新續古〕旅•一　戀一•一

【光　十畫—二十畫】

光衆　五位。祝方祖眞吉鴨惟秀男　〔新勅〕雜五•一　名物

光時　五位外山遠江守。彈正少弼源頼遠男　〔新拾〕戀一•一

光庭　五位。右京大夫惟宗光吉男　〔新千〕雜中•一

光淸　石淸水別當法印。法印願淸子　〔金葉〕冬•一

光朝法師母　因幡守橘行平女　〔後拾〕春上•一　戀三•一

光盛　五位。藤原　〔新後撰〕戀三•一

光資　民部卿。參議藤光顯男歟　〔新葉〕春上•一　春下•一　夏•一　秋上•一　秋下•一　戀三•三　雜上•二　雜中•二

光源　叡山法師　〔後拾〕雜六•一　釋歌

光經　五位。藤原　〔新續古〕戀四•一

光實　前左近中將　〔新葉〕秋下•二　戀一•一　賀•一

光福寺前內大臣女　〔風雅〕戀二•一

光範 從二位。文章博士藤原永範男 〔千載〕神・一 四位 〔新古〕賀・一 式部卿

光廣 烏丸。寛永十五年薨六十 耳底記。 〔黃葉集〕

光頼 正二位大納言。中納言藤原顯頼男 〔新勅〕雜一・一 雜三・一 前大納言 〔續後撰〕神・一 〔續古〕戀四・一 〔續拾〕雜下・一 〔新後撰〕別・一 〔玉葉〕賀・一 〔新千〕戀一・一

光濟 醍醐大僧正。大納言賢明子 〔新後拾〕秋下・一 神・一

光嚴院 諱量仁。後伏見帝御子 〔風雅〕春上・二 春中・二 春下・二 夏・一 秋上・二 秋中・一 秋下・一 冬・二 戀一・一 戀二・一 戀三・二 戀四・二 戀五・二 雜上・一 雜中・四 雜下・一 神・三 太上天皇 〔新千〕春上・一 春下・二 夏・一 秋上・四 釋・一 戀一・一 戀三・二 戀五・二 雜上・三 雜中・二 哀・一 法皇御製 〔新拾〕春上・二 春下・一 夏・一 秋上・一 秋下・一 冬・二 戀三・一 戀五・一 雜上・一 雜中・四 〔新後拾〕春上・一 夏・一 雜秋・一 旅・一 雜上・一 雜下・二 光嚴院御製 〔新續古〕夏・一 冬・一

【行　三畫—八畫】

行久 五位。賀茂 〔新續古〕旅・一

行尹 從三位。從二位藤原經尹男 〔風雅〕雜中・一 從三位 〔新千〕雜上・一

行氏 四位。禰宜祝部行言男 〔新後撰〕神・一 〔續千〕神・一 雜上・一 雜下・一 〔續後拾〕雜下・一 神・一 〔新千〕戀二・一 雜中・一 哀・一 〔新拾〕夏・一

神・一 〔新後拾〕秋上・一

行氏 六位東中務丞。平胤行男 〔續拾〕旅・一 戀二・一 戀三・一 〔新後撰〕夏・一 秋上・一 戀四・一 戀五・二 雜下・二 〔續千〕戀二・一 戀四・一 雜上・二 雜中・一 〔續後拾〕雜下・一 〔新千〕戀五・一 雜上・一 哀・一 〔新拾〕旅・一 戀一・一 神・一 〔新後拾〕雜春・一 戀二・一 〔新續古〕秋上・一 戀二・一 雜下・一

行文 消奈 〔萬葉〕卷一六・一

行文 從三位 〔新續古〕雜上・一 雜中・一從三位

行元 五位長井。大江 〔新千〕戀五・一

行生 俗名左衛門尉基行。齋藤大學助藤原基種子 〔新後撰〕雜中・一 〔玉葉〕雜一・一

行冬 四位。惟宗 〔新拾〕雜中・一五位 〔新後拾〕戀三・一 〔新續古〕雜中・一四位

行平 正三位中納言。阿保親王御子。仁和二十二四行幸五年四十三敍任寛平五薨七十也 〔古今〕春上・一 別・一 雜上・一 雜下・一在原行平朝臣 〔後撰〕戀三・一 雜一・三 〔新古〕雜中・一中納言 〔續古〕旅・一 此歌壬生忠見家集に侍る源氏に行平のうたとなんあるにもとつきて撰入しにや 〔玉葉〕旅・一 〔古今和歌六帖〕

行成 正二位大納言。少將藤原義孝男(一六三二—一六八七)世尊寺家の祖 〔後拾〕哀・一大納言 〔新勅〕釋・一權大納言 〔續古〕夏・一 哀・一 〔玉葉〕賀・一 釋・一 〔風雅〕釋・一 〔新千〕哀・一 〔新拾〕賀・一

行政 五位。筑後守惟宗行貞男 〔續千〕雜中・一

行治 度會。盛行三男 〔新葉〕戀四・一

行直 五位。〔新後拾〕戀二・一
囮部

行念 俗名相摸二郎時村。修理大夫平時房子 〔新勅〕雜一・二 雜二・一 雜三・一〔續後撰〕冬・一 戀五・一〔續古〕秋下・二 旅・一〔續拾〕戀三・一〔新後撰〕秋下・一 戀九・一〔玉葉〕雜一・一〔續千〕秋上・一〔續後拾〕雜下・一〔新千〕戀三・一

行長 五位。紀 〔新續古〕雜上・一

行宗 從三位。參議源基平男 〔金葉〕秋・一 別・一 戀上・一 戀下・一 雜上・二 雜下・一 四位 〔詞花〕雜上・一 大藏卿 〔千載〕夏・一 秋上・一〔新古〕秋上・一 別・一 雜上・一〔新勅〕夏・一 秋上・一〔續後撰〕夏・一 秋上・一〔續拾〕旅・一〔新後撰〕雜下・一 賀・一〔玉葉〕雜四・一 釋・二〔風雅〕雜上・一 賀・一〔新千〕秋上・一〔新拾〕戀四・一〔新後拾〕別・一〔續詞花〕夏・一 秋下・三 雜中・一

行房 四位左中將。從二位藤原經尹男 〔玉葉〕冬・一 五位 〔續千〕夏・一 戀一・二 四位 〔續後拾〕秋下・一〔新續古〕秋上・二 秋下・一 戀五・一〔新葉〕旅・二

行明親王 四品上總太守。宇多帝第十御子醍醐帝猶子 〔後撰〕春上・一 雜三・一

行忠 正二位參議。從三位藤原行尹男 〔新千〕雜上・一 從三位 〔新拾〕春下・一 戀三・一 雜中・一 從三位 〔新續古〕春上・一 戀一・二 前參議

行忠 四位。禰宜度會行繼男、度會禰宜是始入也 〔新後撰〕神・一〔續千〕神・一〔新續古〕旅・一

行胤 法眼。法眼行済子 〔續千〕雜上・一 師法 〔續後拾〕戀三・一 法眼 〔新千〕雜下・一

行信 四位右京大夫。左京大夫藤原定兼男 〔風雅〕雜上・一 四位

行俊 從三位參議。參議藤原行忠男 〔新續古〕冬・一 前參議

行春 五位。紀 〔風雅〕雜上・一 〔新千〕戀一・一

行春 五位二階堂左兵衞尉。下野守藤原時元男 〔新千〕戀二・一 〔新拾〕旅・一 哀・一 〔新後拾〕冬・一 雜上・一

行祐 法印 〔新葉〕 雜上・一

行時 五位。平 〔拾遺〕戀二・一

行乘 號澄如 〔續千〕雜下・一 〔新千〕戀三・一 雜中・二 〔新拾〕戀二・一

行能 從三位。法名寂能。皇太后宮亮藤原伊經男 〔新古〕雜下・一 五位 〔新勅〕春下・二 戀二・一 戀四・一 雜一・一 雜二・一 雜四・一 雜五・一 名物 〔續後撰〕春下・一 秋上・一 釋・二 戀一・一 戀二・一 雜上・一 從三畫 〔續古〕夏・一 別・一 旅・一 戀一・一 戀四・一 雜下・一 〔續拾〕春上・一 秋上・一 戀二・一 戀五・一 神・一 〔新後撰〕戀二・一 戀六・一 〔玉葉〕秋下・一 賀・一 旅・一 戀一・一 〔續千〕雜下・一 〔續後拾〕冬・一 〔風雅〕旅・二 〔新千〕雜上・一 〔新拾〕冬・一 賀・一 戀一・一 雜上・一 〔新後拾〕夏・一 〔新續古〕秋上・一 別・一 哀・一 雜下・一

行家 從二位。正三位藤原知家男 〔續後撰〕夏・一 戀三・一 四位 〔續古〕春下・一 夏・三 秋上・一 冬・一 戀一・二 戀二・一 戀三・一 戀四・一 戀五・一 雜上

•一　雜下•一　侍從〔續拾〕春下•四　秋上•一　秋下•二　冬•一　賀•一　戀一•二　戀二•二　戀三•一　戀四•一　戀五•一　神•一　從三位〔新後撰〕春下•一　夏•二　秋上•一　秋下•一　戀四•一　雜中•一　〔玉葉〕秋上•一　旅•一　雜一•二　〔續千〕夏•一　秋上•一　冬•一　戀四•二　〔續後拾〕夏一　旅•一　戀二•二　〔風雅〕春中•一　夏•二　冬•一　雜中•一　〔新千〕夏•一　秋上•二　四•一　賀•一　〔新拾〕夏•一　秋上•一　冬•一　戀四•一　釋•一　雜上•一　雜中•一　雜下•二　〔新後拾〕秋下•一　冬•二　〔新續古〕春上•一　秋下•一　冬•一　戀一•一　戀二•一　雜下•一　〔高陽院歌合〕五

行家　四位左近將監。前日向守　藤原行盛男。至壽永二　〔千載〕秋上•一　四位〔新勅〕賀•一　四位

行家　五位。藤原家經男　〔金葉〕秋•二

行清　法印石清水撿校。別當宗清子　〔續古〕神•一　〔續拾〕雜上•一　神•一

行基　稱菩薩（一三二八—一四二〇）　〔拾遺〕哀•三　大僧正〔新古〕釋•一　〔新勅〕釋•一　〔續後撰〕釋•一　〔玉葉〕釋•一

行基菩薩

行深　法印。法印行任子　〔玉葉〕雜五•一　〔續千〕冬•一　戀三•一　哀•一

行雅　僧正　〔新續古〕神•一

行朝　五位二階堂信濃守。二階堂藤原貞綱男　〔續千〕旅•一　戀三•一　〔續後拾〕戀四•一　〔風雅〕旅•一　〔新千〕冬•一

旅•一　雜上•一〔新後拾〕秋下•一　雜秋•一　別•一

行尊　大僧正。參議基平子（一七一〇—一七九五）〔金葉〕春•一　秋•一　雜上•六　雜下•二〔詞花〕戀下•一　雜下•一〔千載〕別•一〔新古〕春下•一　別•一　旅•一　雜上•一　雜中•一　雜下•五〔新勅〕雜二•一〔續後撰〕雜一•一　旅•一〔續拾〕旅•一〔新後撰〕釋•二　雜上•一〔玉葉〕夏•一　秋上•一　旅•二　雜五•二　神•一〔續千〕雜體•一名物　雜中•一〔續後拾〕雜中•一〔風雅〕戀四•一　雜中•一　釋•一〔新千〕雜下•一　哀•一〔新拾〕別•一〔新後拾〕雜上•一〔續詞花〕春上•一　哀•一　別•一　旅•一　雜中•一　雜下•二

行盛　四位文章博士。讚岐守藤原行家男。至長承三年十一月廿二日卒〔金葉〕秋•一　冬•一　賀•一　五位〔續詞花〕秋上•一

行盛　五位左馬頭。右衞門尉平基盛男〔新勅〕雜二•一〔玉葉〕雜四•一

行義　從三位〔新葉〕秋上•一　秋下•二　冬•一　戀三•一　戀五•一　雜下•二

行詮　五位二階堂信濃守。信濃守藤原行持男〔新後拾〕戀四•一

行遍　仁和寺大僧正。法橋任高子〔新古〕哀•一　戀四•一　雜上•二　雜下•一法橋法

行意　三井寺大僧正山階寺圓頓院。松殿關白基房公子〔新勅〕秋下•一　神•一　雜二•一　雜四•一〔續後撰〕夏•一　神•一　雜上•一　雜中•一　旅•一〔續古〕秋上•一　旅•二　戀一•一　戀三•一　雜上•一　賀•一〔續拾〕

春上・一　戀一・一　〔新後撰〕旅・一　戀一・一
〔續千〕秋上・一　戀一・一　〔續後拾〕戀二・一　〔新千〕秋下・一　冬・一　〔新拾〕秋下・一　〔新後拾〕旅・一　〔新續古〕冬・一

行圓　行顯寺開基卓上人　〔玉葉〕雜三・一　釋・一

行圓　松葉法師俗名丹波守藤原行宗、二階堂彈正忠藤原行忠子　〔續後撰〕雜下・一　〔續拾〕旅・一　釋・一

行經　五位使下總守。惟宗　〔續後撰〕雜下・一　〔續拾〕雜上・一

行經　法眼　〔新千〕哀・一　法橋　〔新拾〕秋下・一　戀一・一　法眼

【行　十四畫—二十五畫】

行實　四位。備前守中原行範男　〔續古〕雜下・一　五位　〔續拾〕雜秋・一　戀三・一　〔新後撰〕雜下・一　四位

行輔　四位。從三位藤原隆朝男　〔新千〕戀一・一　四位　〔新拾〕夏・一　戀三・一　〔新後拾〕秋上・一　雜上・一

行慶　大僧正。白川院御子　〔千載〕秋下・一　〔新古〕春上・一　〔玉葉〕雜二・一　〔續詞花〕秋下・二　雜上・一

行廣　大僧正　〔玉葉〕春下・一

行賢　法橋。下總守源有通子　〔新勅〕雜二・一

行蓮　俗名惟宗良俊　〔新後撰〕戀五・一　〔續千〕雜下・一　〔新千〕哀・一　〔新拾〕戀四・一

行廣　四位兵部少輔。大中臣　〔新拾〕雜三・一　四位　〔新後拾〕雜秋・二

行範　五位。惟宗　〔新續古〕雜中・一

行範　五位使備中守。壹岐守中原行兼男　〔新後撰〕雜下・一　〔續拾〕雜春・一　戀五・一

行親 四位日吉。祝部 〔續千〕雜上・一 〔續後拾〕戀二・一 〔新千〕夏・一 雜上・二 〔新拾〕旅・一 神・一 〔新後拾〕戀四・一

行賴 四位太皇太后宮大夫。伊賀守源光行男。至治承三年四位 〔千載〕夏・一

行類 五位。左少辨橘爲正男 〔拾遺〕冬・一

行顯 五位。紀 〔新續古〕神・一

行濟 法眼。法眼覺宗子 〔續拾〕戀三・一 〔新後撰〕戀四・一 雜下・二 〔續千〕夏・一 戀四・一 戀五・一 雜上・二 雜中・一 〔續後拾〕秋下・一 戀二・一 雜中・一 〔新千〕夏・一 旅・一 釋・一 哀・二 〔新拾〕秋下・一 哀・一 〔新後拾〕冬・一

行藤 五位。藤原行有男 〔玉葉〕秋上・一 雜一・一

行藤 五位。祝部 〔新後拾〕戀一・一

行顯 法印 〔新千〕雜上・一 〔新拾〕雜中・一

行觀 法師 〔續千〕雜上・一 〔新續古〕雜上・一

七畫

臣 六畫を見よ

坂上大孃 〔新拾〕戀四・一 〔萬葉〕卷四・一〇 卷八・一

均子內親王 宇多帝御子 〔古今〕哀・一 閑院五のみこ 〔後撰〕雜四・一 ひとしき子內親王

孚子內親王 宇多院御女 〔後撰〕戀一・一 桂のみこ 〔新勅〕戀四・一

町尻子 〔玉葉〕冬・一

希世 四位左中辨。雅望王御子。至延喜六年 〔後撰〕戀四・一 〔玉葉〕

秋下。一

住吉〔拾遺〕神・一〔新古〕神・三〔玉葉〕神・一

忍男 神人部子〔萬葉〕卷二〇・一

君足 若櫻部〔萬葉〕卷八・一

助信 四位。藤原〔新續古〕別・一 四位

坊城内大臣 實宗公に同じ

伯耆大山〔新古〕釋・一

巫部麻蘇娘子〔萬葉〕卷四・二 卷八・二

佛國 禪師〔風雅〕雜中・一 釋・一〔新續古〕釋・一

吹黃刀自〔萬葉〕卷一・一 卷四・二

扶幹 正二位大納言。駿河守藤原村椙男。天慶元七月薨七十五〔後撰〕春中・一 藤原
扶幹朝臣。大納言以下公卿皆不書官位等名尸許書之此集拾遺如此

【言】

言直 六位因幡權掾。藤原安縄男。昌泰三年任因幡權掾〔古今〕春上・一〔古今和歌六帖〕

言道 大隈。明治元年今橋集、戊午集、歿七十一〔草徑集〕九七一

【男】

男人 字奴〔萬葉〕卷六・一

男梶 紀〔萬葉〕卷一七・一

【更】

更衣源周子 近江更衣。右大臣唱女〔後撰〕秋中・一 近江更衣〔新古〕戀三・一〔玉葉〕戀一・一

更衣源訶子〔玉葉〕戀二・一

【見】

見性 法師〔新後撰〕釋・一〔古今和歌六帖〕

見佛 上人松島住僧〔新後撰〕釋・一

【戒】

戒仙〔後撰〕戀三・一　戀六・一　哀・一　〔新後拾〕雜中・一　〔古今和歌六帖〕

戒秀 清原元輔子 〔拾遺〕別・一　〔詞花〕春・一　〔續後撰〕秋中・一

【但】

但馬〔續詞花〕秋下・一

但馬皇女 天武帝皇女 (一一三六八)〔萬葉〕卷二・三　卷八・一　〔古今和歌六帖〕

【身】

身人部王 (一一三八五)〔萬葉〕卷一・一

身麿 若倭部 〔萬葉〕卷二〇・一

【利】

利行 五位。左衞門尉藤原基行男 〔玉葉〕雜四・一　〔續千〕戀三・一　雜中・一

利春 五位甲斐守。高向 〔古今〕物名・一

利貞 五位阿波守。藏人紀貞守男。元慶五年卒 〔古今〕夏・一　別・二　物名・一

【快】

快修 比叡山天台座主妙法院大僧正。中納言俊忠子 〔千載〕釋・一

快雅 比叡山大僧正 〔續古〕釋・一

快覺 三井寺阿闍梨。中宮大進藤原俊相子 〔後拾〕冬・一

【赤】

赤人 山邊 〔拾遺〕春・一　戀三・二　〔新古〕春上・二　春下・二　秋上・一　冬・二　追春下・一　〔新勅〕春上・一　春下・一　〔續後撰〕秋上・一　戀四・一

雜上。一　雜中•一　〔續古〕春上。二　春下。一　夏•一　秋上。二　旅•一　戀一•一　雜中•一　〔玉葉〕春上。一　春下。一　秋下•一　旅•二　戀二•一　雜三。一　〔續千〕秋上•一　雜體。二長歌一反歌一　〔續後拾〕秋上。一　戀三。一　〔新千〕春上。一　戀三•一　戀四•一　〔新拾〕春上•二　夏。一　秋上。一　長•一　〔新後拾〕春上。一　夏•一　〔新續古〕戀九。一　〔萬葉〕卷三。二九　卷八•六　卷一七•一　長歌卷三。五　卷六•八　〔古今和歌六帖〕〔三十六人集〕二四三　長歌三　旋頭一

赤染衞門　上東門院女房。平兼盛女　〔赤染衞門集〕五八五　〔拾遺〕別。一　〔後拾〕春上•二　夏•二　秋上•二　秋下•二　冬•一　賀•二　別•一　旅•一　哀•二　戀一•二　戀二。四　雜一•一　雜二•一　雜三。二　雜四。五　雜五。一　雜六。三釋二。誹諧一　〔詞花〕春•一　秋。二　賀•一　戀下•一　雜上。二　雜下。二　〔千載〕春下•一　旅•一　哀•一　戀五•一　雜上•一　雜下。一誹諧　〔新古〕旅•一　戀三•一　戀五。一　雜上。二　雜中。一　雜下。三　釋。一　〔新勅〕戀五。一　〔續後撰〕夏。一　釋。一　戀五•二　雜上•一　雜下。一　〔續古〕秋下•一　釋•一　雜下•一　〔續拾〕春下。一　戀四•一　雜中。一　釋。一　〔玉葉〕春下。一　雜一•一　雜二•一　雜四•一　雜五•一　釋•一　〔續千〕夏•一　雜上•一　〔續後拾〕戀二。一　哀。一　〔風雅〕春上。一　雜上。一　雜下•一　釋。二　〔新千〕雜上•一　〔新拾〕冬•一　哀。一　戀二

・二 戀三・一 釋・一 〔新後拾〕釋・一 〔續詞花〕
冬・一 戀上・一 戀下・二 旅・二 雜中・三 雜
下・一 戲・一

赤麿 佐伯 〔萬葉〕卷三・一 卷四・二

【村】

村上 大伴 〔萬葉〕卷八・一 卷二〇・四

村上天皇 諱成明。延喜帝御子（一五八六—一六二七） 〔後撰〕賀・二今上御製
〔拾遺〕別・三 雜上・一 雜下・一 戀三・一御製
戀四・一 戀五・一 雜秋・二 雜賀・二連歌 雜戀・
一 哀・三天曆御製 〔新古〕春下・一 秋下・一 戀四・
三 戀五・三 雜下・二御歌 〔新勅〕秋下・一 戀五
・一御製 〔續後撰〕春下・一 戀四・二 雜下・一 旅
・一 賀・二 〔續古〕夏・一 別・一 戀二・二 戀

三・一 哀・一 雜上・一御製 〔玉葉〕秋上・一 戀一・
一 戀二・一 戀三・二 戀四・二 雜上・二 〔續後
拾〕戀三・一 〔新千〕春上・一 戀四・一 哀・一 〔新
拾〕雜中・一 〔新後拾〕 戀一・一 〔新續古〕夏・一

村基 法印 〔新拾〕戀二・一 〔新續古〕戀二・一

【兵衞】

兵衞 藤原忠房家人。右兵衞督藤原高經女 〔古今〕物名・一 戀五・一
兵衞 參議兼茂女 〔後撰〕戀六・一 〔拾遺〕雜戀・一
〔續詞花〕春下・一 夏・一 賀・一 哀・二 雜下・

兵衞內侍 〔後拾〕雜二・一 〔新千〕戀四・一

兵衞姫君 左衞門佐源良家女 〔後拾〕雜二・一

【冷泉】

冷泉太政大臣　公相公に同じ

冷泉院　諱憲平。天暦帝御子　〔詞花〕雜上・一 冷泉院御製　〔新古〕雜上・一　〔新千〕冬・一　〔新續古〕別・一

冷泉入道前右大臣　公泰に同じ。洞院左大臣實泰公三男。爲後宇多院御養子

冷泉院太皇太后宮　勸子。大二條教通公女　〔新古〕雜下・一　〔新勅〕釋・一

【沙】

沙美麿　安倍　〔萬葉〕卷二〇・一

沙彌　三方　〔玉葉〕戀一・一　〔萬葉〕卷二・二　卷四・一　卷八・一　卷一九・一　長歌卷一九・一

沙彌女王　〔萬葉〕卷九・一

沙彌滿誓　〔萬葉〕卷三・四　卷四・二　卷五・一　〔古今和歌六帖〕

【志】

志加麿　刑部　〔萬葉〕卷二〇・一

志貴皇子　田原天皇に同じ

志斐嫗　〔萬葉〕卷三・一

志遠　上人。岬川習修坊。光成入道明教子　〔新後撰〕旅・一

【宋】

宋助　僧正　〔新後拾〕雜下・一

宋性　前權僧正東大　〔續古〕釋・一

宋尋　法印　〔新千〕釋・一

宋緣　僧正新熊野修行　〔新千〕雜中・一 權大僧都　〔新後拾〕戀一・一　〔新續古〕賀・一　釋・一　哀・一　雜上・一 僧正

宋親　法印　〔新千〕雜中・一 權大僧都　〔新後拾〕雜秋・一　〔新續古〕旅・一 法印

【邦】

邦正 四位左京大夫。源重明親王御子 〔拾遺〕戀一・一 五位

邦世親王 三品式部卿。邦良親王御子 〔新千〕雜中・一 〔新拾〕秋上・一 戀一・一

邦長 四位左馬頭。右馬頭源兼康男 〔新後撰〕冬・一 釋・一 雜下・一 四位 〔玉葉〕雜上・一 戀四・一 〔續後拾〕冬・一 戀二・一 戀三・一 〔續千〕春下・一 夏・一 秋下・一 雜一・一 戀四・一 〔風雅〕雜下・一 〔新千〕夏・一 釋・一 雜中・一 〔新拾〕哀・一 〔新後拾〕春下・一

邦祐 五位。鴨 〔新千〕雜上・一

邦省親王 三品彈正尹。太宰帥。後二條帝御子 〔續千〕春下・一 秋上・一 戀二・一 〔續後拾〕戀四・一 雜下・一 〔風雅〕秋下・一 戀五・一 雜下・一 〔新千〕春下・一 秋上・二 冬・一 戀一・一 戀三・一 戀四・一 雜上・一 賀・一 〔新拾〕春下・一 夏・一 秋上・一 秋下・二 戀三・二 雜上・一 雜中・一 〔新後拾〕冬・一 雜春・一 雜秋・一 〔新續古〕春上・一 夏・一 秋下・一 冬・一 旅・一 雜中・二

邦省親王家少將 頓阿法師女 〔新千〕戀二・一 〔新拾〕雜上・一

【妙】

妙光寺内大臣 家賢に同じ。花山院師賢男

妙光寺内大臣母 花山院右大臣藤家定公女 〔新葉〕戀三・一 雜上・三 哀・二

妙光寺内大臣家中納言 〔新葉〕戀二・一 戀四・

二　雜上・一

妙宗　法師　〔新後拾〕哀・一

妙音院太政大臣　師長公に同じ

妙藤　法師　〔新後拾〕雜下。一　〔新續古〕雜上・一

【佐】

佐伯東人の妻　〔萬葉〕卷四・一

佐壯　丸子部　〔萬葉〕卷二〇・一

佐忠　四位勘解由次官。出羽守藤原連茂男。至天祿四年　〔拾遺〕冬・一　四位

佐保左大臣　安麿公に同じ

佐清　六位。左近番長。（イ佐伯清忠）　〔後拾遺〕哀・一

佐經　五位左衞門尉。壹岐守大江爲國男。至康平三年　〔後拾〕秋上・一

【孝】

孝行　五位筑前守。河内守源光行男　〔續後撰〕戀二・一　〔續古〕別・一　〔新千〕戀三・一　〔新後拾〕雜上・一

孝淸　藤原　〔續詞花〕秋下・一

孝善　五位左衞門尉。長門守藤原貞孝男。至寛治二年　〔後拾〕春上・一　冬・二　雜四・二　〔金葉〕夏・二　〔千載〕冬・一　賀・一　〔新古〕雜中・一　〔續詞花〕春上・一　秋下・一

孝朝　五位山田讃岐守。宮内少輔源治久男　〔新千〕戀四・一　〔新拾〕戀三・一

孝謙天皇　（一三七七—一四二七）　〔萬葉〕卷一九・二　長歌卷一九・一

孝繼　五位。藤原　〔續後撰〕雜上・一

【足】

足人　鴨　〔萬葉〕卷三・二　長歌卷三・一

足人　石川　〔萬葉〕卷六・一

足人 丈部 〔萬葉〕卷二〇・一
足人 大田部 〔萬葉〕卷二〇・一
足國 中臣部 〔萬葉〕卷二〇・一
足國 生玉部 〔萬葉〕卷二〇・一
足麿 丈部 〔萬葉〕卷二〇・一

【秀】

秀久 五位。賀茂 〔新續古〕神・一
秀行 五位小串三郎左衛門。藤原 〔續千〕戀五・一 〔續後拾〕戀四・一 〔風雅〕雜上・一 〔新千〕雜下・一 〔玉葉〕秋上・一
秀岳 五位伯耆守。良峯。至寬平八年 〔古今〕別・一
秀房 五位大原野神主。神主狛政副男 〔續千〕神・一 〔續後拾〕戀二・一 〔新千〕雜上・一 雜中・一 〔新續古〕雜上・一 雜下・一
秀長 正二位參議。參議菅長綱男 〔新後拾〕雜秋・一 右大辨 〔新續古〕雜中・一 式部大輔
秀長 五位使河內守。河內守藤原秀弘男 〔新後撰〕雜上・一 〔玉葉〕秋下・一 冬・一 〔續千〕戀二・一 戀三・一 雜下・一 〔續後拾〕冬・一 〔新千〕雜上・二 〔新後拾〕戀五・一
秀茂 五位式部丞。出羽守藤原秀能男 〔續後撰〕雜下・一 〔續古〕秋下・一 旅・一 雜上・一 雜下・一 〔續拾〕雜中・一 〔新後撰〕夏・一 雜下・一 〔玉葉〕雜一・一 雜五・一 〔續千〕雜上・一 〔續後拾〕雜下・一 〔新千〕秋下・一 哀・一 〔新拾〕哀・一 〔新續古〕釋・一 戀一・一 戀二・一 戀五・一 戀六・一 雜

上・一　雜中。一

秀幸　法師　〔新後拾〕雜春・一

秀春　五位京極三河守。左衞門尉源秀宗男　〔新後拾〕旅・一

秀能　如願に同じ。僧部に出づ

秀胤　法師　〔新後拾〕戀四・一

秀經　五位左馬助イ季經。出羽守藤原季時男　〔風雅〕雜下・一　〔新千〕戀三。一　雜上・一

秀雅　律師　〔新後拾〕戀二・一

秀賢　五位上野介。河内守藤原秀長男　〔續千〕旅・一　〔續後拾〕雜下・一

秀顯　正二位大納言。左中將藤原實鄕男　〔新續古〕雜上・一　前大納言

【延】

延子内親王家大夫　〔玉葉〕雜五・一

延全　法印　〔風雅〕雜下・一　〔新千〕雜下・一　〔新拾〕神・一　〔新後拾〕雜下・一

延光　正三位大納言。代明親王男　〔拾遺〕秋・一　源延光朝臣　哀・一　大納言　〔續拾〕春上・一　〔新千〕春下・一　〔新拾〕夏・一

延行　四位内宮禰宜。荒木田延成男　〔新後撰〕戀二・一

延成　四位。禰宜荒木田延長男　〔新勅〕神・一　〔續後撰〕戀二・一　雜中・一　〔續古〕神・一　〔續拾〕雜秋・一　神・一　〔新後撰〕神・一

延明門院大夫　〔續千〕冬・一

延季　四位。禰宜荒木田氏良男　〔續後撰〕神・二　〔續古〕冬・一　神・一　〔續拾〕雜秋・一　神・一　〔新拾〕神・一

延忠　四位禰宜。荒木田延季男　〔新後撰〕雜下・一　〔續千〕神・

一　〔新千〕神・一　〔新拾〕旅・一
延政門院一條　〔續千〕雜中・一
延政門院新大納言　大納言為氏女　〔玉葉〕秋下・一　冬・
一　戀一・一　戀二・二　雜四・一　〔風雅〕旅・一
戀四・一　〔新拾〕雜上・一
延眞　僧都東塔西谷常寂院　〔續後撰〕釋・一　〔續詞花〕戀中・一
延朝　五位。中臣　〔新後拾〕神・一
延喜帝　醍醐天皇に同じ
延喜皇后宮大輔　〔續古〕雜上・一
延誠　四位。禰宜度會常方男　〔續千〕雜中・一　〔風雅〕神・一
【良　四畫—十二畫】
良心　法師。左近將監久秋子　〔續拾〕雜下・一　〔新後拾〕雜中・
一　〔新續古〕冬・一

良尹　從三位。侍從藤原良兼男　〔新拾〕戀五・一
良冬　從一位大納言。光明照院藤原兼基男　〔新千〕戀三・一　雜下・一
前大納言　〔新拾〕冬・一　雜中・一
良仙　僧都。惟宗氏部大輔時助子　〔新勅〕雜一・一　〔續後撰〕神・
一　〔續拾〕神・一
良平　從一位醍醐入道前太政大臣後法性寺藤原兼實男　〔新古〕春下・一　秋
上・一　左近中將　〔新勅〕賀・一　前右大臣　〔續後撰〕冬・一　此歌
新後拾冬にあり　〔續古〕春上・一　戀五・一　賀・一　醍醐入道前太
政大臣　〔續拾〕夏・一　戀四・一　戀五・一　〔新後
撰〕春下・一　戀一・一　〔玉葉〕秋下・一　〔續後拾〕
戀二・一　〔新千〕春上・一　〔新拾〕戀三・一　〔新後
拾〕冬・一　〔新續古〕賀・一　戀三・一　戀四・一
良印　法印　〔續古〕戀四・一

良名　六位。物部　〔古今〕雜下・一

良守　三井寺法印。大納言某良子　〔續後撰〕釋・一　〔續古〕旅・一　〔續拾〕釋・一　〔新後撰〕雜上・一　〔玉葉〕神・一

良成　六位。高橋　〔後拾〕戀三・一

良利　五位。橘　〔新古〕旅・一

良宋　權僧正熊野　〔玉葉〕雜一・一　法印　〔續千〕雜中・一　〔續後拾〕雜下・一　〔新千〕雜上・一　雜中・一　前權僧正　〔新後拾〕雜秋・一

良助法親王　青蓮院座主無品。龜山帝御子　〔新後撰〕雜一・一　〔玉葉〕雜四・一　神・一

良空　上人融觀坊。三條内大臣公秀子　〔新千〕哀・一

良奉　猪熊大僧正。參議季遠子　〔新續古〕秋下・一　戀二・一　權大僧都

良香　五位文章博士。主計頭都貞繼男。元慶三年二月五卒卅六（一五〇四―一五三九）　〔古今〕物名・一

良相公　正二位西三條右大臣。閑院藤原冬嗣公男　〔新勅〕哀・一

良珍　法眼　〔續拾〕雜上・一

良信　興福寺一乘院大僧正。關光院基忠公子　〔新後撰〕釋・一　權少僧都　〔玉葉〕冬・一　釋・一　前大僧正　〔續千〕夏・一　釋・二　雜上・一　〔續後拾〕秋上・一　雜中・一　釋・一　〔新千〕神・一　戀四・一　〔新拾〕釋・二

良峯良方女　〔拾遺〕雜賀・一　歌連

良海　大僧正。治部大輔雅光子　〔風雅〕雜中・一

良兼　法印　〔續千〕戀三・一　〔新千〕戀四・一

良兼　五位少外記。大外記清原宗尙男　〔新後拾〕雜春・一

良清　五位太皇太后宮少進。右馬頭藤原範綱男。至仁安三年　〔千載〕冬・一　雜上・二　雜中・一

良清 法印石清水權別當。イ梁清。田中法印々清男 〔新拾〕雜中・一 上・一 春下・一 秋下・一 神・一 戀二・一 戀五・一 雜中・一前關白 〔新拾〕春上・一 春下・一

良通 正二位九條内大臣。後法性寺藤原兼實男 〔千載〕夏・一 秋下・一 冬・一 戀三・一内大臣

良教 從一位大納言。大納言藤原基良男 〔續後撰〕春下・一按察 〔續古〕春下・一 冬・二 戀二・一 雜下・一大納言 〔續拾〕春上・三 雜秋・二 戀四・一 雜上・一 神・一 〔新後撰〕春上・一 夏・一 冬・一 戀二・一 雜中・一 〔玉葉〕秋下・一 〔續千〕春上・一 戀四・一 哀・一前大納言 〔續後拾〕戀四・一 雜上・一 〔新千〕冬・一 〔新拾〕戀一・一

良基 參議太宰大貳。中納言良賴男 〔後拾〕戀三・一

良基公 從一位後普光院攝政前太政大臣。後光明照院藤原道平公男 〔風雅〕秋中・二 冬・一 戀一・二 戀五・一關白右大臣 〔新千〕春上・一 春下・一 秋下・一 神・一 戀二・一 戀五・一 雜中・一前關白 〔新拾〕春上・一 春下・一 夏・一 秋上・一 秋下・一 戀二・一 戀三・二 戀四・一 神・一關白前左大臣 〔新後拾〕春上・二 春下・三 夏・三 秋上・二 秋下・二 冬・二太政大臣 雜春・一 雜秋・三 戀一・二 戀四・一 戀五・一 雜上・三 雜下・二 神・一攝政太政大臣 〔新續古〕春上・二 春下・一 夏・一 秋下・一 賀・一 雜中・二 神・一後福光園攝政前太政大臣

良喜 法師 〔千載〕雜下・一誹諧 〔續詞花〕戲一

良雲 僧都 〔續千〕雜下・一

【良 十三畫―二十畫】

良算 法印。法印慶算子 〔新勅〕賀・一權大僧都 〔續後撰〕秋下

・二 法印
良瑜 三井寺僧正新熊野撿挍、光明照院兼基公〔新千〕神・一〔新拾〕秋
下・一 神・一〔新續古〕冬・一 雜上・一 神・一
良勢 法師〔後拾〕別・一〔續詞花〕雜中・一
良聖 權僧正猪熊、左中將爲道朝臣子〔續後拾〕雜中・一 權少僧都良性〔新
千〕秋下・一 釋・一 賀・一 權僧正良基
良經 四位遠江守。大納言藤原行成男、康平(イ保元)十一七卒〔後拾〕夏・一 四位
良經 從一位後京極攝政前太政大臣。後法性寺藤原兼實公男(一八二九—一八六六)〔月清集〕
一七四四〔千載〕春上・一 春下・一 秋下・一 冬・
一 戀二・一 戀三・一 釋・一 左近中將〔新古〕春上・
五 春下・四 夏・七 秋上・一一 秋下・五 冬・七
賀・四 哀・二 旅・二 戀一・四 戀二・七 戀三・二
戀四・七 雜上・三 雜中・四 雜下・四 神・一
釋・一 攝政太政大臣〔新勅〕春上・三 春下・四 夏・二
秋上・二 秋下・二 冬・二 旅・一 神・二 釋・
三 戀一・一 戀三・四 戀五・二 雜二・三 雜
三・一 雜四・四 前後京極攝政太政大臣〔續後撰〕春上・二 春
中・二 春下・二 夏・三 秋上・一 秋中・三 冬
・三 神・二 釋・一 戀一・二 戀二・一 戀三・
・一 雜上・一 雜中・二 旅・一〔續古〕春上・三
春下・二 夏・三 秋上・一 秋下・一 冬・二 神
・四 釋・二 戀二・一 戀三・一 戀四・一 戀五
・一 雜中・一 雜下・三 賀・二〔續拾〕春上・一
夏・一 秋下・四 冬・三 旅・一 戀一・二 戀五
・二 雜上・二 釋・三 神・一〔新後撰〕春上・二
春下・一 夏・一 秋下・一 冬・二 釋・三 戀六

・一　賀・三　〔玉葉〕春上・一　夏・一　秋下・一
冬・二　戀一・一　戀二・一　雜一・一　雜三・三
雜四・一　釋・一　神・一　〔續千〕春上・四　春下・
一　秋上・一　旅・一　神・一　戀一・一　哀・一
賀・一　〔續後拾〕春上・二　春下・一　夏・一　秋上
・二　秋下・一　賀・一　戀四・一　雜下・一　釋・一
〔風雅〕春上・一　春下・一　夏・四　秋上・二　秋
中・一　秋下・一　戀四・一　雜上・二　雜下・二
賀・二　〔新千〕春上・二　秋上・一　秋下・二　戀一
・一　戀二・一　戀四・一　賀・一　〔新拾〕春上・二
秋上・一　秋下・一　冬・一　釋・一　雜上・一　〔新
後拾〕春上・一　夏・一　秋上・二　秋下・一　旅・一
雜下・一　釋・一　〔新續古〕春上・一　春下・二

夏・一　秋上・二　秋下・三　冬・四　釋・一　旅・二
戀一・一　戀二・一　戀四・二　哀・二　雜上・三
雜中・一　雜下・一

良實公　從一位普光園入道前關白左大臣、光明峯寺藤原道家男　〔新勅〕夏・一　春宮
權大夫　〔續後撰〕春中・一　秋上・一　雜上・一　雜中
・二　前關白左大臣　〔續古〕春上・一　春下・二　秋上・一
冬・一　釋・一　旅・一　戀一・一　戀三・一　哀・二
雜下・一　賀・一　前關白左大臣　〔續拾〕秋上・一　旅・一
戀三・一　雜中・一　雜下・一　普光園入道前關白左大臣　〔新後
撰〕冬・一　旅・一　釋・一　戀二・一　雜中・一
〔玉葉〕戀五・一　雜一・一　雜五・一　神・一　〔續
千〕戀二・一　〔續後拾〕秋上・一　雜下・一　〔風雅〕
春中・一　〔新千〕神・一　〔新拾〕秋上・一　〔新續

古〕戀五・一
良寛　天保二年寂七十五　〔良寛歌集〕一〇〇九　長歌六三
旋頭歌二五
良憲　叡山權僧正。法印證俊子　〔新千〕釋・一　權律師　〔新拾〕戀
一・二　法印　〔新後拾〕雜秋・一　雜下・一　權僧正
良暹　法師　叡山祇園別當　〔後拾〕春上・二　春下・一　夏・一
秋上・四　秋下・一　賀・一　旅・一　戀一・一　雜
一・二　雜三・一　〔金葉〕春・二　戀下・一　雜上・
一　〔詞花〕夏・一　秋・二　雜上・一　雜下・二
〔千載〕雜中・一　〔新古〕春下・一　冬・一　〔續後
撰〕秋下・一　〔續古〕秋下・一　〔續拾〕雜秋・一
〔新千〕雜下・一　誹諧　〔新後拾〕雜下・一　此うた千載雜中にあり
〔續詞花〕春下・一　賀・一　雜上・一　雜中・一

良覺　大僧正。從三位實俊子　〔續古〕釋・一　雜上・一　法印　〔續拾〕
雜上・一　釋・一　〔新後撰〕秋下・一　戀四・一
雜上・一　雜下・一　前大僧正　〔玉葉〕雜一・一　神・一
〔續千〕賀・一　〔新後拾〕雜下・一　〔風雅〕釋・一
〔新千〕釋・一　〔新拾〕釋・一　〔新續古〕秋上・一
良寶　法印　〔續拾〕旅・一

【成】三畫―八畫

成久　四位。禰宜祝部成仲男　〔新後撰〕夏・一　神・一　戀一・一
〔續千〕夏・一　秋下・一　戀二・一　戀三・一　雜
上・一　〔續後拾〕戀三・一　神・一　〔新千〕雜。
冬・一　〔新拾〕夏・一　雜中・一　〔新續古〕雜上・
一　神・一
成方　四位式部大輔。中納言藤原顯時男　〔千載〕夏・一　秋上・一

戀二・一　雜中・一　四位〔新古〕雜上・一　〔新勅〕釋
・一　戀二・一　〔續後撰〕戀五・一　〔新續古〕戀四
・一

成元　五位近江掾。橘。永保元年十一六任近江少掾　〔後拾〕春下・一　〔金
葉〕夏・一　雜下・一　連歌　〔續詞花〕夏・一

成任　五位。神主祝部成村男　〔新千〕戀三・一　〔新拾〕雜上・一

成光　五位宮内少輔。從二位祝部成國男　〔新千〕戀三。一　〔新後拾〕
秋上。一　冬・一　戀二・一　戀三・一　〔新續古〕
秋上・二　戀三・一　戀四・一

成仲　四位。日吉禰宜祝部成實男。至建久二(イ三)　〔詞花〕秋・一　五位〔千載〕
春上・二　夏・二　秋下。一　旅・一　戀一。一　雜
上。一　宿禰　〔新古〕春下・一　哀・一　別・一　雜中・二
祝部　〔新勅〕神。一　〔續後撰〕雜中・一　〔續古〕別・一

〔續拾〕冬・一　〔新後撰〕夏・一　〔玉葉〕春下・一
〔續後拾〕釋・一　〔風雅〕夏・一　雜下・一　賀・一
〔新千〕戀四・一　〔新拾〕冬・一　哀・一　雜中・一
〔新後拾〕雜秋・一　〔新續古〕旅。一　戀三・一　〔續
詞花〕哀・一　戀中・一　雜上。一

成助　五位。神主賀茂成直男。天喜四年十二月九日敍外從五位下行幸賞　〔後拾〕春上
・三　雜一・一　〔金葉〕雜上・一　雜下・一　連歌　〔詞花〕
戀上・一　〔千載〕賀・一　〔新古〕戀三・一　〔玉葉〕戀
五・一　〔新拾〕戀二。一　〔續詞花〕哀・一　戀上・一

成良　四位。禰宜祝部成賢男　〔續拾〕雜上・一　神・一　〔新後
撰〕戀一・一　戀三・一　〔續千〕戀四。一　〔新千〕
戀四・一

成見　五位。多々良　〔新續古〕雜上・一

成長 四位。荒木田　〔新勅〕雜二・一

成宗 五位彈正少弼。藤原　〔新勅〕春上・一　秋上・一　〔續後撰〕戀五・一

成忠 四位兵庫頭。典藥頭丹波定長男　〔新後拾〕雜秋・一　四位

成直 右兵衛督。〔新古〕春上・一　春下・二　夏・一　冬・一　神・一　戀二・二　戀五・二　雜中・一　雜下・一　賀・一

【成　九畫—十二畫】

成保 四位片岡祝部。禰宜賀茂成忠卿男、至應保二年　〔千載〕春上・一　夏・一　秋下・一　冬・一　雜上・一　〔續詞花〕雜下・二

成茂 四位日吉禰宜大藏大輔、禰宜祝部元仲男　〔新古〕冬・一　〔新勅〕夏一　戀二・一　雜一・二　雜四・一　〔續後撰〕春中・一　春下・一　秋中・一　神・二　戀一・一　雜上・一　賀・一　〔續古〕春下・一　神・一　〔續拾〕旅・一　戀四・二　雜下・一　神・一　〔新後撰〕春下・一　秋下・一　神・二　戀一・二　〔續千〕夏・一　旅・二　雜上・一　〔續後拾〕夏・一　秋下・一　〔風雅〕春中・一　冬・一　雜中・一　賀・一　〔新千〕賀・二　哀・一　〔新拾〕冬・一　旅・一　〔新後拾〕夏・一　〔新續古〕春上・一　雜上・一

成胤 五位祝部　〔新續古〕冬・一　戀四・一　雜中・一

成前 五位祝部　〔新續古〕雜中・一

成恩寺關白 經嗣公に同じ

成宴 正三位。藤原俊成卿男　〔千載〕冬・一　戀二・一　四位　〔新千〕春下・一　兵部卿

成兼 五位木工權頭。右馬權頭高階成朝男　〔續千〕戀二・一

成章 從三位。高階業遠男 〔後拾〕雜上・一 大貳

成通 正二位大納言。大納言藤原宗通男 〔金葉〕春・二 夏・一 冬・一 戀上・一 戀下・一 藤原成道朝臣 〔詞花〕戀上・一 雜下・一 大納言 〔千載〕秋上・一 戀一・一 戀四・一 雜中・一 〔新古〕冬・一 〔續古〕哀・一 前大納言 〔新後撰〕雜下・一 大納言 〔玉葉〕戀三・一 〔續後拾〕冬・一 〔風雅〕秋上・一 〔新千〕戀一・一 〔新拾〕別・一 〔新續古〕秋上・一 戀一・一 戀三・一 〔續詞花〕夏・一 秋上・一

成清 法印石清水別當。法印光清子 〔千載〕哀・一 〔新古〕神・一

成清 從二位 〔新拾〕旅・一 從三位

成國 五位播磨守。伊豫介藤原連永男。天曆八年四廿卒 〔後撰〕戀四・一

成國 正二位。祝部成久男 禰宜 〔風雅〕雜上・二 神・一 五位 〔新千〕秋下・一 戀五・一 雜上・二 四位 〔新拾〕秋下・一 戀三・一 神・一 雜上・一 正三位 〔新後拾〕秋上・一 冬・一 〔新續古〕戀二・一 雜上・一 〔古今和歌六帖〕

成景 五位 祝部 〔新拾〕戀一・一 〔新後拾〕戀五・一 雜上・一

成朝 四位。右京大夫高階宗成男 〔新後撰〕戀三・一 五位 〔玉葉〕夏・一 四位 〔續千〕雜上・一

成尋法師母 〔千載〕別・一 〔新古〕別・一 〔新勅〕雜一・一 〔續後撰〕旅・一 〔續後拾〕雜下・一 〔新拾〕別・一 〔新後拾〕釋・一 〔新續古〕別・一

成尋 阿闍梨 〔詞花〕冬・一 〔新古〕哀・一 〔新千〕旅・一 〔續詞花〕哀・一 釋・一

【成　十三畫―十九畫】

成源　叡山權僧正。散位藤原忠賴子　〔續古〕釋・一

成運　叡山法印行全坊　〔續千〕釋・一　〔新千〕釋・二　〔新拾〕神・一

成瑜　僧都　〔續千〕旅・一

成詮　五位祝部　〔新後拾〕雜上・一

成實　從二位。大貳藤原親實男　〔新勅〕冬・二　神・一兵部卿　〔續後撰〕春中・一　秋下・一　戀二・一　雜中・一　賀・一正三位　〔續古〕夏・一　秋下・一　戀二・一　雜上・一　雜中・一從二位　〔續拾〕春下・一　雜春・一　〔玉葉〕戀四・一　雜一・一　〔續千〕戀五・一　〔續後拾〕雜中・一　〔風雅〕春下・一　夏・一兵部卿　〔新千〕春下・一從二位　〔新續古〕秋上・一　戀二・一　戀四・二　戀五・一正三位

成實　五位。神主祝部成村男　〔風雅〕雜上・一

成實　四位源　〔新拾〕雜中・一四位

成範　正二位中納言。少納言藤原通憲男　〔千載〕哀・一　戀二・二　戀四・一民部卿　〔新古〕旅・一　〔新勅〕戀四・一　〔續古〕春下・一　〔續拾〕旅・一　〔新後撰〕戀二・一　〔玉葉〕戀三・一　〔續後拾〕別・一　〔風雅〕雜下・二　〔續詞花〕雜中・一

成廣　五位祝部　〔新後拾〕雜春・一

成賢　東醍醐權僧正遍聖院醍醐座主。中納言成範子　〔續千〕釋・一

成賢　四位大藏大輔。禰宜祝部成茂男　〔續後撰〕戀四・一　〔續古〕冬・二　雜上・二　〔續拾〕秋下・一　旅・一　〔新後撰〕釋・一　神・一　〔玉葉〕戀一・二　〔續千〕夏・一

戀一・一〔續後拾〕戀二・一〔新千〕秋下・一〔新續古〕雜上・一

成親 六位鳥羽院所衆。藤井 〔千載〕戀三・一〔新葉〕戀三・一〔續詞花〕戀中・一

成賴 正二位參議。中納言藤原顯賴男 〔新勅〕雜一・一 參議

成繁 四位。刑部少輔祝部成實男 〔新千〕神・一〔新拾〕神・一〔新後拾〕神・一

成豐 五位。祝部 〔新拾〕神・一〔新後拾〕雜秋・一 戀三・一

成藤 五位二階堂安藝守。備中守藤原時藤男 〔風雅〕雜上・一〔新拾〕雜中・一

成藤 五位。祝部 〔新拾〕戀三・一

八畫

枝直 加藤 〔あづま歌〕一〇二八 長歌四 旋頭一〇

欣子內親王 後醍醐帝御女 〔續後拾〕戀一・一〔風雅〕雜下・二〔新千〕釋・一〔新拾〕釋・一〔新續古〕秋上・一 秋下・一 冬・二

押小路內大臣 公茂公に同じ

彼方 村方 〔萬葉〕卷五・一

柿本人麿の妻 〔萬葉〕卷四・一

事主 小田 〔萬葉〕卷三・一〔古今和歌六帖〕

昇 正三位大納言。河原左大臣源融男。延喜十八年薨 〔後撰〕雜三・一 源昇朝臣 〔新勅〕旅・一 大納言 〔古今和歌六帖〕

念阿 法師 〔續千〕雜上・一〔新續古〕雜上・一

和泉式部　上東門院女房。越前守大江雅致朝臣女　〔和泉式部集〕一八三六〔同續集〕六四七〔拾遺〕哀・一　雅致女式部〔後拾〕春上・八　春下・二　夏・一　秋上・四　冬・二　旅・一　哀・五　戀一・二　戀二・四　戀三・五　戀四・一〇　雜一・一三　雜三・四　雜四・一　雜五・一　雜六・四　神一。誹諧三〔金葉〕雜上・二　雜下・三〔詞花〕秋・二　冬・一　別・一　戀下・五　雜上・六　雜下・一〔千載〕春上・二　夏・一　秋上・一　冬・一　別・二　旅・一　哀・一　戀四・四　戀五・四　雜上・二　雜中・二　雜下・一〔新古〕秋上・二　冬・三　哀・三　戀一・二　戀三・二　戀五・二　雜上・三　雜中・二　雜下・七〔新勅〕春下・一　旅・一　戀一・一　戀三・二　戀四・四　戀五・一　雜二・三　雜四・一

〔續後撰〕春中・一　夏・一　秋上・一　秋下・一　冬・一　戀一・一　戀三・三　戀四・一　戀五・三　雜下・一〔續古〕夏・一　戀一・一　雜下・一〔續拾〕夏・一　雜春・一　戀二・一　戀三・一　雜下・二〔新後撰〕春上・一　秋上・一　戀一・二　戀五・五　戀三・四〔玉葉〕戀四・四　戀五・五　雜一・五　雜二・一　雜四・三　雜五・一〔續千〕春上・一　夏・二　雜體・一　戀三・二　戀五・一〔續後拾〕春下・一　物・二　戀二・一　哀・一　釋・一〔風雅〕春上・一　秋中・一　戀二・一　戀四・二　雜上・二〔新千〕秋上・一　別・一　釋・一　戀三・一〔新拾〕夏・一　戀二・一　戀五・一　釋・一〔新後拾〕春下・一　夏・一　旅・一　戀二・一〔新續古〕旅・一　哀・一

〔續詞花〕秋上・一　秋下・一　戀中・四　戀下・四
別・一　雜中・一　雜下・一

使首　調　〔萬葉〕卷一三・四

雨宮　〔續古〕神・一

垂麿　刑部　〔萬葉〕卷三・二

兒部女王　〔萬葉〕卷一六・一

物部刀自賣　〔萬葉〕卷二〇・一

門部王　〔萬葉〕卷三・三　卷四・一　卷六・一

松殿攝政關白　基房公に同じ

青蓮花院內大臣　實雄公に同じ

岩藏姬君　〔續千〕雜下・一

波羅門僧正　〔拾遺〕哀・一

【服】

服部於田　〔萬葉〕卷二〇・一

服部呰女　〔萬葉〕卷二〇・一

【命】

命婦乳母　陽明門院御乳母 加賀介源兼隆女　〔後撰〕哀・一

命婦清子　〔後撰〕賀・一

【和】

和氏　五位細川阿波守 細川八郎源公頼男　〔風雅〕戀二・一　〔新千〕釋
・一　神・一　雜中・一　〔新拾〕戀四・一　〔新後拾〕
雜秋・一　戀二・一　〔新續古〕戀三・一　雜上・一
雜中・一

和義　正五位石橋左衛門佐。吉田源義博男　〔風雅〕雜上・一　五位　〔新千〕戀
二・一　戀五・一　四位　〔新拾〕戀四・一　神・一　雜上。
一　雜中・一　〔新後拾〕秋下・一　雜秋・一　戀三・一

【治】

治方　五位少納言。武藏守藤原經邦男。至承平　〔後撰〕戀二・一

治仁王　榮仁親王御子　〔新續古〕戀三・一

【杲】

杲守　石山寺大僧正。中園相國公賢子　〔新千〕雜中・一　法印　〔新拾〕秋下・一　旅・一　戀四・一　權僧正　〔新後拾〕夏・一　雜秋・一　雜下・一　〔新續古〕春下・一　夏・一　秋上・二　釋・一　旅・一　戀二・三　戀五・一　哀・一　雜中・一　神・一

杲尊法親王　〔新葉〕冬・一　雜中・一　賀・一

【宜】

宜　吉田　〔萬葉〕卷五・四

宜秋門院丹後　源藏人頼行女　〔千載〕戀四・一　雜中・一　釋・一　攝政家丹後　〔新古〕秋上・一　冬・一　旅・三　戀四・一　雜上・一　雜中・一　雜下・一　宜秋門院丹後　〔新勅〕春上・一　秋上・一　冬・一　戀一・二　戀四・一　〔續後撰〕神・一　旅・一　〔續古〕春下・二　〔續拾〕冬・一　戀二・一　〔新後撰〕夏・一　秋上・一　戀一・一　戀四・一　〔玉葉〕夏・一　旅・一　戀三・一　雜三・一　雜五・一　〔續千〕春上・一　戀二・一　〔續後拾〕冬・一　雜上・一　〔新千〕春下・一　冬・一　〔新拾〕春下・一　旅・一　〔新後拾〕戀四・一　〔新續古〕賀・二　戀二・二

【芬】

芬陀利花院前關白　內經公に同じ

芬陀利花院前關白內大臣家新少將　法印長舜女　〔續

千〕夏・一 〔新千〕戀四・一

【肥】

肥人（ウマビト） 田氏 〔萬葉〕卷五・一

肥後 〔新古〕〔續詞花〕京極關白家肥後に同じ

【侍】

侍從乳母 〔千載〕秋上・一 〔續古〕秋上・一 〔續後拾〕秋上・一

侍從具定母 皇太后宮大夫俊成女に同じ

【依】

依子內親王 宇多帝御女 〔後撰〕戀四・一 戀六・一 女五

依平 石川。安政六年歿六十九 〔御園詠草〕五六八 長歌七

このみ

依羅娘子 〔萬葉〕卷二・三

【舍】

舍年吉年 〔萬葉〕卷二・一 卷四・一

舍人皇子 天武帝子（一三三六―一三九五） 〔萬葉〕卷二・一 卷九・二 卷二〇・一 〔古今和歌六帖〕

舍人娘子 〔萬葉〕卷一・一 卷二・一 卷八・一

【奈】

奈氐麿 巨勢 〔萬葉〕卷一九・一

奈良麿 橘 〔萬葉〕卷六・一 卷八・二

奈杼麿 安宿 〔萬葉〕卷二〇・一

【周】

周防內侍 白川院女房。周防守平繼仲女 〔後拾〕哀・一 戀三・一 雜一・一 雜三・一 〔金葉〕賀・一 戀下・一 雜上・一 〔詞花〕夏・一 秋・一 雜上・一 〔千載〕春下

一　雜上・一　〔新古〕夏・一　哀・一　雜下・三　神・一　〔新勅〕春下・一　賀・一　戀四・一　〔續後撰〕秋中・一　〔續拾〕冬・一　戀四・一　神・一　〔玉葉〕夏・三　〔續後拾〕哀・一　〔新千〕冬・一　賀・一　〔新拾〕釋・一　〔新後拾〕雜秋・一　雜下・一　〔新續古〕別・一　雜上・一　〔高陽院歌合〕五

周齊　五位門眞少外記。作　〔新拾〕春二・一　〔新後拾〕冬・一　戀二・一　戀四・一　〔新續古〕雜上・一

周嗣　禪僧　〔新千〕雜中・一

【昌】

昌家　正三位參議。參議藤原家綱男　〔新後拾〕雜秋・一　五位

昌義　法師　〔新千〕釋・一　〔新拾〕戀三・一　〔新後拾〕雜上・一

昌算　法印　〔新後拾〕雜下・一

【武】

武長自　中臣　〔萬葉〕卷八・一

武忠　六位大膳。神主　〔金葉〕雜上・一

武隈尼　〔玉葉〕釋・一

武藏　〔後撰〕雜二・一　大和物かたりに若狹の子とあり

【空】

空人　空仁に同じ

空也上人　〔拾遺〕哀・一　〔千載〕雜下・一　誹諧　〔新勅〕釋・一

空仁　法師。大中臣少副定長子　〔千載〕戀四・一　雜中・三　雜下・一　誹諧。空人法師　〔新後撰〕雜上・一

空曉　法師　〔新拾〕戀五・一

【金】

金光院入道右大臣　家定公に同じ

金性　法師　〔玉葉〕雜四・一　〔風雅〕雜下・一

金村　笠　〔玉葉〕秋上・一　旅・一　〔萬葉〕卷二・三
卷三・四　卷四・四　卷六・二　卷八・四　卷九・
三　長歌卷二・一　卷三・一　卷四・二　卷六・四
卷八・一　卷九・二　〔古今和歌六帖〕

金岡　笠　〔拾遺〕別・一

【岡】

岡本關白　家平公に同じ

岡麿　犬養　〔萬葉〕卷六・一

岡屋入道前攝政家民部卿　〔新續古〕秋上・一

岡屋攝政關白　兼經公に同じ

【阿】

阿一　上人　〔玉葉〕雜三・一　〔風雅〕雜中・一

阿閇皇女　〔萬葉〕卷一・一

阿部郎女　〔萬葉〕卷三・一　卷四・四

阿部繼麿の二男　〔萬葉〕卷一五・一

【枇】

枇杷左大臣　仲平公に同じ

枇杷皇太后宮　三條院后姸子陽明門院母后。法成寺道長公女（一六五三—一六八七）
〔古新〕別・一　雜下・一　〔續後撰〕秋下・一　〔續
古〕冬・一　〔新千〕哀・一　賀・一　〔新後拾〕夏・一
〔續詞花〕別・一

枇杷皇太后宮少將　〔玉葉〕雜四・一

枇杷皇太后宮御匣　〔玉葉〕雜四・一

【幸】

幸子内親王　新葉集歌詞書ニ侍野宮云々　〔新葉〕春上・一　秋上・一　秋下・一　旅・一　戀四・一　雜上・一

幸文　木下。文政四年歿。六十三　〔亮々遺稿〕一五五一　長歌三

幸平　四位。神主賀茂家平男。至元久元年　〔新古〕神・一　〔續後撰〕雜上・一　〔玉葉〕雜一・一

幸清　石清水別當法印。法印成清子　〔新古〕冬・一　雜上・一　〔新勅〕旅・一　戀三・一　戀四・一　〔續後撰〕秋中・一　〔新千〕秋下・一　〔新拾〕神・一　〔新續古〕夏・一　雜下・一

幸圓　律師　〔新後拾〕釋・一

【河】

河原左大臣　融に同じ

河島皇子　天智帝御子（一三一七―一三五一）　〔新古〕雜中・一　河島皇子　〔萬葉〕卷一・一

【河内】

河内　高丘　〔萬葉〕卷六・二

河内　〔續詞花〕神・一

河内女王　〔萬葉〕卷一八・一

河内百枝娘子　〔萬葉〕卷四・二

【京】

京月　清水寺僧　〔續拾〕雜春・一

【京極】

京極　大納言基良女　〔新後撰〕冬・一　戀五・一

京極入道前關白太政大臣　師實公に同じ

京極院内侍　中納言賴資女　〔續古〕戀一・一　皇后宮内侍　〔續拾〕

冬•一　戀三•一 京極院内侍
京極御息所 褒子。本院時平公女 〔後撰〕哀•一
京極贈左大臣 〔新葉〕秋下•一　戀五•一　雜上•一
京極關白家肥後 肥後守藤原實成女 〔金葉〕春•一　秋•二
冬•二　賀•一　戀上•一　雜下•一 皇后宮肥後 〔詞花〕
春•一　雜下•一 太皇太后宮肥後 〔千載〕春下•一　秋上•
一　秋下•一　冬•一　賀•一　戀一•一　雜中•一
雜下•一 物名。二條太皇太后宮肥後 〔新古〕旅•一　戀四•一　雜
上•一　釋•二 肥後 〔新勅〕春上•一　秋下•一　戀三
•二　雜一•一 京極關白家肥後 〔續後撰〕釋•一　戀一•一
戀二•一　戀四•二　雜中•一　旅•一 〔續拾〕春上
•一　春下•一　神•一 〔玉葉〕冬•一　旅•一　戀
三•一　雜一•一 〔風雅〕夏•一　戀五•一　神•一

〔新千〕秋上•一　雜上•一 〔新拾〕戀五•一 〔續詞
花〕春上•一　秋下•一　賀•一　釋•三　戀上•一
旅•二　物•二

【性】

性助法親王 二品後中御室。後嵯峨帝御子 〔續古〕春下•一 性助法親王
〔續拾〕春上•一　秋下•二　雜秋•一　戀一•一
戀三•一　雜中•一 入道二品親王性助 〔新後撰〕冬•一　戀二
•一　戀六•一　雜上•三　雜中•二 〔玉葉〕旅•一
二品法親王 〔續千〕春下•一　冬•一　釋•一　戀一•一
雜上•二　雜下•一 入道二品親王性助 〔續後拾〕秋上•一
戀三•一　雜下•一 二品法親王性助 〔新千〕夏•一　釋•一
入道二品親王性助 〔新拾〕春下•一　雜下•一〔新後拾〕秋上
•一 〔新續古〕夏•一　戀五•一　雜中•二

性空　上人書寫。橘善根朝臣子　〔新古〕雜下・一　〔續後拾〕旅・一

性威　法師　〔新拾〕哀・一　戀四・一　〔新後拾〕雜秋・一

性瑜　上人南都律贈本定坊　〔新後撰〕雜下・一

性憲　法眼。源憲雅子　〔千載〕神・一　法橋

性遵　法師俗名愛左衞門入道　〔新千〕雜中・一

性嚴　法師　〔新千〕戀二・一　〔新拾〕旅・一　釋・一　〔新後拾〕雜上・一

【房】

房前公　正一位北野贈太政大臣藤原淡海公男（一一三九七）　〔續古〕秋上・一　北野贈太政大臣　〔萬葉〕卷五・一　卷七・八

房經　正二位大納言。後芬陀利花院藤原經通公男　〔新拾〕冬・一　大納言

房嗣　後知足院關白太政大臣　〔新續古〕雜上・一　右大臣

房實公　從一位後一音院關白左大臣己心院藤原師教公男　〔玉葉〕春下・一　權大納言　〔續千〕春下・一　右近大將　〔續後拾〕春下・一　冬・一　賀・一　戀二・一　雜中・一　前關白左大臣

房嚴　僧都廣隆守　〔新後撰〕釋・一　戀五・一

房繼　五位。荒木田　〔風雅〕神・一

房觀　法印三井寺　〔續千〕戀二・一　〔新千〕雜上・一　〔新拾〕釋・一

【典侍】

典侍因子　〔新勅〕春上・一　戀二・一

典侍光子　〔新後撰〕雜上・一　雜下・一

典侍明子　枇杷左大臣女　〔後撰〕賀・一

典侍洽子朝臣　從三位參議春澄善繩女　〔古今〕春下・一

典侍親子朝臣　中納言典侍。右大辨光俊朝臣女　〔續後撰〕戀三・一

戀四・一　戀五・一 尚侍家中納言　〔續古〕春上・一　秋上・一　秋下・一　神・一　戀一・一　戀三・二　戀五・一　賀・一　〔續拾〕秋下・一　雜秋・一　戀一・一　戀二・一　戀三・三　戀四・一　雜上・一　〔新後撰〕春下・二　戀二・一　戀三・一　戀四・一　雜下・一　〔玉葉〕戀五・一　〔續千〕戀一・一　戀五・一　〔續後拾〕春下・一　〔新千〕戀一・一　〔新拾〕雜上・一

典侍藤原因香朝臣　〔古今〕春下・一　賀・一　戀四・二　〔後撰〕春下・一

典侍藤原直子朝臣　二條后高子之始名也

【近】

近江采女　〔古今〕戀四・一 左兵衛

近院右大臣　能有公

【近衞】

近衞太皇太后宮　太皇太后宮の條に委し

近衞更衣　〔後拾〕秋中に五月雨にぬれにし袖の歌イに近衞更衣とせるは非也。近江更衣也。更衣源周子の條に委し

近衞院　諱體仁。鳥羽帝御子（一七九九—一八一五）〔千載〕雜上・一 近衞院御製　〔新古〕戀二・一　〔續古〕冬・一　〔玉葉〕雜四・一　〔續詞花〕釋・一　雜中・一

近衞院備前　〔風雅〕雜下・一

近衞關白左大臣　〔續拾〕深心院關白前左大臣に同じ

近衞關白前右大臣　〔玉葉〕淨妙寺關白前右大臣に同じ

【直】

直氏　五位土岐伊豫守。十郎源頼氏男　〔新千〕戀一・一　〔新拾〕神・一　雜中・一　〔新後拾〕雜春・一　戀一・一

直好　熊谷。文久二年歿八十一。梁塵後抄。古今正義序。註追考　〔浦の汐貝〕五七
三　長歌七

直信　五位。祝部　〔新拾〕雜中・一

直宣　五位彈正少弼號命鶴丸。大中臣　〔風雅〕雜上・一

直俊　法師　〔新拾〕雜中・一

直基　五位。平　〔新後拾〕雜下・一

直義　從三位。贈三位源貞氏男　〔風雅〕春中・一　冬・一　戀一・二　戀四・三　戀五・一　雜下・一　左兵衞督　〔新千〕秋上・二　釋・一　戀三・一　雜中・一　雜下・一　〔新拾〕夏・一　秋下・一　戀三・一　釋・一　〔新後拾〕雜秋・一　雜下・一　〔新續古〕冬・一　戀一・一　戀三・一　戀四・一　雜中・一

直幹　四位。長門守橘長成男。至應保四年　〔後撰〕別・一　五位

直頼　六位本鄕宮内少輔。信濃守源範[illegible]男　〔新千〕雜中・一　〔新後拾〕雜秋・一

直親　五位。藤原　〔新續古〕戀三・一

【尚】

尚忠　六位春宮少進越後介。加賀介藤原吉信男　〔後拾〕夏・一　〔續詞花〕夏・一

尚長　四位大膳大夫。兵庫頭丹波經長男　〔續拾〕戀四・一　雜中・一　四位　〔新後撰〕冬・一　〔續千〕雜上・一　〔新千〕秋上・一

尚長　五位。祝部　〔新拾〕雜上・一　〔新後拾〕慶・一

【尚侍】

尚侍　〔後撰〕哀・一　内侍のかみ

尚侍家中納言　〔續後撰〕典侍親子朝臣に同じ

尚侍藤原頊子朝臣　〔新後撰〕春下・一　秋下・一

戀一・一　戀・三一　雜中・一　〔玉葉〕春下・一　冬・二　戀四・一

尙侍藤原滿子　〔玉葉〕雜二・一

尙侍藤原灌子　〔續後撰〕冬・一

【具】

具氏　從二位參議。從三位源通氏男　〔續古〕夏・一　秋下・一　冬・一　戀二・一　雜上・一（四位）〔續拾〕雜秋・一　戀二・二（左近中將）〔新後撰〕秋上・一　戀一・一　戀三・一　雜中・一　〔續後拾〕雜中・一　〔新千〕戀一・一　〔新拾〕雜下・一（諱）〔新後拾〕雜春・一　賀・一

具氏　權大納言。中院大納言源光忠孫具光之二男歟。具光者大納言親光之弟也　〔新葉〕春下・一　冬・一　旅・一　戀三・一

具平親王　二品中務卿。號後中書王。村上帝御子（一六二四―一六六九）〔拾遺〕雜上・一　雜春・一　雜秋・一（中務卿具平親王）〔後拾〕春上・二　雜上・一　〔詞花〕雜上・一　〔千載〕春下・一　夏・一　哀・一　雜上・一（中務卿具平のみこ）〔新古〕秋上・一　秋下・二　冬・二　哀・一　雜下・二　〔續後撰〕秋上・二　〔續古〕秋上・一　〔續拾〕春下・一　〔玉葉〕春上・二　春下・一　秋上・二　秋下・一　冬・一　雜一・二　〔續千〕雜上・一　雜下・二　〔續後拾〕春上・二　春下・一　雜上・一　〔風雅〕春上・一　〔新千〕秋下・一　戀四・一　〔新拾〕春下・一　秋上・二　〔新後拾〕春上・一　〔新續古〕秋下・一

具行　從二位中納言。中將源師行男　〔續千〕戀三・一（四位）〔新千〕夏・二　別・一　戀二・一　戀五・一（權中納言）〔新拾〕夏・一　秋下・一　〔新續古〕釋・一　〔新葉〕旅・一

具房　正二位大納言。左大將源通忠男　〔續古〕雜下・一　源具房朝臣　〔續拾〕冬・一　旅・一　戀四・一　權中納言　〔新後撰〕秋上・一　前大納言

具定　正三位。大納言源通具男　〔新勅〕雜一・一　雜二・一　侍從　〔續後撰〕雜中・一　〔續古〕雜上・一　〔風雅〕秋下・一

具通公　從一位久世太政大臣千種源通相男　〔新後拾〕冬・一　賀・一　權大納言　〔新續古〕春下・一　久世入道太政大臣

具親　四位左少將。右京大夫源師光男　〔新古〕春上・一　春下・一　秋上・一　冬・三　雜上・一　五位　〔新勅〕秋上・一　冬・一　戀五・一　四位　〔續後撰〕戀五・一　雜中・一　賀・一　〔續古〕秋下・一　釋・一　雜中・一　〔續拾〕春上・一　冬・一　〔新續古〕　冬・一　戀五・一　雜上・一

【知】

知行　五位阿波守。源　〔續後拾〕戀四・一　〔新千〕旅・一　戀二・一　〔新拾〕神・一

知行　五位尾張守。掃部助大江範能男　〔新千〕雜中・一

知足院入道前關白太政大臣　富家攝政關白に同じ

知房　四位美濃守。越中守藤原良宗男。至長治三年　〔金葉〕戀一・一　四位　〔續詞花〕旅・一

知長　四位典藥頭。典藥頭丹波尙康男　〔新千〕雜中・一　四位

知信　五位。淡波守藤原知綱子イ知陰　〔金葉〕雜下・一

知紀　八田。明治六年歿七十五。調の直路。千代の古道。桃岡集　〔しのぶ草〕二〇三三　長歌四

知海　法印　〔續古〕釋・一

知家　正三位。正三位藤原顯家男　〔新古〕戀三・一　五位　〔新勅〕春上

•一　夏•一　秋上•一　秋下•一　冬•一　賀•一　旅•一　戀二•二　戀五•一　雜二•一　雜四•二正三

位〔續後撰〕春上•一　春中•一　夏•一　秋上•一　秋中•二　冬•二　戀一•一　戀二•一　戀四•一　戀五•一　雜上•一　雜中•三　旅•一〔續古〕春下•二　夏•一　秋上•五　秋下•一　冬•三　神•一　釋•一　旅•一　戀一•一　戀二•二　戀四•一　戀五•一　哀•一　雜上•六　雜中•二　雜下•一〔續拾〕春上•一　春下•二　夏•一　秋上•一　冬•三　旅•一　戀一•二　戀四•一　戀五•一　雜上•一　雜中•一　神•一〔新後撰〕春上•二　冬•一　戀一•一〔玉葉〕旅•一〔續千〕秋上•一　雜體•二物名　戀二•一〔續後拾〕物名•一　賀•一　哀•一〔風雅〕春上•一　春下•一　冬•一〔新千〕春下•一　秋上•一　雜下•一誹諧〔新拾〕春上•二　秋上•一　秋下•一　冬•一　旅•一　戀五•一　雜上•一　雜下•一誹諧〔新後拾〕春上•二　夏•一　秋下•一　戀三•一〔新續古〕春下•一　冬•一　戀一•一　戀三•一　戀四•一　戀五•一

【東】

東二條院半物川浪　〔新後撰〕雜下•一

東二條院兵衛　〔續古〕秋上•一

東三條入道關白太政大臣　兼家公に同じ

東三條左大臣　常に同じ

東三條院　圓融院后詮子一條院國母。法興院兼家公女　〔後拾〕雜三•一〔千載〕雜中•一〔新古〕哀•一　雜下•一〔新勅〕

雜一・一〔續古〕秋上・一　雜上・一　雜下・一

【東】

東麿　小治田　〔萬葉〕卷八・一

【東人】

東人　佐伯　〔萬葉〕卷・二

東人　置始　〔新勅〕旅・一　〔萬葉〕卷一・一　卷二・二
長歌卷二。一

東人　大伴　〔萬葉〕卷六・一

東人　河邊　〔萬葉〕卷八・一

東人　四位。中納言　中臣意美麿男　〔古今〕戀四・一　讀人不知　左書在　〔萬葉〕卷四・一

【法】

法守法親王　仁和寺御室二品。後伏見帝御子　〔風雅〕春下・一　秋上・二　戀二・一　戀三・一　雜中・一　[illegible]・一〔新千〕春下・一　秋下・一　釋・一　[illegible]・一　雜中・一　哀・一　〔新拾〕春下・一　秋上・一　賀・一　戀二・一　戀三・一　雜中・一　〔新後拾〕春下・一　秋上・一　秋下・一　雜春・一　〔新續古〕春下・一　秋下・一

法成寺入道前攝政太政大臣　道長公に同じ

法住寺太政大臣　恒德公に同じ

法皇　宇多天皇に同じ　〔古今〕　〔後撰〕同上　〔新後撰〕龜山院に同じ　〔玉葉〕後宇多院に同じ　〔續千〕同上　〔新千〕光嚴院に同じ　〔新拾〕光明院に同じ

法邦　法師。石清水別當榮春子　〔續拾〕春上・一

法麿　氏壌　〔萬葉〕卷五・一

法源 法師 〔風雅〕釋•一
法圓 上人 〔續拾〕春下•一 法師 〔新古〕釋•一 上人

【法性寺】

法性寺入道前太政大臣家三河 同人
法性寺入道前關白太政大臣 忠通公に同じ
法性寺入道前關白家三河 兵庫頭源仲政女 〔金葉〕春•一 冬•一 〔千載〕戀二•一 〔新勅〕戀一•一 〔玉葉〕雜三•一 〔新千〕戀五•一

【政】

政元 五位。藤原 〔新拾〕戀四•一
政平 四位。神主賀茂成平男 〔詞花〕雜上•一 〔千載〕夏•一 秋下•一 戀二•一 雜下•一 神•一 〔續詞花〕春下•一 別•一 雜下•一

政村 四位左京大夫。左京大夫平義時男 〔新勅〕雜四•一 五位 〔續後撰〕夏•一 雜上•一 雜下•一 四位 〔續古〕夏•一 秋上•一 旅•一 戀一•一 戀三•一 戀四•一 戀五•一 雜上•一 雜中•一 雜下•一 〔續拾〕夏•一 秋下•一 冬•一 雜中•一 雜下•一 〔新後撰〕戀一•一 〔玉葉〕秋上•一 旅•一 戀四•一 〔續千〕戀一•一 〔續後拾〕冬•一 〔風雅〕夏•一 〔新千〕秋下•一 雜下•一 〔新拾〕秋下•一 戀四•一 神•二 雜中•一 〔新後拾〕旅•一 戀二•一 雜上•一
政利 五位。惟宗 〔後拾〕秋上•一 卷頭歌人しらず。上科抄惟宗政利歌也と。今こゝにのす
政成 五位式部大丞。越後守源經任男。永保二年卒 〔後拾〕戀一•二 戀三•

一

政長　五位常磐駿河守。左京大夫平政村男　〔續拾〕冬・一　戀二・一　〔新後撰〕雜下・二　〔玉葉〕秋下・一　雜五・一　〔續千〕冬・一　戀一・一　雜中・一

政宗　五位。藤原　〔新後拾〕旅・一

政秋　五位笙吹。大夫將監豐原近秋男　〔新後撰〕雜中・一　〔玉葉〕旅・一

政時　藤原　〔續詞花〕神・一

政連　五位。藤原　〔玉葉〕雜一・一

政義　五位大多記。大隅守中原重頼男。至永承二　〔後拾〕戀一・一

政範　五位星野三河守。上野介藤原範宗男　〔新千〕戀四・一

【花山院】

花山院　諱師貞。冷泉帝御子（一六二八―一六六八）　〔後拾〕春下・一　賀・二　旅・二　雜五・一　花山院御製　〔詞花〕春・一　夏・二　秋・二　雜上・三　雜下・一　〔千載〕秋下・一　哀・一　戀四・一　釋・一　〔新古〕秋下・一　戀三・一　戀五・一　雜上・三　雜下・一　〔續古〕春上・一　夏・一　釋・一　賀・一　〔續拾〕雜下・一　神・一　〔玉葉〕春上・一　春下・一　秋上・一　釋・一　戀三・二　戀五・一　雜一・二　雜二・一　雜三・一　雜五・二　〔續千〕春下・一　秋上・一　〔續後拾〕戀一・一　雜上・一　〔風雅〕春中・一　秋下・一　戀五・一　〔新千〕戀四・一　哀・一　〔新拾〕春上・一　春下・一　秋上・一　秋下・一　釋・一　雜下・一　〔新後拾〕夏・二　雜秋・一　別・一　〔新續古〕秋上・一　秋下・一　〔續詞花〕釋・一　戀上・一　雜下・二

花山院入道右大臣　〔新後撰〕後花山院入道右大臣に同じ
花山院前内大臣　師繼公に同じ
花山院入道前右大臣　忠經公に同じ

【花園】

花園左大臣　有仁に同じ
花園左大臣室　〔千載〕哀・一　〔新古〕秋下・一　〔續詞花〕秋下・一　哀・一　雜中・一
花園左大臣家小大進　式部大輔菅原在良女　〔金葉〕戀上・一　戀下・一　雜上・一　〔千載〕秋下・一　冬・一　雜中・一　雜下・一誹諧　〔新勅〕雜五・一　〔玉葉〕冬・一　〔續千〕雜體・一　〔續後拾〕秋下・一　〔新千〕戀四・一　〔新後拾〕雜下・一　〔新續古〕秋・一
花園左大臣家越後　〔金葉〕春・一　秋・二　冬・一　雜上・一

【花園院】

花園院　諱富仁。伏見帝御子（一九五六―二〇〇八）　〔玉葉〕春上・一　夏・一　秋上・一　秋下・二　旅・一　戀二・一　戀三・一　戀四・一　雜一・一　雜二・一今上御製　〔續千〕秋下・一　旅・一　戀五・一　哀・一新院御製　〔續後拾〕夏・一　戀一・一　〔風雅〕春上・二　春中・一　春下・三　夏・三　秋上・二　秋中・三　秋下・四　冬・一　旅・一　戀一・一　戀二・一　戀三・三　戀四・六　雜上・四　雜中・四　釋・七　神・一　賀・二院　〔新千〕春上・一　春下・一　夏・二　秋上・二　冬・一　釋・一　戀一・一　戀三・四　雜中・一　雜下・七　賀・一花園院御製　〔新拾〕春下・一　夏・一　秋下・一

冬・一　賀・一　旅・一　戀一・一　戀三・一　戀四・二　戀五・一　雜上・三　雜中・一　〔新後拾〕秋上・一　雜春・一　戀三・一　戀五・一　釋・一　賀・一　〔新續古〕雜中・一

花園院一條　〔風雅〕夏・一　秋中・一　秋下・二　冬・二　戀二・二　雜中・二

花園院兵衛督　〔續千〕戀四・一　〔風雅〕夏・一　冬・一　戀三・三　戀四・一　雜中・一　〔新千〕神・一

花園院別當　〔風雅〕戀三・一

花園院冷泉　〔玉葉〕戀二・一　別當　〔續千〕秋下・一　〔風雅〕夏・一　冬・一　戀一・一　戀二・一　戀三・二　戀四・一　雜下・一　〔新千〕秋上・一　〔新拾〕神・一　〔新續古〕戀三・一

【承】

承仁法親王　座主梶井宮。後白川帝御子　〔新古〕雜下・一　承仁法親王　〔續後撰〕雜下・一　入道親王承仁　〔續古〕雜中・一　承仁法親王

承均（ソウク）　法師元慶比人。大和大掾子　〔古今〕春下・二　雜上・一

承明門院小宰相　土御門院小宰相に同じ

承空　上人。西山長老　〔新後撰〕釋・一　〔續千〕雜上・一

承香殿あこぎ　〔後撰〕秋下・一

承香殿としこ　俊子に同じ

承香殿女御　左大臣顯光女　〔拾遺〕雜賀・一　〔千載〕哀・一　〔續詞花〕哀・一

承香殿中納言　〔後撰〕戀四・一　〔拾遺〕戀五・一

承惠　律師　〔新後拾〕雜春・一

承道法親王　一品　〔新續古〕秋上・一

承澄 叡山小河大僧正、攝政仲房公子 〔續拾〕雜中・一

承鎭法親王 无品座主梶井。彦仁王御子 〔續千〕秋下・一

承覺法親王 二品座主北白川。後宇多帝御子 〔續千〕冬・一 旅・一 釋・一 戀二・一 〔續後拾〕夏・一 釋・一 〔風雅〕夏・一 雜中・一 〔新千〕冬・一 雜上・一 雜中・一 〔新後拾〕冬・一 雜春・一

【明】

明日香釆女 〔拾遺〕雜戀・一 〔新勅〕戀四・一

明玄 法師 〔續千〕雜下・一

明快 大僧正。文章生俊宗子 〔後拾〕雜三・一 天台座主 〔詞花〕秋・一 〔千載〕冬・一 〔續詞花〕冬・一

明軍 金 〔萬葉〕卷三・六 卷四・二

明兼 五位大判事明法博士。明法博士坂上範政男。久安三年七月廿九日卒 〔詞花〕戀下・二 〔千載〕冬・一 〔續詞花〕冬・一

明通 法師號通阿彌。大納言房子 〔風雅〕雜上・一

明敎 法師 〔續古〕雜下・一

明雲 天台座主大僧正。大納言顯通子 〔千載〕釋・一

明尊 大僧正 〔新勅〕釋・一 〔續千〕釋・一 〔續後拾〕雜中・一

明賢 四位彈正大弼。大納言源俊明男、至保安四年 〔千載〕戀一・一 〔續詞花〕戀上・一

明親 五位左近將監。大中臣、至建永元年 〔新古〕神・一

明衡 四位文章博士。山城守藤原敦信男、至治曆二年イ十七八卒 〔後拾〕夏・一 冬・二 四位

明賴 四位。高階 〔金葉〕賀・一

明魏 法師 〔新後拾〕秋上・一 釋・一 戀一・一 戀・

二・一　雜中・一

【季　四畫―十畫】

季尹　從四位參議。從三位藤原家尹男　〔新續古〕雜中・一　參議

季行　從三位。刑部卿。藤原敦忠男　〔千載〕戀四・一　從三位　〔續詞花〕冬・一　戀中・一　雜中・一　前中宮亮

季光　右大辨。六條內大臣源有房四男。補任云季光本名季忠　〔新葉〕戀一・一

季宗　五位。荒木田　〔續千〕戀二・一

季宗　四位左馬頭。彈正大弼藤原成宗男　〔續後撰〕雜中・一　四位　〔續古〕冬・一　〔續拾〕雜秋・一　〔新後撰〕戀二・一

季長　荒木田　〔新葉〕雜上・一

季貞　五位源　〔千載〕戀一・一

季保　四位。神主賀茂重保男　〔新古〕雜下・一　〔新勅〕戀五・一　〔續古〕冬・一　〔續拾〕神・一　〔新續古〕釋・一

季信　五位。藤原　〔風雅〕雜下・一

季茂　六位左衞門尉。右衞門尉源季忠男　〔新後撰〕雜上・一

季能　正三位。太皇太后宮大夫藤原俊盛男　〔千載〕秋下・一　哀・一　戀一・一　釋・一　左京大夫　〔新古〕春上・一　冬・一　雜中・一　正三位　〔新續古〕春下・一　戀一・一

【季　十一畫―二十四畫】

季通　五位駿河守。陸奧守橘則光男。至康平三年　〔後拾〕哀・一　雜四・一　〔金葉〕戀上・一

季通　四位備後守。大納言藤原宗通男。至久安四年　〔詞花〕雜上・一　四位　〔千載〕春上・一　春下・二　夏・三　秋上・一　秋下・二　冬・一　旅・一　戀四・一　戀五・一　雜中・一　〔新古〕秋上・一　〔續詞花〕春上・一　春下・一　夏・二　秋上・一　戀上・一

季景 六位。下野守源季國男 〔新古〕雜下・一

季雄 正二位中納言。大納言藤原實教男 〔續千〕夏・一 秋上・一前中納言 〔續後拾〕夏・一 〔風雅〕春下・一 〔新千〕秋上・一 秋下・一 戀四・一 〔新拾〕戀四・一 〔新後拾〕戀二・一

季經 正三位。左京大夫藤原顯輔男（一八八一薨九十二） 〔千載〕秋上・一 賀・一 戀一・一 雜中・一 神・一正四位 〔新古〕冬・一正三位 〔續古〕戀一・一 〔續後撰〕春中・一 〔玉葉〕春上・一 賀・二 戀五・一 雜四・一 〔續後拾〕秋上・一 〔風雅〕夏・一 秋上・一 雜下・一 〔新拾〕雜上・一 〔新續古〕釋・一 旅・一 雜下・一 〔續詞花〕 戀上・一

季遠 五位木工允。宮內丞源重時男、至天永三年從下 〔詞花〕春・一 〔續詞花〕春上・一

季廣 五位下野守。改清季。木工頭源季兼男。兼氏先祖 〔千載〕戀中・一 〔新古〕釋・一 〔新勅〕釋・一 雜一・一 〔續後撰〕夏・一 〔新後撰〕雜上・一 〔玉葉〕釋・一 〔續千載〕旅・二 〔續後拾〕雜下・一 〔新千〕戀二・一 〔新後拾〕戀三・一 〔新續古〕雜上・一 〔續詞花〕釋・一

季賢 五位。源 〔新拾〕旅・一

季綱 五位。藤原 〔續後拾〕冬・一 〔新拾〕春下・一

季繩 五位左少將。左中辨藤原千乘男 〔新古〕哀・一

季繼 前大納言。河野藤公廉（本名實仲）男或公廉子實廉其子實繼云々又實廉者季繼之兄云々系圖不同 〔新葉〕春上・一 夏・一 戀四・一 雜中・一

季鷹 賀茂、天保十三年歿九十一 〔雲錦翁歌集〕 五九四 長歌四

【定 三畫―八畫】

定久　従三位。賀茂忠久男　〔新後拾〕雑春・一

定方　贈従一位三條右大臣。内大臣藤原高藤公男。承平二薨五十七　〔古今〕秋上・一四位
〔後撰〕春下・二　秋中・一　戀三・一　戀四・一　雑
二・一　哀・三　三條右大臣　〔新勅〕秋上・一　〔續後撰〕賀・
一　〔續古〕哀・一　〔玉葉〕春下・一　〔新千〕雑中・一
〔新續古〕春下・一

定平　前大納言。中院流陸奥守源定成二男　〔新葉〕釋・一　雑上・一

定伊　平等院南松院大僧正。金光院右大臣家定子　〔新後拾〕雑上・一

定成　五位肥前守。陸奥守藤原明元男　〔千載〕春下・一

定成　五位河内守明法博士。主計頭坂上範親男。寛治二年三月卒　〔後拾〕春上・一
春下・一

定成　四位。従三位藤原經朝男　〔玉葉〕春下・一　夏・一　秋上・
一　秋下・一　雑一・一四位　〔續千〕雑上・一　〔風
雅〕秋中・一

定助　大僧正　〔新續古〕雑中・一

定季　五位右少將。參議源頼定男、至長暦　〔後拾〕戀二・一

定忠　従三位。従二位大中臣定世男　〔新後撰〕神・一四位　〔玉葉〕雑
一・一祭主　〔風雅〕旅・一　雑上・一　賀・一

定房　正二位大納言。中院左大臣源雅定男　〔千載〕春上・一　旅・一大納
言

定房公　従一位吉田内大臣。大納言藤原經長男　〔新後撰〕冬・一右兵衛督
〔續千〕夏・一　秋上・一　冬・一　旅・一　雑中・一
權大納言　〔續後拾〕春下・一　戀二・一　雑中・一前大納言
〔新葉〕秋下・一　戀四・一　雑上・一

定長　正三位參議。左中辨藤原元房男　〔千載〕雑中・一　釋・一藤原定長
朝臣

定長 四位神祇大副近江守。從三位大中臣公長男 〔金葉〕夏・一 四位 雜上・一 〔千載〕冬・一

定長 藤原 五位。 〔風雅〕雜下・一

定宗 四位少納言。左馬頭源顯定男。至建久五年 〔千載〕雜中・一

定宗 從二位中納言。參議藤原宗親男 〔風雅〕秋中・一 旅・一 戀四・一 四位 〔新千〕旅・一 前參議 〔新拾〕秋下・一 戀四・一 〔新後撰〕秋下・一 雜春・一 雜上・一 雜下・一 權中納言 〔新續古〕夏・一 秋下・一 前中納言

定宗 法印園宗寺 〔新千〕旅・一 雜中・一 〔新拾〕雜上・一

【定 九畫―十二畫】

定宣 五位賀茂 〔續千〕雜上・一

定宣 四位賀茂 〔新後拾〕雜秋・一 四位

定信 五位刑部大輔。右中將源信宗男。康和四年出家 〔金葉〕夏・一 冬・一 雜上・一 〔千載〕冬・一

定信 源 〔續詞花〕冬・一 雜下・一

定信 松平。文政十二年歿七十二。言志集。杉の落葉。風月集 〔三草集〕

定海 叡山勸學院法印。法眼仁寬子 〔續千〕釋・一

定雅 四位左京大夫。左馬頭平定成男 〔玉葉〕雜一・一 四位

定修 法師。中納言定家子 〔續後撰〕雜下・一 〔續古〕釋・一 〔續拾〕雜秋・一

定家 正二位中納言。正三位藤原俊成男（一八二二―一九〇一）近代秀歌、詠歌大概、每月抄、新古今集撰者。桐火桶 〔拾遺愚草〕二八三六 長歌二一 〔同員外〕九七〇 〔千載〕秋下・一 冬・二 別・一 戀五・一 雜上・一 雜中・二 五位 〔新古〕春上・五 春下・一 夏・四 秋上・二 秋下・三 冬・二 賀・一 哀・一 別・一 旅・六 戀二・四 戀三・二 戀四・六 戀五・二 雜上・二

雜中・二 雜下・二 神・一 四位〔新勅〕春下・一 夏・一 秋上・二 秋下・一 賀・一 戀一・一 戀二・一 戀三・二 戀五・二 雜・一 雜二・二 權中納言〔新後撰〕春上・一 春中・一 春下・四 夏・一 秋上・五 秋中・二 秋下・四 冬・四 神・二 戀一・二 戀二・四 戀三・一 戀四・六 雜上・二 雜中・三 旅・二 前中納言〔續古〕春上・五 春下・四 夏・五 秋上・六 秋下・四 冬・六 釋・一 別・一 旅・二 戀一・三 戀二・三 戀三・三 戀四・四 戀九・一 哀・一 雜上・二 雜中・二 雜下・一 賀・二〔續拾〕春上・二 春下・二 夏・二 秋上・一 秋下・二 冬・二 雜春・二 雜秋・一 賀・一 戀一・一 戀三・二 戀四・三 雜上・三 雜中・一 雜下・一 釋・二〔新後撰〕春上・二 春下・二 夏・三 秋上・三 秋下・四 冬・二 別・一 旅・二 神・二 戀一・一 戀二・一 戀三・二 戀四・一 戀五・一 戀六・一 雜上・一 雜下・一 賀・二〔玉葉〕春上・六 春下・五 夏・六 秋上・六 秋下・八 冬・六 旅・五 戀一・一 戀二・一 戀三・五 戀五・四 雜一・四 雜二・三 雜三・四 雜四・二 雜五・二 神・一〔續千〕春上・五 春下・一 夏・三 秋上・二 秋下・二 冬・二 雜體・一 物名 旅・二 神・二 釋・二 戀四・一 戀五・一 賀・二〔續後拾〕春上・三 春下・三 夏・三 秋上・一 冬・二 旅・一 賀・一 戀一・一 戀三・一 雜上・一 雜中・二 哀・一〔風雅〕春上・四 春中・二 春下

・三　夏・四　秋上・五　秋中・一　冬・二　戀一・一
戀二・一、戀三・一　戀四・一　戀五・一　雜上・三
雜中・三　雜下・三〔新千〕春上・一　春下・二　夏
・二　冬・一　旅・二　神・一　戀一・一　戀三・二
戀四・二　戀五・一　雜中・一　哀・一　賀・二〔新
拾〕春上・一　春下・一　夏・三　秋上・一　秋下・
一　冬・一　賀・二　旅・一　哀・一　戀一・二　戀
三・一　戀四・二　戀五・一　神・一　釋・一　雜上
・一　雜中・一　雜下・一〔新後拾〕春上・二　春下
・二　夏・二　秋上・三　秋下・一　冬・二　雜秋・一
戀一・二　雜下・一〔神・一　賀・一〔新續古〕春
上・一　春下・二　夏・四　秋上・二　秋下・二　冬
・一　賀・一　旅・二　戀二・一　戀五・二

定通　五位右少辨。中納言藤原通俊男。至天永三年正月廿九日卒〔金葉〕夏・一
〔千載〕夏・一〔新古〕哀・一　人の夢に殿上に侍るとて讀みける歌也

定通公　正二位後土御門内大臣。土御門源通親公男〔新勅〕春下・一　大納言
〔續後撰〕春中・一　神・一　後土御門内大臣〔續古〕雜下・一
〔續拾〕神・一〔新後拾〕後土御門入道内大臣

定資　正二位中納言。大納言藤原俊定男〔新後撰〕秋上・一　冬・一　右大辨
〔玉葉〕冬・一　前中納言〔續千〕秋上・一　神・一　釋・一
〔續後拾〕雜中・一〔風雅〕秋中・一　冬・一〔新
千〕秋下・一　旅・一　雜下・一〔新拾〕雜上・一
〔新續古〕戀四・一

定爲　醍醐法印。大納言爲氏子〔續拾〕旅・一　雜上・一　權律師
〔新後撰〕春下・一　秋上・一　秋下・二　戀三・一
雜上・一　雜中・二　雜下・一〔玉葉〕戀二・一

〔續千〕春上・一 春下・二 夏・一 秋上・二 秋下・二 冬・二 釋・一 戀二・一 戀五・二 雜上・一 雜中・一 哀・一 〔續後拾〕春上・一 春下・一 秋上・一 秋下・一 別・一 續後拾歌 賀・一 戀一・二 戀二・一 雜上・一 雜下・一 〔風雅〕夏・一 〔新千〕春上・二 春下・一 夏・一 秋上・二 冬・一 釋・二 神・一 戀一・一 戀二・一 戀三・一 戀四・二 雜上・一 雜中・一 哀・二 〔新拾〕春上・一 夏・一 秋上・一 秋下・一 戀一・一 戀二・一 戀四・一 雜中・一 〔新後拾〕春上・一 雜春・二 戀三・一 戀五・一 賀・一 〔新續古〕夏・二 冬・二 旅・二 戀一・一 戀三・一 戀五・一

定雅 六位。尾張守大中臣雅光男 〔千載〕戀一・二 〔新古〕秋上・一

定雅公 正二位後花山院入道右大臣。花山院藤原忠經男 〔續後撰〕戀一・二 左近大將 〔續古〕哀・一 雜中・一 入道前右大臣 〔續拾〕秋上・一 神・一 入道右大臣 〔新後撰〕戀四・一 花山院入道右大臣 〔玉葉〕賀・一 後花山院入道右大臣

【定 十三畫—二十三畫】

定經 從三位參議。大納言藤原經房男 〔千載〕春下・一 五位 〔續後撰〕雜上・一 參議 〔續拾〕戀五・一 〔續千〕戀三・一

定意 法印 〔續拾〕雜秋・一 法印 〔新後撰〕雜上・一 雜中・一 法印

定圓 三井寺法印 〔續古〕秋上・一 戀四・一 雜中・一 權大僧都 〔續拾〕秋下・一 雜下・二 釋・二 法印 〔新後撰〕釋・一 戀三・一 〔續千〕秋上・一 〔續後拾〕雜下・一 〔風雅〕春中・一 〔新千〕夏・一 〔新拾〕夏

・一　旅・一　雜中・一　〔新後拾〕雜春・一　〔新續古〕戀五・一

定嗣　正二位大納言。鳳栖院内大臣藤原朝忠男　〔新續古〕秋上・一 前中納言

定淵　法印　〔新千〕雜中・一　〔新拾〕賀。一　戀二・一　〔新續古〕夏・一

定緣　法印　〔續拾〕雜下・一 權大僧都

定賴　正二位中納言。大納言藤原公任男（一六五六—一七〇五）　〔後拾〕春上・一　春下・二　夏・一　秋下・二　賀・一 左書　別・二　旅・二　雜一・二　雜二・二　雜三・一　雜四・一 中納言　〔千載〕冬・一　雜中・一　雜下・一 名物　〔新古〕春上・一　秋下・一　旅・一　雜中・一 權中納言　〔新勅〕雜一・一　雜五・一 名物　〔續後撰〕春上・一　春下・一　戀一・一　戀二・一　戀四・一　〔續古〕別・一 中納言　〔續拾〕戀三・一 權中納言　〔玉葉〕春上・二　春下・二　戀三・一　戀四・二　〔續千〕戀四・一　〔續後拾〕賀・一　〔風雅〕春下・一　戀四・一　雜中・一　〔新千〕戀四・一　〔新拾〕秋下・一　〔新後拾〕戀二・一　〔新續古〕　戀五・一　〔續詞花〕春下・一　冬・一　旅・一　雜上・一　雜中・二　物・一

定親　正二位大納言。大納言藤原滿親男　〔新續古〕夏・一　戀二・一　戀四・一 左近中將

定覺　法師俗名宗八左衛門尉　〔新後撰〕戀二・一

定顯　三井寺大僧正鎌倉石井花臺院。參議資平子　〔續千〕戀一・一　〔續後拾〕釋・一

定顯　叡山横川寶藏坊　〔新千〕雜下・一　〔新後拾〕旅・一　戀四・一　雜下・一　〔新續古〕戀二・一　戀三・一

雜中・一

【長　四畫―九畫】

長方　從二位中納言。中納言藤原顯長男　〔千載〕夏・一　秋上・一　雜上・一　雜中・一　〔新古〕秋下・一　冬・一　戀一・一　戀二・一　〔新勅〕春上・一　春下・一　夏・一　秋上・一　冬・二　賀・一　戀一・一　戀二・一　戀三・一　〔續後撰〕春中・一　秋中・一　冬・一　戀二・一　〔續古〕春上・一　戀二・二　雜上・一　〔續拾〕戀四・一　神・一　〔新後撰〕春下・一　夏・一　〔玉葉〕春上・一　春下・一　冬・二　戀一・一　雜五・一　釋・一　〔續後拾〕秋上・一　〔風雅〕雜上・一　〔新拾〕秋上・一　〔新續古〕雜上・一　從二位　〔續詞花〕戀上・二

長田王　刑部卿正四位下。櫻井王御子(―一三九七)　〔續古〕旅・一　〔萬葉〕卷一・三　卷三・三

長有　四位典藥頭。圖書丹波長忠男　〔新後撰〕雜中・一　四位　〔續千〕雜中・二　雜下・一　〔新千〕雜上・二

長忌寸娘　〔萬葉〕卷八・一

長延　五位。荒木田　〔新古〕雜下・一

長秀　五位中將兵庫頭。出羽守藤原景長男　〔新千〕神・一　戀四・一　〔新拾〕戀一・一　戀五・一　雜上・一　〔新後拾〕秋下・一　冬・一　旅・一　戀二・一　戀四・一

長谷　置始　〔萬葉〕卷二〇・一

長谷雄　從三位中納言。彈正忠紀拔範男。延喜二參議十二年二十薨　〔後撰〕春上・一　戀二・一　紀長谷雄朝臣　戀三・二　中納言長谷雄朝臣　〔古今和歌六帖〕

長房 正三位參議。大納言藤原經輔男 〔後拾〕秋下・一 雜一・一大藏卿 〔金葉〕春・二 別・一前大宰大貳 〔詞花〕夏・一大藏卿

長明 五位。禰宜鴨長繼男。應保元年十十七日中宮敍爵（一八一四—一八七六）方丈記、無名抄 〔鴨長明集〕一〇四 〔千載〕戀五・一 〔新古〕秋上・三 旅・二 戀三・一 戀四・一 雜上・一 雜下・一 神・一 〔續古〕春下・二 雜下・一 〔續拾〕雜下・一 〔新後撰〕戀一・一 雜中・一 〔玉葉〕雜五・一 〔續後拾〕旅・一 〔風雅〕春下・二 戀一・一 〔新千〕神・一 〔新拾〕哀・一 〔新後拾〕雜上・一 〔新續古〕戀三・一 雜上・一

長典 四位大膳大夫。玄番頭丹波時典男 〔玉葉〕旅・一 戀五・一四位 〔風雅〕雜上・一

長季 五位。平 〔續拾〕雜春・一

長流 下河邊（二二八四—二三四六）萬葉集管見 〔晚花集〕四九七 長一

長皇子 天武帝皇子（一—一三七五） 〔萬葉〕卷一・四 卷二・一

長屋王 高市皇子の子（一三三五—一三八九） 〔萬葉〕卷一・二 卷三・三 卷八・一

長宣 正三位。兵部卿藤原清長男 〔玉葉〕戀五・一從三位

長俊 四位 源 〔續後拾〕雜中・一四位

長信 五位。藤原 〔千載〕冬・一

長信 六位備前藏人。筑後守藤原長範男 〔新後拾〕雜上・一

【長 十畫—十九畫】

長能 五位伊賀守。伊勢神藤原倫寧男、寬弘六年任伊賀守 〔拾遺〕春・一 夏・一 秋・一 雜春・三 雜戀・一 〔後拾〕春上・二 春下・一 秋上・五 秋下・一 別・一 戀一・一 戀二・一 戀四・三 雜二・一 雜三・一 雜五・一

雑六・二神〔詞花〕春・一　冬・一〔千載〕冬・一
哀・一　戀一・二　戀三・二　雑上・一〔新古〕秋上
・二　戀五・一　雑上・一〔新勅〕賀・一〔續古〕春
上・一〔續後拾〕戀二・一〔風雅〕春下・二〔新
千〕雑下・二物名〔新拾〕春下・一　神・一〔新後拾〕
別・一〔新續古〕夏・一　別・一〔續詞花〕秋下・三
冬・一　賀・一　戀中・一

長時　五位赤橋武藏守。相模守平重時男〔續後撰〕戀三・一　雑上・一
〔續古〕秋上・一　神・一　旅・一　戀二・一　雑下・
一〔續拾〕雑春・一　旅・一〔新後撰〕戀二・一
〔玉葉〕秋下・一　戀・二一新後撰戀二のうた

長家　正二位大納言。御堂殿藤原道長男（一六六五―一七二四）〔後拾〕春上・一
夏・一　冬・一　雑一・一民部卿〔千載〕春下・一　哀
・二大納言〔新古〕春下・一　秋上・一　秋下・一　哀
・一權大納言〔新勅〕秋下・一　賀・一　旅・一　雑三・
一〔續後撰〕秋上・一　冬・一　戀二・一　戀九・一
雑上・一〔續古〕雑上・一民部卿〔續拾〕春上・一　秋
下・一　賀・一　雑下・一　神・一權大納言〔玉葉〕春上
・二　秋上・一　秋下・二　雑四・二〔續千〕春下・
一〔續後拾〕秋下・一〔風雅〕春下・一　雑下・一
賀・一〔新千〕秋上・一　哀・一　賀・一〔新拾〕哀
・一〔新後拾〕雑下・一〔新續古〕賀・一〔續詞
花〕哀・一

長眞　法眼。中納言顯長子〔千載〕哀・一　雑上・一

長清　五位勝間田遠江守。藤原〔玉葉〕雑一・一

長通公　從一位後中院前太政大臣。中院源道雅男〔風雅〕神・一前太政大臣

〔新千〕夏・一　戀二・一 後中院前太政大臣　〔新拾〕雜中・一

長康　五位。三善　〔新後拾〕戀一・一

長國　五位。中原　〔金葉〕冬・一　〔詞花〕雜上・一

長國　五位肥前守。大隅守中原重頼男　天喜二年十二月卒　〔後拾〕雜三・一

長盛　五位長門守。尾張守橘秋實男。至延喜十二年　〔古今〕雜上・一

長景　五位美濃守。城介藤原茂景男　〔續拾〕雜秋・一　雜上・一

長雅　正二位大納言。後花山院右大臣藤原定雅男　〔續古〕夏・一　別・一　戀・三　雜上・一 權中納言　〔續拾〕冬・一　戀四・一　戀五・三　雜下・一 權大納言　〔新後撰〕春下・二　秋上・一 前大納言　〔玉葉〕戀四・一　雜五・一　釋・一　〔續千〕秋上・一　〔風雅〕春下・一　雜下・一　〔新拾〕戀三・一

長脩　法印　〔新後拾〕雜秋・一

長強　僧都　〔新千〕釋・一

長惠　法印。法印聖覺子　〔續後撰〕雜中・一　〔續古〕釋・一

長舜　叡山法印。源兼氏朝臣子　〔新後撰〕夏・一　冬・一　戀二・一　〔玉葉〕雜一・一　〔續千〕春下・一　夏・一　秋下・一　冬・一　戀二・一　戀三・一　雜上・一　〔續後拾〕春下・一　夏・一　戀一・一　戀二・一　雜下・一　神・一　〔風雅〕戀二・一　雜上・一　〔新千〕春上・一　春下・一　冬・一　戀三・一　雜上・四　雜下・一　哀・一　〔新拾〕冬・一　旅・一　戀二・一　雜下・一　〔新後拾〕秋上・一　戀三・一　〔新續古〕春上・一　雜中・一

長經　五位遠藤筑前守。筑前守藤原長鏡男　〔新後撰〕戀五・一　〔續千〕雜上・一　雜中・一　〔續後拾〕雜下・一　〔新千〕哀・一

長貢　前參議　〔新葉〕戀一•一　戀三•一　雜下•一

長算　僧都。少納言朝忠子　〔後拾〕冬•一

長綱　正二位參議。治部卿菅原茂長男　〔新千〕戀一•一　刑部卿　〔新拾〕春下•一　戀三•一　大藏卿　〔新後拾〕秋下•一　雜秋•一　戀五•一　兵部卿　〔新續古〕秋下•一

長綱　五位。藥師寺出羽守藤原長村男　〔續拾〕雜秋•一　雜中•二

長實公　正二位八條贈左大臣。修理大夫藤原顯季男　〔金葉〕春•六　秋•四　賀•一　戀上•二　戀下•二　太宰大貳　〔詞花〕雜上•一　贈左大臣長實　〔新古〕秋下•一　〔續後拾〕春下•一　〔新拾〕春下•一　〔續詞花〕夏•一

長實卿母　從三位藤原經平女　〔金葉〕春•一　秋•一　戀上•一　〔詞花〕春•一　贈左大臣母

長遠　六位。鹽飽左衛門尉、藤原　〔續後拾〕雜中•一

長遠　從二位參議。參議菅原秀長男　〔新續古〕戀二•一　參議

長慶院　後村上第一皇子。寬成親王也　〔新葉〕春上•四　春下•三　夏•二　秋上•四　秋下•一　冬•三　離•一　神•二　釋•二　戀一•三　戀三•二　戀四•四　戀五•一　雜上•五　雜中•二　雜下•六　哀•三　賀•三

長賢　權中納言。花山院藤家賢男長親弟　〔新葉〕夏•一　秋下•一

長衡　從二位。從二位菅原國長男　〔新千〕雜中•一　四位　〔新後拾〕戀三•一　從二位

長親　右近大將。花山院權中納言藤家賢子。後號耕雲明魏　〔新葉〕春上•一　春下•三　夏•二　秋上•一　秋下•一　釋•一　戀一•二　戀二•一　戀三•一　戀四•一　戀五•四　雜上•二　雜下•二　哀•二　賀•一

長濟　眞乘寺律師。右大臣家經子　〔後拾〕夏•一　冬•一　雜三•一

〔金葉〕雜下・一 母の夢にみえける歌

長覺 仁和寺阿闍梨。左京大夫顯輔子 〔千載〕秋上・一 秋下・一 〔續拾〕秋上・一 〔續後拾〕冬・一 長寛

【宗】 三畫—七畫

宗于 四位右京大夫。是忠親王御子 〔古今〕春上・一 秋上・一 冬・一 戀三・一 戀五・二 四位 〔後撰〕秋中・一 秋下・一 戀一・一 〔新勅〕戀三・一 〔續千〕戀二・一 戀四・一 〔續後拾〕戀三・一 雜中・一 〔新千〕戀四・一 〔三十六人集〕二七 〔補遺〕一一

宗久 法師俗名平吉大炊助 〔新拾〕雜上・一 〔新後拾〕旅・一 〔新續古〕冬・一 戀二・一

宗氏 五位京極左衞門尉。佐渡守源滿信男 〔續千〕戀四・一 〔續後拾〕雜下・一 〔新千〕冬・一 戀五・一 雜上・一

〔新拾〕雜上・一

宗光 四位。大納言藤原資明男 〔風雅〕戀五・一

宗行 五位下野寺大炊御門小路筒。右京大夫藤原宗茂男 〔新後撰〕雜下・一 〔玉葉〕雜一・一 〔續千〕冬・一 戀三・一 戀四・一 〔風雅〕雜上・二 〔新千〕雜下・一 〔古今和歌六帖〕

宗仲 法師 〔新後拾〕戀三・一 〔新續古〕雜上・一

宗成 四位。木工權頭高階時宗男 〔續拾〕雜秋・一 戀一・一 戀三・一 五位 〔新後撰〕秋下・一 戀二・一 戀四・一 雜中・一 四位 〔玉葉〕戀一・一 〔續千〕夏・二 戀一・二 哀・一 〔續後拾〕雜中・一 哀・一 〔風雅〕雜下・二 〔新千〕哀・一 〔新拾〕釋・一 〔新後拾〕雜下・一

宗助 法印 〔新續古〕神・一

宗延 法師 〔新勅〕雜一・一 〔續詞花〕秋下・一

宗良親王 中務卿。後醍醐皇子妙法院尊澄還俗。天授二年又落飾(一九七一―二〇四五) 〔李花集〕九一二 〔新葉〕春上・五 春下・八 夏・五 秋上・五 秋下・三 冬・四 離・八 旅・三 神・四 釋・八 戀一・三 戀二・三 戀三・四 戀四・三 戀五・三 雜上・七 雜中・七 雜下・四 哀一・三 賀・一

宗武 田安刑和八年薨五十七。國家八論餘言、歌體約言、摘要冠辭考 〔天降言〕三〇九

宗秀 五位左中將。左中將宗實男 〔風雅〕戀四・一

宗秀 五位宮内少輔。刑部權大輔大江時秀男 〔新後撰〕冬・一 雜上・一 〔玉葉〕春下・一 夏・二 秋上・二 秋下・一 旅・一 雜三・一 〔續千〕夏・一 旅・一 雜上・二 哀・一 〔續後拾〕冬・一 雜上・一 〔風雅〕秋中・一 雜下・一 賀・一 〔新千〕秋下・一 旅・一 〔新後拾〕秋下・一 戀四・一

宗秀 五位中務淡路守。四郎左衛門藤原宗泰男 〔新後撰〕戀五・一 〔玉葉〕雜一・一 〔續千〕秋上・一 戀三・二 哀・一 〔續後拾〕秋下・二 戀四・一 〔風雅〕雜中・一 〔新千〕釋・一 戀二・一 雜上・二 雜下・一 〔新拾〕旅・一 〔新後拾〕雜春・一 〔新續古〕雜上・一

【宗 八畫―十畫】

宗長 四位。安倍 〔風雅〕雜上・一 四位

宗長 從三位。刑部卿藤原頼經男 〔新續古〕雜上・一 刑部卿

宗明 正二位大納言。久良親王御子 〔新千〕戀一・一 前大納言 〔新拾〕

釋・一 〔新後拾〕戀四・一

宗直 五位陸奥守。武藏守宣時男 〔續千〕旅・一 雜下・一 〔續後拾〕雜中・一

宗忠公 從一位中御門右大臣。大納言藤原宗俊男 〔新後撰〕賀・一 中御門右大臣 〔玉葉〕春下・一

宗房 前大納言。內大臣藤定房男。號吉田 〔新葉〕春上・一 秋上・一 戀二・一 雜上・一 雜中・二 雜下・一 賀・一

宗宣 四位佐介陸奥守。陸奥守平宣時男 〔新後撰〕秋上・一 戀三・一 雜中・一 五位 〔玉葉〕春下・一 夏・一 秋下・一 冬・二 旅・一 四位 〔續千〕春下・一 秋上・一 戀二・一 戀四・一 雜上・一 雜下・一 哀・一 〔續後拾〕秋上・一 別・一 戀二・一 〔風雅〕秋中・一 戀一・一 〔新千〕雜中・二 〔新後拾〕旅・一 〔新續古〕春下・一 戀四・一

宗宣 從二位中納言。中納言宗泰男 〔新續古〕雜上・一

宗昭 本願寺號覺如上人。法印如信上人子 〔新千〕旅・一

宗俊 四位。木工頭高階時宗男 〔玉葉〕旅・一 四位 〔續千〕雜上・一

宗重 正二位中納言。中納言藤原冬定男 〔新續古〕夏・一 冬・一

宗貞 遍昭に同じ。僧部に委し

宗信 〔續千〕紀宗信。興信法師に同じ。僧部にあり

宗信 法印 〔新拾〕雜上・一 法眼 〔新後拾〕雜春・一 雜下・一 法印

宗泰 六位中沼四良左衞門。淡路守藤原時宗男 〔續拾〕雜春・一 〔新後撰〕秋下・一 雜上・一 〔玉葉〕雜一・一 〔續千〕戀三・一 雜中・一 〔續後拾〕戀一・一 〔風雅〕雜上

一〔新千〕秋下・一

宗泰 五位式部少輔。武藏守平宣時男 〔新後撰〕戀三・一 〔玉葉〕冬・一 〔續千〕秋上・一

宗泰 正三位中納言。中納言藤原宗重男 〔新續古〕戀四・一

宗家 正二位大納言。大宮內大臣藤原宗能男 〔千載〕夏・一 戀一・一 雜中・一 權大納言 〔新勅〕冬・一 釋・一 戀一・一 〔續後撰〕戀一・一 〔玉〕葉秋下・一 〔續詞花〕戀中・一

宗兼 四位修理大夫。近江守藤原隆宗男。至保延六年 〔千載〕戀二・一

宗時 四位。安倍 〔新拾〕雜上・一 四位

宗祐 法師 〔新拾〕雜中・一 〔新後拾〕四・一

宗城 四位侍從。イ巨城。敦固親王御子。至康平元 〔後撰〕戀四・一 五位

宗能 正二位大宮內大臣。中御門藤原宗忠男 〔新勅〕戀五・一 大宮入道內大臣 〔玉葉〕秋上・一

【宗　十一畫—十三畫】

宗基 四位御厨子所預。紀 〔新千〕別・一 四位

宗通 正二位大納言。大宮右大臣藤原宗能男 〔金葉〕雜上・一 大納言 〔新勅〕秋上・一

宗國 藤原 〔續詞花〕冬・一

宗朝 五位小山出羽守。修理權大輔藤原時朝男 〔續千〕戀五・一

宗惠 法師。藤井丹波守 〔新拾〕戀二・一

宗尊親王 一品中務卿征夷大將軍。後嵯峨帝御子 〔續古〕春上・七 春下・二 夏・七 秋上・八 秋下・四 冬・六 釋・二 旅・四 戀一・四 戀二・一 戀三・一 戀四・五 戀五・五 哀・一 雜上・五 雜中・三 雜下・一 賀・一 中務卿親王 〔續拾〕春上・二 夏・二 秋上・二 冬・一 雜春・一 雜秋・一 旅・二 戀一・二 戀

二・一　戀三・三　雜下・一　〔新後撰〕春上・一　秋上・二　秋下・一　冬・三　旅・二　釋・一　神・一　戀二・一　戀六・二　雜上・一　雜下・一　〔玉葉〕春上・二　春下・一　夏・一　秋上・二　秋下・二　冬・三　旅・三　雜一・二　雜二・一　雜三・一　雜四・一　雜五・一　〔續千〕春上・一　秋上・二　秋下・一　冬・一　旅・二　戀一・二　雜上・一　〔續後拾〕春上・一　夏・一　戀一・一　戀二・一　戀三・一　戀四・一　雜下・一　哀・二　釋・一　〔風雅〕夏・二　冬・一　雜中・二　雜下・三　〔新千〕春上・一　夏・二　秋下・一　釋・一　戀一・一　戀三・一　雜上・二　〔新拾〕秋上・一　秋下・一　冬・一　別・一　哀・一　戀三・一　釋・一　雜下・一　〔新後拾〕春上・二　秋上・二　秋下・一　冬・一　雜春・一　雜秋・一　別・一　雜下・一　釋・一　神・一　〔新續古〕春下・一　夏・二　旅・一　戀一・一　戀二・一　雜上・二　雜中・一　雜下・一

宗圓　熊野別當法眼。法眼辨宗子　〔千載〕秋下・一　〔新古〕戀四・一　〔新勅〕釋・三　雜二・一　〔續拾〕雜春・一

宗隆　從二位中納言。中納言藤原長方男　〔千載〕雜中・一 五位

宗圓　法印、木工頭時宗男　〔續千〕戀三・一　雜上・一　〔續後拾〕戀一・一

宗經　從二位中納言。大納言平經親男　〔風雅〕冬・一　雜上・一 權中納言　〔新千〕雜中・一 前中納言　〔新拾〕秋上・一　旅・一

宗經　四位。大納言藤原宗家男　〔新勅〕雜二・一 四位

【宗　十四畫—二十畫】

宗遠 五位伊達彈正少弼。宮內少輔藤原朝本男 〔詞花〕別・一 〔新勅〕雜中・一 〔新古〕別・一 〔新後拾〕雜春・一 戀三・一

宗滿 五位黒田左衛門尉。佐渡守源滿信男 〔風雅〕雜下・一

宗實 正二位大納言。隨心院藤原冬信男 〔新後拾〕戀四・一 權大納言

宗範 五位赤松宮內少輔。信濃守源範資男 〔新拾〕戀二・一

宗興 六位。中原 〔後撰〕旅・一

宗興 遠野 〔新葉〕雜上・一

宗親 五位中沼駿河權守。淡路守藤原宗秀男 〔風雅〕雜下・一

宗濟 法眼 〔新後拾〕雜下・一

宗嚴 法眼。法印宗圓子 〔續千〕雜中・一

宗覺 法師 〔新後拾〕戀四・一 雜下・一

宗鏡 禪師 〔新後拾〕雜上・一

宗顯 五位。高階 〔新後拾〕戀二・一

宗繼 正二位大納言。中納言藤原宗宣男 〔新續古〕冬・一 旅・一 權大納言

【忠 一畫―七畫】

忠 五位丹波守。但馬守源弼男 〔古今〕物名・一

忠久 四位。神主賀茂經久男 〔玉葉〕雜一・一

忠仁公 從一位染殿攝政。閑院左大臣藤原冬嗣公男 〔古今〕春上・一 前太政大臣 雜上・一 左若前太政大臣

忠臣 六位。菅野。大系圖考菅原清公三男也菅聖廟伯父也歌人入古今云々 〔古今〕戀五・一 〔寛平后宮歌合〕戀・一

忠行 五位。若狹守。遠江守藤原有貞男。至延喜六 〔古今〕戀四・一 〔後撰〕秋下・一

忠守 四院典藥頭宮內卿。采女正丹波忠茂男 〔玉葉〕雜一・一 四位 〔續千〕秋下・一 旅・一 戀三・一 〔續後拾〕戀一・一 雜中・一 〔風雅〕雜上・一 〔新拾〕旅・一 〔新續古〕

戀三・一　雜中・一　雜下・一

忠有　四位。藤原　〔新千〕戀三・一　四位

忠光　從一位大納言。藤原資明男　大　〔新後拾〕春下・一　冬・一　雜春・一　賀・一　權大納言　〔新續古〕春上・一　賀・一

忠良　正二位大納言。六條攝政藤原基實公男　〔千載〕戀三・一　戀四・二　戀五・一　雜中・一　右近中將　〔新古〕夏・三　戀二・一　雜上・一　前大納言　〔新勅〕冬・一　戀四・一　雜一・一　雜二・一　雜三・二　〔續後撰〕春中・一　秋中・一　冬・一　戀五・一　雜中・一　〔續古〕春上・一　春下・二　秋上・二　秋下・一　戀一・二　戀五・一　雜中・一　雜下・一　〔續拾〕冬・一　戀二・一　雜下・一　〔新後撰〕春下・一　夏・一　釋・一　雜中・一　〔玉葉〕夏・一　戀一・一　戀五・一　雜一・一　雜四・一　雜五・三　釋・一　神・一　〔續千〕戀三・一　〔續後拾〕夏・三　旅・一　〔風雅〕春上・一　春中・一　秋中・一　雜中・一　釋・一　〔新千〕旅・一　雜上・一　〔新拾〕冬・一　旅・一　釋・一　〔新後拾〕雜下・二　〔新續古〕戀一・一　戀三・二　雜上・一　雜中・一

忠見　六位攝津守。右衞門尉壬生忠岑男　〔後撰〕雜一・一　〔拾遺〕春・一　夏・三　冬・一　別・一　雜上・一　雜下・二　戀一・一　戀二・一　雜春・一　雜秋・二　〔新古〕春上・二　夏・一　雜中・一　雜下・一　〔續後撰〕春上・二　秋中・一　戀四・一　雜下・一　〔玉葉〕春下・一　旅・一　〔續千〕旅・一　〔續後拾〕春上・一　雜上・一　〔風雅〕春下・一　〔新千〕戀二・一　〔新拾〕春下・一　戀三・一　雜上・一　此歌風雅春上に源信明とあり　雜中

・一　雜下・一　〔三十六人集〕一六八　〔補遺〕四二
〔天德內裏歌合〕四

忠君　四位右兵衛督。藤原貞信公男　〔拾遺〕雜賀・一　連歌。四位

忠秀　五位若津常陸介。豐後守惟宗忠宗男　〔續千〕雜下・一　〔續後拾〕
雜上・一

忠快　法印。中納言教盛子　〔玉葉〕雜四・一　雜五・一

忠快　法師　〔金葉〕雜上・一

忠成　四位。日吉禰宜親成男　〔新勅〕神・一　〔續後撰〕雜下・一
〔續古〕神・一　戀三・一　〔續拾〕雜春・一　〔新拾〕
雜上・一

忠成　四位。大膳大夫大江廣元男　〔續古〕戀四・一　四位　〔玉葉〕旅・一

忠成　前中納言　〔新葉〕春下・一　夏・一　神・一　戀三
・二

【忠】八畫－九畫

忠依　五位隼人正。右中辨平希世男。至天延二年　〔拾遺〕戀九・一

忠定　從二位參議。大納言藤原兼宗男　〔新古〕戀一・一　藤原忠定　〔續後
撰〕秋中・一　戀二・一　雜上・一　前參議　〔續古〕春中
・二　哀・一　雜上・二　〔續拾〕戀五・一　雜上・一
〔新後撰〕雜上・一　〔玉葉〕秋下・一　冬・一　〔續千〕
戀二・一　〔續後拾〕戀一・一　〔風雅〕夏・一　〔新千〕
雜上・一　〔新後拾〕夏・一　秋上・一　〔新續古〕春
上・一　春下・一　冬・一　戀三・一　戀四・一　雜
上・一

忠性　叡山權僧正左泉院。中納言宗冬子　〔續千〕哀・一　權大僧都　〔風雅〕
雜下・一　權僧正　〔新千〕釋・一　雜下・一　〔新拾〕雜
中・一

忠幸 五位。大江 〔新拾〕戀三・一

忠長 四位。爾正祝部國長男 〔新後撰〕冬・一 神・一 〔續千〕戀二・一 〔新千〕哀・一

忠宗 五位使豐後守。常陸介惟宗忠景男 〔新後撰〕戀四・一 雜中・一 〔續千〕雜上・一

忠命 法橋 〔後拾〕夏・一 哀・一 〔金葉〕秋・一 〔續詞花〕戲・一

忠季 正二位大納言。大納言藤原公蔭男 〔風雅〕夏・一 秋下・一 冬・二 戀二・一 戀三・一 戀四・一 戀五・一 雜中・一 左近中將 〔新千〕秋下・一 冬・二 戀一・一 雜上・一 權大納言 〔新拾〕夏・一 秋上・一 賀・一 戀三・二 雜上・一

忠季 五位宮内、輔。神祇伯源顯仲男。至大治三年 〔金葉〕春・一 秋・一 賀・二 〔詞花〕春・一 夏・一 〔續詞花〕賀・一 神・一

忠房 四位左京大夫、藤原興嗣朝臣男。延喜十一年左少將十八年四位正少將 〔古今〕秋上・一 戀二・一 雜上・一 雜下・一 五位 〔後撰〕秋下・一 冬・一 戀二・二 戀四・三 四位 〔拾遺〕神・一 戀二・一 戀四・一 雜春・三 古今雜體讀人不知 〔古今和歌六帖〕

忠房親王 彈正尹任中納言文保三兂品親王宣下。後宇多院御猶子 〔玉葉〕戀二一・一 前中納言忠房 〔續千〕秋上・一 秋下・一

忠度 四位薩摩守。刑部卿平忠盛男（一八〇五—一八四五） 〔平忠度集〕一〇一 〔千載〕春・一 讀人不知 〔新勅〕戀三・一 四位 〔玉葉〕旅・一 戀一・二 雜五・一 〔續後拾〕夏・一 〔風雅〕秋中・一 釋・一 〔新拾〕戀一・一 戀二・一

忠貞 五位島津民部大輔、惟宗 〔風雅〕雜上・一 〔新千〕戀一・

一〔新拾〕戀三・一

忠信　正二位大納言　〔千載〕戀八・一　大納言

忠信　正二位大納言。坊門內大臣藤原信清男　〔新勅〕秋下・一　戀一・一　戀三・二　雜一・一　權大納言　〔續後撰〕夏・一　秋上・一　〔續古〕雜上・一　賀・一　〔續拾〕戀二・一　〔新續古〕雜上・一　前大納言

【忠　十畫—十三畫】

忠時　六位坂田上郎。陸奥守平重時男　〔續拾〕雜秋・一

忠能　五位。出羽守藤原秀茂男　〔新後撰〕雜下・一　〔續千〕雜上・二

忠岑　六位。右衛門府生。散位壬生安綱男（一五二八—一六二五）古今集撰者　〔古今〕春上・一　夏・二　秋上・五　秋下・四　冬・一　物名・二　戀一・一　戀二・七　戀三・二　哀・五　雜上・二　雜體・二長歌一。誹諧歌一　〔後撰〕夏・一　秋上・一　秋中・一　秋下・一　戀二・二　戀三・一　戀六・一　雜一・一　雜二・一　〔拾遺〕春・三　夏・一　秋・二　物名・四　雜下・一　戀三・一　〔新古〕夏・一　旅・一　雜中・一　〔新勅〕戀四・一　〔續後撰〕春中・一　秋中・一　戀二・一　〔續古〕冬・一　戀四・一　雜下・二　〔玉葉〕冬・一　賀・一　戀一・一　戀三・二　戀四・二　〔續千〕秋上・一　〔續後拾〕秋上・一　戀一・二　〔新千〕雜下物名一。誹諧一　〔新拾〕春下・一　〔新後拾〕春上・一　夏・一　〔古今和歌六帖〕〔三十六人集〕五九　長歌一　〔補遺〕八一　長歌一　〔寬平后宮歌合〕冬・一

忠兼　五位小貳、伯耆守隆忠男、至永久三年　〔詞花〕夏・一　秋・一　〔新

拾〕戀五・一

忠兼 從三位、從二位藤原忠行男 〔續古〕哀・一 雜上。一 從三位 〔續拾〕秋上・一 冬・一 雜秋・一 雜中・二 〔新後撰〕別・一 戀四・一 〔玉葉〕戀二・一 雜一・一 〔新後拾〕戀五・一 〔續詞花〕夏・一

忠家 正二位大納言。大納言藤原長家男 〔後拾〕戀三・一 大納言 〔千載〕雜上・一 〔新古〕雜上・一 〔新勅〕雜三・一

忠家公 正二位九條前攝政右大臣。洞院敎實公男 〔續古〕夏・一 冬・一 戀四・一 哀・一 雜中・一 前右大臣忠 〔續拾〕戀五・一 雜中・一 雜下・忠九條前攝政右大臣

忠淸 五位刑部大輔。左馬佐藤原淸綱男 〔詞花〕雜上・一 〔續詞花〕夏・一

忠國 五位。伊豫介藤原連永男 〔後撰〕戀二・一 雜四・一

忠通公 從一位法性寺入道前關白太政大臣。富家藤原忠實男 〔金葉〕春・三 夏・三 秋・二 戀上・四 戀下・一 雜上・一 雜下・一 攝政左大臣 〔詞花〕春・一 冬・一 戀上・一 戀下・一 雜下・三 關白前太政大臣 〔千載〕春上・一 夏・一 秋上・一 賀・一 戀三・一 雜上・一 雜中・一 〔新古〕秋上・二 冬・一 戀一・一 雜上・二 雜下・一 釋・一 法性寺入道前關白太政大臣 〔新勅〕釋・一 戀五・一 雜三・一 〔續後撰〕春上・一 秋下・一 雜上・一 〔續古〕釋・一 〔續拾〕冬・一 〔新後撰〕夏・二 秋下・一 〔玉葉〕戀五・一 雜四・一 釋・一 〔續千〕神・一 賀・二 〔續後拾〕雜上・一 釋・一 〔風雅〕雜下・一 〔新千〕別・一 神・一 戀五・一 雜上・一 賀・一 〔新拾〕春上・一 春下・二 戀四・一

〔新後拾〕春下・一　〔新續古〕秋上・一　〔續詞花〕春下・一

忠基　正三位參議。大納言藤原守實男　〔續後撰〕戀五・一 左近中將　〔續拾〕雜上・一　雜下・一　〔新續古〕戀二・一

忠基公　從一位後己心院關白左大臣。後報恩院藤原經敎公男　〔新拾〕冬。一　旅・一 權大納言　〔新續古〕春下・一　夏・一 前關白九條　〔新續古〕秋上・一 後己心院前關白左大臣

忠敎　正二位大納言、京極關白藤原師實男　〔金葉〕秋・一　戀下・一 民部卿　〔千載〕賀・一 大納言　〔新古〕雜上・一　〔新勅〕戀四・一　戀五・一　〔續後撰〕戀一・二　〔續詞花〕戀上・一

忠敎公　從一位報恩院攝政關白左大臣九條藤原忠家男　〔續拾〕秋上。一 右大臣　〔新後撰〕賀・一 前關白左大臣

忠資　四位。從二位藤原伊忠男　〔續拾〕夏・一 四位　〔新後撰〕旅・一　戀六・一　雜下・一　〔續千〕雜下・一

忠景　五位島津常陸介。周防守惟宗忠綱男　〔續古〕戀二・一　哀・一　〔續拾〕秋下・一　戀三・一　雜中・一　〔新後撰〕秋上・一　釋・一　雜上・二　〔玉葉〕雜上・二　〔續千〕旅・一　雜上・一　雜中・一　〔續後拾〕雜中・一　〔新千〕雜中・一　〔新拾〕雜中・二　〔新續古〕戀四・一

忠尋　天台座主　〔續詞花〕戀上。一

忠雲　前大僧正。中院大納言源光忠三男　〔新葉〕釋・一　雜中・一　雜下・一

忠盛　四位刑部卿、讃岐守平正盛男。至仁平元年（一七五六—一八一三）　〔金葉〕秋・二　雜上。一　雜下・一 四位　〔詞花〕雜上・二　〔千載〕戀二・一　〔新古〕雜上・一　〔續後撰〕戀三・一　〔續拾〕春下・一　〔新後撰〕春下・一　〔玉葉〕旅・一　雜四・

一　神・一　〔風雅〕春下・一　〔新千〕夏・一　〔續詞花〕冬・一　戀下・一　物名・一

【忠　十三畫―十九畫】

忠義公　兼通公に同じ

忠經公　正二位花山院入道前右大臣。花山院藤原兼雅公男　〔新古〕秋上・一　哀・一　雜上・一　右大將　〔續古〕冬・一　花山院入道前右大臣　〔玉葉〕雜四・一　〔新千〕戀五・一

忠源　叡山大僧正石泉。參議忠定子　〔新後撰〕釋・二　雜上・一　〔玉葉〕釋・二　神・一　〔續千〕釋・二　〔風雅〕雜上・一　〔新千〕釋・一　哀・一

忠業公　從一位瑞雲院贈左大臣。儀同三司藤原兼綱男　〔新續古〕賀・一　瑞雲院贈左大臣

忠隆　五位齋宮寮頭。刑部少輔藤原基忠男、至保延六年　〔金葉〕春・一　秋・一

戀上・一　戀下・一

忠嗣　從三位。關白九條藤原忠家男　〔風雅〕雜中・一　從三位

忠嗣　正二位大納言。參議藤原通輔男　〔新續古〕戀三・一　前大納言

忠實公　從一位富家攝政關白後二條師通男　〔新古〕哀・一　雜中・一　知足院入道前關白太政大臣　〔新勅〕賀・一　〔續後撰〕賀・一　〔續拾〕賀・一　〔續千〕戀一・一　〔新千〕賀・一

忠廣　五位萩左京亮。刑部少輔大江忠義男　〔新後拾〕雜上・一

忠節　多　〔續詞花〕神・一

忠幹　五位駿河守（村上天皇天曆頃之人也）。長門守橘長盛男、至天曆十　〔拾遺〕雜上・一　忘るなよ程は雲井の歌也　〔續古〕旅・一

忠頼　五位。神主　〔金葉〕雜下・一　連歌

忠顯　五位。安倍　〔續千〕雜上・一

忠顯　右衛門督。六條庶流中納言源有忠男歟　〔新葉〕旅・一

九畫

直　八畫を見よ。

柔子內親王　宇多帝御女　〔後撰〕雜一。一　齋宮のみこ

皇太子　大炊王　〔萬葉〕卷二〇・一

軍王　〔萬葉〕卷一・一　長歌卷一・一

屋主　丹比　〔萬葉〕卷八・一

契沖　圓珠庵（二三〇〇―二三六一）萬葉代匠記　〔漫吟集〕五一五

津守國助女　〔新後撰〕戀一・一　〔續千〕夏。一　冬。一　戀二・一　〔續拾〕雜下・一　〔新千〕春下・一

彥良　從三位參議。忠房親王御子　〔新千〕戀三・一　前參議　〔新拾〕雜中・一

風村　從三位　〔新續古〕雜下。一　歌。誹諧歌。大藏卿　〔續詞花〕戲・一

厚見王　〔萬葉〕卷四・一　卷八。二

重阿　上人　〔新後拾〕釋・一　〔新續古〕釋。一

柳原安子　慶應二年歿八十四　〔月桂一枝〕

按察御息所　左大臣左衛女　〔拾遺〕雜戀・一　〔新勅〕戀五・二　更衣正妃

帥前內大臣　伊周に同じ

則祐　律師。赤松次郎則村子　〔新千〕戀五・一　雜上・一　〔新拾〕戀一・二　戀二。一　雜上・一　〔新後拾〕雜秋・一　〔新續古〕雜上・一

洞院攝政左大臣　教實公に同じ

南院式部卿親王女　貞保親王女に同じ

持統天皇　諱鸕野。天智帝御子（一三〇五―一三六二）　〔新古〕夏・一　持統

天皇御歌 〔新勅〕旅・一 〔萬葉〕卷一・一 卷三・一

思順 上人艸川眞觀坊 〔續古〕釋・一 〔續古〕釋・一

染殿攝政 忠仁公に同じ

祇園 〔玉葉〕神・一

故鄕豐浦寺の尼 〔萬葉〕卷八・二

茂睡 戸田（二二九四―二三六六）梨本集 〔戸田茂睡歌集〕一一二七

香園院關白 師忠公に同じ

倉橋部女王 〔萬葉〕卷三・一

【若】

若鷹 山口 〔萬葉〕卷四・一 卷五・一

若湯座王 〔萬葉〕卷三・一

【英】

英明 四位左中將。齋世親王御子。天慶四年卒 〔後撰〕戀五・一 四位

英時 四位武藏守。平 〔續後拾〕旅・一 戀四・一 〔風雅〕雜上・一 〔新拾〕戀一・一 〔新後撰〕雜秋・一 戀三・一

【首】

首鷹 商長 〔萬葉〕卷二〇・一

首麿 坂田部 〔萬葉〕卷二〇・一

【珍】

珍海法師母 左馬權頭資經女 〔金葉〕雜下・一

珍覺 僧都 〔續後撰〕神・一 〔新後撰〕戀四・一

【建】

建春門院中納言 〔玉葉〕雜四・二

建禮門院右京大夫 宮内少輔藤原伊利女 〔建禮門院右京大夫集〕三五四 〔新勅〕戀三・一 雜一・一 〔玉葉〕

戀三・一　戀四・一　戀五・一　雜一・一　雜二・一　雜四・三　雜五・一〔風雅〕春中・一　雜上・一　雜下・三　賀・一〔新千〕雜中・二〔新拾〕賀・一〔新後拾〕春上・一〔新續古〕哀・一　雜下・一

【亭】

亭子院　宇多天皇に同じ

亭子院今子〔後撰〕雜二・一

【美】

美材　五位掃部頭。大内記小野俊生男。延喜二年卒〔古今〕秋上・一　戀二・一　一〔後撰〕秋中・一〔寛平后宮歌合〕秋・一　戀・一

美作三位　美濃守大江眞經妻〔後拾〕哀・一

美濃〔續詞花〕春上・一　夏・一

美樹　河津。安永六年歿五十七〔静屋歌集〕八〇　長歌二一

【秋】

秋成　上田。文化六年歿七十六。雨月物語、春雨物語、冠辭考續貂、よしやあしや〔藤簍冊子〕六二七　長歌一八

秋持　物部〔萬葉〕卷二〇・一

秋岑　六位。美濃守紀善岑男〔古今〕夏・一　冬・一〔古今和歌六帖〕

秋庭　田邊〔萬葉〕卷一五・一

【相】

相方　四位左中辨。六條左大臣源重信男。至長德二年〔拾遺〕哀・一　四位〔後撰〕雜五・一〔續詞花〕夏・一

相如　高岳〔拾遺〕物名・一

相如　五位出雲守。右中將藤原相信男。（イ内藏頭助俊男）至永祚元年〔詞花〕戀下・一　雜下・一〔新勅〕雜二・一〔續後拾〕物名・一

別•一〔風雅〕戀五•一〔新千〕戀二•一

相圓 法師 〔續詞花〕物•一

相摸 中宮進源賴光女 〔後拾〕夏•三 秋下•一 冬•二 別•二 哀•二 戀一•二 戀二•四 戀三•四 戀四•九 雜一•二 雜二•七 雜五•二〔金葉〕戀上•三 雜上•一〔詞花〕夏•一 戀下•二 雜上•一〔千載〕冬•一 戀三•一 戀五•二 雜上•一〔新古〕夏•一 秋上•三 哀•一 戀一•一 戀三•一 戀五•二 釋•一〔新勅〕夏•二 秋上•一 冬•一 戀一•一 戀三•一 戀五•二 雜一•四 雜二•四 雜三•一 雜四•一〔續後撰〕秋中•一 冬•一 神•二 戀四•一 戀五•一〔續拾〕戀三•一〔玉葉〕春下•一 戀一•一 戀二•一 戀三•一 戀四•一 戀五•一 雜•一〔續千〕春上•一 秋上•一 冬•一 雜中•一〔續後拾〕旅•一 戀三•一 賀•一〔風雅〕戀三•一 戀五•一〔新千〕冬•一 戀三•一〔新拾〕秋下•一〔新後拾〕戀一•一〔新續古〕秋上•一〔續詞花〕秋上•一 冬•一 戀中•一 戀下•一 戲•一

相摸母 能登守保胤女 〔金葉〕雜下•一 連歌

【茂】

茂子 土岐 〔筑波子歌集〕一六一 長歌二

茂成 四位治部卿。從三位和氣明成男 〔新續古〕戀三•一 四位

茂重 五位長井。因幡守大江泰重男 〔新後撰〕戀三•一 雜上•一〔玉葉〕秋下•一 戀三•一〔新千〕雜中•一〔新拾〕旅•一〔新續古〕戀四•一 戀五•一 神•一

茂睡　戸田（二二九四｜二三六六）梨本集。〔戸田睡歌集〕一二七

【郁】

郁芳門院　媞子齋院准后。白川帝皇女（一七三四｜一七五六）〔玉葉〕雜一・一

郁芳門院安藝　〔金葉〕春・一　〔新勅〕釋・一　戀三・一　〔續後撰〕春下・一　戀二・一　〔新後撰〕釋・一　戀一・一　〔玉葉〕夏・一　賀・一　〔續千〕春上・一　〔續後拾〕秋上・一　〔風雅〕夏・一　〔新千〕春上・一　〔新後拾〕冬・一

郁芳門院宣旨　〔風雅〕雜下・一

【幽】

幽仙　律師興福寺。右近將監宗道子　〔古今〕別・二

幽眞　釋。明治九年歿六十五　〔空谷傳聲集〕一三六九

幽提　法師　〔新續古〕冬・一

幽齋　細川（二二九四｜二二七〇）〔衆妙集〕六八二

【恆】

恆助法親王　先品圓滿院。後深草帝御子　〔新後拾〕[illegible]・一

恆佐公　正三位一條右大臣左大將藤原良世男　〔新古〕別・一　一條右大臣　〔新勅〕雜四・一

恆明親王　一品常磐井宮式部卿。龜山帝御子　〔續千〕春下・一　冬・一　〔續後拾〕戀四・一　〔風雅〕夏・二　戀四・一　戀五・一　雜下・一　〔新千〕秋上・一　戀一・一　戀二・一

恆雲法親王　龜山帝御子　〔新千〕雜下・一

恆德公　從一位法住寺太政大臣。九條藤原師輔男　〔拾遺〕雜春・一　左大臣　〔後拾〕雜五・一　〔千載〕雜中・一　拾遺同歌也。法住寺太政大臣　〔新古〕秋上・一　恆德公

恆蔭 イ常景。五位。坂上。自延喜十八年至延長三年 〔後撰〕戀四・一

【則】

則光 四位陸奥守。橘敏政子 〔金葉〕別・一 位四 〔續詞花〕哀・一

則成 五位周防守。備後守源道成男。至萬壽三 〔後拾〕戀一・一

則長 五位越中守。陸奥守橘則光男。長元七年四月卒 〔後拾〕秋上・二 別・
一 〔新續古〕別・一 〔續詞花〕別・一

則忠朝臣女 〔拾遺〕雜賀・一

則俊 四位遠江守。木工頭藤原永光男 〔續古〕秋下・一 位四 〔續拾〕戀
一・一 雜上・一 釋・一 位四

則善 五位勘解由次官。大江。至天德四年 〔後撰〕別・一

【待】

待賢門院中納言 〔金葉〕春・一

待賢門院加賀 母齋院新肥前 〔千載〕戀三・一

待賢門院兵衛 神祇伯顯仲女 〔金葉〕春・一

待賢門院安藝 皇太后宮少進橘俊宗女 〔詞花〕雜下・一 〔千
載〕夏・一 旅・一 戀三・一 戀四・一〔新古〕夏・一

待賢門院堀川 神祇伯顯仲女 〔金葉〕夏・一 秋・二 冬・
一 戀下・二 前齋院六條 〔詞花〕夏・一 雜上・一 〔千
載〕春上・四 秋上・二 秋下・一 旅・一 戀一・一
戀三・一 戀五・一 雜上・一 雜下・三 〔新古〕秋
上・一 釋・一 〔新勅〕春上・一 戀一・二 戀三・
一 戀五・一〔續後撰〕春中・一 夏・一 冬・一 戀
一・一 戀二・一 戀五・一 旅・一 〔續古〕春下・
一 旅・一 戀四・一 哀・一 賀・一 〔續拾〕秋上
・一 戀三・二 雜下・一 〔新後撰〕戀三・一 雜下
・一 〔玉葉〕戀三・一 雜一・二 雜四・二 釋・一

〔續千〕釋・一　戀一・一　〔續後拾〕旅・一　戀二・一　〔風雅〕夏・一　雜下・一　〔新千〕雜上・一　〔新拾〕哀・一　戀四・一　〔新後拾〕秋上・一　〔新續古〕戀四・一

待賢門院新少將　右少將俊頼女　〔新古〕哀・一 新少將　〔新拾〕哀・一　戀三・一　〔續詞花〕春上・一　戀中・一　雜中・一

【是】

是心院關白　師良公に同じ

是法　法師　〔新千〕雜下・一　〔新拾〕戀三・一　雜中・一　〔新後拾〕雜秋・一

是忠　五位。菅原　〔千載〕戀二・一　雜中・一

是忠親王　一品式部卿。光孝帝御子。　〔後撰〕戀一・一　これたゞのみこ

是則　五位加賀守。坂上好蔭男。古今時御所預延喜朱雀二代仕之（一一五九〇）　〔古今〕秋下・二　冬・二　戀二・一　戀五・一　雜上・一　〔後撰〕春上・一　春中・一　戀二・一　戀三・二　雜四・一　〔拾遺〕春・一　夏・一　戀二・一　〔新古〕春下・一　秋上・一　冬・一　戀一・二　戀三・一　戀五・一　〔新勅〕春上・一　〔續後撰〕冬・一　〔續古今〕春下・一　戀一・一　戀三・一　戀四・一　雜中・一　〔續千〕戀二・一　戀四・一　〔續後拾〕秋下・一　〔新千〕冬・一　雜上・一　〔新拾〕秋下・一　冬・一　〔新後拾〕秋上・一　〔新續古〕秋下・一　〔三十六人集〕五七　〔古今和歌六帖〕〔寛平后宮歌合〕冬・一　〔亭子院歌合〕初春・三　季春・二

是茂　從三位中納言源。光孝帝御子。天慶四年薨五十七　〔後撰〕戀四・一　源是茂朝臣

【保】

保已一 塙。文政五年歿七十七。羣書類從、續羣書類從 〔松山集〕六五三

保光 從二位中納言。代明親王御子 〔新續古〕秋上。一

保季 從二位。刑部卿藤原重家男 〔新古〕夏・一 戀四・一 雜上・一 四位 〔續古〕戀三・一 從三位 〔玉葉〕雜一・一 〔新續古〕戀二・一 神・一

保昌 四位攝津守。左馬頭藤原致忠男。長元九年九月卒 〔後拾〕賀。一 四位

保胤 五位大內記。賀茂丹波介慶滋忠行男。長德四年卒 〔拾遺〕哀・一

保能 五位星野三河守。三河守藤原忠能男 〔續千〕雜上・一 雜中。一 〔續後拾〕旅。一 〔新千〕雜上・一 雜下・一

保綱 五位保津美作守。三郎源光重男 〔新續古〕戀三・一 哀・一

【紀】

紀女郎 天武帝皇女 〔玉葉〕旅・一 〔萬葉〕卷四・七 卷八・五 〔古今和歌六帖〕

紀有常女 〔古今〕戀五・一

紀伊內親王 桓武帝御女 〔後撰〕戀三・一 紀內親王

紀伊式部 上東門院女房。紀伊守藤原俊忠女 〔後拾〕冬。一 〔新千〕別・一

紀乳母 陽成院御乳母。從五位上紀全子 〔古今〕物名・一 雜體・一 誹諧歌 〔後撰〕戀一・一 戀二。一

紀皇女 〔玉葉〕旅・一 戀・一 〔萬葉〕卷三・一 〔古今和歌六帖〕

紀鄕 〔萬葉〕卷五・一

【持】

持之 四位細川中務少輔。右京大夫源滿元男 〔新續古〕夏・一 秋下・一 戀四・一 戀五一 四位

持元　五位細川右馬助。右京大夫源滿元男　〔新續古〕秋上。一
持世　四位大内修理大夫。多々良　〔新續古〕秋下。一　冬。一　戀三。一 四位
持男　縣犬養　〔萬葉〕卷八。一
持房　前參議。大納言源師重王男　〔新葉〕夏。一　冬。一　雜中。一
持信　五位一色兵部少輔。修理大夫源滿範男　〔新續古〕秋上。一
持康　從二位大納言。大納言源俊康男　〔新續古〕雜中。一 四位
昭清　法印石清水別當。法印增清子　〔新勅〕雜三。一
持賢　四位細川右馬頭。右京大夫源滿元男　〔新續古〕賀。一　雜上。一 五位

【昭】

昭平法親王　四品。天暦帝御子　〔續古〕雜下。一 入道兵部卿昭平親王
昭空　上人　〔新千〕釋。一
昭祐　法印　〔新後拾〕雜秋。一
昭訓門院大納言　〔新後撰〕戀四。一　〔玉葉〕戀一。一　〔續千〕戀二。一　〔風雅〕秋下。一　戀四。一
昭訓門院小督　法眼行濟女　〔續千〕戀一。一　哀。一 行尼法師妹　〔續後拾〕雜下。一 行尼妹　〔新千〕夏。一
昭訓門院春日　大納言爲世女　〔續千〕夏。一　秋下。一　冬。一　戀一。一　戀二。一　哀。一　〔續後拾〕春下。一　夏。一　冬。一　戀三。一　哀。一 權中納言公宗母　〔風雅〕戀二。一　戀三。一　戀五。三 權大納言公宗母　〔新千〕春上。一　秋下。一　冬。一　戀三。二　戀四。一　雜下。一 中宮大夫公宗母　〔新拾〕戀一。一　戀二。一　戀四。一　雜中。一　〔新後拾〕夏。一　別。一　戀四。一　〔新續古〕春上。一　春下。一　秋下。一　旅。一　戀二。一　戀四。一　雜上。一　雜中。一

昭訓門院新大納言 〔新千〕賀・一

【春】

春日 〔新古〕神・二 〔續古〕神・一 〔玉葉〕神・三
〔風雅〕神・三 〔新拾〕神・一

春日王 〔萬葉〕卷三・一 卷四・一

春花門院辨 中納言定家女 〔玉葉〕雜四・一 信實朝臣の夢に見えける歌

春風 五位右少將。小野。至寬平 〔古今〕戀三・一 雜下・一

春時 五位駿河守。河守藤原齊時男 〔後拾〕戀三・一

春庭 本居。文政十一年歿六十六。道廼佐喜草 〔後鈴屋集〕一七五九

春海 村田。文化八年歿六十六 〔琴後集〕一六五四 長三〇 旋一

春宮大藏卿 遊義門院太藏卿に同じ

春宮少將 永陽門院少將に同じ

春宮左近 三條院女藏人左近に同じ

春滿 荷田。元文元年歿六十八。萬葉童子問、萬葉僻案抄 〔春葉集〕六四七

春誓 法橋。軒端肥前子 〔續後撰〕釋・一 〔續拾〕雜春・一
〔玉葉〕神・一

春澄善繩朝臣女 〔後撰〕戀四・一

春衡 四位。右京大夫三善康衡男 〔續千〕戀二・一 四位

【宣】

宣久 從三位。賀茂 〔新後拾〕雜春・一 從二位

宣方 從三位。三河守藤原資能男 〔玉葉〕雜一・一 從三位

宣平 五位。津守 〔續千〕戀二・一

宣令 土理 〔萬葉〕卷三・一 卷八・一

宣旨 〔玉葉〕六條院宣旨に同じ

宣旨典侍 〔續後拾〕夏・一 戀二・一 戀四・一

宣光門院五條 〔新千〕雜下・一

宣光門院新右衛門督　〔風雅〕夏・一　秋下・一　戀一・一　戀二・一　戀三・一　戀四・一　雜下・一　〔新續古〕雜中・一

宣明　從二位大納言。參議藤原經宣男　〔新千〕雜中・一　前中納言　〔新拾〕冬・一　戀三・二　權大納言　〔新後拾〕雜秋・一

宣直　五位左近將監。左近將監平宣房男　〔玉葉〕夏・一

宣長　本居。享和元年歿七十二。古事記傳、排蘆小舟、石上私淑言、玉勝間　〔自撰歌〕一四九七　旋頭歌一

宣政門院　後醍醐帝御女　〔新千〕戀三・一　戀四・一　雜上・二　雜中・一　〔新葉〕雜下・二

宣時　四位陸奧守。武藏守平朝直男　〔續拾〕冬・一　戀二・一　雜中・一　〔新後撰〕夏・一　秋下・一　冬・一　戀六・一　雜上・二　雜下・一　〔玉葉〕秋下・一　冬・一　雜一・二　雜五・一　釋・一　〔續千〕夏・一　戀二・二　戀三・一　戀四・二　雜中・一　〔續後拾〕春下・一　夏・一　戀四・一　雜中・一　雜下・一　〔風雅〕冬・一　〔新千〕秋上・一　戀二・一　雜下・一　哀・一　〔新拾〕夏・一

宣陽門院　准后。後白川帝御女覲子　〔玉葉〕雜四・一

宣源　阿闍梨　〔金葉〕戀一・一

宣耀殿女御　〔續千〕哀・一　〔玉葉〕戀三・一

【皇太后宮】

皇太后宮大夫俊成女　〔六女集〕六一四　〔新古〕春上・一　春下・三　夏・二　秋上・四　秋下・四　冬・三　哀・一　旅・二　戀二・二　戀四・四　戀五・一　雜上・一　雜下・一　〔新勅〕秋下・一　戀一・一　戀三・一　戀四・三　雜一・二　侍從具定母　〔續後撰〕春下・一

冬・一 釋・一 戀一・二 戀二・一 戀三・一 戀四・一 雜中・一 雜下・一 〔續古〕秋下・二 旅・一 戀二・一 戀三・一 雜上・一 雜下・一 〔續拾〕春下・二 秋上・二 雜秋・二 冬・一 戀四・一 雜下・一 〔新後撰〕春下・一 秋下・一 冬・一 釋・一 戀二・一 戀五・一 賀・一 〔玉葉〕夏・二 秋下・二 旅・一 雜一・一 雜五・一 〔續千〕夏・一 秋下・三 戀三・一 戀四・一 〔續後拾〕春下・一 秋下・一 戀一・一 戀四・一 雜上・一 〔風雅〕春下・一 夏・二 戀一・一 雜上・一 〔新千〕春下・一 夏・一 冬・一 戀一・一 戀四・一 〔新拾〕秋上・一 戀一・一 〔新後拾〕春下・一 夏・一 秋上・三 〔新續古〕春下・一 夏・一 戀一・二

皇太后宮五節 三條院皇后宮五節に同じ

皇太后宮若水 〔千載〕戀二・一

皇太后宮陸奥 陸奥守藤原朝光女 〔後拾〕戀三・一 雜六・一 誹諧歌

【皇后】

皇后宮大貳 二條太皇太后宮大貳に同じ

皇后宮女別當 二條太皇太后宮別當に同じ

皇后宮內侍 〔續千〕達智門院內侍に同じ

皇后宮內侍 〔續古〕京極院內侍に同じ

皇后宮少將 〔金葉〕戀下・一

皇后宮右衞門佐 〔金葉〕秋・一 戀上・二

皇后宮式部 二條太皇太后宮式部に同じ

皇后宮肥後 京極關白家肥後に同じ

皇后宮美作　美作守源資定女　〔後拾〕春上・一　夏・一

皇后宮美濃　待賢門院女房。兵庫頭源仲政女　〔金葉〕秋・一　戀上・二　雜上・二

皇后宮備前　〔續詞花〕雜中・一

皇后宮攝津　二條太皇太后宮攝津に同じ

【皇嘉門院】

皇嘉門院　崇德院后聖子。法性寺忠通公女　〔新古〕哀・一　雜下・一

皇嘉門院別當　大宮權亮源俊隆女　〔千載〕戀一・一　戀三・一　〔新勅〕戀一・一　戀三・一　〔續後撰〕釋・一　〔玉葉〕戀二・一　〔續後拾〕秋上・一　〔新千〕戀四・一　〔新拾〕戀四・一

皇嘉門院近江　〔續詞花〕戀上・一

皇嘉門院尾張　刑部少輔藤原家基女　〔千載〕戀三・一　〔新古〕戀五・一

皇嘉門院治部卿　從三位盛子。兵部少輔源信綱女　〔詞花〕夏・一

皇嘉門院出雲　大内記藤原令明女　〔詞花〕戀下・一

【信　三畫―九畫】

信久　從三位　〔新千〕神・一　從三位

信氏　五位。隼人正藤原信友男　〔續千〕戀一・一

信公　正二位北邊左大臣。嵯峨帝第一御子。貞觀十年薨五十七　〔後撰〕雜四・一　北邊左大臣

信方　五位島津豊後守。三善　〔新拾〕戀二・一

信生　法師俗名鹽屋兵衛尉朝業。宇都宮左兵衛尉業綱子　〔新勅〕釋・一　〔續千〕釋・一　雜下・一　〔續古〕雜上・一　〔續拾〕釋・一　〔玉葉〕雜一・一　〔續千〕旅・一　〔續後拾〕哀・一　〔新千〕旅・一　〔新拾〕秋下・一　雜中・一　〔新

〔後拾〕釋・一

信快　法師俗名飯尾六郎左衛門。三善爲遠子　〔新千〕雜下・一　〔新拾〕雜上・一　〔新後拾〕雜秋・一

信良　六位三井。藤原　〔新千〕雜中・一　〔新後拾〕雜秋・一

信成　正三位參議。中納言藤原親兼男　〔續後撰〕雜中・一　雜下・一　前參議　〔風雅〕雜下・一

信武　五位武田甲斐守。伊豆守源信家男　〔新千〕雜下・一　〔新拾〕戀三・一

信容　法師　〔新後拾〕雜春・一　〔新續古〕戀三・一

信長公　從一位九條太政大臣。二條關白藤原教通公男　〔新勅〕冬・一　九條太政大臣

信阿　法師　〔續後撰〕雜上・一

信定　四位讚岐守。兵部少輔源有雅男　〔新勅〕雜一・一　四位

信明（サネアキラ）　四位陸奥守。右大辨源公忠男。康保二年十八卒　〔後撰〕春下・一　さねあきら　戀一・一　戀二・一　戀三・一　五位　〔拾遺〕戀三・一　四位　〔新古〕冬・一　哀・一　〔新勅〕雜四・二　〔續後撰〕戀五・一　〔玉葉〕春上・一　〔續千〕戀二・一　哀・一　〔續後拾〕春上・一　戀三・一　〔風雅〕春上・一　此うた新拾雜上に壬生忠見とあり　〔新千〕秋上・一　〔新拾〕夏・一　秋下・一　雜中・一　〔新後拾〕春上・一　〔新續古〕秋上・一　〔三十六人集〕一四七　〔古今和歌六帖〕

信宗　四位左中將。小一條院御子。源。寛治元年十十七日兼播磨介承德元八卅（イ廿）卒　〔後拾〕哀・一　四位　〔金葉〕戀下・一　〔續詞花〕春下・一

信宗　法師　〔續詞花〕戀上・一

【信　十畫―二十三畫】

信兼　五位能登守。藤原　〔玉葉〕戀五・一

信家　正二位大納言。大二條關白藤原教通男　〔新勅〕賀・一　權大納言

信家　正三位。侍從藤原長佐男　〔續拾〕秋下・一　左兵衛督　〔新後撰〕・二　秋下・一　冬・一　旅・一　戀五・一　雜一・二
夏・一　雜三・一　四位　〔新後撰〕春下・二　秋上・一　秋中・一
信通　左近中將　〔續詞花〕夏一　秋下・二　冬・二　戀四・一　戀五・一　雜上・一
信寂　法師俗名丹後守從四位上後平。尾張守高階助順子　〔後拾〕冬・一　雜中・二　雜下・一　〔續古〕夏・二　秋上・二　秋下
信專　法師　〔新千〕冬・一　雜中。一　〔新拾〕冬・一・一　冬・二　神・一　旅・二　戀一・三　戀三・三
〔新後拾〕雜春・二　戀四・一　戀五・二　哀・一　雜上・一　雜中・一
信濟　四位少納言。治部大輔藤原信經男　〔續千〕冬・一　四位　雜下・四　〔續拾〕春上・一　春下・一　夏・二　秋上
信雅　法印　〔玉葉〕雜一・一・一　秋下。一　冬・一　雜春。一　雜秋・一　旅・一
信詮　五位山田備中守。左衛門尉源信時男　〔新千〕戀三・一　〔新續古〕戀二・一　戀四・一　雜中・四　雜下・三　釋・一
秋上・一　雜上・一　雜中・一　〔新後撰〕春上・一　春下・一　夏・二　秋上・二　戀
信壽　法師　〔新千〕雜中・一　二・一　戀四・一　戀五・一　雜上・一　〔玉葉〕春上
信綱　藤原　〔金葉〕雜下・一　連　〔續詞花〕物・二・一　夏・一　秋上・一　秋下・一　雜一・一　雜四
信實　四位備後守。法名寂西。左京大夫藤原隆信男　〔新勅〕春下・一　秋上・一　此歌夢の中によみける歌　〔續千〕春上・二　秋上・一　雜體

・一名物 戀四・一 戀五・一〔續後拾〕春下・一 冬
・一 別・一 雜上・一〔新千〕冬・一 戀二・一
雜中・一 雜下・一 誹諧〔新拾〕夏・一 冬・一 賀・一
哀・一 戀三・一 戀四・一 戀五・一 雜下・一 旋頭
〔新後拾〕秋下・二 冬・一 旅・一 戀二・二 雜上
・一 雜下・一 神・一〔新續古〕春上・一 春下。
一 戀一・二 雜上・一 神・一

信慶 法師〔新後拾〕戀一・一

信賢 五位左兵衛佐。藤原。先祖可尋〔拾遺〕賀・一

信賢 前大納言。花山院藤師賢男〔新葉〕雜下・一

信濃 後鳥羽院下野に同じ

信聰 僧都〔新拾〕戀二・一〔新葉〕秋下・一

信繁 四位。河内守平繁雅男〔新勅〕雜三・一 五位

信顯 四位。藤原〔新後撰〕雜上・一 四位

【重　四畫―九畫】

重木 治部丞茨田重頼女〔後拾〕戀二・一

重之 五位左馬助。五位源兼信男〔拾遺〕春・一 夏・二 冬・二
別・一 物名・二 神・一 戀二・一 戀五・一 雜
春・一 雜秋・一〔後拾〕夏・三 賀・一 旅・一
哀・一 戀二・一 戀四・一 雜三・二 雜四・一
雜五・三〔詞花〕春・一 戀上・一〔新古〕春上・一
春下・二 冬・三 別・一 戀一・一 戀三・二 戀
五・一〔新勅〕春下・一〔續後撰〕春上・一 秋上
・一 戀一・一 戀二・一 雜下・一〔續古〕戀四・
一〔玉葉〕春下・一 旅・一 戀四・二 雜一・三
雜二・二〔續後拾〕春下・一 夏・一 哀・一〔新

千〕秋下・一　〔新拾〕春下・一　哀・一　雜下・一物名歌
〔新後拾〕雜春・一　〔新續古〕春上・一　秋上・一
〔續詞花〕哀・一　戀中・一　別・一　物・一　〔三十六人集〕二一七九　〔同補遺〕五五　〔古今和歌六帖〕

重氏　正二位。從二位藤原顯氏男　〔續拾〕戀五・一正三位　〔新後撰〕春下・一　〔玉葉〕戀三・一　〔續後拾〕雜中・一　〔新千〕夏・一　〔新續古〕戀三・一

重有　正二位大納言。少將源經有男　〔新續古〕雜上・一前中納言

重名　四位左京大夫。宮內少輔藤原重賴男　〔續拾〕雜秋・一四位

重光　從一位大納言。大納言藤原資康男。長德四年薨　〔新續古〕春下・一　冬・二大納言

重光　正二位大納言。源代明親王男　〔後撰〕戀二・一　戀三・一　〔續後撰〕賀・三大納言

重如　田口　〔金葉〕雜下・二

重如　六位。山口。河內國人　〔後拾〕雜六・一神　〔續詞花〕別・二　旅・一

重成　五位大高伊豫守。左衛門尉高階重長男　〔風雅〕雜上・一

重延　五位。賀茂　〔千載〕戀一・一

重村　五位刑部少輔。駿河守平政長男　〔新後撰〕戀一・一　〔玉葉〕雜一・一　〔續千〕冬・一　戀一・一

重言　五位。橘　〔新後拾〕雜下・一　〔新續古〕戀三・一

重明親王女　〔玉葉〕雜一・一

重直　五位。左衛門尉高階貞朝子　〔新拾〕戀二・一

重政　四位。神主賀茂重保男。至承久三年　〔千載〕秋上・一　〔新古〕戀二・一　〔新勅〕冬・一　神・一

重保　四位。神主賀茂重繼男。至治承元年　〔千載〕夏・二　冬・一　戀一

・二　戀二・一　神・一　〔新古〕雜中。一　神。一　〔新勅〕雜三・一　〔續後撰〕雜中・一　〔續拾〕戀二・一　〔玉葉〕春上・一　戀一・一　〔風雅〕夏。一　戀二・一　雜上。一　〔新續古〕雜下・一　誹諧歌　〔續詞花〕戲・一

重春　源。　〔新葉〕秋上・一　戀三・一

重茂　五位高駿河守。高階　〔風雅〕雜上・一　〔新拾〕雜上。一

重貞　五位。藤原　〔續後拾〕旅・一

重貞　五位。禰宜賀茂重定男　〔新後撰〕戀四・一　〔玉葉〕雜一・一

【重】十畫—二十三畫

重泰　五位大藏少輔。源　〔續千〕雜上・一　〔續後拾〕戀四・一　〔新葉〕雜下。一　哀。一

重能　五位上杉伊豆守。左近將監藤原重顯男　〔風雅〕冬。一　戀二。一

雜下・一

重時　四位陸奧守。左京大夫平義時男　〔新勅〕戀一・一　雜一・一五位　〔續後撰〕秋中・一　秋下・一　戀二・一四位　〔續古〕秋上・一　冬・一　〔續拾〕春下・一　雜上・一　〔玉葉〕冬・一　戀上・一　〔續千〕戀四・一　〔續後拾〕秋上。一　〔風雅〕雜上・一　〔新千〕賀。一　〔新後拾〕冬。一

重家　從二位。左京大夫藤原顯輔男　〔千載〕春上・一　秋上・一　戀二・一　大宰大貳　〔新古〕夏・一　秋上・一　哀・一　戀二・一　〔新勅〕賀。一　戀三・一　〔續後撰〕夏。一　〔續古〕戀四・一　〔玉葉〕賀。一　雜四・一　〔續千〕哀・一　賀・一　〔續後拾〕秋下・一　〔風雅〕春下。一　秋上・一　秋下・一　戀一・一　戀二・一　雜上・一

雜下•一　〔新千〕秋上•一　〔新拾〕秋下•一　雜中•
一　〔新後拾〕戀四•一　〔新續古〕戀•一　戀三•一
〔續詞花〕戀上。二　雜上•一
重甚　五位澁谷遠江守、平　〔新拾〕戀一•一　〔新後拾〕雜春。
一　雜上•一
重基　五位中務少輔。近江守藤原有佐男。至天承元年　〔詞花〕秋•一　〔千載〕
戀二•一
重經　從二位。從二位高階邦經男　〔新後撰〕秋下•一　戀三•一　大藏
卿　〔玉葉〕雜一•一　從三位　〔續千〕冬•一
重資　正二位大納言。左少將源茂資男　〔風雅〕夏•一　秋上•一　冬•
二　戀五•一　雜中•一　〔新續古〕春上•一　雜中
•一　〔新續古〕春上•一　雜中•一　前大納言
重綱　中原　〔新葉〕雜中•一

重綱　四位少納言。中務少輔藤原重基男、至建久元年　〔千載〕雜上•一
重綱　六位安東左衛門尉、藤原　〔新後撰〕秋下•一　戀一•一
〔續千〕冬。一　戀五。一　哀•一　〔新千〕冬•一
重衡　正三位。太政大臣平清盛男　〔玉葉〕旅•一　左近中將
重顯　五位上杉左近將監。修理亮藤原頼重男　〔玉葉〕雜二•一　〔續千〕
旅•一　戀一•一

【貞三畫—八畫】

貞子內親王　〔新葉〕春上•一　夏•一　秋上•一　秋
下•一
貞文　イ定文五位左兵衛佐。左少將平好風男。平仲也（—一五八三）　〔古今〕秋上•二
秋下•一　戀三•二　戀五•一　雜下•二　雜體•二
誹諧歌　〔後撰〕戀一•二　戀二•三　戀三。一　〔拾遺〕
雜上•一　雜秋•一　雜賀•一　雜戀•一　哀•一

〔新古〕戀三・一　〔續後撰〕戀一・一　〔續千〕秋上・一　〔新千〕春下・一　戀四・一　新拾〕雜上・一

貞元親王　四品。號閑院。淸和帝三御子、承平元年薨　〔後撰〕戀二・一　イナシ　戀五・一　さだもとのみこ

貞世　五位今出川伊豆守。源　〔風雅〕雜上・一　〔新拾〕戀三・一　戀四・一　〔新後拾〕冬・一　〔新續古〕秋上・一

貞行　五位。源　〔風雅〕雜上・一

貞行　五位。平　〔新續古〕雜中・一

貞秀　五位松田左衛門尉。平　〔新拾〕雜中・一　〔新後拾〕秋下・一　雜春・一　戀四・一　戀五・一　〔新續古〕戀五・二

貞忠　五位階堂伊豫守。攝津守藤原盛長男　〔續千〕戀四・一　〔續後拾〕雜中・一

貞空　上人淨金剛院定親坊　〔新後撰〕雜下・一　〔風雅〕雜上・一

貞直　六位大佛左馬助。民部少輔平宗泰男　〔續千〕戀五・一

貞長　五位。神主祝部忠長男　〔續千〕雜下・一

貞宗　五位大友左近大夫。出羽守平貞親男　〔新千〕雜上・一

貞房　五位越後守。陸奥守平定時男　〔玉葉〕冬・一　〔續千〕哀・一

貞重　五位縫殿頭。因播守大江頼重男　〔新後撰〕雜上・一　〔玉葉〕秋上・一　冬・一　雜上・一　〔續千〕夏・一　秋下・一　神・一　戀四・一　〔續後拾〕冬・一　〔新千〕秋上・一　冬・一　戀三・一　〔新拾〕秋上・一　旅・一

貞保親王女　〔後撰〕戀六・一

貞宣　五位武藏守平宣時男　〔續千〕雜中・一　〔續後拾〕冬・一　〔古今和歌六帖〕

貞信公　從一位小一條太政大臣。藤原昭宣公男　〔後撰〕夏・一　雜一・一

賀•二　哀•二太政大臣（拾遺）雜秋•一小一條太政大臣（新古）雜上•一貞信公（新勅）賀•一（續後撰）雜上•一雜下•一（新千）羇•一

貞俊　五位佐介左京亮。安藝守平時俊男（續千）戀四•一　雜中•一（續後拾）戀二•一（新千）戀三•一

貞俊　四位。惟宗（新後拾）雜上•一四位

貞亮　四位土佐守。播磨守源時盛男。至長久三年（金葉）春•一四位

【貞　十畫—十九畫】

貞時　四位相模守。相模守平時宗男（新後撰）春下•一　夏•一　旅•一　戀二•一　雜上•一四位（玉葉）春上•一　春下•一　秋下•二　冬•一　雜五•一（續千）春下•二　秋上•一　旅•一　戀三•一　戀五•一　賀•一（續後拾）秋上•一　冬•一　賀•一（風雅）冬•一（新千）秋上•一　賀•一

貞泰　五位。若狹守源隆泰男（風雅）雜上•一

貞國　五位。平（新續古）戀三•一

貞康　五位町野備後守。三善（續千）戀三•一

貞資　五位。藤原（新千）戀二•一

貞資　五位備前守。左近大夫平時國男（續千）戀四•一

貞廣　五位。刑部大輔大江時秀男（玉葉）春下•一　秋下•一　惟一•一（續千）雜上•一（風雅）雜上•一

貞憲　四位少納言。少納言藤原通憲男。保延六任飛驒守保元四年十二月十日解官其後出家（千載）哀•一四位

貞熙　五位武藏將監。相模守平熙時男（續千）戀五•一

貞綱　五位。宇都宮尾張守藤原景綱男（玉葉）冬•一

貞慶　上人笠置解脫坊。右中辨藤原貞憲子（續後撰）雜中•二（續古

釋•一　旅•一　雜上•一　雜中•一

貞樹　五位肥後守。小野石見王御子。至貞觀　〔古今〕戀五•一　雜下•一

貞數親王　四品。清和帝御子　〔後撰〕戀五•一　さだかずのみこ　〔新拾〕旅•一　貞數親王

貞賴　五位。源　〔續千〕雜中•一　〔風雅〕雜上•一

貞懷　五位。大江　〔風雅〕雜上•一

【俊　一畫—七畫】

俊　四位近江守。右大辨源唱男。至天曆元年　〔後撰〕戀二•一　五位

俊子　肥前守藤原千兼妻　〔後撰〕戀五•一　雜二•一　〔拾遺〕雜下•一　承香殿としこ　〔新勅〕秋下•一　冬•一　〔續後撰〕雜下•一　〔新續古〕戀一•一

俊子內親王家大進　〔詞花〕戀下•一

俊文　四位。紀　〔續千〕戀二•一　四位　〔續後拾〕戀三•一

〔風雅〕神•一

俊冬　從二位中納言。中納言藤原俊實男　〔風雅〕戀四•一　五位

俊平　五位侍從。從三位源泰光男　〔續後撰〕春下•一　秋中•一　戀一•一　〔續古〕戀二•一　〔續拾〕戀二•一　〔新後撰〕戀五•一　〔玉葉〕夏•一　雜二•一　〔風雅〕夏•一　〔新拾〕雜上•一　禪信法師　〔新續古〕秋上•一

俊光　正二位大納言。中納言藤原資宣男　〔新後撰〕夏•一　戀三•一　戀九•一　前中納言　〔玉葉〕秋下•一　冬•一　賀•一　旅•一　〔續千〕春下•一　秋下•二　冬•二　神•一　雜上•一　前大納言　〔續後拾〕春下•一　秋下•一　旅•一　賀•一　雜中•一　〔風雅〕賀•一　雜中•一　〔新千〕春下•一　秋下•一　戀二•一　雜上•一　賀•一　〔新拾〕春上•一　賀•一　〔新後拾〕春上•一　秋上•

一〔新續古〕春上・一　賀・一　神・一

俊言　正三位參議。左馬頭藤原爲言男　〔玉葉〕春下・一　夏・一　戀一・一　雜二・一 四位　〔風雅〕夏・一　秋下・一　旅・一 前參議

俊秀　叡山法師。源重俊子　〔千載〕釋・一

俊快　法眼。藤原季宗子　〔續後撰〕雜下・一　〔續拾〕釋・一

俊成　正三位。中納言藤原俊忠男（一七七四—一八六四）千載集撰者。古來風體抄、桐火桶、長秋詠藻　〔詞花〕戀下。一 四位顯廣　〔千載〕春上。二　夏・三　秋上・三　秋下・一　冬・三　旅・二　賀・二　戀一・二　戀二・一　戀三・二　戀四・二　戀五・二　雜上・二　雜中・五　釋・二　神・二 皇太后宮大夫　〔新古〕春上・四　春下・三　夏・六　秋上・五　秋下・一　冬・七 イ一首俊成女　賀・三　哀・三　別・一　旅・四　戀一・一　戀二・四　戀三・一　戀五・二　雜上・二　雜中・三　雜下・七　神・三　釋・三　〔新勅〕春上・五　春下・二　夏・二　秋下・二　冬・一　旅・二　釋・四　戀一・五　戀二・一　戀三・二　戀五・二　雜一・二　雜二・三　雜四・一　雜五・一 長歌　〔續後撰〕春上・三　春中・一　春下・一　夏・一　秋中・一　秋下・二　冬・一　神・二　釋・一　戀一・一　戀二・三　戀三・二　戀四・一　戀五・二　雜上・一　雜中・二　旅・二　賀・一　〔續古〕春上・二　夏・二　秋上・二　秋下・一　冬・六　釋・一　旅・三　戀一・二　戀二・一　戀三・一　戀四・一　戀五・二　哀・一　雜上・二　雜下・一　賀・一　〔續拾〕春上・一　春下・二　夏・一　秋上・一　秋下・一　冬・一　雜春・三　雜

秋・一　戀一・三　戀三・一　雜上・二　雜下・四　釋・一〔新後撰〕春下・二　夏・二　秋下・一　冬・一　旅・一　釋・四　神・五　戀一・一　戀五・一〔玉葉〕春上・七　春下・二　夏・三　秋上・三　秋下・四　冬・六　賀・五　旅・三　戀一・二　戀二・一　戀三・一　戀四・一　戀五・四　雜一・六　雜二・一　雜三・一　雜四・四　雜五・一　釋・一　神・一〔續千〕春上・一　夏・三　秋上・二　秋下・一　冬・一　雜體・二　神・一　釋・四　戀一・一　戀三・一　戀五・一　賀・一〔續後拾〕春上・一　夏・一　秋上・一　物名・二　別・一　旅・一　戀二・一　雜上・一　雜中・一　哀・一　釋・一　神・一〔風雅〕春上・四　春中・三　春下・三　夏・一　秋下・三　冬・二　雜上・四　雜下・三　釋・一　神・三　賀・二〔新千〕春上・三　春下・一　秋上・一　秋下・一　旅・一　戀一・二　戀五・一　雜上・三　哀・一　賀・一〔新拾〕春上・一　春下・一　夏・一　秋上・一　冬・一　賀・一　旅・一　戀三・一　戀四・一　神・一　釋・一　雜下・一　物名〔新後拾〕春下・一　夏・一　秋上・一　秋下・一　冬・三　三・一　釋・一〔新續古〕春上・一　春下・三　夏・三　秋上・三　秋下・二　冬・一　別・一　戀一・二　戀二・一　戀五・一　雜中・一　雜下・一　物名　神・一〔長秋詠藻〕七四五　長歌三

俊成卿女　皇太后宮大夫俊成卿女に同じ

【俊　八畫―十畫】

俊明　正二位大納言。大納言藤原隆國男　〔續後撰〕賀・一　大納言　〔續拾〕

春下。一

俊忠　従二位中納言。大納言藤原忠家男（一〇七三―一一二三）〔金葉〕夏・一　秋・一　戀下。一中納言　〔詞花〕戀上。一　〔千載〕春上・一　夏・一　哀・一　賀。一　戀二。一　戀三。一　雜上・一權中納言　〔新古〕秋下。一　哀。一　戀二・一　戀五・一　〔新勅〕春下・一　戀四。一　雜五・一折句　〔續後撰〕戀一・一　〔續拾〕賀。一　雜下。二　〔新後撰〕雜中。一　〔玉葉〕雜五・一　〔續千〕雜上。一　〔續後拾〕戀二。一　〔新千〕夏・一　〔新拾〕冬。一　〔新續古〕戀五・一　〔續詞花〕戀上・一

俊宗　律師、散位藤原親信子　〔千載〕冬・一　〔續詞花〕冬。一　戀下・一

俊阿　法師俗名大膳大夫高俊、惟宗時俊子　〔新千〕戀二・一

俊長　従二位。紀　〔新後拾〕戀五・一五位　〔新續古〕戀一・二　雜中・一従三位　〔新葉〕雜下・一

俊宗　五位太皇太后宮少進。備後守橘俊綱男。永保三年八月廿二日卒　〔後拾〕雜三・一

俊房公　従一位堀川左大臣。土御門源師房男　〔後拾〕戀一・一左大臣　〔千載〕釋・一堀川入道左大臣　〔新古〕雜上・一　〔續古〕冬・一

俊定　正二位大納言。中納言藤原經俊男　〔新後撰〕秋上・一　秋下・一　旅。一　戀二・一　雜上・一前中納言　〔玉葉〕雜一・一前大納言　〔續千〕夏・二　雜中・一　〔風雅〕戀一・一　賀・二　〔新千〕冬・二　〔新拾〕夏・一　雜上・一　〔新後拾〕戀三・一　〔新續古〕戀一・一　雜上・一

俊定　四位左少將。侍従源具定男　〔續古〕戀二・一　雜下・一　〔新後撰〕夏・一　〔續千〕戀二・一

俊重　五位伊勢守。木工頭源俊頼男。長和二年正月廿九日任伊勢守　〔千載〕雜中・一

〔續詞花〕雜上・一 雜下・一 物・一

俊兼 正三位號楊梅。民部卿藤原兼行男 〔玉葉〕冬。一 旅・二太宰大貳 〔續千〕戀三・一 〔風雅〕夏・一 秋上・一 秋中・一 秋下・一 旅・一 戀二・一 戀三・一 戀四・二

俊家公 正二位大宮右大臣。堀川藤原賴宗男 〔千載〕秋下・三〔新勅〕賀・一大宮右大臣

【俊 十二畫－二十三畫】

俊盛 法師興福寺。源俊賴朝臣子 〔千載〕秋下・一

俊惠 法師。木工頭俊賴子 〔詞花〕春・一 〔千載〕春下・一 夏。二 秋上・一 秋下・三 冬・一 旅・一 戀二・四 戀四・三 戀五・一 雜上・三 雜中・一 神・一 〔新古〕春上・一 春下・一 夏・一 秋下・三 イ一首朝惠 冬・二 別・二 戀四・一 雜上・一 神・一 〔新勅〕春上。一 戀三・一 戀四・三 雜三・一 〔續後撰〕秋下・一 戀一・一 〔續古〕秋上・一 冬・一 釋・一 戀一・一 賀・一 〔續拾〕夏・一 冬・一 雜中・一 〔新後撰〕春下・一 秋上・一 戀三・一 〔玉葉〕春上・一 旅・一 雜二・一 〔續千〕春下・一 雜體・一物名 哀・一 〔續後拾〕春下・一 冬・一 雜上。一 〔風雅〕春中・一 冬・一 雜上・一 雜下・一 〔新千〕冬。一 戀三・一 〔新拾〕春上・一 夏・一 秋下・一 別・一 戀二・一 戀三・一 雜下。一誹諧 〔新後拾〕春下・一 〔新續古〕春上。一 戀一・一 戀三・二 戀五・一 神・一 〔續詞花〕春下・一 秋上・一 戀中・一 雜下・一

俊榮 法橋 〔新續古〕雜中・一

俊綱 四位修理大夫。讃岐守橘俊遠男。寛治八年 〔後拾〕春上・一 夏・一
冬・一 雜五・一 位四 〔詞花〕春・一 〔千載〕雜下・一
〔新勅〕春下・一 夏・一 冬・一 〔續後撰〕戀四・一
夏・一 冬・一 〔新拾〕冬・一

俊實 正二位大納言。中納言藤原隆俊男 〔金葉〕賀・一 大納言 〔千載〕
春下・一 前大納言 〔新勅〕戀二・一

俊實 從二位中納言。中納言藤原定資男 〔風雅〕秋上・一 雜中・二 權中納言

俊蔭 四位備前權守。中納言藤原有穗男。延喜廿一年 〔古今〕春下・一 位五
〔後撰〕雜三・一 位四

俊頼 四位木工頭。大納言源經信男。天仁三正廿八叙越前介(一七八九歿七十余)俊頼口傳 〔散
木奇歌集〕一五四二 長歌・三 旋・四 混本歌・二
連歌・五五 〔金葉〕春・四 夏・三 秋・八 冬・二
賀・二 戀上・四 戀下・四 雜上・四 雜下・四 位四
〔詞花〕春・三 夏・二 秋・一 別・一 雜上・二
雜下・二 〔千載〕春上・七 夏・四 秋上・九 秋下
・四 冬・四 別・一 賀・三 戀一・二 戀二・一
戀三・一 戀五・二 雜上・三 雜中・一 雜下・九
長歌一。同反歌一。金葉にあり。旋頭一。物名三。誹諧三 釋・一 〔新古〕春上
・一 夏・一 秋下・一 冬・一 戀二・一 戀三
・二 雜上・一 雜中・一 雜下・三 〔新勅〕春上・
一 春下・一 夏・一 雜二・四 雜五・六 長歌一 同反歌
旋頭一。物名三。 〔續後撰〕戀一・一 雜下・二 〔續古〕春
下・一 夏・一 秋上・二 別・一 戀四・一 哀・一
雜上・二 雜中・一 雜下・五 〔續拾〕春上・一 雜
春・一 戀二・一 雜上・二 〔新後撰〕春上・一 夏
・一 旅・一 釋・一 〔玉葉〕春上・一 秋上・一

冬•一　賀•一　雜四•一　雜五•一　〔續千〕春下•二　雜體•一物名　釋•二　〔續後撰〕春下。一　秋上•一　物名•二　賀•一　戀一•一　〔風雅〕春上。二　春中。一　春下。二　夏。一　秋上。一　秋中。一　冬•一　戀一•二　雜上。二　雜下•一　賀•一　〔新千〕春上。一　戀二。一　雜上。一　雜下。二旋頭一誹諧一。　〔新拾〕春上•一　春下•一　雜中•一　雜下。二折句　〔新後拾〕春上•一　春下•一　冬•一　〔新續古〕春上•一　夏•一　秋上•二　別•一　戀四•一　戀五。一　〔續詞花〕春上•一　夏。一　秋下•二　冬•一　旅。一　雜上。二　雜下。一　物•一　戲•一　〔高陽院歌合〕五

俊憲　從三位參議。少納言藤原通憲男　〔千載〕賀•一　戀三•一參議

〔新勅〕雜二•一　〔續詞花〕賀。一　雜下•一

俊憲　法印　〔新後拾〕雜上•一

俊豐　四位。紀　〔新續古〕戀二。一　雜上•一四位

俊譽　叡山法印　〔新後撰〕釋。一權大僧都　〔玉葉〕雜一•一　〔續千〕釋。一　雜中•二

俊頼　四位藤原　〔新拾〕哀。一　雜上•一四位　〔新後拾〕戀三。一　〔新續古〕秋上。一　秋下。一

【前】

前內大臣　〔新勅〕後久我太政大臣に同じ　〔續後撰〕(家)衣笠前內大臣に同じ　〔續後撰〕(基)後九條前內大臣に同じ　〔續古〕上同　〔續古〕(師)花山院前內大臣に同じ　〔續拾〕(基)後九條前內大臣に同じ　〔續拾〕(公)三條入道內大臣に同じ　〔新後撰〕三條入道前太政大臣に同じ　〔玉葉〕上同　〔玉葉〕中院前太政大臣に同じ　〔續千〕(重)中院內大臣に同じ　〔續千〕(通)中院太政大臣に同じ　〔續千〕

〔公〕押小路内大臣に同じ　〔風雅〕後三條前内大臣に同じ　〔風雅〕〔冬〕大炊御門内大臣に同じ　〔新千〕後野宮内大臣に同じ　〔新拾〕後押小路内大臣に同じ　〔新拾〕〔實〕後山階内大臣に同じ　〔新後拾〕〔實〕後八條前内大臣に同じ　〔新後拾〕後押小路前内大臣に同じ

前左大臣　〔續古〕山階入道前左大臣に同じ　〔續後拾〕後山本前左大臣に同じ　〔風雅〕中園入道前太政大臣に同じ

前右兵衛督爲教女　從二位爲子に同じ

前參議長成女　〔新後撰〕戀四・一　〔玉葉〕戀四・一

前攝政左大臣　〔續後撰〕後一條入道前關白左大臣に同じ　〔續拾〕後光明峯寺前攝政左大臣に同じ　〔新續古〕後成恩寺攝政關白に同じ

【前右大臣】

前右大臣　〔新勅〕醍醐入道前太政大臣に同じ　〔續古〕九條前攝政右大臣に同じ　〔續古〕萬里小路右大臣に同じ　〔續千〕今出川前右大臣に同じ　〔續後拾〕同上　〔新後拾〕後常磐井右大臣に同じ　〔新續古〕後白川院前右大臣に同じ

前右大臣室　〔續千〕今出川前右大臣室に同じ

【前太政大臣】

前太政大臣　〔古今〕染殿攝政太政大臣に同じ　〔新古〕六條入道太政大臣に同じ　〔續後撰〕常磐井入道前太政大臣に同じ　〔續古〕冷泉太政大臣に同じ　〔新後撰〕山本太政大臣に同じ　〔續後拾〕中院前太政大臣に同じ　〔風雅〕後中院前太政大臣に同じ

前太政大臣女　長通公女　〔風雅〕雜上・一

前太政大臣家木綿四手　〔金葉〕雜下・一

【前中納言】

前中納言敎盛母　大宮權大夫藤原家隆女　〔新古〕戀五・一

前中納言爲相女　〔玉葉〕秋下・一　戀二・二　戀四・一　雜五・一　〔風雅〕春下・一　冬・一　雜中・一

雑下・一 前中納言爲川女

前中納言親賢女 〔新後拾〕雑秋・二

【前中宮】

前中宮上總 堀川院中宮上總に同じ

前中宮甲斐 〔金葉〕前中宮越後に同じ

前中宮出雲 後一條院女房。出羽守藤原成親女 〔後拾〕哀・一

前中宮宣旨 後一條院前中宮宣旨に同じ

前中宮越後 堀川院中宮女房 〔金葉〕雑上・一 前中宮甲斐 戀下・二 〔詞花〕別・二

【前大納言】

前大納言光任女 〔新葉〕戀三・一 戀四・一 戀五・二 雑下・一

前大納言俊光女 〔續千〕戀三・一 〔續後拾〕雑中・一 〔新千〕戀一・一 戀三・一 〔新拾〕秋上・一 〔新後拾〕夏・一

前大納言基良女 〔新後撰〕雑下・一 〔玉葉〕戀一・一

前大納言爲定女 〔新續古〕雑上・一

前大納言經長女 〔續千〕秋上・一 戀三・一 〔續後拾〕戀二・一

前大納言實明女 〔風雅〕春中・一 春下・一 夏・一 秋中・一 秋下・一 冬・一 戀一・一 戀二・一 戀三・二 戀四・二 雑中・三 〔新千〕戀三・一 〔新拾〕戀一・一

【前齋宮】

前齋宮内侍 大藏大輔藤原永相女 〔金葉〕春・一 冬・一 戀

上・一　雜上・二　一首内侍とあり

前齋宮甲斐　イ常陸　〔金葉〕戀下・一　〔千載〕旅・一

前齋宮河内　後卜内親王家女房　〔金葉〕秋・一　戀下・一　〔千載〕春下・一　秋上・一　戀一・一　〔新古〕冬・一　〔新拾〕夏・一

前齋宮筑前乳母　筑前乳母に同じ

【前齋院】

前齋院六條　待賢門院堀川に同じ

前齋院出雲　〔詞花〕春・一　〔續詞花〕雜上・一

前齋院折節　〔續千〕戀五・一

前齋院肥前　〔金葉〕戀下・一

前齋院尾張　皇后宮小進源兼昌女　〔金葉〕春・一　冬・一　〔續詞花〕秋下・一

前齋院新肥前　〔千載〕戀三・一

【前關白】

前關白　〔新勅〕光明峯寺入道前攝政左大臣に同じ　〔新千〕後普光園院攝政前太政大臣に同じ　〔新後拾〕(近衞)後深心院關白に同じ　〔新後拾〕(九條)後己心院關白に同じ　〔新後拾〕(大閤)後報恩院入道前關白に同じ

前關白太政大臣　〔新後撰〕圓光院入道前關白太政大臣に同じ　〔玉葉〕同上　〔續千〕後照念院前關白太政大臣に同じ

前關白右大臣　〔續後撰〕普光恩院入道前關白左大臣に同じ　〔續古〕同上　〔續拾〕(一條)後一條入道前關白左大臣に同じ　〔續拾〕(鷹司)圓光院入道前關白太政大臣に同じ　〔新後撰〕報恩院攝政關白に同じ　〔續千〕(近衞)岡本關白に同じ　〔續千〕(押小路)後光明照院前關白に同じ　〔續後拾〕後一音院關白に同じ　〔續後拾〕(九條)己心院前攝政左大臣に同じ　〔風雅〕(一條)後芬陀利花院入道前關白に同じ　〔風雅〕(基)後岡屋前關白左大臣に同じ　〔新千〕後芬陀利花院入道前關白に同じ　〔新

拾〕（近衞）後深心院前關白に同じ　〔新拾〕（九條）後報恩院入道前關白に同じ　〔新拾〕一心院關白に同じ　〔新後拾〕上同　〔新續古〕後三緣院攝政關白に同じ

前關白右大臣　〔風雅〕昭光院前關白に同じ

前關白右大臣母　師平公母。中宮長平女　〔風雅〕春中・一

前關白家二條　〔續千〕戀一・一

【後】

後八條前內大臣　實繼公に同じ

後九條內大臣　基家公に同じ

後土御門內大臣　定通公に同じ

後小松院　諱幹仁。後圓融帝一御子　〔新續古〕春上・一　春下・一　夏・三　秋上・二　秋下・一　賀・二　釋・一　旅・一　戀一・二　戀二・一　戀四・一　哀・一　雜上・一　雜中・二　雜下・四　後小松院御製

後己心院關白　忠基公に同じ

後今出川左大臣　公行公に同じ

後生　四位文章博士。（イ俊生）式部大輔守貞男。天祿元七十二卒六十二　〔拾遺〕雜上・一

後朱雀院　諱敦良。一條帝御子　〔後拾〕戀一・一　戀三・一　雜一・一　後朱雀院御製　〔新古〕戀四・二　雜下・一　〔續古〕賀・二　〔新千〕哀・一

後成恩寺攝政關白　兼良公に同じ

後村上院　後醍醐院第四皇子。義良親王也（一九八八―二〇二八）　〔新葉〕春上・六　春下・五　夏・五　秋上・六　秋下・三　冬・一三　離・二　旅・一　神・五　釋・二　戀一・四　戀二・四　戀四・五　戀五・一　雜上・九　雜中・一三　雜下・四　哀・三　賀・三

後芬陀利花院關白　經通公に同じ

後法性寺入道前關白太政大臣　兼實公に同じ

後知足院關白太政大臣　房嗣公に同じ

後閑屋前關白左大臣　基嗣公に同じ

後近衞關白前右大臣　〔續千〕淨妙寺關白前右大臣に同じ

後押小路內大臣　公忠公に同じ

後香園院入道關白　師嗣公に同じ

後淨妙寺右大臣　經平公に同じ

後常磐井右大臣　實後公に同じ

後普光園院攝政前太政大臣　良基公に同じ

後報恩院入道前關白　經教公に同じ

後龜山院　諱熙成。後村上帝二御子　〔新續古〕戀上・一　雜上・二　雜下・一　後龜山院御製

後勸修寺內大臣　經顯公に同じ

【後一】

後一音院關白　房實公に同じ

後一條入道前關白左大臣　實經公に同じ

後一條入道前關白左大臣女　實經公女　〔玉葉〕春・一　〔新續古〕戀三・一

後一條院少將內侍　〔玉葉〕雜四・一

後一條院前中宮宣旨　前中宮宣旨　〔千載〕哀・一　〔玉葉〕雜四・一

【後二條】

後二條入道太政大臣女　〔新續古〕冬・一　戀四・一　雜中・一

後二條院　諱邦治。後宇多帝御子　〔新後撰〕春上・一　春下・一

秋上・一 秋下・三 冬・三 戀二・二 戀三・二
戀九・一 戀六・二 雜上・二 今上御製〔玉葉〕春上・一
春下・一 秋上・一 秋下・三 戀三・一 雜三・一
後二條院御製〔續千〕春上・一 秋上・一 秋下・二 冬・
三 旅・一 神・二 戀二・一 戀三・三 戀四・一
雜上・四 雜下・一 賀・一〔續後拾〕春上・一 春
下・一 夏・一 秋上・二 冬・一 戀二・一 戀三
・一 戀四・一〔風〇〕春中・一 夏・一 冬・二
戀一・一 雜中・一 雜下・一〔新千〕春下・一 夏
・一 秋上・一 秋下・四 冬・三 神・一 戀三・一
戀四・一 戀五・一〔新拾〕春下・二 夏・二 秋上
・二 冬・一 雜上・一 雜中・一〔新後拾〕夏・一
秋上・一 冬・一 雜秋・一 戀二・一 戀四・二

賀・一〔新續古〕春下・一 夏・一 秋下・一 冬・
一 戀三・一

後二條院權大納言典侍 贈從三位爲子に同じ

後二條關白 師通公に同じ

後二條關白家筑前〔金葉〕哀・一〔千載〕戀二・一

【後三條】

後三條太政大臣 實冬公に同じ

後三條內大臣 公敎公に同じ

後三條左大臣 實量公に同じ

後三條前內大臣 實忠公に同じ

後三條院 諱尊仁。後朱雀帝御子（一六九二―一七三二）〔後拾〕雜二・一
雜四・二 後三條院御製〔新古〕別・一〔續古〕春下・一 秋
下・一〔玉葉〕秋下・一

後三條院越前　〔後拾〕雜四・一
後三條院攝政關白　道教公に同じ

【後久我】

後久我太政大臣　通光公に同じ
後久我內大臣　通基公に同じ

【後山】

後山本左大臣　實泰公に同じ
後山階前內大臣　實夏公に同じ

【後中院】

後中院前太政大臣　長通公に同じ
後中院前內大臣　〔新千〕中院前內大臣に同じ

【後白川院】

後白川院　諱雅仁。鳥羽帝御子(一七八七—一八五二)　〔千載〕春下・一
秋下・一　賀・一　戀二・一　戀三・二　戀四・一　院御製　〔新古〕春下・一　冬・一　雜上・一　雜下・一　後白河院御製　〔續古〕秋下・一　〔玉葉〕神・二　〔新千〕夏・一
後白川院京極　〔新勅〕雜・一
後白川院前右大臣　公光公に同じ

【後光】

後光明峯寺前攝政左大臣　實經公に同じ
後光明照院前關白左大臣　道平公に同じ
後光嚴院　諱彌仁。光嚴帝二御子(一九九八—二〇三四)　〔新千〕春上・一
春下・一　夏・二　秋上・一　秋下・一　冬・二　戀三・一　戀五・一　雜中・二　賀・一　御製　〔新拾〕春上・一　春下・二　夏・一　秋上・二　秋下・一　冬・三
賀・二　旅・一　戀四・二　戀五・一　雜上・一　雜

中•二 〔新後拾〕春上•三 春下•一 夏•一 秋上•一 旅。一 戀二•一 戀三。二後光嚴院御製 〔新續古〕夏•一 秋上。二 秋下•二 賀•一 戀三•一

後光嚴院小少將 〔新拾〕戀二•一小少將

【後宇多院】

後宇多院 諱世仁。龜山帝御子(一九二七—一九八四) 〔新後撰〕春上。一 春下•二 秋上•一 秋下。一 釋。二 神•三 戀一•一 戀二•二 戀四•一 雜中•三 賀•一太上天皇 〔玉葉〕春上•一 春下•一 夏。一 秋上•一 秋下•一 冬•二法皇御製 〔續千〕春上。三 春下•三 夏•一 秋上•二 秋下•二 冬•三 雜體。一長歌 旅•二 神。四 釋。六 戀一•三 戀二•二 戀三•二 戀五。二 雜上•五 雜中•二 哀•一 賀•六

〔續後拾〕春上•一 春下•二 夏•一 秋上•一 秋下•一 冬•一 物名•一 旅•一 戀一•二 戀二•一 戀三•一 戀四•一 雜上。一 雜下•一 哀•一 釋•一後宇多院御製 〔風雅〕春上。一 秋下•一 冬•二 戀三。一 雜下•一 釋•一 神。二 〔新千〕春上•一 春下•二 夏•二 秋上。二 秋下•二 冬。二 釋•三 神•一 戀二•一 戀三•一 雜上•四 雜中•一 雜下•一 〔新拾〕春上•一 春下•一 夏•一 冬。一 旅•一 戀三。二 釋。一 〔新後拾〕春下•一 夏•一 秋上•一 〔新續古〕夏•一 旅•一

後宇多院宰相典侍 參議藤原雅有女 〔新後撰〕戀五。一 〔續千〕釋•一 戀一•一 戀三•一 雜中•一 〔續

後拾〕夏・一　冬・一　雜下・一　〔風雅〕雜下・二
〔新千〕雜上・一　雜下・一　賀・一　哀・一　〔新拾〕
雜下・一　夏・一　賀・一　哀・一　〔新續古〕秋下・
一　釋・一　戀一・一　哀・一

【後西園寺】

後西園寺太政大臣　實衆公に同じ

後西園寺前内大臣女　〔新後拾〕夏・一

【後伏見院】

後伏見院　諱胤仁。伏見帝御子（一九四八—一九九六）　〔新後撰〕春下・一
秋上・二　戀五・一　新院御製　〔玉葉〕春上・一　秋上・三
秋下・一　旅・一　戀二・二　戀三・一　戀四・二
戀五・一　雜一・一　雜三・一　雜五・一　〔續千〕春
上・一　夏・二　冬・二　戀二・二　戀四・一　戀五
・一　雜上・一　雜下・一　院御製　〔續後拾〕春下・一
秋上・一　旅・一　戀二・一　戀三・一　哀・一　〔風
雅〕春上・二　春中・三　春下・二　夏・三　秋中・二
秋下・二　冬・三　旅・一　戀一・一　戀二・三　戀
四・二　雜上・一　雜中・五　雜下・三　神・一　後伏見院
御製　〔新千〕春上・一　秋上・四　秋下・一　旅・二
釋・一　戀二・一　戀五・二　雜中・一　〔新拾〕春上
・一　春下・一　夏・一　哀・一　戀二・一　雜上・一
〔新後拾〕賀・一　〔新續古〕旅・一

御伏見院中納言典侍　大納言俊光女　〔玉葉〕雜一・一　新院中納言典侍　〔風雅〕秋中・一　冬・一　戀四・一

後伏見院少納言　〔玉葉〕秋上・一　戀九・一　新院少納言

後伏見院左京太夫　〔風雅〕秋下・一

【後冷泉院】

後冷泉院 諱親仁。後朱雀帝御子（一六八二—一七二八） 〔後拾〕賀・一 戀二・一 雜一・一 後冷泉院御製 〔金葉〕賀・一 〔詞花〕賀・一 〔新古〕雜中・一 〔玉葉〕春下・一

後冷泉院式部命婦 〔玉葉〕雜一・一

【後花】

後花園院 諱彥仁。後崇光院御子 〔新續古〕春上・一 春下・一 夏・二 秋上・一 秋下・二 冬・一 賀・一 戀一・二 雜上・一 雜中・一 今上御製

後花山院入道右大臣 定雅公に同じ

後花山院入道前太政大臣 通雅公に同じ

後花山院內大臣 師信公に同じ

【後京極】

後京極院 後醍醐帝后禧子。後西園寺實兼公女 〔續千〕春上・一 戀二・一 戀三・一 戀四・二 中宮 〔續後拾〕夏・一 戀二・一 戀三・一 〔新千〕春下・一 夏・一 冬・一 雜中・一 賀・一 後京極院 〔新拾〕夏・一 〔新葉〕雜下・一

後京極院宣旨 〔續千〕戀一・一 中宮宣旨

後京極攝政前太政大臣 良經公に同じ

【後深】

後深心院前關白 道嗣公に同じ

後深草院 諱久仁。後嵯峨帝御子（一九〇三—一九六四） 〔玉葉〕神・一 後深草院御製

後深草院辨內侍 藤原信實朝臣女 〔續後撰〕夏・一 秋上・一 秋下・一 戀一・一 〔續古〕夏・一 秋下・一

冬◦一　戀一•一　戀二◦二　戀三•一　戀五•一　新院辨内侍　〔續拾〕春上◦一　春下◦二　冬◦二　雜春•一　雜秋•一　戀一◦一　戀二◦一　戀三•一　院辨内侍　〔新後撰〕春上◦二　秋上•一　雜上◦二　雜下◦一　〔玉葉〕賀•一　戀一•一　雜一•一　雜五•一　神•三

後深草院辨内侍　〔續千〕戀二•一　戀四◦一　〔續後拾〕冬•一　戀三•一　〔續千〕雜下•一　哀•一　〔新拾〕戀五•一　雜上◦一　〔新後拾〕夏◦一　秋下•一　雜秋•一　〔新續古〕夏•一　冬◦一　戀四•一

後深草院少將内侍　藤原信實朝臣女　〔續後撰〕夏•一　秋上•一　秋中◦一　戀一•一　戀二•一　〔續古〕秋上•一　神•二　戀三•一　戀五◦二　雜中◦一　〔續拾〕春上•二　秋上◦三　冬◦一　戀二•一　戀四•一

院少將内侍　〔新後撰〕春上◦一　戀一•一　戀二•一　〔玉葉〕秋下•一　冬◦一　戀三•一　戀四•一　雜一•一　雜二◦一　〔續千〕春下◦一　夏•一　雜一•一　戀四•一　〔續後拾〕戀一•一　戀四•一　〔風雅〕冬•一　賀•一　〔新千〕戀一•一　雜下◦一　〔新拾〕夏•一　戀二•一　戀五•一　〔新後拾〕賀•一　〔新續古〕雜上•一

【後堀川院】

後堀川院　諱茂仁、守貞親王(後高倉)御子　〔新勅〕春上•一　秋上•一　戀一•一　戀二•一　雜二•一　御製

後堀川院民部卿典侍　中納言定家卿女　〔續後撰〕秋中•一　戀五•二　雜上•一　雜下•三　〔續古〕春上•一　戀一•二　〔續拾〕秋下•一　雜春◦一　雜五•一　雜下

二〔玉葉〕戀二・一 雜四・一 〔續千〕秋上・一 〔續後拾〕戀四・一 〔風雅〕雜上・一 〔新千〕雜上・一〔新拾〕戀二・一 戀五・一

【後鳥羽院】

後鳥羽院 〔諱尊成〕高倉帝御子（一八四〇―一八九八）後鳥羽院四傳 〔新古〕春上・三 春下・三 夏・二 秋上・二 秋下・五 冬・四 賀・二 旅・一 戀一・二 戀三・一 戀四・三 雜中・一 雜下・一 神・五（太上天皇） 〔續後撰〕春上・二 春中・三 春下・一 夏・二 秋上・一 秋中・四 秋下・一 冬・一 神・二 戀一・二 戀三・一 戀五・一 雜上・二 雜中・二 賀・一（後鳥羽院御製） 〔續古〕春上・三 春下・五 夏・四 秋上・十 秋下・一 冬・六 神・一 釋・二 旅・一 戀一・一 戀二・一 戀三・一 戀四・二 戀五・一 雜上・四 雜中・四 雜下・一 賀・一 〔續拾〕春上・二 春下・二 夏・二 秋上・五 冬・一 戀一・二 戀二・一 戀三・一 戀五・一 神・二 〔新後撰〕春上・一 夏・一 秋上・一 秋下・二 旅・一 神・二 戀二・一 賀・一 〔玉葉〕春上・一 夏・三 秋上・二 秋下・四 冬・一 旅・一 雜一・二 雜二・二 釋・一 神・一 〔續千〕春下・四 夏・一 秋上・三 秋下・一 冬・一 戀二・二 戀三・一 雜下・一 〔續後拾〕春上・二 春下・一 夏・一 冬・一 旅・一 戀一・二 戀二・一 〔風雅〕春上・三 春中・一 春下・四 夏・四 秋上・一 秋中・三 秋下・二 冬・三 旅・一 雜中・一 雜下・一 〔新千〕春下・

一　夏・一　秋上・一　秋下・一　冬・二　戀二・一　戀上・一　戀下・一　賀・一　〔新拾〕春上・一　春下・一　夏・一　秋下・二　冬・一　旅・一　戀四・一　雜上・一　雜中・二　雜下・一（折句）　〔新後拾〕春下・一　夏・二　秋上・一　秋下・一　旅・一　〔新續古〕春上・二　春下・二　秋上・二　秋下・二　冬・一　賀・一　釋・一　戀一・二　戀三・一　戀五・一　雜上・一　雜下・一（折句）　神・二　〔御集〕一三六一

後鳥羽院下野（日吉禰宜元仲女）　〔新古〕冬・一　戀二・一（信濃）　〔續後撰〕秋中・三　秋下・一　冬・一　戀三・一　〔續古〕戀三・三　雜下・一　賀・一　〔續拾〕戀三・一　〔新後撰〕春下・一　〔玉葉〕春上・一　戀三・一　雜一・一　〔續千〕哀・一　〔續後拾〕戀三・一　〔風雅〕春中・一　〔新千〕戀五・一　〔新拾〕戀四・一　〔新後拾〕戀一・一　〔新續古〕夏・一　旅・一　〔高陽院歌合〕五

後鳥羽院宮內卿（右京大夫源師光女（—一八六七））　〔新古〕春上・二　春下・三　夏・一　秋上・三　秋下・三　冬・一　戀三・一　雜下・一（宮內卿）　〔新勅〕戀四・一　戀五・一　〔續古〕春上・一　秋上・一　戀一・一（後鳥羽院宮內卿）　〔新後撰〕戀二・一　〔玉葉〕春上・二　夏・三　冬・二　旅・一　戀二・二　雜二・一　〔續後拾〕春上・一　冬・二　〔風雅〕夏・一　〔新千〕秋上・一　〔新拾〕夏・一　秋上・一　賀・一　〔新後拾〕春下・一　雜春・一　戀三・一　〔新續古〕春下・一　冬・一　釋・一

【後野宮】

後野宮太政大臣　公後公に同じ

後野宮内大臣　公清公に同じ

【後圓】

後圓光院關白　冬教公に同じ

後圓融院　諱緒仁。後光嚴帝一御子　〔新後拾〕春上・三　春下・一　夏・二　秋上・三　秋下・二　冬・二御製　〔新續古〕春下・一　冬・一　雜上・一後圓融院御製

【後照念院】

後照念院前關白太政大臣　冬平公に同じ

後照念院關白太政大臣讃岐　〔新後撰〕戀六・一　〔續千〕秋上・一　神・一　〔續後拾〕戀二・一　〔嘉陽院歌合〕五

【後嵯峨院】

御嵯峨院　諱邦仁。土御門帝御子（一八八〇―一九三二）　〔續後撰〕春上・一　春中・一　春下・一　夏・一　秋上・一　秋中・二　秋下・二　冬・二　神・一　戀一・二　戀五・一　旅・一　賀・四太上天皇　〔續古〕春上・四　春下・三　夏・二　秋上・六　秋下・五　冬・三　神・四　釋・四　旅・一　戀一・三　戀四・一　戀五・一　哀・一　雜上・四　雜中・六　雜下・三　賀・三太上天皇　〔續拾〕春上・一　春下・三　夏・二　秋上・一　秋下・四　冬・二　雜春・一　雜秋・一　戀一・三　戀三・二　戀四・一　戀五・二　雜上・一　雜中・一　釋・四　神・三後嵯峨院御製　〔新後撰〕春上・一　春下・一　夏・一　秋上・四　秋下・一　冬・一　別・一　釋・三　神・一　戀一・三　戀三・二　戀四・一　戀六・一　雜上・三　雜中・一

〔玉葉〕春上•二　秋上•一　冬•一　賀•二　雜三•三　〔續千〕春上•二　春下•一　夏•三　冬•一　神•一　釋•一　戀三•一　賀•一　〔續後拾〕春下•一　夏•一　冬•一　戀二•二　戀四•三　雜上•一　雜中•一　釋•一　神•一　〔風雅〕春下•一　秋上•二　秋下•一　冬•一　戀四•一　雜中•一　〔新千〕春下•一　秋上•二　秋下•二　冬•一　旅•一　雜下•一　賀•一　〔新拾〕春上•一　春下•一　秋上•一　秋下•二　冬•二　旅•一　戀二•一　釋•一　雜中•一　〔新後拾〕夏•一　秋上•一　戀三•一　雜上•一　釋•一　〔新續古〕春下•二　夏•一　秋上•一　釋•二　戀二•一　雜中•一

後嵯峨院大納言典侍　大納言源通方女　〔續後撰〕賀•一　大納言典侍　〔續古〕春上•一　戀四•一　哀•一　前大納言典侍　〔續拾〕戀五•二　〔新後撰〕戀一•一　戀六•一　〔玉葉〕雜上•一　〔新拾〕賀•一　〔新續古〕夏•一　秋下•一　旅•一

後嵯峨院宮内卿　[illegible]　〔續[illegible]〕[illegible]•一

【後嵯峨　[illegible]】

後[illegible]院内大臣　公[illegible]公に同じ

後[illegible]攝政關白　時[illegible]に同じ

【後[illegible]院】

後[illegible]院　[illegible]　（一九四八〜一九九九）〔後[illegible]御集〕一八六　〔新後撰〕夏•一　秋上•一　戀五•一　[illegible]　〔續千〕春上•一　春下•二　秋上•一　秋下•二　冬•一　旅•二　戀一•三　戀二•二　戀三•四　戀五•一

今上御製 〔續後拾〕春上・二 春下・二 夏・一 秋上・二 秋下・二 冬・一 戀一・二 戀三・一 雜上・一 雜中・二 神・二 御 〔風雅〕秋下・一 戀二・一 雜下・一

後醍醐院御製 〔新千〕春上・一 春下・二 夏・二 秋上・二 秋下・二 冬・三 神・一 戀一・二 戀二・二 戀三・一 戀四・一 戀五・一 雜上・一 雜中・二 雜下・一 賀・一 〔新拾〕夏・一 秋上・一 秋下・二 冬・一 賀・一 戀二・一 神・一 雜上・一 〔新後拾〕春上・二 夏・一 雜下・一 賀・一 〔新葉〕春上・三 春下・二 夏・三 秋上・一 秋下・五 冬・二 旅・五 神・二 戀三・二 戀四・三 戀九・二 雜上・八 雜下・三 哀・三

後醍醐院女藏人万代 藤原盛徳女 〔續千〕賀・一 女藏人萬代

〔續後拾〕戀四・一 〔新千〕戀三・一 哀・二 賀・一 〔新拾〕戀三・一 雜上・二 〔新續古〕雜上・一

後醍醐院少將内侍 從三位爲信女 〔續千〕秋下・一 戀一・二 戀三・一 〔風雅〕戀二・一 〔新拾〕戀五・一

後醍醐院權大納言典侍 〔續千〕戀五・一 〔新千〕戀五・一 後醍醐院大納言典侍 〔新葉〕釋・一 哀・一

【後德大寺】

後德大寺太政大臣 公孝に同じ

後德大寺左大臣 實定公に同じ

後德大寺前太政大臣女 公孝公女 〔玉葉〕戀四・一

十畫

浮 五位肥前守。大和守輔弘男。至永平主 〔後撰〕戀二・一

桂のみこ　孚子内親王に同じ

旅人　大納言。大納言大伴安麿男(一一三九一)　〔新古〕旅・一　大納言　〔新勅〕
旅・一　雜四・一　〔續後撰〕旅・一　〔續古〕。夏一
旅・一　〔玉葉〕春上・一　秋上・一　戀一・一　〔續
千〕秋上・一　〔續後拾〕雜中・一　〔新千〕哀・一
〔新後拾〕春上・一　〔萬葉〕卷三・三一　卷四・一二
卷六・八　卷八・五　長歌卷三・一

夏久　五位。賀茂　〔新續古〕雜上。一

粉川觀音　〔玉葉〕釋・一　〔風雅〕釋・一

茨田王　〔萬葉〕卷一九・一

祀父（さヾ）　安倍朝臣子　〔萬葉〕卷一六・二

倚平　五位日向守。飛驒守橘是輔男。至天元三年　〔拾遺〕別・一

朔平門院　伏見院皇女　〔玉葉〕秋上・一　秋下・一　冬・一
戀二・三　戀五・一　雜五・一　〔風雅〕春中・一
戀五・一

原見王　從五位下。イ厚見王　〔新古〕春下・一

草春　不知官位。高向　〔拾遺〕物名・一

書持　大伴　〔萬葉〕卷三。一　卷八。一　卷一七・二

〔古今和歌六帖〕

躬恆　五位先祖不詳淡路權掾。凡河内諶利男。延喜廿一年正卅任淡路權掾(一五一九―一五六七)古今集撰者
〔古今〕春上。四　春下・七　夏。四　秋上・七
秋下。四　冬。二　別。三　旅・二　戀一・二　戀二
・七　戀三・三　戀四・一　戀五・二　哀・一　雜上
・一　雜下・五　雜體・四　長歌一　誹諧歌三　〔後撰〕春上・六
春中・一　春下・四　秋上・一　秋中。一　秋下・二
戀三・二　雜一・三　雜二・三　〔拾遺〕春・六　夏・

四　秋・四　賀。一　物名・一　雜上・二　雜下・五
戀二・一　戀三・一　雜春・四　雜秋・五　一古今賀に讀人しらず
〔新古〕春上・二　春下・一　秋上・一　秋下・一　賀・一
戀一・一　戀四・一　戀五・一　雜上・一　〔新勅〕春・一
秋下・一　戀一・一　戀四・一　雜五・二名物　〔續後
撰〕春中・一　春下・一　戀五・一　雜上・一　雜中
・一　雜下・一　賀・一　〔續古〕春下・二　夏・一
冬・一　神・一　別・一　戀一・三　雜中・一　夏。一
〔玉葉〕春上・一　春下・二　夏・一　秋上・一　冬・一
戀一・二　戀二・一　戀三・一　戀四・一　雜一・一
雜二・二　雜三・一　雜四・一　〔續千〕春上・二
春下・一　夏・一　秋上・一　戀一・一　〔續後拾〕春
下・一　秋上・一　戀一・一　戀二・一　戀四・一

〔風雅〕秋上・一　〔新千〕春上・一　秋上・一　神・一
戀一・一　戀二・一　戀四・一　〔新拾〕春下・一
秋上・一　秋下・一　冬・二　戀一・一　、戀三・一
〔新後拾〕春下・一　戀二・一　〔新續古〕夏・一　秋
下・一　〔三十六人集〕　三三一　長歌三　旋頭歌
五　〔古今和歌六帖〕〔寛平后宮歌合〕秋・一　〔亭
子院歌合〕初春・六　季春・五　夏・一　戀・四

雙救　上人嵯峨竹林寺長老　〔新千〕哀・一　〔新拾〕釋・一

氣基　法印　〔新拾〕雜上・一　謙律師　〔新後拾〕雜上・一

狹野茅上娘子　〔萬葉〕卷一五・二三

峯雄　六位。承和比人。上野　〔古今〕哀・一　〔後撰〕雜三・一

涌蓮　釋。安永三年寂　〔獅子巖歌集〕一〇〇三

【修】

修明門院大貳 石清水別當成清女 〔續後撰〕戀五・一 〔續古〕戀五・一 雜下・一 〔續千〕哀・一 〔續後拾〕雜下・一

修理 内匠允[illegible]原直行妹 〔拾遺〕雜秋・一 〔新勅〕戀二・一

【海】

海人 高氏 〔萬葉〕卷五・一

海上女王 〔萬葉〕卷四・一 〔古今和歌六帖〕

【祝】

祝子内親王 花園帝皇女 〔風雅〕賀・二 秋中・一 冬・一 戀一・一 戀四・一 戀五・一 雜中・一 雜下・二

祝部成仲女 〔新拾遺〕哀・一

【眞】

娘子玉槻 〔萬葉〕卷一五・二

娘子兒島 筑紫處女 〔萬葉〕卷三・一 卷六・二

【倫】

倫圓 大僧正。大藏卿行宗子 〔千載〕雜中・一 法師

倫寧 四位。讃岐守藤原惟岳男。貞元二年 〔後拾〕別・一 四位

【融】

融月 法師 〔新千〕戀五・一 〔新拾〕雜上・二 〔新後拾〕神祇・一 〔新續古〕哀・一

融意 [illegible] 別・一

【荒】

荒木田成長女 〔續後撰〕雜上・二

荒耳 大田部 〔萬葉〕卷二〇・一

【島】

島足〔萬葉〕卷・一

島麿 神麻續部 〔萬葉〕卷二〇・一

【宰】

宰承 法印 〔續千〕戀二・一 法眼 〔風雅〕春上・一 法印

宰相 〔續詞花〕戀下・一

【倭】

倭文子 弓屋 〔散りのこり〕九六

倭大后 〔玉葉〕哀・一

倭姬皇后 〔萬葉〕卷二・三 長歌卷二・二

【神】

神退 法師。近江國滋賀郡人 〔古今〕雜上・一

神祇伯顯仲女 〔金葉〕秋・二 戀下・一 〔詞花〕雜下・一

神祇伯顯仲卿 肥前守藤原定成女 〔新續古〕戀四・一

【馬】

馬内侍 一條院皇后宮女房。大和守源時明女 〔拾遺〕雜下・一 戀三・二 雜春・一 〔後拾〕春上・一 戀一・二 戀四・一 雜一・一 雜二・三 雜三・一 雜四・二 〔千載〕冬・一 戀五・二 〔新古〕哀・一 戀一・三 戀三・二 戀五・二 〔續後撰〕戀一・一 〔續古〕戀二・一 雜上・一 〔玉葉〕秋下・一 〔續千〕旅・一 〔續後拾〕戀三・一 〔風雅〕戀四・一 〔新千〕戀一・一 〔新拾〕戀三・一 戀四・一 〔新後拾〕戀五・二 〔續詞花〕冬・二 戀上・一 戀下・一

馬長 田口 〔萬葉〕卷一七・一

馬養 女 〔萬葉〕卷八・二

【殷】

殷富門院大輔　藤原信成女　〔千載〕戀二・一　戀四・一　雜五・二　雜中・一　〔新古〕春上・一　春下・一　秋上・一　冬・一　哀・一　戀二・二　戀三・一　戀四・一　雜中・一　〔新勅〕春上・一　春下・一　秋上・一　冬・一　釋・一　戀一・一　戀二・三　戀五・二　雜一・三　雜五・一名物　〔續後撰〕夏・二　秋下・一　戀一・二　戀三・一　戀五・一　雜下・一　〔續古〕別・一　哀・一　〔續拾〕戀四・一　雜上・一　〔新後撰〕雜中・一　〔玉葉〕冬一　雜一・三　雜四・一　〔續千〕秋下・一　戀一・一　〔續後拾〕雜中・一　〔風雅〕戀一・二　戀五・二　〔新千〕春下・一　戀二・一　〔新拾〕冬・一　戀一・一　戀二・一　雜上・一　〔新後拾〕春上・二　〔新續古〕戀五・一　雜下・一

殷富門院尾張　主殿頭賀茂在憲女　〔千載〕戀二・一　戀三・一

殷富門院新中納言　右近少將源通宗女　〔新勅〕雜・一

【益】

益人　田口　〔萬葉〕卷三・二

益人　桉作　〔萬葉〕卷三・一　卷六・一

益人　朝倉　〔萬葉〕卷二〇・一

益久　五位。賀茂　〔新續古〕雜上・一

【乘】

乘功　法師　〔新拾〕雜上・一

乘伊　三井寺上乘院大僧正　〔新千〕釋・一

乘基　法印。大納言基國子　〔新後拾〕雜上・一

乘雅　法印。從三位兼賴子　〔續拾〕雜中・一　釋・一　權大僧都　〔新

後撰〕釋・一　雜下・一　法印

【宮】

宮人　河邊　〔萬葉〕卷二・二

宮内卿　後鳥羽院宮内卿に同じ

宮内　延喜皇太后（穏子）女房　〔拾遺〕春・一

宮麿　石川　〔萬葉〕卷三・一

【桓】

桓守　叡山天台座主岡崎實乘院大僧正。山本相國公守公子　〔續千〕秋上・一　神・一　釋・一　〔續後拾〕神・一　〔新千〕釋・一　雜下・一　〔新拾〕釋・一

桓恵　大僧正　〔新後拾〕雜下・一

桓瑜　律師　〔新千〕雜下・一　〔新後拾〕雜春・一　戀一・一

桓豪　叡山天台座主岡崎大僧正。後山本實泰公子　〔新千〕秋下・一　釋・一　天台座主　〔新拾〕釋・一

桓覺　岡崎權僧正。中園相國公賢子　〔新千〕釋・一　〔新拾〕雜上・一　雜下・一

【致】

致方　四位右大辨。六條左大臣源有房男　〔拾遺〕雜賀・一　連歌。四位

致平親王　四品兵部卿號明王院宮。天暦帝御子　〔新古〕戀五・一　〔續後拾〕雜上・一

致時　四位大外記。治部大輔中原有家男。長保六年卒　〔後拾〕春上・一　五位

致雄　五位。源　〔風雅〕雜下・一

致經　六位左衛門。中宮大夫平致頼男　〔詞花〕雜上・一

致親　五位與栗允。左馬允源爲清男　〔金葉〕冬・一

【素】

素性 法師(俗名良岑玄利 遍昭子) [古今]春上・五 春下・七 夏
二 秋上・三 秋下・三 賀・三 旅・一 戀二・二
戀三・二 戀四・三 戀五・三 哀・一 雜下・二
雜體・一 [後撰]春上・一 春中・一 秋下・二 雜
一・二 雜二・一 旅・一 [拾遺]春・一 雜上・一
後撰雜二のうた [新古]夏・一 戀五・一 [續後撰]秋下
・一 賀・一 [續古]旅・一 [玉葉]雜一・一 雜二
・一 [續千]雜二・一 [續後拾]雜二・一 [新千]
戀二・一 [新拾]春上・一 釋・一 [新後拾]賀春
・二 雜三・一 戀五・二 [新續古]雜二・二 [古
今和歌六帖] [三十六人集]九九 [寛平后宮歌
合]春・二 秋・一
素俊 [illegible] [新勅]雜一・一 [續後拾]秋

・一 [續古]春中・一
素意 法師(俗名紀伊守重經) [後拾]春上・一 秋上・二 冬・二
雜二・二 雜三・三 [千載]秋下・二
素覺 寂然に同じ
素觀 上人 [新續古]哀傷・一
[院]
院 [後撰]朱雀院に同じ [金葉]白川院に同じ [千載]後白川院に同じ
[新後撰]伏見院に同じ [玉葉]同上 [續千]後伏見院に同じ [同
後拾]上同 [風雅]花園院に同じ [新千]光嚴院に同じ [新拾]上同
院中納言典侍 [新後撰]後二條院中納言典侍に同じ
院大納言典侍 [續古]後嵯峨院大納言典侍に同じ
院少將內侍 [續拾]後嵯峨院少將內侍に同じ
院源 (叡山天台座主 陸奥守平元平子) [illegible]・一

院辨内侍 〔續拾〕後深草院辨内侍に同じ

素暹 法師俗名胤行。東平重胤子 〔續後撰〕戀一・一 雜中・一 〔續古〕秋上・一 秋下・一 冬・一 戀五・一 雜上・二 〔續拾〕旅・一 雜下・一 〔新後撰〕戀二・一 戀二・一 戀三・一 雜下・二 〔續千〕秋下・一 〔續後拾〕秋上・一 〔新千〕戀一・一 戀五・一 〔新拾〕春上・一 戀一・一 〔新後拾〕戀二・一 〔新續古〕旅・一 戀五・一

【能】

能元 五位。散位橘忠元男 〔金葉〕雜上・一 〔詞花〕秋・一

能有 正二位近院右大臣。文徳帝御子 〔古今〕戀四・一 哀・一 雜上・一 近院右のおほいまうちぎみ 〔續後拾〕戀四・一 近院右大臣

能信 正二位関院贈太政大臣。御堂道長男、白川外祖 〔後拾〕賀・一 関院贈太政大臣 〔新千〕賀・一

能信 從二位中納言。藤原 〔續後拾〕冬・一 補中納言

能宣 四位祭主。祭主大中臣頼基男（一五八一―一六五一）梨壺五人の一 〔拾遺〕春・四 夏・二 秋・六 古今秋下もみぢせぬ常磐の山の歌、紀淑望とあり 冬・五 賀・八 別・四 雜上・四 雜下・三 長歌一 神・八 戀二・四 戀三・一 戀五・一 雜春・二 雜秋・四 [illegible] 哀・二 〔後拾〕春上・八 春下・三 夏・三 一首拾遺不知讀人紅葉せばあかくちりなむの歌 秋上・三 秋下・一 冬・二 旅・二 戀一・三 戀三・一 雜五・二 〔詞花〕春・二 秋・二 賀・一 戀上・一 雜上・一 雜下・一 〔續古〕夏・一 秋上・一 別・一 戀一・二 戀五・二 雜中・一 雜下・二 神・一 〔新勅〕春上・一 雜四・一 〔續古〕別・二 戀三・一 〔玉葉〕春

上。一　春下。一　〔續千〕春上。一　春下。一　〔風雅〕春上。一　秋下。一　雜下。一　賀。二　〔新千〕春上。一　戀三。一　〔新拾〕春上。一　〔新後拾〕春上。一　戀二。一　〔新續古〕雜下。一　誹諧　〔續詞花〕春上。一　春下。一　秋上。一　秋下。一　戲。三　〔大德内裏歌合〕三　〔三十六人集〕八〇　〔同補遺〕九七　長歌一

能清　従二位參議。従二位藤原賴氏男　〔續古〕哀。一　雜上。一　雜下。二　四位　〔續拾〕秋下。一　戀二。一　雜中。二　雜下。二　侍從　〔新後撰〕春上。一　秋下。一　戀三。一　雜上。一　雜中。一　〔玉葉〕旅。一　戀二。一　雜五。一　〔續千〕夏。一　戀三。一　雜中。一　〔續後拾〕秋下。一　戀二。一　〔新千〕秋上。一　冬。一　〔新後拾〕夏。一　冬。一　〔新續古〕哀。一

能通　四位但馬守。皇太后宮大夫藤原永賴男。至萬壽三年　〔後拾〕戀一。一　戀二。一　四位　〔續詞花〕戀下。二

能因　法師俗名長門守永愷。肥後守橘元愷子　〔後拾〕春上。五　夏。五　秋上。三　秋下。一　冬。三　賀。一　旅。五　哀。一　戀一。二　戀四。一　雜一。一　雜四。一　雜六。二　神一。誹諧一　〔金葉〕秋。一　雜下。一　〔詞花〕夏。一　賀。二　戀上。一　雜上。一　〔千載〕春下。一　旅。一　雜上。一　〔新古〕春下。一　秋下。二　冬。三　哀。二　雜中。一　雜下。一　〔新勅〕秋下。一　神。一　雜四。一　〔續古〕哀。一　雜上。一　雜下。一　〔續拾〕夏。一　〔玉葉〕旅。一　雜五。一　〔續後拾〕別。二　〔新千〕夏。一　別。一　〔新拾〕雜中。一　〔新續

古〕戀・二　雜上・一　〔續詞花〕春上・一　冬・一

哀・一　戀上・一　別・三　旅・一　雜中・二　雜下・二

能信　法印。參議能清子　〔新後撰〕釋・一　法眼　〔續千〕戀三・一　雜上・一　雜中・一　權少僧都　〔新千〕戀二・一　雜下・一　法印

熊海　法印。民部大輔源賴房子　〔新後撰〕雜上・一　〔玉葉〕雜一・二

能喜　法眼。法印能信子　〔新千〕雜上・一

能登乙美　〔萬葉〕卷一八・一

能運　僧都　〔新後拾〕雜秋・一

能圓　法眼　〔新後拾〕雜中・一　〔續千〕旅・一

能賢　法眼　〔新後拾〕戀二・一

能道　法師。俗名因幡守能盛。大和守藤盛子　〔千載〕神・一　〔新勅〕雜三・一

能譽　法師　〔續千〕戀一・二　雜上・二　〔續後拾〕雜下・二　哀・一　〔新千〕冬・一　戀三・一　戀五・一　〔新拾〕戀三・一　〔新後拾〕戀三・一

【泰】

泰方　四位。春日神主。神主大中臣泰長男　〔玉葉〕神・一

泰氏　五位。平　〔續千〕戀四・一

泰光　從三位。左京大夫源師光男　〔新古〕冬・一　五位　〔新勅〕雜一・一　四位　〔續後撰〕夏・一　戀四・一　從三位　〔續古〕戀五・二　〔玉葉〕釋・一

泰光　四位。縫殿頭。陰陽頭安倍有弘男　〔新千〕戀四・一　四位

泰成親王　〔新葉〕春上・一　夏・一　秋下・一　冬・

一　續門。一

秦宗　五位宇治宮[illegible]介、下野守藤原景綱男　〔新後撰〕秋上。一　〔玉
葉〕雜一。一　〔續千〕春下。一　夏。一　[illegible]。一
續門。一　雜上。一　〔續後拾〕戀四。一　雜下。一
〔新千〕旅。一　雜[illegible]。一　雜上。一　〔新後拾〕冬。一

秦時　四位武藏守、前左京大夫平時[illegible]男　〔新勅〕神。一　雜一。一　雜
三。一　五位　〔續後[illegible]〕[illegible]上。二　雜中。一　[illegible]　〔續古〕
冬。一　旅。一　雜上。一　雜中。一　雜下。一　〔續
拾〕春下。一　雜春。一　雜中。一　〔新後撰〕雜中。
一　〔玉葉〕雜[illegible]。一　〔續千〕秋下。一　〔新後拾〕雜
一。一　戀[illegible]。一　〔新千〕夏。一　雜上。一　〔新拾〕
雜中。一

秦其　五位[illegible]、筑後守藤原[illegible]賴男　〔新後撰〕戀三。一　〔玉葉〕雜

一。一

秦朝　六位[illegible]　〔續拾〕雜上。一　〔玉
[illegible]

秦綱　五位下野守、宇都宮藤原賴綱男　〔續後撰〕雜二。一　〔續古〕雜
春。一　旅。一　〔玉葉〕[illegible]　〔新千〕秋下。一

秦覺　法眼、法[illegible]　〔千載〕釋。一　法
[illegible]

〔覺〕

眞人　[illegible]　[illegible]　卷八。一　卷[illegible]。一　[illegible]
[illegible]

眞人　石生　〔萬葉〕卷三。一

眞人　兵田　〔萬葉〕卷[illegible]。一

眞如堂阿彌陀　〔玉葉〕釋。一

眞延　法師　〔[illegible]撰〕[illegible]。一

眞長 矢作部 〔萬葉〕卷二〇・一

眞忠 位左馬介。左大臣藤原恆佐男。至天暦四 〔後撰〕戀六・一 五位

眞昭 法師。修理大夫時房子 〔新勅〕秋上・一 秋下・一 旅・一 戀三・一 雜四・一 〔續後撰〕冬・一 戀四・一 旅・一 〔續古〕冬・一 戀一・一 戀三・一 雜中・一 〔續拾〕戀三・一 戀五・一 〔玉葉〕戀二・一 雜一・一 〔續千〕雜上・一 〔續後拾〕秋上・一 〔新千〕哀・一 〔新拾〕秋下・一 戀三・一 雜上・一

眞島 物部 〔萬葉〕卷二〇・一

眞根 物部 〔萬葉〕卷二〇・一

眞麿 丈部 〔萬葉〕卷二〇・一

眞淨 法師 〔續千〕雜上・一

眞楯 正三位大納言。藤原房前公男 〔續古〕秋下・一 式部卿

眞縁 上人 〔新續古〕雜上・一

眞淵 賀茂。明和六年歿七十三。冠辭考。萬葉考。國意考。語意考。 〔加茂翁家集〕四四一 長歌三五 旋頭歌一

眞靜 法師。河内國人 〔古今〕物名・一 雜上・一 〔後撰〕旅・一

眞靜 上人壽福大慶雨寺長老 〔玉葉〕釋・一 〔續千〕雜上・一

眞覺 法師 〔新後拾〕戀二・一

眞願 法師 〔續拾〕雜春・一

【祐】

祐任 五位。中臣 〔風雅〕雜下・一

祐世 四位。禰宜鴨祐幸男 〔新後撰〕神・一

祐世 五位。神主中臣祐賢男。暦應二七十五卒 〔新後撰〕雜中・一 〔玉葉〕雜二・一 〔續千〕戀二・一 〔新千〕神・一

祐光 四位。鴨祐春男 〔風雅〕神・一 〔新千〕雜下・一

祐守　五位。鴨　〔新千〕雜上・一

祐臣　五位春日若宮神主。神主中臣祐春男。康永元十一廿二卒　〔玉葉〕雜五・一
〔續千〕戀一・一　雜上・一　雜中・一　〔續後拾〕戀
二・一　〔風雅〕神・一　〔新千〕雜下・一　〔新續古〕
戀三・一　戀四・一

祐性　僧部　〔新續古〕釋・一

祐茂　五位。神主中臣祐明男。文永六年十月十二死去　〔續後撰〕戀四・一
〔續拾〕神・一　〔新後撰〕戀一・一　〔玉葉〕夏・一
〔續千〕神・一

祐春　四位春日若宮神主。神主中臣祐賢男。正中元九五卒　〔新後撰〕冬・一　戀
六・一　雜上・二　〔玉葉〕雜上・一　雜下・一　〔續
千〕神・一　戀二・一　戀三・一　戀四・一　雜下・一
〔續後拾〕雜下・一　神・一　〔風雅〕神・一　〔新千〕
神・一

祐夏　五位。中臣　〔風雅〕雜上・一

祐夏　五位河合禰宜。禰宜鴨祐雄男　〔續千〕戀五・一　〔續後拾〕
雜上・二　〔新千〕冬・一　戀二・一　〔新拾〕戀五・一

祐家　正二位中納言。大納言藤原長家男　〔千載〕春下・一　中納言　〔新
千〕冬・一　〔新拾〕冬・一

祐盛　叡山阿闍梨。源俊頼子　〔千載〕秋下・一　戀一・一　戀五
・二　〔新勅〕夏・一　〔續古〕夏・一　雜下・一　〔續
拾〕釋・一　〔新後撰〕冬・一　〔玉葉〕春下・一　〔新
續古〕神・一　〔續詞花〕春上・一

祐敦　四位。從三位鴨祐實男　〔續千〕戀五・一

祐殖　五位。神主中臣祐親男　〔續千〕雜上・一　〔風雅〕神・一
〔新千〕雜中・一　〔新拾〕神・一　〔新續古〕夏・一

祐賢　五位春日若宮祝。神主中臣祐茂男。弘安九十一三卒　〔續拾〕神・一　〔新後撰〕戀三・一　〔玉葉〕神・一　〔續千〕夏・一

祐親　四位。神主中臣祐賢男　〔新後撰〕雜下・一　〔玉葉〕雜一・一　〔續千〕戀二・一　雜上・一　賀・一　〔新千〕神・一。

祐擧　五位駿河守。越前守平保衡男。至長和四年　〔拾遺〕春・一　神・一　〔詞花〕戀上・一

【祐子】

祐子内親王家小辨　小辨に同じ

祐子内親王家宣旨　〔續後拾〕冬・一

祐子内親王家紀伊　散位平經重女　〔後拾〕戀二・一　一宮紀伊　〔金葉〕秋・一　戀下・二　〔詞花〕春一・一　戀下・一　〔新古〕秋上・一　冬・一　〔新勅〕夏・一　〔續後撰〕夏・一　秋上・一　戀一・一　戀五・一　〔續古〕夏・一　〔玉葉〕戀三・一　戀九・一　雜一・一　〔續千〕冬・一　物名・一　神・一　〔續後拾〕夏・一　秋上・一　旅・一　戀四・一　〔新千〕別・一　戀三・一　〔新拾〕冬・一　〔新續古〕別・一　戀一・一　一宮紀伊　〔高陽院歌合〕五

祐子内親王家辨内侍　〔續千〕夏・一

祐子内親王家駿河　駿河守藤原忠重女　〔後拾〕春上・一　一宮駿河

【家　三畫—十畫】

家尹　從二位。從三位藤原良尹男　〔新續古〕秋上・一　從三位

家主　丹比　〔萬葉〕卷六・一

家平　從一位岡本關白左大臣淨妙寺藤原家基男　〔新後撰〕戀六・一　左近大將　〔玉葉〕冬・一　戀三・一　戀四・一　戀五・一

左大臣〔續千〕夏・一　旅・一　前關白左大臣近衛〔新拾〕釋・一　戀二・一　戀三・一　戀四・一　戀五・二　雜上・二

家光　從三位中納言。中納言藤原資實男　〔續拾〕賀・一　〔新後撰〕賀
・一　雜中・一　雜下・二　衣笠前内大臣〔續拾〕夏・二　秋下・四
雜春・二　旅・一　戀一・二　戀三・一　戀五・一

家仲　五位殿富門院藏人。法橋高階行全男　〔新勅〕雜一・一　雜上・一　雜中・二　雜下・一　釋・一　神・一　〔新後撰〕春上・二　春下・一　夏・一　秋上・一　秋下

家行　五位。度會　〔風雅〕神・一　〔新葉〕神・一

家成　正二位中納言。三位藤原家保男　〔詞花〕秋・一　左衛門督　冬・一
・一　旅・二　戀一・一　戀二・二　戀四・二　戀五
〔續拾〕戀二・一　中納言
・一　雜下・一　〔玉葉〕秋上・三　冬・一　旅・二

家良　正二位衣笠前内大臣。大納言藤原忠良男。文永元九薨七十三　〔新勅〕春上
〔續千〕夏・二　冬・一　雜體・一　誹諧　戀二・一　戀五
・一　秋下・二　戀一・一　戀三・一　戀五・二　雜
・一　雜中・一　〔續後拾〕春上・三　秋下・一　冬・
一・一　權大納言　〔續後撰〕春中・二　春下・一　秋上・一
一　別・一　旅・一　戀二・一　〔新千〕春上・一　夏
秋中・二　秋下・一　冬・二　戀二・一　戀四・一
・一　秋上・一　戀一・一　〔新拾〕春上・一　夏・二
旅・一　前内大臣　〔續古〕春上・二　春下・二　夏・一　秋
賀・一　別・一　戀四・一　雜上・一　雜下・一　旋頭
上・二　秋下・二　冬・二　神・一　釋・一　戀一・二
〔新後拾〕春上・一　夏・一　秋上・一　戀四・一

〔新續古〕春上・一　春下・一　秋上・一　冬・一　雜中・一

家明　〔續詞花〕賀・一

家長　四位但馬守。大膳大夫源時長男　〔新古〕秋上・一　賀・一　旅・一 五位　〔新勅〕夏・一　旅・一　戀二・二　戀三・二　雜一・一　雜四・二 四位　〔續後撰〕秋上。一　秋中・一　秋下・一　戀一・一　戀二・二　戀四・一　〔續古〕雜下・二　賀・一　〔續拾〕雜秋・一　戀四・一　〔新後撰〕戀二・一　〔玉葉〕戀一・一　〔續後拾〕秋下・一　〔風雅〕戀五・一　〔新千〕雜下・一　〔新拾〕旅・一　〔新後拾〕春上・一　神・一　〔新續古〕春上・一　秋上・一　冬・一　戀二・二

家房　從二位中納言。松殿關白藤原基房公男　〔新古〕戀二・一 中宮大夫　〔新續古〕戀二・二　雜上・一

家定　從一位金光院入道前右大臣。右大將藤原家教男　〔新後撰〕春下・一　戀五・二 權中納言　〔玉葉〕冬・一　戀三・一　戀四・一　戀五・一 權中納言　〔續千〕春下・一　哀・一 右大臣　〔續後拾〕雜下・一 入道前右大臣　〔新千〕賀・一 金光院入道前右大臣　〔新拾〕戀二・一

家信　從一位大納言。光福寺内大臣藤原冬氏男　〔新千〕戀三・一 權大納言

家俊　四位。源家賢朝臣男　〔新續古〕夏・一 四位　〔續詞花〕夏・一

家持　從三位大納言。大納言大伴旅人男（一一四四六）　〔拾遺〕春・二　雜春・一 大作家持　〔新古〕春上・二　春下・一　夏・一　秋上・二　秋下・二　冬・一　戀一・一　戀三・一 中納言　〔新勅〕秋下・一　旅・一　雜一・一　雜四・一　〔續後撰〕春上・一　秋中・一　戀三・一　〔續古〕秋上・

二　冬・一　旅・一　戀四・一　雜中・一　雜下・一　〔古今和歌六帖〕〔玉葉〕秋上・一　戀三・一　戀四・一　雜二・一　雜四・一　〔續千〕秋上・一　冬・一　戀三・一　〔續後拾〕春上・一　秋上・一　冬・一　戀一・一　〔風雅〕春上・一　春中・一　春下・一　戀一・一　戀五・一　〔新千〕夏・一　秋上・二　〔新拾〕秋上・一　秋下・一　冬・二　別・一　旅・一　戀四・一　〔新後拾〕夏・一　〔新續古〕春下・一　夏・一　秋上・一　戀四・一　〔萬葉〕卷三・一八　卷四・七三　卷八・五〇　卷一六・二　卷一七・七一　卷一八・五八　卷一九・八六　卷二〇・九三　長歌卷三・三　卷八・二　卷一七・九　卷一八・一〇　卷一九・一七　卷二〇・五　旋頭歌　卷一七・一　〔三十六人集〕一九七　〔同補遺〕一九

家時　五位上野介。淡路守源盛長蘇。至永久六年　〔詞花〕戀上・一

【家　十一畫―十八畫】

家清　五位右兵衞尉。備源後守家長男　〔續後拾〕秋上・一　戀一・二　〔新後撰〕秋下・一　〔玉葉〕秋下・一　〔新拾〕秋下・一　〔新續古〕旅・一

家教　正二位大納言。後花山院大臣藤原通雅男　〔續拾〕冬・一 左近中將　〔新後撰〕秋下・一 前右近大將　〔玉葉〕夏・一　秋下・一　冬・一　戀一・一　戀三・一　〔續千〕神・一

家通　從二位中納言。大納言藤原實通男　〔千載〕戀二・二 左衞門督　〔新古〕戀三・一　雜上・一　〔續詞花〕戀下・一

家基　法師素覺俗刑部少輔伯耆守藤原家光子。至保延二年　〔千載〕夏・一　戀二・一　雜上・二　雜中・一 藤原家基　〔新古〕旅・一　釋・

一
覺素 〔續後撰〕釋・一
家基 從一位淨妙寺關白前右大臣。深心院藤原基平男 〔續拾〕秋下・一
戀一・二 神・一 内大臣 〔玉葉〕春下・一 秋下・一
冬・一 戀三・二 近衞關白前右大臣 〔續千〕神・一 戀三・一
賀・一 後近衞關白前右大臣 〔風雅〕春中・一 冬・一 雜中
・二 淨妙寺關白前右大臣 〔新拾〕戀三・一
家雅 正二位大納言。大納言藤原長雅男 〔新後撰〕秋下・一 前大納言 〔玉
葉〕夏・一 雜二・一 〔續千〕戀三・一 〔風雅〕春中
・二 冬・一 雜中・一
家隆 從二位。中納言藤原光隆男（一八一八—一八九七）和歌口傳、壬二集 〔千載〕秋
下・一 旅・一 戀二・一 雜上・一 雜中・一 五位
〔新古〕春上・四 春下・三 夏・二 秋上・六 秋下
四 冬・二 旅・六 戀二・一 戀四・四 戀五・二
雜上・一 雜中・三 雜下・四 四位 〔新勅〕春上・二
春下・二 夏・三 秋上・六 秋下・五 冬・七 神
・二 戀一・三 戀二・一 戀三・二 戀五・四 雜
一・一 雜二・一 雜三・一 雜四・五 正三位 〔續後
撰〕春上・一 夏・一 秋上・四 秋中・三 冬・二
戀二・一 戀四・二 戀五・一 雜上・二 旅・一 從二
位 〔續古〕春上・七 春下・二 夏・四 秋上・三
秋下・三 冬・四 神・一 別・一 旅・三 戀一・一
戀二・二 戀三・三 戀四・一 雜上・三 雜中・一
雜下・一 賀・一 〔續拾〕春上・二 春下・三 夏・
一 秋上・一 雜春・一 雜秋・一 旅・一 戀四・
一 戀五・二 雜上・一 雜中・一 雜下・二 〔新
後撰〕春上・三 春下・三 夏・一 秋下・二 冬・一

戀二・一　戀三・二　戀四・一　戀五・一　戀六・一　雜上・一　雜下・一　〔玉葉〕春上・三　夏・一　秋上・二　秋下・二　冬・一　戀一・一　戀四・一　雜二・一　雜四・一　雜五・一　釋・一　〔續千〕春下・一　秋上。一　秋下・二　冬・二　神・一　戀二・一　戀五・一　雜上・一　〔續後拾〕春上・一　春下・一　夏・二　秋上・二　秋下・二　冬・一　戀四・一　〔風雅〕春上・一　春下・二　夏・一　秋上・三　秋中。一　冬・一　戀一・一　雜上・三　雜中・一　〔新千〕春上・一　春下・一　秋下・一　冬・一　戀五・一　雜上・一　雜中・一　哀・一　〔新拾〕春上・二　夏・一　秋上・一　秋下・二　旅・二　哀・一　戀一・一　神・一　雜上・三　雜下・五　〔新後拾〕春上・一　夏・二　秋上・一　秋下・一　冬・一　戀一・一　戀二・一　戀三・一　雜上・一　賀・一　〔新續古〕春上・一　春下・一　夏・二　秋上・一　秋下・一　冬・一　賀・一　旅・一　戀四・一　雜上・一　〔王二集〕二七五九

家經　従一位後光明峯寺前攝政左大臣、後一條藤原實經公男　〔續古〕夏・一　秋上・二　戀一・一左近大將　〔續拾〕秋下・一　雜秋・一　戀一・一　戀二・一　戀三・三　戀四・一　神・二前攝政左大臣　〔新後撰〕夏・一　雜下・二　〔玉葉〕春上・一　夏・一　秋下・一後光明峯寺前攝政左大臣　〔續千〕雜上・一　〔續後拾〕春上・一　雜下・一　〔新千〕雜上・一　〔新拾〕旅・一　〔新後拾〕夏・二　賀・一

家經　四位式部大輔。参議藤原廣業男。至天喜二年　〔後拾〕秋上・二　冬・一　別・一四位　〔金葉〕秋・二　賀・一　雜上・一　〔詞花〕

夏・一　雜下・二〔新古〕冬・二〔玉葉〕戀二・一　雜一・一〔風雅〕春下・一〔續詞花〕秋上・一　釋・二

家實　五位。周防守藤原通宗男〔千載〕戀二・一

家綱　五位雅樂頭。兵衞佐藤原寘範男。イ甲斐守章經子〔金葉〕雜上・一

家賢　從三位中納言。大納言藤原師賢男〔新續古〕春下・一〔新葉〕春上・四　春下・一　夏・四　秋上・三　秋下・三　冬・一　離・一　神・三　釋・二　戀一・一　戀二・六　戀三・四　戀四・一　戀五・四　雜上・五　雜中・三　雜下・二　哀・一

家親　正二位參議。號堀河宰相從三位藤原基雅男〔玉葉〕春下・一　夏・一　冬・一　戀四・二　戀五・一　雜三・一　雜五・二　前參議〔續千〕戀四・一〔風雅〕秋中・一　戀三・一　雜上・二　雜中・一〔新拾〕秋下・一

家衡　正三位。宮內卿藤原經家男〔新古〕春上・一　雜中・一　四位〔新勅〕賀・一　戀三・一　正三位〔續後撰〕雜下一〔續古〕神・一〔新後撰〕賀・一〔新續古〕秋上・一　戀三・一　從三位

家豐　從三位參議。參議藤原忠顯男〔新續古〕雜上・一　參議

【高　四畫―九畫】

高內侍　儀同三司母に同じ

高田女王〔新續古〕戀三・一〔萬葉〕卷四・六　卷八・一〔古今和歌六帖〕

高世　六位。菅野〔古今〕春下・一〔古今和歌六帖〕

高市皇子　天武帝皇子（一三一五―一三五六）〔萬葉〕卷二・三〔古今和歌六帖〕

高市黑人の妻〔萬葉〕卷三・一

高光　五位左少將法名如覺號多武峯上人。九條右大臣藤原師輔男。至寬和元年　〔拾遺〕物名・一 如覺　雜上・一　雜春・一　哀・一　〔新古〕冬・一　戀一・二　雜上・一　雜中・一 如覺　雜下・一 如覺　〔新勅〕戀一・一　戀四・一　雜三・一　〔續後撰〕旅・一　〔續古〕戀二・一　哀・一　〔玉葉〕雜四・一　〔續千〕旅・一　〔續後撰〕雜中・一　哀・一　〔新千〕賀・一　〔新拾〕雜中・一　〔新後拾〕雜下・一　〔續詞花〕釋・一　雜中・一　雜下・一　〔三十六人集〕四六

高安　〔萬葉〕卷八・一

高安　大原　〔萬葉〕卷一七・一

高安王　〔萬葉〕卷四・二

高秀　五位京極大膳大夫。佐渡判官源高氏男　〔新千〕戀三・一　〔新拾〕哀・一　戀四・一　〔新後拾〕冬・一　雜春・一　雜秋・二　雜下・一

高明　正二位西宮左大臣。延喜帝御子（一五六四—一六四二）　〔後撰〕旅・一　戀一・二　戀二・一　戀三・一　戀四・五 西宮前左大臣　〔新古〕戀一・一　戀五・一　雜下・一　〔玉葉〕戀一・二　〔續千〕夏・一　〔續後拾〕春下・一　〔風雅〕戀一・二　戀四・一　〔新千〕戀一・一　戀四・一　〔新拾〕戀五・一　〔新後拾〕秋上・一

高宗　五位。平　〔新千〕雜上・一　〔新拾〕雜上・二

高定　正二位中納言。藤原　〔續古〕雜上・一　雜下・一 左兵衞督　〔續拾〕夏・一　秋下・一　戀二・二　戀三・一　雜中・二 按察使　〔新後撰〕雜中・一　〔玉葉〕雜一・一 前中納言　〔新拾〕冬・一

高松上　西宮左大臣高明女　〔詞花〕雜上・二　〔續古〕戀四・一

高松北方 〔續詞花〕戀下・一

高松院右衞門佐 〔新古〕戀二・一 〔新勅〕戀二・一 戀三・一 〔續詞花〕戀中・一

高津内親王 桓武帝御女 〔古今〕雜下・一 左書 〔後撰〕雜二・一

高風 五位右京亮。宮道。至天慶三年 〔後撰〕春中・一

【高 十畫—十六畫】

高宮王 〔萬葉〕卷一六・二

高倉院 諱憲仁。後白川帝御子〔一八二一—一八四一〕 〔新古〕夏・一 秋下一 冬・一 戀三・一 高倉院御歌 〔續後拾〕冬・一

高眞 イ高貞。五位。中原 〔金葉〕夏・一

高兼 五位星野。藤原 〔續後拾〕戀三・一

高國 五位畠山上野介。阿波守源時國男 〔風雅〕雜上・一 〔新續古〕戀一・一

高野明神 〔續古〕神・一

高陽院木綿四手 〔新古〕哀・一 〔續後撰〕戀五・一 〔續後拾〕哀・一

高階成忠女 儀同三司母に同じ

高階章行朝臣女 〔後拾〕戀二・一 〔詞花〕戀下・一

高遠 正三位。參議藤原齊敏男〔一六〇九—一六七三〕 〔拾遺〕秋・一 大貳 〔後拾〕春下・一 夏・一 秋上・一 旅・一 哀・一 戀二・一 雜三・一 雜五・一 〔詞花〕夏・一 〔新古〕春上・一 秋上・一 戀一・一 太宰大貳 〔新勅〕戀一・一 戀五・一 〔續古〕春上・一 神・一 別・一 旅・一 〔玉葉〕春上・一 雜五・一 〔續千〕夏・一 〔續後拾〕夏・一 〔新拾〕秋上・一 戀二・一 〔新後拾〕雜

下・一〔新續古〕雜上・一〔續詞花〕春下・一　雜

中・一

高嗣　五位安富加賀守、源　〔新拾〕雜上・一

高經　四位右衞門督。藤原長良男、至寛平七年　〔後撰〕夏・一四位

高辨　栂尾明惠上人。平重國子　〔新勅〕釋・四　雜一・一　〔續

後撰〕釋・一　〔續古〕哀・一　雜下・一　〔續拾〕雜

秋・一　〔新後撰〕別・一　〔玉葉〕秋上・一　冬・一

雜五・四　釋・四　〔風雅〕雜下・三　〔新千〕釋・一

〔新後拾〕雜下・一　〔新續古〕釋・一

高廣　五位左近大夫將監。縫殿頭大江貞重男　〔續後拾〕雜中・一　〔風雅〕

戀三・一　雜上・一　〔新千〕秋下・一　戀一・一　戀

三・一　〔新拾〕雜中・一

高範　五位千秋三河守。五郎藤原範世男　〔風雅〕雜上・一　〔新拾〕雜

中・一〔新後拾〕別・一　雜下・一〔新續古〕釋・一

戀三・一　哀・一

高橋朝臣　〔萬葉〕卷三・二　長歌卷三・一

【時　三畫—九畫】

時久　五位。平　〔新後撰〕旅・一

時元　五位。越後守平時國男　〔新後撰〕雜中・一

時文　五位大膳大夫。木工權頭貫之男。至永觀二年　〔後拾〕哀・一　雜四・一

〔續後撰〕秋下・一　〔續古〕秋上・一　賀・一　〔續詞

花〕秋下・一

時平　正二位本院贈太政大臣。藤原昭宣公男。延喜九薨四十九　〔古今〕秋上・一

雜體・一　誹諧左のおほいまうち君　〔後撰〕戀一・一　戀三・三

戀四・三　戀五・二　戀六・一　雜一・一　雜二・一

雜四・一　別・一　贈太政大臣

時有　五位尾張左近大夫。左近將監平宣房男　〔續千〕冬・一

時光　正二位大納言。大納言藤原資名男　〔新千〕戀五・一　右衛門督　〔新拾〕
冬・一　賀・一　戀二・一　權中納言　〔新後拾〕春下・一
夏・一　雜春・二　雜秋・一　雜上・一　權大納言

時仲　五位尾張守。左近將監平爲時男　〔續千〕哀・一

時言　五位細川下野守。右馬頭源滿國男　〔新續古〕雜上・一

時邦　五位左近將監。駿河守平齊時男　〔玉葉〕雜一・一　〔續千〕戀五
・二

時村　四位左京大夫。左京大夫平政時男　〔續拾〕秋上・一　旅・一　戀
二・一　五位　〔新後撰〕夏・一　秋上・一　神・一　戀三・
一　雜上・一　雜中・一　四位　〔玉葉〕雜四・一　〔續千〕
春上・一　雜上・一　〔續後拾〕戀一・一　〔新千〕戀
二・一

時見　五位越後守。遠江守平篤時男　〔續千〕戀二・一

時忠　正二位大納言。贈左大臣時信男　〔千載〕釋・一　前大納言

時昌　五位大學助。筑後守藤原盛房男。至保延四年　〔千載〕秋下・一　戀三・
一

時雨　五位備後守。藤原四照男。至康保四年　〔後撰〕戀六・一

時長　左大辨　〔新葉〕秋上・一　雜中・一

時季　五位加地備前守。左衛門尉源時綱　〔新拾〕戀三・一　雜上・一

時直　五位大佛遠江守。修理大夫平時房男　〔續古〕秋上・一　哀・一
〔續拾〕戀二・一　〔新後撰〕雜上・一　〔續千〕雜中・一

時房　五位皇后宮大進。上野介藤原成經男　〔後拾〕神・一　〔金葉〕雜上
・二　〔續詞花〕春下・一　秋下・一

時茂　五位北六波羅左近將監。陸奥守守重時男　〔續古〕雜上・二　〔續拾〕
雜秋・一　〔新後撰〕雜中・一

時香　五位。平　〔續千〕雜上・一　〔續後拾〕神・一

時俊　四位。下野守惟宗良俊男　〔續千〕雜中・一　四位　〔新千〕雜上・二　雜二・一

時春　五位鹽田。武藏守平義政男　〔新後撰〕戀四・一　〔玉葉〕秋下・二

【時　十畫―十九畫】

時高　齊時に同じ

時夏　五位。二郎　平長賴男　〔續千〕雜下・一

時望　從二位中納言。中納言平雅範男。天慶元年薨　〔後撰〕戀二・一　平時望朝臣

時基公　從一位後福照院攝政關白。福照院藤原滿基公男　〔新續古〕秋上・一　冬・一　戀五・一　關白前太政大臣

時常　六位東中務丞。左衛門尉平行氏男　〔新後撰〕戀三・一　雜中・一　〔續千〕雜下・一　〔新拾〕雜下・一

時淸　五位佐々木隱岐守。信濃守源泰淸男　〔續古〕戀四・一　〔續拾〕雜春・一　〔新後撰〕雜上・一　〔新續古〕旅・一

時朝　五位。源　〔新拾〕雜上・一

時朝　五位鹽屋長門守。兵衛尉藤原朝業男　〔續後撰〕戀三・一　〔續拾〕雜秋・一　〔新續古〕雜中・一

時遠　六位佐介七郎。遠江守平時直男　〔續拾〕雜中・一　〔新後撰〕雜上・一　〔續千〕秋下・一

時經　權大納言　〔新葉〕旅・一　雜上・一

時景　五位左衛門尉。城介藤原義景男　〔續拾〕雜中・一

時敦　五位越前守。駿河守平政長男　〔玉葉〕雜一・一　〔續千〕秋下・二　戀一・二　戀五・一

時熙　五位山名右衛門督。彈正少弼源時義男　〔新續古〕冬・一

時實　五位。中原行實朝臣男　〔續千〕戀二・一

時綱　五位。越前守平時員男　〔玉葉〕雜一・一
時綱　五位肥後守。肥前守源信忠男。至永保三年　〔後拾〕秋上・一　〔詞花〕春・一
時賢　平。見性法師に同じ
時範　五位備前守。左近將監平時茂男　〔新後撰〕冬・一　雜下・一
時廣　五位佐介越前守。修理大夫平時房男　〔續古〕釋・一　雜上・一　雜下・一　〔續拾〕雜中・一　〔新後撰〕雜中・一　〔玉葉〕賀・一　〔續後拾〕秋下・一
時親　五位。藤原　〔續千〕雜上・一
時藤　五位二階堂備中守。出羽守藤原行藤男　〔風雅〕雜下・一
時藤　六位左衞門尉。安藝守清平時男　〔新後撰〕雜上・一　〔玉葉〕雜二・一
師久　四位。神主賀茂遠久男　〔續千〕戀一・一　〔新千〕戀一・一
師尹　從一位小一條左大臣。藤原貞信公男。天暦二年權中納言左衞門督　〔後撰〕春中・一　戀三・一　四位
師氏　正二位大納言。藤原貞信公男。天慶七參議天徳四中納言安和二大納言天祿元薨　〔後撰〕戀三・一　師氏朝臣　〔新古〕雜中・一　權大納言　〔新勅〕春上・一　秋上・二　冬・一　〔續古〕戀四・一　〔續千〕哀・一　〔續後撰〕別・一　哀・一　〔新續古〕戀二・一
師氏　五位。平常顯男　〔新後拾〕雜春・一　〔新續古〕秋上・一　戀二・一　雜中・一
師平　從一位照光院前關白。後照光院藤原冬教男　〔風雅〕夏・一　前關白右大臣　〔新拾〕賀・一　照光院前關白右大臣
師冬　五位播磨守。左衞門尉高階師行男　〔風雅〕雜上・一
師仲　從二位中納言。中納言源師時男　〔千載〕旅・一　釋・一

師行 從三位。大納言源雅家男 〔續千〕秋下・一 從三位

師光 四位大外記。大外記中原師重男 〔續後撰〕釋・一 雜中・一 五位 〔續拾〕秋下・一 四位 〔新後撰〕釋・一 〔玉葉〕秋下・一 神・一 〔續後拾〕雜中・一 〔新千〕賀・一

師光 五位右京大夫。大納言源師賴男。正治二年御百首詠之。生蓮。至仁安三年 〔千載〕冬・一 戀一・一 戀二・二 戀三・一 雜中・一 〔新古〕雜上・一 雜下・二 〔新勅〕春上・一 春下・二 族・一 戀一・一 雜二・一 〔續後撰〕春下・一 夏・一 〔續古〕秋上・一 〔新後撰〕雜上・一 雜中・一 〔續後拾〕戀一・一 〔新拾〕賀・一 戀三・二 戀五・一 〔新續古〕秋上・一 雜上・一 雜下・二

師光 五位信濃守。信濃守源賴國男。至康和二年 〔後拾〕雜一・一 〔金葉〕雜上・一

師光 五位。藤原 〔續千〕戀二・一

師成親王 兵部卿。後村上皇子歟。出家號嫻雲子竺源惠梵 〔新葉〕春下・一 秋下・一 戀三・一 戀四・一

師良 從一位是心院關白。後福光園藤原良基男 〔新拾〕秋下・一 雜上・二 左近大將 〔新續古〕秋上・一 賀・一 是心院入道前關白左大臣

師尙 四位大外記。明經博士中原師元(イ光)男。建久八年五月二(イ十一日)入滅 〔千載〕雜中・一 神・一 五位 〔續後撰〕戀四・一 四位 〔新後撰〕雜上・一 〔新續古〕哀・一 〔續詞花〕戀中・一

師直 五位武藏守。豐前守高階師重男 〔風雅〕戀五・一 神・一

師房 從一位土御門右大臣具平親王御子(一六六六—一七三七) 〔後拾〕春下・一 夏・一 土御門右大臣 〔金葉〕秋・一 〔千載〕秋上・二 〔新古〕賀・一 〔新千〕秋下・二

師宗 四位大外記。大外記中原師光男 〔新後撰〕戀四・一 雜上・一 五位 〔玉葉〕旅・一 四位 〔續千〕雜上・一 雜中・一 〔新千〕雜中・一

師長 四位左中將。一條關白藤原實經男 〔續拾〕雜春・一 雜秋・一 左中將 〔新後撰〕冬・一 戀二・一 〔續詞花〕別・一

師長 從一位妙音院太政大臣。宇治藤原賴長男 〔千載〕別・一 入道前太政大臣

師忠 正二位大納言。土御門右大臣源師房男 〔新古〕秋下・一 中宮大夫 〔新勅〕春下・一 大納言 〔玉葉〕春下・一 前大納言

師忠 從一位香園院關白左大臣。普光園良實男 〔續拾〕賀・一 左大臣 〔新後撰〕雜上・一 賀・一 入道前關白左太臣

師季 四位大外記。大炊頭中原師綱男 〔新勅〕秋上・一 雜二・一 四位 〔續後撰〕雜中・二 〔續古〕雜下・一 〔玉葉〕釋・一

師季 五位下野守。伊後守平範國男。嘉保三年出家 〔金葉〕秋・一

師貞 四位攝津守。正五位中原師茂男 〔續後撰〕雜上・一 五位 〔玉葉〕秋上・一 雜一・一 四位 〔續千〕夏・一 旅・一 雜中・一

師俊 從二位中納言。堀川左大臣源俊房男 〔金葉〕春・一 秋・一 賀・一 戀上・一 戀下・一 四位 〔千載〕旅・一 中納言 〔新古〕戀一・一 權中納言 〔新勅〕春上・一 冬・一 〔玉葉〕春下・一 〔續詞花〕秋上・一 秋下・一

師信 從一位後花山院內大臣 花山院藤原師繼男 〔新後撰〕秋下・一 戀二・一 戀三・一 權大納言 〔續千〕春下・一 秋下・一 冬・一 內大臣 戀二・一 東宮傅師信 戀三・一 內大臣 〔續後拾〕冬・一 戀一・一 後花山院內大臣 〔風雅〕雜中・一 〔新千〕秋上・一 冬・一 戀三・一 〔新後拾〕雜春・一 〔新續古〕雜上・一

師重　正二位大納言。權大納言源師親男　〔新後拾〕冬・一　戀三・一　權大納言
〔玉葉〕賀・一　〔續千〕夏・一　神・一　戀二・一　戀
三・一

師重　四位大外記。大外記中原師尙男　〔新千〕雜中・一　四位

【師　十畫—二十畫】

師時　正二位中納言。左大臣源俊房男　〔金葉〕秋・一　冬・二　戀下・
一　雜下・一　皇太后宮權大夫　〔千載〕夏・一　戀三・一　戀
四・一　中納言　〔新古〕戀一・一　權中納言　〔新勅〕春上・一
春下・一　夏・一　秋上・一　〔續古〕秋上・一　太皇宮大夫
〔續拾〕雜下・二　權中納言　〔新後撰〕戀一・一　〔續後拾〕
神・一　〔風雅〕秋下・一　前中納言　〔新後拾〕別・一　〔續
詞花〕戀下・一　雜上・一

師兼　春宮大夫。新葉集有與文貞公女贈答和歌　〔新葉〕春上・二　春下・三
夏・二　秋上・二　秋下・二　冬・一　賀・一　釋・一
戀一・一　戀二・二　戀三・三　戀四・二　雜上・二
雜下・一　賀・一

師通　正二位後二條關白。京極攝政師實公男　〔後拾〕春下・一　夏・一
內大臣　〔千載〕春上・一　後二條關白內大臣　〔新古〕雜上・一　雜
中・二　〔古今和歌六帖〕

師教　四位彈正大弼。大納言源師賴男　〔千載〕雜中・一　四位

師教　五位。導　〔風雅〕雜下・一　〔新拾〕戀四・一

師教　從一位已心院前攝政左大臣。報恩院藤原忠教公男　〔新後撰〕戀四・一
戀六・一　左大臣　〔玉葉〕春下・一　雜三・一　前攝政左大臣　〔續
千〕春下・一　秋下・一　戀三・一　戀五・一　〔續後
拾〕神・一　前關白左大臣九條　〔新千〕秋下・一　戀五・二　已心院前
攝政左大臣　〔新拾〕哀・一　戀四・一　〔新後拾〕春上・一

師鄉　四位大外記。大外記中原師胤男　〔新續古〕戀二・一四位・一　〔古今和歌六帖〕

師嗣　從一位後香園院入道關白左大臣。後福光園關白藤原良基公男　〔新後拾〕春下・二　夏・一關白前左大臣　〔新續古〕夏・一　戀二・一　戀四・一　雜中・一後香園院入道關白前左大臣

師經　從三位。右大辨藤原登明男　〔後拾〕雜四・一大藏卿

師輔　正二位九條右大臣。藤原貞信公男（一五七七—一六二〇）　〔後撰〕秋中・三　戀一・一　戀三・三　戀五。一　戀六・一　雜一・一　雜二・一　雜三・一　賀・一　哀・二右大臣　〔拾遺〕賀・二　戀一・一九條右大臣　〔新古〕戀三・一　〔新勅〕春上・一　戀二・一　戀四・一　雜三・二　〔續後撰〕戀一・一　戀三・一　戀四・一　〔續千〕秋上・一　雜中・一　戀四・一　〔續後拾〕戀一・一　戀二・一　哀・一　〔新千〕別・一　哀・一　〔新續古〕別・一　戀五

師實　從一位京極入道前關白太政大臣。字治藤原頼通男（一六八九—一七六一）　〔後拾〕秋上・二關白前左大臣　〔詞花〕春・一京極前太政大臣　〔千載〕春上・二　賀・一　〔新古〕春下・一京極前關白太政大臣　〔新勅〕神・一　〔續後撰〕秋中・一　戀二・一　〔續古〕秋上・一　〔續千〕夏。一京極入道前關白太政大臣　〔續後拾〕賀・一　〔新千〕春上。一　賀。一　〔新後拾〕賀・一　〔新續古〕賀・一　〔續詞花〕春下・一

師綱　六位。勝部　〔新後拾〕戀一・一

師綱　源　〔續詞花〕雜下・一

師範　六位御書所預隼人。大春日　〔後撰〕夏・一　〔古今和歌六帖〕

師賢　正二位大納言。後山本左大臣藤原實泰男　〔續千〕戀五・一權中納言　〔續後拾〕秋上・一　秋下・一　戀四・一中宮大夫　〔新千〕秋

上・二　戀一・一　戀二・二　雜中・一大納言　〔新拾〕・一權大納言　〔續古〕賀・一春宮大夫　〔新後撰〕戀二・一　雜下・一大納言　〔續後拾〕春下・一　〔新千〕雜上・一　春上・一　戀一・一　戀四・一　〔新後拾〕戀三・一　〔新拾〕春上・一　〔續詞花〕秋下・一　冬・一　〔新續古〕神・一

師賢　四位左中辨。參議源資通男。至承暦五年卒　〔後拾〕春上・一　夏・一　秋上・一　戀二・一　雜一・一四位　〔金葉〕夏・一　秋・二　冬・一　雜上・二　〔詞花〕春・二　〔新古〕旅・一　〔新勅〕夏・二　冬・一　〔續詞花〕夏・一

師親　五位。卒　〔續千〕雜上・一　〔續後拾〕戀三・一　〔新千〕雜上・一

師頼　正二位大納言。堀川左大臣源俊房男　〔金葉〕夏・一　秋・一　別・一　雜上・二參議　〔詞花〕雜上・二大納言　〔千載〕春上・一　秋上・二　雜上・一　〔新古〕春下・一　旅・一　〔新勅〕秋上・一　雜四・一　〔續後撰〕夏・一　秋中

師繼　正二位花山院前内大臣。花山院藤原忠經男　〔續後撰〕戀二・一　戀五・一權中納言　〔續古〕冬・一　神・一　雜上・一皇后宮大夫　〔續拾〕春上・一　夏・一　秋上・一　秋下・一　戀一・一　雜中・一　神・一前内大臣師繼　〔新後撰〕夏・一　釋・一　戀二・一花山院内大臣　〔玉葉〕春上・一　戀一・一　戀二・一　戀五・一　〔續後拾〕秋上・一　戀二・一　〔風雅〕戀一・一　戀三・一　賀・一　〔新千〕雜上・一　哀・一　〔新拾〕冬・一　戀三・一　釋・一　〔新續古〕釋・一　旅・一　戀三・一　戀五・一　雜下・一

【兼　三畫―八畫】

兼三 四位陸奥守。中納言藤原山蔭男。至延喜九年 〔後撰〕秋上・一 位五

兼久 六位左近府王。右近將曹秦兼方男 〔金葉〕夏・一

兼文 平 〔續詞花〕春上・一

兼方 六位右近將曹。左近府生秦武方男 〔金葉〕雜上・一

兼氏 四位日向守。源有長朝臣男 〔續古〕哀・一 四位 〔續拾〕夏・一

雜春・一 雜上・一 雜中・一 雜下・一 〔新後撰〕春下・一 夏・一 秋上・一 秋下・一 釋・一 雜上・一 雜下・二 〔玉葉〕夏・一 〔續千〕春上・一 春下・一 夏・一 秋上・一 冬・一 旅・一 釋・一 戀一・二 戀三・一 戀四・一 雜中・一 〔續後拾〕春上・一 春下・一 秋上・一 旅・一 雜上・一 雜中・一 雜下・二 〔風雅〕旅・一 戀二・一 〔新千〕春上・一 秋上・二 冬・二 釋・一 神・一 戀一・一 戀二・一 雜下・一 哀・一 賀・一 〔新拾〕秋上・一 旅・一 戀四・一 神・一 〔新後拾〕冬・一 雜春・一 戀一・二 戀二・一 〔新續古〕戀二・一 雜下・一

兼平 從一位稱念院入道前關白太政大臣。猪熊藤原家實男 〔續拾〕賀・一 攝政前太政大臣 〔新後撰〕賀・一 稱念院入道前關白太政大臣 〔續後拾〕雜上・一 〔新千〕雜上・一

兼好 法師俗名左兵衛尉卜部兼顯子（一九四三―二〇一〇）徒然草 〔兼好法師集〕二八五 〔續千〕雜下・一 〔續後拾〕戀四・一 〔風雅〕雜下・一 〔新千〕雜上・一 雜下・一 哀・一 〔新拾〕冬・一 旅・一 戀一・一 〔新後拾〕雜秋・一 旅・一 雜上・一 〔新續古〕冬・一 戀一・一 戀三・一 雜上・一

兼仲　正二位中納言。中納言藤原經光男　〔新後拾〕賀・一 前中納言

兼行　從二位。左中將藤原親忠男　〔新後撰〕戀一・一 從二位　〔玉葉〕春上・一　夏・一　秋下・一　冬・一　旅。一　戀四・一　雜二・一　雜四・一　〔風雅〕春中・二　夏・二

兼光　正二位中納言。中納言藤原資長男　〔千載〕神・一 權中納言　〔新古〕秋中・一　冬・一　雜上・一　雜中・一　賀・一　〔新勅〕賀・一

兼光　五位大藏大輔。參議源正明男。至康保三年　〔拾遺〕秋・一

兼孝　四位大膳大夫、讃岐守源時長男　〔新後撰〕雜下・一

兼良　從一位後成恩寺攝政關白太政大臣。（二〇六二｜二一四一）花鳥餘情。連歌初學抄。妙花院藤原教房公男　〔新續古〕春上・一　夏・一　秋下・一　戀一・一　戀三・一　戀五・一　雜中・一 前攝政左大臣

兼昌　五位皇后宮少進。攝津守源俊輔男。至天永三年　〔金葉〕冬・一　戀下・一　〔詞花〕夏・一　秋・一　〔千載〕秋下。一　〔新勅〕冬・一　〔新千〕旅・一　〔續詞花〕秋下・一

兼宗　正二位大納言、中山內大臣藤原忠親男　〔千載〕秋下・一 藤原兼宗朝臣　〔新古〕秋下。一　雜下・一 權中納言　〔新勅〕春下・一　秋下・一　戀五・二　雜一・一 按察使　〔續後撰〕冬・一　〔續古〕戀二・一　戀四・一 前中納言　〔續拾〕戀一・二　〔新後撰〕春下・一　〔玉葉〕雜一・一　〔續千〕戀一。一　〔續後撰〕雜中・一　〔新千〕春下・一　〔新續古〕冬・一　戀二・一　雜中・一

兼明親王　二品中務卿。號前中書王。延喜帝御子　〔後拾〕雜五・一 中務卿兼明親王

兼房　四位右中將。中納言藤原兼隆男。至康平五年　〔後拾〕夏・一　秋下・二　冬・一　戀一・一　雜三・一　雜四・一 四位　〔金葉〕春

一　冬・一　別・一　〔千載〕雜中・一　〔新古〕哀・一　〔玉葉〕雜四・一　〔續後拾〕春下・一　〔新續古〕戀五・一　〔續詞花〕春下・一　哀・二　戀下・一　雜下・一

兼治 五位。官務小槻匡遠男　〔新後拾〕戀一・一　〔新續古〕冬・一　雜中・一

兼季 従一位今出川入道前右大臣。後西園寺藤原實兼男　〔新後撰〕秋下・一　冬・一 春宮權大夫　〔玉葉〕春下・一　夏・一　秋上・一　秋下・一　戀一・一 權中納言　〔續千〕春下・一　夏・一　冬・一 右近大將　戀三・一　戀四・一　雜下・一 大納言　〔續後拾〕冬・一 右大臣　〔風雅〕夏・一　戀三・一 今出川入道前右大臣　〔新拾〕賀・一

兼長 五位備前守。備後守源道成男　〔後拾〕春上・一　秋下・一　別・一　哀・一　雜五・一

兼直 吉田禰宜四位三河守。侍從卜部兼茂男　〔新勅〕神・一　〔續古〕神・二　〔續拾〕神・一　〔風雅〕冬・一　〔新千〕賀・一　〔新拾〕旅・一　〔新後拾〕冬・一　雜春・一　〔新續古〕哀・一　雜上・一

兼空 上人深艸。大納言師重子　〔風雅〕雜上・一　〔新千〕雜下・一　〔新拾〕釋・一　雜上・一　〔新續古〕春下・一

兼忠 従一位歡喜園院攝政關白左大臣。照念院基忠公男　〔玉葉〕雜四・一 歡喜園院前攝政左大臣　〔新拾〕雜上・一 後猪熊前關白左大臣

兼忠朝臣母乳母　〔後撰〕雜二・一

【兼　九畫―十二畫】

兼俊 源　〔後拾〕雜三・一

兼信 正二位中納言。後花山院内大臣藤原師信男　〔續千〕冬・一　雜上・一

權中納言

兼胤　四位右馬頭。左近將監源行長男　〔玉葉〕旅・一　〔續千〕戀一・一　哀・一　〔新千〕賀・一

兼茂　從四位下參議。右近中將藤原利基男。延長元年薨　〔古今〕別・二 藤原兼もち　〔後撰〕戀二・一 藤原兼茂朝臣

兼茂朝臣女　〔後撰〕戀三・一　戀五・一 イ兵衛

兼桼　五位大友兵庫頭。長門守源兼朝男　〔續拾〕戀五・一　雜上・一　〔新後撰〕雜中・一　〔新千〕秋下・一

兼高　正三位參議。中納言藤原長方男　〔新勅〕旅・一 五位

兼祐　從三位　〔續古〕戀一・一 右衛門督

兼家　從一位東三條入道關白太政大臣。(一五六七—一六五〇) 右府藤原師輔男　〔拾遺〕雜下・二長一。短一。東三條太政大臣　〔後拾〕別・一　戀四・三 入道攝政　〔新古〕雜上・一　雜中・一 東三條入道關白太政大臣　〔新勅〕戀二・一　雜三・一　〔續後撰〕戀二・一　〔續古〕雜中・一　〔續拾〕戀四・一　〔風雅〕戀一・一　〔新千〕戀一・一　賀・一

兼能　四位。右中將源通能男　〔新後拾〕雜秋・一　戀一・一 四位

兼教　從一位大納言。近衛關白藤原基平男　〔玉葉〕秋上・一　雜一・一　雜四・一 從一位

兼康　四位右馬頭。前播磨守源有家男　〔續古〕雜上・一 四位　〔新後撰〕戀四・一　〔玉葉〕戀四・一　〔續千〕春下・一　戀二・二　〔續後拾〕秋下・一　〔新千〕戀二・一

兼舜　法印　〔新拾〕雜一・一

兼通　從二位堀川關白太政大臣。右府藤原師輔男　〔後拾〕旅・一 堀川太政大臣　〔新古〕戀一・一 忠義公　〔新勅〕戀一・一　〔續古〕戀四・一　雜上・一　〔玉葉〕戀三・一　〔續後拾〕戀三・一

〔新千〕戀二・一

兼敦 四位治部卿。正三位卜部兼熙男 〔新續古〕冬・一 四位

兼朝 五位大友長門守。讚岐守源光教男 〔續後撰〕雜上・一 旅・一 〔續拾〕雜中・一 〔新後撰〕雜上・一 〔新千〕戀一・一

兼盛 五位駿河守。兵部大輔平篤行男。至天元二年 〔拾遺〕春・二 夏・三 秋・二 冬・七 賀・四 別・三 物名・一 此歌大和物語に兼信が女のうた也 雜下・一 神・六 戀一・二 戀三・一 戀四・一 雜春・一 雜秋・二 哀・二 〔後拾〕春上・五 春下・一 夏・一 秋上・二 秋下・一 賀・三 戀一・二 戀四・二 雜三・一 〔詞花〕春・二 秋・一 冬・一 戀上・二 〔續後撰〕春上・一 戀二・一 〔續古〕春上・二 春下・一 秋下・一 戀四・一 〔玉葉〕春上・一 戀三・一 〔續千〕春下・一 戀五・一 〔續後拾〕春上・一 春下・一 戀三・一 〔風雅〕賀・一 〔新千〕春上・一 戀二・一 戀四・一 〔新拾〕雜中・一 〔新後拾〕春下・一 〔新續古〕賀・一 〔續詞花〕戀上・二 雜中・一 〔天德内裏歌合〕一 〔三十六人集〕二五二 〔古今和歌六帖〕

兼盛王 〔後撰〕春上・一 戀一・一

兼寮弟 〔拾遺〕雜春・一

【兼 十三畫—二十一畫】

兼隆 五位加賀介。但馬介源信孝男。至寛和四年 〔拾遺〕神・一 〔後拾〕春上・二 賀・二 別・一 戀一・一 雜六・一 〔新後拾〕賀・一 別・一 旅・一 〔續詞花〕賀・一

兼經 從一位岡屋攝政關白太政大臣。猪熊藤原家實公男 〔續後撰〕釋・一

雜中•二攝政太政大臣　〔續古〕夏•一　冬•一　〔續拾〕秋下•二　〔玉葉〕賀•一　雜一•一　雜五•一　釋•一　〔新千〕賀。一　〔新拾〕秋上。一　戀四•一　〔新續古〕賀•一

兼輔　從三位中納言。右近中將藤原利基男。延長五年中納言八年兼右衛門督承平三年薨（一五三七｜一五九三）〔古今〕別•一　旅•一　戀五•一　雜體誹諧歌一藤原兼輔朝臣　〔後撰〕春上•二　春下•三　夏•一　秋上•一　冬•二　戀二。一　戀三。一　戀九•一　戀六。一　雜一•三　雜四•二　哀•五中納言兼輔朝臣　〔新古〕冬•二　哀•二　別•一　戀一•二中納言　〔新勅〕賀。一　戀三•一　雜三•一　雜四。一　〔續後撰〕春上•一　雜下•二　旅•一　〔玉葉〕春下。一　戀四•一　雜四•一　〔續千〕戀三•一　〔續後拾〕冬•一　物名•一　戀一•二　〔風雅〕雜上•二　〔新千〕春上•一　春下•二　〔新拾〕別•一　〔新後拾〕別•一　〔新續古〕秋上•一　〔三十六人集〕三一〇四　〔古今和歌六帖〕

兼實　從一位後法性寺入道前關白太政大臣。法性寺藤原忠通公男（一八〇九｜一八六七）〔千載〕春上•二　夏。二　秋上。三　秋下。一　冬。一　旅•一　戀二。一　戀三•二　戀四。二　戀五•二　釋•二攝政前右大臣　〔新古〕夏•二　秋上•一　冬。一　哀。一　旅•一　戀一。一　戀二。二　戀三。一　雜下•一　神•二　釋。一入道前關白太政大臣　〔新勅〕秋下•一　賀。一　釋•一　戀一•二　戀二•一　雜二•一　雜三•一後法性寺入道前關白太政大臣　〔續後撰〕春上。一　夏•一　戀二。二　〔續古〕春上•一　春下•一　旅•一　戀二•二　戀三•二　〔續拾〕夏•一　雜春•一　戀一•二　神•一

〔新後撰〕夏・一　秋下・一　〔玉葉〕春上・一　春下・二　冬・一　〔續千〕春下・一　雜體・一 折句　〔續後拾〕冬・一　〔風雅〕春上・一　〔新千〕戀二・一　〔新拾〕冬・一　釋・一　〔新續古〕旅・一

兼綱　四位紀伊守。粟田關白藤原道兼公男。天喜六年七廿九卒　〔後拾〕雜三・一 四位

兼綱　從一位儀同三司。權中納言藤原光業男　〔新千〕戀三・一 權中納言　〔新後拾〕春下・一　秋下・一　賀・一 儀同三司　〔新續古〕秋上・一 儀同三司兼　〔新拾〕夏・一　戀四・一

兼熙　正三位。刑部卿卜部兼豐男　〔新續拾〕雜春・一 四位　〔新續古〕雜上・一　雜下・一　神・一 正三位

兼澄　源　〔續詞花〕賀・一

兼藝　法師。伊勢少掾古之子。大和國城上郡人　〔古今〕別・一　戀五・一　雜上・一

兼覺　法眼。木工頭源季兼子　〔千載〕旅・一　雜中・一

兼譽　法源。覺興法師子　〔新後撰〕戀三・一　〔新千〕秋下・一　神・一　戀二・一　雜上・一

兼覽王　神祇伯宮内卿正四位下。惟喬親王御子　〔古今〕秋上・一　秋下・二　別・一　物名・一　戀五・一　〔後撰〕春中・一　秋中・一　戀二・一　戀三・一　〔亭子院歌合〕季春・二

兼覽王母　〔後撰〕春上・一

十一畫

盛　十二畫を見よ

船王　〔萬葉〕卷六・一　卷一九・一　卷二〇・一

執弓　藤原　〔萬葉〕卷二〇・一

得大理 他田日奉直 〔萬葉〕卷二〇・一

祥子內親王 後醍醐帝御女 〔新千〕雜上・一 〔新葉〕春上・一 秋上・一 冬・一 神・二 釋・一 戀二・二 戀四・二 雜上・三 雜中・一 雜下・二

勤子內親王 延喜帝御女 〔後撰〕戀三・一 女四のみこ

荷田蒼生子 天明六年歿六十五 〔杉の下枝〕六四六 旋一

理平 四位式部大輔。三統。延喜(イ長)四年四月四日卒七十四 〔新古〕神・二

紫式部 上東門院女房。越後守藤原爲時朝臣女、源氏物語、紫式部日記 〔六女集〕一三四 〔後拾〕春上・二 賀・一 〔千載〕秋上・一 冬・一 別・一 哀・一 戀五・一 雜上・一 雜中・二 〔新古〕夏・三 冬・一 賀・一 哀・二 別・一 旅・一 戀四・一 雜上・三 〔新勅〕冬・一 賀・一 戀五・一 雜一・二 〔續後撰〕秋中・二 冬・一 雜上・一 〔續古〕戀三・一 戀五・二 哀・一 雜中・二 賀・一 〔續拾〕戀四・一 戀五・一 雜上・一 〔玉葉〕春上・一 秋上・二 冬・一 戀三・一 雜一・二 〔續千〕雜中・一 物・一 〔續後拾〕夏・一 〔風雅〕秋上・一 〔新千〕釋・一 戀二・一 戀五・一 哀・一 〔新拾〕雜中・一 〔續詞花〕冬・一

健守 法師 〔拾遺〕秋・一 雜下・一

庶明 從三位中納言。三品齊世親王御子、天暦五正中納言從三位 〔後撰〕戀二・二 戀六・一 雜一・一 源庶明朝臣

參河 〔新後撰〕中務卿宗尊親王家參河に同じ

陵阿 法師 〔新續古〕雜中・一

淡海 調 〔萬葉〕卷一・一

堅魚 石上 〔萬葉〕卷八・一

斎然 法橋 〔新古〕旅・一

梅壺女御 〔續古〕哀・一 〔新拾〕秋上・一

陸奥 従五位下橘葛直女 〔古今〕雜下・一

許遍麿 秦 〔萬葉〕卷八・一

梵燈 法師俗名勝部師頼 〔新續古〕雜上・一

【聖】

聖武天皇 諱首。文武帝御子（一三六一—一四一六） 〔新古〕旅・一聖武天皇御歌 〔新勅〕賀・一 〔續後撰〕秋中・一 〔續古〕戀三・二 賀・一 〔新千〕戀二・一 〔新拾〕別・一 〔新後拾〕戀二・一 〔萬葉〕卷四・二 卷六・三 卷八・四 卷一九・一 長歌卷六・一

聖德太子 厩戸皇子。用明帝御子（一二三四—一二八二） 〔拾遺〕哀・一 〔風雅〕釋・一

【貫】

貫之 五位木工權頭。紀望行男。天慶八年三廿八任木工頭、天慶九年卒（一五四二—一六〇六）土佐日記。古今和歌集撰者 〔古今〕春上・一一 春下・一三 夏・三 秋上・三 秋下・九 冬・四 賀・一 別・七 旅・一 物名・六 戀一・四 戀二・一四 戀三・一 戀四・四 戀五・一 哀・六 雜上・七 雜下・一 雜體・二一長歌一。旋頭歌一。古今歌九十八首奥に別書歌三首總都合百一首也 〔後撰〕春上・三 春中・一 春下・一二 夏・二 秋上・二 秋中・二一 秋下・一二 冬・二 戀一・二 戀二・七かいならば拾遺戀一に在り 戀三・四 戀四・二 雜二・二 雜三・二 雜四・二 別・二 旅・二 賀・三 哀・二 〔拾遺〕春・九 夏・六 秋・一二 冬・七古今白雪のふりしくの歌 賀・二 別・六一首は古今雜上の歌 物名・三 雜上・一〇 雜

下・二　神・一　戀一・三　戀二・四　戀三・三　戀四・二　戀五・二　雜春・八　雜秋・一〇（一首は古今物名歌）　雜賀・五　釋教・八（一首は古今雜上歌。一首は古今別歌）　哀・四　〔新古〕春上・二　春下・四　夏・一　秋上・三　秋下・二　冬・一　賀・五　別・二　旅・二　戀一・四　戀三・一　雜中・二　神・三　〔新勅〕春上・三　春下・三　夏・一　秋下・一　冬・一　神・一　戀五・二　雜二・一　雜三・一　〔續後撰〕春上・一　春下・一　秋上・一　秋下・一　戀二・二　釋上・一　旅・一　〔續古〕春上・一　春下・二　夏・三　秋下・二　冬・一　神・一　別・一　戀二・二（一首は拾遺戀一よみ人しらず）　戀四・一　哀・二　〔玉葉〕春上・二　夏・一　秋上・二　秋下・三　冬・四　賀・二　旅・二　戀一・三　戀四・三　雜一・一

雜二・三　〔續千〕春上・一　春下・一　秋下・一　旅・一　戀四・一　〔續後拾〕春上・一　秋下・一　別・一　戀二・一　雜上・一　哀・一　〔風雅〕春上・三　春中・五　春下・一　夏・一　秋上・一　秋中・一　秋下・一　夏・四　旅・二　戀三・一　戀四・三　雜上・三　賀・一　〔新千〕秋下・一　別・一　旅・一　戀一・二　戀二・一　賀・一　〔新拾〕春上・二　春下・二　夏・二　秋上・一　秋下・一　冬・二　哀・一　戀四・一　雜上・三　雜下・一（物名一首）　〔新後拾〕春下・一　秋下・一　別・一（續後拾により）　雜下・一（物名）　〔新續古〕春下・二　秋下・一　戀上・二　〔古今和歌六帖〕　〔三十六人集〕九二八　〔寛平后宮歌合〕夏・一　秋・一　戀・一　〔亭子院歌合〕初春・三　季春・一　戀・二

貫之女 〔拾遺〕雜下・一（大鏡による）

【鹿】

鹿人 紀 〔萬葉〕卷六・二一 旋頭歌卷八・一

鹿苑院太政大臣 義滿公に同じ

【唯】

唯敎 法師 〔新後撰〕釋・一

唯圓 法師 〔新後拾〕戀一・一

【規】

規子內親王 齋宮。天曆帝御子 〔後拾〕雜四・一

規子內親王家但馬 〔續古〕秋上・一

【望】

望行 六位イ望行。下野守紀本道男 〔古今〕哀・一 伊勢物がたり業平歌也

望城（モチキ） 五位。加賀介坂上是則男。至天延三 〔拾遺〕夏・一 〔後拾〕春上・一 〔天德內裏歌合〕二一

【脩】

脩久 從三位。加茂 〔新拾〕神・一 〔續後拾〕神・一 〔新續古〕雜上・一 從三位

脩範 正三位參議。少納言藤原通憲男 〔千載〕秋下・一 旅・一 哀・一 左京大夫 〔續古〕旅・一 〔新續古〕雜下・一 誹諧歌 〔續詞花〕旅・一

【魚】

魚彥 楫取。天明二年歿六十。萬葉集千歌、古言梯 〔楫取魚彥歌集〕一九二 長歌一五 旋頭歌一

【筑】

筑前乳母 俊子內親王御乳母。筑前守高階成明女 〔後拾〕秋上・一 〔金葉〕春・一

筑紫比古之山　〔玉葉〕神・一

【連】

連　尾張　〔萬葉〕卷八・二

連敏　法師　〔後拾〕別・一　雜五・一

【涼】

涼　源散位範頼女　〔後拾〕秋上・一

涼國　源　〔續詞花〕冬・一

【淳】

淳行　六位。伊香子　〔古今〕別・一

淳家　法師　〔新後拾〕雜春・一

【紹】

紹完院贈内大臣　公雅公に同じ

紹辨　上人　〔新後拾〕雜上・一

【鳥】

鳥　丈部　〔萬葉〕卷二〇・一

鳥子　〔續詞花〕戀下・一

鳥羽院　諱宗仁。堀川帝御子（一七六三―一八一六）　〔金葉〕春一・一　新院御製　〔千載〕哀・一　雜中・一　鳥羽院御製　〔新古〕戀三・一　雜上・一　〔續千〕春上・一　釋・一　〔續後撰〕秋下・一　〔續詞花〕春下・一

【宿】

宿奈麿　大伴　〔萬葉〕卷四・二

宿奈麿　巨勢　〔萬葉〕卷八・一

宿奈麿　野氏　〔萬葉〕卷五・一

【敏】

敏行　四位右兵衞督。按察使藤原富士麿男。寛平九年任右兵衞督（一一五六七）　〔古今〕

秋上・五　秋下・三　物名・二　戀二・三　戀三・二
雜上・二　雜體。二誹諧一。東一。四位　〔後撰〕春上・一　春下
・一　戀四・一　雜二・一　〔續古〕戀一・一　〔玉葉〕
秋上・一　戀三・一　〔續千〕冬・一　〔新千〕春下・一
〔新後拾〕神・一　〔三十六人集〕二〇　〔同補遺〕一
三　〔古今和歌六帖〕　〔寛平后歌合〕戀・二

敏仲　五位伊賀守。中納言橘公賴男　〔後撰〕戀二・二

敏信母　〔拾遺〕哀・一

【野】

野村望東尼　慶應三年歿六十二。上京日記、姫島日記　〔向陵集〕二三四
長歌一

野宮左大臣　公繼公に同じ

野宮入道前內大臣　〔新後拾〕夏・一

野鴈　安藤。慶三年歿五十八。萬葉集新考　〔野鴈歌集〕一九〇　長歌九

【笠】

笠女郎　〔玉葉〕戀九・一　〔新千〕戀一・一　〔新拾〕戀
一・一　〔萬葉〕卷三・三　卷四・二四　卷八・二

笠麿　丹比　〔萬葉〕卷三・一　卷四・一

笠麿　小長谷部　〔萬葉〕卷二〇・一

笠縫女王　〔萬葉〕卷八・一

【參】

參玄　法師　〔新後拾〕雜上・一

參議伊衡女今木　〔後撰〕戀三・一　戀六・一

參議玄上女　〔後撰〕哀・三

參議峯守女　〔玉葉〕戀一・一

參議家綱女　〔新續古〕哀・一

【章】

章言　中原　〔新葉〕戀三・一

章經　五位。中原　〔金葉〕戀下・一

章善門院左衛門佐　〔玉葉〕雜四・一

章義門院　譽子。伏見帝御女　〔玉葉〕春上・一　春下・一　秋上・一　秋下・一　冬・一　戀二・一　戀三・一　雜一・一　秋中・一　冬・一　戀二・一　戀三・一

章義門院小兵衛　資邦王女　〔玉葉〕夏・一　戀三・一　戀四・一　戀五・一

【淑】

淑人　四位河内守。中納言紀長谷雄男。至天曆二年　〔古今〕雜體・一 誹諧

淑文　四位紀伊守。國造紀宣親男　〔續拾〕神・一 五位　〔新後撰〕戀一・二　雜上・一　〔續千〕秋上・一　旅・一 四位　〔風雅〕冬・一　〔新千〕哀・一

淑氏　四位 紀　〔新後撰〕雜上・一　〔玉葉〕雜一・一　〔續千〕戀三・一　〔續後拾〕雜上・一　〔新千〕雜上・一

淑俊　紀　〔新葉〕雜上・一　雜中・一

淑望　五位大學頭。中納言紀長谷雄男。延喜十八年卒　〔古今〕秋下・一　〔後撰〕秋中・一　〔新古〕神・一　〔古今和歌六帖〕

淑景舍女御　〔續古〕秋下・一

【深】

深心院關白前左大臣　基平公に同じ

深守　深守法親王に同じ

深守法親王　邦良親王御子　〔續千〕夏・一　戀四・一　哀・一　〔新拾〕戀三・一　雜上・一　〔新後拾〕夏・一　冬・一　雜春・一　雜秋・一　戀一・三　〔新續古〕冬

・一　戀三。一　戀四・一　雜中・一

深養父　五位内藏大允。豐前介清原房則男　〔古今〕春下・一　夏・一　秋下・一　冬。一　離別。一　物名。二　戀二・四　戀三・一　戀四・二　雜下・一　雜體・二諧誹　〔後撰〕春下・一　秋中・三　戀五・一　〔拾遺〕秋・一　〔新古〕秋下・一　戀一・一　戀五・二　雜上・一　〔續後撰〕戀三・一　〔續古〕秋上・一　哀・一　〔玉葉〕戀一・一　〔續古〕春上・一　〔續後拾〕春上・一　〔新千〕冬・一　〔新拾〕秋下・一　戀一・一　戀五・一　〔新後拾〕春上・一　〔新續古〕春上・一　春下・一　〔古今和歌六帖〕

深覺　大僧正。九條右府師輔公子。(古事談云禪林寺)　〔後拾〕冬・一　雜一・一　雜六・一諧誹

深觀　僧都　〔新勅〕釋。一

【崇】

崇全　法師　〔新後拾〕雜秋・一

崇光院　諱興仁。光嚴帝御子　〔新千〕夏・一　秋上・一　神・一　戀三・一　雜下・一院御製　〔新拾〕春上・一　春下・一　夏・一　秋上・一　冬・三　雜中・一　〔新後拾〕戀一・二　戀二・一　戀三・一　戀四・二　戀五・二　雜上・二　賀・一太上天皇　〔新續古〕秋下・一　冬・一　戀三・一崇光院御製

崇明門院　禖子太子邦良妃。後宇多院御女　〔新千〕戀三・一

崇賢門院　仲子。號梅町殿後圓融院國母。儀同三司兼綱公女　〔新後拾〕旅・一　戀三・一　戀四・一　〔新續古〕戀二・一　戀四・一　雜下・一

【崇德院】

崇徳院　諱顯仁。鳥羽院御子（一一一九—一一六四）〔詞花〕春二一 秋•一 戀上•一 雜上•一 雜下•一 新院 〔千載〕春上•三 春下•一 夏•二 秋上•二 秋下•二 冬•四 旅•二 哀•二 賀•一 戀五•一 雜下•一 釋•二 神•一 崇徳院御製 〔新古〕春上•一 春下•一 秋上•一 冬•一 雜下•一 釋•二 〔新勅〕秋上•一 戀二•二 戀三•一 〔續後撰〕春下•一 釋•二 〔續古〕夏•一 秋上•一 哀•一 釋•三 〔續拾〕雜上•二 〔新後撰〕雜下•一 〔玉葉〕秋上•一 雜一•一 雜二•一 雜四•一 釋•一 〔續千〕戀二•一 〔續後拾〕冬•一 物名•一 〔風雅〕春上•一 春下•一 秋中•二 旅•一 戀五•一 雜上•一 雜下•一 〔新千〕別•一 戀一•一 〔新拾〕秋下•一 釋•一 〔新後拾〕春下•一 秋上•一 〔新續古〕 春上•一 雜上•二 雜下•一 誹諧歌 〔續詞花〕春上•一 春下•三 秋上•一 秋下•一 冬•二 哀•二 釋•二 戀上•一 戀中•一 旅•一 戲•一〇 新院 〔崇徳天皇御製〕一五八 短歌一

崇徳院兵衛佐　法印信縁女 〔玉葉〕雜四•二

崇徳院安藝　〔新拾〕夏•一

【麻】

麻與佐　大伴部 〔萬葉〕卷二〇•一

麻績王　〔萬葉〕卷一•一

【麿】

麿　〔萬葉〕卷一•二

麿　石上 〔萬葉〕卷一•一

麿　藤原不比等の子（一三五三―一三九七）〔萬葉〕卷四・三

麿　舟氏　〔萬葉〕卷五・一

麿　大藏　〔萬葉〕卷一五・一

【常】

常　正二位東三條左大臣嵯峨帝御子、東三條本主也　〔古今〕春上・一　東三條左のおほいまうち君　〔古今和歌六帖〕

常元　法師俗名祝部氏重　〔新千〕戀五・一　〔新拾〕戀・一

常昌　從三位。度會　〔玉葉〕戀二。一　〔續後拾〕神・一　〔新千〕神・一　〔新拾〕神・一

常磐井入道前太政大臣　實氏公に同じ

常康親王　无品。仁明帝御子　〔古今〕戀五・一　雲林院のみこ

常顯　五位東中務丞。法名素英平氏七男　〔新千〕戀四。一　〔新拾〕戀一・一　雜上・一　〔新後拾〕雜春。一　雜上。一　〔新續古〕冬・一　雜中・一

【常陸】

常陸乳母　〔新續古〕哀・一　〔續詞花〕哀・一

常陸娘女　〔萬葉〕卷四・一

【康】

康光　五位。大隅守藤原康業男　〔新後撰〕雜中・一

康行　六位。藤原頼貞男　〔新後拾〕雜上・一

康秀　六位縫殿介。縫殿助文屋宗于男、元慶三年任縫殿助　〔古今〕春上・一　秋下・一　物名・一　哀・一　〔後撰〕雜三・一

康宗　六位雅樂允。土佐權守紀光宗男　〔千載〕冬・一　雜上・一

康能　從二位參議。從二位藤原資能男　〔續古〕雜上・一　〔玉葉〕釋・一

康資王母　前參議　太皇太后宮女房。筑前守高階成順女　〔後拾〕旅・一　哀・一

戀三・二　雜四・一　雜五・一　雜六・三釋教歌　〔金葉〕夏・一　冬・一　雜下・一　〔詞花〕春・二　〔千載〕春下・一　夏。一　〔新古〕春上・一　春下・一　冬・一　賀。一　〔新勅〕夏・一　冬。一　賀・一　戀一・一　雜一・一　〔續後撰〕釋・一　〔續古〕秋上・一　〔玉葉〕夏・一　〔續千〕雜體・一　〔續後拾〕別・一　神・一　〔風雅〕春中・一　旅・一　賀・一　〔新千〕雜下・一　誹諧　〔新拾〕秋下・一　戀四・一　〔新後拾〕春上・一　〔新續古〕賀・一　〔續詞花〕賀・一　哀・一　〔高陽院歌合〕五

康衡　四位右京大夫。修理大夫三善雅衡男　〔玉葉〕雜一・一　〔續千〕戀三・一

康賴　六位中原。信濃守賴季男　〔千載〕旅・二　雜中・一　釋・一　〔玉葉〕旅・一　〔新續古〕戀五・一

【淨】

淨妙寺左大臣　〔新千〕後淨妙寺左大臣に同じ

淨妙寺關白前右大臣　家基公に同じ

淨助法親王　圓滿院。後嵯峨帝御子　〔續拾〕雜秋・一

淨阿　上人四條聖金蓮寺　〔新千〕旅・一　釋・一　法師　〔新後拾〕雜春・一　雜上・一　上人　〔新續古〕雜中・一

淨道　僧都　〔續千〕戀二。一　〔續後拾〕雜下・一　〔風雅〕雜下・一

淨意　法師俗名備後守有季。從三位藤原有仲子　〔新勅〕戀五・一　〔續後撰〕雜中・一　〔新續古〕戀一・二

淨辨　法印　〔續千〕雜中・一　權律師　〔續後拾〕戀二・一　雜上・一　〔新千〕秋下・一　戀一・二　雜中・一　法印

〔新拾〕夏・一　秋下・一　戀三・一　雜上・一　〔新後拾〕夏・一　冬・一　戀二・一　戀三・一　〔新續古〕春下・一　秋上・二　戀三・一　戀五・一　雜下・一

淨藏　法師。參議三善清行子　〔拾遺〕雜春・一御導師　〔詞花〕戀上・一

【堀】

堀河　〔續詞花〕夏・一　秋上・一　秋下・一　神・一　哀・一　戀上・三　戀中・一　戀下・一　旅・一

【堀川】

堀川女御　左大臣顯光女　〔後拾〕雜三・二　〔續古〕戀五・一

堀川左大臣　俊房公に同じ

堀川右大臣　賴宗公に同じ

堀川右大臣母　西宮左大臣高明女。高松上に同じ

堀川關白太政大臣　兼通公に同じ

堀川關白左大臣　經忠公に同じ

【堀川院】

堀川院　諱善仁。白河帝御子（一七三九―一七六七）　〔金葉〕春・一　賀・二　雜上・一堀川院御製　〔千載〕賀・一　〔新古〕秋上・一　〔續後拾〕雜中・一　〔續古〕夏・一　哀・一　〔續詞花〕夏・一

堀川院中宮　媞子。忠義公女　〔續古〕春下・一　〔續後拾〕哀・一　〔新拾〕秋下・一

堀川院中宮上總　〔金葉〕戀上・一　戀下・一　〔新勅〕戀二・一　戀五・一　〔續後撰〕雜上・一　雜下・一　〔續古〕別・一　哀・一　〔續拾〕秋上・一　雜上

・一〔新續拾〕夏・一〔新千〕冬・一〔新拾〕秋上・一〔新後拾〕雜秋・一〔新續古〕旅・一

堀川院中宮御匣殿　〔金葉〕春・一

堀川院讃岐典侍　〔新勅〕雜三・一

【寂】

寂延　法師俗名荒木田　〔新勅〕神・一　戀二・一　雜一・二　戀四・一〔續後撰〕秋上・一　戀二・一

寂身　法師俗名周防守。能連法師子　〔新勅〕雜四・一　〔續後撰〕雜上・一〔續古〕夏・一　雜下・一〔新續古〕別・一　戀二・一　戀四・一

寂念　法師　〔風雅〕雜下・一〔新續古〕戀二・一　雜上・一

寂昌　法師　〔新千〕戀二・一

寂昭　法師。參議大江齊光子　〔後拾〕別・一〔詞花〕別・一〔新古〕別・一

寂信　法師　〔續拾〕旅・一

寂眞　法師俗名彈正忠仲義　〔新千〕釋・一〔新拾〕旅・一〔新後拾〕冬・一　雜春・一　戀一・一　戀二・一〔新續古〕雜中・一

寂超　法師俗名皇后宮少進爲經。丹波守藤原爲忠子　〔千載〕戀二・一　戀五・一　釋・一〔新古〕雜上・二〔新勅〕秋上・一　釋・一　雜一・一〔續後撰〕戀三・一〔續古〕秋下・一〔續拾〕夏・一〔新後撰〕戀六・一〔玉葉〕旅・一〔續後拾〕春下・一〔續詞花〕雜上・一

寂然　法師俗名壹岐守賴業。丹波守藤原爲忠朝臣子　〔千載〕秋上・一　哀・一　戀一・二　雜中・二　釋・一〔新古〕冬・一　雜中・

一　釋・七　〔新勅〕釋・三　雜二・一　〔續後撰〕秋中・一　冬・一　釋・一　雜下・一　〔新後撰〕釋・一　〔玉葉〕雜三・一　〔續後拾〕釋・一　〔風雅〕秋上・一　旅・一　雜一・一　雜下・五　〔新千〕雜中・一　〔新拾〕釋・一　〔新後拾〕釋・二　〔新續古〕釋・二　〔續詞花〕釋・二　雜下・一

寂恵　法師俗名安倍範光號順教　〔續後撰〕雜上・一　〔玉葉〕雜三・一　雜上・一　〔續千〕秋下・一　旅・二　戀三・一　〔風雅〕冬・一　〔新拾〕雜三・一　〔新續古〕哀・一

寂照　法師　〔新續古〕戀一・一

寂縁　法師　〔續後撰〕秋下・一　〔新續古〕戀二・一

寂蓮　法師俗名中務少輔定長。俊海法師子（一八六二）　〔千載〕秋下・二　旅・一　戀二・一　雜中・二　釋・一　〔新古〕春上・二　春下・三　夏・一　秋上・二　秋下・五　冬・二　賀・一　哀・一　戀一・一　戀二・一　戀四・四　戀五・一　雜中・二　雜下・三　釋・一〇　〔新勅〕春上・一　戀一・一　戀二・一　戀四・二　雜二・一　雜四・二　〔續後撰〕秋上・一　冬・一　戀四・一　戀五・一　雜上・一　雜中・一　雜下・一　旅・一　〔續古〕夏・一　冬・一　釋・一　旅・一　戀二・一　〔續拾〕夏・一　冬・二　雜秋・一　雜中・一　雜下・一　〔新後撰〕春上・一　春下・一　秋上・一　旅・一　釋・一　戀三・一　雜上・一　雜中・一　雜下・一　僧正道がゆめにみえける歌　賀・一　〔玉葉〕春上・二　秋上・一　雜三・一　雜四・一　雜五・一　釋・一　〔續千〕夏・二　雜下・一　〔續後拾〕冬・一　雜中・一　雜下・一　〔風雅〕夏・二

〔新千〕春上・二　戀三・一　戀五・一　雜上・一

〔新拾〕春下・一　秋下・二　戀二・一　釋・一　〔新

後拾〕春下・一　夏・一　冬・一　〔新續古〕春下・一

夏・一　秋上・一　秋下・一　冬・一　戀四・一

【惟】

惟久　四位。賀茂　〔風雅〕神・一

惟方　從三位參議。中納言藤原顯頼男　〔千載〕雜中・一 前右兵衞督　〔新古〕

哀・一 前左兵衞督　〔續古〕哀・一　〔玉葉〕旅・一　戀一・

一　雜上・一　雜四・二　〔續千〕釋・一　〔續後拾〕

神・一　〔風雅〕秋上・一　戀一・二　戀五・一　雜中

・三　雜下・二　〔新千〕雜中・一　〔續詞花〕雜中・一

惟材　權中納言平惟繼男。系圖云少納言云々　〔新葉〕雜上・一　雜下・一

惟成　五位左中辨。世號五位攝政。左少辨藤原雅材男。至寬和二年　〔拾遺〕戀四・一

〔詞花〕春・一　秋・一　戀上・一　〔[illegible]〕[illegible]・一

戀三・一　戀[illegible]・三　〔[illegible]〕[illegible]・一　〔續後[illegible]〕春

中・一　〔續千〕夏・一　〔[illegible]後[illegible]〕春下・一　〔[illegible]〕

秋上・一　〔新[illegible]〕[illegible]一・一　〔續詞花〕[illegible]上・一

戀中・一　戀下・一

惟明親王　三品。高倉院御子　〔新古〕春上・一　春下・一　秋

下・一　別・一　戀一・一　雜上・一 惟明親王　雜[illegible]・一

〔續後撰〕夏・一　冬・一　雜下・一　〔續古〕戀五・

一　雜下・一　〔續拾〕春下・一　雜上・一　〔新後

撰〕夏・一　秋上・一　賀・一　〔玉葉〕夏・一　冬・一

旅・一　〔續千〕春上・一　秋上・一　〔續後拾〕秋下

・二　旅・一　〔新千〕夏・一　旅・一　〔新拾〕戀四・

一　〔新後拾〕春下・一　冬・一　〔新續古〕春下・一

夏。一　賀。一　戀五。一

惟季　前中納言　〔新葉〕賀。一

惟岳　六位紀氏。イ菅惟熙　〔古今〕賀。一

惟信　四位少納言。皇太后宮亮藤原資良男。至永久元年　〔金葉〕雜上。一四位

惟規（ノブノリ）　五位。越後守藤原爲時男。至寛弘八年　〔後拾〕別。一　戀三。二
〔金葉〕戀上。二　雜上。一　〔千載〕戀一。一　〔玉葉〕雜上。一　〔風雅〕雜上。一　雜下。一　〔續詞花〕戀上。一　戀中。一

惟康親王家右衞門督　〔新後撰〕雜中。一　〔續千〕旅。一　雜上。一

惟喬親王　四品上野大守。號小野宮。文德帝御子（一五〇八－一五三三）　〔古今〕春下。一　雜上。一これたかのみこ　〔後撰〕春下。一こわかぎみ
〔新古〕雜下。一惟喬親王　哀。一　〔新千〕秋下。一

惟幹　六位陸奥掾イ雅幹藤原　〔古今〕哀。一

惟賢　上人寶戒寺長老　〔新千〕釋。一　雜上。一　〔新續古〕戀四。一　雜下。一

惟濟　法師　〔後撰〕賀。一

惟繼　從二位中納言。從三位平高兼男　〔玉葉〕雜一。一四位　〔續千〕戀五。一正三位　〔續後拾〕冬。一太宰大貳　〔新千〕戀五。一　雜上。一　雜下。一前中納言　〔新拾〕哀。一　〔新葉〕旅。一　戀二。一

【敎】

敎久　從三位。加茂　〔風雅〕神。一四位　〔新千〕神。一　〔新拾〕神。一從三位

敎成　五位紀伊守。安藝守平重茂男。至永承七年　〔後拾〕哀。一

敎良　從一位大納言。普光園攝政藤原良實男　〔續古〕秋下。一左近中將　〔續

拾〕秋上・一　雜上。一中納言　〔新後撰〕釋・一　戀三
・一　戀六。一　雜中。一前中納言　〔玉葉〕春上。一　夏
・二　秋下・二　神。一従一位　〔新續古〕神。一前大納言

敎定　正四位。參議　藤原雅經男　〔續後撰〕春下。一　秋中。一
雜上・一　旅・一四位　〔續古〕春上・一　旅。一　戀
一・二　戀五・一　雜上・二前左兵衞督　〔續拾〕春下・一
雜秋・一　戀一・二　戀四・一　雜上・一　雜下・一
〔新後撰〕夏・一　秋下。一　神・一　〔玉葉〕旅・一
〔續千〕秋上・一　冬・一　戀三・一　戀四。一　雜下
・二　〔續後拾〕夏。一　戀三・一　〔新千〕冬。一
戀二。一　雜上・一　〔新拾〕戀一・一　〔新後拾〕夏
・二　雜春・一　〔新續古〕秋下・二　戀二・一　戀五
・一　雜上・一　雜下。一左兵衞督

敎長　正三位參議。大納言藤原忠敎男　〔詞花〕春。一　雜下・一右近中將
〔千載〕春上・一　夏・二　冬。二　戀二・二　戀三。
一　戀五。一　釋・二前參議　〔新古〕春上。一　〔新
勅〕戀四。一　〔續後撰〕雜中・一　戀三・一　〔續古〕
冬。一　〔續拾〕雜上。一　〔新後撰〕冬。一　別・一
〔玉葉〕春下・一　雜五・一　釋。一　〔續後拾〕春下
・二　〔風雅〕春下・一　秋下・一　冬・一　戀一・二
釋・一　〔新千〕春下。一　〔新拾〕春下・一　哀・一
〔新後拾〕戀一・二　〔新續古〕夏・一　別。一　戀三
・一　戀五・一　〔續詞花〕春上・二　春下・一　秋上
・二　雜中・二　物・一

敎家　正二位大納言、後京極攝政藤原良經男　〔續古〕秋上・一　釋。二
雜上・一權大納言

敎兼 四位。藤原 〔風雅〕春中・一 春下・一 雜上・二 四位一 戀三・一 戀四・一 洞院攝政左大臣 〔續古〕春下・一

敎通公 從一位大二條關白御堂道長男 〔玉葉〕賀・一 二條關白太政大臣 〔續詞花〕雜中・一

敎雅 四位右中將。參議藤原雅經男 〔新勅〕秋上・一 戀四・一 四位 〔續後撰〕夏・一 秋下・一 〔續古〕雜下・一 〔續拾〕冬・一 〔新續古〕春下・一

敎源 律師 〔續詞花〕戲・一

敎圓 叡山大僧都天台座主。伊賀守孝忠子 〔後拾〕雜五・一

敎嗣 正二位大納言。關白藤原經敎男 〔新後拾〕戀五。一 權大納言

敎經 從二位參議。大納言良敎男 〔新續古〕秋上・一 參議

敎實公 從一位洞院攝政左大臣光明峯寺道家男 〔新勅〕春上・一 春下・一 秋上・一 秋下・一 冬・一 賀・一 戀一・一 戀二・一 戀三・一 關白左大臣 〔續後撰〕冬・一 戀二・一 戀三・一 戀四・一 洞院攝政左大臣 〔續古〕春下・一 夏・一 戀三・一 〔續拾〕春上・一 秋下。一 旅・一 〔玉葉〕旅・一 〔續千〕秋下・一 〔續後拾〕戀一・二 〔新千〕戀三・一 〔新拾〕秋下・一 戀二・一 戀四・一 〔新續古〕秋上・一 戀一・一 戀二・二 戀四・一

敎範 仁和寺權僧正。從三位範春子 〔續拾〕雜中・一 法印 〔新後撰〕冬・一 別・二 雜上・一 雜下・一 前權僧正 〔玉葉〕旅・二 〔續千〕哀・一

敎親 五位一色左京大夫。兵部少輔源持信男 〔新續古〕雜上・一

【從一位】

從一位宗子 〔續詞花〕戀下・一 雜上・一

從一位宣子 大納言資名女 〔新後拾〕春下・一 夏・一

秋下・一　雜秋・一　戀三・一　〔新續古〕戀二・一
戀三・一

從一位倫子　源倫子に同じ

從一位兼子　〔玉葉〕雜二・一

從一位敎良女　〔玉葉〕春上・一　夏・一　秋上・一
秋下・一　冬・一　戀一・一　戀四・一　戀五・一
雜三・一　〔風雅〕春上・一　春中・一　戀三・一　戀
四・一　雜中・一

從一位諶子　九條關白忠敎女　〔新後撰〕戀三・一　戀四・一

從一位麗子　源麗子に同じ

【從二位】

從二位行子　民部卿源雅言女　〔玉葉〕雜四・一

從二位兼行女　〔風雅〕雜上・一　〔新千〕戀一・一

從二位敎子　〔新葉〕哀・一

從二位理子　〔新葉〕戀五・一

從二位爲子　右兵衛督爲敎女　〔續拾〕冬・一　雜春・一　戀
三・一　〔新後撰〕夏・一　秋下・一　冬・一　旅・一
戀一・一　戀二・一　戀四・一　雜上・一　雜中・一
院大納言典侍　〔玉葉〕春上・二　春下・四　夏・一　秋上・
一　秋下・四　冬・四　賀・一　旅・一　戀一・三
戀二・三　戀三・三　戀四・二　戀五・二　雜一・六
雜二・五　雜三・六　雜四・二　雜五・七　釋・二
從三位　〔風雅〕春上・一　春中・二　春下・一　夏・二　秋
中・一　秋下・一　冬・二　旅・一　戀三・四　戀四・二
五・三　雜上・二　雜中・一　雜下・五　釋・一　賀
・一　從二位　〔新千〕春下・一　釋・一　神・一　戀二・

一　戀三・一　雜中・一〔新拾〕夏・一　秋上・一
秋下・一　冬・一　戀二・一　戀三・一〔新續古〕戀
三・一　雜中・一
從二位業子 法印源意女 〔新後拾〕春下・一　秋上・一
戀一・一　戀二・一　戀三・一
從二位朝子 筑前守藤原隆重女 〔玉葉〕神・一
從二位雅平女〔玉葉〕雜五・一〔新續古〕戀三・一
從二位儀子〔新葉〕春上・一　秋上・一　戀四・一
戀五・一
從二位嚴子〔新後拾〕春下・一　夏・一　秋上・一
旅・一　戀四・一
從二位藤宣子 侍從藤原爲顯女 〔新後撰〕戀一・一　戀四
・二 從三位 〔玉葉〕秋下・二　戀二・一　戀五・一　雜
五・一〔續千〕夏・一　秋下・一　冬・一　旅・二
釋・一　戀一・二　戀四・一〔續後拾〕夏・一　戀二
・二 從二位 〔風雅〕春下・一　秋下・一　戀三・一　戀
五・一　雜中・一　雜下・一〔新千〕春下・一　夏・
一　戀三・一〔新拾〕冬・一　戀一・一　戀三・一
雜中・一〔新後拾〕夏・一〔新續古〕戀三・一

【從三位】

從三位仲子〔新後拾〕春下・一　秋上・一
從三位行子 鳴瀧大納言藤忠良曾孫女大納言良教(號粟田口)女歟 〔新葉〕戀一
・一　雜上・一
從三位行能女〔續後撰〕戀一・一〔續拾〕雜春・一
從三位吉子〔新拾〕哀・一〔新續古〕戀五・一
從三位周子〔新葉〕戀三・一　戀五・一

從三位房子 中院内大臣通成女 〔玉葉〕戀三・一　雜五・一

從三位季子 〔玉葉〕戀一・一　雜二・一

從三位客子 〔風雅〕秋上・一　戀二・一　雜上・一

從三位俊文 〔新葉〕春下・一　神・一　雜上・一　雜中・二　雜下・一　賀・一

從三位源親子 大納言師親女 〔新後撰〕冬・一　戀五・一　〔玉葉〕春上・二　春下・一　夏・一　秋上・三　秋下・三　冬・一　戀二・二　戀三・五　戀四・三　戀五・四　雜二・三　雜三・二　雜四・一　雜五・一　〔續千〕戀二・一　戀三・一　戀四・一　雜中・一　〔風雅〕賀・一　春中・三　春下・一　秋上・一　戀一・一　戀二・四　戀三・一　雜中・三　釋・一　〔新拾〕秋下・一

從三位廉子 〔新勅〕雜一・一

從三位藤子 〔新千〕秋上・一　戀三・二　雜上・一　雜下・一　〔新拾〕戀三・一　〔新後拾〕雜上・一

從三位藤豐子 〔玉葉〕雜四・一

【通】

通氏 從三位。大納言源通方男 〔續後撰〕秋下・一 從三位 〔續古〕秋下・一　戀一・一　雜下・一　〔續拾〕冬・一

通方 正二位大納言。土御門内大臣源通親男 〔新勅〕冬・一 中宮大夫 〔續後撰〕春中・一　夏・一　雜上・一 大納言 〔續古〕春上・一　秋上・一　冬・一　〔續拾〕雜下・一　〔新後撰〕賀・一　〔風雅〕夏・一

通平公 從一位後光明照院前關白左大臣。光明照院藤原兼基公男 〔新後撰〕戀一・二　戀二・一　賀・一 右近大將 〔玉葉〕夏・一　冬・一　旅・一　雜三・一 右大臣 〔續千〕夏・一　秋上・一　秋

下•一　旅•一　神•一　戀三•一　雜中•一前關白左大臣
路押小　〔風雅〕春下•一　秋上•一　戀三•一　雜上•
一　釋•一　神•一後光明照院前關白左大臣　〔新千〕夏•二　戀
二•一　雜上•一　雜中•一　雜下•一物名　賀•一
〔新拾〕秋下•一　戀三•一　雜上•一　〔新後拾〕秋
上•一　〔新續古〕戀一•一　神•一

通有　四位右少將。後久我相國源通光男　〔新後撰〕雜下•一四位

通光　從一位後久我太政大臣、土御門源通親男（一九〇八薨六二）　〔新古〕春上•一
夏•一　秋上•四　秋下•二　冬•一　戀二•二　戀
四•二　雜上•一右衛門督權大納言　〔新勅〕冬•一　旅•一
戀三•一　雜四•一前內大臣　〔續後撰〕春中•一　春下•
一　秋中•一　神•一後久我太政大臣　〔續古〕夏•二　〔續
拾〕春上•一　春下•一　秋下•二　〔新後撰〕冬•二
戀二•一　雜中•一　〔玉葉〕神•一　〔續千〕秋上•一
秋下•一　戀二•一　〔續後拾〕秋下•一　〔風雅〕秋
中•一　〔新千〕秋下•一　〔新拾〕春上•一　春下•一
夏•一　戀一•一　〔新後拾〕旅•一　〔新續古〕春下
•一　夏•一　秋上•一　秋下•一　戀一•一　戀二
•一

通守　正二位大納言。大納言源通茂男　〔新續古〕雜下•一權大納言

通成　正二位土御門入道內大臣。大納言源通方男　〔續拾〕春下•一　秋上
•二　雜春•一　戀五•一　雜中•一　神•一　〔新後
撰〕雜上•二　雜下•一　〔新葉〕雜中•一

通定　五位式部少輔。圖書頭淸原信定男　〔新拾〕雜中•一　〔新後拾〕
雜春•一

通忠　正二位大納言。後久我太政大臣源通光男　〔續後撰〕秋中•一右近大將

[續古]戀一•二　雜下•一　[續拾]夏•一　秋上•一
[續後撰]戀一•一　[風雅]賀•一

通具　正二位大納言。土御門內大臣源通親男　[新古]春上•二　夏•一　秋上•三　冬•四　戀二•一　戀四•三　戀五•一　雜中•一　雜下•一右衞門督　[新勅]神•一　戀一•一　雜三•一大納言　[續後撰]冬•一　[續古]春下•一　戀一•一　戀三•一　雜上•一　[續拾]戀三•一　[新後撰]戀三•一　[玉葉]秋上•一　[續後拾]雜上•一　[新千]賀•一　[新拾]秋下•一　旅•一　[新後拾]戀四•一　雜下•一　[新續古]夏•一　旅•一　雜上•二

通房　正二位大納言。宇治關白藤原賴通男　[後拾]秋上•一右大將　[新勅]冬•一右近大將

通宗　四位若狹守。大貳藤原經平男。應德元四三卒　[後拾]春上•一　春下•二　夏•一　秋上•一四位　[金葉]雜下•一

通相　從一位千種入道前太政大臣。後中院源長通男　[風雅]冬•一權中納言　[新千]冬•一　戀三•一　戀四•一內大臣　[新拾]夏•一　旅•二右大臣　[新後拾]春下•一千種入道前太政大臣

通重　正二位中院前內大臣。大納言源通雅公男　[新後撰]秋上•一春宮大夫　[玉葉]夏•一權大納言　秋下•一內大臣重追加　旅•一　戀上•一前大納言　[新千]戀一•二　哀•一後中院前內大臣　[新拾]賀•二中院前內大臣

通俊　從二位中納言。大貳藤原經平男（一七〇七—一七五九）　[後拾]春上•一　春下•一　秋下•一　旅•一　戀三•一右大辨　[金葉]秋•二　賀•一　別•一中納言　[詞花]夏•一　戀下•一　[千載]春上•一　冬•一治部卿　[新古]賀•一　哀•一

權中納言 〔新勅〕旅•一 〔續古〕戀五•一 〔續拾〕春下•一 〔續千〕春下•一 夏•一 〔續後拾〕春下•一 夏•一 〔新千〕雜下。一 〔新拾〕春上•一 秋下•一 〔新續古〕戀九•一 雜中•二 〔續詞花〕春下•一 秋上•一 冬。二 雜上•一 〔高陽院歌合〕五

通海 醍醐權僧正。從三位藤原宗經子 〔新後撰〕雜上•一

通時 五位左近將監。左近將監平有時男 〔玉葉〕秋上•一 〔續千〕戀二•一

通時 四位左少將。大納言源經信男。至嘉承二年 〔金葉〕夏。一 四位

通能 四位左少將。左中辨源師能男。至仁安二年 〔千載〕賀。一 戀一•一 四位 〔新續古〕秋下。一 〔續詞花〕戀上。一

通淸 五位藏人。齋宮寮頭源淸雅男。治承四二十三補藏人五十八 〔千載〕雜中•一 〔續詞花〕夏•一

通敏 從三位參議。大納言源通冬男 〔新續古〕戀五•一 雜上•一 雜下•一 前參議

通基 從一位後久我內大臣。左近大將源通忠男 〔續拾〕夏•一 右近大將

通陽門院 嚴子。內大臣公忠公女 〔新續古〕賀•一

通雄 從一位中院前太政大臣。後久我源通基男 〔玉葉〕秋下•一 前內大臣通 〔續千〕春下。一 夏•一 秋下•一 戀一•一 〔續後拾〕秋上。一 戀四•一 前太政大臣 〔風雅〕戀四•一 中院前太政大臣

通雅 正二位後花山院入道前太政大臣。後花山院藤原定雅男 〔續古〕春下•一 哀•二 左近衛大將 〔續拾〕冬•一 賀。一 〔新拾〕釋•一 花山院入道前太政大臣

通源 上人 〔新後拾〕雜秋•一

通詮 度會 〔新葉〕秋下•一

通輔　正三位參議。參議藤原兼嗣男　〔玉葉〕冬・一　戀上・一　左近中將

通頼　五位右衛門尉　左少將藤原雅成男。至正暦四年　〔拾遺〕雜秋・一　〔後拾〕戀一・二

通親　正二位土御門内大臣に同じ。久我源雅通公男（一八〇九―一八六二）　〔千載〕春下・一　戀二・一　戀三・一　戀四・一　戀五・一　雜中・二　權中納言　〔新古〕秋下・一　哀・二　戀四・一　雜上・一　雜下・一　土御門内大臣　〔新勅〕秋上・一　神・一　戀三・一　戀五・一　雜一・一　〔續後撰〕秋下・一　〔續古〕秋下・一　神・一　賀・一　〔續拾〕冬・一　〔玉葉〕雜四・二　〔續千〕秋下・一　〔續後拾〕旅・一　〔新千〕夏・一　冬・一　〔新後拾〕春下。一

通顯　正二位如法三寶院入道前内大臣。中院通重男　〔續千〕戀二・一　戀四・一　前大納言　〔續後撰〕戀四・一　〔風雅〕冬・一　如法三寶院内大臣　〔新千〕春下・一　戀一・一　戀二・一　戀四・一　〔新拾〕秋上・一　〔新後拾〕戀五・一

通觀　〔萬葉〕卷三・二

【國】

國人　丹比　〔萬葉〕卷三・一　卷八・一　卷二〇・一　長歌卷三・一

國人　丹比部　〔萬葉〕卷二〇・一

國人　馬　〔萬葉〕卷二〇。一

國久　五位。津守　〔新後拾〕秋上・一　雜春・一　戀五・一　〔新葉〕秋下・一　雜中・一

國平　四位住吉禰宜攝津守。神主津守經國男　〔續後撰〕神・一　〔續古〕夏・一　〔續拾〕秋下・一　神・一　〔新後撰〕戀六・一　雜上・二　〔續千〕冬・一　戀二・一　雜上・一　〔續

後拾〕旅•一 〔新千〕神°一 〔新拾〕神•一 〔新後拾〕神•二 〔新續古〕旅•一

國冬 四位。神主津守國助男 〔新後撰〕秋上•一 秋下•一 戀一•一 戀二•一 〔玉葉〕冬•一 〔續千〕春下•一 夏•一 秋上•一 冬•二 戀一•一 戀二•一 戀三•一 雜上•一 哀•一 〔續後拾〕春下•一 夏•一 秋下•一 旅•一 戀二•一 戀四•一 雜下•一 〔新千〕春上•一 夏•二 冬•一 神•一 戀一•二 戀二•一 戀四•一 雜上•一 雜下•一誹諧 賀•一 〔新拾〕春下•一 夏•一 冬•一 賀•一 戀三•一 雜上•一 〔新後拾〕春下•一 秋下•三 冬•一 雜上•三 雜下•一 神•一 〔新續古〕春下•二 夏•一 秋上•一 戀四•一 哀•一

國用 五位陸奥守。左京頭藤原季力男。至永延二年 〔拾遺〕雜戀•一

國行 五位諸陵頭、內匠頭藤原有親男。至永保六年不審 〔後拾〕秋上•一 冬。一 旅•二 雜三•一 〔金葉〕賀•一

國光 五位越中守。散位津守康基男。仁安三年十一月廿日敍外從五位下 〔千載〕戀一•一

國忍 玉作部 〔萬葉〕卷二〇•一

國助 四位。神主津守國平男 〔續拾〕秋上•一 旅•一 戀二•一 雜下•一 〔新後撰〕春下•一 秋上•一 秋下•一 冬•一 別•二 旅•一 神•一 戀三•一 戀四•二 戀五•一 雜上•一 雜中•一 雜下•二 〔玉葉〕春下•一 〔續千〕春上•二 春下•一 夏•一 秋下•二 冬•三 物名•二 旅•一 神•一 戀三•一 戀四•三 雜上•一 雜中•三 〔續後拾〕春上•一

春下・一　冬・一　物名。一　別・一　戀一・一　雜
上・一　雜下・一　神・一　戀四・一　〔新千〕春上。
一　春下。一　夏・一　秋上。二　冬。一　旅。二
戀二・一　戀二・一　戀三・一　雜上。一　雜下。二
一物名　〔新拾〕賀・一　雜中。一　〔新後拾〕秋下・一
冬・二　雜春・一　戀四・二　〔新續古〕戀一・一　戀
五。一　雜上・一

國忠　〔金葉〕雜下・一 歌連

國長　四位。禰宜祝部資長男　〔續拾〕神・一　〔新後撰〕神・一
雜上・一　〔新千〕神・一

國房　五位石見守。玄蕃頭藤原範光男。至永保四七　〔後拾〕冬・一　戀一・一
戀三・一　戀四・一　雜三・一　〔千載〕釋・一　〔新
古〕冬。一　〔續詞花〕雜上・一

國信　正二位權中納言。右大臣源顯房男（一〇六九—一一一一）　〔金葉〕秋・一　冬
・一　別・一　戀下・一 中納言　〔詞花〕戀下。一　〔千
載〕春上。一　春下・一　冬・一　旅・一　哀・一　〔新
古〕春上・一　春下。一　夏。一　哀・一　旅・一 權中納言
〔新勅〕春下。一　冬・一　戀二。二　雜三。三　雜四
・二　〔續後撰〕戀一。一　雜上。二　雜下・一　〔續
古〕戀四・一　〔續拾〕雜下・一　〔新後撰〕秋下・一
戀三・一　〔續後拾〕秋上・一　冬・一　〔風雅〕戀
・二　〔新千〕春上。一　春下・一　〔新續古〕賀。一
〔續詞花〕春上・一

國時　五位陸奧守。左近大夫將監平時國男　〔玉葉〕戀一・一　戀二・一
雜三・一

國夏　四位。禰宜洋守國冬男　〔續千〕秋上・一　冬・一　戀二・一

雜上•一〔續後拾〕夏•一 冬•一 戀四•一〔風雅〕雜上•一 神•一〔新千〕秋上•一 冬•一 神•二 雜中•一 雜下•二〔新拾〕戀三•一 戀四•一 神•一〔新後拾〕春下•一 夏•一 秋上•一 秋下•一 雜春•一 戀三•一 雜上•一 雜下•一 釋•一〔新續古〕戀二•一 戀三•一〔新葉〕夏•二 秋下•一 冬•一 戀三•一 戀五•一 雜上•一 雜下•一

國能 源〔續詞花〕雜下•一

國章 從二位。參議藤原元名男〔拾遺〕雜下•二 雜春•一 皇太后宮權大夫 哀•一 大貳

國堅 小野氏〔萬葉〕卷五•一

國基 五位住吉神主。神主津守忠康男。延久元年叙爵(一一七六三)〔後拾〕春上•一 冬•一 雜三•一〔金葉〕春一•二 戀上•一 雜上•一〔詞花〕別•一 雜下•一〔新古〕冬•一〔續古〕哀•一〔續拾〕戀三•一 戀五•一〔續千〕戀一•一〔續後拾〕神•一〔風雅〕冬•一 雜中•一〔新千〕戀五•一〔新後拾〕雜秋•一〔新續古〕別•一 雜上•一〔續詞花〕春上•一 秋上•一 冬•一 戀中•二 別•一 雜中•一

國通 正二位中納言。大納言藤原泰通男〔新勅〕戀二•一 前中納言

國基 五位。神主津守國夏男。應永九年卒〔新千〕秋上•一 旅•一 戀二•一〔新後拾〕夏•一 雜春•一 雜秋•一 戀二•一 戀四•一 雜上•一 神•一〔新續古〕雜上•一〔新拾〕春上•一 秋上•一 冬•一 神•一 雜下•一 哀•一

國貴　津守國夏二男　〔新葉〕神。一　雜中。一

國貴　五位。津守　〔新後拾〕冬。一　雜春・一　戀三・一

國經　正二位大納言。權中納言藤原長良男　〔古今〕戀三・一　藤原國經朝臣　〔續古〕戀四。一　大納言

國道　四位。神主津守國助男　〔新後撰〕戀三・一　〔玉葉〕雜一。一　〔續千〕夏・一　秋上・一　秋下・一　旅。一　神。二　〔續後拾〕戀三。一　〔風雅〕春下。二　秋下・一　戀三。一　釋・一　神・一　〔新千〕春下・一　秋上・二　戀一・一　戀二・一　雜下・一　〔新拾〕神・一　〔新後拾〕夏・一　秋上・一　〔新續古〕雜中・一　神・一

國實　五位。津守國夏男　〔風雅〕雜上・一

國實　五位。津守　〔新後拾〕秋。一

國豐　五位。津守　〔新續古〕雜上・一

國藤　五位。津守　〔續千〕雜中・一　〔續後拾〕神・一

國轉　五位。津守　〔新續古〕雜上。一

【基】　三畫—八畫

基久　四位。神主賀茂經久男　〔續千〕雜下。一　〔續後拾〕雜上。一　〔新千〕雜下。一　〔新拾〕雜中・一

基之　五位細川兵部少輔。兵部大輔源滿之男　〔新續古〕雜上・一

基氏　正二位參議。中納言藤原基家男　〔續後撰〕夏。一　雜上・一　雜下。一　右兵衛督　〔續古〕哀・一　雜上・一　雜中・一　〔續拾〕春上。一　夏・一　雜上・一　雜中。一　中・一　〔玉葉〕春上・一　夏・一　冬・一　〔續千〕雜上・一　雜下。一　〔續後拾〕旅・一　〔風雅〕雜下。一　〔新千〕雜上。一　〔新後拾〕戀二・一

基氏 從三位。贈左大臣源尊氏男 〔新千〕春下•一 秋上•一 旅•一 戀一•一 戀二•一 四位 〔新拾〕春下•一 夏•一 賀•一 戀三•一 戀五•一 雜上•三 左兵衛督 〔新後拾〕夏•一 秋下•一 戀四•一 〔新續古〕雜中•一

基世 五位。齋藤大學允。四良左衛門藤原基永男 〔續千〕戀三•一 〔新千〕戀四•一 〔新拾〕別•一

基平 源五位。 〔新拾〕戀四•一

基平 從一位深心院關白前左大臣。岡屋藤原兼經男 〔續古〕春上•一 春下•二 秋下•二 雜下•一 賀•一 左大臣 〔續拾〕戀三•二 戀五•一 雜上•一 雜下•一 近衛關白左大臣 〔新後撰〕戀三•二 戀五•一 戀六•一 〔玉葉〕春下•一 戀四。一 深心院關白前左大臣 〔續千〕雜下•一 近衛關白左大臣 〔風雅〕雜上•一 雜下•一 賀•一 深心院關白前左大臣 〔新千〕

哀。一 近衛關白前左大臣 〔新拾〕冬•一 哀•一

基任 五位齋藤左衛門大夫。四良左衛門藤原基永男 〔新後撰〕戀四•一 〔玉葉〕雜一•一 〔續千〕秋上•一 秋下•一 戀三•一 雜上•一 哀•一 〔續後拾〕秋下•一 冬•一 旅•一 〔風雅〕雜中•一 〔新千〕夏•一 冬•一 旅•一 戀二•一 雜上•二 雜中•一 雜下•一 〔新拾〕春下•一 夏•一 旅•一 戀一•一 戀二•一 〔新後拾〕秋下•一 雜春•一 戀二•一 〔新續古〕戀一。一

基名 五位齋藤筑前守。藤内左衛門藤原茂連男 〔新千〕戀三•一 〔新拾〕雜上•一 〔新後拾〕雜春•一

基光 五位内匠頭。修理大夫藤原資憲男。康和二年三月十七日卒 〔金葉〕秋•一 戀上•一

基行 從三位。左中將藤原基盛男 〔續千〕冬・一 四位 〔新拾〕春上・一 〔新後拾〕釋・一

基有 五位齋藤左近將監。四良左衛門藤原基永男 〔玉葉〕雜一・一 〔續千〕戀二・一 雜下・一

基成 正二位中納言。中納言藤原基房男 〔風雅〕雜中・一 〔新千〕雜中・一 〔新拾〕夏・一 戀三・一 〔新後拾〕秋下・一 戀三・一

基良 正二位大納言。大納言藤原忠良男 〔新勅〕秋上・一 戀三・一 雜三。一 左近中將 〔續後撰〕春中・一 秋下・一 戀一。一 戀二・一 戀四・一 戀五・一 雜上・一 前大納言 〔續古〕戀一・一 哀・一 雜上・一 雜下・二 〔續拾〕雜秋・一 戀一・一 雜中・一 雜下・一 〔新後撰〕夏・一 戀二・一 戀四・一 〔玉葉〕春下・一 〔續千〕雜上・二 賀・二 〔續後拾〕冬・一 雜上・一 〔新拾〕春上・一 〔新後拾〕釋・一

基明 五位齋藤左衛門大夫。四良左衛門藤原基永男 〔續千〕戀一・一 〔續後拾〕雜上・一 〔新千〕雜上・一

基長 正二位中納言。內大臣藤原能長男 〔後拾〕雜三・一 中納言 〔金葉〕冬・一 雜上・一 前中納言 〔千載〕雜中・一 〔新勅〕秋上・一

基政 四位。高階 〔新後撰〕雜下・一

基政 五位後藤壹岐守。佐渡守藤原基綱男 〔續後撰〕雜下・一 〔續古〕冬・一 旅・一 戀一・一 雜上・一 雜中・二 〔續拾〕雜春・一 〔新後撰〕雜中・一 〔玉葉〕雜一・一 〔新千〕哀・一

基房 四位常陸介。中納言藤原朝經男。至康平七年 〔後拾〕雜五・一 四位

基房 從一位松殿攝政關白。法性寺藤原忠通公男 〔千載〕賀・一 入道前關白太政大臣

基忠 正二位中納言。大納言藤原忠家男 〔千載〕春上・一 〔新勅〕春上・一

基忠 從一位圓光院入道前關白太政大臣。照念院兼平男 〔續拾〕秋上・一 雜春・一 雜秋・一 戀三・一 戀五・一 前關白左大臣鷹司 〔新後撰〕春上・二 春下・三 夏・一 秋下・一 冬・三 戀一。二 戀五・一 戀六・一 雜上。二 雜中・一 雜下。三 前關白太政大臣 〔玉葉〕春上。一 春下・一 夏。二 秋上・一 秋下・二 冬。二 賀・一 戀二・一 戀三。一 戀四。一 雜一・二 雜三。二 雜五・二 釋・一 〔續千〕秋上。二 冬・一 旅・一 戀一・一 雜上・一 雜中。一 雜下・四 哀・一 賀・一 圓光院入道前關白太政大臣 〔續後拾〕春下・一 秋上・一 物名・一 賀。一 雜上・二 哀。一 〔風雅〕春上。一 夏・一 冬・一 雜中・一 雜下。二 賀・一 〔新千〕春上・一 釋。一 雜中。二 賀。二 〔新拾〕春上。一 秋上。一 〔新後拾〕春下・一 〔新續古〕旅・一

【基】 九畫―二十三畫

基貞 藤原 〔續詞花〕賀。一

基俊 五位左衛門佐。大宮右大臣藤原俊家男。至永曆三年。悅目抄 〔金葉〕夏。一 別・一 雜下・一 〔詞花〕戀下・一 〔千載〕春上・二 春下。三 夏。四 秋上。二 秋下。三 冬。二 旅・一 哀。二 賀・一 戀一・一 戀四。一 戀五・一 雜上・二 雜中。一 雜下・一 〔新古〕夏・一 秋上。二 秋下・一 冬。一 別・一 戀五。一 〔新勅〕春上・一 春下・一 冬・一 戀一・一 戀三。一 雜二。一 雜五。一 物名 〔續後撰〕春上。二 春中。一

春下・一　秋上・二　秋下・一　戀一・一　戀三・一
戀四・二　戀五・一　雜上・二　雜中・一〔續古〕春
上・一　雜上・一　雜下・二〔續拾〕春下・一　秋上
・二　冬・二　賀・一〔新後撰〕別・二　釋・二
雜中・二　賀・一〔玉葉〕春上・二　秋上・一　秋下
・二　冬・一〔續千〕夏・一　釋・一　戀一・一　戀
四・一〔續後拾〕春上・一　戀二・一　戀三・一　雜
上・一　釋・一〔風雅〕春上・一　秋上・一　冬・一
雜下・一〔新千〕釋・一　戀一・一　戀二・一　戀三
・二　雜下・一 誹諧〔新拾〕春上・一　秋上・二　賀・一
戀二・二　雜上・二〔續詞花〕夏・一　哀・一　戀中
・一　戀下・一　旅・一　雜上・一　雜中・一　雜下・
一

基俊女〔玉葉〕春下・一
基家 正二位後九條內大臣。後京極攝政藤原良經男〔續後撰〕春下・一
夏・二　冬・一　戀二・二　戀四・二　戀五・一 前內大臣
基〔續古〕秋上・一　秋下・一　冬・二　神・一　旅
・二　戀二・二　戀三・二　戀四・一　戀五・一　雜
上・一　雜中・一　雜下・一　賀・一〔續拾〕春上・
二　春下・二　夏・一　秋上・一　秋下・一　雜春・
二　雜秋・三　戀四・一　雜上・一　雜中・一　雜下
・一　釋・一〔新後撰〕夏・一　秋上・一　冬・一
旅・一　戀一・一　雜上・一 後九條內大臣〔玉葉〕冬・一
雜一・一〔續千〕秋下・一〔續後拾〕秋下・一　冬
・一　戀四・一〔新千〕春下・一　戀三・一〔新拾〕
春上・一　夏・一　秋下・一　旅・一　戀三・一〔新

後拾〕雜秋•一　神•一　〔新續古〕春上•二　夏•一
秋下•一　釋•一　戀二•一　戀五•一　雜上•二
雜中•一

基祐　五位。右兵衞藤原基茂男　〔續千〕戀三•一　〔新千〕雜下•一

基時　四位。中納言源貞俊男　〔新後拾〕雜春•一　戀二•一四位

基夏　六位齋藤左衞門尉。左衞門大夫藤原基任男　〔續千〕戀五•一　〔續後拾〕雜下•一　〔新千〕雜上•一

基惟　五位。後藤壹岐守。上佐守藤原基宗男　〔風雅〕雜上•一

基運法師　〔新後拾〕戀一•一

基雅　正三位。參議藤野忠定男　〔續後撰〕冬•一四位

基盛　四位。左中將菅原家定男　〔玉葉〕冬•一四位

基嗣　從一位後岡屋前關白左大臣。後淨妙寺藤原經平公男　〔續後拾〕戀四•一
權大納言　〔風雅〕夏•一　冬•一　雜下•一前關白右大臣基　〔新千〕春下•一　戀一•一　雜下•一後岡屋前關白左大臣　〔新拾〕春上•一　秋上•一　旅•一　戀二•一　〔新後拾〕秋上•一　戀三•一　戀四•一　雜下•一　〔新續古〕春下•一　戀二•一

基隆　正二位中納言。中納言藤原基成男　〔新千〕哀•一權中納言　〔新拾〕戀三•一　〔新續古〕賀•一　戀一•一

基隆　五位後藤伊勢守。佐渡守藤原基綱男　〔續古〕戀三•一　雜下•二　〔續拾〕雜下•一　〔新後撰〕戀二•一　〔續後拾〕秋上•一　〔新拾〕戀五•一　〔新續古〕雜下•一

基輔　從三位。知足院藤原道經男　〔新古〕戀二•一四位　〔新後撰〕雜中•一從三位　〔玉葉〕雜一•一　〔風雅〕旅•一　雜上•一

基綱　五位伊勢守。伊豫守平教成男。至康和四年　〔金葉〕雜下•一

基綱　五位。左衛門尉藤原基清男　〔新勅〕秋上・一　雜一・一　〔續後撰〕雜上・一　雜下・一　〔續古〕戀四・一　〔續拾〕冬・一　〔續後拾〕雜中・一　〔新千〕雜上・一　〔新續古〕戀四・一

基親　正三位。從三位藤原基清男　〔新續古〕雜中・一　前右衛門督

基賴　五位。後藤前壹岐守藤原基政男　〔續拾〕戀二・一

基顯　正二位參議。參議藤原基氏男　〔新後撰〕雜上・一　雜中・一　雜下・一　前右衛門督　〔玉葉〕夏・一　秋下・一　雜一・二　〔續千〕雜中・一　〔風雅〕雜中・一　〔新千〕秋下・一

【清　二畫―八畫】

清人　紀　〔萬葉〕卷一七・一

清仁親王　彈正尹。花山帝御子　〔後拾〕雜一・一　彈正尹清仁親王

清文　五位　〔千載〕戀二・一

清氏　五位細川阿波守。阿波守源和氏男　〔新千〕冬・一　神・一　戀三・一　雜上・一　四位

清友　贈正一位太政大臣。藤原奈良麿男　〔古今〕春下・一　左註にたちばなの清友の歌也と有

清少納言　一條院皇后宮女房。清原元輔女。枕草子　〔六女集〕一九　連歌一　補遺八　〔後拾〕戀二・一　雜二・二　雜五・一　〔詞花〕戀下・一　雜上・一　〔千載〕雜上・二　釋・一　〔續後撰〕戀三・一　〔續古〕雜中・一　〔玉葉〕戀二・一　戀三・一　雜五・一　〔續千〕戀一・一　雜中・一

清少納言女　〔新拾〕釋・一

清水寺地主權現　〔玉葉〕神・二

清水寺觀音　〔新古〕釋二・一　〔玉葉〕釋・一　〔新續古〕釋・一

清正 五位左少將。中納言藤原兼輔男（一一六一八）〔後撰〕秋中・二 戀二・一 戀三・二 別・一 賀・一 哀・一 〔拾遺〕春・一 別・一 〔新古〕賀・一 戀一・一 戀三・一 雜下・一 〔新勅〕旅・一 〔續後撰〕夏・一 秋下・一 〔玉葉〕冬・一 旅・二 戀三・一 雜一・一 〔續千〕旅・一 雜中・一 〔續後拾〕戀三・一 〔新千〕秋下・二 〔新拾〕秋下・一 〔新後拾〕夏・一 〔三十六人集〕九一 〔同補遺〕七

清正母 〔後撰〕戀二・一

清行 四位讃岐守。大納言安倍安仁男。至寛平七年 〔古今〕物名・一 戀二・一 四位

清江娘子 〔萬葉〕卷一・一

清成 法印岩清水撿挍 〔後拾〕秋下・一

清成女 〔後撰〕戀三・一

清河 正二位參議。藤原房前公男 〔續古〕神・一 參議 〔萬葉〕卷一九・二

清季 源季廣に同じ

清空 上人淨金剛院覺勸坊 〔風雅〕雜下・一 〔新續古〕戀二・二

清忠 從二位參議。右近中將藤原俊輔男 〔續千〕旅・一 四位 〔新葉〕秋下・一 戀三・一 〔古今和歌六帖〕

清忠 五位。常陸大掾藤原直方男 〔後撰〕別・一 賀・一 〔拾遺〕雜上・一

清忠 六位。佐伯 〔拾遺〕雜上・一

【清 九畫－十三畫】

清春 五位丹後守。大藏大輔藤原清業男 〔新後拾〕戀二・一

清宣　四位雅樂頭。賀茂　〔新後拾遺〕春・一　四位

清昭　法橋。從三位高階成忠子　〔詞花〕雜下・一

清重　六位。中原光重男。至建久七年　〔千載〕戀三・一　釋・一

清胤　僧都。參議範綱子　〔詞花〕秋・一　別・一

清胤　大中臣　〔新葉〕雜下・一

清時　五位右馬助。大佛駿河守平時直男　〔續拾〕秋下・一　戀三・一

清家　五位。攝津守藤原範永男。至康和二年正月廿三日兼相模守　〔後拾〕春上・一　〔續詞花〕雜中・一

清兼　四位土佐守。土佐守源親長男　〔新後撰〕旅・一　五位　〔玉葉〕秋上・一　四位　〔續千〕冬・一　戀一・一　雜上・一　〔新後拾〕戀四・一　〔新千〕秋下・一

清麻呂　中臣　〔萬葉〕卷二〇・五

清基　法師。若清水別當榮存子　〔後拾〕春上・一

清雅　正二位中納言。參議藤原定長男　〔玉葉〕春下・一　雜二・一　前參議　〔風雅〕春下・一　秋下・一　前中納言

清愼　從一位小野宮太政大臣。關白貞信公男　〔後撰〕春上・一　春下・一　秋上・一　秋中・一　戀三・一　戀五・一　雜三・一　雜四・一　哀・一　左大臣　〔拾遺〕夏・一　秋・一　賀・一　雜上・一　雜下・一　戀一・二　雜秋・一　哀・一　小野宮太政大臣　〔新古〕哀・一　戀三・一　雜四・一　雜下・一　清愼公　〔新勅〕戀二・一　〔續後撰〕戀三・一　〔續古〕哀・一　賀・一　〔玉葉〕秋上・一　戀四・一　雜一・一　雜四・一　〔新千〕春上・一　戀二・一　〔新拾〕戀四・一　〔新續古〕戀二・一

清愼公女　〔玉葉〕戀三・一

【清　十四畫—十九畫】

清壽 法印熊野 〔玉葉〕神・一 權大僧都 〔續千〕雜上・一 法印

清綱 五位佐々木讃岐守。信濃守源秀清男 〔新千〕戀二・一

清輔 四位皇太后宮大進。左京大夫顯輔男。治承元年六月廿日卒。袋草子 〔千載〕春上・二 春下・一 夏・二 秋上・三 秋下・二 冬・一 戀一・二 戀三・一 戀四・二 戀五・一 雜上・二 神・一 〔新古〕春上・一 夏・一 秋上・一 冬・四 賀・二 哀・一 戀二・一 雜下・一 〔新勅〕秋上・一 冬・一 戀一・二 戀三・一 雜四・一 雜五・一 長歌 雜五・一 旋頭 雜五・一 〔續後撰〕秋上・一 冬・二 戀一・二 雜上・一 〔續古〕春上・二 釋・一 別・一 戀四・一 戀五・一 雜上・一 〔續拾〕春上・二 旅・一 雜下・一 〔新後撰〕春上・一 秋上・二 〔玉葉〕春上・一 春下・二 冬・一 戀二・一 戀三・一 雜一・一 雜四・一 雜五・一 〔續千〕春上・一 〔續後拾〕戀二・一 神・一 〔風雅〕夏・一 秋上・一 秋中・一 戀五・一 雜上・一 雜下・二 〔新千〕釋・一 哀・一 〔新拾〕春下・一 秋下・三 賀・一 雜下・一 誹諧 〔新後拾〕春下・一 雜下・一 〔新續古〕秋下・一 釋・一 戀一・一 雜上・一 雜下・一 誹諧 〔清輔朝臣集〕四五五 長歌一

清範 五位藤原 〔續後拾〕冬・一 雜上・一

清蔭 正三位大納言。源陽成院御子。天慶四年薨 〔後撰〕春下・一 戀一・一 戀五・二 源清蔭朝臣 〔拾遺〕戀二・一 〔新古〕戀三・二 〔新勅〕雜三・一

清蔭 五位藤原 〔玉葉〕戀五・一 〔續千〕戀一・一

清樹 五位阿波守。遠江守橘敦雄男。卒昌泰二年 〔古今〕戀三・一

清樹 六位内膳。宮道イ潔興 〔古今〕雑下・一

清昇 三井寺法印 〔新後撰〕旅・一

清縄 大伴 〔萬葉〕卷八・一

十二畫

規 十一畫「規」を見よ。

嵯 十三畫を見よ。

滋 十三畫を見よ。

婧子内親王 〔風雅〕秋中・一 〔新千〕戀四・一 〔新後拾〕雑上・一

媓子内親王 後二條帝御女 〔新千〕春下・一 戀五・一 〔新拾〕秋上・一 戀三・一 〔新後拾〕夏・一 雑秋・一 雑下・二 〔新續古〕春上・一

堤中納言御息所 〔拾遺〕戀一・一

貴布禰明神 〔後拾〕神・一

湛助 法眼。新葉集有醍醐吉野行宮時之歌 〔新葉〕旅・一

舒明天皇 諱息長足日廣額。押坂彦人大兄皇子御子(一二五三―一三〇一) 〔續古〕秋下・一 舒明天皇御歌 〔萬葉〕卷九・一 長歌卷一・一

詫阿上人 〔新後拾〕雑下・一

無品親王 號後崇光院後花園院御父君。榮仁親王御子 〔新續古〕春上・一 夏・一 秋上・一 旅・一 雑中・一 雑下・一

備前内侍 源雅通朝臣女 〔後拾〕夏・一

湯原王 贈從二位大納言。田原天皇御子 〔拾遺〕秋・一 〔新古〕冬・一 〔新勅〕戀五・一 〔玉葉〕秋上・一 〔萬葉〕卷三・三 卷四・八 卷六・三 卷八・五 〔古今和歌六帖〕

量夏 五位津守 〔新後拾〕雜上・一

統理 五位少納言、伊勢守藤原祐之男。至正曆六年 〔後拾〕雜三・一

菩提寺柱蟲喰歌 〔新古〕釋。一

喜撰 法師 〔古今〕雜下・一 〔玉葉〕夏・一 〔古今和歌六帖〕

琳賢 法師。橘義濟子 〔金葉〕戀上・一 〔詞花〕雜上・一 〔千載〕春下・一

【富】

富小路右大臣 顯忠に同じ

富ノ攝政關白 忠實公に同じ

【博】

博雅 正三位。克明親王御子 〔續後拾〕秋上・一 皇太后宮權大夫

博道 法師。萬葉作者也 〔玉葉〕雜四・二 〔萬葉〕卷三・三

【進】

進子内親王 伏見院御女 〔風雅〕春上・二 春中・二 春下・一 夏・三 秋上・一 秋下・一 冬・三 戀一・三 戀二・九 戀三・二 戀四・二 雜中・三 〔新千〕夏・一 秋下・一 戀三・一 戀四・一 〔新拾〕夏・二 秋上・一 戀三・一 戀四・一 〔新後拾〕夏・一 〔新續古〕春上・一 秋下・二 戀五・二

進子内親王家春日 〔風雅〕戀一・一 〔新千〕戀五・二 〔新續古〕夏・一

【超】

超咎 上人 〔新後拾〕雜春・一

清超 法印石清水別當。法印幸清子 〔新勅〕雜一・一

【越】

越前　〔新古〕嘉陽門院越前に同じ

越後　〔續詞花〕秋上・一　戀中・一　戀下・一　雜中・一

【椋】

椋椅部刀自賣　〔萬葉〕卷二〇・一

椋椅部弟女　〔萬葉〕卷二〇・一

【閒】

閒人宿禰　〔萬葉〕卷九・二

閒滿　秦　〔萬葉〕卷一五・二

【棊】

棊師　〔萬葉〕九・二

棊越越の妻　〔萬葉〕卷四・一

【堪】

堪容　上人　〔續後撰〕釋・一　〔續古〕哀・一　〔新後撰〕釋・一

堪圓　阿闍梨。伊豫國人　〔後拾〕別・一

堪覺　法師　〔新續古〕旅・一

【傀】

傀儡あこ　〔新續古〕別・一　〔續詞花〕別・一

傀儡侍從　〔新續古〕旅・一

傀儡靡　〔詞花〕別・一

【普】

普光院左大臣　義教公に同じ

普光園入道前關白左大臣　良實公に同じ

普詰　法師　イ普活　〔新拾〕雜中・一

【雄】

雄畧天皇（一〇七九—一一三九）〔萬葉〕長歌卷一・一

雄舜 〔新千〕戀三・一 〔新後拾〕雜上・一 雜下・一

雄運 〔新續古〕雜中・一

【登】

登 貞朝臣五位備中守。仁明帝御子。至寛平六 〔古今〕戀五・一

登平 五位土佐守。肥後守源爲親男。至寛仁二年 〔詞花〕春・一

登蓮 法師 〔詞花〕雜下・一 〔千載〕雜上・一 雜中・一 雜下・一 物名 釋・一 〔新古〕別・一 〔新勅〕秋上・一 〔續後撰〕旅・一 〔續古〕秋上・一 〔續拾〕秋下・一 冬・一 〔玉葉〕戀四・一 〔續後拾〕戀四・二 〔風雅〕秋下・一 旅・一 〔新千〕戀三・一 〔新拾〕雜上・一 〔新後拾〕春下・一 〔新古〕旅・一 〔續詞花〕旅・一 雜上・一 雜中・一

【掌】

掌侍敦子 〔新葉〕戀四・一

掌侍遠子 〔玉葉〕戀二・二

掌侍賴子 〔新葉〕秋上・一 戀四・一

【尋】

尋源 法眼石泉。中園相國公賢子。 〔新千〕釋・一

尋範 大僧正。京極師實公子。法務大乘院禪定院號内山 〔千載〕雜中・一

尋繼 法師 〔新續古〕雜上・一

【等】

等 從五位參議。中納言源常男。天暦五年三月十日薨七十二 〔後撰〕戀一・一 戀二・二 源等朝臣

等持麿 藤原部 〔萬葉〕卷二〇・一

等持院贈左大臣　尊氏公に同じ

【智】

智奴麿　文屋　〔萬葉〕卷一九・一

智辨　權僧正　〔續千〕釋・一

智證大師　和氣宅成子　〔新古〕釋・一

【最】

最信　叡山勝長壽院別當法師。源左馬頭義氏子　〔續古〕雜上・一　〔續拾〕旅・一　雜上・一　釋・一　〔新後撰〕春下・一　秋下・二　雜中・一

最度　僧都　〔續詞花〕秋上・一

最惠法親王　〔新葉〕春上・一　秋下・一　冬・一　釋・二　戀三・一

最嚴　叡山阿闍梨。越中守藤原雅弘子　〔詞花〕戀下・一

【堯】

堯仁　〔新續古〕神・一

堯仁法親王　一品妙法院。天台座主。後光嚴院御子　〔新續古〕春上・一　夏・一　神・一

堯孝　法印　〔新續古〕春下・一　夏・一　秋上・一　冬・一　旅・一　戀二・一　神・一　權大僧都

堯尋　僧都　〔新後拾〕旅・一　法師　〔新續古〕春上・一　夏・一　冬・一　旅・一　戀九・一　雜上・一　雜中・一　神・一

【雲】

雲林院御子　常康親王に同じ

雲雅　比叡山大塔大僧正。花山院通雅子　〔新後撰〕戀二・一　雜上・一　法印　〔玉葉〕秋下・一　權僧正　〔續千〕春下・一　秋

下•一　冬•一　戀三•一　戀四•一　〔續後拾〕雜上•一
前大僧正　〔續拾〕冬•一　雜下•一　〔風雅〕雜上•一
〔新千〕春下•一　戀五•一　雜上•三　〔新拾〕夏•一
雜中•一、〔新後拾〕雜上•一

雲聖　法師　〔玉葉〕雜一•一

雲禪　法印　〔續千〕雜下•一 法印　〔續後拾〕旅•一 權律師
〔新千〕冬•一　釋•一　雜中•一 法印　〔新拾〕神•一

【黑】

黑人　高市　〔玉葉〕旅•一　〔新拾〕雜上•一　〔萬葉〕卷一•三　卷三•一三　卷九•一　卷一七•一　〔古今和歌六帖〕

黑主　六位。大伴。（玄言抄云一說大伴王子曾孫與多王孫祖猪牟麿子云々）　〔古今〕春下•一　戀四•一　神•一　雜上•一　〔後撰〕戀二•一　戀三•一　雜一•一　〔拾遺〕物名•二　〔續後拾〕賀•一　〔新千〕雜上•一

黑麿　大伴　〔萬葉〕卷一九•一

黑麿　忌部　〔萬葉〕卷六•一　卷八•二　卷一六•二　〔古今和歌六帖〕

【棟】

棟仲　五位因幡守。安藝守平重茂男。至長元七年　〔後拾〕哀•一　雜四•一

棟國　四位。神主津守國平男　〔新後撰〕神•一　〔續千〕戀四•一　〔續後拾〕雜上•一　〔新千〕雜中•一　〔新後拾〕雜春•一

棟梁　五位筑前守。左中將在原業平男。昌泰十一年卒　〔古今〕春上•一　秋上•一　雜上•一　雜體•一 誹諧　〔後撰〕秋下•一　戀二•一　〔續後拾〕春上•一　〔寬平后宮歌合〕秋•二

冬・一

棟義　五位、斯波陸奥守。尾張守源和義男　〔新後拾〕戀二・一

【粟田】

粟田女王　〔萬葉〕卷一八・一

粟田右大臣　粟田贈太政大臣に同じ

粟田娘子　〔萬葉〕卷四・二

粟田贈太政大臣　道兼公に同じ

【閑】

閑院　命婦　〔古今〕戀四・一　哀・一　〔後撰〕秋上・一　雜一・二　〔新拾〕戀四・一

閑院大君　右京大夫宗于女　〔後撰〕戀三・一　雜　・一　〔拾遺〕戀五・一　〔續古〕戀二・一

閑院五のみこ　嵯峨妃。均子内親王に同じ

閑院左大臣　冬嗣公に同じ

閑院贈太政大臣　能有に同じ

【陽】

陽成院　諱貞明。清和帝御子（一五二八―一六〇九）　〔後撰〕戀三・一　陽成院親王

陽明門院　一品准后禎子内親王。後朱雀后、後三條母后。三條帝皇女　〔後拾〕雜一・一　〔新古〕戀四・一　〔續後撰〕秋上・一

陽春　麻田　〔萬葉〕卷四・二　卷九・二

陽德門院中將　〔新拾〕戀九・二

陽德門院少將　〔新後拾〕雜秋・一

【御】

御行　大伴（一一三六一）　〔萬葉〕卷一九・一

御名部皇女　天智帝皇女　〔萬葉〕卷一・一

御匣殿　堀川院中宮御匣殿に同じ

御形宣旨（ミアレ） 〔新古〕旅・一 雑上・一 〔新勅〕戀四・一 〔玉葉〕雑三・一 〔續詞花〕旅・一

御製 〔拾遺〕に同じ（朱雀院） 〔後拾〕に同じ（白河院） 〔新勅〕に同じ（後堀川院） 〔續後拾〕に同じ（後醍醐院） 〔新千〕に同じ（後光嚴院） 〔新拾〕上同 〔新後拾〕に同じ（後圓融院） 〔新葉〕長慶院に同じ

【菅】

菅根 從四位上參議。左兵衛督藤原良尙男（一五一五―一五六八） 〔古今〕秋上・一（藤原菅根朝臣。于時藏人頭從四位下） 〔古今和歌六帖〕〔寛平后宮歌合〕秋・一

【菅原】

菅原右大臣 北野（神）及び道眞に同じ

菅原孝標朝臣女 祐子内親王家女房 〔新古〕春上・一 〔新勅〕雑一・一 〔續後撰〕旅・一 〔續古〕戀五・一 哀

・二 〔玉葉〕春下・一 秋下・一 冬・一 旅・一 雑五・一 〔續千〕雑上・一 〔續後拾〕雑中・一 〔新千〕雑上・一 〔新拾〕秋上・一 雑上・一

菅原道雅女 〔拾遺〕雑下・一

菅原贈太政大臣母 伴氏 〔拾遺〕雑上・一

【勝】

勝臣 五位阿波權掾。越後介藤原發生男 〔古今〕秋下・一 戀一・一 雑下・一

勝俊 木下（二二二九―二三〇九） 〔擧白集〕一七七二

勝延 僧都。紀行廣子 〔古今〕哀・一

勝超 法師 〔金葉〕雑下・一 〔續詞花〕夏・一

勝命 法師俗名美濃守親重。佐渡守親賢子 〔新古〕春上・一 〔新勅〕戀二・一 〔續後撰〕雑上・一 〔玉葉〕冬・一 釋・一

〔新續古〕雜上・一

勝定院贈太政大臣　義持公に同じ

勝範　大僧正天台座主〔古事談〕云後三條院之護持僧　〔千載〕哀・一　〔續詞花〕哀・一

勝觀　法師。右大辨源公忠子　〔拾遺〕戀二・一

【順】

順　五位能登守。左馬允源擧男。(一五七二─一六四三)梨壺五人の一　〔拾遺〕春・二　夏・三　秋・二　賀・一　別・一　雜上・一　雜下・一　長歌　戀二・三　戀三・一　戀四・一　雜春・四　雜秋・五　雜戀・一　哀・一　〔後拾〕賀・一　哀・一　雜三・一　〔詞花〕秋・一　〔新古〕雜上・一　雜下・一　〔續後撰〕賀・一　〔續古〕冬・一　哀・一　〔玉葉〕春上・一　賀・一　戀一・二　戀四・一　雜三・一　〔續千〕秋下・一　〔續後拾〕戀三・二　〔風雅〕春上・二　〔新後拾〕冬・一　〔新千〕哀・一　〔新拾〕春下・一　雜下・一　〔新續古〕賀・一　〔續詞花〕賀・一　哀・一　〔天德內裏歌合〕二　〔三十六人集〕二〇九　長歌一　〔同補遺〕一六　〔古今和歌六帖〕

順西　法師。輪田入道河內國住人　〔續千〕雜上・一

順助法親王　二品長吏聖護院。龜山帝御子　〔續千〕春下・一

順空　上人。諡圓鑑禪師。別當賴親子　〔新後撰〕釋・一　〔續千〕釋・一　雜中・一

順德院　諱守成。後鳥羽帝御子(一八五七─一九〇二)八雲御抄　〔順德院御集〕一三〇五　〔續後撰〕春下・一　夏・二　秋上・一　秋中・二　秋下・一　冬・一　戀二・一　戀四・一　戀五・一　雜上・一　雜下・三　順德院御製　〔續古今〕春上・五　夏・一

秋上•二 秋下•五 冬•三 神•一 戀一•三 戀三•一 戀五•一 哀◦三 雜上•七 雜中◦一 雜下•二 〔續拾〕春上◦二 春下•二 夏◦一 秋上◦三 秋下•二 冬◦三 雜秋◦一 戀四•一 〔新後撰〕春上◦一 春下•二 夏•一 秋上•一 冬•一 旅•三 戀一•一 戀三•一 雜上•一 〔玉葉〕春上◦一 春下•一 夏•一 秋上•一 秋下◦二 冬•二 雜二•二 雜三•一 〔續千〕春上◦二 春下•二 夏•一 戀三•一 戀四•二 賀•一 〔續後拾〕春上•一 春下•一 夏•一 秋下•二 戀一•二 戀二•一 雜上•一 〔風雅〕春上•二 春下◦一 夏•二 秋下•一 旅•一 戀一•一 戀四•一 雜上◦二 雜中•二 〔新千〕春下•一 夏•一 秋上•二 冬•一 神•一 戀二•一 戀四•一 〔新拾〕夏•一 秋下•一 哀•二 雜上•一 雜中•一 〔新後拾〕春上•二 春下◦二 夏•一 秋下•一 冬•二 別•一 戀三•一 雜上◦一 〔新續古〕春上◦一 春下•一 夏•二 秋上•一 秋下•二 冬•一 戀一•二 戀二◦一 戀三◦一 雜上•一

順德院兵衛內侍 〔新拾〕冬◦一 〔新後拾〕夏◦一 〔新續古〕賀•一

【惠】

惠子女王 代明親王御女 〔拾遺〕哀•一 謙德公北方 〔新古〕戀四•一 雜上•一 惠子女王

惠行 僧 〔萬葉〕卷一九•一 〔古今和歌六帖〕

惠助法親王 長吏、伏見帝御子 〔續千〕神◦一 〔續後拾〕旅

・一　〔風雅〕冬・一　雜上・一

惠章　興福寺法師　〔千載〕釋・一

惠慶　法師播磨講師　〔惠慶法師集〕一三五　〔拾遺〕春・二　夏・一　秋・六　冬・一　物名・一　雜下・三　神・一　雜春・一　雜秋・一　雜戀・一　〔後拾〕夏・一　秋上・三　秋下・一　別・一　旅・一　戀四・一　雜三・一　雜四・二　雜六・一　神　〔詞花〕賀・一　戀下・一　〔新古〕春下・一　夏・一　秋下・一　旅・一　雜中・三　〔新勅〕旅・一　神・一　〔續後撰〕秋下・一　〔續古〕別・一　雜上・一　賀・一　〔玉葉〕秋上・一　〔續千〕秋下・一　旅・一　〔續後拾〕春上・一　〔新千〕春上・一　雜下・一　物名　〔新拾〕雜中・一　〔新續古〕冬・一　旅・一　〔續詞花〕夏・一　秋上・二　神・三

惠鎮　上人法勝寺長老　〔新千〕釋・一　哀・一

【賀】

賀朝　比叡山　〔後撰〕雜一・一　〔拾遺〕雜春・一

賀陽院木綿四手　〔續詞花〕哀・一

【賀茂】

賀茂　〔拾遺〕神・一　〔新古〕神・二　〔玉葉〕神・一

賀茂女王　〔萬葉〕卷四・二　卷八・一　〔古今和歌六帖〕

賀茂政平母　〔續詞花〕雜中・一

賀茂保憲朝臣女　〔六女集〕二〇八　長歌一　〔風雅〕秋中・一　戀一・一　〔新續古〕戀三・一

【景】

景久　四位。從三位　賀茂氏久男　〔玉葉〕雜一・一　〔續千〕旅・一

景式王 四位。惟條親王御子 〔古今〕物名・一 戀五・一・二 哀・一 〔風雅〕雜上・一 〔新千〕秋下・一 釋・一 戀四・一 雜上・一

景房 四位大膳大夫。左衛門尉藤原盛房男 〔新後撰〕雜上・一 四位

景明 五位長門守。大藏大輔源兼光男 〔拾遺〕秋・一 冬・一 雜上・一 雜下・一 旋頭 戀三・一 戀五・一 〔新古〕戀一・二

景家 六位。藤原 〔續拾〕雜春・一 戀二・一

景基 六位。神主津守國基男 〔千載〕雜上・一 〔續詞花〕雜中・二

景綱 五位宇都宮下野守。法名蓮輪。下野守藤原泰綱男 〔續古〕戀三・一 〔續拾〕秋下・一 雜春・一 雜秋・一 旅・一 〔新後撰〕夏・一 秋下・一 旅・一 雜下・二 賀・一 〔玉葉〕夏・一 秋下・一 冬・一 旅・一 戀一・一 雜一・一 〔續千〕春下・一 秋上・一 秋下・一 戀三・一 雜上・一 雜中・一 雜下・一 〔續後拾〕雜上

景實 五位。清原 〔新後拾〕雜秋・一

景樹 香川。天保十四歿七十六。年。新學異見。古今集正義總論 〔桂園一枝〕一六九一 長歌三 旋頭歌五

【善】

善 四位左中將。源舒男。延喜元年左遷 〔後撰〕戀四・二 戀六・一 雜四・一 四位

善了 法師 〔新千〕雜上・一

善光寺阿彌陀 〔玉葉〕釋・一 〔風雅〕釋・一

善成 從一位四辻左大臣。尊雅王御子 〔風雅〕戀五・一 善成王 〔新千〕戀二・一 雜上・一 〔新拾〕冬・一 〔新後拾〕冬・一 雜春・一 雜秋・一 戀五・一 前大納言 〔新續古〕春下・

一 夏•一 賀•一 雜上•三 雜中•一

善信 法師 〔玉葉〕雜二•一

善祐法師母 〔拾遺〕戀五•一

善珠 權僧正 〔玉葉〕釋•一

善爲 法師 〔新後拾〕戀二•一

善源 法師俗名八居三郎國行。土岐二良太郎國綱子 〔新千〕雜上•一 〔新拾〕戀二•一 雜中•一 〔新後拾〕戀二•一

善算 法印 〔新千〕戀一•一 〔新後拾〕戀二•一

善節 法師 〔新續古〕戀二•一 雜上•一

【敦】

敦光 四位。大學頭藤原明衡男。能康治二年 〔金葉〕賀•二 四位

敦有 參議。參議源有時男 〔新千〕雜上•一 〔新後拾〕雜上•一

敦仲 五位式部大輔。有馬助藤原敦賴男 〔千載〕夏•一 釋。一 〔新勅〕秋上•一

敦忠 從三位中納言。本院藤原左大臣）時平男。天慶二年參議左中將五年權中納言六年薨三十八 〔後撰〕春下•一 秋上•一 冬•一 戀二•一 戀三•一 戀四•二 戀五•二 雜三•一 四位 〔拾遺〕戀一•二 戀二•一 雜賀•一 哀•一 權中納言 〔新古〕戀三•一 戀五•一 〔新勅〕戀一•一 戀二•一 〔續後撰〕戀三•一 〔續古〕夏•一 〔玉葉〕戀四•一 〔續千〕旅•一 戀五•一 〔續後拾〕戀一•一 戀三•一 〔風雅〕戀一•一 〔新千〕別•一 戀四•一 〔新後拾〕別•一 〔古今和歌六帖〕〔三十六人集〕六四春上•一

敦家 四位伊豫守。參議藤原兼經男。至寛治三年 〔千載〕釋•一 四位 〔新古〕

敦兼 四位刑部卿。伊豫守藤原敦家男 〔新勅〕春下•一 四位

敦敏 五位左少將。藤原清愼公男。天慶六年左少將藏人九年十一月正五位下天暦元卒卅 〔後撰〕雜二・一

敦隆 橘 〔續詞花〕雜下・一

敦經 四位式部大輔。文章博士藤原茂明男。卒壽永二年 〔千載〕夏・一 〔風雅〕雜中・一

敦道親王 三品太宰帥冷泉帝御子 〔新古〕戀三・一 太宰帥敦道親王 〔新勅〕戀一・一 戀三・一 〔新千〕雜上・一

敦輔王 神祇伯従三位敦貞親王御子 〔詞花〕秋・一

敦實親王 一品式部卿。宇多帝八御子天慶四年出家。康保四年薨 〔後撰〕戀一・二 あつみのみこ

敦賢親王 式部卿三條帝御子實小一條院御子 〔新拾〕賀一・一

敦慶親王 二品式部卿。宇多帝五御子(號桂御子。延喜四年薨 〔後撰〕戀一・一 戀二・一 戀六・一 あつよしのみこ

敦慶親王家大和 〔新勅〕戀四・一 〔續後撰〕戀三・一

【尊】

尊子内親王 齋院。冷泉院御女 〔續古〕哀・一

尊玄 大僧正。權大納言公敏子 〔新千〕釋・一 權大僧都 〔新後拾〕雜下・一 前僧正 〔新續古〕雜下・一

尊什 法隆寺裏筑地。左中將長嗣子 〔風雅〕雜上・一 〔新千〕神・一 〔新拾〕雜中・一

尊氏 大納言。三河守義氏男。建武三年十二月任未拜賀定可被止任日歟 〔風雅〕春上・一 春中・一 夏・一 秋上・一 秋中・一 秋下・一 旅・一 戀一・一 戀二・一 戀四・一 雜上・三 雜中・二 釋・一 賀・一 前大納言

尊氏 正二位等持院贈左大臣。従二位源貞氏男(一九六五—二〇一八) 〔續後拾〕雜中

・一　源尊氏　「風雅」春上・一　春中・一　夏・一　秋上・一　秋中・一　秋下・一　旅・一　戀一・一　戀二・一　戀四・一　雜上・三　雜中・一　釋・一　賀・一

前大納言（重出）　「新千」春上・一　夏・二　秋下・一　冬・三　釋・二　神・二　戀一・二　戀二・二　戀三・一　戀四・一　雜上・二　雜中・三　賀・一

等持院贈左大臣　「新拾」春上・二　春下・一　夏・二　秋上・一　冬・一　賀・一　戀一・一　戀五・一　雜上・五　雜中・一　「新後拾」春上・二　夏・一　秋上・二　秋下・一　冬・三　雜秋・一　旅・一　戀二・三　戀三・一　雜上・一　雜下・一　神・一　「新續古」春上・二　春下・一　夏・二　秋上・一　秋下・一　戀五・一　雜中・一　雜下・一　神・二

尊守　律師 西南院　「新千」冬・一

尊快法親王　座主梶井宮。後鳥羽帝御子　「續後撰」神・一　入道親王尊快　「續古」哀・一　尊快法親王　春上・一　「新續古」哀・一

尊助法親王　二品座主青蓮院。土御門帝御子　「玉葉」釋・一

尊良親王　中務卿。後醍醐帝御子　「續後拾」夏・一　「新葉」春上・二　夏・二　秋上・二　秋下・三　冬・二　戀・一　四　戀三・三　戀四・三　戀五・二　雜上・一　雜中・四　雜下・一

尊空　上人本道坊、淨金剛院貞空上人門弟　「續千」雜上・一

尊治親王　後醍醐院に同じ

尊胤法親王　二品梶井。後伏見帝御子　「風雅」夏・一　秋中・一　戀二・一　雜上・二　「新千」夏・一　戀一・一　戀四・一　雜中・二　「新拾」雜上・一　雜中・一　「新續

古〕春上•一　春下•一　秋下•一　戀四•一

尊珍法親王　聖護院准后。亀山帝御子　〔續後拾〕旅•一

尊宣　四位。源　〔新後拾〕戀二•一　四位

尊家　叡山法印日光別當。從三位顯家子　〔續古〕哀•一

尊海　法印　〔續後撰〕雜中•一　〔續古〕冬•一　雜上•一　〔新千〕雜下•一

尊深　權僧正。鎌倉　〔新後撰〕雜中•一

尊道法親王　後伏見帝御子　〔新千〕秋上•一　釋•一　戀三•一　雜下•一　〔新拾〕夏•一　戀三•一　釋•二　〔新後拾〕春下•一　夏•一　冬•二　戀一•一　戀四•二　雜上•一　釋•一　〔新續古〕春上•一　春下•一　夏•一　冬•二　戀二•一　戀四•一　雜下•一

尊圓　法師。皇太后宮大夫俊成子　〔千載〕釋•一　〔新勅〕雜二•一

尊圓法親王　青蓮院座主。伏見帝御子　〔續千〕釋•一　雜中•一　〔續後拾〕秋下•一　神•一　〔風雅〕春下•一　夏•一　雜上•一　雜下•二　釋•一　神•一　〔新千〕春上•一　冬•一　旅•一　釋•三　神•一　雜上•二　賀•二　〔新拾〕春下•一　秋下•一　旅•一　戀一•一　戀三•一　釋•一　〔新後拾〕冬•二　雜春•一　戀二•一　戀九•一　釋•二　〔新續古〕秋上•一　旅•一　戀二•一　戀三•一　雜中•一

尊親　法師　〔續千〕戀二•一

【盛】

盛久　五位諏訪祝部。金剌　〔新後撰〕雜中•一　〔玉葉〕雜中•一

盛少將　藏人式部丞貞孝女　〔後拾〕春上•一　戀四•一

盛方　四位兵部大輔。中納言藤原顯時男。至仁安三年(一七九六―一八三八)　「千載」夏。一　秋上•一　戀二。一　雜中•一　「新古」秋上。一　「新勅」釋•一　戀•一

盛弘　法師　「玉葉」釋•一

盛行　度會。一禰宜家行(號村松)男　「新葉」冬•一

盛明親王　四品上總太守。延喜帝御子　「後撰」春上。一　朱雀院の兵部卿のみこ　「拾遺」夏•一　盛明のみこ　「新古」戀五•一　盛明親王　「玉葉」戀二•一　戀五•一　「新拾」戀二。一

盛長　五位橘　「千載」雜中•一

盛長　五位使筑後守。惟宗　「續後撰」戀五•一　「新後撰」雜下•二

盛房　五位左近將監。越後守平政氏男　「新後撰」戀三•一

盛房　五位肥後守。越後守藤原定成男。至寛治八年　「金葉」夏•一

盛家　五位紀　「新後拾」雜秋•一　「新續古」哀。一

盛家　源　「續詞花」旅。一

盛清　五位山城守。右兵衛尉源盛實男　「金葉」夏•一　「續詞花」夏。一

盛雅　五位藤原　「千載」冬•一

盛經　五位。藤原盛繼男　「新千」戀二•一

盛經　五位藤原　「詞花」春•一　「續詞花」春上。一

盛經母　「金葉」春•一　戀下•一

盛實　五位源　「新千」戀三•一

盛德　五位對馬守。藤原盛繼男　「新後撰」雜中•一　「續千」戀一•二　雜下•二　「續後拾」秋下•一　雜下•一　「新千」秋上•一　神•一　戀一•一　戀二•一　「新拾」夏•一　戀三•一　雜上•一　「新後拾」秋上•一　「新續古」釋•一

盛親 從三位。民部卿藤原兼行男 〔風雅〕夏・一 秋上・一 冬・二
戀五・一 雜五・一從三位 ・
盛繼 五位伊豆神主號東大夫。伊豆 〔新後撰〕戀二・一 〔玉葉〕雜
三・一

【朝】

朝尹 四位左京大夫。中宮少進藤原懷通男 〔新千〕賀・一 〔新拾〕雜中・一
朝元 五位津戸。菅原 〔風雅〕雜上・一
朝日尼 〔續詞花〕釋・一
朝任 從三位參議。大納言源時中男 〔後拾〕雜二・一右兵衛督
朝仲 五位太皇太后宮大進。本名朝宗。散位藤原宗堅男。至元曆元年 〔千載〕秋下・一
朝光 正二位大納言左大將藤原忠義公(兼通)男 〔拾遺〕雜下・一 雜賀・一
哀・二大納言 〔後拾〕哀・一 雜二・一左大將 〔新古〕
戀三・一 雜上・一 雜下・一 〔新勅〕雜一・一按察

〔續後撰〕戀三・二 戀四・一 雜中・一左近大將 雜下
・一按察 〔續古〕戀二・一 〔續拾〕旅・一 〔玉葉〕戀
二・一 戀三・一 戀四・一 〔續千〕戀三・一 雜中
・一 〔續後拾〕別・一 〔風雅〕戀四・一 〔新千〕雜
中・一 雜下・一大納言 〔新後拾〕戀一・一左近大將
朝村 五位伊達宮内大輔。孫太郎藤原基永男。本名行朝二階堂行珍同名依難分別改之宗遠父也 〔風
雅〕雜中・一 〔新千〕神・一 〔新拾〕雜中・一 〔新
後拾〕雜秋・一
朝定 五位上杉彈正少弼。左近將監藤原重顯男 〔風雅〕冬・一 旅・一 戀
五・一
朝忠 從三位中納言。三條藤原右大臣(定方)男 天曆六參議康保三年中納言同年薨五十七 〔後撰〕
春中・一 戀四・二 戀五・一四位 〔拾遺〕春・一 賀
・一 戀一・一中納言 〔新古〕戀一・一 〔新勅〕賀・一

戀一・一　戀五・一　〔續後撰〕戀五・一　〔續古〕哀・一　〔玉葉〕春上・一　〔續千〕春下・二　雜下・一　〔續後拾〕賀・一　〔新千〕春下・一　哀・一　〔新後拾〕戀四・一　〔古今和歌六帖〕〔天德內裏歌合〕七　〔三十六人集〕七〇　〔同補遺〕四

朝英　度會朝景男、朝棟弟朝材其子朝景也　〔新葉〕雜上・一

朝宗　六位。右衛門尉藤原朝景男　〔新後撰〕雜上・一

朝貞　五位中務大輔。刑部少輔平時基男　〔玉葉〕雜一・一

朝家　五位藤原　〔新續古〕雜下・一 誹諧歌

朝康　六位大膳少進。三河掾文屋康秀男。延喜三年任大舍人允　〔古今〕秋上・一　〔後撰〕秋中・一　秋下・一　〔古今和歌六帖〕

朝惠　法師興福寺　〔千載〕戀二・一　〔新古〕秋下・一 イ後惠

朝勝　五位度會　〔新後拾〕神・一

朝棟　四位。禰宜度會朝親男　〔續千〕雜中・一　〔風雅〕神・一　〔新千〕雜上・一　賀・一　〔新葉〕秋下・一　戀四・一　雜上・一　雜下・一

朝圓　法印　〔新千〕釋・一

朝隆　正三位中納言。參議藤原爲房男　〔詞花〕秋・一

朝綱　從三位參議。從四位下大江玉淵男。天德元年薨七十二　〔後撰〕戀三・一　戀四・一　雜一・一 大江朝綱朝臣　〔古今和歌六帖〕

朝範　律師。因幡守平棟仲子　〔後拾〕雜三・一　雜三・一

朝賴　四位左大辨。左大臣藤原定方男、至康和二年　〔後撰〕戀六・一 四位

朝賴　五位後藤筑後守。壹岐守藤原基政男　〔續拾〕戀二・一　〔新後撰〕雜中・一　〔玉葉〕雜一・一

【雅　三畫―十畫】

雅子內親王　延喜帝御女　〔玉葉〕戀四・一

雅久 四位賀茂 「風雅」雜上•一 「新千」戀五•一 「新拾」戀三•一 「新後拾」雜春•一 「新續古」戀四•一 雜中•一

雅正 五位刑部卿ィ惟正。中納言藤原兼輔男。至應和元年 「後撰」春上•一 春下•二 夏•一 秋中•一 秋下•一 雜一•一

雅世 正二位中納言。中納言藤原雅緣男 「新續古」春上•二 春下•一 夏•一 秋上•一 秋下•一 冬•一 賀•一 旅•一 戀一•一 戀二•二 戀三•二 雜上•一 雜中•一 雜下•二 神•一

雅冬 四位左中將。右兵衛督藤原雅宗男 「新千」戀一•一 四位 「新拾」秋下•一 戀二•一

雅有 正三位參議。正三位藤原教定男 「續古」春上•一 四位 「續拾」春下•一 夏•一 冬•一 雜春•一 戀一•一 戀二•一 雜上•一 從侍 「新後撰」春上•一 秋上•二 秋下•一 冬•一 旅•一 戀二•二 雜下•一 前參議 「玉葉」春上•一 春下•一 夏•一 秋下•二 冬•一 旅•一 戀一•一 戀二•一 雜一•一 雜二•一 雜四•一 「續千」春上•一 夏•一 戀二•二 雜下•一 哀•二 賀•一 「續後拾」夏•一 冬•一 別•一 戀二•二 戀三•一 「風雅」春中•一 雜上•二 「新千」春上•一 夏•一 釋•一 戀一•一 戀四•一 戀五•一 雜中•一 「新拾」秋上•一 「新後拾」雜春•一 旅•一 「新續古」春上•一 春下•一 夏•一 秋上•三 秋下•一 冬•一 戀二•二 戀三•一 哀•一 神•一

雅永 從二位中納言。中納言藤原雅緣男 「新續古」春下•一 夏•一

秋下・一　冬・一　戀一・二　戀四・二　神・一　四位
雅光　五位治部大輔。中院右大臣源雅定男。至保安三年　〔金葉〕夏・二　秋・一
冬・一　戀上・三　戀下・二　雜上・二　〔詞花〕秋・
一　戀上・一　〔千載〕旅・一　戀二・一　戀四・一
〔新續古〕秋上・一　〔續詞花〕春下・一　秋上・二
戀上・二
雅言　正二位大納言。前中納言源雅具男　〔續古〕冬・一　戀四・一　源雅
言朝臣　〔續拾〕春下・一　戀二・一　戀三・一　戀四・
一　前中納言　〔新後撰〕冬・一　賀・一　前大納言　〔玉葉〕秋下
・二　雜一・二　〔新拾〕哀・一　〔新續古〕戀一・一
戀四・一　雜中・一
雅孝　正三位中納言。參議藤原雅有男　〔新後撰〕夏・一　藤原雅孝朝臣　〔玉
葉〕春下・一　夏・一　秋下・一　冬・二　右兵衛督　〔續
千〕秋下・一　旅・一　神・一　戀四・二　前參議　〔續後
拾〕夏・一　雜上・一　雜下・一　〔風雅〕冬・二　戀
五・一　雜下・一　前中納言　〔新千〕春下・一　夏・一　秋
上・一　冬・一　戀四・一　雜上・二　雜下・一　〔新
拾〕夏・一　冬・二　戀三・一　雜上・一　雜下・一
〔新後拾〕夏・一　雜下・一　〔新續古〕春上・一　秋
上・一　秋下・一　賀・一　旅・一　戀二・一　戀三
・二　哀・一　雜中・一　雜下・一
雅成親王　三品。後鳥羽帝御子　〔續後撰〕秋上・一　秋下・一
戀一・一　雜上・一　雜中・二　雜下・一　旅・一　雅成
親王　〔續古〕夏・一　秋上・一　秋下・一　哀・二　雜
上・二　〔續拾〕春上・一　雜春・一　雜下・一　〔新
後撰〕秋上・一　秋下・一　雜上・二　〔玉葉〕戀一・

一　雜四・一　釋・一　〔新千〕雜下・二　〔新拾〕雜
上・一　〔新後拾〕戀二・一　〔新續古〕冬・一　戀二
・二　雜上・一
雅明　五位。藤原　〔新續古〕雜上・一
雅忠　正二位大納言。後久我太政大臣源通光男　〔續後撰〕春中・一右近大將
〔續古〕夏・一　釋・二　哀・一中宮大夫　〔續拾〕戀五・一
大納言
雅具　正二位中納言。前中納言源兼忠男　〔續後撰〕秋下・一大藏卿　〔續
古〕賀・一權中納言　〔續拾〕夏・一前中納言　〔玉葉〕雜一・一
雅宗　從三位。中納言藤原雅孝男　〔新拾〕戀三・一從三位　〔新續古〕
旅・一　雜上・一
雅定　正二位中院入道右大臣。久我源雅實男　〔金葉〕春・三　夏・二　戀
上・一　戀下・一中納言　〔詞花〕秋・一　戀下・一右大臣

〔千載〕春上・一　戀一・一　戀五・一　雜上・一中院右大
臣　〔新古〕哀・一　神・一　〔新勅〕雜四・一中院入道右大
臣　〔新後撰〕釋・一　〔玉葉〕旅・一　〔續後拾〕戀二
・一　〔新千〕春上・一　〔續詞花〕夏・一　哀・一
雅重　四位中務權大輔、從三位源行宗男、至應保　〔千載〕雜下・一折句。四位
〔續詞花〕春下・一　戀上・一　雜下・一
雅信　從一位一條左大臣。源敦實親王御子　〔新古〕雜上・一一條左大臣
雅家　從三位。中納言藤原雅孝男　〔新千〕旅・一五位　〔新拾〕賀・一
〔新後拾〕冬・一從三位　〔新續古〕春上・一　春下・一
秋上・一　戀三・一　雜上・一　雜中・一　神・一
雅兼　正二位中納言。六條右大臣源有房男　〔金葉〕春・四　秋・一　〔千
載〕秋上・一　戀二・一　雜中・一中納言　〔新續古〕戀
二・一　〔續詞花〕秋上・一　秋下・一　戀上・一

雅致女式部　和泉式部に同じ

雅能　五位侍從。從三位藤原雅家男　〔新後拾〕雜春・一

【雅　十二畫—二十三畫】

雅清　正三位參議、大納言源通々男　〔新勅〕雜三・一　左近中將

雅康　五位安藝守、播磨守平生昌男。至永承　〔千載〕哀・一

雅通　四位藏人頭左中將。權左中辨源時通男、寛仁元年七月卒　〔後拾〕春上・一　四位

雅通　正二位久我内大臣。中院源雅定男　〔千載〕春下・一　哀・一　戀二・一　戀三・一　戀四・一　雜上・一　久我内大臣　〔新古〕戀三・一　〔續拾〕雜下・一　〔風雅〕戀四・一　〔續詞花〕哀・一　戀上・一

雅朝　四位、參議藤原雅有男　〔續千〕戀一・一　戀四・一　四位　〔續後拾〕戀三・一　〔新千〕冬・一　旅・一　雜上・一　〔新拾〕夏・一　神・二　雜中・一　〔新後拾〕雜秋・一　〔新續古〕秋上・二　戀三・一　雜中・一

雅經　從三位參議。刑部卿藤原頼經男　〔新古〕春上・三　春下・一　夏・一　秋上・三　秋下・一　冬・四　旅・三　戀二・一　戀四・二　雜上・一　雜中・一　雜下・一　藤原雅經　〔新勅〕春下・一　夏・二　秋上・一　秋下・四　冬・一　旅・一　神・一　戀二・一　戀三・四　戀五・一　雜二・二　雜四・一　參議　〔續後撰〕春上・二　夏・一　秋上・二　秋下・一　釋・一　戀四・一　〔續古〕秋上・一　秋下・二　冬・二　旅・三　戀一・二　戀二・二　哀・一　雜上・一　賀・一　〔續拾〕春上・二　春下・二　夏・一　冬・二　賀・一　戀一・一　戀三・一　戀四・一　戀五・一　釋・一　〔新後撰〕春上・一　釋・一　神・一　戀二・一　戀三・二　雜中・一　〔玉

葉〕春上•二　夏•一　冬•一　旅•一　雜九•一　神
•一〔續千〕春下•二　夏•一　秋下•二　戀四•一
雜中•一〔續後拾〕春上•一　春下•一　夏•一　秋
上•一　冬•一〔風雅〕夏•一〔新千〕春上•一　夏
•二　秋下•一　戀一•一　雜下•二長一。短一〔新拾〕
春上•一　冬•一　旅•一　釋•一　雜二•一〔新後
拾〕春上•二　秋上•一　戀四•一〔新續古〕春上•
一　春下•一　夏•一　秋上•二　秋下•二　冬•三
賀•一　釋•一　旅•一　戀三•二　雜中•一

雅縁　從三位中納言。從三位藤原雅家男　〔新後拾〕冬•一藤原雅幸〔新
續古〕春上•三　春下•三　夏•一　秋上•三　秋下
•一　冬•三　賀•一　釋•一　別•一　旅•一　戀二
•二　戀三•一　戀四•一　哀•一　雜上•一　雜下
•二　神•二權中納言

雅縁　興福寺別當大僧正。久我內大臣雅通公子　〔新古〕旅•一

雅實　從一位久我太政大臣。六條源顯房男　〔玉葉〕春•一太政大臣　〔千載〕
春上•一久我前太政大臣　〔新古〕哀•一〔新勅〕春上•一
〔新千〕春上•一

雅澄　鹿持。安政五年。萬葉集古義。歿六十八　〔山齋歌集〕一二八七　旋二

雅親　正二位大納言。中納言藤原雅世男　〔新續古〕哀•一　冬•一　戀
三•一　戀四•一　雜上•一五位　〔續詞花〕戀上•一

雅頼　正二位中納言。中納言源雅兼男　〔千載〕夏•一　秋上•一　戀
三•一　戀四•一　戀九•一〔玉葉〕春下•一〔續
詞花〕春下•二

雅顯　五位。參議藤原雅有男　〔新後撰〕戀三•一〔續後拾〕哀•
一〔新千〕秋下•一　別•一　神•一　雜中•一〔新

續古〕夏・一　冬・二　雜上・二

【爲　三畫―六畫】

爲尹　正二位大納言。中納言藤原爲秀男　〔新後拾〕夏・一　戀三・一　四位
〔新續古〕春下・一　秋上・一　冬・一　賀・一　戀五
・二　雜上・一　前大納言

爲之　四位。大納言藤原爲尹男　〔新續古〕冬・一　戀三・一　四位

爲方　正二位中納言。大納言藤原經任男　〔新後撰〕夏・一　秋下・一
釋・一　前中納言　〔玉葉〕冬・一　〔續古〕戀一・一　賀・
一　〔續後拾〕雜中・一　〔新千〕戀五・一

爲氏　正二位大納言。大納言藤原爲家男（一八八二―一九四六）　〔續後撰〕春上・一
春中・一　秋中・一　戀一・一　戀二・二　參議　〔續古〕
春上・一　夏・一　秋上・二　秋下・四　冬・四　旅
・二　戀一・二　戀二・一　戀五・一　中納言　〔續拾〕春

上・一　春下・二　夏・一　秋上・一　秋下・四　冬
・二　雜春・二　賀・一　戀一・三　戀二・二　雜上
・二　前大納言　〔新後撰〕春上・三　春下・一　夏・一　秋
上・一　秋下・三　冬・三　旅・一　神・二　戀一・二
戀二・二　戀三・一　戀五・一　雜中・三　雜下・三
〔玉葉〕春上・一　夏・一　秋上・一　秋下・二　冬・
一　賀・一　戀一・一　雜二・三　雜三・一　雜五・
二　〔續千〕春上・一　春下・五　夏・四　秋上・一
秋下・三　冬・三　雜體・三　折句物名　旅・三　神・一　釋
・一　戀一・一　戀二・五　戀三・一　戀四・二　戀
五・二　雜上・三　哀・一　賀・一　〔續後拾〕春上・
二　春下・三　夏・一　秋上・一　秋下・二　冬・二
物名・一　別・一　旅・一　賀・一　戀一・一　戀三

•一 戀四•一 雜上•二 雜中•二 雜下•一 哀•二 〔風雅〕春中•一 夏•一 秋中•一 戀一•一 戀五•一 雜中•一 神•一 賀•一 〔新千〕春上•二 夏•一 秋下•四 旅•一 釋•一 戀二•二 戀三•二 戀五•一 雜上•四 雜中•二 哀•三 賀•二 〔新拾〕春上•二 春下•一 夏•一 秋上•一 秋下•三 冬•一 旅•一 戀一•二 戀二•一 戀四•二 雜中•三 〔新後拾〕春上•三 夏•一 秋上•一 冬•一 旅•一 戀三•一 戀四•一 戀五•二 雜上•一 雜下•二 賀•一 〔新續古〕春上•一 春下•一 秋上•二 秋下•一 旅•一 戀二•一 戀五•二 雜下•一

爲正 五位越後守。大和守藤原令門男 〔後拾〕別•一

爲冬 四位。大納言藤原爲世男 〔續後拾〕冬•一 五位 〔新千〕秋下•二 冬•一 戀一•二 四位 〔新拾〕戀三•一 雜上•一 〔新後拾〕春上•一 春下•一 夏•一 秋下•一 雜春•二 雜秋•二 戀一•一 戀二•一 戀三•一 戀四•一 雜上•二 〔新續古〕戀三•一

爲世 正二位大納言。大納言藤原爲氏男（一九一〇—一九九八） 〔續拾〕春上•一 春下•二 秋上•二 冬•二 戀一•二 戀二•一 藤原爲世朝臣 〔新後撰〕春上•一 春下•二 夏•一 秋上•二 秋下•一 戀二•一 戀六•一 雜上•一 雜下•一 前大納言 〔玉葉〕春下•一 夏•一 秋上•一 冬•一 戀四•一 戀五•一 雜三•一 雜五•一 民部卿 〔續千〕春上•三 春下•一 夏•三 秋上•二 秋下•二 冬•二 雜體•一 誹諧 旅•二 神•二 戀一•一 戀

二・三　戀三・六　戀四・一　戀五・一　雜上・二
雜中・一　哀・二前大納言「續後拾」春上・三　春下・二
夏・二　秋上・一　秋下・二　冬・一　旅・一　戀一
・二　戀二・一　戀四・二　雜上・一　雜中・一　雜
下・一　哀・一　神・一「風雅」春上・一　春中・二
冬・二　雜上・一　雜下・一「新千」春上・四　春下
・二　夏・四　秋上・三　秋下・三　冬・二　釋・二
戀一・四　戀二・二　戀三・二　戀五・一　雜上・三
雜中・三　雜下・二　哀・二　賀・二「新拾」春上・
二　春下・二　夏・二　秋上・二　秋下・二　冬・二
別・二　戀二・一　戀四・一　戀五・二　神・一　雜
上・三　雜中・二「新後撰」春上・一　春下・一　夏
・二　秋上・二　秋下・一　冬・二　雜春・三　戀二
・二　雜下・一「新續古」春下・一　夏・一　戀四・
一　戀五・二　神・一

爲世　五位兵庫介。散位藤原忠相男。至天慶九年。「後撰」戀五・一

爲永　五位。三善　「新後拾」雜秋・一

爲任　四位伊豫守。左大臣藤原清時男　至長和三年　「後拾」雜三・一四位

爲光　恒徳公に同じ

爲名　從三位。從二位藤原爲藤男「風雅」秋下・一　戀三・一四位「新千」戀三・一

爲守　五位侍從。大納言藤原爲家男　「玉葉」春下・一　秋下・一　雜五・一　神・一「風雅」冬・一　雜上・一　雜下・一

爲仲　四位太皇太后宮亮。主殿頭橘義通男。應徳二年十廿一卒　「後拾」旅・一　雜三・一四位「詞花」秋・一　雜上・一「新古」秋上・一　旅・一「續詞花」旅・二

爲行 正二位中納言。中納言藤原爲方男 〔新續古〕雜下・一

【爲 七畫―八畫】

爲秀 正二位中納言。中納言藤原爲相男 〔風雅〕春中・二 夏・一 秋上・一 秋中・二 秋下・一 冬・一 戀一・一 四位 〔新拾〕春下・一 秋下・一 賀・一 旅・一 戀二・一 戀三・一 戀四・一 雜上・一 前參議 〔新後撰〕夏・一 雜春・一 前中納言 〔新續古〕春上・一 夏・一 秋下・一 戀四・一 雜下・一

爲邦 四位。中納言藤原爲秀男 〔新拾〕雜中・一 五位 〔新續古〕秋下・一 賀・一 四位

爲言ノブ 五位。三河守菅原爲理男。萬壽四年三十三敍 〔後拾〕春上・一

爲言 菅原 〔續詞花〕秋上・一

爲成 正三位。中納言藤原爲ㇵ男 〔玉葉〕雜四・一 四位 〔風雅〕秋下・二 冬・一 戀三・一 前左兵衛督 〔新千〕戀五・一 雜上・一 雜中・一 雜下・一 哀・一

爲成 五位。藤原 〔續拾〕雜下・一

爲成 五位。源 〔金葉〕別・一

爲成 五位。平 〔金葉〕雜下・一 連歌

爲政 四位文章博士。能登守善滋保章男 〔拾遺〕雜秋・一 五位 〔後拾〕雜一・二 四位 〔千載〕賀・一 〔新古〕秋下・一

爲具 藤原 〔續詞花〕戀上・一

爲宗 四位左中將。大納言藤原爲世男 〔新後撰〕戀六・一 四位

爲明 正二位中納言。中納言藤原爲藤男 〔續千〕戀四・一 四位 〔續後拾〕春下・一 戀三・一 〔風雅〕冬・一 雜下・一 釋・一 〔新千〕春上・一 參議 夏・一 中納言 秋上・一 秋下・一 冬・一 神・一 戀一・一 戀二・一 戀三・一

戀四・一　戀五・一　雜中・一　雜下・一　哀・一
賀・一　「新拾」春上・一　春下・一　夏・一　秋上・
一　冬・一　戀一・二　戀三・一　雜上・一　雜中・
一民部卿　「新後拾」戀一・二　戀五・一權中納言　「新續
古」春上・二民部卿　夏・二同　秋上・一　秋下・一民部卿
冬・一　賀・一　戀二・一　戀五・一　雜中・一

爲定　正二位大納言。民部卿藤原爲藤男　「玉葉」戀一・二藤原爲定朝臣　「續
千」春上・一　夏・一　秋上・一　戀一・一　戀二
・二　戀五・一　「續後拾」春上・一　夏・一　秋下・
一　冬・一　戀二・一　戀三・一　戀四・一右衞門督　「風
雅」春上・一　春中・一　秋中・一　秋下・二　冬・三
旅・二　戀四・一　雜中・一　雜下・一　賀・二民部卿
「新千」春上・二　春下・二　夏・二　秋上・三　秋下
・二　冬・二　旅・一　釋・一　神・二　戀一・四　戀
二・三　戀三・二　戀四・一　戀五・一　雜上・二
雜中・五　哀・一前大納言　「新拾」春上・一　春下・二
夏・一　秋下・二　冬・二　賀・一　旅・二　哀・二
戀一・三　戀二・二　戀三・一　戀五・一　雜上・一
「新後拾」春上・三　春下・一　夏・三　秋上・二　秋
下・二　冬・三　雜秋・一　旅・二　戀一・四　戀一
・一　戀三・一　戀四・一　雜上・一　賀・一　「新續
古」春上・一　秋上・一　秋下・一　冬・二　賀・一
釋・一　旅・一　戀一・一　戀二・二　戀三・一　戀
五・一　雜上・一

爲定　四位神祇權大副。神祇少副大中臣爲仲男。建暦二五十七卒六十四　「千載」神・一

爲長　正二位參議。大學頭菅原長守男　「續後撰」賀・一前參議　「續古」

賀•一 大藏卿 「續拾」賀•一 前參議 「新千」神•一 「新續古」賀•一

為長 五位陸奥守。刑部大輔藤原惟正男。至寛弘八年 「後拾」雜四•一

為季 正二位。右衞門督藤原為盛男 「新續古」戀三•一 五位

為季 四位左京大夫。右中辨藤原為親男。至建保四年 「千載」冬•一 五位 「風雅」戀五•一 四位

為忠 正二位中納言。中納言藤原為藤男 「風雅」夏•一 四位 「新後拾」戀四•一 前中納言 「新續古」秋上•一 冬•一 賀•一 戀四•一 雜中•一 神•一 「新葉」春上•二 春下•三 夏•五 秋上•二 秋下•二 冬•三 旅•二 神•一 戀一•一 戀二•二 戀三•一 戀五•三 雜上•四 雜中•五 雜下•五 賀•一

為忠 四位。皇后宮少進藤原知信男。至保延元年 「金葉」賀•一 戀上•一 五位 「千載」雜上•一 四位 「新古」下•一 「新勅」戀二•一 「新續古」戀二•一 戀四•一 雜上•一 雜下•一 「續詞花」秋下•一 戀中•一 戀下•一 雜中•一

【為 九畫―十二畫】

為信 從三位。左馬頭藤原伊信男 「續拾」戀三•一 五位 「新後撰」夏•一 戀二•一 戀三•一 雜中•二 四位為信 「玉葉」秋上•一 雜五•一 從三位 「續千」秋下•一 戀一•一 戀三•一 賀•一 「續後拾」雜中•一 「風雅」秋中•一 雜下•一 「新千」戀一•一 雜下•一 哀•一 此歌夢の中によみける歌也 「新拾」夏•一 秋下•一 戀一•二 「新後拾」春上•一 秋下•一 戀一•一 「新續古」冬•一 戀二•一 戀五•一

為重 從二位中納言。左中將藤原為冬男 「新千」戀三・一 戀五・一 「新拾」戀四・一 雜上・一 「新後拾」春上・一 春下・二 夏・三 秋上・二 冬・二 雜春・一 旅・一 戀一・二 戀二・二 戀三・一 戀四・一 戀五・一 雜上・一 雜下・一 釋・一 神・一 權中納言 「新續古」春上・一 夏・一 秋下・一 戀一・一 戀四・一 雜下・一 神・一

為相 正二位中納言。大納言藤原為家男 「新後撰」秋上・一 冬・一 旅・一 雜上・一 藤原為相朝臣 「玉葉」春下・二 秋上・二 秋下・一 雜一・三 雜二・一 雜三・一 雜五・三 前參議 「續千」秋上・一 旅・一 戀二・一 戀四・一 賀・一 前中納言 「續後拾」夏・一 秋下・一 哀・一 「風雅」春上・一 春中・一 春下・二 夏・一 冬・二 戀四・一 戀五・一 雜上・三 雜中・一 雜下・四 神・一 「新千」春上・一 夏・一 秋下・一 冬・一 神・一 戀二・二 戀三・一 戀五・二 雜上・一 「新拾」春上・一 旅・一 戀三・一 神・一 雜中・一 「新後拾」夏・一 秋上・一 「新續古」釋・一 戀三・一 雜上・一

為躬 五位左少將。大納言藤原經世男 「續千」戀二・一

為貞 五位肥後守。信濃守藤原永實男 「詞花」雜上・一 「千載」戀四・二 「續詞花」戀上・一 戀中・一

為家 正二位大納言。權中納言藤原定家男（一八五七―一九三五） 「新勅」春下・一 夏・一 秋上・一 秋下・一 冬・一 戀一・一 右衞門督 「續後撰」春中・一 春下・一 夏・一 秋下・二 神・三 戀二・一 戀四・一 雜上・一 前大納言 「續古」春

上・三　春下・三　夏・三　秋上・二　秋下・四　冬
・四　神・一　別・一　旅・一　戀一・一　戀二・一
戀三・一　戀四・一　戀五・一　哀・三　雜上・四
雜中・二　雜下・五　賀・一　〔續拾〕春上・三　春下
・二　夏・二　秋上・二　秋下・一　冬・一　雜春・四
雜秋・七　旅・二　賀・一　戀一・三　戀二・一　戀
三・三　戀四・一　戀五・一　雜上・二　雜中・一
雜下・二　釋・一　神・一　〔新後撰〕春上・三　春下
・二　夏・三　秋下・二　冬・三　旅・二　神・一　戀
一・三　戀二・二　戀三・一　戀四・一　雜上・二
雜中・二　雜下・一　〔玉葉〕春上・四　春下・二　夏
・三　秋上・四　秋下・三　冬・八　賀・一　旅・三
戀一・二　戀二・三　戀三・四　戀四・二　戀五・一

雜一・五　雜二・一　雜三・三　雜五・三　釋・一
〔續千〕春上・四　春下・二　夏・二　秋上・二　秋下
・二　冬・一　雜體・一諸誹　神・一　釋・一　戀一・二
戀五・二　雜上・四　哀・二　賀・一　〔續後拾〕春上
・二　春下・一　夏・一　秋上・一　秋下・二　冬・一
別・二　旅・一　戀一・三　戀二・二　戀三・一　戀
四・二　雜上・一　雜中・一　雜下・一　釋・一　神
・一　〔風雅〕春上・二　春中・三　夏・三　秋上・一
秋中・二　冬・一　旅・一　戀一・一　戀二・四　戀
三・一　戀四・一　雜上・二　雜中・二　雜下・一
釋・一　〔新千〕春上・三　夏・一　秋上・一　秋下・
一　旅・一　釋・二　戀二・二　戀四・二　戀五・一
雜上・二　雜中・一　雜下・二諸誹　哀・一　賀・一

「新拾」春上・一　春下・二　夏・一　秋上・二　秋下・三　冬・一　別・一　旅・二　戀三・二　戀五・一　神・三　雜中・二　雜下・一　詞書　「新後拾」春上・二　春下・一　秋下・一　冬・一　雜秋・二　戀一・一　戀四・三　雜上・一　雜下・一　釋・一　「新續古」春上・一　春下・一　夏・一　秋上・一　秋下・一　旅・一　戀一・一　戀五・二　雜上・一　雜中・一　雜下・一

爲兼　正三位大納言。前右衛門督藤原爲教男（一九一四—一九九二）玉葉集撰者　「續拾」戀四・一　雜上・一　藤原爲兼朝臣　「新後撰」春上・一　春下・二　秋上・二　冬・一　戀一・一　戀二・一　戀四・一　戀五・一　前中納言　「玉葉」春上・二　春下・三　夏・二　秋上・三　戀三・二　冬・三　旅・二　戀一・二　戀二・三　戀三・二　戀四・一　戀五・一　雜一・一　雜二・一　雜三・一　雜四・一　釋・一　神・二　前大納言　「風雅」春上・四　春中・四　春下・二　夏・四　秋上・三　秋中・三　秋下・二　冬・六　旅・六　戀一・二　戀二・二　戀三・二　戀四・一　雜上・三　雜中・六　雜下・一　釋・一　神・一　「新千」春上・一　春下・一　夏・一　秋上・一　秋下・二　冬・二　神・一　戀一・二　戀三・一　戀五・二　賀・三　「新拾」春上・二　春下・一　夏・一　冬・一　旅・一　戀二・二　雜上・一　「新後拾」秋上・一　秋下・一　冬・一　戀一・一　戀二・一　戀三・一　「新續古」夏・一　戀二・二　戀三・一　雜下・一

爲時　五位。刑部大輔藤原惟正男。至天元二年　「後拾」春下・一　戀一・一

雜一・一　〔新古〕雜上・一

爲時　五位常磐左近將監。右京大夫平時村男　〔新後撰〕戀一・一　〔玉葉〕

秋上・一

爲淸　五位侍從。中納言藤原爲藤男　〔新拾〕戀三・一

爲連　六位飯尾。三善　〔續千〕雜下・一　〔風雅〕雜上・一

〔新千〕雜上・一　〔新拾〕戀三・一　〔新後拾〕秋下

一　雜春・一　雜下・一　〔新續古〕戀一・一

爲敎　從二位。大納言藤原爲家男　〔續後撰〕秋中・二　戀五・一　四位

〔續古〕冬・一　戀二・一　戀五・一　右兵衞督　〔續拾〕夏

・二　秋下・一　旅・一　戀一・一　戀二・一　戀五

・二　雜上・一　前右兵衞督　〔新後撰〕秋下・一　神・一

戀一・一　雜中・一　〔玉葉〕春下・一　夏・一　秋上

一　秋下・一　冬・一　賀・一　雜九・一　〔續千〕春

下・一　秋下・二　神・一　〔續後拾〕雜上・一　雜下

・二　〔新千〕戀四・二　雜中・一　〔新拾〕夏・一　戀

一・一　〔新後拾〕春下・一　戀三・一

爲通　正四位下參議。大宮相國藤原伊通男　〔千載〕戀四・一　〔續詞花〕

戀下・一

爲量　大中臣　〔新葉〕神・一

爲量　四位。從三位藤原爲信男　〔風雅〕雜上・一　四位　〔新千〕戀・二

・一　賀・一　〔新後拾〕冬・一　雜春・一　雜秋・一

戀一・一　雜下・一　〔新續古〕雜下・一

爲基　菅原　〔新葉〕秋上・一

爲基　四位。參議藤原俊言男　〔風雅〕春上・一　春中・二　夏・一

秋上・一　秋中・一　秋下・一　冬・二　戀一・二

雜上・一　雜中・六　雜下・三　釋・一　四位

為基 五位攝津守。參議大江齊光男。至永祚元年 〔拾遺〕雜上・一 戀二・一 哀・一 〔後拾〕雜三・一 〔詞花〕戀下・一 〔續詞花〕雜下・一

為善 四位備前守。播磨守源國盛男、長久三十一日卒 〔後拾〕春下・一 秋上・二 冬・一 別・一 雜一・一 雜四・一 雜五・一

為盛 從二位。侍從藤原為敦男 〔新後拾〕旅・一 五位 〔新續古〕夏・二 冬・一 旅・一 戀五・一 右衛門督

為景 為理に同じ

為理 從三位。本名為景。從三位藤原為信男 〔新後撰〕春下・一 戀四・二 四位為理 〔玉葉〕夏・一 戀一・一 為理 〔續千〕秋下・一 戀一・一 戀二・一 戀五・一 從三位 〔續後拾〕秋下・一 哀・一 〔風雅〕戀三・一 〔新千〕秋上・一 旅・一 釋・一 〔新拾〕秋下・一 冬・一 戀二・一

戀三・一 〔新後拾〕冬・一 雜下・一 〔新續古〕釋・二 戀二・一 戀四・一

為敦 從三位。右馬頭藤原為量男 〔新後拾〕秋下・一 從三位 雜秋・一 侍從 戀三・一 戀四・一 〔新續拾〕春上・一 秋下・一 秋下・一 戀一・一 戀二・一 戀三・一

【為　十三畫—二十三畫】

為義 四位但馬守イ為善。遠江掾橘通冬男。寛仁元年十月卒 〔後拾〕秋上・一 旅・二 〔詞花〕雜上・一 〔續古〕戀四・一

為業 五位淡路守。木工頭藤原為忠男。至保延五年 〔千載〕春上・一 〔新拾〕秋下・一 〔續詞花〕春下・三 秋下・一

為嗣 從三位參議。參議藤原為實男 〔續千〕秋下・一 四位 〔續後拾〕戀二・一 〔風雅〕雜下・一 〔新千〕冬・二 戀三・一 前參議 〔新拾〕夏・一 戀一・一

爲經 正二位中納言 參議藤原資信男 〔續後撰〕夏・一 秋下・一 戀二・一 戀三・一 戀四・一 太宰權帥 〔續古〕春下・一 秋下・一 冬・一 〔續拾〕秋上・一 秋下・二 賀・一 〔新後撰〕冬・一 戀一・一 戀二・一 戀三・一 戀四・一 〔玉葉〕秋上・一 〔續千〕春下・一 神・一 戀四・一 雜上・一 〔新千〕春上・一 哀・一 〔新拾〕雜上・一 〔新後拾〕雜春・一 〔新續古〕春上。一 秋下・一 戀二。一 雜中・一

爲經 五位。大隅守惟宗行利男。治安二年正月廿日任刑部少判事長元八年正月五日敍 〔後拾〕秋上・一

爲道 四位左中將。大納言藤原爲世男 〔新後撰〕春下・一 秋上・一 秋下・一 戀一・一 雜上・二 雜下・一 四位 〔玉葉〕夏・一 雜三・一 〔續千〕春下・一 夏・一 秋下・

一 冬・一 旅・一 戀一・二 戀二・一 戀三・一 戀四。三 〔續後拾〕春上・一 秋上・一 秋下・一 冬・一 戀一・一 戀二・一 戀三・一 戀四・一 雜上・一 雜下・一 神・一 〔新千〕春上・一 春下・二 夏・一 秋上・二 秋下・二 冬・一 戀一・三 戀二・一 戀三・三 戀五・一 雜上・一 雜下・一 賀・一 〔新拾〕春上・一 秋下・一 賀・一 旅・一 戀一・一 釋・一 〔新後拾〕夏・一 雜春・一 雜秋・二 別・一 戀一・一 雜上・一 〔新續古〕戀四・一

爲道朝臣女 〔續千〕戀二・一 〔續後拾〕秋上・一 戀三・一 〔新千〕雜下・一 哀・一

爲遠 從二位大納言。大納言藤原爲定男 〔新千〕春上・一 夏・一 秋

上・一　戀一・一　戀二・一　戀五・一藤原爲遠朝臣　「新拾」春上・一　秋上・二　冬・一　戀四・一右兵衛督　「新後拾」春上・二　春下・一　夏・二　秋上・一　雜秋・一　戀三・一權大納言　「新續古」春上・一　夏・一　秋下・三　賀・一　戀一・一　戀三・一　戀四・一　戀五・一　雜下・一　神・一

爲綱　四位。越前守藤原爲隆男　「續後撰」雜中・一四位　「續古」雜上・一　雜中・一　「續拾」戀五・一　雜上・二　「新後撰」戀一・一　戀五・一　雜上・一　「續千」戀四・一　「續後拾」戀上・一　「新拾」夏・一

爲種　五位。三善　「新續古」雜中・一

爲實　正三位參議。大納言藤原爲氏男（―一九九三）　「新後撰」戀二・二四位　「玉葉」春下・一　秋上・一　旅・一　戀四・一　雜一・二　神・一從三位　「續千」春下・一　秋下・一　冬・一　戀一・二　戀二・一　戀四・一　戀五・一　雜上・一正三位　「續後拾」戀四・一　雜中・一前參議　「風雅」春中・一　春下・一　「新千」秋上・一　戀二・一　戀五・二　賀・一　「新拾」春下・一　秋下・一　戀四・一　「新後拾」春上・一　雜春・一　旅・一

爲實　六位。大中臣　「續千」戀二・一。

爲頼　四位太皇太后宮大進。刑部少輔藤原雅正男。至長德二年　「拾遺」秋・一　別・一　雜下・二　哀・一五位　「後拾」秋上・一　雜五・一　「千載」雜下・一　「新古」哀・一　「續後撰」賀・一　「續拾」秋上・一

爲衡　四位。大納言藤原爲遠男　「新續古」秋上・一四位

爲憲　五位伊賀守。筑前守源忠幸男。寛弘八年八月卒　「拾遺」雜上・一

爲親 從三位。左中將藤原爲通男 「續千」戀一•一位四 「續後拾」春
下•一 戀一•一 「風雅」雜上•一位從三 「新千」春
下•一 秋上•二 冬•一 戀一•二 戀四•一從侍
「新拾」春上•一 戀五•一 「新後拾」夏•一 「新續
古」雜上•一 「續詞花」戀下•一

爲藤 正二位中納言。大納言藤原爲世男 「新後撰」春上•一 夏•一
秋上•一 戀一•二 戀三•一 戀五•一藤原爲藤朝臣 「玉
葉」冬•一 賀•一 旅•一 戀五•一 雜五•一左近中將
「續千」春下•一 夏•二 秋上•二 秋下•二 冬•
二 神•一 戀二•二 戀三•一 戀四•一 戀五•
二 雜上•一權中納言 「續後拾」春上•一 夏•一 秋上
•二 秋下•一 冬•一 戀三•一 戀四•一 雜上
•一 雜中•一 雜下•一 神•一民部卿 「風雅」夏•

一 秋上•二 冬•一 雜上•一 「新千」春上•二
春下•二 夏•二 秋上•二 秋下•二 冬•二 釋
•二 戀一•二 戀二•二 戀三•一 雜上•二 雜
中•二 哀•二 「新拾」春上•二 春下•二 夏•二
秋上•一 秋下•五 冬•二 旅•一 哀•一 戀二
•二 戀三•一 戀四•三 戀五•一 釋•一 雜上
•三 雜中•一中納言 「新後拾」春上•二 春下•一
夏•一 秋上•一 雜秋•二 旅•二 戀二•一 戀
三•二 戀五•一民部卿 「新續古」春上•二 秋上•一
秋下•一 冬•二 釋•一 旅•一 戀上•一 戀四
•二 戀五•二 雜中•一中納言

爲繼 從三位。左京大夫藤原信實男 「續後撰」戀三•一 戀四•一位四
「續古」戀一•一 雜下•一從三位 「續拾」冬•一 雜

秋・一　旅・一　「新後撰」夏・一　秋下・一　冬・一
「續千」秋上・一　戀二・一　「風雅」雜下・二　「新千」別・一　雜上・一　「新拾」戀三・一　「新後撰」雜上・一

爲顯　五位。法名明覺　藤原爲家男　「續拾」雜中・一　「新後撰」別・一　戀二・一　「新千」雜下・一　「新拾」雜中・一
「新續古」戀二・一　神・一

十三畫

棊　十二畫「棊」を見よ

絹　「萬葉」卷一・一

勢かゐの君　清和院君。是忠親王御女　「後撰」雜三・一

猿丸　「三十六人集」三七　「同補遺」一四

肅子内親王　後鳥羽帝御女　「新續古」別・一

瑒子内親王家宰相　「新千」戀一・一　「新拾」冬・一
「新後拾」雜春・一　雜下・一

報恩院攝政關白　忠教公に同じ

愛宮　九條右大臣女　「拾遺」雜上・一

傳教大師　釋最澄。入唐。三津氏百枝子（一四三八―一四八二）　「新古」釋・一
「續古」釋・三　「新拾」釋・一

鉢麻呂　榎氏　「萬葉」卷五・一

猷圓　法印。左京大夫隆信子　「新古」雜上・一　法師　「新勅」秋上・一　法印　「玉葉」雜上・一　釋・一

運圓　法印。權少僧都　「新後拾」雜下・一

歳德　物部　「萬葉」卷二〇・一

【嵯】

嵯峨天皇　緯賀美能又神野。桓武帝御子（一四四六―一五〇二）〔續後拾〕秋上・一　嵯峨天皇御製

嵯峨后　贈太政大臣橘清友公女　〔後撰〕雜一・一　雜二・一　〔古今和歌六帖〕

【廉】

廉仁王　邦省親王御子　〔新拾〕戀三・一

廉義　從一位三條關白。藤原清愼公男　〔拾遺〕賀・一　三條太政大臣　〔新古〕戀三・一　廉義公　〔新千〕戀四・一　〔新拾〕哀・一

【瑞】

瑞雲院贈左大臣　忠業公に同じ

瑞禪　法師　〔新續古〕旅・一

【嗣】

嗣房　從三位。大納言藤原良教男　〔新後撰〕雜中・一　四位

嗣定　四位。藤原嗣家男　〔新拾〕雜上・一　四位　〔新後拾〕雜秋・一

【滋】

滋春　六位內舍人。中將在原業平男　〔古今〕賀・一　別・一　物名・三　哀・一　〔新勅〕戀四・一　〔古今和歌六帖〕

滋蔭　五位掃部頭。小野。延長八年十一廿一從五位下至寬平五　〔古今〕物名・一

滋幹　五位左少辨。大納言藤原國經男。延長六年右少將、承平元年卒　〔後撰〕戀二・一　戀三・一

【遍】

遍照光院入道前太政大臣　藤公重。西園寺內大臣實衡二男　〔新葉〕春上・一　秋上・一　雜上・三　哀・三　賀・一

遍昭　僧正。良岑宗貞。大納言良岑安世子。號花山僧正。寬平二年入滅七十六　〔古今〕春上・一　春下・一　夏・一　秋上・二　秋下・一　賀

・一　別・二　物名・一　戀五・二　哀・一　雜上・一
雜下・一　雜體・一 誹諧　〔後撰〕春中・一　春下・一
雜三・三　〔拾遺〕秋・一　冬・一　雜春・一　雜秋・
一　雜賀・一 連歌良岑宗貞　〔新古〕哀・一　雜下・一　〔續
古〕戀二・一　雜上・一　〔玉葉〕雜一・一　〔續後拾〕
賀・一　雜中・一 良岑宗貞　〔新千〕春上・一　夏・一　〔三
十六人集〕三六　〔同補遺〕五　〔古今和歌六帖〕

遍救　僧都　〔後拾〕戀三・一

【達】

達智門院　伊勢齋宮皇后宮。後宇多御女　〔續千〕夏・一　秋下・
一　冬・一　釋・二　戀二・一 皇后宮　〔續後拾〕夏・一
戀二・一　戀三・一　〔新千〕春下・一　戀一・一　雜
中・一　賀・二　〔新拾〕冬・一　戀四・一　神・一
〔新續古〕神・一　〔新葉〕哀・二

達智門院內侍　〔續千〕戀四・一 皇后宮內侍

達智門院兵衛督　〔續千〕戀二・一　〔新千〕戀二・一
戀三・一　哀・一　〔新拾〕秋上・一　哀・一　戀一・一

【頓】

頓阿　法師俗名貞宗。二階堂下野守光貞子。（一九四九—二〇三二）井蛙抄　〔草庵集〕一
九九九　雜體・一　連歌・一〇〇　〔續千〕雜上・一
〔續後拾〕戀一・一　雜下・一　〔風雅〕雜下・一
〔新千〕秋下・一　戀五・二　雜上・一　〔新拾〕春下
・一　秋上・一　冬・一　旅・一　哀・一　戀一
・一　戀三・一　雜中・二　〔新後拾〕夏・一　秋
下・一　雜秋・一　戀二・一　戀五・一　雜上・一
雜下・一　釋・二　〔新續古〕春上・一　春下・一　夏

・二 秋上・二 釋・一 別・一 旅・一 戀二・一 戀三・二 戀四・一 戀五・一 雜上・一 雜中・二 雜下・三 一首短歌 一首誹諧

頓宗 法師 〔新拾〕戀三・一 〔新續古〕秋下・一 戀三・一

頓乘 法師俗名春宮亮俊賴 〔新千〕雜上・一

【照】

照光院前關白 師平公に同じ

照慶門院一條 大納言藤原師親女 〔新後撰〕秋上・一 戀三・二 〔玉葉〕夏・一 〔續千〕夏・一 戀一・一 雜中・二 雜下・一 哀・一 〔續後拾〕夏・一 秋上・一 冬・一 戀一・二 雜下・一 〔新千〕秋上・一 秋下・二 冬・一 〔新拾〕夏・一 冬・二 戀三・一 〔新後拾〕冬・一

照覺 法師俗名本郷若狹守家泰 〔新千〕戀三・一 〔新拾〕戀四・一 〔新後拾〕雜春・一 雜下・一

【意】

意明 法師 〔新續古〕戀五・一

意尊 法師 〔續詞花〕春上・一

意尊法師母 〔續詞花〕戀下・一

【詮】

詮政 五位。兵部大輔源詮經男 〔新後拾〕雜春・二 〔新續古〕雜下・一

詮直 五位肥田瀬宮內少輔。伊豫守源直氏男 〔新後拾〕旅・一

詮信 五位桃井刑部少輔。修理大夫源直信男 〔新後拾〕戀三・一 〔新續古〕秋上・一 雜上・一 雜中・一

【當】

當麻呂の妻　「萬葉」卷一・一

當時　從三位中納言。左大臣源能有男　「新勅」神・一　中納言

當純　五位少納言。近院右大臣源能有男。(惟喬親王子山城守衆覽王子)至延喜十一年　「古今」春上・一　「寛平后歌合」春・一

【熙】

熙明親王　兵部卿　「風雅」雜上・一

熙時　五位左馬頭。左近將監平爲時男　「新後撰」戀一・一　「玉葉」夏・一　戀二・一　雜一・二

熙貴　五位山名中務大輔。中務大輔源氏家男　「新續古」戀一・一

【與】

與呂磨　大部　「萬葉」卷二〇・一

與曾布　今奉部　「萬葉」卷二〇・一

與喜左大臣　「新葉」秋下・一　賀・一

與謝女王　「萬葉」卷一・一

【奧】

奧守(オキモリ)　大神　「萬葉」卷一六・一

奧島(オキシマ)　阿氏　「萬葉」卷五・一

奧麻呂　長　「萬葉」卷一・一　卷二・二　卷三・二　卷一六・八　「古今和歌六帖」

奧道(オキミチ)　安倍　「萬葉」卷八・一

【萬】

萬里小路右大臣　公基公に同じ

萬秋門院　從三位准三后後二條院尚侍頊子、闡明寺實經公女　「新後撰」春下・一　秋下・一　戀一・一　戀三・一　雜中・一　「玉葉」春下・一　冬・一　戀四・一　「續千」春下・一

秋上・二 戀四・一 雜上・二 賀・一 「續後拾」夏・一 秋上・二 戀四・一 「風雅」秋下・一 「新千」秋上・一 秋下・一 哀・一 賀・一 「新拾」秋下・一 戀三・一 「新後拾」戀九・一 「新續古」春下・一 釋・一 戀三・一 雜下・一

萬秋門院一條 「新續古」戀四・一 戀五・一

萬秋門院少將 「續千」戀二・一

萬雄 →万雄（三畫）を見よ。

【業】

業尹 四位。散位 藤原清尹男 「新後撰」戀二・一 四位 「續千」哀・一

業氏 四位細川兵部少輔。兵部少輔源顯氏男 「新古」旅・一 五位

業平 四位左中將。阿保親王御子。（一四八五—一五四〇） 「古今」春上・二

春下・一 秋下・二 賀・一 旅・三 戀一・一 戀三・六 戀四・二 戀五・二 哀・一 雜上・六 雜下・三 四位 「後撰」秋上・二 戀二・一 戀三・一 イ批把左 大臣歌 戀五・二 雜一・一 雜二・一 雜三・二 旅・一 「拾遺」物名・一 戀二・一 雜戀・一 「新古」春下・一 哀・一 旅・二 戀一・二 戀三・一 戀五・二 雜中・三 「新勅」旅・一 戀一・二 戀三・一 戀五・一 雜二・二 「續後撰」戀二・一 戀三・四 戀五・一 雜下・一 「續古」夏・一 戀一・一 戀三・一 戀四・一 「玉葉」賀・一 戀一・一 戀四・一 「續千」戀三・一 戀四・一 雜上・一 「續後拾」戀三・一 戀五・一 「新千」戀一・一 戀二・一 「新拾」夏・一 「新後拾」雜上・一 「新續古」戀二・一

〔三十六人集〕四六　〔同補遺〕三　「古今和歌六帖」

業清　四位前刑部大輔。藤原　「新千」雜中・一　「新拾」戀三・二

業清　五位。前馬助藤原良清男　「新古」旅。一　雜上・一　「新千」

雜中・一

業清　源五位。　「新續古」雜下・一

業速　藤原五位。　「續千」雜中・一

【遊】

遊行女婦土師（ウカレメハニ）　「萬葉」卷一八・二

遊翁　海野。嘉永元年歿六十　「柳園歌集」六六七　長歌五三

旋頭歌五五　今樣四

【遊義門院】

遊義門院　後二條院准后姈子後深草帝御女　「新後撰」春下・一

夏・一　戀二・一　戀四・一　雜上・一　雜中・一

賀・一　「玉葉」秋下・一　戀一・二　戀二・一　戀三

・二　戀五・一　雜五・三　「續千」秋上・一　秋下・

一　旅・一　戀三・一　雜中・一　「風雅」雜下・一

「新千」秋下・一　戀一・三

遊義門院大藏卿　「續拾」戀一・一　春宮大藏卿　「新後撰」

秋下・一　戀二・一　戀四・一

遊義門院權大納言　贈從三位爲子大納言爲世女　「新後撰」春下・

一　秋下・一　戀三・一　戀四・一　戀五・一　遊義門院權大

納言　「玉葉」秋上・一　旅・一　戀一・一　戀四・一

雜三・一　後二條院。權大納言典侍　「續千」春上・一　夏・二　秋

下・一　旅・一　戀一・二　戀二・四　戀三・一　雜

上・一　「續後拾」春上・一　春下・一　夏。一　秋上

・一　秋下・一　冬・一　戀一・一　戀二・一　戀四

・二　雜下・一　哀・一「新千」春上・二　春下・一　夏・一　秋上・二　秋下・一　冬・一　旅・一　釋・一　神・一　戀一・一　戀二・三　戀三・三　戀四・二　戀五・二　雜中・一「新拾」秋上・一　冬・一　旅・一　戀三・二「新後拾」春上・一　夏・一　秋上・一　冬・三「新續古」秋下・一　冬・一　戀二・一　戀三・二　戀五・二　雜上・一

【遊女】

遊女とく「續詞花」戀下・二

遊女戸々「千載」戀三・一

遊女妙「新古」旅・一

遊女初君「玉葉」旅・一

遊女宮木「後拾」雜六・一釋敎歌

【聖】

聖戒　法師一遍門徒「玉葉」釋・一

聖承　法眼「新後拾」雜下・一

聖忠　東大寺東南院大僧正醍醐座主。圓光院基忠公子「新後撰」釋・一

聖兼　東大寺東南院大僧正醍醐座主。猪熊家實子「續拾」雜秋・一　雜下・一「新後撰」戀二・一　戀三・二

聖梵　法師東大寺「後拾」雜一・二

聖勝　勸修寺法印「新後撰」戀四・一　雜下・一「玉葉」雜五・一

聖尊法親王　醍醐遍智院。後一條帝御子「續後拾」釋・一 權僧正聖尊「新拾」戀一・一　雜上・一「新後拾」雜春・一「新續古」冬・一「新葉」春下・二　夏・一　冬・五　戀一・二　戀二・二　戀四・一　雜上・一　雜中・一

雜下・二一

聖統　法師俗名栗島入道　「新千」戀三・一　「新後拾」雜春・一

聖蓮　法師　「新續古」雜中・一

聖憲　叡山法印祇園別當、法印定賞子　「續古」釋・一　「續拾」釋・一

聖寶　東大寺大僧正。恆蔭王子　「古今」物名・一　「後撰」旅・一

聖覺　法印安居院。法印澄憲子　「新勅」雜二・一　「續千」釋・一

【新】

新少將　待賢門院新少將に同じ

新左衛門　中原散位經相女　「後拾」秋上・二　雜二・一

新宣陽門院　「新葉」春上・一　春下・一　夏・二　秋上・一　秋下・二　神・一　戀一・二　戀二・一　戀三・一　戀五・二　雜中・一　雜下・一　哀・二

新宰相　光明院新宰相に同じ

新室町院御匣　「風雅」秋下・一　戀二・一

新陽明門院兵衛佐　左京大夫宗成女　「續拾」戀五・一　「玉葉」戀一・二　「續千」戀一・一　「新千」雜下・一　折句

新熊野　「玉葉」神・一

新待賢門院　阿野公廉（本名實仲）女後村上母　「新葉」春下・一　夏・一　秋上・三　神・一　戀二・一　戀三・一　戀四・二　雜中・一　哀・九

新羅明神　「續古」神・一

【新院】

新院　「金葉」鳥羽院に同じ　「詞花」崇德院に同じ　「新後撰」後伏見院に同じ　「玉葉」同上　「續千」花園院に同じ　「續後拾」同上　「續詞花」崇德院に同じ

新院上野　「續詞花」哀・七

新院中納言典侍　後伏見院中納言典侍に同じ
新院少納言　後伏見院少納言に同じ
新院紀伊　〔續詞花〕秋上・一
新院辨内侍　〔續古〕後深草院辨内侍に同じ

【圓】

圓玄　阿闍梨。肥後守佐藤俊子　〔千載〕旅・一　雜上・一
圓世　律師　〔新後撰〕釋・一　律師　〔新千〕戀一・一　戀三・二　戀五・二　權律師
圓伊　權僧正　〔新後撰〕戀三・二　法師　〔玉葉〕夏・二　〔續千〕旅・一　戀一・一　雜中。一　〔續後拾〕雜下・一　〔風雅〕戀二・一　雜上・一　權僧正　〔新千〕戀五・一　〔新後拾〕雜上・一
圓守　僧正　〔新後拾〕雜秋・一

圓光院入道前關白太政大臣　基忠公に同じ
圓位　西行に同じ
圓松　西行撰集抄清水寺寶日上人とあり　〔後拾〕雜三・一
圓空　上人　〔續拾〕釋・一　〔新後撰〕釋・一　〔玉葉〕釋・二　〔新拾〕雜中・一
圓忠　法眼諏訪　〔新千〕雜下・一　〔新後拾〕雜上・一
圓胤　上人　〔續千〕釋・一　〔新千〕釋・一　〔新拾〕釋・一
圓俊　法印　〔玉葉〕雜五・一
圓昭　法師　〔新後拾〕雜秋・一　〔新續古〕旅・一
圓勇　法印　〔續古〕雜中。一　〔續拾〕雜秋・一　戀五・一　權少僧都　〔新後撰〕釋・一　雜中・一　〔續千〕戀三・一
圓朝　法印　〔玉葉〕雜一・一
圓經　興禮寺三藏院權僧正。範憲僧正子　〔新勅〕雜三・一　法印　〔續後撰〕

年中・一　雜下・一　正信　「續拾」雜上・一

圓照　法師　「新拾」雜上・一

圓道　法印。心法師　「新後撰」雜中・一

圓嘉　東山阿闍梨　「新後撰」雜中・一　「續拾」雜上・一　「續千」旅・一　「新拾」雜上・一

圓範　律師　「續拾」戀五・一

圓蓮　法師　「續千」戀五・一

圓融院　諱守平。天暦帝御子（一六一九―一六五一）　「拾遺」春・一　戀五・二　圓融院御製　「詞花」雜下・一　「新古」秋上・一　戀三・二　雜上・四　雜中・一　「新勅」雜二・一　「續後撰」冬・一　「續古」別・一　哀・一　「續拾」雜下・一　「玉葉」戀二・一　雜一・一　「續千」賀・一　「續後拾」戀二・一　「新千」別・一　「新拾」戀一・一　「新後撰」雜上・一　「新續古」雜上・一

【資　三畫―十畫】

資子内親王　天暦帝御女　「玉葉」戀二・一

資平　正二位中納言。前參議源顯平男　「續後撰」秋上・一　[illegible]朝臣　「續古」春下・一　秋上・一　秋下・一 參議　「續拾」春上・一　秋下・一　雜秋・一　戀四・一　戀五・一　雜上・二 前中納言　「新後撰」戀中・一 按察使　「玉葉」冬・一　戀三・一 前中納言　「續古」雜上・一 按察使　「新千」秋下・一　「新拾」戀四・一 前中納言　「新續古」戀一・一　戀二・一　戀五・一　雜下・二 一首折句。按察使

資仲　從二位中納言。大納言藤原資平男　「後拾」雜四・一 前太宰帥　「金葉」冬・一　戀下・一 前中納言　「新古」神・一　「續詞花」春下・一

資名　正二位大納言。大納言藤原俊光男　「續千」戀三・一　雜上・一　前中納言　「續後拾」戀一・一　「風雅」戀五・一　權中納言　「新千」秋上・一　戀一・一　前大納言　「新拾」釋・一　「新後拾」夏・一　雜春・一

資有　五位皇后宮少進。將監藤原基綱男　「新續古」別・一

資成（シゲ）　五位。美濃守橘義通男。至應德三年出家　「後拾」夏・一

資忠　五位木工頭。中納言藤原資信男。保元三年八月十日任木工權頭　「千載」旅・一　「新續古」戀一・一

資季　正二位大納言。從二位藤原資家男　「新勅」秋上・二　戀四・一　戀五・一　藤原資季朝臣　「續後撰」秋上・一　冬・一　戀三・一　戀四・二　中納言　「續古」秋下・一　冬・二　旅・一　戀五・一　前大納言　「續拾」春下・一　夏・一　冬・一　旅・一　戀三・一　戀五・二　「新後撰」秋下・一　旅・一　戀一・一　戀二・一　戀三・一　「玉葉」春上・一　「續千」神・一　雜上・一　「續後拾」秋下・一　戀三・一　「風雅」夏・一　「新千」戀一・一　「新拾」冬・一　「新後拾」冬・一　戀二・一　「新續古」戀一・一

資宗　四位少將。參議藤原資房男　「新古」冬・一　四位　「續後撰」春中・一

資明　正二位大納言。大納言藤原俊光男　「續千」戀二・一　藤原資明　「風雅」春下・一　冬・一　戀一・一　雜下・一　權大納言　「新千」冬・一　雜中・一　雜下・一　賀・一　按察使　「新拾」旅・一　雜上・一　「新後拾」秋下・一　冬・一　「新續古」秋下・一　戀四・一　戀五・一

資長　正二位中納言。中納言藤原實光男　「續古」神・一　前中納言

資茂　正三位。神祇伯源資方王男　「新千」神・一　神祇伯

資宣　正二位中納言。中納言藤原家光男　〔續拾〕雜秋・一　賀・一　戀五・一　前中納言　〔新後撰〕秋上・一　冬・一　神・一　雜中・一　民部卿　〔玉葉〕雜五・一　前中納言　〔續千〕雜中・一　民部卿　〔續後拾〕雜上・一　〔新千〕戀四・一　〔新後拾〕秋下・一　雜春・一　〔新續古〕戀四・一　雜上・一　雜上・一

資信　正三位中納言。參議藤原顯賀男　〔金葉〕雜下・一　五位

資高　正二位中納言。左中將藤原資氏男　〔新後撰〕戀三・一　前中納言　〔玉葉〕冬・一

【資　十一畫—十九畫】

資基　忠隆に同じ

資通　從二位參議。從二位源濟政男　〔後拾〕夏・一　秋下・一　大貳　〔詞花〕冬・一　〔千載〕別・一　太宰大貳

資運　六位布施彈正忠。三善　〔新千〕別・一　〔新拾〕雜上・一　〔新後拾〕雜下・一　〔新續古〕雜上・一

資教　從一位儀同三司。權大納言藤原時光男　〔新後拾〕秋上・一　旅・一　戀三・一　雜上・一　左衛門督中納言　〔新續古〕春下・一　戀二・一　戀四・一　儀同三司

資康　從一位大納言。大納言藤原時光男　〔新後拾〕夏・一　冬・一　戀一・一　左衛門督　戀四・一　戀五・一　按察使

資盛　從三位小松内大臣平重盛男　〔新勅〕夏・一　前右近中將　〔玉葉〕戀三・一　雜四・一　〔風雅〕戀二・一

資雅　四位。神祇伯源資忠王男　〔新續古〕雜上・一　四位

資隆　四位肥後守。豐前守藤原中兼男。至治承三年　〔千載〕冬・一　釋・一　四位　〔新古〕冬・一　〔玉葉〕釋・一　〔風雅〕雜下・一　〔新續古〕戀二・一　〔續詞花〕春上・一　秋下・一　冬・一

資業　従二位式部大輔。参議藤原有國男。永承六年六月十六日出家　「後拾」賀・三　旅・一 式部大輔　「詞花」雜上・一　「新古」賀・一　「玉葉」雜四・一　「續詞花」春下・一　哀・一　旅・一

資綱　正二位中納言。中納言源親基男　「後拾」秋下・二　旅・一 中納言　「新勅」冬・一　「續古」秋上・一　「新續古」賀・一

資實　正二位中納言。中納言藤原兼光男　「新古」賀・一　雜下・一　「續後撰」春中・一　「續古」雜中・一　賀・一　「續拾」秋上・一　賀・一　「新後撰」戀一・一　「續後拾」雜上・一

資榮　正二位參議。參議源顯資男　「新千」戀二・一 前參議

資賢　正二位大納言。宮内卿源有賢男　「千載」夏・一　神・一 按察使　「新勅」春上・一　戀一・二 前大納言　「續後撰」戀四・一

資衡　四位。藤原　「新後拾」雜秋・一 四位

資廣　従一位大納言。大納言藤原時光男　「新續古」雜上・一 前大納言

資藤　正二位大納言。大納言藤原忠光男　「新續古」雜上・一　雜下・一 權大納言

【義】四畫—九畫

義氏　四位左馬介。上總介源義兼男　「續拾」雜秋・一 四位

義方　四位左中將。參議良峯衆樹男。承平六右少將天慶二藏人八年中將天曆元年卒　「後撰」夏・一 四位

義仁法親王　正親町宮。光嚴帝御子　「新續古」秋上・一

義弘　五位大内左京大夫。多々良　「新後拾」雜春・一　戀三・一 四位

義行　五位。源　「玉葉」雜五・一　「續千」旅・一　戀四・一　「新千」冬・一

義光　源　「續詞花」物。一

義孝　五位右少將。藤原謙德公男。天延二年九月十六卒　「拾遺」雜秋・一　雜賀

○二　〔後拾〕哀・四 三はゆめの内にしめしける歌　戀二・一　雜二

○一　雜六・一 誹諧　〔詞花〕雜下・一　〔續後拾〕哀・一

〔續詞花〕戀上・一　物・一　戲・一

義孝　五位伊勢守。民部大輔藤原敦舒男。至康平二年　〔後拾〕春下・二　雜四

●一　〔新古〕戀一・一　戀三・一　〔新勅〕戀一・一

〔續後撰〕雜中・一　〔續古〕春上・一　雜上・一　〔風雅〕夏・一　〔新千〕春下・一

義政　五位豐田左近將監。陸奧守平重時男　〔續古〕雜上・一　〔續拾〕雜春・一　戀二・一　雜下・一　〔新後撰〕雜上・一

〔玉葉〕雜五・一　〔續千〕雜上・一　〔續後拾〕雜上・一　〔新拾〕秋下・一

義宗　五位赤橋駿河守。武藏守平時長男　〔續拾〕雜秋・一

義定　六位。藤原定通男　〔後拾〕雜三・一

義忠　從三位參議。大和守藤原爲久男　〔後拾〕秋下・一 藤原義忠朝臣　〔詞花〕冬・一　〔千載〕神・一　〔續古〕賀・一　〔續詞花〕哀・二

義忠　四位。畠山源滿則男　〔新續古〕雜中・一 四位

義春　五位。源　〔新拾〕雜中・一　〔新後拾〕雜上・一

義則　五位赤松上總介。律師源則祐男　〔新後拾〕雜春・一

義貞　五位彈正。橘　〔新千〕雜下・一

義持公　從一位勝定院贈太政大臣。鹿苑院源義滿男　〔新續古〕夏・一　釋・二　戀四・一　雜上・一　神・一 勝定院贈太政大臣

義重　正三位。左衞門佐源義將男　〔新續古〕春下・一　冬・一　旅・一　戀九・一　雜中・一 正三位

義重　五位。大江　〔新千〕旅・一

【義　十畫—二十畫】

義家　四位陸奧守。伊豫守源賴義男。嘉承元年七月卒　「千載」春下・一四位 秋下・一　戀一・一　戀四・一　戀五・二　雜中・二

義高　四位左京大夫。左京大夫源氏經男　「新拾」冬・一　雜中・一四位

義將　四位足利治部大輔。修理大夫源高經男　「新後拾」夏・一　秋下・一　冬・一　雜春・一　戀五・一　雜上・二　「新續古」春下・一　秋上・一　戀一・一　戀三・一　戀五・二　雜下・二

義義　四位筑前守。但馬守橘爲義男。治曆三二十七卒　「後拾」冬・一四位

義敎　從一位普光院左大臣、鹿苑院源義滿公男　「新續古」春上・三　春下・一　夏・三　秋上・二　冬・一　賀・一　戀二・一　戀四・二　雜上・一　雜中・一　神・一左大臣

義景　五位秋田城介。右衞門尉藤原景盛男　「玉葉」秋上・一

義詮　正二位寶篋院贈左大臣。等持院源尊氏男（一九九〇―二〇二七）　「風雅」秋上・一　雜中・一源義詮　「新千」春上・一　夏・一　秋上・一　秋下・一　戀一・一　戀四・一　戀五・二　雜中・二　哀・一左近中將　「新拾」春上・一　春下・一　夏・一　秋上・一　秋下・二　賀・一　旅・一　哀・一　戀二・一　戀二・一　戀三・一　戀四・一　戀五・一　雜上・一權大男言　「新後拾」春上・二　春下・一　夏・二　秋上・二　秋下・一　冬・四（一新千雜に在）雜秋・一　戀一・二　戀三・一　戀四・二　雜上・二左大臣贈　「新續古」春上・一　夏・二　秋上・一　秋下・一　戀三・二

義運　大僧正。從一位源滿詮子　「新續古」春上・一　秋下・一　冬・二　戀一・一　戀四・一　哀・一　雜中・一

義圓　法師　「續千」戀四・一

義滿　從一位鹿苑院太政大臣。源義詮男（二〇一八―二〇六八）　「新後拾」春上・二　春下・二　夏・三　秋上・一　秋下・一　冬・二　旅・

一 戀一・二 戀二・一 戀三・一 雜上・一 神。

一 賀・一 左大臣 「新續古」春上。一 秋上・一 秋下・一 雜上。一 雜中・一 神・一 鹿苑院太政大臣

義種 五位尾張左衛門佐。修理大夫源高經男 「新後拾」冬。一 戀一・二 「新續古」秋上。一

義賢 三寶院大僧正。從一位源滿詮子 「新續古」秋下・一

義懷 從二位大納言。藤原謙德公男 「後拾」雜三・一 前中納言 「續古」雜中・一 權大納言

義寶 法印 「新後拾」戀一・一 權律師 「新續古」秋上。一 旅・一 法印

【源　三畫－十畫】

源三位 大膳大夫敦賴女 「新古」哀・一

源心 叡山法印大僧都天台座主 「後撰」秋上・一 雜六・一 誹諧 「詞花」雜上。一 「千載」別・一 「續詞花」別・一

源光綱母 「金葉」雜上。一

源全 叡山法印 「玉葉」雜一・二 「風雅」雜上・一 「新拾」釋・一 「新後拾」雜春・一

源良種妻 「拾遺」別・一

源秀 俗名高駿河守重茂 「新後拾」雜秋・一

源忠 法眼 「新拾」釋・二

源定忠朝臣母 「風雅」戀一。一

源空 上人黑谷法然坊（一一三三－一二一二） 「玉葉」釋・一 「續千」釋・二 「續後拾」釋・一 「新千」釋。一 「新後拾」釋・一

源承 法眼。大納言爲家男 「續拾」雜秋・一 釋・二 「新後撰」秋下・一 冬・二 旅・一 神・一 戀二・二 戀

四•一 雜下•一 「玉葉」釋•一 「續拾」秋上•一
秋下•一 旅•一 神•一 戀三•一 「續後拾」雜中
•一 「新千」春下•一 哀•一 「新拾」冬•一 旅•
一 哀•一 戀一•一 戀四•一 釋•一 「新後拾」
釋•二

源宗子女 右京大夫宗子女 「後撰」別•一

源信 叡山首楞嚴院僧都。卜部正親子(一六〇二—一六七七) 「千載」釋•一 「新古」釋•二 「新勅」釋•一 少僧都 「續後撰」釋•一 權大僧都 「續古」釋•四 「續拾」釋•二 「玉葉」釋•二 「續千」釋•一 「續後拾」釋•一 「新千」釋•一 「新拾」哀•一 釋•一 「續詞花」夏•一

源兼俊母 高階成順女 「後拾」雜三•一 雜五•一

源英明朝臣女 「續古」雜上•一

源重之女 「新古」秋上•一 「續古」夏•一 別•一 雜上•一 「玉葉」夏•一 秋上•一 戀一•一 戀三•二 戀五•一 雜一•一 「續千」春下•一 戀四•一 「續拾」戀一•一 「風雅」秋上•一 「新千」雜上•一 「新後拾」冬•一

源重之母 「拾遺」雜下•一

源倫子 從一位法成寺關白室上東門院母。左大臣雅信公女 「新勅」雜三•一 「續後撰」秋下•一 從一位倫子 「玉葉」雜四•一

源家清女 「新後撰」戀四•一

【源 十一畫—十九畫】

源深 法印 「玉葉」冬•一

源勝 イ深勝 二品法親王。恆明親王男仁譽兄歟 「新葉」春上•一 秋下•一 冬•一 釋•一 戀一•一 戀三•一 戀四•一 雜

上・一　雜中・一
源爲　法印。大納言爲氏子　「新後撰」釋・一
源惠　大僧正。大納言賴經子　「續拾」雜下・一　法印　「新後撰」戀三
。一　雜上・二　雜下。一　前大僧正　「玉葉」秋下・一　雜
四・一　雜五。一　釋・一　「續古」雜下・一　哀・一
「風雅」冬・一　「新千」冬・一
源雅通朝臣女　備前内侍　「後拾」雜一・一
源緣　法師　「後拾」春上・二　秋上・一　「金葉」秋・一
戀下・一
源義久二女　「新後拾」戀一・一
源義國妻　大江有元女　「詞花」雜下・一
源意　法印。法眼源守子　「新千」雜下・二　法印　「新拾」旅・一
雜中・一　法印　「新後拾」雜春・一
源意　法眼　「新續古」雜下・一
源慶　法師　「千載」戀二・一
源賢　法眼入尾。源滿仲朝臣子　「後拾」秋下・一　雜五・一
源賴女　「後撰」戀一・二
源賴定女　「續詞花」冬・一
源賴時女　「新千」哀・一　「新拾」哀・一
源賴家母　從三位忠信女　「後拾」戀一・一
源覺　大僧正　「金葉」雜下・一　連歌
源麗子　京極關白室。右大臣師房公女　「新勅」雜二・一

【隆　一畫—十一畫】

隆　前内大臣。藤隆俊敏。隆資男　「新葉」春上・二　春下・三　夏・
二　秋上・一　秋下・一　冬・一　旅・一　戀一・一
戀三・二　戀四・一　戀五・二　雜下・二

隆氏 四位。參議藤原隆康男 〔續千〕雜上・一 〔新千〕戀四・一

隆方 四位。備中守藤原隆光男。承暦二十二卒 〔後拾〕戀二・一 雜一・二 四位

隆正 大國。明治四年歿八十 〔眞爾園翁歌集〕一一六七 長歌一

○ 旋頭歌一

隆成 五位。大宮大進藤原成保男。治暦二九廿八叙 〔後拾〕秋上・一

隆良 正二位中納言。大納言藤原隆親男 〔玉葉〕神。一 前中納言

隆房 正二位大納言。大納言藤原隆季男（一八〇八—一八六九） 〔千載〕春上。一 旅・一 戀一・一 戀三・一 戀五・一 左兵衞督 〔新古〕賀。一 戀二。一 前大納言 〔新勅〕秋上。一 秋下・一 戀二・一 戀四・二 〔續後撰〕夏・一 秋中・一 戀三・一 〔續古〕戀一・一 戀五。二 〔續拾〕夏。一 冬。一 戀一・一 〔新後撰〕戀一。一 戀二。一 〔玉葉〕戀一・二 戀二。一 戀四・一 〔續千〕冬・一 〔續後拾〕神・一 〔新千〕夏・一 〔新拾〕冬・一 戀二・一 〔新後拾〕雜秋・一 〔新續古〕別・一

隆長 正二位中納言。大納言藤原經長男 〔續千〕戀三・一 右大辨 〔新千〕秋下・一 神・一 戀四・一 前中納言 〔新拾〕戀一・一

隆明 三井寺大僧正。中納言隆家子 〔續後撰〕雜中・一

隆季 正二位大納言。中納言藤原家成男 〔詞花〕雜上。一 藤原隆季朝臣 〔千載〕春下・一 秋上・一 冬。一 神・一 大納言 〔新古〕冬。一 〔新勅〕戀二・一 〔續後撰〕秋上・一 〔續拾〕春上。一 〔新拾〕神。一 〔新續古〕雜中・一 〔續詞花〕神・一 戀上。一

隆直 正二位大納言。中納言藤原隆郷男 〔新續古〕秋下。一 前大納言

隆昌 大中臣。祭主。 〔新葉〕雜中・一

隆信 四位。長門守藤原爲經男。至壽永二年 〔千載〕秋上・一 秋下・一

冬•一　戀二•一　戀三•一　戀四•一　釋•一四位
〔新古〕冬•一　別•一　雜上•一　〔新勅〕冬•一　釋
•一　戀二•一　戀三•一　戀五•一　雜一•一　〔續
後撰〕夏•一　秋上•一　〔續古〕春上•一　神•二
別•一　〔續拾〕春上•一　戀三•一　〔新後撰〕春下
•二　冬•一　別•一　戀一•二　〔玉葉〕秋下•一
冬•一　賀•一　雜上•一　〔續千〕春下•二　雜體旋頭
一。物名一　〔續後拾〕春上•一　物名•一　哀•一　〔風
雅〕夏•一　戀一•一　戀二•一　戀九•一　雜上•三
雜下•一　〔新千〕夏•一　冬•七　旅•一　戀四•一
雜下•一物名　賀•一　〔新拾〕春下•一　別•一　哀•
二　雜上•一　〔新後拾〕旅•一　〔新續古〕春上•一
夏•一　秋上•一　旅•一　戀二•一　〔續詞花〕雜上
•一

隆俊　正二位中納言。大納言源隆國男　〔續古〕雜下•一太皇太后宮大夫

隆昭　律師　〔續古〕戀二•一

隆祐　四位。侍從。從三位藤原家隆男　〔新勅〕春下•一　戀三•一九位
〔續後撰〕春中•二　秋上•一　雜中•一四位　〔續古〕
冬•一　旅•二　戀上•一　雜中•一　雜下•一　〔續
拾〕春上•一　春下•一　秋上•一　雜春•一　雜上
•一　〔新後撰〕夏•一　秋上•一　冬•一　〔玉葉〕夏
•一　雜一•二　〔續千〕秋上•一　冬•一　〔續後拾〕
春上•一　哀•一　雜上•一　〔風雅〕夏•一　秋上•
一　〔新千〕冬•一　雜中•一　秋下•一　戀二•一
〔新拾〕春上•一　戀二•一　〔新後拾〕春上•一　〔新
續古〕戀三•一　哀•一　雜下•一

隆家 正二位中納言。中關白殿藤原道隆男 〔後拾〕旅・一 雜三・一 中納言 〔新古〕別・一

隆時 四位因幡守、左衛門佐藤原清綱男。嘉承元年卒 〔新古〕春上・一 四位

隆泰 五位若狹守。源 〔續千〕雜下・一

隆清 四位。正二位藤原隆敎男 〔風雅〕戀五・一 四位

隆國 正二位大納言。大納言源俊賢男（一六六四―一七三七）今昔物語 〔後拾〕哀・一 前大納言 〔千載〕春上・一 〔新古〕賀・一 〔續古〕哀・一 太皇太后宮大夫 〔玉葉〕雜上・二 前大納言

隆敎 正二位。大藏卿藤原隆博男 〔新後撰〕秋上・一 冬・一 戀三・一 從三位 〔玉葉〕春下・一 冬・一 戀二・一 戀四・一 雜一・二 大藏卿 〔續後拾〕夏・一 戀四・一 雜中・二 侍從 〔風雅〕夏・一 秋上・一 冬・一 戀三・一 雜中・一 雜下・一 釋・一 賀・一 正四位 〔新千〕春上・一 春下・一 秋下・二 冬・一 戀一・一 戀三・一 雜上・一 雜中・二 〔新拾〕秋上・一 冬・二 戀一・二 戀三・一 〔新後拾〕秋下・一 戀四・一 神・一 〔新續古〕秋下・一 賀・一 戀二・一 哀・一

隆康 正二位參議。大納言藤原隆行男 〔續拾〕秋上・一 修理大夫 〔玉葉〕冬・一 前參議 〔續千〕戀三・一 〔續後拾〕戀四・一 〔風雅〕秋上・一

隆專 法師。從三位家隆子 〔續古〕釋・一

隆基 從三位。祭主神祇權大副大中臣隆實子 〔新葉〕神・一 雜下・一

隆朝 從三位。侍從藤原隆敎男 〔風雅〕秋下・一 戀五・一 侍從 〔新千〕秋下・一 雜上・一 賀・一 兵部卿 〔新拾〕雜

【隆】 十二畫―十九畫

上。一侍従

隆勝 醍醐僧正水本報恩院。大納言隆行子 「風雅」雜上•一

隆恵 法師 「詞花」戀上•一 「續詞花」戀上•一

隆博 従二位。従二位藤原行家男 「續古」秋下。一五位 「續拾」夏。一 冬•一 雜秋•二 戀三•一 雜下。一四位 「新後撰」春上•一 夏。一 冬•一 別•一 旅。一 釋•一 戀一。一 戀二•一 戀三•一 雜下•一大藏卿 「玉葉」秋上。一 秋下•一 冬。三 戀四•二 雜四•一 雜九•二従三位 「續千」秋下•三 戀二•一 戀三•二 戀四•二大藏卿 「續後拾」秋下•一 賀•一 戀三•一 雜下•一 釋•一 「風雅」春下•一 秋中•一 冬•一 雜下•一 賀。三従三位 「新千」秋上•一 秋下•一 戀二•一 戀四•一 戀五•一 「新拾」秋下•一 旅•一 戀一•二 戀三。一大藏卿 「新後拾」冬•一従二位 「新續古」夏•二 戀五•二 雜中•二大藏卿

隆敦 従二位中納言。大納言藤原隆右男 「新續古」戀五。一兵部卿

隆聖 律師 「新古」冬•一

隆経 四位美濃守。左中辨藤原頼経男。至延久三年 「後拾」春上。二 戀二•一 「金葉」秋•二 冬。一 「詞花」雜下•一

隆縁 叡山法師。但馬守隆忠子 「詞花」秋•一 戀上•二 「續詞花」春上•一 秋上•一 戀上•一

隆縁 信部 「新後拾」雜上•一

隆資 五位武藏守イ隆賢。藤原頼政子(イ安隆子)至永保三 「後拾」夏•一 戀一•一 「金葉」春•一 雜上•一 「續詞花」春下•一 夏•一

隆資 藤原 〔新葉〕秋上・一 秋下・一 戀二・一 戀三・一 戀五・一 哀・四

隆源 正僧 〔新續古〕夏・一

隆源 叡山阿闍梨。若狹守藤原通宗子 〔金葉〕春・一 秋・一 冬・一 戀下・一 〔詞花〕秋・一 〔千載〕秋上・一 冬・一 戀五・一 〔玉葉〕秋下・一 〔新千〕戀一・一

隆綱 正三位參議。大納言源隆國男 〔後拾〕戀三・一 左近中將 〔新古〕旅・一

隆淵 法印 〔續千〕釋・一 權僧都 〔續後拾〕冬・一 雜四・二 法印 〔風雅〕雜上・一 〔新千〕秋下・一 戀三・一 雜上・二 〔新拾〕秋上・一 戀三・一 〔新後拾〕雜春・一

隆衡 正二位大納言。大納言藤原隆房男 〔新勅〕春上・一 雜一・一 雜二・一 按察使 〔續後撰〕雜中・一 〔續古〕雜上・一 雜中・一 〔續拾〕釋・一 〔新後撰〕春上・一

隆憲 法印 〔風雅〕雜下・一

隆辨 三井寺知意寺大僧正。大納言隆房子 〔續後撰〕釋・一 雜一・一 法印 〔續古〕釋・二 雜中・一 雜下・一 大僧正 〔續拾〕秋上・一 雜春・一 雜秋・一 旅・一 雜中・一 釋・一 神・一 〔新後撰〕春下・一 別・一 釋・一 〔玉葉〕旅・一 雜一・一 〔續千〕戀四・一 〔續後拾〕雜上・一 〔新千〕雜上・一 賀・一 〔新拾〕釋・一 〔新後拾〕夏・一 〔新續古〕雜一・一

隆賴 六位大學頭。惟宗 〔詞花〕冬・二

隆親 正二位大納言。大納言藤原隆衡男 〔新勅〕秋上・一 秋下・一 大權納言 〔續後撰〕戀二・一 戀四・一 雜下・一 大納言

「續古」夏・一　冬・一　神・一　雜上・二　兵部卿　「續
拾」雜春・二　雜秋・一　賀・二　戀一・一　戀二・一
「新後撰」秋上・二　戀九・一　「玉葉」秋下・一　「續
千」冬・一　「風雅」旅・一　「新千」戀四・一　「新後
拾」戀四・一　「新續古」戀一・一

隆親　五位河内守。左兵衞佐源隆敎男。自永萬元年至壽永二年　「千載」戀三・一
戀九・一　雜上・一

隆覺　律師　「玉葉」釋・一　「新後拾」戀二・一

隆覺　阿闍梨。大納言隆國子　「金葉」戀上・一

【道　四畫—八畫】

道元　法師　「新後拾」雜春・一

道玄　叡山天台座主青蓮院大僧正。普光院良實子　「續古」哀・一　「續拾」
秋下・一　雜春・一　雜秋・一　旅・一　雜上・一
釋・一　「新後撰」春下・一　秋上・一　冬・一　釋・
二　神・二　戀一・一　雜上・一　雜中・四　雜下・
二　「玉葉」春下・二　秋上・二　冬・一　雜一・二
釋・一　「續千」釋・二　戀一・一　戀四・一　雜上・
一　雜中・二　「續後拾」旅・一　釋・一　神・一
「風雅」秋中・一　秋下・一　冬・一　雜中・一　雜下
・四　釋・一　「新千」春上・一　夏・一　釋・二　神
・二　「新後拾」釋・一　「新續古」釋・一　戀二・一
雜中・一

道因　法師俗名右馬助敦頼。治部丞藤原清孝子　「千載」春上・一　春下・
一　夏・一　秋下・三　冬・四　旅・一　戀二・三
戀三・一　戀四・一　雜上・一　雜中・一　雜下・二
誹諧　「新古」秋上・一　冬・一　別・一　戀二・一　「新

勅〕旅・一　戀一・一　戀五・一　〔續後撰〕戀二・一
〔續古〕旅・一　〔續拾〕春上・一　〔新後撰〕夏・一
〔玉葉〕夏・一　秋下・一　〔續千〕春上・一　〔續後
拾〕秋下・一　〔風雅〕春上・一　春下・一　旅・一
〔新千〕雜上・一　〔新拾〕雜上・一　〔新後拾〕戀一・
一

道全　法師　〔風雅〕旅・二

道我　仁和寺無動院權僧正。權律師聖尋子　〔續千〕旅・一　釋・一　法印　〔續
後拾〕釋・一　〔新千〕冬・一　釋・一　雜下・一　哀
・二　權僧正　〔新拾〕別・一　〔新續古〕釋・一　戀五・一

道足　物部　〔萬葉〕卷二〇・二

道成　四位備前守。從三位源則忠男。至長元九卒　〔後拾〕哀・一

道成　法師　〔新後拾〕旅・一

道良　土師　〔萬葉〕卷一七・一

道良　從一位九條左大臣。普光園藤原良男　〔續古〕春下・一　九條左大臣
〔續拾〕冬・一　戀五・一　〔新後撰〕雜中・一　〔玉
葉〕夏・一　〔續千〕春下・一

道助　僧正　〔新續古〕釋・一

道助法親王　二品御室。後鳥羽帝御子　〔新勅〕春下・二　夏・一
秋上・一　秋下・一　冬・二　雜一・二　雜二・二
入道二品親王道助　〔續後撰〕春中・一　春下・一　戀二・一
戀三・一　雜上・一　雜中・一　旅・一　〔續古〕春上
・二　道助法親王　〔續拾〕春上・一　春下・一　夏・一　秋
下・一　旅・一　戀三・一　入道二品親王道助　〔新後撰〕冬・一
雜上・一　〔玉葉〕夏・一　雜一・一　雜五・一　〔續
千〕秋下・一　〔續後拾〕秋上・一　〔新千〕戀四・一

〔新拾〕冬・一　戀一・一　〔新後拾〕冬・一　〔新續古〕神・一

道昌 法師　〔新拾〕雜中・一

道政 法師俗名和田近江守　〔新千〕戀三・一

道長 從一位法成寺入道前攝政太政大臣。藤原兼家男（一六二六―一六八七）　〔後撰〕春上・一　冬・一　雜五・三　入道前太政大臣　〔詞花〕賀・一　〔千載〕雜上・一　雜中・一　法成寺入道前太政大臣　〔新勅〕神・一　釋・一　法成寺入道前攝政太政大臣　〔續後撰〕秋中・一　釋・二　戀四・二　〔續古〕神・一　〔續拾〕賀・一　雜下・一　〔玉葉〕戀四・一　釋・一　賀・一　〔續後拾〕雜中・一　〔風雅〕釋・一　〔新千〕別・一　哀・一　賀・一　〔新拾〕賀・一　〔新後拾〕夏・一 此歌新千賀の部にあり　〔續詞花〕夏・二　秋上・一　戀中・一　雜上・一　賀・一

道命 阿闍梨天王寺別當。大納言道綱子　〔後拾〕春上・一　夏・三　秋上・一　戀一・五　戀四・二　雜一・三　雜四・一　〔詞花〕春・二　夏・一　秋・二　戀上・三　雜下・一　〔千載〕春下・一　夏・一　秋上・一　秋下・一　別・一　哀・一　雜上・一　雜中・一　雜下・一　〔新古〕春上・一　別・一　雜中・二　〔續後撰〕雜下・一　〔續古〕哀・二　雜下・一　〔玉葉〕雜三・一　雜四・一　〔續千〕冬・一　〔續後拾〕夏・一　雜中・一　〔風雅〕春上・一　冬・一　〔新千〕旅・一　雜中・一　〔新拾〕夏・一　哀・一　雜中・一　〔新後拾〕春下・一　〔新續古〕旅・一　哀・一　〔續詞花〕秋下・一　哀・二　雜上・一　雜中・一　雜下・二　戯・二

道明王 滿仁親王御子　〔新續古〕戀一・一　雜上・一

道性 大僧正醍醐座主。龜山院御子 〔新後撰〕春下。一 戀三・一 雜中・一 〔續千〕春上・一 秋上・一 戀三・一 雜上・一 雜中・一 哀・二 〔續後拾〕春下・一 秋下・二 戀三・一 雜中・一 哀・一 〔新千〕秋上・一 戀一・一 雜上・一 〔新拾〕春下・一

道性法親王 以仁王（號高倉宮）御子 〔千載〕秋下・一 雜上・一

道性法親王

【道 九畫—十一畫】

道珍 三井寺南就院大僧正。圓光院基忠公子 〔玉葉〕秋下。一 雜一・一 釋・一

道昭 三井寺常住院大僧正。後光明峯寺家經公 〔玉葉〕旅・一 戀一・一 雜五。一 〔續千〕夏・一 冬・一 雜中。一 哀・一 〔續後拾〕雜上・一 釋・一 〔風雅〕旅・一 雜下・一 〔新千〕冬・一 雜上・一 雜中・一 〔新拾〕雜中・一 〔新續古〕旅・一

道洪 法師俗名四郎左衛門尉時盛。秋田城介泰盛子 〔續拾〕冬・一 雜秋・一 戀三・一 雜上・一 〔新後撰〕戀六・一 雜上・一 雜中・二 雜下・一 〔玉葉〕雜五・一 〔續千〕戀二・一 雜上・一 〔續後拾〕冬・一 旅・一 戀四・一 〔新千〕秋上・一 戀二・一 〔新後拾〕雜・一

道甚 法師 〔新後拾〕雜春・一

道英 法師 〔新後拾〕雜春・一

道信 四位左中將。藤原恆德公男。正曆五年廿三卒 〔拾遺〕哀・二 四位 〔後拾〕春上・一 別・二 戀一・一 戀二・四 戀三・一 戀四・一 雜二・一 〔詞花〕戀上・一 〔千載〕春上・一 哀・二 雜上・一 雜中・一 〔新古〕春下・一

秋下・一　冬・一　哀・二　戀一・一　戀三・一　戀五・一　雜下・一　〔新勅〕秋上・一　秋下・二　戀一・一　戀二・一　戀五・一　雜二・一　〔續後撰〕戀三・一　〔續古〕釋・一　戀四・一　〔續拾〕旅・一　雜上・一　〔玉葉〕戀一・一　戀四・一　戀五・一　〔風雅〕冬・一　戀四・二　雜中・二　〔新千〕賀・一　〔新拾〕夏・一　〔新後拾〕戀一・一　〔續詞花〕春上・一　冬・一　戲・一

道風　四位。大貳小野葛絃男（一五五五—一六二六）三蹟の一　〔後撰〕秋上・一　戀四・三　戀五・一　四位

道時　橘　〔續詞花〕旅・一

道兼　正二位粟田關白太政大臣。東三條兼家男　〔拾遺〕哀・一・一　粟田右大臣　〔續古〕雜上・一　粟田贈太政大臣

道家　從一位光明峯寺入道前攝政左大臣。御京極良經公男　〔新勅〕春上・二　春下・一　夏・三　秋上・一　秋下・一　冬・四　賀・五　戀一・一　戀三・三　戀四・二　戀五・一　雜二・一　前關白　〔續後撰〕春上・三　春中・一　春下・一　秋上・一　秋下・一　冬・一　釋・二　戀一・二　戀二・一　戀五・一　雜上・一　雜中・一　旅・一　賀・二　入道前攝政左大臣　〔續古〕春上・三　秋上・二　秋下・一　冬・四　神・一　釋・一　戀一・一　戀二・二　戀五・一　哀・二　雜上・一　雜中・一　光明峯寺入道前攝政左大臣　〔續拾〕春上・一　春下・一　秋上・一　秋下・一　旅・二　戀二・一　戀三・一　戀四・二　戀五・二　雜上・二　雜下・一　〔新後撰〕春上・二　秋上・一　冬・二　旅・一　戀二・二　〔玉葉〕秋上・一　秋下・二　冬・一

〔續千〕夏・二　秋上・一　秋下・一　戀三・一　戀四・二　雜中・二　〔續後拾〕春上・二　秋下・一　〔風雅〕春中・二　冬・一　旅・一　雜上・一　雜中・一　雜下・二　〔新千〕春上・一　春下・一　夏・一　冬・一　戀四・二　〔新拾〕春下・二　〔新後拾〕春下・一　冬・一　戀三・一　〔新續古〕賀・一　戀一・二

道眞　贈正一位參議是善男。（一五〇二—一五六三）菅家文草　〔古今〕秋下・一　旅・一菅原朝臣　〔後撰〕春中・一　旅・二菅原朝臣　〔拾遺〕別・一　雜上・二　雜春・一　雜戀・一贈太政大臣　〔新古〕秋下・一　雜上・三　雜下・一二菅贈太政大臣　〔續後撰〕春中・一　雜上・一　〔續古〕神・三北野御歌　〔玉葉〕神・一　〔新拾〕神・一　〔新續古〕神・一

道祖王　〔萬葉〕卷一九・二

道清　法印石清水別當。法印幸清子　〔新勅〕雜一・一

道敎　正二位三緣院前關白左大臣。後一音院藤原房實男　〔風雅〕賀・一入道前關白左大臣　〔新千〕戀五・一三緣院前關白左大臣

道深法親王　二品光臺院。（又號開田院御室）後高倉院御子　〔新續古〕釋・一

冬・一　〔續後拾〕夏・一　秋上・一　〔風雅〕雜下・一　〔新千〕冬・二　雜中・一　〔新拾〕春下・一　戀一・一　〔新後拾〕雜春・二　〔新續古〕冬・二　旅・一　戀一・二　戀五・二　雜中・一　雜下・一

道基　法師　〔續千〕釋・一　〔續後拾〕釋・一

道基　三井寺實相院大僧正。後普光園院良基公子　〔新後拾〕雜下・一　〔新續古〕雜中・一

【道　十二畫—二十畫】

道勝　法師　〔新後拾〕戀二・一

道順　大僧正醍醐座主。左小將通能子　〔新後撰〕釋•一　權少僧都　〔續千〕夏•一　雜上•一　雜下•一　大僧正　〔新千〕雜上•一　雜下•一　〔新續古〕冬•一

道智　法師　〔新拾〕戀五•一

道喜　法師。土岐源光行末葉。國氏孫國成子。俗名賴數　〔新後拾〕戀一•一

道雄　法師　〔新後拾〕雜下•一

道雅　從三位。帥內大臣藤原伊周男　〔後拾〕戀三•五　左京大夫　〔詞花〕冬•一　雜上•一

道雅　僧正　〔新續古〕釋•一

道瑜　三井寺大僧正撿挍。普光園良實公子　〔新後撰〕冬•一　戀三•一　〔玉葉〕雜一•一

道然　上人。有家公子　〔續古〕釋•一

道義　法師。俗名島津下野守高親　〔續千〕戀三•一

道意　仁和寺勝寶院大僧正。後西園寺實兼公子　〔續千〕雜下•二　〔續後拾〕釋•一　〔風雅〕夏•一　冬•一　雜下•二　〔新千〕冬•一　戀四•一　雜中•一　雜下•一　〔新拾〕戀三•一　〔新後拾〕冬•一　〔新續古〕春下•一　秋上•一　秋下•一　釋•一　雜上•一　雜中•一

道經　五位。和泉守。近江守藤原有佐男　〔金葉〕賀•一　戀上•一　〔詞花〕別•一　戀下•一　〔千載〕夏•二　秋上•二　戀四•一　〔新古〕戀三•一　雜上•一　神•一　〔續後撰〕戀一•一　戀二•一　〔續拾〕戀二•一　雜上•一　〔新後撰〕神•一　〔新續古〕雜上•一　〔續詞花〕秋上•二　神•一

道圓　法師。俗名伊賀守。詩家。小田筑前守藤原知家子　〔續古〕戀三•一　雜下•一　〔續拾〕雜中•一

道嗣 從一位後深心院前關白後岡屋藤原基嗣公男 〔風雅〕夏・一 冬・一
右近大將 〔新千〕春上・一 夏・一 戀一・一 戀三・一
雜中・一 右大臣 〔新拾〕春上・一 春下・一 秋上・一
秋下・一 戀四・二 戀五・一 雜上・一 雜中・一
前關白左大臣近衞 〔新後拾〕春上・二 春下・一 夏・二 秋
上・一 秋下・一 冬・一 雜春・二 雜秋・四 旅
・一 戀一・二 戀三・一 賀・一 前關白近衞 〔新續古〕
春上・一 春下・一 冬・一 戀二・二 雜中・一
後深心院前關白左大臣
道朝法親王 上乘院。後圓融帝御子 〔新續古〕秋下・一 雜下・
一
道誓 法師俗名畠山式部大輔清國。尾張守源家國子 〔新千〕旅・一
道慶 三井寺常住院大僧正。後京極良經子 〔續古〕旅・一 〔新續古〕秋
下・一 釋・一
道綱 正二位大納言。法興院關白藤原兼家男 〔續拾〕雜上・一 〔詞花〕
戀上・一 〔新勅〕戀二・一 右大將 〔玉葉〕戀四・一 前右近大
將 〔續詞花〕秋上・一
道煕法親王 青蓮院。後深草帝御子 〔新千〕賀・一
道賢 法師俗名細川將監義顯 〔新千〕雜下・一
道潤 叡山本覺院大僧正天台座主。普光園良實公子 〔新後撰〕釋・一 〔玉葉〕
春下・一 夏・一 冬・一 雜一・一
道憲 五位少納言。加賀掾藤原實兼男 〔續後撰〕戀二・二
道曉 法師 〔新拾〕戀二・一
道濟 五位筑後守。佐渡守源方國男。寛仁三年卒 〔拾遺〕雜上・一 〔後拾〕
春上・二 春下・一 夏・一 秋上・三 秋下・一
冬・一 別・三 旅・二 戀一・一 戀四・三 雜二

•一　雜三•一　雜四•一　雜六•一　誹諧　〔金葉〕冬•一　〔詞花〕春•一　夏•一　秋•一　戀上•一　雜上•二　〔千載〕哀•一　〔新古〕夏•一　秋上•一　秋下•一　哀•一　雜上•一　〔續後撰〕神•一　〔續古〕旅•一　雜上•一　〔續拾〕夏•一　〔玉葉〕夏•一　賀•一　雜四•一　〔續千〕春上•一　夏•一　〔續後拾〕春下•一　神•一　〔風雅〕春中•一　〔新千〕別•一　賀•一　〔新拾〕春下•一　秋下•一　雜上•一　〔新續古〕冬•一　賀•一　〔續詞花〕春上•一　春下•一　夏•一　秋上•三　秋下•二　賀•二　哀•一　雜上•二　雜中•一　雜下•一

道應　法師　〔新後拾〕雜秋•一

道廣　生部　〔萬葉〕卷二〇•一

道灌　太田(二〇九二―二一四六)　〔慕景集〕三四

道擧　法師俗名佐々木佐渡判官高氏。左衛門尉宗氏子　〔新續古〕雜上•一

道覺法親王　座主青蓮院。後鳥羽帝御子　〔續後撰〕雜上•一　雜中•一　雜下•一　入道親王道覺　〔新後撰〕秋上•一　冬•一　〔續後拾〕雜下•一　〔新千〕哀•一　〔新後拾〕雜上•一

道寶　勸修寺大僧正。八條左大臣良輔子　〔續拾〕雜春•一　雜下•一　釋•一　〔新後撰〕釋•一　〔續千〕釋•一

【經　三畫―七畫】

經久　四位。神主賀茂氏久男　〔新後撰〕戀三•一　雜上•一　〔玉葉〕雜一•二　〔續千〕戀九•一　〔續後拾〕戀二•二　〔風雅〕　雜上•一　〔新千〕冬•一　戀三•一　賀•一　〔新拾〕神•一

經方 從三位中納言。後勸修寺內大臣藤原經顯男 〔新千〕戀二・一 權中納言
〔新葉〕戀四・一 雜上・一
經氏 五位。吉良上總介。左馬助源義繼男 〔新後拾〕秋上。一 雜春・一
雜秋・一 〔新續古〕春下・一 戀二・一 戀四・一
雜中・一
經尹 從二位。從二位藤原經朝男 〔新後撰〕戀二・一 宮內卿 〔玉葉〕
雜一・一 從二位 〔續千〕戀二・一 〔續後拾〕雜下・一
〔新千〕戀二・一 〔新拾〕雜中・一
經尹 五位。伊賀守 藤原懷經男 〔新拾〕別・一
經正 四位但馬守。平イ經政 〔新勅〕冬・一 四位 〔玉葉〕春下。
一 夏・二 戀四・一 釋・一 〔新拾〕秋下・一
經平 正二位中納言。衣笠內大臣藤原家良公男 〔續後撰〕冬。一 藤經平朝臣
〔續古〕春下・一 秋上・二 秋下・一 戀一・一 戀
三・一 雜中。一 右近中將 〔續拾〕春下・一 秋上・二
戀三・一 雜中・一 釋・一 權中納言 〔新後撰〕夏・一
戀三・一 〔玉葉〕秋上・一 冬・一
經平 從一位後淨妙寺左大臣。淨妙寺藤原家基男 〔玉葉〕春下・一 內大臣
〔風雅〕雜中・一 淨妙寺 〔新千〕戀二・一
經因 法師 〔千載〕雜上・一
經行 五位。源 〔新千〕哀・一
經臣 五位肥前守。大學頭藤原佐高男 〔拾遺〕秋・一
經光 正二位中納言。權中納言藤原賴資男 〔續後撰〕賀・一 權中納言 〔續古〕
神。一 民部卿 〔續拾〕賀・一 〔新後撰〕賀・二 〔玉葉〕
賀・一 前中納言
經任 正二位大納言。太宰帥藤原爲經男 〔續拾〕春下。一 旅。一 賀
・二 戀三・一 雜下・一 權大納言 〔新後撰〕夏・一 釋

・二　神・一　戀三・一　雜中・一　賀・一　前大納言〔玉葉〕戀二・一　〔續千〕雜中・一　〔新續古〕春上・一　雜下・一

經任　五位越後守。木工頭源政職男。至長元二　〔後拾〕雜三・一

經有　從一位贈左大臣。大納言源重資子　〔新續古〕雜上。一　四位

經有　從三位。中納言藤原雅孝男　〔續後拾〕戀三。一　四位　〔新千〕戀一・一　從三位　〔新拾〕秋上・一

經有　從一位贈左大臣に同じ

經成　從三位中納言。大納言藤原經豐男　〔新續古〕雜上。一

經成　四位常陸守。美濃守高階業敏男。承德三七廿四卒　〔金葉〕春・一

【經　八畫―十畫】

經直　五位。荒木田　〔新後拾〕神。一

經季　從三位參議。大納言藤原經繼男　〔新千〕雜上・一　前參議

經宗　從一位大炊御門左大臣。大納言藤原經實男　〔千載〕賀・一　左大臣　〔新勅〕賀・一　大炊御門左大臣

經定　四位。藤原　〔續千〕戀五・一　四位

經定　四位左中將。參議藤原親定男　〔續後撰〕秋上・一　四位

經忠　正二位中納言。藤原師信朝臣男　〔金葉〕春上。一　夏・一　戀上・一　戀下。二　左京大夫　〔千載〕雜上・一　中納言　〔新勅〕秋下。一　〔續詞花〕秋下・一　雜上・一

經忠公　從一位堀川關白左大臣。岡本藤原宗平男　〔新續古〕戀五。一　堀川前關白左大臣

經長　正二位大納言。中納言源通方男　〔金葉〕別・一　大納言

經長　四位施藥院使兵庫頭。圖書頭丹波經基男　〔續拾〕雜上。一　五位　〔新後撰〕戀四。一

經房　正二位大納言。右中辨藤原光房男　〔千載〕冬。一　戀二・一　戀

四・一　神。一權中納言　〔續後撰〕秋下。一前大納言　〔續拾〕戀一・一　〔新後撰〕夏・一　〔玉葉〕雜四・一　〔續千〕秋上・一　〔續後拾〕神・一　〔風雅〕夏・一　秋中。一

經房　四位文章博士。源　〔拾遺〕雜下・一四位

經則　五位。中原　〔金葉〕秋・一

經宣　從二位參議。大納言藤原經繼男　〔續千〕戀九・一四位　〔新千〕雜上・一前參議　〔新拾〕秋上・一　戀四・一　〔新後拾〕戀五・一

經重　正二位ど納言。內大臣藤原經顯男　〔新後拾〕戀一・一權中納言

經重　四位陸奧守。播磨守高階明賴男　〔新古〕別・一四位　〔續詞花〕別・二　旅・一

經信　正二位大納言。中納言源通方男（一六七一―一七五七）〔源經信集〕一二六〔後拾〕春上・一　賀。一　戀三。一　戀四・一　雜四・二民部卿　〔金葉〕春・四　夏・四　秋・八　冬・五　賀・一　戀下・三　雜上・二大納言　〔詞花〕賀。一　〔千載〕冬・一　〔新古〕春下・二　夏・四　秋上。二　秋下・二　冬・一　賀・一　旅・四　雜上・二　雜下・一　〔續古〕春上・一　春下・一　秋下。一　冬・二　〔續拾〕夏・一　〔玉葉〕春上・一　春下・一　雜三・一　〔續千〕春下。一　秋下・一　戀二。一　〔續後拾〕夏・一　秋上・一　〔風雅〕春下・二　〔新千〕秋上・一　冬・一　〔新拾〕春下。二　秋上・一　哀・一　雜上。一　雜中・一　雜下。一短歌　〔新後拾〕春下・一　雜春・一　別・一　〔新續古〕秋下・一　賀。一　旅。一　雜上・一　雜下・一短歌　〔續詞花〕春上。一　春下・一　秋上。一

冬・四　雜上・一

經信卿母　大納言經信母に同じ　〔六女集〕二〇

經高　權中納言。藤光任男。（光任在同集作者先祖後可載之）　〔新葉〕春上・一　春下・一　夏・一　秋上・一　冬・二　戀一・四　戀二・二　戀三・一　戀五・一　雜上・一　雜中・一　哀・一

經泰　惟宗　〔續詞花〕戲・一

經乘　法師。仁和寺阿闍梨　〔新後撰〕雜下・一

經家　正二位中納言。中納言藤原定賴男　〔新續古〕賀・一

經家　從二位。內大臣藤原基家男　〔續後撰〕雜中・一　右近中將　〔續古〕戀二・一　〔續拾〕秋下・一　雜春・一　〔新續古〕春上・一

經家　正三位。刑部卿藤原重家男　〔千載〕春下・一　夏・一　戀五・一　四位　〔新古〕戀二・一　釋・一　正三位　〔新勅〕戀一・一　〔續拾〕戀二・一　〔風雅〕冬・一　旅・一　〔新拾〕賀・一　〔新續古〕戀一・一

【經　十一畫—二十三】

經清　四位彈正大弼。藤原　〔新後撰〕戀五・一　四位　〔續千〕戀一・二　雜上・一　〔續後拾〕戀二・一　〔新拾〕戀三・一

經國　五位住吉神主。神主津守國長男　〔新勅〕戀五・一　〔續後撰〕雜上・一　〔續拾〕秋上・一　秋下・一　旅・一　〔新後撰〕秋下・一　戀六・一　賀・一　〔續千〕神・一　雜上・一　〔續後拾〕旅・一　〔新千〕雜中・一　〔新後拾〕秋下・一

經敎公　從一位報恩院入道前關白。三緣院藤原道敎公男　〔風雅〕戀二・一　左近大將　〔新千〕春上・一　夏・一　戀二・一　關白左大臣　〔新拾〕

春下・一 夏・一 冬・一前關白左大臣九條 〔新後拾〕夏・一
秋上・二 戀二・二前關白大閤 〔新續古〕秋下・一 雜中
・一後報恩院入道前關白左大臣

經基王 五位上野介〔イ正四位上鎭守府將軍兵部少輔〕貞純親王御子。天慶八年五月十五日敍正五位下。
天德二十一廿四卒四十五 〔拾遺〕戀一・一 戀四・一

經章 四位東宮亮。伊豫守平範國男。至延久二年 〔後拾〕春上・一 戀一
・一四位

經草 高階 〔續詞花〕哀・一 戀上・一

經深 法印 〔新千〕戀五。一大僧都 〔新拾〕哀・一 神・
一 雜中・一法印

經深 僧正 〔新後拾〕雜秋・一

經通 正二位大納言。大納言藤原泰通男 〔新古〕雜上・一藤原經通朝臣 〔新
續古〕夏・一前大納言

經通 四位。藤原 〔金葉〕春・一四位

經通 從一位後芬陀利花院關白。芬陀利花院藤內經公男 〔風雅〕秋中・一 雜
下・一前關白左大臣通 〔新千〕秋下・一 戀三・一 雜中・
一前關白左大臣 〔新後拾〕旅。一後芬陀利花院前關白左大臣

經朝 從三位。從三位藤原行能男 〔續後撰〕冬・一四位 〔續古〕戀五
・二從三位 〔續拾〕賀・一 戀一・一正三位 〔新後撰〕雜
上・一 〔玉葉〕冬・一 〔續千〕戀四・一 〔風雅〕冬
・二 〔新拾〕春下・一 〔新後拾〕旅・一 〔新續古〕
旅・一

經盛 正二位參議。刑部卿平忠盛男 〔新勅〕秋下・一前參議 〔續後
撰〕春上・一 〔玉葉〕秋下・一 冬・一 旅・一 戀
一・一 戀三・一 戀四・一 〔風雅〕雜上・一 雜下
・一 釋・一 〔續詞花〕秋上・一 戀中・一

經隆　四位備前守。中納言源通方男。至康斗　〔後拾〕雜一•一四位

經円　法印。左大辨家經子　〔新勅〕雜二•一

經嗣　從一位成恩寺關白。後芬陀利花院藤原經通男　〔新後拾〕旅。一權大納言　〔新續古〕春上•一　夏•一　賀•一　旅•一　戀一•一　戀四•一　戀五•一　雜中•一　神•一成恩寺關白前左大臣

經輔　正二位大納言。權中納言藤原隆家男　〔後拾〕戀三•一前中納言　〔千載〕神•一大納言　〔新勅〕秋上•一權大納言

經實　正一位大炊御門贈太政大臣。京極師實男　〔續古〕春上•一贈太政大臣

經賢　妙法院法印。頓阿法師子　〔新千〕戀三•一權律師　〔新拾〕秋下•一　戀三•一　〔新後拾〕冬•一　雜春•一　雜上•一權大僧都　〔新續古〕春上•一　春下•一　夏•一　秋上•一　冬•一　釋•一　旅•二　戀一•一　戀三•一　雜下•一　神•一法印

經親　正二位大納言。平時繼男　〔玉葉〕夏•一　戀四•一　戀五•一　雜一•一　雜四•一前中納言　〔風雅〕夏•一前大納言

經衡　五位大和守。中宮大進藤原公業男。延久四六廿一卒　〔後拾〕春上•二　秋上•一　秋下•二　冬•一　雜四•一　雜六•一神　〔詞花〕夏•一　〔千載〕別•一　戀五•一　神•一　〔新古〕秋上•一　戀四•一　〔新拾〕賀•一　〔新續古〕雜下•一諧誹　〔續詞花〕夏•一　秋上•一　賀•一　戀上•二　別•一　雜上•一　戲•一

經賴　左大辨　〔續詞花〕哀•一

經豐　從二位大納言。大納言藤原經重男　〔新後拾〕雜上•一權大納言

經繼　正二位大納言。中納言藤原經俊男　〔新後撰〕秋下•一　冬•一　戀二•二左大辨　〔玉葉〕戀一•一前中納言　〔續千〕春下•

一 夏・一 秋上・一 秋下・一 冬・一 旅・一 神・一 戀四・一 雜上。一 權大納言 〔續後拾〕春下。一 秋上・一 冬・一 戀一・一 雜上。一 雜中。一 〔新千〕春下・二 秋上・一 雜上・二 雜中。一 前大納言 〔新拾〕春上。一 春下・二 秋下。一 戀一・一 戀五・一 雜上・一 前大納言 〔新後拾〕夏・一 雜春・一 旅・一 戀一・二 〔新續古〕春上・一 冬・二 戀二・二 雜上・一 雜中。一

經覽 五位主稅頭。阿保。至延喜十一年左京大夫海今雄後改姓爲小槻 〔古今〕物名・一 〔新拾〕神・一

經顯 五位。荒木田 〔玉葉〕神・一 〔新續古〕雜上・一

經顯 從一位後勸修寺內大臣。權中納言藤原定資男 〔續千〕雜中・二 忠定朝臣 〔風雅〕夏・一 秋中・一 秋上・一 戀二・一 前大納言 〔新千〕夏・一 秋上・一 冬・一 雜中・一 〔新拾〕秋上・一 賀・一 神・一 雜上・三 〔新後拾〕雜秋・一 戀四・一 勸修寺內大臣 〔新續古〕春上・一 戀二・一 戀四・一

十四畫

熙 十三畫「熙」を見よ。

獎子內親王 後深草帝御女 〔新後撰〕秋下・一 戀一・一 戀二・一 〔玉葉〕戀一・一 雜二・一 雜五・一

榎井王 〔萬葉〕卷六・一

圓方女王 〔萬葉〕卷二〇・一

槐本（エニスノモト） 〔萬葉〕卷九・一

蒲生娘子 〔萬葉〕卷一九・一

園臣生羽女　〔萬葉〕卷二・一

說房　五位上杉駿河守。宮内卿藤原朝憲男　〔新千〕雜上・一

監命婦　〔續後撰〕戀三・一　〔續古〕戀二・一　〔風雅〕戀一・一　〔新後拾〕戀三・一

漸空　上人蓮光院了觀坊　〔新後撰〕雜上・一　〔續千〕釋・一　〔新千〕釋・一

彰空　上人阿月坊　〔續千〕釋・一

蓑麻呂　大石　〔萬葉〕卷一五・一

熊野　〔新古〕神・二　〔玉葉〕神・四　〔風雅〕神・一

僧都聖尋母　權中納言經平女に同じ

夢窻　國師。天龍寺開山　〔風雅〕雜上・一　雜中・一　釋・二　〔新千〕雜上・一　〔新拾〕釋・一　雜上・二　〔新後拾〕雜下・二　釋・一

蒿溪　伴。文化三年歿七十四。世世の跡。國つ文。譯文童諭。〔閑田詠草〕九一一

【對】

對の子　〔後撰〕戀一・一　たいふのご

對馬　巨曾倍　〔萬葉〕卷六・一　卷八・一

【稱】

稱名院内大臣　公豐公に同じ

稱念院入道前關白太政大臣　兼平公に同じ

【疑】

疑空　上人　〔續後撰〕釋・一

疑俊　法印　〔續千〕雜中・一

【境】

境空　上人。後山本左大臣實泰子　〔新拾〕哀・一　〔新續古〕戀二・一　雜中・一

境部王 〔萬葉〕巻一六・一

【種】

種文 紀。 〔新葉〕秋上・一 雜下・一

種平 四位。神主賀茂幸平男 〔續千〕戀五・一

種成 四位兵庫頭。織部正和氣親成男 〔續拾〕雜秋・一 四位 〔玉葉〕雜上・一 〔風雅〕雜上・一 〔新續古〕神・一

【禖】

禖子内親王 六條齋院。後朱雀帝御女(—一七五六) 〔詞花〕秋・一 〔續古〕夏・一 〔新拾〕戀一・一

禖子内親王家出羽 〔玉葉〕春上・一

禖子内親王家宣旨 六條院宣旨に同じ

【齊】

齊明天皇 諱寶。皇極帝重祚。茅渟王御子(一二五四—一三二一) 〔續古〕哀・一

齊明天皇御歌 〔萬葉〕巻四・二 長歌巻四・一

齊信 正二位大納言。藤原恆德公男 〔後拾〕春上・一 民部卿 〔千載〕戀五・一 雜上・一 大納言 〔新古〕釋・一 〔新拾〕春上・一 秋下・一

齊信 民部卿 〔續詞花〕戀下・一 雜上・一

齊時 五位駿河守。本名時高。刑部少輔平時基男 〔新後撰〕雜上・一 雜下・一 〔玉葉〕春下・一 雜下・一 時高 〔續千〕春下・一 夏・一 秋下・一 旅・一 雜上・一 〔續後拾〕春下・一 旅・二 戀四・一 戀五・一 雜下・一 〔新千〕秋下・一 〔新拾〕旅・一

【遠】

遠久 四位。從三位賀茂氏久男 〔新後撰〕雜上・一 〔續千〕哀・一 〔風雅〕神・一 〔新千〕雜下・一 誹諧 〔新拾〕神・

〔新續古〕戀九・一
遠村　六位矢野七郎左衛門尉。橘　〔新千〕戀三・一　〔新後拾〕雜春
・二　戀二・一　雜上・一　〔新續古〕雜上・一　雜下
・上
遠房　五位。橘　〔新續古〕戀二・一
遠衡　四位。三善　〔續千〕冬・一　〔風雅〕雜下・一　〔新
千〕雜上・一　雜下・一
【福】
福子　張子　〔萬葉〕卷五・一
福麻呂　田邊　〔萬葉〕卷六・一五　卷九・六　卷一八
・二三　長歌卷六・六　卷九・四
福恩寺前關白内大臣　〔新葉〕春上・三　春下・一
秋上・二　冬・一　戀一・二　戀三・一　戀四・一
雜上・一　雜下・一　賀・一
福照院關白　滿基公に同じ
【嘉】
嘉言　六位對馬守。大江仲宣男　〔拾遺〕別・一　此うた詞花雜下大江嘉言とあり
雜上・一　雜春・一　弓削嘉言　〔後拾〕春上・二　春下・一
夏・一　賀・一　別・一　哀・一　戀一・一　戀四・一
雜六・一　誹諧　〔詞花〕秋・二　冬・二　雜上・一　〔新
古〕春下・一　哀・一　旅・一　雜上・一　雜下・一
〔續古〕旅・一　〔玉葉〕秋下・一　〔續後拾〕賀・一
〔風雅〕春下・一　戀一・一　〔新千〕戀四・一　〔新續
古〕夏・一　〔續詞花〕春上・一　秋上・一　旅・一
雜中・一　雜下・一
嘉陽門院越前　伊勢氏大女　〔新古〕春上・一　春下・一

秋上・一　旅・一　戀二・一　雜中・一　神・二　越前
〔新勅〕春下・一　冬・一　戀五・一　〔續後撰〕春上
・二　秋上・一　秋中・一　〔續古〕冬・一　神・一
雜下・一　〔續拾〕雜上・一　〔新後撰〕戀四・一　〔玉
葉〕夏・一　秋上・一　〔續後拾〕冬・一　〔新千〕戀一
・一　〔新拾〕春上・一　〔新後拾〕夏・一　〔新續古〕
戀三・一　雜上・一

嘉喜門院大藏卿　〔新葉〕戀二・一　戀三・一　雜上
・二

嘉喜門院　〔嘉喜門院歌集〕一三二　〔新葉〕春上・一
春下・三　夏・二　秋下・二　戀二・一　戀三・二
雜上・一　雜下・二　哀・一

嘉種　五位美濃守。從三位源長賢男　〔續後撰〕戀二・一

【維】

維光　大江　〔續詞花〕賀・一

維成親王　式部卿。後村上皇子在新葉集傍書　〔新葉〕春上・一　冬・
一　戀一・一　戀四・一　戀五・二

維貞　四位修理大夫。陸奧守平宗宣男　〔玉葉〕夏・一　五位　〔續千〕秋下
・二　戀一・二　哀・一　〔續後拾〕夏・一　冬・一
戀三・一　〔風雅〕旅・一　〔新千〕夏・一　雜上・一
四位

維時　從二位中納言。伊豫守大江千古男　〔新勅〕神・一　中納言

維教　右衞門督　〔新葉〕雜上・一　雜下・一

【壽】

壽玄　法師　〔拾遺〕雜下・一

壽成門院　媞子。後二條帝御女　〔風雅〕春中・一　雜下・一

〔新千〕戀三・一　〔新拾〕哀・一　戀二・一

壽圓　法師　〔續詞花〕物・一

壽曉　法師　〔續千〕雜中・一　〔續後拾〕雜下・一　〔新千〕雜下・一　〔新拾〕戀四・一　〔新後拾〕戀二・一

壽證　法師。俗名修理亮　〔新後撰〕釋・一

【榮】

榮子内親王　後二條帝御女　〔續後拾〕戀一・一　〔風雅〕雜中・一　〔新千〕戀三・一　〔新拾〕戀四・一　〔新續古〕雜中・一

榮仁親王　有栖川宮大通院。崇光帝御子　〔新續古〕春上・一　冬上・一　戀一・一　雜中・一　神・一

榮西　建仁寺開山權僧正。賀陽氏薩摩守貞政男　〔續古〕旅・一

榮昭　法印　〔玉葉〕雜一・一

榮海　大僧正尙雄。權律師合譽子　〔新千〕雜中・一　〔新拾〕釋・一　〔新後拾〕戀二・一

榮算　法印　〔玉葉〕賀・一　〔續千〕雜中・一

榮運　法印　〔新千〕釋・一　哀・一　〔新拾〕哀・一

榮禪　八幡法眼。法眼成禪子　〔續後撰〕神・一

榮職　栖　〔續詞花〕春下・一

榮寶　素阿彌　〔新千〕雜下・一　〔新後拾〕雜秋・一

【寬】

寬伊　僧正　〔新拾〕釋・一

寬宗　律師　〔新後拾〕戀二・一

寬念　法師　〔詞花〕戀上・一

寬信　四位左京大夫。敦實親王御子。至天祿三四位　〔拾遺〕雜春・一

寬信　法印。中納言爲房子　〔續後撰〕釋・一

寛胤法親王 勸修寺。後伏見帝御子 〔風雅〕釋・一 〔新千〕雜下・一

寛祐 法印。右大辨源公忠子 〔拾遺〕戀一・一

寛湛法師母 中納言公賴室 〔後撰〕戀五・一

寛尊法親王 二品大覺寺。龜山帝御子 〔風雅〕戀四・一 雜中・一 〔新千〕秋下・一 釋・一 雜中・一 〔新拾〕秋上・一 戀五・一 雜上・一 〔新後拾〕春下・一 夏・一 雜秋・一 雜上・一

寛曉 大僧正 〔續詞花〕雜下・一

寛耀 高雄僧都 〔新千〕釋・一 〔新拾〕戀一・一 戀三・一

【滿】

滿元 四位細川右京大夫。右京大夫源賴元男 〔新續古〕春下・一 秋上・一 戀四・一 哀・一 雜中・一 四位

滿仲 四位攝津守。源經基王御子。天元六年三月廿五日還任攝津守 〔拾遺〕別・一 四位

滿政 五位赤松左京大夫。左馬助源滿則男 〔新續古〕賀・一

滿季 從一位西山内大臣。後中園藤原公定男 〔新續古〕戀一・一 雜下・一 入道前内大臣

滿祐 五位赤松大膳大夫。上總介源義則男 〔新續古〕冬・一 戀一・一

滿基 從一位福照院關白左大臣。後香園院藤原師嗣男 〔新續古〕賀・一 福照院關白左大臣

滿教 從一位後三條院攝政關白左大臣。後報恩院藤原經教公男 〔新續古〕秋下・一 戀五・一 雜上・一 前關白左大臣

滿意 大僧正如意寺准后。後普光園院良基子 〔新續古〕冬・一 戀一・一

滿詮 從一位養德院贈左大臣。源義詮公男 〔新續古〕夏・一 秋上・一 秋下・一 冬・一 旅・一

滿誓 俗名笠朝臣麿從四位上。法師筑紫觀世音寺別當(一一三八一) 〔拾遺〕哀・一 沙彌

滿親　正二位大納言。大納言藤原親雅男　〔新後拾〕雜秋・一　五位　〔新續古〕冬・一　戀三・一　權大納言

滿濟　僧正。大納言師冬公子　〔新續古〕春上・一　夏・一　秋下・一　賀・一

【輔】

輔尹　四位木工頭。大和守藤原貞方朝臣男。至寛仁五年　〔後拾〕春上・一　四位　〔詞花〕別・一　雜上・一　〔新古〕秋下・二一　旅・一

輔文　五位。藤原　〔後撰〕戀二・一

輔弘　五位神祇權大副。神祇大副大中臣輔宗男。康和五年八月十三日配流佐渡國　〔後拾〕夏・二　戀三・一　〔金葉〕雜上・一

輔以　大中臣　〔續詞花〕雜上・一

輔臣　四位。藤原。（イ輔仁、參議藤原玄上子。從五位下）　〔後撰〕雜二・一　四位

輔昭　五位大内記。從三位菅原文時男。天元五年出家　〔拾遺〕戀一・一　雜春・一　〔新古〕旅・一

輔相　六位。越前守藤原弘經男　〔拾遺〕物名・三七　〔新拾〕戀二・一

輔時　六位。内藏助紀時文男　〔拾遺〕物名・一

輔親　從二位。祭主大中臣能宣男（一六一四｜一六九八）　〔拾遺〕雜春・一　大中臣　〔後拾〕春上・一　別・三　戀一・二　戀二・一　雜三・一　雜一・一　雜二・一　雜四・二　雜六・一（神祇）　祭主　〔新古〕秋上・一　賀・一　戀九・一　〔新勅〕夏・一　〔續後撰〕賀・一　〔續古〕雜中・一　〔玉葉〕雜下・一　旅・一　戀一・一　〔續千〕戀三・一　〔續後拾〕秋上・一　〔風雅〕旅・一　釋・一　〔新千〕[illegible]・一　〔新拾〕哀・一　戀一・一　〔新續古〕賀・一　〔續詞花〕春下・一　雜上・一

【輔仁】

輔仁三宮大進　〔金葉〕秋・二　戀上・一

輔仁三宮家越後　〔千載〕戀二。一

輔仁親王　无品號三宮。後三條帝御子　〔金葉〕夏。二　秋・二　冬・二　雜上・二　雜下。一第三宮　〔千載〕夏・一　秋下・一　戀一・一　雜中。一　雜下。一誹諧歌。無品親王輔仁　〔新古〕春上。一輔仁親王　〔續後拾〕雜上。一　〔新千〕秋上。一　〔續詞花〕秋上。二　戀上。一　雜中。一

輔仁親王家甲斐　〔千載〕秋上。一親王家甲斐　〔新拾〕秋上。一

【慈】

慈仙　妙香院權僧正。一條內大臣內實公子　〔續千〕戀四。一

慈成　律師　〔風雅〕夏・一　旅。一　雜上。一　雜下。一

慈叻法親王　青蓮院市河宮天台座主。後嵯峨帝御子　〔續拾〕雜上・一

慈快　東南院僧正。竹林院公衡子　〔風雅〕雜下・一　〔新千〕雜下・一　〔新拾〕雜中。一

慈延　釋。文化二年寂五十八　〔慈延歌集〕

慈忠　法印　〔新續古〕戀三・一

慈威　上人　〔新拾〕釋。一

慈能　横川尊勝院大僧正。權大納言實明子　〔新拾〕冬。一　釋・一

慈順　叡山座主曼珠院大僧正。山階左大臣實雄公子　〔新後撰〕雜下。一僧正　〔玉葉〕秋下。一　雜三。一　神。一前大僧正　〔風雅〕雜中。一　〔新千〕神。一　雜上。一

慈勝　叡山天台座主淨土寺僧正。淨妙寺關白家基公子　〔續千〕神。一　雜中。二　雜下。一天台座主　〔續後拾〕秋上。一　釋。一前僧正　〔風雅〕雜上。一　神。一前大僧正　〔新千〕秋上。一　釋

•二　神。一　雜上。二　賀•一〔新拾〕春下•一

慈恵　叡山大僧正〔續後撰〕釋•一〔續古〕釋•一

慈傳　叡山淨土寺大僧正。後淨妙寺經平公子〔新千〕冬•一　神•一　戀一•一

慈圓　慈鎮に同じ

慈道法親王　座主青蓮院。龜山帝御子〔新後撰〕釋•一〔玉葉〕秋下•一　冬•一　雜三•一〔續千〕夏•一　秋下•一　冬•二　雜下•一　哀•一〔續後拾〕夏•一　戀三•一　雜上•一〔風雅〕秋上•一　冬。一　雜中•二　雜下•一　賀•一〔新千〕秋下•一　冬•一　神•二　戀一•一　雜中•一〔新拾〕哀•二

慈寛　法師〔續千〕哀•一

慈澄　僧正〔新續古〕釋•一

慈慶　叡山妙香院大僧正。一條內大臣內實子〔續後拾〕雜下•一〔新千〕釋•一　雜中•一〔新拾〕釋•一

慈辨　法眼〔千載〕秋下•二　法橋

慈應　法印〔新拾〕雜中。一　贈法印

慈鎮　叡山天台座主大僧正〔一八〇七—一八八五〕愚管抄〔拾玉集〕四一五二〔千載〕夏•一　秋上。一　秋下•一　旅。一　雜上。一　雜中。一　釋•一　神•一　法印慈圓〔新古〕春上。二　夏•六　秋上•六　秋下。七　冬。八　哀•七　旅。三　戀一•二　戀三•二　戀四。四　戀五•一　雜上•七　雜中•七　雜下。二五　神。八　釋•八　前大僧正慈圓〔新勅〕春下•二　夏•一　秋上•三　秋下•一　冬•二　旅•一　神•四　釋•四　戀五•一　雜一•二　雜二•一　雜三•三

雜四・三　〔續後撰〕春下・一　冬・一　神・三　釋・一
二　戀二・一　戀三・一　戀五・二　雜上・一　雜中
・五　雜下・一（前大僧正慈圓）　〔續古〕春下・二　夏・一　秋
上・三　冬・一　神・一（續後撰歌）　戀一・一　戀三・一
雜下・一　〔續拾〕春下・一　夏・一　秋下・一　冬・
二　雜春・一　賀・一　雜下・二　釋・三　〔新後撰〕
春上・一　秋下・一　釋・一　神・二　戀三・二　雜
中・一　雜下・一　〔玉葉〕春上・一　夏・一　秋上・
二　秋下・一　冬・一　旅・三　戀一・二　戀二・一
雜一・二　雜三・一　雜五・六　釋・一　神・二　〔續千〕
春上・一　旅・一　神・一　釋・一　雜中・一　〔續後
拾〕春上・二　春下・一　夏・一　戀二・一　雜下・一
釋・一　〔風雅〕春上・一　春中・一　春下・四　夏・
二　秋下・一　雜上・二　雜下・二　釋・四　神・一
〔新千〕春下・一　釋・二　雜中・一　雜下・三（旋一折一）
〔新拾〕春上・一　夏・一　冬・一　哀・一　戀一・二
雜下・一（折句歌玉葉雜三歌）　〔新後拾〕夏・一　雜春・一　〔新
續古〕秋上・一　冬・一　賀・一　釋・二　戀五・一
哀・一　雜下・三　神・一

慈覺大師　〔新古〕雜上・一　〔續古〕釋・一　〔新拾〕
釋・一

【實　一畫—七畫】

實　五位信濃守。參議源舒男。至昌泰二（イ三）年卒　〔古今〕別・一

實文　從三位。左中將藤原公廉男　〔玉葉〕秋上・一（四位）

實尹　正二位大納言。今出川藤原兼季男　〔風雅〕秋中・一（權中納言）

實方　四位左中將。侍從藤原定時男。長德四年十二月卒　〔拾遺〕夏・一　戀一

•二　戀二。一　戀四•二　雜春•一　哀。一　位四　〔後
拾〕哀•三　戀一•一　戀二•二　雜二。二　雜四•一
雜五•四　雜六•三　誹諧　〔詞花〕戀上•二　戀下。一
雜下•一　〔千載〕別。一　戀三。一　戀四•一　雜上
•二　〔新古〕哀•二　別•一　旅•一　戀一•二　戀
三•三　戀四。一　雜上。一　雜中。二　雜下•一
〔新勅〕夏•一　賀•一　戀三•一　雜二•二　〔續後
撰〕戀三•二　雜上•一　〔續古〕戀四。二　戀五•二
〔續拾〕戀四•一　〔玉葉〕秋上。二　戀三。一　戀四
•二　戀五•二　〔續千〕戀一•一　秋下。一　〔續後
拾〕別。一　〔新千〕別•一　戀四•一　〔新拾〕春下•
一　戀四•一　雜下•一　誹諧　〔新後拾〕春下•二　〔新
續古〕春下•一　〔續詞花〕春下。一　神。二　戀中•

一　戀下。二　雜上•一　雜中。二　物•三

實氏　從一位常磐井入道前太政大臣。西園寺藤原公經男　〔新勅〕春上•一　春
下•二　秋上•一　秋下。一　冬•二　賀。二　戀三
•二　戀四。一　雜二•二　雜三•三　雜四•三　內大臣
〔續後撰〕春上•三　春中•五　夏。三　秋上。一　秋
中。一　秋下。一　冬•一　神•二　釋。二　戀二•一
戀一•一　戀四•三　戀五•一　雜上•二　雜中•一
雜下•二　旅。一　賀•五　前太政大臣　〔續古〕春上•六
春下•六　夏。三　秋上。六　秋下•五　冬•二　神
。四　釋•二　戀二•二　戀三。二　戀三•一　戀四
•二　戀五•二　哀•二　雜上•四　雜中。三　雜下
•四　賀。四　入道前太政大臣　〔續拾〕春上。一　春下•三
秋上•二　秋下•三　冬•二　雜秋•一　賀。二　戀

一•二　戀二•五　戀三•一　戀四•一　戀五•一
雜上•三　雜中•二　雜下•一　常磐井入道前太政大臣〔新後撰〕
春上•一　春下•三　秋上•三　釋•一　戀一•二
戀二•三　雜上•一　雜下•一　賀•一〔玉葉〕春上
•二　春下•二　夏•四　秋上•二　秋下•三　冬•四
旅•一　戀一•一　戀二•二　雜一•一　雜二•二
雜三•三　雜五•一　釋•一　神•一〔續千〕春上•
四　春下•二　神•二　戀一•一　雜上•一　雜中•
一　雜下•一　哀•一〔續後拾〕春上•一　夏•一
秋下•一　冬•一　戀一•二　戀三•一　戀四•二
雜上•一〔風雅〕春上•一　秋下•二〔新千〕秋上
•二　秋下•三　戀二•一　戀三•二　雜上•一　哀
•二　賀•一〔新拾〕春下•一　夏•一　秋下•一

戀一•一　戀二•一　雜上•一〔新後拾〕春上•二
春下•二　夏•一　秋上•一　冬•一　旅•一　雜上
•二〔新續古〕春下•一　戀一•一　戀四•一　戀•
五•一　雜下•一

實冬　正二位大納言。前中納言藤原公光男　〔續拾〕秋下•一　戀四•一
右衛門督　〔新後撰〕別•一　戀三•一　雜下•一　前大納言　〔續
千〕雜上•一〔新續古〕冬•一　戀四•一

實冬　從一位後三條太政大臣。後押小路藤原公忠男　〔新續古〕春下•一
戀五•一　雜上•一　後三後太政大臣

實有　正二位大納言。西園寺太政大臣藤原公經男　〔新勅〕秋下•一　權中納言　〔續
後撰〕旅•一　前左近中將

實伊　大僧正。大納言伊平子　〔續後撰〕雜下•一　權大僧都　〔新古〕秋
上•一　冬•一　釋•一　哀•一　法印　〔續拾〕夏•一

秋上・一　秋下・一　冬・一　戀二・一　釋・一權僧正　〔新後撰〕冬・一　雜中・二前大僧正　〔玉葉〕春上・一　雜四・一　釋・一　〔續千〕戀一・一　〔續後拾〕秋下・一　〔新千〕雜下・一　〔新拾〕別・一　雜中・一　〔新續古〕哀・二　雜下・一

實因　叡山僧都　〔拾遺〕神・一

實任　正二位中納言。右中將藤原公經男　〔續千〕戀一・一　戀三・一左京大夫　〔續後拾〕秋上・一權中納言　〔新千〕秋下・一　雜上・二　賀・一前中納言　〔新拾〕秋下・一　〔新後拾〕夏・一　〔新續古〕賀・一　雜上・一

實守　正二位中納言。左大臣藤原公能男　〔千載〕秋下・一　雜中・一權中納言　〔新勅〕秋下・一

實光　從三位中納言。右中辨藤原有信男　〔金葉〕秋・一　雜上・一四位

實名　正二位大納言。參議藤原公時男　〔新續古〕別・一權大納言

實名　從三位大納言。權中納言藤原公脩男　〔風雅〕秋中・一從三位　〔新拾〕秋中・一　賀・一　秋上・一前參議　〔新後拾〕冬・一　雜春・一　〔新續古〕秋上・一　秋下・一　雜上・一前大納言

實行　從一位八條前太政大臣。大納言藤原公實男　〔金葉〕夏・二　賀・一　戀上・一　雜下・一中納言　〔詞花〕雜上・一　雜下・一太政大臣　〔千載〕旅・一　賀・一　雜上・一八條前太政大臣　〔新古〕雜上・一　〔續後撰〕冬・一　〔新拾〕冬・一　〔續詞花〕春上・一

實快　法印。大炊御門公能公子　〔千載〕夏・一　戀一・一法眼

實利　四位。從四位上橘春行男。至天祿三年　〔後撰〕戀二・一四位

實孝　正二位中納言。後德大寺太政大臣藤原公孝男　〔新千〕戀三・一

實秀 從一位大納言。三位藤原公仲男。正 〔新續古〕賀・一 權中納言 〔新葉〕
春上・一 春下・一 夏・一 秋上・一 冬・一 戀
一・一 戀二・一 戀五・一 雜下・一

實秀 五位少將。藤原 〔新後撰〕戀五・一

【實 八畫—十畫】

實長 正二位大納言。參議藤原公行男 〔千載〕冬・一 前大納言

實政 從二位參議。從三位藤原資業男 〔後拾〕春上・一 神・一 大貳大宰
〔續後撰〕神。一 大宰大貳 〔續詞花〕賀・一

實季 正二位大納言。中納言藤原公成男 〔後拾〕春下。一 大納言

實承 叡山檀那院大僧正。三條內大臣公親子 〔新後撰〕戀六・一 雜上
・一 〔玉葉〕秋上・一 〔續千〕秋下・一 雜中・一
釋・一 〔新千〕雜下・一

實性 法印。法印長舜子 〔續千〕夏。一 戀一・一 權律師 〔續後
拾〕夏・一 冬・一 〔風雅〕戀三・一 法印 〔新千〕春下
・一 釋・一 雜上・一 雜中・二 雜下・二 〔新拾〕
秋上・一 哀・一 〔新後拾〕雜春・一 〔新續古〕冬
・一 戀・一

實定 正二位後德大寺左大臣(一七九九—一八五一)大炊御門藤原公能公男 〔千載〕春上
・一 夏・一 秋上・一 秋下・一 冬・二 哀・一
賀・一 戀一・二 戀二・一 戀三・一 戀五・一
神・二 右大將 〔新古〕春上・一 春下・一 夏・一 秋
上・二 冬・三 賀・一 哀・一 戀二・二 戀四・一
雜上・一 雜中・一 神・一 後德大寺左大臣 〔新勅〕春上・
一 夏・二 秋下・一 旅・一 雜二・一 雜三・一
雜五・一 物名 〔續後撰〕春上・一 秋上・一 〔續古〕冬
・一 戀三・一 哀。一 雜中・一 雜下・一 〔續

拾〕夏•一　秋下•一　戀二。一　神。一　〔新後撰〕
春上。一　夏•一　旅•一　〔玉葉〕冬•一　旅•一
戀三•二　雜二•一　雜四•一　雜五•一　〔續千〕秋
上•一　雜中。一　雜下•一　〔續後拾〕秋下。一
〔風雅〕雜下。一　〔新千〕春下•一　戀三•一　戀四
•一　哀•一　〔新拾〕春下。一　冬•一　〔新後拾〕冬
•二　〔新續古〕賀•一

實忠　正二位後三條前内大臣押小路藤原公茂男　〔續後拾〕戀一•一 權中納言
〔風雅〕秋中•一　雜中•一 前内大臣　〔新千〕夏。一　秋下
•二　戀五•一　雜中。一 後三條前内大臣　〔新拾〕秋下•一
〔新後拾〕雜秋•一　〔新續古〕夏•一　戀三•二　雜
中•一　神。一

實宗　正二位坊城内大臣、大納言藤原公通男　〔千載〕雜上•一 權中納言　〔新
古〕戀二•一 大納言

實房　正二位三條入道左大臣、三條藤原公教公男　〔千載〕春下•一　夏•
一　秋下•一　冬•一　旅•一　戀五。一 左近大將大納言
〔新古〕秋下•一　冬•二　哀•一 入道左大臣　〔新勅〕神•一
三條入道左大臣　〔續古〕戀五•一　〔續拾〕雜中•一　雜下
•二　〔新後撰〕戀六•一　雜中。一　〔玉葉〕春下•一
夏•二　戀三•一　雜四•一　雜五•一　〔續千〕夏。
一　〔續後拾〕春下•一　〔新拾〕夏•一　秋上•一
〔新續古〕夏•一　戀二•一　戀三•一　雜中•一

實甚　法印　〔新千〕雜中•一　〔新後拾〕雜下•一　〔新
續古〕戀一•二

實前　正二位中納言、納言藤原冬季男 中　〔續千〕戀二•一　戀四。一 權中
納言　〔新千〕戀三•一　〔新拾〕戀五•一

實秋 從二位大納言。中納言藤原公勝男 〔新續古〕賀・一 權大納言

實俊 正三位參議、冷泉藤原公相男 〔新後撰〕夏・一 戀二・一 前參議 〔玉葉〕夏。一 秋下・一 冬・一 戀一・一 〔續千〕戀一。二 戀四・一 雜下・一

實俊 從一位後常磐井右大臣。大納言藤原公宗男 〔新千〕秋上・一 冬・一 戀三・一 雜中・一 權大納言 〔新拾〕秋上。一 秋下・一 賀・一 雜上・一 内大臣 〔新後拾〕春下・一 夏・一 秋上・一 戀二・一 前右大臣 〔新續古〕雜中・一

實重 五位。宮内大輔平昌隆男。至久安六年 〔詞花〕戀上。一 〔千載〕冬・一 戀四・二 雜上・一 神・一 〔續詞花〕秋上・一 哀・二 戀下・一

實重 從一位三條入道前太政大臣、三條藤原公親男 〔新後撰〕春下。一 釋・一 戀二・一 戀五・一 〔雜上・一 雜中・一 前内大臣

實 〔玉葉〕春上・一 冬・一 賀・一 旅・一 戀四・二 雜五・一 前内大臣 〔續千〕春上・一 秋上・一 雜體・一 物名 戀一・一 戀二・一 戀三・一 戀四・二 雜上・一 雜中・二 雜下・一 哀・一 太政大臣 〔續後拾〕春上・一 夏・二 物名・一 戀一・二 戀二・一 戀四・一 雜中・一 神・一 入道前太政大臣 〔風雅〕冬・一 雜下・一 三條入道前太政大臣 〔新千〕春下・一 夏・一 秋下・一 冬・二 神・一 戀一・二 雜上・一 雜中・一 〔新拾〕春上・一 冬・一 神・一 〔新後拾〕春下・一 冬・一 雜春・一 後三條入道太政大臣 〔新續古〕春上・一 秋上・一 秋下・一 三條入道前太政大臣

實香 正三位中納言、參議藤原公敦男 〔玉葉〕雜三。一 前中納言 〔續千〕雜中・二 權大宰帥

實香　從一位儀同三司。後六條藤原公秀男　〔新後拾〕雜春・一　雜秋・一　秋下・二　冬・一　旅・一　戀二・二　戀三・一　戀
〔新續古〕春下・一　雜上・一　五・一　雜三・一　神・一 左近大將　〔續千〕春上・一　春

實時　正三位參議，皇后宮大輔藤原公蔭男　〔新後撰〕戀三・一 前參議　〔玉　下・一　秋上・一　秋下・二　冬・一　物名・一　戀
葉〕雜四。一　雜五・一　三・一　戀四・一　戀五・一　雜上・一　哀・一　賀

實修　叡山法印。中納言伊實子　〔千載〕雜上・一　・二 左大臣　〔續後拾〕春下・一　秋上・一　物名・一

實躬　正二位大納言。大納言藤原公實男　〔新千〕秋下・一 前大納言　〔新拾〕　戀二・一　雜中。一 前左大臣　〔風雅〕夏・一・秋上・一
夏・一　〔新續古〕戀四・一　戀五・一　雜上・一　雜上・一　雜中・一　雜下・二　賀・一 後山本前左大臣　〔新

實夏　從一位後山階前內大臣。中園藤原公賢男　〔風雅〕賀・一 春宮大夫　〔新千〕　千〕春上・一　秋上・一　神・一　戀三・一　戀五・二
夏・一　戀三・一　戀四・一　戀五・一 權大納言　〔新拾〕　雜下・一　〔新拾〕冬・一　雜中・一　〔新後拾〕夏・一
夏・一　旅・一 前內大臣實　〔新後拾〕旅・一 後山階內大臣　〔新　戀三・一
續古〕夏・一　賀・一

實能　正二位德大寺左大臣。大納言藤原公實男　〔金葉〕春・二　夏・一

實泰　從一位後山本前左大臣。山本藤原公守男　〔新後撰〕夏・一　秋下・一　戀上・一　戀下・三 左兵衛佐　〔詞花〕雜上・一 內大臣　〔千
戀三・一　雜上・一 按察　〔玉葉〕春上・一　春下・一　載〕春上・一　戀一・一　戀二・一 德大寺左大臣　〔新古〕神

・二 〔續後撰〕春中・一 秋中・一 〔續古〕夏・一
〔續拾〕雜中・一 〔新千〕秋下・一 〔續詞花〕春下・
一 夏・一 神・一 戀上・一

實兼 従一位後西園寺入道前太政大臣。冷泉藤原公相男 〔續拾〕春下・一 夏・
一 秋上・二 此内あしびきの山のはの歌新千秋上に入 冬・一 戀一・一
戀五・一 春宮大夫 〔新後撰〕春上・二 春下・一 夏・三
秋上・三 秋下・三 冬・三 戀一・二 戀二・一
戀五・二 雜上・二 雜中・二 雜下・一 賀・二
入道前太政大臣 〔玉葉〕春上・四 春下・四 夏・一 秋上
・八 秋下・五 冬・五 賀・一 旅・一 戀一・二
戀二・一 戀三・二 雜一・八 雜二・二 雜三・四
雜四・三 雜五・四 釋・二 神・一 〔續千〕春上・
四 春下・四 夏・二 秋上・二 秋下・二 冬・三

雜體折句一。物名二。誹諧一 旅・二 神・一 釋・二 戀一・
一 戀二・二 戀三・六 戀五・二 雜上・四 雜下
・二 賀・二 〔續後拾〕春上・一 春下・一 夏・一
秋上・二 秋下・一 物名・二 戀一・一 戀四・一
雜上・二 雜下・一 〔風雅〕春上・二 春中・一 春
下・二 夏・一 秋中・一 秋下・二 冬・三 戀二
・二 雜上・一 雜中・一 神・二 〔新千〕春上・二
秋上・三 秋下・一 釋・一 戀四・一 雜上・一
雜中・一 賀・一 〔新拾〕春上・一 夏・二 秋下・
一 冬・一 戀一・一 戀三・一 戀五・一 神・一
雜上・一 雜下・一誹諧 〔新後拾〕春下・一 夏・一
秋上・二 雜秋・一 戀五・一 神・一 賀・一 〔新
續古〕春上・一

實家 正二位大納言。大炊御門右大臣藤原公能男 〔千載〕春上。一 夏。一
秋上•一 哀•一 戀四•一 雜上•一 雜中•一
權大納言 〔新古〕哀。一 大納言 〔新勅〕戀一•一 戀五•一
雜三。一 〔續後撰〕雜下。一 〔續拾〕秋上。一 旅
•一 戀五•一 〔玉葉〕夏•一 戀一。一 戀二•一
〔風雅〕戀三•一 戀五。一 〔新續古〕冬。一

實家 從一位一條太政大臣。後一條藤原實經男 〔續拾〕秋上•一 旅•一
戀五•一 權大納言 〔新後撰〕戀二•一 雜中。三 前大納言

【實　十一畫｜十三畫】

實國 正二位大納言。藤原 〔千載〕春下•一 夏。一 戀二•三
雜中•一 神•一 權大納言 〔新勅〕戀三•一 〔續後撰〕雜
下•一 〔續拾〕雜下•一 〔新後撰〕神•一 戀二•一
〔續千〕雜中•一 〔風雅〕雜下•一 〔續詞花〕戀下•一

實敎 正二位大納言。權中納言藤原公雄男 〔新後撰〕春下•一 秋下•一
戀二•一 戀三•一 戀四。一 前大納言 〔玉葉〕戀一•一
〔續千〕春下•一 秋上•一 秋下。三 賀•一 戀二
•一 戀三•二 雜中•一 雜下。一 民部卿 〔續後撰〕
春下•一 秋上。一 秋下•一 旅•一 戀三。一
戀四•一 雜上•一 雜下•一 前大納言 〔風雅〕秋上•一
冬•一 雜下•二 〔新千〕春上。一 夏•一 秋上•
一 秋下•一 冬•一 戀一•二 戀二•二 戀三。
一 戀四•一 戀五•一 雜上•二 雜下•二 〔新
拾〕春上•一 春下•二 夏•一 冬•二 賀•一 別
•二 戀五•一 雜上•一 雜中•一 〔新後拾〕夏•
二 秋上•一 秋下•一 戀二•一 雜上•一 雜下
•一 〔新續古〕秋上•一 秋下•一 冬•一 旅•一

戀二•二　雜上•一　雜中•一

實基　從一位德大寺入道前太政大臣。野宮藤原公繼男　〔續拾〕賀•一　德大寺入道前太政大臣　〔續後拾〕秋下•一

實基　四位左中將。中納言源經房男　〔千載〕哀•一　四位　〔續詞花〕戀中•一

實淸　從二位中納言。大納言藤原公時男　〔新續古〕冬•一　戀四•一

實淸　四位右馬權頭。右京大夫藤原公信男。至仁平四年　〔千載〕夏•一　四位　〔續後撰〕秋上•一　〔續詞花〕春上•一　冬•一

實淸　前大納言。洞院左大臣藤實泰孫大納言公敏男歟　〔新葉〕戀一•一　雜上•一

實淸　法印　〔新千〕雜中•一　〔新後拾〕別•一

實超　叡山毘沙門堂大僧正。三條公親公子　〔玉葉〕秋下•一　冬•一　〔續千〕春下•一　冬•一　戀三•二　雜上•一　〔續後拾〕秋上•一　戀四•一　釋•一　〔風雅〕秋下•一　雜上•一　〔新千〕秋上•一　釋•一　雜上•一　〔新拾〕冬•一　旅•一

實勝　四位。參議藤原公高男　〔新續古〕戀四•一　四位

實爲　前大納言。阿野藤季繼孫實村男。後任內大臣　〔新葉〕春上•一　夏•一　冬•一　戀一•一　戀三•一　戀五•二　雜上•一　雜中•一　雜下•一　哀•一

實盛　從二位大納言。後野宮藤原公俊男　〔新續古〕冬•一　權中納言

實朝　正二位鎌倉右大臣。征夷大將軍。右大將源賴朝男（一八五三—一八七九）　〔金槐集〕七二　〔新勅〕春上•二　春下•二　秋上•四　秋下•四　冬•三　旅•一　戀三•二　戀四•一　雜一•二　雜二•三　雜四•一　鎌倉右大臣　〔續後撰〕春上•二　春下•二　秋上•一　冬•一　神•一　戀一•一　戀二•二

戀五・一　旅・一　賀・一　〔續古〕秋上・一　秋下・一　冬・一　旅・一　戀一・一　戀二・一　賀・一　〔續拾〕春上・二　春下・一　雜春・一　旅・一　〔新後撰〕春下・一　夏・一　秋上・二　神・一　戀三・一　〔玉葉〕春上・二　秋上・一　冬・二　賀・一　旅・二　雜三・一　神・二　〔續千〕春下・一　秋下・一　〔續後拾〕冬・一　戀三・一　戀四・一　神・一　〔風雅〕春下・一　夏・一　秋下・一　冬・二　戀一・一　戀四・一　〔新千〕春上・一　秋下・一　旅・一　〔新拾〕秋下・一　戀五・一　〔新後拾〕秋下・一　雜秋・一　〔新續古〕秋上・二　冬・一　戀三・一

實雅　従一位青蓮花院内大臣。紹宏院藤公雅男　〔新續古〕春下・一　夏・一　戀二・一　戀四・一　左衛門督

實雄　従一位山階入道前左大臣。西園寺藤原公經男　〔續後撰〕夏・一　秋上・一　秋中・一　秋下・二　冬・一　神・一　戀二・一　權大納言　〔續古〕春上・一　秋上・二　秋下・一　冬・二　戀一・一　戀三・一　戀四・二　哀・二　雜上・一　賀・一　前左大臣　〔續拾〕春上・二　夏・一　秋下・一　雜春・一　雜秋・一　賀・一　戀二・一　戀三・一　雜上・一　神・二　山階入道前左大臣　〔新後撰〕春上・一　春下・一　夏・一　旅・二　戀一・一　雜下・一　〔玉葉〕春下・一　秋上・一　賀・一　旅・一　雜一・一　雜五・二　〔續千〕春上・一　春下・一　夏・一　旅・一　戀一・二　〔續後拾〕春上・一　戀四・一　雜上・一　〔風雅〕秋下・一　旅・一　雜中・二　賀・三　〔新千〕秋下・一　雜上・三　〔新拾〕春上・一　秋上・二　冬

・一 戀一・一 戀五・一〔新後拾〕夏・一 秋上・
一 冬・一 雜下・一〔新續古〕春上・二 秋上・一
秋下・一 戀一・一 戀二・一

實量 從一位後三條左大臣。後白川藤原公光男 〔新續古〕秋下・一 旅
・二 戀三・一 權大納言

實經 從一位後一條入道前關白左大臣。光明峯寺藤原通家男 〔續後撰〕戀五・一
雜上・一 前攝政左大臣 〔續古〕秋上・一 秋下・二 冬・二
神・一 戀二・一 戀五・一 哀・一 雜中・一 雜
下・一 關白前左大臣 〔續拾〕春上・二 春下・一 夏・二
秋上・一 秋下・一 冬・二 雜春・一 雜秋・二
戀二・一 戀五・三 雜上・三 雜中・二 前關白左大臣一條
〔新後撰〕春上・一 釋・一 神・一 雜下・二 賀・
一 後一條入道前關白左大臣 〔玉葉〕春上・一 春下・一 秋上・
二 秋下・一 冬・一〔續古〕春上・一 冬・一 雜
上・一 雜下・一〔續後拾〕冬・一 戀一・一〔風
雅〕夏・二 冬・一〔新千〕雜上・一 雜下・一〔新
拾〕春下・一 雜上・一

實意 僧正 〔新續古〕雜上・一

實源 叡山律師 〔後拾〕戀一・一 法師 〔金葉〕戀上・一
〔續詞花〕春下・一〔新葉〕雜下・一

實瑜 仁和寺成就院大僧正。侍從藤原公仲子 〔續後撰〕雜中・一 法印
〔續拾〕雜下・一〔新後撰〕戀四・一〔新續古〕釋・
一

實圓 僧都 〔續詞花〕夏・一

實隆 正二位中納言。春宮大夫藤原公實男 〔新勅〕春下・一 中納言

實筭 法印 〔新後拾〕戀二・一

實資 從一位小野宮右大臣。藤原清愼公男。號賢人右大臣 〔拾遺〕雜賀・一 右大將 〔新古〕哀・一 小野宮右大臣 〔新勅〕賀・一 〔續後撰〕雜上・一 〔續古〕別・一 雜上・一 〔續後拾〕春上・一 〔新千〕哀・一

實熙 四位。藤原 〔風雅〕戀四・一 四位

【實】十四畫―二十三畫】

實誓 僧都 〔後拾〕秋上・一

實壽 僧正 〔新後撰〕釋・一 權少僧都 〔續千〕釋・一 法印 〔新千〕釋・一 僧正

實疑 法印 〔新續古〕別・一

實遠 從二位中納言。中納言藤原季雄男 〔新後拾〕冬・一 雜秋・一 前中納言 〔新續古〕春下・二 冬・一 戀一・二

實遠 從三位。藤原公冬男 三位 〔新後撰〕戀五・一 作從 〔新千〕戀五・一 從三位 〔新拾〕雜中・一

實綱 從二位中納言。內大臣藤原公實男 權中納言 〔千載〕雜上・一 〔續詞花〕雜下・一

實綱 正三位。右中將藤原公直男 〔續千〕雜上・一 正三位

實綱 四位式部大輔。從二位藤原資業男。永保二年三月廿三日卒 〔後拾〕雜一・一 〔金葉〕別・一

實數 前大納言。閑院三條內大臣藤公秀男 〔新葉〕戀一・一 戀三・一

實叙 法師 〔續詞花〕別・一

實澄 法印 〔風雅〕釋・一

實興 權中納言 〔新葉〕春上・一 春下・一 夏・一 秋上・一 戀一・一 戀三・一 戀四・一 雜中・一

實親 從一位三條右大臣。淨土寺相國藤原公房男 〔續後拾〕秋上・一 三條右大臣實

實衡 從一位西園寺内大臣。竹林院藤原公衡男 〔玉葉〕秋下・一 權中納言 〔續千〕冬・一 戀二・一 戀五・一 前大納言 〔續後拾〕夏・一 秋下・一 内大臣 〔新千〕戀一・一 戀二・一 〔新拾〕秋下・一

實聽 興福寺西南院權僧正。大納言爲氏子 〔新後撰〕釋・一 法印 〔玉葉〕釋・一 〔續千〕神・一 雜上・一 〔續後拾〕釋・一 〔新千〕雜上・一

實藏 律師 〔新後拾〕戀四・一

實舉 僧都 〔續千〕雜中・一

實繼 從一位後八條前内大臣。八條藤原公秀男 〔新千〕冬・一 戀一・一 雜中・一 賀・一 按察 〔新拾〕春下・一 夏・一 哀。一 戀二・一 戀四・一 雜上・一 雜中・一 〔新後拾〕秋下・一 雜春・二 雜秋・二 戀三・一 前内大臣實 〔新續古〕春上・一 夏・二 秋上・一 秋下・一 冬・一 旅・一 戀二・二 戀四・二 雜上・一 雜中・一 雜下・二 神・一 後八條前内大臣

實顯 法印仙藏坊 〔新千〕戀三・一 〔新拾〕戀三・一

十五畫

篁 從三位參議。參議小野岑守男（一四六二―一五一二） 〔古今〕冬・一 旅・三 哀・二 雜下・二 小野篁朝臣 〔新古〕戀五・二 參議 〔續古〕戀二・二 〔玉葉〕戀一・二 〔新千〕戀二・一 〔古今和歌六帖〕

禎子内親王家攝津 〔新勅〕秋下・一 旅・一 雜一

・一　〔續後撰〕戀一・一　〔續千〕夏・一　〔新續古〕
雜中・一

諄子內親王　土御門院御女　〔玉葉〕雜一・一

熱田　〔玉葉〕神・一　〔新拾〕神・一

蔭基　六位近江大掾。相模守藤原博文男イ轉文男　〔後撰〕冬・一　戀六・一

緣達師　〔萬葉〕卷八・一

潤爲　僧都　〔風雅〕雜上・一

養德院左大臣　滿詮公に同じ

播磨娘子　〔萬葉〕卷九・二

【節】

節信　四位河內守。藤原。至寬德元年　〔後拾〕春上・一　別・一　〔金葉〕夏・一

節麿　大伴部　〔萬葉〕卷二〇・一

【磐】

磐前　他田部子　〔萬葉〕卷二〇・一

磐姬皇后　仁德帝后（一一〇〇七）　〔萬葉〕卷二・四　〔古今和歌六帖〕

【談】

談天門院　後醍醐院國母參議忠繼女　〔續千〕春下・一　釋・一　戀一・一　雜中・一　〔續後拾〕秋上・一　雜中・一　〔新千〕雜下・一　〔新續古〕戀四・一

談天門院帥　〔續千〕雜中・一

【興】

興信　法師俗名出羽守紀宗信　〔新後撰〕雜下・一　〔續千〕雜上・一　紀宗信

興雅　僧正　〔新後拾〕雜春・一

興風 六位河内大掾。相模掾藤原道成男 〔古今〕春下・三 秋上・一 秋下・二 冬・一 此歌拾遺冬人丸 賀・一 戀二・三 戀四・一 戀五・一 雜上・一 雜體・三誹諧 〔後撰〕春中・一 秋中・一 秋下・一 戀二・一 雜二・一 〔新古〕春下・一 賀・一 戀一・一 戀三・一 〔續古〕春下・一 戀二・一 戀五・一 〔玉葉〕戀三・二 〔續千〕秋下・一 戀五・一 〔續後拾〕戀二・一 雜中・一 〔風雅〕春下・一 〔新千〕雜中・一 〔新拾〕雜上・一 〔古今和歌六帖〕〔三十六人集〕六二 〔寛平后宮歌合〕春・三 秋・二 冬・二 戀・四 〔亭子院歌合〕初春・三 季春・四 夏・二

興俊 六位大江 〔後撰〕雜二・一

【德大寺】

德大寺入道太政大臣 實基公に同じ

德大寺入道前太政大臣女 〔續拾〕雜春・一

德大寺左大臣 實能公に同じ

德大寺前内大臣 後野宮内大臣に同じ

【稻】

稻公 大伴 〔萬葉〕卷四・一 卷八・一

稻布 荒氏 〔萬葉〕卷五・一

稻足 土師 〔萬葉〕卷一五・一

稻荷 〔詞花〕雜下・一 〔續古〕神・一

稻麿 丈部 〔萬葉〕卷二〇・一

【賢】

賢助 東大寺三寶院大僧正。山本相國公守公子 〔玉葉〕雜一・一

賢俊 醍醐座主三寶院大僧正。大納言俊光子 〔風雅〕雜一・一 〔新千〕

冬・一　旅・一　〔新拾〕冬・一　戀四・一　〔新後拾〕雜春・一　〔新續古〕春上・一　戀四・一　雜上・一　雜中・一

賢珠　上人　〔新新拾〕釋・一

賢智　法師　〔詞花〕雜下・一　〔千載〕戀一・一　〔續詞花〕春下・一　戀上・一

賢雅　僧都　〔新續古〕戀四・一

【儀】

儀子內親王　花園帝御女　〔風雅〕春中・二　春下・一　秋上・一　秋中・一　秋下・一　冬・三　戀三・三　戀四・五　雜上・二　雜中・二　雜下・三　〔新千〕戀三・一

儀同三司　兼綱公に同じ

儀同三司　實敎に同じ

儀同三司　實香公に同じ

儀同三司母　從二位高階成忠女　〔拾遺〕雜賀・一　高階成忠女　〔後撰〕戀二・一　雜二・一　〔詞花〕雜上・一　高內侍　〔新古〕戀三・一　儀同三司母

【增】

增珍　僧正　〔新續古〕雜中・一

增基　叡山法師　〔後撰〕冬・一　〔後拾〕夏・一　冬・一　別・二　旅・二　戀三・二　雜三・一　雜四・二　雜六・二　神一。誹諧一　〔詞花〕夏・一　雜下・二　〔新古〕夏・一　雜上・一　〔玉葉〕旅・一　雜一・一　雜五・一　神・一　〔續後拾〕哀・一　〔風雅〕冬・一　〔新千〕雜上・一　〔新拾〕秋下・一　〔新續古〕旅・一　〔續詞花〕秋上・二　戲・一

増賀 上人多武峯。諫議大夫橘惟平子 〔新古〕雑下・一 釋・一 〔續千〕秋上・一 旅・一 釋・一 哀・一

増運 法印 〔新後拾〕雑上・一

増瑜 僧叡 〔新後拾〕雑秋・一

増覺 興福寺律師。中納言經季子 〔金葉〕春・一

【蓮】

蓮上 法師俗名荒木田成定 〔千載〕釋・一

蓮月 太田垣 〔海士の刈藻〕三一〇

蓮生 法師俗名宇都宮彌三郎朝忠。左衛門尉藤原業綱子 〔新勅〕旅・一 釋・一 雑三・一 〔續後撰〕秋中・一 釋・一 戀一・一 雑中・一 旅・一 〔續古〕夏・一 雑下・一 〔續拾〕秋上・一 雑春・一 雑秋・一 戀四・一 雑下・一 釋・二 〔新後撰〕別・一 釋・三 雑中・一 雑下・一 〔玉葉〕春下・一 戀一・一 雑一・一 釋・一 〔續千〕秋上・一 旅・一 釋・一 哀・一 〔續後拾〕戀四・一 〔新千〕秋下・一 旅・一 釋・一 〔新後拾〕戀二・一 〔新續古〕戀一・一 戀五・一 戀四・一

蓮仲 叡山法師。佐渡守藤原爲信子 〔後拾〕雑五・一 神・一

蓮阿 法師俗名兵衛尉藤原朝定。波多野刑部丞義定子 〔續後撰〕雑下・一

蓮寂 法師。和泉守道經子 〔詞花〕雑下・一 沙彌

蓮智 法師俗名宇都宮遠江守貞泰。常陸介泰宗子 〔新千〕戀三・一

蓮道 法師 〔新後拾〕雑上・一

【澄】

澄月 垂雲軒。寛政十年寂八十五和歌爲名抄。 〔垂雲歌集〕

澄世 律師 〔續千〕釋・一

澄守 僧都 〔續千〕戀一・一

澄俊　法印。法印憲實子　權大僧都　〔續千〕釋・一　〔新千〕釋・一
雜中・一　法印
澄基　法眼聖護院。法印源基子　〔新千〕戀三・一　〔新後拾〕旅・一
澄舜　法印　〔續拾〕雜中・一　〔新後撰〕戀四・一　〔續
千〕雜下・一
澄經　僧正　〔新拾〕哀・一
澄寛法師母　〔新續古〕戀三・一
澄憲　法印安居院。日向守通憲子　〔千載〕哀・一　〔續拾〕雜下・一
澄覺法親王　座主无品大僧正梶井。雅成親王御子　〔續後撰〕雜下・一
〔續古〕秋上・二　釋・一　哀・一　雜上・一　〔續拾
〕春下・一　秋上・一　雜春・一　雜秋・二　雜下・一
神・一　〔新後撰〕釋・一　戀一・一　雜上・一　〔玉
葉〕雜一・一　〔續千〕冬・一　〔新千〕釋・一　雜上・
一　哀・一　〔新拾〕雜上・一　〔新後拾〕雜秋・一
〔新續古〕戀二・一　雜中・一名物

【慶】

慶有　僧都　〔新後拾〕神・一
慶忠　法印　〔新勅〕釋・一　雜一・一
慶宗　法眼小野社僧　〔續千〕神・一
慶政　松尾證月坊上人　〔續古〕別・一　哀・二　〔續拾〕釋・一
〔玉葉〕雜五・一　釋・四　〔風雅〕秋下・一　冬・一
雜上・二　雜下・一　釋・二　〔新千〕釋・一　〔新拾〕
釋・一　〔新後拾〕釋・一
慶深　〔新續古〕戀五・一
慶基　法師　〔續詞花〕戀中・一
慶尋　法師。駿河守平業任子　〔後拾〕冬・一

慶意 叡山律師。文章生章輔子 〔後拾〕戀三・一

慶運 法印。法印淨辨子 〔風雅〕雜中・一 權律師 〔新後拾〕冬・一 雜春・一 雜上・二 法印 〔新續古〕春下・一 秋下・一 冬・一 釋・一 戀二・一 戀三・一 戀四・二 戀五・一 雜上・三 雜下・一

慶算 法印。大納言源俊通子 〔新古〕冬・一 法眼 〔新勅〕神・一 法印

慶範 叡山法師。右京亮中原致行子 〔後拾〕夏・一 別・一 雜五・一 雜・六一 釋教歌 〔千載〕哀・一 〔續詞花〕哀・一

慶範 叡山律師 〔金葉〕雜上・一 雜下・一

慶暹 叡山律師。宇佐大宮司公宣子 〔後拾〕秋上・一 賀・一 戀三・一 雜六・一 釋教歌 〔金葉〕雜下・一 連歌 〔千載〕夏・一 〔新古〕哀・一 〔續古〕雜上・一

慶融 法眼。大納言爲家子 〔續拾〕雜春・一 雜秋・一 戀四・一 〔新後撰〕秋上・一 神・一 雜上・一 雜下・二 〔玉葉〕雜二・一 〔續千〕夏・一 秋上・一 雜三・一 〔續後拾〕雜中・一 〔新千〕秋下・一 雜下・一 〔新後拾〕秋下・一 〔新續古〕夏・一

【範】

範玄 興福寺中山權僧正。伊賀守藤原爲業子 〔千載〕春下・一 哀・一 雜下・一 誹諧 神・一 權大僧都 〔續後撰〕秋上・一 權僧正

範永 四位攝津守。尾張守藤原仲清男。康平八年六月十三日遷任紀伊守 〔後拾〕春上・二 夏・一 秋上・二 秋下・三 賀・一 雜一・三 雜四・一 神・一 四位 〔金葉〕戀下・一 〔詞花〕春・一 戀上・一 〔千載〕旅・一 哀・一 〔新古〕秋上・一 別・一 戀三・一 〔續古〕戀一・一 〔續拾〕秋上・一

〔續千〕戀二・一　〔續後撰〕戀二・一　〔新千〕戀三・一　〔新拾〕雜上・一　〔新後拾〕戀二・一　〔新續古〕戀二・一　〔續詞花〕夏・一　秋下・一　別・一　旅・一　雜下・一

範光　從三位中納言。刑部卿藤原範兼男　〔新古〕夏・一　雜上・一　民部卿〔續拾〕賀・一　前中納言

範行　五位。藤原　〔續千〕戀二・一

範秀　六位小串六良左衛門。藤原　〔玉葉〕雜一・一　〔續千〕戀五・一　雜上・一　〔新後拾〕雜中・一　〔風雅〕雜下・一

範宗　從三位。部兵少輔藤原基明男　〔新勅〕秋下・一　戀五・三　雜二・一　雜四・一　從三位　〔續後撰〕春中・一　〔新後撰〕戀二・一　〔玉葉〕秋下・一　〔續千〕冬・一　〔續後拾〕賀・一　〔新續古〕春上・一　夏・一

範忠　四位兵部大輔。前內藏頭藤原淸範男　〔續古〕雜上・一　四位

範空　上人　〔新拾〕雜上・一

範政　四位今川民部少輔。上總介源泰範男　〔新續古〕戀一・一　雜中・二　四位

範貞　五位左近大夫。備前守平時範男　〔續千〕旅・一　〔續後拾〕戀三・一

範重　四位。刑部大輔藤原家國男　〔新後撰〕旅・一

範兼　從二位。式部少輔藤原能兼男　〔千載〕秋下・二　賀・一　戀二・二　戀四・一　刑部卿　〔新古〕春下・一　冬・一　賀・二　戀四・一　雜上・一　〔新勅〕冬・一　〔續後撰〕秋中・一　〔新後撰〕秋下・一　〔續後拾〕秋下・一　〔新千〕冬・一　〔新拾〕秋下・一　〔新後拾〕旅・一　〔新續古〕雜中・一　雜下・一　〔續詞花〕秋下・二

雜上・一

範兼　僧正　〔新後撰〕雜上・一

範國　五位。散位藤原永雅男　〔詞花〕戀下・一　〔千載〕春上・一
春下・一

範隆　六位。藥師寺、橘　〔新千〕戀一・一

範綱　本名雅清。五位左馬助。散位藤原永雅男　〔詞花〕戀下・一　〔千載〕
春上・一　春下・一　〔續詞花〕春下・一　秋上・一
戀中・一　雜上・一

範輔　從三位中納言。從二位藤原範國男　〔新續古〕秋上・一

範憲　興福寺三藏院大僧正。法印尊憲子　〔新後撰〕釋・一　雜上・一
〔玉葉〕春下・一　〔續千〕釋・二　〔續後拾〕釋・一
〔風雅〕秋・一　雜上・一　雜下・一　〔新千〕冬・一

範藤　從三位。侍從藤原範繼男　〔新後撰〕雜上・一　前左兵衛督　〔玉葉〕
雜四・一

【廣】

廣方　占部　〔萬葉〕卷二〇・一

廣日　玉造部　〔萬葉〕卷二〇・一

廣平親王　三品兵部卿。天暦帝御子。天祿二年九二薨　〔拾遺〕戀三・一　廣平親王　〔新續古〕春下・一

廣世　高圓　〔玉葉〕秋上・一

廣耳　小治田　〔萬葉〕卷八・二

廣言　五位筑後守。日向守惟宗基言男。自永暦元年至壽永元年少監式部　〔千載〕春下・
一　秋下・二　冬・一　戀五・一　〔玉葉〕戀五・一

廣秀　五位長井大膳大夫。大江　〔風雅〕秋下・一　雜下・一　〔新
拾〕戀三・一　神・一　〔新續古〕秋・一

廣足　物部　〔萬葉〕卷二〇・一

廣足　若舎人部〔萬葉〕巻二〇・二

廣足　中島元治元年歿七十三。しのすだれ〔橿園歌集〕八八一　長歌二五　旋頭歌三

廣成　石川〔萬葉〕巻四・一　巻八・二

廣成　葛井〔萬葉〕巻九・二

廣成　大伴部〔萬葉〕巻二〇・一

廣河女王〔新勅〕戀二・一〔萬葉〕巻四・二〔古今和歌六帖〕

廣房　五位。相模守橘以綱男〔新勅〕雑五・一名物

廣房　五位。因幡守大江廣茂男〔續千〕旅・一　戀四・一　雑上・一〔續後拾〕冬・一〔新千〕冬・一　釋・一　戀五・二〔新拾〕哀・一〔新後拾〕雑春・一

廣茂　五位中條因幡守。散位大江忠成男〔新後撰〕戀二・一〔續千〕戀二・一　雑上・一〔續後拾〕雑下・一〔新千〕雑下・一

廣島　雀部〔萬葉〕巻二〇・一

廣庭　従三位中納言。左大臣安倍御主人男。養老比人也(一一三九二)〔拾遺〕雑春・一

中納言安倍廣庭〔萬葉〕巻三・二　巻六・一　巻八・一　巻九・一

廣嗣　藤原〔萬葉〕巻八・一

廣經　四位伊賀守。遠江守大江公資男。至寛治三年〔後拾〕旅・一　四位

廣義門院　後伏見院妃寧子。竹林院公衡公女〔玉葉〕秋上・一　冬・一　戀一・二〔續千〕戀三・一　戀四・一　雑中・一〔新千〕秋上・一

廣辨　角〔萬葉〕巻八・一

廣範　従三位。従二位藤原義範男〔玉葉〕雑五・一　従三位

廣幡左大臣　顯光に同じ

廣幡御息所 中納言庶明女 〔拾遺〕戀三・一 雜賀・一連歌

廣瀨王 〔萬葉〕卷八・一

廣繩 久米 〔拾遺〕夏・一 〔萬葉〕卷一八・二 卷一九・六 長歌卷一九・一 〔古今和歌帖〕

十六畫

鴨 〔風雅〕神・一

融 從一位河原左大臣。嵯峨帝御子 〔古今〕戀四・一 雜上・一河原左のおほいまうち君 〔後撰〕春中・一 雜一・一河原左大臣 〔古今和歌六帖〕

凝 六位。源 〔續古〕別・一

龍 物部 〔萬葉〕卷二〇・一

龜山院 諱恆仁。後嵯峨帝御子 〔續古〕春上・二 秋上・二 冬・二 戀一・一 戀二・一 戀三・二 賀・一今上御歌 〔續拾〕春上・二 春下・一 夏・二 秋上・三 秋下・二 冬・二 賀・一 戀一・二 戀三・一 戀四・一 戀五・一 神・二太上天皇 〔新後撰〕春上・二 春下・一 夏・一 秋上・二 秋下・三 冬・三 旅・一 釋・一 神・一 戀一・一 戀二・一 戀六・一 雜中・三 雜下・一 賀・三法皇御製 〔玉葉〕春上・一 春下・二 夏・二 雜一・二 雜四・一龜山院御製 〔續千〕春上・二 夏・一 秋上・一 秋下・一 冬・一 戀一・一 戀二・二 戀三・一 戀四・二 雜上・二 雜中・三 賀・一 〔續後拾〕春下・一 秋下・一 戀三・一 雜上・一 雜下・一 〔風雅〕冬・一 〔新千〕春上・一 秋上・一 秋下・一 神・一 雜上・一 賀・一 〔新

拾〕春上。一　秋上。一　戀四。一　神・一　雜中。一　〔新後拾〕春上・一　冬。一　〔新續古〕秋上・一　冬。一　雜上・一　雜中。二　神。一

篤行　五位筑前守。平興我王男。延喜十年卒　〔古今〕物名・一

暹秀　法印　〔玉葉〕釋・一

憶良　五位。山上　(一一三九三)　〔新古〕旅。一　〔新勅〕春上。一　〔續後撰〕秋上・一　〔玉葉〕秋上・一　戀一・一　〔萬葉〕卷一・一　卷二・一　卷三・一　卷五。五〇　卷六。一　卷八・一二　卷九・一　長歌卷五・一〇　卷八・一　旋頭歌卷八・一　〔古今和歌六帖〕

褰帳女王　〔新勅〕戀二・一　とばりあけの女王

膳部王　〔萬葉〕卷六・一

曉勝　法師　〔新後拾〕戀三・一

整　五位。參議源等男。至承平五年　〔後撰〕秋下・一　戀六。一

寬覺　法師　〔新後拾〕雜下。一

叡覺　法師。右少辨定成子。俗名信綱　〔後拾〕夏・一　秋上。一　哀・一　戀三・一

【縣】

縣犬養命婦　〔萬葉〕卷一九・一

縣犬養娘子　〔萬葉〕卷八・一

【醍醐】

醍醐入道前太政大臣　良平公に同じ

醍醐入道前太政大臣女　〔續古〕戀二。一　雜中・一　〔續拾〕雜秋・一　戀五・一

醍醐天皇　諱敦仁。亭子院御子　(一五四五—一五九〇)　〔後撰〕春中・一　秋中・一　戀二・二　延喜御製　〔拾遺〕夏・一　雜戀・一

〔新古〕春下・一　夏・一　冬・一　哀・一　戀一・一　戀三・二　戀四・一　戀五・一御歌　〔新勅〕冬・一　戀三・一　戀四・一御製　〔續後撰〕春中・一　春下・一　秋上・一　戀三・二　雜中・一　賀・一　〔續古〕春下・二　秋上・一　冬・一　別・一　戀四・一　哀・一　雜中・一御歌　〔玉葉〕冬・一　賀・一　戀一・一　戀・二・一　戀四・一御製　〔續後拾〕戀四・一　〔新千〕秋上・一　戀二・一　〔新拾〕秋下・一　〔新後拾〕戀三・一　〔新續古〕冬・一

【橘】

橘公平女　〔後撰〕春下・一

橘俊宗女　〔金葉〕戀上・一　戀下・三

橘贈太政大臣　諸友公に同じ

【選子】

選子内親王　天暦帝御女（一六二四—一六九五）　〔拾遺〕哀・一齋院　〔後拾〕春上・一　別・一　哀・一　雜・三一　雜五・三　〔金葉〕雜下・二　〔詞花〕雜下・一　〔千載〕雜上・一　〔新古〕釋・一　〔新勅〕釋・三　雜一・二　〔續後撰〕釋・三　〔續古〕別・一　〔續拾〕雜秋・一　釋・二　〔玉葉〕春下・一　雜三・一　雜四・二　雜五・一　釋・一　〔續千〕秋上・二　〔續後拾〕釋・二　〔風雅〕秋中・一　〔新千〕哀・一　〔新後拾〕雜春・一

選子内親王家中將　齋院中將に同じ

選子内親王家宰相　〔新勅〕秋下・一　雜一・一

【憲】

憲淳　權僧正。大納言爲世子　〔玉葉〕春下・一　秋上・一　釋・一

〔續千〕哀・一　〔風雅〕雜上・一

憲基　叡山南都法印。法印憲實子　〔新後撰〕雜中・一　〔玉葉〕秋中・一　〔續千〕哀・一

憲實　法印。法印隆承子　〔續古〕釋・一　〔續拾〕雜春・一　戀三・一　戀五・一　雜下・一　〔新後撰〕秋下・一　〔玉葉〕冬・一　〔續千〕釋・一　〔續後拾〕釋・一　〔新千〕釋・一　〔新拾〕釋・一　〔新續古〕雜上・一　雜中・一

【諸】

諸人　若麻續部　〔萬葉〕卷二〇・一

諸立　庵　〔萬葉〕卷八・一

諸平　加納。安政四年歿五十二。安米都知、晉舟集摘草。　〔柿園詠草〕一〇八二　長歌三二一

諸兄　正一位井手左大臣。(一三六二—一四一七) 橘美努王男　〔新勅〕賀・一　〔續後撰〕冬・一　〔續千〕雜上・一　〔續後拾〕雜上・一　〔新千〕春上・一　〔萬葉〕卷六・一　卷一七・一　卷一八・一　卷一九・一　卷二〇・四　〔古今和歌六帖〕

諸會　葛井　〔萬葉〕卷一七・一

諸實　六位。清原　〔後撰〕戀三・一

【辨】

辨　〔新古〕戀五・一

辨內侍　後深草院辨內侍に同じ

辨玉　明治十三年寂六十三　〔瓊々室集〕二三　長歌二一二

辨乳母　陽明門院御乳母。加賀守藤原顯時女　〔後拾〕春上・二　戀四・一　雜一・一　雜四・二　雜六・一　釋敎　〔續千載〕哀・一　戀三・一　雜中・一　〔新古〕夏・一　哀・一　〔續後

撰〕戀四・一　賀・一　〔續古〕秋上・一　〔玉葉〕夏・一　冬・一　戀一・二　戀三・一　戀四・二　雜四・一　雜五・一　〔千載〕春・一　雜賀・一　〔續後拾〕秋上・二　別・一　〔新拾〕賀・一　〔續詞花〕秋下・二　戀下・一　戲・一

辨基　法師　〔新勅〕旅・一

辨敎　法印。左衛門尉盛綱子　〔新千〕雜上・一

【靜】

靜仁法親王　二品熊野撿校山臥。土御門帝御子　〔續後撰〕雜上・一

靜仁法親王　〔續古〕秋下・一　雜上・一　〔續拾〕雜春・二　雜秋・二　雜中・二　〔新後撰〕別・一　戀一・一　雜上・一　雜中・一　〔玉葉〕秋下・一　〔續千〕雜上・一　雜下・一　〔風雅〕雜中・一　〔新千〕雜上・一　雜中・一　〔新拾〕釋・一　〔新後拾〕雜上・一　〔新續古〕夏・一　秋中・一　戀四・一

靜伊　權僧正。大納言伊賴子　〔續千〕雜上・一　法師　〔風雅〕雜上・一　前權僧正　〔新千〕雜上・一

靜敎　法師　〔續詞花〕雜下・一

靜圓　木幡權僧正。二條關白敎通公子　〔後拾〕春上・一　戀三・一　〔金葉〕雜下・一　〔續後撰〕雜下・一　〔續詞花〕戀中・一

靜資　法眼　〔續詞花〕旅・一

靜賢　法印法勝。日向守藤原通憲子　〔千載〕春下・一　秋上・一　冬・一　戀二・一　戀四・一　雜上・一　〔新古〕雜上・二　〔玉葉〕雜四・一　〔新續古〕神・一

靜澄　法眼。佐渡守藤原房長子　〔續千〕雜中・一

靜蓮　法師俗名重茂。治部丞賴綱子　〔千載〕雜上・一　〔續詞花〕秋上・一

靜縁　叡山阿闍梨　〔千載〕哀・一　戀二・一

靜嚴　法師　〔金葉〕雜下・一　〔千載〕哀・一　〔續詞花〕春下・一　哀・一

靜觀　僧正　〔續後撰〕釋・一

【親　四―十畫】

親元　五位安房守。源。至承德三年　〔詞花〕雜下・一

親文　四位。紀　〔新後拾〕雜春・一　雜秋・一 四位　〔新葉〕夏・一

親方　從三位。木工頭藤原俊嗣男　〔新後撰〕戀三・一 五位　〔玉葉〕戀一・二　雜一・一 四位

親王家甲斐　輔仁親王家甲斐に同じ

親世　五位。三位平親繼男　〔新後撰〕冬・一　雜上・一　雜下・二　〔玉葉〕雜四・一　雜五・一　〔續千〕雜上・一

親光　從二位大納言。大納言源光忠男　〔新拾〕神・一 前中納言

親行　四位。藤原　〔風雅〕冬・一　戀四・一　雜中・一 四位

親行　五位式部丞。河内守源光行男　〔新續古〕雜上・一　〔續古〕雜上・一　〔續拾〕雜春・一　雜秋・一　戀二・一　〔新千〕戀三・一

親佐　藤原　〔續詞花〕戀中・一

親長　四位。右馬頭源兼康男　〔續拾〕戀二・一　雜下・一 五位　〔新後撰〕秋下・一　戀一・一　戀二・一　戀三・一　戀四・一 四位　〔玉葉〕釋・一　〔續千〕旅・一　戀一・一　雜上・一　〔續後拾〕旅・一　〔新千〕秋上・一　〔新後拾〕戀四・一

親忠　民部卿。右大辨藤清忠二男歟清忠所詳載之。又六條內大臣源有房三男有同名者是歟。兩人之內未決〔新葉〕秋上•一　賀•一

親宗　五位。大中臣〔千載〕旅•一

親宗　從二位中納言。贈左大臣平時信男〔千載〕夏•一　秋下•一　冬•二　左大辨〔新古〕夏•一　權中納言〔新勅〕戀三•一　〔玉葉〕春上•一　賀•一　雜四•一

親房　正二位大納言。大納言源師重男〔續千〕冬•一　戀三•一　權大納言〔續後拾〕秋上•一　戀二•一　大納言〔續詞花〕戀上•一　戲•二　〔新葉〕春上•二　春下•三　夏•一　秋上•二　秋下•一　冬•三　旅•一　神•二　釋•二　戀三•一　戀四•一　雜上•五　雜下•二　哀•一

親房　五位遠江守。淡路守源仲房男。至久安二年〔金葉〕夏•一　秋•一　戀下•一　〔千載〕冬•一　〔新續古〕雜下•一　誹諧

親重　藤原〔續詞花〕戀中•一　戀下•一

【親　十一畫—二十三畫】

親清　五位。平〔新續古〕戀二•一　戀五•一

親康　五位。藤原〔新勅〕雜一•一　雜三•一

親敎　從三位。中納言源資平男〔新後撰〕戀四•一　五位〔續千〕戀四•一　戀五•一　雜中•一　〔續後拾〕戀一•一　從三位

親敎　僧都〔續詞花〕戲•一

親朝　宇都宮朝業子。鹽谷周防守從五位下歟〔續拾〕旅•一

親雅　從二位大納言。中納言藤原定宗男〔新後拾〕冬•一　戀一•一　右衞門督〔新續古〕冬•一　戀四•一　雜上•一　前大納言

親盛　五位大和守。文章生藤原說弘男。至建久三年〔千載〕夏•一　秋上•一　哀•一　戀二•一　雜上•一　〔新勅〕雜三•一　〔續後撰〕戀二•一　〔新後撰〕戀三•一　〔玉葉〕釋•一

親源　叡山天台座主檀那院大僧正。大納言雅家子　〔續千〕釋・一　〔續後拾〕釋・一　〔新千〕春下・一

親經　前參議　〔續詞花〕雜上・一

親隆　正三位參議。大藏卿藤原爲房男　〔詞花〕戀上。一　藤原親隆朝臣　〔千載〕春下・二　夏・一　秋下・一　戀二・一　戀三・一　戀四・一　戀五・一　雜上・一　前參議　〔新古〕秋下・一　〔新勅〕春上・一　〔續古〕戀三・一　〔玉葉〕雜一・一　〔新續古〕別。一　〔續詞花〕夏。一　秋下・一　雜下・一

親瑜　法眼　〔續千〕釋・一

親範　從三位參議。從三位平範家男　〔千載〕冬・一　民部卿

親範　五位大内記。筑前守源道濟男。至寛德二・七卅卒　〔後拾〕秋上・一

親範　五位周防守、藤原　〔新後撰〕雜上・一　〔玉葉〕雜二・一　〔續千〕雜上・一

親繼　五位。藤原親賢男　〔新勅〕旅・一　〔續後撰〕秋下・一　雜上。一　〔續後拾〕雜上・一

親嚴　仁和寺大僧正小野　〔新勅〕雜五・一　名物

【賴　一畫―八畫】

賴　六位。源　〔後撰〕戀三。一　〔古今和歌六帖〕

賴之　四位細川右馬頭。讃岐守源賴春男　〔新千〕戀三・一　五位　〔新後拾〕夏・一　秋上・一　雜秋・一　戀四・一　戀五・一　雜上・二　四位　〔新續古〕秋下・一　戀三・一　戀四・一　戀五・一　雜下・一

賴元　四位細川右京大夫。讃岐守源賴春男　〔新後拾〕冬・一　戀三・一　〔新續古〕夏・一　四位

賴氏　從二位。參議藤原高能男　〔新勅〕秋上・一　戀一・二　戀

二・一　雜一・一　四位　〔續後撰〕戀二・一　雜上・一　從三
位　〔續拾〕冬・一　戀五・一
賴氏　六位尾藤左衛門尉。左衛門尉藤原紹廣男　〔玉葉〕秋下・一　〔續千〕
雜上・一　雜下・一　〔續後拾〕雜上・一　〔風雅〕冬
・二　旅・一　雜下・一　〔新千〕旅・一
賴印　大僧正　〔新後拾〕雜春・一
賴光　四位攝津守。左馬頭源滿仲男。治安元年七月十九卒　〔拾遺〕戀四・一　四位
〔後拾〕戀一・一　四位　〔金葉〕雜下・一　連歌　〔續詞花〕
雜中・一
賴仲　大僧正若宮別當。仁木師義子　〔新千〕釋・一　〔新拾〕雜中
・二　〔新後拾〕雜上・一　釋・一
賴仲　五位土岐攝津守。隱岐守十郎源賴貞男　〔新拾〕雜中・一
賴武　源。　〔新葉〕秋下・一　冬・二　戀一・一　戀

二・二　戀三・一　戀五・一　雜上・一　雜下・一
賴孝　六位。藤原　〔千載〕哀・一　〔續詞花〕哀・一
賴秀　五位飯尾右近將監。三善　〔新後拾〕戀四・一　〔新續古〕戀
五・一
賴言　五位阿波守。飛驒寺高岳相如男。至長久三年　〔後拾〕春上・一　〔續詞
花〕哀・一
賴言　五位。源　〔新後拾〕戀二・一
賴成　五位淡路守。主稅頭中原貞清男。至承曆三　〔後拾〕別・一
賴成　五位上杉藏人。修理介藤原賴重男　〔風雅〕旅・一
賴成　源　〔續詞花〕物・一
賴長　從一位宇治左大臣。富家藤原忠實公男　〔詞花〕雜上・一　內大臣
賴宗　從一位堀川右大臣。御堂藤原道長男　〔後拾〕春上・一　春下・一
夏・二　秋上・三　秋下・二　冬・一　戀一・二　戀

四•二　雜一•一　雜二•一　雜三•一　雜五•一　雜六•一誹諧　〔金葉〕春•一　別•一　雜上•一　〔詞花〕秋•一　雜上•一　雜下•一　〔千載〕戀一•一　釋•一　〔新古〕秋上•一　秋下•一　〔新勅〕賀•一　〔續後撰〕秋上•一　〔續拾〕秋上•一　〔玉葉〕春上•二　秋上•一　雜一•一　〔續千〕夏•一　秋上•一　〔續後拾〕釋•一　〔新千〕戀三•一　哀•一　〔新拾〕雜上•一　〔續詞花〕春下•一　戀上•一　物•一

賴政　從三位。兵庫頭源仲政男　(一七六五―一八四〇)　〔源三位賴政集〕六八七　〔詞花〕春•一從五位　〔千載〕春上•一　夏•一　秋下•二　冬•二　戀一•二　戀二•二　戀三•二　戀四•二　雜上•一從三位　〔新古〕夏•一　秋上•二　哀•一　〔新勅〕戀三•一　雜一•一　雜五•一物名　〔續後撰〕春中•二　戀三•一　〔續古〕秋上•一　別•一　雜下•一　賀•一　〔續拾〕夏•一　〔新後撰〕春上•一　雜上•一　〔玉葉〕春下•一　秋上•一　秋下•一　戀五•一　雜五•一　〔續千〕物名•二　〔續後拾〕戀三•一　〔風雅〕春下•一　夏•一　旅•二　戀二•二　戀五•一　雜上•一　雜中•一　雜下•一　賀•一　〔新千〕雜中•二　〔新拾〕春上•一　雜下•一物名　〔新後拾〕冬•一　戀三•一　〔新續古〕春下•一　秋上•一　戀二•二　神•一　〔續詞花〕春下•一　戀上•一　旅•一　雜下•一

【賴　九畫―十二畫】

賴俊　五位陸奥守。肥前守源賴房男。至治曆三　〔後拾〕雜五•一

賴貞　五位土岐隱岐守。隱岐守源光定男。　〔玉葉〕戀二•一　〔風雅〕雜

下・一〔新千〕秋下・一 雜下・一〔新拾〕冬・一
旅・一〔新後拾〕雜春・一 旅・一 雜下・一
賴爽 法眼。〔新後拾〕雜春・一
賴俊 法印〔新後拾〕雜春・一
賴保 五位武藏守。美濃守顯保男。至嘉保三年〔詞花〕戀上・一〔續詞花〕戀上・二
賴春 四位讃岐守。細川源公賴男〔風雅〕雜上・一 五位〔新千〕旅・一 戀二・一〔新後拾〕秋下・一 冬・一 旅・一 戀三・二 雜上・一 四位
賴重 五位周防守。因幡守大江泰重男〔續古〕雜中・一〔續拾〕冬・一 旅・一 雜中・一〔新後撰〕釋・一 戀二・一 戀三・一 戀六・一〔玉葉〕釋・一 戀三・一 雜上・一〔續千〕秋上・一 旅・一 戀三・一〔續後拾〕戀三・二〔風雅〕雜上・一〔新千〕雜上・一 哀・一〔新拾〕夏・一 戀三・一
賴時 五位大友戸澤丹波守。藤原〔新千〕雜中・一
賴家 四位筑前守。中宮進源賴光男、至延久元年〔後拾〕秋上・二 秋下・一 冬・一 雜一・一 雜五・一 四位〔金葉〕賀・一〔詞花〕夏・一 雜上・一〔續詞花〕冬・一 旅・一 雜下・一
賴兼 五位。源〔新後拾〕戀一・一
賴益 五位細川遠江守。刑部卿源賴元男〔新續古〕戀一・一
賴泰 四位。藤原〔續千〕戀二・一
賴泰 五位大夫兵庫頭。大炊助平親秀男〔續拾〕戀三・一〔新後撰〕雜上・一
賴康 五位土岐大膳大夫。出羽守源賴雄男〔新千〕旅・一 戀五・一

〔新拾〕秋下・一　別・一　戀二・一　〔新後拾〕雜春・二　旅・一　戀二・一　雜上・一

頼清　四位。藤原　〔玉葉〕雜一・一四位　〔風雅〕雜上・一　〔新拾〕戀二・一　〔新後拾〕雜上。一

頼通　従一位宇治攝政關白太政大臣。(一六五二—一七三四)御堂道長男　〔後拾〕夏・一宇治前太政大臣　〔金葉〕賀・一　雜下。一連歌　〔詞花〕雜下・一　〔千載〕戀三・一宇治前太政大臣　〔新古〕春上・一　〔新勅〕春上・一宇治前關白太政大臣　〔續後撰〕夏・一　〔續古〕雜上・一　〔續拾〕賀。一　〔玉葉〕戀三・一　〔續千〕夏・一　〔續後拾〕賀・一　〔新千〕秋下・一　〔續詞花〕秋上・一

頼基　四位神祇大副。肥後守大中臣輔道男。至天暦五(一一六一八)　〔拾遺〕賀・一　雜戀・一五位　〔玉葉〕春下・一　秋下・一四位　〔續後撰〕春下・一　〔風雅〕冬・一　〔新千〕雜下・二誹諧　〔新拾〕秋上・一　〔新後拾〕雜春・一　〔三十六人集〕三一

頼基　従三位。宮内卿藤原師平男　〔新後撰〕旅・一従三位

頼基　僧都　〔金葉〕雜上・一

頼朝　正二位大納言。左馬頭源義朝男(一一八〇七—一八五九)　〔新古〕旅・一　雜下・二右大將　〔續後撰〕神。一前右大將　〔續古〕旅・一　〔續拾〕戀二・一　〔新後撰〕雜中・一　〔玉葉〕雜三・一　〔續千〕旅・一　〔續後拾〕旅・一　〔新千〕雜中・一

頼舜　僧正　〔新後撰〕戀五・一　〔玉葉〕釋・一　神・一　〔續千〕戀一・二

頼景　五位丹波守。城介藤原義景男　〔續古〕雜上・一　〔續拾〕旅・一　〔玉葉〕雜二・一

頼爲　源。吉見彦三郎頼宗男又三郎頼爲歟或作頼國　〔新葉〕雜上・一

【頴　十三畫—二十畫】

頼圓 興福寺法師。俊惠法師子 〔千載〕秋上・一

頼業 五位。左衛門尉藤原成綱男 〔新續古〕哀・一

頼算 法師 〔金葉〕雑下・一 連歌

頼經 法師 〔金葉〕雑下・一 連歌

頼意 前大僧正。日野護持院僧正 〔新葉〕春下・一 夏・一 神・二 釋・二 戀一・一 戀二・一 戀四・一 雑上・二 雑中・二 哀・一

頼資 從三位大納言。中納言藤原兼光男 〔新古〕賀・一 旅・一 權中納言 〔新勅〕賀・二 旅・一 〔玉葉〕賀・一 前中納言

頼資 五位大友式部大輔。法名宗久。源 〔新後拾〕戀五・一

頼隆 五位吉見大藏大輔。彦三郎源頼宗男 〔新千〕戀二・一 〔新拾〕戀二・一 雑上・一 〔新後拾〕雑春・一 雑秋・一

頼隆 或頼澄。坂上 〔新葉〕秋下・一 戀二・一 戀五・一

雑中・二

頼輔 從三位。大納言藤原忠教男 〔千載〕春上・一 秋上・一 旅・一 戀一・二 刑部卿 〔新古〕春下・一 戀三・一 雑下・一 〔續古〕雑上・一 雑中・二 〔續拾〕戀一・二 〔新後撰〕春下・一 夏・一 〔玉葉〕秋上・一 冬・一 旅・一 戀五・一 〔續千〕旅・一 釋・一 〔風雅〕夏・二 戀一・二 神・一 〔新拾〕秋上・一 〔新續古〕秋上・一 秋下・一 戀三・一 雑上・一 〔續詞花〕戀下・一 雑下・一

頼綱 四位下野守。左馬權督頼國男。號多田歌人 〔後拾〕夏・一 秋下・一 戀一・一 戀二・一 四位 〔金葉〕冬・一 雑下・一 連歌 〔詞花〕秋・一 〔續古〕賀・一 〔續詞花〕雑上・一 〔高陽院歌合〕五

賴遠　五位土岐彈正少弼。隱岐孫次郎源賴貞男　〔新千〕雜上・一　〔新拾〕雜上・一　〔新後拾〕戀四・一

賴實　五位。美濃守源賴國男　〔後拾〕夏・一　秋上・一　冬・一　雜四・一　雜五・一　〔玉葉〕冬・一　〔風雅〕夏・一　〔續詞花〕夏・一　神・一

賴實　從一位六條入道太政大臣。左大臣藤原經宗男　〔千載〕秋上・一　別・一　戀二・一　雜上・一　右衛門督　〔新古〕夏・二　秋上・一　秋下・一　戀二・一　前太政大臣　〔新勅〕春下・一　夏・一　秋下・一　旅・一　六條入道太政大臣　〔續後撰〕神・一　〔續古〕神・一　戀四・一　〔續拾〕春上・一　〔玉葉〕賀・一　〔新千〕釋・一　〔新拾〕旅・一　〔新續古〕神・一

賴慶　法師　〔後拾〕冬・一

賴衡　三善　〔新葉〕旅・一

賴豐　五位今峯右馬介。兵部少輔源氏光男　〔新後拾〕旅・一

賴齡　僧都　〔續千〕釋・一

十七畫

聰子內親王　後三條院御女　〔千載〕雜中・一

繁茂　五位左衛門尉。備前前司平信繁男　〔續後撰〕雜下・一

檜垣嫗　〔後撰〕雜三・一　ひがきの嫗

薀賢　俗名武藤掃部助爲用　〔新千〕釋・一　〔新續古〕戀四・一

【穗】

穗積朝臣　〔萬葉〕卷一六・一

穗積皇子　一品准后右大臣。天武帝御子(一―一三七五)　〔風雅〕秋中・一　〔萬葉〕卷二・一　卷八・二　〔古今和歌六帖〕

【謙】

謙德公北方　惠子女王に同じ

謙德　一條攝政伊尹に同じ

【濟】

濟　五位淡路守。參議源等男　至天曆十一年　〔後撰〕秋下・一　別・一

濟時　正二位大納言。小一條左大臣藤原師尹男　〔拾遺〕雜上・二　右大將　〔新古〕雜下・一　〔新勅〕雜一・一　左近大將　〔續後撰〕雜中・一　〔新千〕戀四・一

濟圓　僧都　〔續詞花〕秋下・一　戲・一

濟慶　興福寺僧都。參議有國子　〔詞花〕雜上・一　律師

【駿】

駿河　〔後撰〕戀一・一　別・一

駿河丸　正三位參議。高市大作大卿孫男　〔續古〕戀三・一　按察使

駿河麻呂　大伴　〔萬葉〕卷三・五　卷四・五　卷八・二

駿河婇女　〔萬葉〕卷四・一　卷八・一

【徽】

徽子內親王　齋宮女御に同じ

徽安門院　光嚴院妃。花園帝御女　〔風雅〕春上・二　春中・二　春下・一　夏・二　秋中・二　秋下・一　冬・二　戀一・三　戀二・一　戀四・二　戀五・一　雜上・一　雜中・三　雜下・二　〔新千〕夏・一　釋・一

徽安門院一條　大納言公蔭女　〔風雅〕春中・一　秋上・一　秋中・一　冬・一　戀一・一　戀二・一　戀三・三　雜中・三　〔新千〕冬・一　戀二・一　雜中・一　雜下・一　〔新拾〕秋上・一　戀二・一　戀三・一　雜上・一　〔新續古〕雜中・一

徽安門院小宰相　〔風雅〕夏・一　戀三・一　戀五・一

雜下・一　〔新拾〕雜上・一　〔新續古〕春上・一　春下・一　戀四・一

【齋】

齋宮のみこ　〔後撰〕柔子内親王に同じ

齋宮女御　徽子女王。重明親王御女（一五九六—一六四五）　〔拾遺〕雜上・三　戀四・一　〔後拾〕春下・一　秋上。一　雜一・三　雜二・一　雜三・一　〔新古〕秋上・二　哀。二　旅・一　戀三・一　戀四・一　戀五・二　雜中・一　雜下・一

女御徽子女王　〔續古〕雜下・二　秋上・一　別・一　旅・一　〔玉葉〕戀二・一　戀三・一　戀四・一　戀五・一　雜一・一　雜二・一　雜四・一　雜五・一　〔續千〕戀一。一　〔續後拾〕戀一・一　戀四・一　哀・一　〔新千〕戀四・一　哀・一　〔新後拾〕別・一　〔新續古〕哀・一　〔續詞花〕哀・一　戀下・一　雜下・一　〔三十六人集〕九二　〔同補遺〕一八

齋宮内侍　〔拾遺〕春・一　賀・一

齋院　〔拾遺〕　選子内親王に同じ　〔續詞花〕雜上・一

齋院小式部　〔續詞花〕戀下・一

齋院宰相　〔續詞花〕雜上。一

齋院師　〔續詞花〕戀中・一

齋院中務　齋院長官爲理女　〔後拾〕秋下・一　雜二・一　〔玉葉〕春下・一　〔風雅〕春下。一

齋院中將　齋院長官爲理女　〔後拾〕雜一・一　〔千載〕雜上・一　〔玉葉〕春下・一　選子内親王家中將　〔續詞花〕秋下・一

【禪】

禪心　法師　〔續千〕戀四・一　〔續後拾〕雜下・一　〔新

千〕別・一

禪守 仁和寺眞光院大僧正。邦省親王御子 〔新拾〕雜中・一 〔新續古〕春下・一 戀四・二 雜上・一 雜下・二

禪休 法師俗名三澔雅樂大夫。禪心法師子 〔新千〕雜中・一

禪助 仁和寺眞光院大僧正。中院內大臣通成子 〔續拾〕雜秋・一 法印 〔新後撰〕神・一 雜上・一 雜中・二 前大僧正 〔玉葉〕賀・一 〔續千〕冬。一 神・一 釋・四 雜上・一 〔續後拾〕秋下・一 雜上・一 哀・一 〔新千〕釋・一 雜中・一 哀・一 〔新拾〕戀五・一

禪性 仁和寺僧都。少將藤原公重子 〔新古〕旅・一 法師

禪空 上人淨金剛院覺導坊。大納言伊平子 〔續拾〕雜下・一 釋・一 〔新後撰〕釋・一

禪要 法師 〔新後拾〕雜下・一

禪信 僧正 〔新續古〕雜上・二

禪師 久米 〔萬葉〕卷二・三

禪隆 法印 〔續千〕雜中・一 〔續後拾〕戀二・一 〔新千〕冬・一 釋・一 〔新拾〕雜中・一

禪嚴 法眼 〔新後拾〕神・一

十八畫

膺 春日部 〔萬葉〕卷二〇・一

蟬丸 〔後撰〕雜一・一 〔新古〕雜下・二 〔續古〕雜中・二

藏內侍 〔後撰〕戀四・二

額田王 大藏卿從五位下 〔新勅〕旅・一 戀四・一 〔新拾〕哀・一 〔萬葉〕卷一・五 卷二・三 卷四・二 長歌

卷一・二　卷二・一〔古今和歌六帖〕

濱臣 清水。文政九年歿四十九 〔泊洦廼舍歌集〕一一六二　旋七

薩妙觀 〔萬葉〕卷二〇・二　〔古今和歌六帖〕

鵜殿よの子 天明八年歿六十餘。涼月遺草 〔佐保川〕三九〇　長八

曙覽 橘。明治元年歿五十七 〔志濃夫廼舍歌集〕八五九

【瞻】

瞻西 上人 〔金葉〕雜下・一　〔詞花〕冬・一　〔千載〕秋下・一　釋・二　〔新古〕冬・一　釋・一　〔新勅〕釋・一　〔續千〕釋・一　〔續後拾〕秋上・一　〔新拾〕釋・一　〔新後拾〕秋上・一　〔續詞花〕釋・一

瞻空 上人 〔續古〕雜下・一

【鎌】

鎌足 大織冠御食子卿御子（一二七四―一三二九） 〔續古〕戀三・一　〔古今和歌六帖〕

鎌倉右大臣 實朝公に同じ

【豐】

豐人 巨勢 〔萬葉〕卷一六・一

豐河 紀 〔萬葉〕卷八・一

豐島采女 〔萬葉〕卷六・二

豐繼 安倍 〔萬葉〕卷六・一

【蟲】

蟲麿 高橋 〔萬葉〕卷六・一　卷八・一　卷九・五　長歌卷六・一　卷九・四

蟲麿 阿部 〔萬葉〕卷四・二　卷六・一　卷八・二　〔古今和歌六帖〕

蟲麿 刑部 〔萬葉〕卷二〇・一

蟲麿 川原 〔萬葉〕卷二〇・一

蟲麿 占部 〔萬葉〕卷二〇・一

十九畫

禰 十四畫「禰」を見よ。

寵 從五位上。或云うづく。大和守源精女 〔古今〕別・一 戀三・一 戀四・一

櫟子 田部 〔萬葉〕卷四・三

鏡女王 鎌足室(ー一三四四) 〔玉葉〕戀一・一 〔萬葉〕卷二・二 卷四・一 卷八・一 〔古今和歌六帖〕

繪式部 前中宮女房。散位平繁兼女 〔秋後拾〕旅・一

麗景殿前女御 代明親王女。東三條兼家女 〔拾遺〕雜下・一 〔後拾〕哀・一

縄麿 内藏 〔萬葉〕卷一七・一 卷一八・一 卷一九・二

禰麿 大舍人部 〔萬葉〕卷二〇・一

願蓮 法師 〔新後拾〕釋・一

【瓊】

瓊子内親王 後醍醐帝皇女 〔新千〕春下・一 戀三・一 雜下・一 〔新續古〕春上・一 〔新葉〕雜下・一

瓊子内親王家小督 田樂道蓮女 〔新千〕戀五・一 〔新後拾〕雜春・一

瓊子内親王家治部卿 女三宮治部卿 〔續千〕戀四・一 〔新千〕旅・一 雜上・一

【證】

證成 法師 〔金葉〕雜下・一

證空 上人上 〔新千〕旅・一

證惠 上人淨金剛院道觀坊 〔續古〕釋・一

證蓮 法師 〔續詞花〕戀下・一　旅・一

證觀 僧都。堀川後房公子 〔金葉〕春・一　〔續後撰〕釋・一

【贈】

贈太政大臣 〔後撰〕本院贈太政大臣に同じ　〔拾遺〕北野〔神〕に同じ　〔續古〕大炊御門贈太政大臣に同じ

贈左大臣 〔詞花〕入條贈左大臣に同じ　〔新拾〕上同

贈左大臣母 長實卿母に同じ

贈從三位清子 修理亮藤原顯重女 〔風雅〕雜上・一

贈從三位爲子 遊義門院權大納言に同じ

贈皇后宮 冷泉院女御花山院國母懷子。謙德公女 〔拾遺〕雜春・一

【懷】

懷世 四位。刑部大輔藤原業尹男 〔續千〕戀五・一 四位 〔風雅〕戀五・一

懷良親王 式部卿。後醍醐天皇孫阿蘇宮男歟 〔新葉〕雜下・一

懷邦親王 上野大守。 〔新葉〕夏・一　冬・一　戀四・一

懷通 四位中宮少進。刑部大輔藤原業尹男 〔風雅〕雜上・一 四位 〔新千〕冬・一　〔新後拾〕雜秋・一

懷國 五位備中守。修理大夫藤原親尹男 〔新續古〕賀・一

懷尋 法師 〔金葉〕雜下・二

懷圓 叡山法師。筑後守源道濟子 〔後拾〕旅・一　雜一・一　雜三・一〔拾遺抄云大宮禪師と云〕

懷壽 叡山僧都 〔後拾〕雜三・一　〔續詞花〕哀・一

【闕】

闕雄 五位治部少輔。從三位藤原眞夏男。天長人至仁壽三。號東山進士今禪林寺彼舊宅也 〔古

今〕秋下・二一 〔古今和歌六帖〕

【關白】

關白太政大臣　〔續後拾〕後照念院前關白太政大臣に同じ

關白內大臣　〔續千〕芬陀利花院前關白に同じ　〔新葉〕藤原冬實に同じ

關白左大臣　〔新勅〕同院攝政左大臣に同じ　〔新千〕後報恩院入道前關白左大臣に同じ

關白左大臣　藤原冬實歟。二條教基男　〔新葉〕春上・三　春下・二　夏・二　秋下・三　冬・五　戀一・一　戀三・五　戀五・二　雜上・一　雜中・一　雜下・一　哀・一　賀・一

關白右大臣　〔風雅〕後普光園院攝政前太政大臣に同じ

關白前太政大臣　〔詞花〕法性寺入道前關白太政大臣に同じ　〔玉葉〕後照念院前關白太政大臣に同じ　〔新續古〕後福照院攝政關白に同じ

關白前左大臣　〔後拾〕京極入道前關白太政大臣に同じ　〔續古〕後一條入道前關白左大臣に同じ　〔新拾〕後普光園院攝政前太政大臣に同じ　〔新後拾〕後香園院入道關白に同じ

關白家民部卿　後一條殿女房　〔續古〕雜上・一

關白家辨　〔續詞花〕戀下・一

【藤】

藤三位　大和守親國女　〔後拾〕春上・一　賀・一

藤良　從二位參議。中納言藤原頁賴男　〔後拾〕戀三・一　大貳

藤茂　六位。五郎藤原季保男　〔新千〕戀五・一　〔新後拾〕雜春・一

藤清　四位。藤原　〔新千〕雜上・一　四位

藤賀徒見　命婦　〔後撰〕戀一・一　藤かつみ

藤經　五位。源　〔新千〕戀二・一　〔新拾〕戀二・一　〔新

後撰〕冬・一　雜春・一

藤經　五位。藤原　〔新後拾〕戀一・一

【藤原】

藤原夫人　鎌足女　〔萬葉〕卷二十・一　卷八・一　卷二〇・二

藤原公直母　今出川左大公直母に同じ

藤原仲子　〔續詞花〕戲・一

藤原因香　典侍藤原因香朝臣に同じ

藤原有敎母　〔金葉〕秋・一　戀上・一

藤原長成母　〔續詞花〕哀・一

藤原宗緒朝臣母　〔玉葉〕戀一・一　〔續千〕戀一・一

藤原知信母　〔金葉〕雜下・一

藤原定家母　中納言定家　に同じ

藤原定輔朝臣女　〔後拾〕哀・一

藤原皇后　光明皇后　〔萬葉〕卷八・一　卷一九・二

藤原後生女　少納言に同じ

藤原俊蔭女　〔續後撰〕戀五・一

藤原相如女　〔後拾〕哀・一

藤原重賴女　〔新勅〕戀五・一　〔續古〕戀三・一

藤原惟興女　〔新勅〕戀四・一

藤原郎女　〔萬葉〕卷四・一

藤原兼平朝臣母　中納言定賴女　〔後拾〕雜二・一　〔千載〕冬・一　〔新勅〕戀四・一

藤原眞忠妹　〔後撰〕戀三・一

藤原清忠女　〔拾遺〕戀三・一

藤原國用女　〔拾遺〕戀四・一

藤原教良母〔詞花〕雜下・一〔續詞花〕夏・一 物・一

藤原基世女〔新千〕釋・一〔新拾〕戀三・一〔新後拾〕旅・一

藤原宿奈麻呂の妻〔萬葉〕卷二〇・一

藤原爲守女〔玉葉〕夏・一 戀一・一 雜上・一

藤原爲信女〔續詞花〕雜中・一

藤原爲盛女〔後拾〕賀・一

藤原滋包女〔後撰〕雜一・一

藤原滋幹女〔後撰〕別・一

藤原實信母〔金葉〕雜上・一

藤原範永朝臣女〔後拾〕戀四・一

藤原賢子 大貳三位に同じ

藤原賴範女〔新後撰〕旅・一〔續千〕戀一・一

藤原鎌子〔萬葉〕卷二・二

藤原顯忠母 右大臣顯忠母。大納言源昇女〔後撰〕春下・一

二十畫

蘆庵 小澤。享和元年歿七十九〔六帖詠草〕一八五八 長歌一 旋頭歌一九〔同拾遺〕三四九

【藻】

藻壁門院少將 右京大夫藤原信實女〔新勅〕春上・一 戀二・一 戀三・三 雜一・一 中宮少將〔續後撰〕秋上・一 秋中・一 戀二・一 雜中・一 藻壁門院少將〔續古〕夏・一 秋上・二 秋下・一 旅・一 戀一・二 戀二・一 戀四・二 戀五・一 雜上・二 雜中・一〔續拾〕春上・一 春下・一 秋上・一 秋下・一 冬・一

戀四・二　雜上・一　雜下・三　釋・一　〔新後撰〕春上・一　春下・一　夏・三　秋下・一　戀二・一　戀三・一　〔玉葉〕秋上・一　雜一・一　〔續千〕春下・二　秋上・一　秋下・一　旅・一　雜中・一　雜下・一　〔續後拾〕秋下・一　戀一・一　雜上・一　〔新千〕夏・二　〔新拾〕戀四・一　雜下・一　〔新後拾〕戀一・一　雜下・一　〔新續古〕夏・一

藻壁門院但馬　源家長朝臣女　〔新勅〕春下・一　秋下・一　冬・一　戀四・一　中宮但馬　〔續後撰〕戀三・一　戀四・二　〔續拾〕夏・一　雜上・上　〔續千〕秋下・一　〔續後拾〕戀三・一　〔風雅〕春下・一　秋上・一　〔新千〕戀三・一　〔新拾〕戀二・一　戀四・一　〔新續古〕冬・一

【耀】

耀空　鏡澄房　〔新千〕釋・一

耀清　石清水別當法印。法印幸清子　〔續後撰〕秋中・一　旅・一

【寶】

寶城　法師　〔新續古〕戀四・一

寶密　法師　〔新續古〕雜上・一

寶篋院贈左大臣　義詮公に同じ

【繼】

繼麻呂　阿部〔一一三九七〕　〔萬葉〕卷一五・五

繼麻呂　久米　〔萬葉〕卷一九・一

繼尊　法印　〔新續古〕戀一・一

【嚴】

嚴足　和田　〔和田嚴足集〕三八三　長歌四一　旋一

嚴阿　上人　〔新後拾〕雜秋・一

嚴敎 僧都 〔玉葉〕雜三・一 〔續千〕釋・一 雜下・一

嚴雅 僧都小野。參議雅經子 〔續古〕旅・一 權律師 〔續拾〕雜春・二 雜中・一 權少僧都

【覺 四ー一〇畫】

覺仁法親王 三山檢校櫻井宮長吏。後鳥羽帝御子 〔續後撰〕雜上・一 覺仁法親王 〔續拾〕秋上・一 旅・一 〔續千〕哀・一

覺守 比叡山法印。同横川長吏。法印憲實子 〔新後撰〕雜上・一 權大僧都 〔玉葉〕夏・一 〔續千〕哀・一

尋延 仁和寺阿闍梨。少將藤原公重子 〔千載〕秋下・二 雜上・一 〔新勅〕春上・二 〔玉葉〕夏・一 〔續詞花〕釋・一

覺助法親王 一品長吏聖護院。後嵯峨帝御子 〔續拾〕冬・一 雜秋・二 戀二・一 〔新後撰〕春上・一 釋・一 神・一 雜上・一 雜中・二 〔玉葉〕春上・一 春下・一 夏・一 秋上・一 秋下・一 冬・一 戀二・一 戀三・一 戀五・二 神・一 〔續千〕春上・一 春下・二 夏・一 秋上・二 秋下・二 冬・一 戀二・四 戀三・一 戀四・一 戀五・一 雜上・三 雜中・一 雜下・一 〔續後拾〕春上・一 春下・一 秋上・一 冬・一 戀一・一 戀二・一 戀四・一 雜上・一 雜中・一 雜下・二 釋・一 〔風雅〕秋中・一 秋下・一 冬・二 戀三・一 雜中・一 雜下・一 〔新千〕春上・一 春下・一 秋上・一 冬・一 旅・二 釋・一 戀二・二 戀四・一 雜上・二 雜中・一 賀・一 〔新拾〕春上・一 秋下・一 冬・一 戀五・一 釋・一 雜中・一 〔新後拾〕雜春・一 戀一・二 戀二・一 〔新續古〕春上・二 夏・一 冬・一 戀四・一 雜中・一

覺忠　比叡山長谷大僧正。法性寺忠通子　〔千載〕春下・一　秋上・一　秋下・一　旅・一　雜中・一　釋・二　〔新古〕冬・一　〔續千〕旅・一　〔續拾〕雜上・一　〔續詞花〕夏・一　神・一　哀・一　雜中・一　戲・一

覺宗　仁和寺法印。法印覺寛子　〔續後撰〕雜下・一　法眼　〔續古〕哀・一　法印　〔續拾〕雜秋・一

覺空　大光明院上人觀惠坊　〔新千〕釋・一　〔新拾〕戀五・一　雜中・一

覺法法親王　二品號高野御室。白川帝御子（一七五一―一八二三）　〔千載〕旅・一　高野法親王　〔續千〕釋・一　二品法親王覺法

覺性法親王　二品號紫金臺寺。鳥羽帝御子（一七八八―一八二九）　〔千載〕春上・一　夏・二　秋下・二　冬・二　哀・一　戀五・一　雜上・二　雜中・一　釋・一　仁和寺後入道法親王覺性　〔新古〕雜上・一　入道親王覺性　〔續古〕夏・一　覺性法親王　〔玉葉〕秋下・一　雜二・一　釋・一　入道二品親王覺性　〔續千〕釋・一　〔續後拾〕雜上・一　〔新千〕雜下・一　名物　〔新拾〕賀・一　二品法親王覺性　〔續詞花〕春下・一　夏・二　秋上・三　冬・一　戀中・二　旅・三　雜上・二　雜中・一　戲・二

覺俊　上人　〔千載〕雜中・一

覺信　三井寺實禪院權僧正。左中將賴俊子　〔新千〕旅・一　〔新拾〕雜上・一

覺昭　〔玉葉〕雜四・一

覺家　法印　〔新後拾〕秋上・一　雜下・一

【覺　十一畫―二十一畫】

覺深　〔新後拾〕釋・一

覺基　僧都　〔續詞花〕戀下・一

覺超 法印 〔後拾〕雜六・一 釋教歌
覺然法師 〔續詞花〕釋・一
覺爲 法印。是法法師子 〔新千〕神・一 〔新拾〕戀一・一 〔新後拾〕戀三・一
覺雅 東大寺法印。六條顯房公子 〔金葉〕雜下・一 法師 〔詞花〕春・一 戀上・一 僧都 〔千載〕別・一 戀三・一 釋・一 〔續詞花〕冬・一 釋・一 戀中・二 別・一
覺盛 比叡山阿闍梨 〔千載〕春下・一 夏・一 秋下・一 〔新勅〕夏・一 雜三・一 〔續後撰〕夏・一 〔續拾〕雜上・一
覺源 比叡山法印。中納言定家子 〔續拾〕雜下・一 釋・一 〔新後撰〕釋・一
覺寳 三井寺大僧正。三條實房公子 〔風雅〕冬・一 釋・二 〔新千〕釋・一 雜下・一
覺寛 仁和寺法印。法橋行貞子 〔新勅〕秋下・一 雜一・一 雜二・一 雜三・一 〔續後撰〕夏・一 雜上・一 雜中・二 旅・一 〔續古〕戀二・一 雜上・一 〔續拾〕夏・一 冬・一 〔新後撰〕夏・一 雜下・一 〔玉葉〕旅・一 〔續千〕雜上・一 〔新拾〕旅・一
覺圓 興福寺東北院大僧正。後西園寺實兼公子 〔玉葉〕秋下・一 雜五・一 釋・一 〔續千〕春下・一 釋・一 戀四・一 戀中・一 哀・一 〔續後拾〕哀・一 〔風雅〕春下・一 秋上・一 秋下・一 〔新千〕冬・一 釋・一 哀・一
覺慶 天台座主 〔續詞花〕雜上・一
覺蓮 俗名隆行。遠江守盛章子 〔千載〕哀・一
覺審 比叡山阿闍梨 〔千載〕雜上・一

覺増然親王 聖護院。後光嚴院御子 〔新後拾〕雜春・一 雜上・一

覺禪 〔千載〕雜中・一

覺樹 法印。六條顯房公子 〔金葉〕雜下・一 〔續詞花〕春下・一

覺濟 大僧正。正二位兼季子 〔新後拾〕秋下・一

覺辨 法印。皇太后宮俊成男 〔千載〕旅・一 權律師 〔新古〕雜下・一 權大僧都

覺譽 興福寺法印。刑部大輔師季子 〔金葉〕雜下・一 法師

覺譽法親王 聖護院。花園帝御子 〔風雅〕夏・一 秋中・一 冬・一 戀四・一 雜上・一 〔新千〕夏・一 秋下・一 釋・一 雜中・一 哀・二 〔新拾〕春下・一 夏・一 釋・一 雜上・四 〔新後拾〕夏・一 秋上・一 戀五・一 〔新續古〕春上・一 春下・一 旅・一 戀二・一 戀三・一 雜上・一 雜中・一 雜下・一

覺懐 西南院法印。大納言爲世子 〔續千〕釋・一 法師 〔續後拾〕雜下・一 〔風雅〕雜上・一 釋・一 法印 〔新千〕秋下・一 釋・一

覺鑁 上人 〔續千〕釋・二 〔續後拾〕雜下・一

覺鑁上人母 〔續千〕釋・一

二十一畫

鑁也 上人高野山 〔新勅〕釋・一

【櫻】

櫻井大原 〔萬葉〕卷二〇・一

櫻井王 〔萬葉〕卷八・一

櫻井尼 〔金葉〕雜上・一

【攝】

攝津 二條太皇太后宮攝津に同じ

【攝政】

攝政太政大臣 〔新古〕後京極攝政前太政大臣に同じ 〔新後拾〕後普光園院攝政前太政大臣に同じ

攝政左大臣 〔金葉〕法性寺入道前關白太政大臣に同じ

攝政左大臣家三河 法性寺關白家三河に同じ

攝政前太政大臣 〔續後撰〕岡屋攝政關白に同じ 〔續拾〕照念院入道前關白太政大臣に同じ

攝政前右大臣 〔千載〕後法性寺入道前關白太政大臣に同じ

攝政家丹後 宜秋門院丹後に同じ

攝政家參河 法性寺入道前關白家三河に同じ

攝政家堀河 〔金葉〕戀下・一

二十二畫

讃 二十六畫「讚」を見よ。

【權】

權僧正永緣母 大江公資女 〔金葉〕夏・一

【權大納言】

權大納言 〔新葉〕夏・一 戀四・一

權大納言公宗女 中宮大夫公宗一女 〔風雅〕春中・一 秋下・一 戀三・一 〔新千〕旅・一 戀三・一 雜中・一

權大納言公宗母 昭訓門院春日に同じ

權大納言公直母 今出川左大臣公直母に同じ

權大納言實明女　前大納言實明女に同じ

權大納言實直母　今出川右大臣實直母に同じ

權大納言實俊母　大納言實名女〔新千〕戀五・一

權中納言公宗母　昭訓門院春日に同じ

【權中納言】

權中納言公雄女〔新後撰〕秋上・一　戀四・一

權中納言定賴女　兼平朝臣母〔千載〕冬・一　イ定賴母〔新勅〕戀四・一

權中納言爲明女　兵庫尼衆〔新千〕旅・一

權中納言經平女〔新後撰〕戀六・一　〔續千〕雜上・一　僧都聖尋母〔續後拾〕雜下・一

權中納言經定女〔新千〕戀六・一　〔新拾〕戀四・一　〔新後拾〕雜上・一

權中納言經高母〔新葉〕春下・一　夏・一　秋下・二　冬・一　戀二・一　戀三・一　戀四・一　戀五・一　雜上・四　雜中・一　哀・一

權中納言藤原義懷女〔拾遺〕雜秋・一

二十三畫

【顯】

顯　前内大臣源顯統。參議持方三男（親房之甥也）〔新葉〕春上・二　春下・一　秋上・一　冬・三　戀二・一　戀三・一　戀五・一　雜上・二　雜下・二　賀・一

顯方　五位信濃守イ顯賢未名顯時。左京大夫藤原顯樹男。至保元二年〔千載〕戀二・一　雜中・一〔續後拾〕秋下・一　〔續詞花〕春下・一　秋上・一　冬・一　戀上・一　戀下・一　雜上・一

顯氏 從二位。正三位藤原顯家男 〔續後撰〕秋下・一 雜中・一 從二位 〔續古〕戀五・一 哀・一 〔續拾〕戀二・一 雜下・一 〔新後撰〕春下・一 冬・一 〔續千〕雜中・一 〔風雅〕戀五・一 〔新千〕秋下・一

顯氏 四位陸奧守。細川源頼貞男 〔風雅〕雜上。一 五位 〔新千〕神・一 雜中・一 〔新拾〕雜上・一 雜中・一 〔新後拾〕神・二 四位 〔新續古〕雜上・一

顯光 從二位廣幡左大臣。藤原忠義公男 〔拾遺〕哀・一 右大臣

顯仲 從三位神祇伯。六條源右府(顯房)男(一七一七—一七九九) 〔金葉〕春・一 夏・二 秋・二 冬・二 戀上・三 神祇伯 〔詞花〕雜下・三 〔千載〕釋・一 〔新古〕戀二・一 雜上・一 〔新勅〕戀一・一 〔續後撰〕戀三・一 〔玉葉〕雜一・一 〔續千〕秋下・一 〔新千〕秋下・一 雜上・一 〔新拾〕夏・一 〔新後拾〕秋下・一 〔新續古〕釋・一 別・一 〔續詞花〕釋・一 戀上・一 戀下・一 別・一

顯仲 四位左兵衛佐。中納言藤原資仲男。應德三正五敍從四位下 〔金葉〕春・一 夏・二 秋・一 雜上・一 四位 〔千載〕夏・一 戀二・一 〔新古〕旅・二 〔新勅〕春下・二 〔續古〕冬・一 〔新後撰〕冬・一 戀二・一 〔續千〕雜中・一 賀・一 〔新千〕戀一・一 〔新續古〕春上・一

顯忠 從二位富小路右大臣。本院時平公男。天德四年右大臣康保三薨六十八 〔後撰〕戀二・一 藤原顯忠朝臣

顯房 從一位六條左大臣。土御門源師房男(一六九七—一七五四) 〔後拾〕賀・二 戀一・一 戀二・一 右大臣 〔金葉〕冬・一 賀・二 雜下・一 六條右大臣 〔千載〕雜上・一 〔新古〕賀・一 〔新勅〕

雜一・一　〔續古〕秋上・一　〔新千〕夏・一　〔新後拾〕戀二・一　〔續詞花〕夏・一

顯季　三位修理大夫。正四位下藤原隆經男。保安四年九月六日卒　〔後拾〕戀一・一　〔金葉〕春・六　夏・二　秋・四　冬・二　戀上・一　戀下・三　雜上・二　〔詞花〕夏・一　秋・一　戀上・一　雜下・一　〔千載〕春下・一　夏・一　賀・一　戀二・一　戀三・一　雜上・一　〔新古〕旅・一　〔新勅〕春上・一　〔續古〕雜下・一　〔續拾〕夏・一　秋上・一　〔新後撰〕夏・一　〔續千〕秋下・一　〔續後拾〕別・一　〔新千〕戀三・一　賀・一　〔新拾〕秋上・一　戀五・一　雜中・一　〔新後拾〕春下・一　〔新續古〕秋上・一　秋下・一　冬・一　〔續詞花〕春上・一　秋上・一　秋下・三　冬・一　雜上・二

顯宗天皇　諱弘計。市邊押羽皇子御子（一一一〇—一一四七）　〔續古〕別・一　顯宗天皇御歌

顯長　從二位中納言。中納言藤原顯隆男　〔新古〕雜上・一　前中納言

顯則　五位赤松左馬助。出羽守源顯範男　〔新後拾〕雜上・一

顯後　法印　〔續千〕釋・一　〔新千〕釋・一

顯昭　法橋。左京大夫顯輔子。六百番陳狀。古今集註。柿本朝臣人麿勘文　〔千載〕春上・一　夏・二　冬・一　哀・一　戀一・二　戀二・一　戀三・一　戀四・一　戀五・一　雜上・一　雜下・一　誹諧　釋・一　法師　〔新古〕秋上・二一イ夏　〔新勅〕戀五・一　法橋　〔續後撰〕雜下・一　〔續古〕釋・二　戀三・一　戀五・一　哀・一　〔續拾〕秋上・一　〔新後撰〕戀一・一　〔玉葉〕春上・一　春下・二　雜三・一　釋・一　〔續千〕夏・一　〔續後拾〕冬・一　旅・一　〔風雅〕春中・

一　春下・一　秋上・一　賀・一　〔新千〕戀二・一　戀三・一　〔新拾〕賀・一　〔新續古〕雜上・一　雜中・一　雜下・一　〔續詞花〕春下・一　哀・一　戀中・一

顯時　顯方に同じ

顯家　正三位。刑部卿藤原重家男　〔千載〕秋上・一　戀二・一　戀四・一　四位　〔新勅〕夏・一　正三位　〔續古〕戀二・一　雜中・一　〔續拾〕戀四・一

顯眞　叡山座主大僧正　〔續古〕雜下・一

顯兼　從三位。從三位源宗雅男　〔新勅〕戀五・一　從三位

顯基　從三位中納言。大納言源俊賢男　〔後拾〕春上・一　雜三・一　前中納言　〔新勅〕賀・一　〔續拾〕戀四・一

顯深　僧都　〔新後拾〕雜下・一

顯國　四位左少將。中納言源國信男。卒嘉承六年　〔金葉〕戀上・二　戀下・

一　雜上・一　〔千載〕春下・一　〔新勅〕冬・一　〔續後拾〕冬・一　〔續詞花〕戀中・一

顯朝　正二位大納言前參議藤原宗房男　〔續後撰〕旅・一　權中納言　〔續古〕春上・一　秋上・一　冬・二　戀一・二　雜中・一　權大納言　〔續拾〕雜春・一　賀・二　前大納言　〔新後撰〕夏・一　〔新拾〕神・一　按察使　〔新續古〕春上・一　冬・一　戀四・一　戀五・一

顯盛　五位加賀守。城介藤原義景男　〔玉葉〕旅・一　〔新千〕秋下・一　冬・一

顯雅母　大納言顯雅母。信濃守時綱女　〔金葉〕雜上・一

顯尋　法橋　〔續拾〕雜上・一

顯資　中納言。中納言次平男　〔新後撰〕旅・一　正三位　〔玉葉〕冬・一　前參議

顯隆　正三位中納言。參議藤原物房男　〔金葉〕夏・一　秋・一　戀上・二（中納言）

顯經　千稽參議源忠顯男歟。權大納言　〔新葉〕春上・一　冬・二　賀・一

顯意　竹林寺道教坊上人　〔新後撰〕雜中・一

顯詮　祇園法印　〔新千〕神・一　〔新拾〕戀三・一　釋・一　〔新後拾〕冬・一　旅・一　〔新續古〕冬。一　雜・一

顯遍　興福寺東南院權僧正　〔新千〕釋。一　〔新拾〕釋・一

顯綱　四位讃岐守。參議藤原兼經男。至康和二年出家（一六八九—一七六三）　〔後拾〕春上・一　雜二・一　雜四・一（四位）〔金葉〕夏・一　雜下・一　〔詞花〕秋・三　戀上・一　〔千載〕春上・二　夏・二　冬・一　哀・一　〔新古〕秋下・一　別・二　〔新勅〕雜一・一　雜五・一（旋頭）〔續後撰〕雜下・一　〔續拾〕旅・一　〔玉葉〕戀五・一　〔續千〕賀・一　〔續後拾〕夏・一　〔新千〕賀・一　〔新續古〕別・一　〔續詞花〕春下。一　冬・一　賀・一　哀・一　雜中。一　〔高陽院歌合〕五

顯輔　正三位。正三位藤原顯季男（—一八一五）　〔左京大夫顯輔集〕一八五　長歌一　〔金葉〕春・五　夏・一　秋・二　戀上・三　戀下・二　雜上・一（四位）〔詞花〕秋・一　雜上・三　雜下・二（左京大夫）〔千載〕春上・二　夏・二　秋下・一　冬。一　別・一　戀二・一　戀二・一　戀三・一　戀五・一　雜上・一　雜下・二（旋頭歌）〔新古〕春下・一　秋上・二　哀・二　神・一　〔新勅〕秋上・二　冬・一　旅・一　戀二・一　雜五・一（物名）〔續後撰〕冬・一　戀一・一　戀五・一　雜上・一　〔續古〕春下・一　神・一　旅・一　戀一・

一　戀二•一　〔續拾〕秋上•一　秋下•一　〔新後撰〕春上•一　春下•一　夏•一　秋上•一　〔玉葉〕冬•一　賀•二　雜一•一　雜五•一　神•一　〔續千〕春下•一　夏•一　神•一　戀九•一　〔續後拾〕夏•一　戀一•二　〔風雅〕春下•一　秋下•一　冬•一　雜上•一　〔新千〕秋上•一　戀四•一　〔新拾〕夏•一　旅•一　雜下•二短歌　〔新後拾〕夏•一　〔新續古〕別•一　〔續詞花〕秋上•一　秋下•一　戀上•一　別•一　旅•一　雜上•一　雜下•一　戲•一

顯廣　五位。藤原　〔詞花〕戀下•一　〔續詞花〕春下•一　夏•一　秋上•一　冬•一　神•一　旅•一　雜下•二

顯範　興福寺法印。筑前守藤原長敎子　〔玉葉〕雜三•一權少僧都　〔續千〕雜下•一法印　〔風雅〕雜下•一

顯親門院　季子。左大臣實雄公女　〔風雅〕春下•一　雜下•一

顯賴　正二位中納言。中納言藤原顯隆男　〔續古〕戀二•一民部卿　〔玉葉〕釋•一　〔新續古〕哀•一

顯覺　俗名菅〕少納言入道　〔新千〕哀•一

二十四畫

【鷹】

鷹主　多治比　〔萬葉〕卷一九•一

鷹司院按察　中納言光親女　〔續後撰〕戀二•一　戀四•一　〔續古〕春下•一　秋上•一　冬•一　戀三•一　戀五•一　雜下•一　〔續拾〕戀五•一　〔新後撰〕夏•一　戀一•一　〔玉葉〕春上•一　雜二•一　〔續後拾〕戀三•一　〔風雅〕夏•一　〔新千〕戀一•一　〔新拾〕戀

二・一　〔新後拾〕春上・一　〔新續古〕戀三・一　雜中・一

鷹司院帥　右大辨藤原光俊女　〔續後撰〕戀一・一　〔續古〕夏・二　秋上・一　秋下・一　雜中・一　〔續拾〕雜秋・一　戀三・一　戀五・一　〔新後撰〕秋上・二　釋・一　戀三・一　〔續後拾〕戀三・一　戀四・一　〔新千〕秋上・一　〔新拾〕戀二・一　戀五・一　雜上・一　〔新後拾〕春下・一　〔新續古〕秋上・一　雜上・一

二十五畫

【觀】

觀音寺太政大臣　公名公に同じ

觀修　大僧正　〔新勅〕釋・一

觀教　僧都。右大辨源公忠子　〔拾遺〕秋・一　法橋　〔新續古〕雜下・一　誹諧

觀喜園院攝政關白左大臣　兼忠公に同じ

觀意　法師俗名四郎左衛門尉基永。齋藤左衛門尉藤原基高子　〔續拾〕旅・一　〔新後撰〕戀四・一　雜上・一　雜中・一　〔玉葉〕雜一・一　〔續千〕秋下・一　此歌者千雜上法印長舜の歌とあり　旅・一　戀四・一　〔續後拾〕物名・一　戀一・一　〔新千〕別・一　雜中・一

觀暹　法師　〔金葉〕雜下・一　連歌

二十六畫

讃岐　讃岐守安部清行女　〔古今〕雜體・一　誹諧　〔續詞花〕秋上・一　戀中・二

追加

小辨命婦　〔千載〕哀・一

雄宗　六位下野　〔古今〕戀四・一　〔續詞花〕春下・二　別・一

正誤

三一〇頁上段　十一行目　「後稱念院」は「後照念院」の誤。

三六一頁下段　十行目　「後福光園」は「後普光園」の誤。

三八九頁下段　十三行目　〔新後拾〕は〔新續古〕の誤。

三九四頁上段　三行目　〔新後撰〕は〔續後撰〕の誤。

四六二頁上段　十二行目　「祝部成伊女」は「祝部成仲女」の誤。

五〇四頁上段　六行目　全部を「二・一　〔風雅〕秋中・一　冬・一　戀二・一　〔新續古〕戀三・一」と訂正す。

五八六頁下段　六行目　「冬・一」の下に「按察使」を加ふ。

五八六頁下段　七行目　「按察使」を削る。

六三四頁上段　十三行目　「秋下・一」を加ふ。

六五六頁上段　十二行目　「哀・一」を削る。

新修作者部類　終

和歌史年表

和歌史年表

	紀元年號		一般歷史事項	歌人の生歿、著作、及び事件
神代				神代より天智天皇までの歌は古事記及び日本書紀に傳はれり、最古の歌と稱さるゝもの 八雲立つ出雲八重垣妻ごめに 八重垣造る其の八重垣を （素盞嗚尊） 其の他長歌七、短歌三（記紀）
神武	一 至 七六	一 至 七六	橿原奠都	長歌七、短歌二、片歌三（記紀） 神武天皇（紀元前五一―七六）
空位	七七 至 七九			

綏靖	八〇至一一二	一至三三		伊須氣余理賣命（――）
安寧	一一三至一五〇	一至三八		
懿德	一五一至一八四	一至三四		
空位	一八五			
孝昭	一八六至二六八	一至八三		
孝安	二六九至三七〇	一至一〇二		
孝	三七一	一		

天皇	皇紀	在位年	事項	歌
靈	至 四四六	至 七六		
孝元	四四七 至 五〇三	一 至 五七		
開化	五〇四 至 五六三	一 至 六〇		
崇神	五六四 至 六三一	一 至 六八	神器を笠縫邑に遷す。 四道將軍の派遣。	長歌四、短歌二（記紀） 崇神天皇（五一三—六三一）
垂仁	六三二 至 七三〇	一 至 九九	神器を伊勢に遷す。 埴輪を以て殉死に代ふ。	
景行	七三一 至 七九〇	一 至 六〇	熊襲親征。 日本武尊の熊襲及び蝦夷征伐。	長歌四、短歌三、片歌二、連歌一（記紀） 橘比賣命（—七七〇） 日本武尊（七四二—七七一） 景行天皇（六四八—七九〇）

成務	七九一 至 八五〇	一 至 六〇		
空位	八五一			
仲哀	八五二 至 八六〇	一 至 九	神功皇后の新羅征伐。	長歌三、短歌三（記紀）
應神	八六一 至 九七〇	神功一 至 六九 一 至 四一	百濟より王仁來朝し、論語十卷千字文一卷を獻す。	長歌八、旋頭歌一、短歌四（記紀） 應神天皇（八六〇—九七〇）
空位	九七一 至 九七二			菟道稚郎子（—九七二）
仁	九七三	一	難波遷都。	長歌十二、短歌十八、旋頭歌二、片歌一（記紀） 磐姫皇后（—一〇〇七） 隼別皇子（—一〇一二）

德	至一〇五九	至八七		黒比賣（一） 仁德天皇（九五〇—一〇五九）
履仲	一〇六〇 至一〇六五	一 至六	諸國に史を置く。	短歌三（記紀） 履仲天皇（一—一〇六五）
反正	一〇六六 至一〇七一	一 至六		
允恭	一〇七二 至一一一三	一 至四二		長歌四、短歌十二（記紀） 輕太子（一—一一一三） 允恭天皇（一〇三六—一一一三） 衣通姫（一）
安康	一一一四 至一一一六	一 至三		
雄	一一一七	一	漢織、吳織來朝す。	長歌九、旋頭歌一、短歌十一（記紀）

略	至一一三九	至二三		雄略天皇（一〇七八―一一三九）
清寧	一一四〇 至一一四四	一 至五		
顯宗	一一四五 至一一四七	一 至三		長歌一、短歌四、片歌二（記紀）
仁賢	一一四八 至一一五八	一 至一一		仁賢天皇（一一〇八―一一五八）
武烈	一一五九 至一一六六	一 至八		長歌四、短歌三、片歌一（記紀） 武烈天皇（一一一〇―一一六六）
繼體	一一六七 至一一九一	一 至二五		長歌二、短歌一、旋頭歌一（記紀）
安	一一九二	一		

閑	至一一九五	至四		
宣化	一一九六 至一一九九	一 至四		
欽明	一二〇〇 至一二三一	一 至三二	佛教の傳來。百濟王より佛像、經論を獻ず。	短歌一（記紀）
敏達	一二三二 至一二四五	一 至一四		
用明	一二四六 至一二四七	一 至二	蘇我馬子物部守屋を殺す。	
崇峻	一二四八 至一二五二	一 至五		
	一二五三	一	四天王寺の建立。	長歌三（記紀）

	推	
一二五四	二	
一二五五	三	
一二五六	四	
一二五七	五	
一二五八	六	
一二五九	七	
一二六〇	八	
一二六一	九	
一二六二	一〇	
一二六三	一一	
一二六四	一二	厩戸皇子憲法十七條を定む。
一二六五	一三	
一二六六	一四	
一二六七	一五	法隆寺の建立。
		小野妹子を始めて隋に遣す。
一二六八	一六	

古

一二六九	一七	
一二七〇	一八	曇徵來朝。
一二七一	一九	
一二七二	二〇	
一二七三	二一	
一二七四	二二	
一二七五	二三	
一二七六	二四	
一二七七	二五	
一二七八	二六	
一二七九	二七	
一二八〇	二八	天皇紀、國紀を撰す。
一二八一	二九	
一二八二	三〇	厩戸皇子薨ず。
一二八三	三一	
一二八四	三二	

天皇	皇紀	年	事項	和歌
	一二八五	三三		
	一二八六	三四		
	一二八七	三五		
	一二八八	三六		
舒明	一二八九	一		短歌一（紀）
	一二九〇	二	都を飛鳥岡に遷す。	
	一二九一	三		
	一二九二	四		
	一二九三	五		
	一二九四	六		
	一二九五	七		
	一二九六	八		
	一二九七	九		
	一二九八	一〇		
	一二九九	一一		

天皇	皇紀	年號	事項	和歌
	一三〇〇	一二		
	一三〇一	一三		舒明天皇（一二五三―一三〇一）
皇極	一三〇二	一		長歌一、短歌五、片歌一（皇極紀）
	一三〇三	二	蘇我入鹿山背大兄王を害す。	
			蝦夷、入鹿父子誅せらる。	
	一三〇四	三		
孝徳	一三〇五	大化元	年號の始。	短歌三（孝徳紀）
	一三〇六	二	大化新政。	
	一三〇七	三		
	一三〇八	四		
	一三〇九	五	八省百官を置く。	
	一三一〇	白雉元	改元の始。	
	一三一一	二		
	一三一二	三		
	一三一三	四		

天皇	皇紀	年	事項	歌人・歌
	一三一四	五		孝德天皇（一二五六—一三一四）
齊明（重祚）	一三一五	一	重祚の始。	長歌一、短歌六、片歌一（齊明紀）
	一三一六	二		
	一三一七	三		
	一三一八	四	阿倍比羅夫蝦夷を討つ。	有馬皇子（—一三一八）
	一三一九	五		
	一三二〇	六		
	一三二一	七		齊明天皇（一二五四—一三二一）
天	一三二二	一	近江令成る。	
	一三二三	二		
	一三二四	三		
	一三二五	四		中皇子（—一三二五）
	一三二六	五		
	一三二七	六		長歌一、短歌三（天智紀）
	一三二八	七		額田女王（…）

天智	一三二九	八	藤原鎌足薨ず。	
	一三三〇	九		
	一三三一	一〇	（この頃より祝詞定めらる）	天智天皇（一二八六—一三三一）
弘文	一三三二	白鳳元	壬申の亂。	
天武	一三三三	一		
	一三三四	二		
	一三三五	三		
	一三三六	四		
	一三三七	五		
	一三三八	六		
	一三三九	七		十市皇女（—一三三九）
	一三四〇	八	朱鳥帝紀を撰す。	
	一三四一	九		
	一三四二	一〇		
	一三四三	一一		

	一三四四	二	鏡女王（—一三四四）
	一三四五	三	天武天皇（一二八一—一三四五）
	一三四六	朱鳥元	大津皇子（一三二三—一三四六）
持統（女帝）	一三四七	一	
	一三四八	二	
	一三四九	三	日並皇子（一三三二—一三四九）
	一三五〇	四	
	一三五一	五	川島皇子（一三一七—一三五一）
	一三五二	六	
	一三五三	七	
	一三五四	八	
	一三五五	九	
	一三五六	一〇	高市皇子（一三一五—一三五六）
	一三五七	一	
	一三五八	二	

天皇	紀元	年号	事項	歌人
文武	一三五九	三		弓削皇子（―一三五九）
	一三六〇	四		
	一三六一	大寶 元	大寶律令成る。（この頃より宣命出づ。）	大伯皇女（一三二一―一三六一）
	一三六二	二		持統天皇（一三〇五―一三六二）
	一三六三	三		春日王（―一三六三）
	一三六四	慶雲 元		
	一三六五	二		
	一三六六	三		
	一三六七	四		
元明（女帝）	一三六八	和銅 元		但馬皇女（―一三六八）
	一三六九	二		下毛野古麿（―一三六九）
	一三七〇	三	奈良奠都。	
	一三七一	四		柿本人麿（―）
	一三七二	五	古事記成る。	
	一三七三	六	風土記を上らしむ。	

天皇	皇紀	年號	年	事項	歌人
	一三七四		七		大伴安麿（ー一三七四）
元正（女帝）	一三七五	靈龜	元		穗積皇子（ー一三七五）
	一三七六		二		志貴皇子（一三三九ー一三七六）
	一三七七	養老	元		
	一三七八		二		
	一三七九		三		春日老（ー）
	一三八〇		四	日本書紀成る。	
	一三八一		五	藤原不比等薨ず。	滿誓沙彌（ー一三八一）
	一三八二		六		
	一三八三		七		山王前（ー一三八三）
	一三八四	神龜	元	多賀城を築く。	
	一三八五		二		
	一三八六		三		
	一三八七		四		

一三八八	聖	五		
一三八九		天平元		長屋王（一三三五―一三八九）
一三九〇		二		山部赤人（―）
一三九一		三		大伴旅人（―一三九一）
一三九二		四		高安王（―一三九二）
				安部廣延（―一三九二）
一三九三		五	出雲風土記成る。	山上憶良（一三三〇―一三九三）
一三九四		六		
一三九五		七		
一三九六		八		
一三九七		九		長田王（―一三九七）
				小野老（一三五三―一三九七）
一三九八		一〇		笠金村（―）
				高橋蟲麿（―）
一三九九		一一		
一四〇〇		一二	藤原廣嗣叛す。	

天皇	皇紀	年號	年	事項	歌人
武	一四〇一		一三	諸國に國分寺を建つ。	
	一四〇二		一四		
	一四〇三		一五		
	一四〇四		一六		
	一四〇五		一七		門部王（－一四〇五）
	一四〇六		一八		大伴書持（－一四〇六）
	一四〇七		一九	東大寺大佛成る。	
	一四〇八		二〇		元正天皇（一三四〇－一四〇八）
孝	一四〇九	天平勝寶	元	行基寂す。	湯原王（－）
	一四一〇		二		安貴王（－）
	一四一一		三	懷風藻成る。	大伴坂上郎女（－）
	一四一二		四		安倍蟲麿（－一四一二）
	一四一三		五		
	一四一四		六		
	一四一五		七		

天皇	皇紀	年號	年	事項	人物
謙（女帝）	一四一六		八		聖武天皇（一三六一—一四一六）
	一四一七	天平寶字	元	（高橋氏文は天平十三年後、この頃までに成れり。）	橘諸兄（一三六二—一四一七） 橘奈良麿（一三八一—一四一七）
	一四一八		二		
	一四一九		三		
淳仁	一四二〇		四		光明皇后（一三六一—一四二〇）
	一四二一		五		
	一四二二		六		
	一四二三		七		
	一四二四		八	惠美押勝叛す。	大伴池主（—）
稱德（重祚女	一四二五	天平神護	元		（この朝のころ萬葉集成る。）
	一四二六		二		藤原眞楯（一三七五—一四二六）
	一四二七	神護景雲	元		
	一四二八		二		

（帝）	一四二九	三	和氣清麿忠節を致す。	
光仁	一四三〇	寶龜元		阿倍仲麿（一三六一—一四三〇）
	一四三一	二		
	一四三二	三		歌經標式（—）
	一四三三	四		
	一四三四	五		
	一四三五	六	吉備眞備薨ず。	
	一四三六	七		大伴駿河麿（—一四三六）
	一四三七	八		
	一四三八	九		
	一四三九	一〇		
	一四四〇	一一		
	一四四一	天應		
	一四四二	延暦元		
	一四四三	二		

	桓		
一四四四	三	長岡遷都。	
一四四五	四		大伴家持（—一四四五）
一四四六	五		
一四四七	六		
一四四八	七		
一四四九	八		
一四五〇	九		藤原濱成（一三八三—一四五〇）
一四五一	一〇		
一四五二	一一		
一四五三	一二		
一四五四	一三	平安奠都。	
一四五五	一四		
一四五六	一五		
一四五七	一六	續日本紀成る。	
一四五八	一七		
一四五九	一八		

武	一四六〇	一九	
	一四六一	二〇	坂上田村麿蝦夷を討つ。
	一四六二	二一	
	一四六三	二二	
	一四六四	二三	
	一四六五	二四	
	一四六六	大同元	
平城	一四六七	二	
	一四六八	三	古語拾遺成る。
	一四六九	四	
嵯	一四七〇	弘仁元	藤原薬子の亂。
	一四七一	二	坂上田村麿薨す。（凌雲集は延暦元年より弘仁三年に至るまでの詩を收む。）
	一四七二	三	

天皇	皇紀	年號	事項
峨	一四七三	四	
	一四七四	五	凌雲集成るといはる。
	一四七五	六	新撰姓氏錄三十卷成る。
	一四七六	七	
	一四七七	八	文華秀麗集三卷成る。
	一四七八	九	
	一四七九	一〇	
	一四八〇	一一	弘仁式三十卷成る。
	一四八一	一二	勸學院建つ。
	一四八二	一三	最澄寂す。
	一四八三	一四	
淳	一四八四	天長元	
	一四八五	二	
	一四八六	三	
	一四八七	四	經國集二十卷成る。

天皇	皇紀	年号	事項	人物
和	一四八八	五		
	一四八九	六		
	一四九〇	七	検非違使廳を設く。	
	一四九一	八		
	一四九二	九		
	一四九三	一〇	令義解成る。	
仁	一四九四	承和元		
	一四九五	二		空海（一四三三―一四九五）
	一四九六	三		
	一四九七	四		
	一四九八	五		
	一四九九	六		
	一五〇〇	七		
	一五〇一	八	日本後紀成る。	
	一五〇二	九	橘逸勢卒す。	

天皇	皇紀	年号	事項	歌人
明	一五〇三	一〇		
	一五〇四	一一		
	一五〇五	一二		
	一五〇六	一三		
	一五〇七	一四		
	一五〇八	嘉祥 元		
	一五〇九	二		
	一五一〇	三		
文徳	一五一一	仁壽 元		
	一五一二	二		小野篁（一四六二―一五一二）
	一五一三	三		藤原關雄（一四六四―一五一三）
	一五一四	齊衡 元		
	一五一五	二		
	一五一六	三		
	一五一七	天安 元	藤原良房太政大臣となる。	

皇紀	天皇	年号	摂関	事項	歌人
一五一八		二			
一五一九	清和	貞観元	摂関 良房		
一五二〇		二			
一五二一		三			
一五二二		四			
一五二三		五			
一五二四		六			
一五二五		七			
一五二六		八			
一五二七		九			源信（一四六四―一五二七）
一五二八		一〇			
一五二九		一一		貞観格成る。	
				續日本後紀成る。	
一五三〇		一二			
一五三一		一三		貞観式成る。	

	一五三二	四		藤原良房薨ず。	
	一五三三	五			惟喬親王（一五〇八―一五三三）
	一五三四	六			
	一五三五	七			
	一五三六	八			
陽成	一五三七	元慶 元	基	この年中、都氏文集殘編・竹取物語、伊勢物語等出づ。	紀有常（一四七五―一五三七）
	一五三八	二		文德實錄成る。	
	一五三九	三			
	一五四〇	四			左原業平（一四八五―一五四〇）
	一五四一	五			
	一五四二	六			日本紀竟宴和歌。
	一五四三	七			
	一五四四	八			在民部卿家歌合（―）
	一五四五	仁和 元			

天皇	皇紀	年號	事項	歌壇
光孝	一五四六	二		
	一五四七	三	基經關白となる。	
孝	一五四八	四		
宇	一五四九	寛平元		
	一五五〇	二		僧正遍昭（一四七五—一五五〇）
	一五五一	三	基經薨す。	文屋康秀（—）寛平御時后宮歌合（—）
				是貞親王家歌合（—）
	一五五二	四	類聚國史六十一卷成る。	
	一五五三	五		在原行平（一四七九—一五五三）
				菅家萬葉集（一五五三）
	一五五四	六	遣唐使を停む。	
	一五五五	七		
	一五五六	八		
多	一五五七	九		
	一五五八	昌泰元		

醍醐

一五五九	二		朱雀院女郎花合。
一五六〇	三		安倍清行（一四八五—一五六〇）
一五六一	延喜元	菅原道眞貶せらる。 三代實錄五十卷成る。	藤原敏行（—一五六一）
一五六二	二		
一五六三	三		
一五六四	四		菅原道眞（一五〇二—一五六四）
一五六五	五		紀友則（一五〇五—一五六五） 古今和歌集成る。（或は延喜七年以後といはる）
一五六六	六		日本紀竟宴和歌。
一五六七	七		
一五六八	八		
一五六九	九	藤原時平薨ず。	
一五七〇	一〇		
一五七一	一一		
一五七二	一二		

關		經	
一五七三	一三		亭子院歌合。
一五七四	一四		陽成院歌合。
一五七五	一五		
一五七六	一六		亭子院有心無心歌合。
一五七七	一七		
一五七八	一八		
一五七九	一九		
一五八〇	二〇		大江千里（—）
一五八一	二一		
一五八二	二二		凡河内躬恒（—）
一五八三	延長元		
一五八四	二		平貞文（—）
一五八五	三		
一五八六	四		新撰和歌集。
一五八七	五	延喜式五十卷成る。	
一五八八	六		九月左大臣殿歌合。

	一五八九	七			坂上是則（—）
	一五九〇	八			中務（一五四七—一五九〇）
朱	一五九一	承平元	忠		
	一五九二	二			
	一五九三	三			藤原兼輔（一五三七—一五九三）
	一五九四	四			
	一五九五	五			土佐日記。
	一五九六	六			素性法師（—）
	一五九七	七			（承平年中古今和歌六帖十巻成る。）
	一五九八	天慶元			
	一五九九	二			伊勢（—一五九九） 宗于親王（—一五九九）
	一六〇〇	三		承平、天慶の亂平ぐ。	
	一六〇一	四			

天皇	紀元	年號	年	事項
雀	一六〇二		五	
	一六〇三		六	藤原敦忠（一五六六―一六〇三）
	一六〇四		七	
	一六〇五		八	
	一六〇六		九	紀貫之（―一六〇六）
村	一六〇七	天曆	元	
	一六〇八		二	源公忠（一五四九―一六〇八）
	一六〇九		三	
	一六一〇		四	
	一六一一		五	和歌所を置き、萬葉集を讀み解き、後撰和歌集を撰ばしむ。
	一六一二		六	
	一六一三		七	在原元方（―一六一三）
	一六一四		八	
	一六一五		九	內裏歌合。

上					
一六一六	一〇			大中臣頼基（―一六一八）
一六一七	天徳 元			
一六一八	二			藤原清正（―一六一八）
一六一九	三			
一六二〇	四		（天徳年間大和物語二巻成る。伊勢物語はこれより以前に成れり。）	天徳歌合。
一六二一	應和 元			九條尚光出家す（歿年不詳）
一六二二	二			
一六二三	三			
一六二四	康保 元	平		壬生忠峯（一五一八―一六二五）
一六二五	二			壬生忠見（―）
一六二六	三		小野道風卒す。	藤原朝忠（一五七〇―一六二六） 内裏前栽合。

天皇	年	年号	摂関	事項	歌人・歌書
	一六二七	四			元眞（—）
冷泉	一六二八	安和元	實頼		
	一六二九	二			
圓融	一六三〇	天祿元			源信明（一五七〇—一六三〇）
	一六三一	二			
	一六三二	三	伊尹		藤原伊尹（一五八四—一六三二） 野宮十番歌合（源順判）
	一六三三	天延元	兼通		
	一六三四	二			
	一六三五	三		（天延年間蜻蛉日記三卷成る。）	堀川中納言家歌合。
	一六三六	貞元元			
	一六三七	二			賀茂保憲女（—一六三七）
	一六三八	天元元			藤原仲文（一五六七—一六三八）

天皇	皇紀	年号	摂関	事項	歌人
融	一六三九	二	頼		
	一六四〇	三			
	一六四一	四			
	一六四二	五			
	一六四三	永観元			源順（一五七二—一六四三）
	一六四四	二			
花山	一六四五	寛和元	忠	（寛和年間宇都保物語二十巻成る。一説には長和四年以後といはる。）	惠慶法師（—）。内裏歌合。徽子女王（一五九六—一六四五）
	一六四六	二			花山院歌合。
	一六四七	永延元	兼家		曾根好忠（—）
	一六四八	二			
	一六四九	永祚		本朝文粋十二巻成る。	
	一六五〇	正暦元			平兼盛（—一六五〇）

一

一六五一	二	道		清原元輔（一五六八—一六九〇）
一六五二	三			大中臣能宣（一五八二—一六五一）
一六五三	四	隆		
一六五四	五			
一六五五	長徳元	道兼		
一六五六	二			
一六五七	三			
一六五八	四		（長徳年間扶桑集成る、次枕草子成る。）	源重之（—）。拾遺和歌抄十卷。
一六五九	長保元	道	（落窪物語は長保二三年以前の作といはる。）	
一六六〇	二			
一六六一	三			
一六六二	四			
一六六三	五		（長保年間源氏物語成る。）	和泉式部集。

天皇	皇紀	年號		事項	歌人・歌集
				（同紫式部日記二卷成る。）	御堂七番歌合（公任判） 拾遺和歌集二十卷（或は寛弘年中）
條	一六六四	寛弘元			
	一六六五	二			
	一六六六	三			
	一六六七	四			
	一六六八	五			花山天皇（一六二八—一六六八）
	一六六九	六			
	一六七〇	七		（紫式部日記の記事はこの年に終る。）	
	一六七一	八			大江嘉言（—）
三	一六七二	長和元	長		發心和歌集（選子內親王）
	一六七三	二		道長の第に幸す。	藤原高遠（一六〇九—一六七三）
	一六七四	三			
後	一六七五	四			

天皇	紀元	年号	年	摂関	事項	歌人
	一六七六		五			
後一	一六七七	寛仁	元	頼		
	一六七八		二			
	一六七九		三		刀伊の入寇。	源道済（—一六七九）
	一六八〇		四			
	一六八一	治安	元		源頼光卒す。	
	一六八二		二		法成寺成る。	
	一六八三		三			
	一六八四	萬壽	元			
	一六八五		二			清少納言（—）
	一六八六		三			
	一六八七		四		道長薨す。藤原行成卒す。	馬内侍（—）
	一六八八	長元	元			
	一六八九		二			

天皇	西暦	年号	事項	歌人
條	一六九〇	三		紫式部（―）
	一六九一	四	（萬壽二年―長元四年の間に紫式部は死去したるものと紫家七論論はいふ。）	
	一六九二	五		上東門院十番菊合。
	一六九三	六		藤原長能（―）
	一六九四	七		
	一六九五	八		賀陽院水閣歌合（輔親判）
	一六九六	九		
後朱	一六九七	長暦元		
	一六九八	二		大中臣輔親（一六一四―一六九八） 源大納言家歌合（師房判）
	一六九九	三		
	一七〇〇	長久元		
	一七〇一	二		藤原公任（一六二七―一七〇一）

天皇	年	年号	事項	歌壇
雀	一七〇二	三		弘徽殿女御十番歌合（義忠判）
	一七〇三	四	（長久年間和漢朗詠集成る）	
	一七〇四	寛徳 元		
	一七〇五	二		藤原定頼（一六五六—一七〇五） 玄々集（—）
後	一七〇六	永承 元		
	一七〇七	二		
	一七〇八	三		
	一七〇九	四		
	一七一〇	五		祐子内親王家歌合。
	一七一一	六		和泉式部（—）。後冷泉院歌合。
	一七一二	七	（永承年間狭衣四巻成る。）	
	一七一三	天喜 元		
	一七一四	二		

天皇	皇紀	年號		撰集	文學	和歌
冷泉	一七一五		三			赤染衛門（一）
	一七一六		四			始めて中殿御會を行ふ。 皇后宮春秋歌合（頼宗判）
	一七一七		五		（天長年間夜半の寢ざめ物語成る。但し今日傳はるものは鎌倉時代のもの。）	
	一七一八	康平	元			能因法師（一）
	一七一九		二			
	一七二〇		三			良暹法師（一）
	一七二一		四			
	一七二二		五		前九年の役平ぐ。	伊勢大輔（一）
	一七二三		六			
	一七二四		七	通	（康平年間更級日記、濱松中納言物語成る。）	
	一七二五	治暦	元		本朝文粹編者藤原明衡（一）	

天皇	皇紀	年号	年	教	
	一七二六		二		藤原頼宗（一六五二―一七二六）
	一七二七		三		禖子内親王家歌合。
	一七二八		四		呂保殿歌合。
後三條	一七二九	延久	元		
	一七三〇		二		
	一七三一		三		相撲（一）
	一七三二		四		多氣宮歌合。
	一七三三		五	（延久年間今昔物語成るとの說あり。）	
白	一七三四	承保	元		
	一七三五		二		
	一七三六		三		
	一七三七	承曆	元	源隆國死す。七十四歲。	
	一七三八		二		內裏歌合（顯房判）
	一七三九		三		

天皇	年	年號		攝關・院政	事項	和歌
河	一七四〇		四	通		
	一七四一	永保	元			
	一七四二		二			
	一七四三	閏	三			
	一七四四	應徳	元			中殿御會。
	一七四五		二	師		
	一七四六		三	實		後拾遺和歌集。 若狹守通宗朝臣女子達歌合。
堀	一七四七	寛治	元	院	院政の始。 後三年の役平ぐ。	
	一七四八		二			
	一七四九		三			
	一七五〇		四	政	（更級日記はこの年にかき始めらるともいはる。）	
	一七五一		五			

皇紀	年号	年	天皇	事項	歌人・歌合
一七五二		六	堀河（白河上皇）		
一七五三		七		（寛治年間堤中納言物語、唐物語、石清水物語等成る。）	郁芳門院歌合。
一七五四	嘉保	元			藤原顯房（一六九七—一七五四）。中殿御會。 賀陽院歌合（經信判）
一七五五		二			中殿御會。
一七五六	永長	元			
一七五七	承德	元			源經信（一六一七—一七五七）
一七五八		二			
一七五九	康和	元			藤原道俊（一七〇七—一七五九）
一七六〇		二			國信卿家歌合。
一七六一		三			
一七六二		四			堀河院艶書合。
一七六三		五			津守國基（—一七六三）
一七六四	長治	元			堀河百首（—）
一七六五		二			

皇紀	年號	天皇	院	事項	人物
一七六六	嘉承 元			（榮華物語は寛治六年以後嘉承二年までの間に成れりといふ。）	中殿御會。
一七六七	二				藤原公實（ー一七六七）
一七六八	天仁 元	鳥	白		
一七六九	二				
一七七〇	天永 元				
一七七一	二				大江匡房（一七〇一—一七七一）
					藤原國信（一七二九—一七七一）
一七七二	三				
一七七三	永久 元				
一七七四	二			讚岐典侍日記二卷成る。	藤原俊成（一七七四—一八六四）
一七七五	三		河	朝野羣載三十卷成る。	
一七七六	四				堀河次郎百首。
一七七七	五			（永久年間とりかへばや物	

天皇	皇紀	年号	院政	事項	歌合・歌人
羽			法皇	語四巻成る。)	
	一七七八	元永元			柿本影供記。
	一七七九	二			内大臣殿歌合（顕季判）
	一七八〇	保安元			
	一七八一	二			藤原仲實（一一七八一）。関白内大臣家歌合（基俊判）
	一七八二	三			
	一七八三	四			藤原顕季（一七一五—一七八三）
崇	一七八四	天治元			
	一七八五	二		催馬楽抄。	
	一七八六	大治元			
	一七八七	二		大鏡八巻成る。	金葉集。良玉集。西宮歌合（基俊判）
	一七八八	三		新撰朗詠集二巻成る。	
	一七八九	四	鳥		
	一七九〇	五			源俊頼（一—）
	一七九一	天承元			

徳

一七九二	長承元	肥後（一）
一七九三	二	相摸立詩歌合。
一七九四	三	康資王女（一）
		中宮亮顕輔朝臣家歌合（基俊判）
一七九五	保延元	
一七九六	二	周防内侍（一）
一七九七	三	堀河（一）
一七九八	四	
一七九九	五	藤原俊成基俊の門に入る。
一八〇〇	六	（本朝續文粹は寛仁頃より保延ごろまでの作を收む。） 源顕仲（一） 佐藤義清二十三にて出家す。
一八〇一	永治元	藤原顕仲（一）
一八〇二	康治元	藤原基俊（一）
一八〇三	二	
一八〇四	天養元	詞花和歌集。

羽

天皇	紀元	年號	年	事項	歌壇
近衛	一八〇五	久安	元		
	一八〇六		二		
	一八〇七		三		
	一八〇八		四		
	一八〇九		五		右衛門督家歌合（顯輔判）
	一八一〇		六		
	一八一一	仁平	元		
	一八一二		二		
	一八一三		三	平忠盛卒す。	
	一八一四	久壽	元		
	一八一五		二		藤原顯輔（一七五〇—一八一五）
後白河	一八一六	保元	元	保元の亂。梁塵祕抄成る。	
	一八一七		二		
	一八一八		三		

天皇	皇紀	年號	年	院政	一般事項	和歌事項
二條	一八一九	平治	元		平治の亂。	
	一八二〇	永曆	元			淸輔朝臣家歌合（通能判）
	一八二一	應保	元			
	一八二二		二			
	一八二三	長寬	元			
	一八二四		二			
	一八二五	永萬	元			藤原範兼（—一八二五） 續詞花和歌集二十卷。
六條	一八二六	仁安	元			中宮亮重家朝臣家歌合（俊成判）
	一八二七		二		淸盛太政大臣に任ぜらる。	
	一七二八		三		榮西入宋す。	天皇太后皇后亮平經盛家歌合（淸輔判）
高	一八二九	嘉應	元	後		和歌初學抄、和歌現在書目錄（仁安中）
	一八三〇		二		源爲朝自殺す。	住吉社歌合。
	一八三一	承安	元			左衛門督實國卿歌合（淸輔判）
	一八三二		二			廣田社歌合（俊成判）

天皇	紀元	年號	院	事項	歌人・歌集
倉	一八三三	三			
	一六三四	四		源空淨土宗を開く。	
	一八三五	安元 元	白		
	一八三六	二			右京大夫（—）
	一八三七	治承 元		鹿ケ谷の會合。	藤原淸輔（一七六四—一八三七）
	・			寶物集七卷、愚管抄成る。	右大臣家歌合（淸輔判）
	一八三八	二			
	一八三九	三	河	平重盛薨ず。 淸盛後白河法皇を幽す。	右大臣家歌合（俊成判）
	一八四〇	四		源賴朝の擧兵。 （治承年間袋草子四卷成る）	源賴政（一七六五—一八四〇）
安	一八四一	養和 元		淸盛薨ず。	
				桐火桶二卷成る。	
	一八四二	壽永 元	上		月詣和歌集。
德	一八四三	二		源義仲入京す。	古今集序註。散木集註。

皇紀	年号	後鳥羽	事項	和歌
一八四四	元暦元	皇	義仲敗死。一の谷の戰。	拾遺抄註、柿本朝臣人麿勘文。平忠度（一八〇四—一八四四）
一八四五	文治元		平家壇浦に滅ぶ。	
一八四六	二			俊惠（—）
一八四七	三			千載和歌集。
一八四八	四			
一八四九	五		源義經衣川館に戰死す。	
一八五〇	建久元		賴朝上洛、大將に敍せられ六十六國總追捕使となる。	西行法師（一七七八—一八五〇）
一八五一	二		榮西建仁寺を造る。	藤原實定（一七九九—一八五一）
一八五二	三	將軍	賴朝征夷大將軍に任ぜらる	
一八五三	四			
一八五四	五			
一八五五	六		水鏡三卷この以前に成る。	六百番歌合。民部卿家歌合（俊成判）
一八五六	七			
一八五七	八			古來風體抄。

	一八五八	九	頼朝	（建久年間保元物語、平治物語成る。）四季物語、發心集、撰集抄等成る。	後京極御自歌合（俊成判）
土御門	一八五九	正治・元		頼朝薨ず。	影供歌合。
	一八六〇	二	頼家	今鏡十卷成る。	仙洞十人歌合（定家判）
	一八六一	建仁 元		（方丈記この頃に成る）	和歌所を置く。式子内親王（―一八六一）月清集成る。
	一八六二	二			寂蓮（―一八六二）。千五百番歌合。
	一八六三	三			
	一八六四	元久 元	實		藤原俊成（一七七四―一八六四）
	一八六五	二			新古今和歌集。
	一八六六	建永 元			藤原良經（一八〇八―一八六六）
	一八六七	承元 元			
	一八六八	二			定家和歌式（―）

天皇	紀元	年号	事項	歌書・歌人
	一八六九	三		
	一八七〇	四		
順徳	一八七一	建暦元		長明無名抄。
	一八七二	二		
	一八七三	建保元	和田義盛滅ぶ。	仙洞歌合（定家判）
	一八七四	二		職人歌合。
	一八七五	三		
	一八七六	四		鴨長明（一八一四—一八七六）藤原有家（一八一五—一八七六）北野宮詩歌合。
	一八七七	五		
	一八七八	六		
	一八七九	承久元	八雲御抄六巻成る。実朝、公暁に弑せられ源氏滅ぶ。	源実朝（一八五二—一八七九）
	一八八〇	二	（住吉物語は承久の頃	

朝

に成ると黒川春樹はいふ。）

天皇	年	年號
仲恭	一八八一	三
後堀河	一八八二	貞應元
	一八八三	二
	一八八四	元仁元
	一八八五	嘉祿元
	一八八六	二
	一八八七	安貞元
	一八八八	二
	一八八九	寛喜元
	一八九〇	二

政 子 賴

執權 義時 泰

承久の亂。（承久年間平家物語成る。）

海道記成る。

親鸞淨土眞宗を開く。

平政子薨す。

道元曹洞宗を傳ふ。

飛鳥井雅經（一八三〇―一八八一）

式子内親王（―）。爲家卿千首。

慈鎭和尚（一八一五―一八八五）。僻案抄（―）

源道具（一八三〇―一八八七）

四條

時　經

一八九一	三		顯昭（一）
一八九二	貞永元	貞永式目成る。	光明峯寺攝政家歌合（定家判）
一八九三	天福元	教訓抄十卷成る。	
一八九四	文暦元		新勅撰和歌集。
一八九五	嘉禎元		
一八九六	二		遠島御歌合。
一八九七	三		藤原家隆（一八一八—一八九七）
一八九八	暦仁元		
一八九九	延應元		後鳥羽法皇（一八四〇—一八九九）
一九〇〇	仁治元		藤原秀能（一八四四—一九〇〇）
一九〇一	二		藤原定家（一八二二—一九〇一） 詠家大概。
一九〇二	三	泰時卒す。 東關紀行成る。 （仁治年間宇治拾遺物	順德上皇（一八五七—一九〇二）

	一九〇三	一九〇四	一九〇五	一九〇六	一九〇七	一九〇八	一九〇九	一九一〇	一九一一	一九一二	一九一三	一九一四
	後嵯峨				後深草							
	寛元元	二	三	四	寶治元	二	建長元	二	三	四	五	六
	頼嗣											宗
	時頼											
語成る。）	（石清水物語は寛治元年以降文永八年までの間に成れりといふ。）				三浦氏滅ぶ。					十訓抄三巻成る。	日蓮法華宗を開く。	古今著聞集成る。
	河合社歌合（爲家判）			萬葉集仙覺抄。	院歌合（爲家判）。蓮性陳狀。萬載和歌集。中殿御會		秋風抄。	續後撰和歌集。				藤原俊成女（一）

紀元	年號	天皇	將軍	執權	事項	歌人・歌集
一九一五	七	草	尊	時	（建長年間源平盛衰記成る。？）（鳴門中將物語、建長前後に成る。）	
一九一六	康元 元					素暹法師（—）
一九一七	正嘉 元					現存和歌六帖。
一九一八	二					
一九一九	正元 元			時		蓮生法師（一八三八—一九一九）
一九二〇	文應 元	龜				新三十六人撰。
一九二一	弘長 元					藤原知宗（—）。弘長百首。
一九二二	二					三十六人歌合。詠歌一體（—）
一九二三	三		親		時頼卒す。	
一九二四	文永 元					藤原家良（一八五二—一九二四）
一九二五	二				辨内侍日記二卷成る。	藤原信實（一八三七—一九二五）續古今和歌集。

一九二六	山	三				
一九二七		四				白河殿七百首。
一九二八		五			蒙古國書を送る。	
一九二九		六				
一九三〇		七				
一九三一		八				風葉和歌集。
一九三二		九				後嵯峨上皇（一八八一—一九三二）
一九三三		一〇				宗尊親王（一九〇二—一九三四）
一九三四		一一			文永の役。	
一九三五	後	建治元	惟	宗	九州探題を置く。	藤原行家（一八八三—一九三五）。藤原爲家（一八五七—一九三五）。龜山殿に於て兩席御會を行ふ。
一九三六		二			一遍時宗を唱ふ。	藤原光俊（一八六九—一九三六） 現存三十六人詩歌。
一九三七		三				
一九三八		弘安元	康			續拾遺和歌集。

年	天皇	年号	将軍	執権	事項	歌人
一九三九	宇多	二	親王	貞		
一九四〇		三			十六夜日記成る。	九條基家（一八六三—一九四〇）
一九四一		四			沙石集十巻成る。弘安の役。	
一九四二		五				
一九四三		六				阿佛尼（—一九四三）
一九四四		七				
一九四五		八				
一九四六		九				藤原爲氏（一八八二—一九四六）
一九四七		一〇	王			
一九四八	伏	正應元	久		（正應年間中務内侍日	嚴島社頭和歌。
一九四九		二				
一九五〇		三				
一九五一		四				
一九五二		五				

天皇	紀元	年號	將軍	執權	事項	歌書・歌合等
見					記成る。）	
	一九五三	永仁　元	明	時		野守鏡、伊勢新名所歌合（爲世判）
	一九五四	二				當座三十番歌合（爲兼判）
	一九五五	三				十五夜歌合（衆議判）
	一九五六	四				
	一九五七	五				
	一九五八	六				
後伏見	一九五九	正安　元			宴曲集五卷、宴曲抄三卷・選要目錄等成る。	津守國助（一九〇二—一九五九）
	一九六〇	二				
	一九六一	三				飛鳥井雅有（一九〇一—一六九一）
後二	一九六二	乾元　元	親	師		定爲法印申文。
	一九六三	嘉元　元				仙洞五十番歌合（爲兼判）
	一九六四	二				新後撰和歌集。

皇紀	天皇	年號	將軍	執權	事項	歌書・歌會
一九六五	條	三	王	時	龜山法皇崩ず。	永福門院歌合（伏見院判）
一九六六		德治元				
一九六七		二				
一九六八		延慶元				
一九六九		二		貞		
一九七〇		三				延慶兩卿陳狀。
一九七一	花	應長元		時		
一九七二		正和元	守			玉葉和歌集。
一九七三		二				
一九七四		三				
一九七五		四				春日社法樂和歌、新院三席御會。
一九七六		五		高	北條顯時金澤文庫を建つ。	
一九七七	園	文保元				伏見上皇（一九二六―一九七七）
一九七八		二				

一九七九	元應元	後	邦			源有房（―一九七九）
一九八〇	二					續千載和歌集。
一九八一	元亨元			時		
一九八二	二					定爲法師（―）
一九八三	三					龜山殿七百首。
一九八四	正中元					二條爲藤（一九三五―一九八四）
一九八五	二		親			續後拾遺和歌集。
一九八六	嘉暦元			守時	卜部兼好出家す。	
一九八七	二					
一九八八	三					冷泉爲相（一九二三―一九八八） 津守國道（一九三七―一九八八）
一九八九	元德元					長舜（―）。中殿御會。
一九九〇	二		王			藤原爲子。
一九九一	元弘元	光（北朝）			天皇笠置に幸す。楠木正成義兵を擧ぐ。	
一九九二	二（北朝）正慶元					藤原爲兼（一九一四―一九九二）

嚴	醍	一九九三	三	二	護良親王	名和長年義兵を擧ぐ。北條氏滅ぶ。	
		一九九四	（南朝）建武元		成良親王	建武中興成る。	三席御會。
	醐	一九九五	二			護良親王弑せらる 尊氏叛す。	中殿御會。
		一九九六	延元元		尊	尊氏入京。湊川の戰。天皇吉野に遷幸。	
		一九九七	二				
		一九九八	三	曆應元		北畠顯家、新田義貞戰死。	三條爲世（一九一〇—一九九八）
光	後	一九九九	四	二			
		二〇〇〇	興國元	三			
		二〇〇一	二	四			

二〇〇二			三	康永元			永福門院（一九三一—二〇〇二）
二〇〇三			四	二			
二〇〇四			五	三		天龍寺成る。	源親子（—）。持明院南席御會。
二〇〇五			六	貞和元		（興國年間神皇正統記成る。）	二條爲定足利尊氏に三代集の傳授をなす。
二〇〇六	明		正平元	二			風雅和歌集。
二〇〇七			二	三			釋門三十六歌仙。
二〇〇八			三	四		四條畷の戰。	花園上皇（一九五六—二〇〇八）
二〇〇九		村	四	五			
二〇一〇	崇光		五	觀應元			兼好法師（一九四三—二〇一〇）。一説に文永八年又は九年（一九三二）に生るといはる。
二〇一一			六	二			
二〇一二			七	文和元	氏		
二〇一三	後		八	二			津守國夏（一九四九—二〇一三） 飛鳥井雅孝（一九四二—二〇一三）
二〇一四			九	三		北畠親房薨ず。	

光嚴

上

皇紀	南朝	北朝
二〇一五	一〇	四
二〇一六	一一	延文元
二〇一七	一二	二
二〇一八	一三	三
二〇一九	一四	四
二〇二〇	一五	五
二〇二一	一六	康安元
二〇二二	一七	貞治元
二〇二三	一八	二
二〇二四	一九	三
二〇二五	二〇	四
二〇二六	二一	五
二〇二七	二二	六
二〇二八	二三	應安元

義詮

尊氏歿す。

元、倭寇を禁ぜんことを請ふ。

浄辨（ー）。菟玖波集。

新千載和歌集。

二條爲定（一九五三—二〇二〇）

慶運（—）

二條爲明（一九五四—二〇二三）

新玉津島宮歌合（爲秀判）

新拾遺和歌集。

年中行事歌合（爲秀判）

後村上天皇（一九八八—二〇二八）

天皇	天皇	紀元	南朝年號	北朝年號	將軍	事項	事項
後圓融	長慶	二〇二九	二四	二	義	（正平年間増鏡、吉野拾遺等成る。）	（正平年間連歌新式一卷成る。）
		二〇三〇	建徳元	三			
		二〇三一	二	四			新院御所三席御會。
		二〇三二	文中元	五			頓阿法師（一九四九—二〇三二）。冷泉爲秀（—二〇三二）
		二〇三三	二	六			
		二〇三四	三	七		（文中年間太平記井蛙抄等成る。）	
	後	二〇三五	天授元	永和。元			南朝五百番歌合。
		二〇三六	二	二			
		二〇三七	三	三			嘉喜門院（—）
		二〇三八	四	四			
		二〇三九	五	康暦元			
		二〇四〇	六	二			

二〇四一	弘和元	永徳元	滿		二條爲遠（一九九二―二〇四一）。新葉和歌集。
二〇四二	二	二			
二〇四三	三	三		（永徳年間世阿彌十六部集成る。	
二〇四四	元中元	至徳元			新後拾遺和歌集。
二〇四五	二	二			飛鳥井雅家（―二〇四五） 宗良親王（一九七二―二〇四五）
二〇四六	三	三			
二〇四七	四	嘉慶元			
二〇四八	五	二			近來風體抄。 二條良基（一九八〇―二〇四八）
二〇四九	六	康應元			
二〇五〇	七	明徳元			
二〇五一	八	二			
二〇五二	九	三		天皇京都に還幸。	
二〇五三	明徳四				
二〇五四	應永元				

天皇：後小松（北朝）／龜山（南朝）

二〇五五	二	義		
二〇五六	三			
二〇五七	四		金閣寺成る。	津守國久（二〇一八―二〇五七）
二〇五八	五		三管領、四職を定む。	
二〇五九	六		應永の亂。	
二〇六〇	七			
二〇六一	八		義滿好を明に通ず。	
二〇六二	九			
二〇六三	一〇			今川了俊和歌所へ不審條々。
二〇六四	一一			
二〇六五	一二			
二〇六六	一三			
二〇六七	一四			内裏九十番歌合。
二〇六八	一五			耕雲口傳。
二〇六九	一六			了俊辨要抄。
二〇七〇	一七			

天皇	紀元	年	将軍	事項
	二〇七一	一八	持	
	二〇七二	一九		仙洞三席御會
稱光	二〇七三	二〇		
	二〇七四	二一		
	二〇七五	二二		
	二〇七六	二三		仙洞兩席御會
	二〇七七	二四		冷泉爲尹（二〇二一―二〇七七）
	二〇七八	二五		
	二〇七九	二六		
	二〇八〇	二七		今川貞世（一九八五―二〇八〇）
	二〇八一	二八		
	二〇八二	二九		
	二〇八三	三〇	義量	
	二〇八四	三一		
	二〇八五	三二		

天皇	皇紀	年號	將軍	事項	歌人・歌書
	二〇八六	三三	義		
	二〇八七	三四	持	（應永年間義經記、曾我物語等成る。）	
	二〇八八	正長 元			飛鳥井雅縁（二〇一八—二〇八八）
後	二〇八九	永享 元	義		花山院長親（—二〇八九）
	二〇九〇	二			
	二〇九一	三			
	二〇九二	四			
	二〇九三	五			
	二〇九四	六			
	二〇九五	七			
	二〇九六	八			
	二〇九七	九			室町亭に行幸。三席御會。
	二〇九八	一〇			新續古今和歌集。
	二〇九九	一一		足利學校の再興。	

皇紀	年號	天皇	將軍	事項	和歌
二一〇〇	一二	花	教	永享の亂。	
二一〇一	嘉吉元		義	嘉吉の亂。	
二一〇二	二				
二一〇三	三		勝		
二一〇四	文安元				
二一〇五	二				飛鳥井雅世（二〇五〇—二一〇五）
二一〇六	三				
二一〇七	四				
二一〇八	五				蜷川親當（—二一〇八）
二一〇九	寶德元			足利成氏關東管領となる。	
二一一〇	二				仙洞歌合。
二一一一	三				
二一一二	享德元		義		百番歌合。
二一一三	二				
二一一四	三				冷泉持爲（二〇六一—二一一四）

閣				
	二一一五	康正元	成氏古河に奔る。	堯孝（二〇五一—二一一五）。内裏歌合。
	二一一六	二		
	二一一七	長祿元	太田道灌江戸を築く。	
	二一一八	二		正徹（二〇四〇—二一一八）
	二一一九	三	（長祿年間正徹物語二巻成る。）	
	二一二〇	寛正元		
	二一二一	二		
	二一二二	三		仙洞三席御會。
	二一二三	四		飛鳥井雅親勅撰の命を蒙る、成らずして止む。
	二一二四	五		仙洞三席御會。
	二一二五	六		
	二一二六	文正元		
	二一二七	應仁元	應仁の亂。	
	二一二八	二		

皇紀	年号	天皇	将軍	物故	事項
二一二九	文明元	後			
二一三〇	二				
二一三一	三				東常縁古今傳授を宗祇に傳ふ。
二一三二	四				宗祇、古今和歌集抄。
二一三三	五				
二一三四	六				貞常親王（二〇八五—二一三四） 武州江戸歌合（心敬判）
二一三五	七				心敬僧都（二〇六七—二一三五）
二一三六	八				兼良、古今集童蒙抄。
二一三七	九				七月七日七首歌合（兼良判）
二一三八	一〇		義		八月二日歌合（兼良判）
二一三九	一一				
二一四〇	一二	土		幸若太夫歿（七十八歳）	
二一四一	一三				一條兼良（二〇六二—二一四一） 常縁将軍以下の師範として上洛す。
二一四二	一四				飛鳥井雅康（—二一四二）。将軍家歌合。

皇紀	年號	天皇	將軍	事項	歌壇
二一四三	一五	御門	尚	銀閣寺成る。	
二一四四	一六				宗祇、自讃歌註。
二一四五	一七				
二一四六	一八				太田道灌（二〇九二—二一四六） 殿中十五番歌合。
二一四七	長享元				
二一四八	二				
二一四九	延德元				
二一五〇	二		義		飛鳥井雅親（二〇七七—二一五〇）
二一五一	三				
二一五二	明應元				
二一五三	二				和歌深秘抄（堯恵）
二一五四	三		熙		東常縁（二〇六一—二一五四）
二一五五	四			北條早雲小田原城を奪ふ。	正廣（二〇七二—二一五五）
二一五六	五				
二一五七	六				

天皇	紀元	年號	將軍	事項	歌人・歌書
	二一五八	七			猪苗代兼載（二一三〇―二一五八）
	二一五九	八			
	二一六〇	九			
後	二一六一	文龜元	澄		
	二一六二	二		新撰菟玖波集二十卷成る。	宗祇法師（二〇八一―二一六二）
	二一六三	三			三十六番歌合（爲廣判）
	二一六四	永正元			姉小路基綱（二一〇一―二一六四）
	二一六五	二			水無瀬宮法樂和歌。
	二一六六	三		雪舟寂す。	
	二一六七	四			松緣集（堯憲）
	二一六八	五	義		
	二一六九	六			
	二一七〇	七			
	二一七一	八			
	二一七二	九			

天皇	皇紀	年号	将軍	事項	歿年
柏原	二一七三	一〇	稙	犬筑波集出づ。	
	二一七四	一一			
	二一七五	一二			
	二一七六	一三			
	二一七七	一四			
	二一七八	一五		閑吟集成る。	
	二一七九	一六			
	二一八〇	一七		(永正年間雪玉集十八卷成る。)	
	二一八一	大永元			
	二一八二	二			飛鳥井雅俊(二一二二—二一八三)
	二一八三	三	義		冷泉政爲(二一〇五—二一八三)
	二一八四	四			
	二一八五	五		土佐光信歿す。	
	二一八六	六			牡丹花肖柏(二一〇二—二一八六)

後														
	二一八七	二一八八	二一八九	二一九〇	二一九一	二一九二	二一九三	二一九四	二一九五	二一九六	二一九七	二一九八	二一九九	二二〇〇
	七	享祿元	二	三	四	天文元	二	三	四	五	六	七	八	九
晴														
											天文年間吉野詣記一巻成る			
冷泉爲廣（二一一〇—二一八六）						大神宮法樂和歌。					三條西實隆（二一一五—二一九七）			

二二〇一	奈	一〇			
二二〇二		一一			
二二〇三		一二		鐵砲の傳來。	天文千首（二二〇三）
二二〇四		一三			
二二〇五		一四			
二二〇六		一五			
二二〇七		一六			
二二〇八		一七			
二二〇九		一八		天主教の傳來。	冷泉爲和（二一四六－二二〇九）
二二一〇		一九			
二二一一		二〇			
二二一二	良	二一	義		
二二一三		二二			
二二一四		二三			
二二一五		弘治元		嚴島の戰。	細川左京大夫自歌合。
二二一六		二			

天皇	紀元	年號	將軍	事項	歌人・歌書
	二二一七	三			
正	二二一八	永祿元	輝		
	二二一九	二		狩野元信歿す。	
	二二二〇	三		桶狹間の戰。	
	二二二一	四		川中島の戰。	
	二二二二	五			
	二二二三	六			三條西公條（二一四七—二二二三） 十五夜三首歌合。
	二二二四	七		義輝弑せらる。	三好長慶（二一八二—二二二四）
	二二二五	八	義榮		
	二二二六	九			
	二二二七	一〇			
	二二二八	一一	義	織田信長入京。	
	二二二九	一二			
	二二三〇	元龜元		姉川の戰。	北條氏康（二一七五—二二三〇）

親	二二三一	二	昭	信長延暦寺を燒く。	祕傳天仁波抄（姉小路式） 毛利元就（二一五七―二二三一）。二根集。
	二二三二	三			細川幽齋古今傳授を三條實枝より受く。
	二二三三	天正元		足利幕府滅ぶ。	
	二二三四	二			
	二二三五	三		長篠の戰。	
	二二三六	四			
	二二三七	五			
	二二三八	六	信	上杉謙信卒す。	
町	二二三九	七		安土城成る。	三條實枝（二一七一―二二三九）。内裏歌合。
	二二四〇	八			
	二二四一	九			
	二二四二	一〇		大友、有馬、大村の三侯使を羅馬に遣はす。 本能寺の變。	
	二二四三	一一		賤ヶ嶽の戰。	

皇紀	年號	天皇	關白	事項	和歌
二二四四	一二				
二二四五	一三			秀吉關白に任ぜらる。	
二二四六	一四				
二二四七	一五	後	秀吉	聚樂第成る。	
二二四八	一六				秀吉聚樂第に和歌會を行ふ。
二二四九	一七				
二二五〇	一八			小田原征伐。	
二二五一	一九				
二二五二	文祿元		秀次	朝鮮征伐。	
二二五三	二				
二二五四	三			伏見城成る。	九條植通（二一六七—二二五四）吉野百首。 後陽院御歌合。
二二五五	四		秀吉		
二二五六	慶長元				
二二五七	二			慶長の役。	

天皇	皇紀	年	將軍	事項	歌人
	二二五八	三		秀吉薨ず。	
陽	二二五九	四	秀	關ヶ原の役。	
	二二六〇	五			
	二二六一	六			
	二二六二	七	賴		里村紹巴（二一八四－二二六二）
	二二六三	八	家		
	二二六四	九	康		
	二二六五	一〇			
成	二二六六	一一			慶長千首。
	二二六七	一二			
	二二六八	一三	秀		
	二二六九	一四			
	二二七〇	一五			中院通勝（二二一八－二二七〇） 細川幽齋（二一九四－二二七〇）
	二二七一	一六			

天皇	皇紀	年号	年	将軍	事項
後水尾	二二七二		一七		
	二二七三		一八		支倉六右衛門羅馬に使す。
	二二七四		一九		大阪冬の陣。（慶長年間昨日は今日の物語成る。）
	二二七五	元和	元	忠	大阪夏の陣。
	二二七六		二		家康薨ず。
	二二七七		三		
	二二七八		四		
	二二七九		五		
	二二八〇		六		
	二二八一		七		
	二二八二		八		
	二二八三		九		元和年間、イソップ童話の飜譯伊曾保物語刊行さる。
	二二八四	寛永	元		

天皇	皇紀	年	将軍	事項	歌人
	二二八五	二	宗	大閤記成る。	
	二二八六	三			
	二二八七	四			
	二二八八	五		踏繪の法始まる。	
	二二八九	六			智仁親王（二二三九—二二八九）
明正	二二九〇	七			
	二二九一	八		豐鑑の著者竹中重門歿す。	類字名所和歌集。
	二二九二	九		薄雪物語、尤の雙紙出板。	
	二二九三	一〇			
	二二九四	一一			
	二二九五	一二		參勤交代の制を定む。	
	二二九六	一三		七人比丘尼出板。	
	二二九七	一四		島原の亂。	
	二二九八	一五		清水物語二卷成る。（？）	烏丸光廣（二二三九—二二九八）

天皇	紀元	年号	将軍	事項	歌人
(女帝)	二二九九	一六	光	和蘭の外西洋諸國との通商を禁ず。竹齋物語二卷成る。	
	二三〇〇	一七		あだ物語出板。	
	二三〇一	一八			
	二三〇二	一九		西鶴(二三〇二—二三五三) 可笑記五卷成る。	
	二三〇三	二〇			
後光	二三〇四	正保元		芭蕉生る。	
	二三〇五	二			
	二三〇六	三			
	二三〇七	四			
	二三〇八	慶安元		中江藤樹歿す。	
	二三〇九	二			
	二三一〇	三			木下長嘯子 (二二三〇—二三一〇)

天皇	紀元	年號	家	
明	二三一一	四	由井正雪反す。	雖擧白集。
	二三一二	承應元	吾吟我集十卷成る。	
	二三一三	二	近松門左衞門生る。	松永貞德（二二三一—二三一三） 中院通村（二二四七—二三一三）
	二三一四	三		
後西院	二三一五	明暦元		
	二三一六	二		
	二三一七	三	明暦の大火。 他我身の上出板。	
	二三一八	萬治元		
	二三一九	二		
	二三二〇	三		松葉名所和歌集。
	二三二一	寛文元		

二三二二	二		松平信綱卒す。	
二三二三	三	靈	殉死を禁ず。	
二三二四	四			
二三二五	五			
二三二六	六		お伽婢子十三卷成る。古今夷曲集出づ。	
二三二七	七			
二三二八	八			元政（二二八三―二三二八）
二三二九	九	綱		
二三三〇	一〇		をさな源氏出板。	枕詞燭明抄。
二三三一	一一		浮世物語十卷成る。	
二三三二	一二		（寛文年中大張子及び東海道名所記六卷成る。）	（寛文年中下河邊長流の晩花集二卷成る。）
二三三三	延寶元			和歌吳竹集（刊行）

二三三四			二		狩野探幽歿す。	
二三三五			三			
二三三六			四			
二三三七			五			
二三三八			六			契沖の漫吟集。
二三三九			七			道晃法親王（二二七二—二三三九） 飛鳥井雅章（二二六五—二三三九）
二三四〇			八			後水尾上皇（二二五六—二三四〇）
二三四一		元和	元			望月長好（二二七九—二三四一）。自撰漫吟集。 自撰喚花集。
二三四二			二		山崎闇齋歿。西山宗因歿。 好色一代男出板。	八代集抄（季吟）
二三四三	元		三			
二三四四		貞享	元		好色二代男、花の名殘出板。	
二三四五			二	編	山鹿素行歿す。	

	二三四六	三	西鶴諸國話。西鶴の好色五人女、好色一代女出板。芭蕉の春の日、近松の出世景清等出づ。	下河邊長流（二二八四—二三四六）
東山	二三四七	四	芭蕉鹿島紀行。男色大鑑出板。	
	二三四八	元祿元	日本永代藏出板。	
	二三四九	二	芭蕉奥の細道。	萬葉集代匠記。
	二三五〇	三		
	二三五一	四	芭蕉猿蓑。	
	二三五二	五	徳川光圀楠公の碑を建つ。	
	二三五三	六	井原西鶴歿す（二三〇二—二三五三）	
	二三五四	七	松尾芭蕉歿す。	

	二三五五	八			
	二三五六	九			
	二三五七	一〇		百日曾我改題出板。	
	二三五八	一一			梨本集。
	二三五九	一二			
	二三六〇	一三		御前義經記出づ。	徳川光圀（二二八八―二三六〇）
	二三六一	一四		傾城色三味線出づ。	契沖（二三〇〇―二三六一）
	二三六二	一五		赤穗義士の復讐。女大名丹前能出づ。	
	二三六三	一六	吉	曾根崎心中出づ。都の錦（一）	
山	二三六四	寶永元		薩摩歌出づ。	
	二三六五	二		伊藤仁齋歿す。雪女五枚羽子板出づ。	北村季吟（二二七八―二三六五）
	二三六六	三		栗山潛峯歿す（三十六歳）	戸田茂睡（二二八九―二三六六）
	二三六七	四		色道懺悔男、伊達髮五人男	

皇紀	年號	將軍	事項	歌人
二三六八	五	家宣	堀川波の鼓等出づ。傾城反魂香、丹波與作、關東名殘の夜、美景蒔繪の松、古今堪忍記等出づ。	中院通茂（二二九一—二三七〇）
二三六九	六		新井君美登庸せらる。	
二三七〇	七		風流曲三味線出づ。	
二三七一	正德元		淺見絅齋歿す（六十歳）北條團水歿す（四十九歳）傾城禁短氣出づ。冥道の飛脚出づ。	
二三七二	二			
二三七三	三	家繼		
二三七四	四		和漢三才圖會九十一卷。	
二三七五	五		世間息子氣質、生玉心中、國姓爺合戰等出づ。	

（上欄「中」）

御

吉

二三七六	享保元	尾形光琳歿す。	安藤爲章歿す（紫家七論その他の著あり）
二三七七	二	大岡忠相江戸町奉行となる 槍の權三重帷子出づ。	
二三七八	三		
二三七九	四		
二三八〇	五	大日本史出づ。 心中天網島出づ。	
二三八一	六	近松門左衞門歿す。	
二三八二	七		
二三八三	八		
二三八四	九	關八州繋馬出づ。	
二三八五	一〇		
二三八六	一一		
二三八七	一二		
二三八八	一三		
二三八九	一四		鶉殿餘野子（二三八九—）

天皇	紀元	年號	將軍	事項	和歌
門	二三九〇	一五	宗	田安家興る。	
	二三九一	一六		駿臺雜話五卷成る。	
	二三九二	一七		傾城歌三味線出づ。	靈元院崩す。
	二三九三	一八			賀茂眞淵、京に上り荷田春滿の門人となる。
	二三九四	一九			
	二三九五	二〇			
櫻	二三九六	元文 元		江島其碩歿す（六十歳）	荷田春滿（二三二九―二三九六）
	二三九七	二		安積澹泊歿す（八十二歳）	有賀長伯（二三二一―二三九七） 眞淵江戸に移り住む。
	二三九八	三			武者小路實陰（二三二一―二三九八）
	二三九九	四			
	二四〇〇	五			冷泉爲久（二三四四―二四〇一）
	二四〇一	寛保 元			
	二四〇二	二			國歌八論。
	二四〇三	三			

町				桃								
二四〇四	二四〇五	二四〇六	二四〇七	二四〇八	二四〇九	二四一〇	二四一一	二四一二	二四一三	二四一四	二四一五	二四一六
延享元	二	三	四	寛延元	二	三	寶暦元	二	三	四	五	六
家											堂	
			八文字屋自笑歿す（八十八歲）	假名手本忠臣藏上演。		多田南嶺歿す（五十三歲） 武玉川初編出づ。	並木宗輔歿す（五十七歲）					
加藤千蔭眞淵の門人となる。		田安宗武眞淵を召す。		烏丸光榮（二三四九―二四〇八）			荷田在滿（二三六六―二四一一）	油谷倭文子（二三九三―二四一二）	似雲寂す。			

天皇	皇紀	年		
桃園	二四一七	七		冠辭考。
	二四一八	八		
	二四一九	九		
	二四二〇	一〇		
	二四二一	一一		
	二四二二	一二		
後櫻町（女帝）	二四二三	一三		石上私淑言。
	二四二四	明和元		本居宣長眞淵の門人となる。
	二四二五	二	柳樽第一編出づ。	
	二四二六	三		
	二四二七	四	山縣大貳斬らる。 竹內式部歿す（五十六歲）	
	二四二八	五	雨月物語。	
	二四二九	六		賀茂眞淵（二三五七—二四二九）
	二四三〇	七		

宗

後桃園（女帝）

二四三一	八	湯淺常山の常山紀談。	田安宗武（二三七五―二四三一）
二四三二	安永元		縣居の歌集。
二四三三	二	綾足の本朝水滸傳十九冊。	
二四三四	三	池の藻屑上梓。	冷泉爲村歿す。 僧涌蓮（―二四三四）
二四三五	四	月のゆくへ成る。	
二四三六	五	柳澤淇國の雲萍雜誌。	
二四三七	六		加藤宇萬伎（二三八一―二四三七）
二四三八	七		
二四三九	八	月のゆくへ上梓。	富士谷成章（二三九八―二四三九）
二四四〇	九	風來山人の六々部集。	
二四四一	天明元		縣居歌文。
二四四二	二	横井也有の鶉衣。 天野信景の鹽尻百卷。	楫取魚彥（二三八三―二四四二）
二四四三	三	近松半二歿す（五十九歲）	

治

光		家	
二四四四	四	與謝蕪村歿す（六十八歳）	荷田御風（二三八八―二四四四）
二四四五	五		加藤直枝（二三五二―二四四五）
二四四六	六	松平定信老中となる。	荷田蒼生子（二三八二―二四四六）
二四四七	七		
二四四八	八		
二四四九	寛政元	戀川春町歿す（四十六歳）	靜屋歌集。
二四五〇	二		
二四五一	三		
二四五二	四	露使ラックスマン來朝。 林子平禁錮せらる。	
二四五三	五	林子平歿す（五十六歳） 高山彦九郎自殺（四十七歳） 伴蒿溪の畸人傳五卷。	
二四五四	六		
二四五五	七	圓山應擧歿す。	杉の下枝（荷田蒼生子）出板。

二四五六	八	芝全交（一）	古今集遠鏡。
二四五七	九		鈴廼屋集九卷。
二四五八	一〇	近藤重藏擇捉島に木標を建つ。	澄月（二三七四―二四五八）
二四五九	一一		
二四六〇	一二	（寛政年間松平樂翁の花月草紙、集古十種成る。）	（寛政年間琴後集成る。）
二四六一	享和元	間宮林藏蝦夷地を探檢す。	小澤蘆庵（二三八三―二四六一） 本居宣長（二三九〇―二四六一）
二四六二	二	函館奉行を置く。	
二四六三	三	東海道膝栗毛初編出づ。	
二四六四	文化元	露使レザノフ入朝。	岡屋歌集（栗田土滿） 藤簍冊子成る。

格

二四六五			荒木田久老（二四〇六―二四六四）
二四六六			伴蒿蹊（二三九三―二四六六）
二四六七	二		
	三	露寇樺太に上陸。	
二四六八	四	松前奉行を置く。	加藤千蔭（二三九五―二四六八）
		南仙楚満人歿（五十九歳）	閑田詠草出づ。獅子巖集出づ。
二四六九	五	竝木五瓶歿す（六十二歳）	上田秋成（二三九四―二四六九）
	六	間宮林蔵樺太に至る。	
二四七〇	七	馬琴の弓張月。	
二四七一	八		六帖詠草完成す。
			村田春海（二四〇六―二四七一）。新學び異見。
			栗田土満（二三九七―二四七一）
二四七二	九	浮世風呂成る。浮世床初三編づ。	土岐筑波子家集。
二四七三	一〇	蒲生君平歿す（四十六歳）	
		喜三二歿す（七十九歳）	

二四七四	一一		里見八犬傳第一輯出づ。	
二四七五	一二			
二四七六	一三		山東京傳歿す（五十六歳）	
二四七七	一四	仁	（文化年間日本外史成る）	稻葉集（本居太平）完成す。
二四七八	文政元			
二四七九	二		一茶のおらが春。	草縁集。
二四八〇	三		伊能忠敬歿す。 鯉丈の花暦八笑人。	和歌拾遺六帖。
二四八一	四		櫻田治助歿す（七十三歳） 伊能忠敬歿す（七十七歳）	木下幸文（二四三九—二四八一） 塙保己一（二四〇六—二四八一）
二四八二	五		式亭三馬歿す（四十八歳） 上杉鷹山卒す（七十二歳）	
二四八三	六		大田南畝歿す（七十五歳）	富士谷御杖（二四二八—二四八三）
二四八四	七			清水濱臣（二四三六—二四八四）

二四八五	八		歌川豐國歿す。 外船打拂の令出づ。	桂園一枝。
二四八六	九			
二四八七	一〇		大槻玄澤歿す。	
二四八八	一一			本居春庭（二四二三―二四八八） 桂園一枝出板。
二四八九	一二		近藤守重歿す（五十九歲）	松平定信（二四一八―二四八九） 伯酒舍集（淸水濱臣）出板さる。
二四九〇	天保　元		四世鶴屋南北歿（七十五歲） 石川雅望歿す（七十八歲）	八田知紀景樹の門人となる。
二四九一	二		十返舍一九歿す（六十七歲）	僧良寛（二四一八―二四九一） 雲錦翁家集。
二四九二	三	齊	賴山陽歿す（五十三歲） 春水の春色梅暦。	古今集正義總論。
二四九三	四			本居大平（二四一六―二四九三）
二四九四	五		廣重の五十三次完成。	

		家	
二四九五	六		
二四九六	七		
二四九七	八	大鹽平八郎の亂。 米帆船モリソン號浦賀に來る。	
二四九八	九		
二四九九	一〇		
二五〇〇	一一		藤井高尙（二四二四—二五〇〇）
二五〇一	一二	天保の改革。 渡邊華山自殺（四十九歳） 谷文晁歿す。 馬琴の南總里見八犬傳。	
二五〇二	一三	異國船打拂令廢止。 好色本類の賣買を禁止す。 柳亭種彦歿す（六十歳） 爲永春水歿す（五十四歳）	賀茂季鷹（—二五〇二）

皇紀	年號	天皇	將軍	事項	和歌
二五〇三	一四		慶	平田篤胤歿す（六十八歳）	香川景樹（二四二八—二五〇三）。歌學提要。
二五〇四	弘化元			間宮林藏歿す（六十五歳）	（天保十五年）吉田令世の歴代和歌勅撰考出づ。
二五〇五	二			學習院創立。	浦のしほ貝（熊谷直好）出板。
二五〇六	三	孝		米艦浦賀に來る。	
二五〇七	四				
二五〇八	嘉永元			瀧澤馬琴歿す（八十二歳）	柳園（—二五〇八）
二五〇九	二				橘守部（二四四一—二五〇九）
二五一〇	三			高野長英自殺（四十七歳）	桂園一枝拾遺出板。柳園家集（遊翁）出板。
二五一一	四				明倫歌集。
二五一二	五				高橋殘夢（二四二四—二五一二）
二五一三	六			ペリー浦賀に來る。品川沖に砲臺を築く。又大砲鑄造。	
二五一四	安政元		家	米國と和親條約を結ぶ。	千種有功（二四五七—二五一四）

二五一五	二			吉田松陰米艦に投ず。 江戸大地震。	
二五一六	三		定	米國總領事ハリス來朝。	
二五一七	四				足代弘訓（二四五五―二五一七） 加納諸平（二四六六―二五一七）
二五一八	五			井伊直弼大老となる。 密勅水戸に下る。	鹿持雅澄（二四五一―二五一八）
二五一九	六			安政の大獄。 鼻山人歿す（七十四歳）	石川依平（二四五一―二五一九） 和田巖足（二四四七―二五一九）
二五二〇	萬延元		家	櫻田門外の變。	
二五二一	文久元			和宮内親王の降嫁。	空谷傳聲集（尉眞）出板。
二五二二	二	明		坂下門外の變。和宮降嫁。 寺田屋の變。生麥の變。	小林歌城（二四三八―二五二二） 熊谷直好（二四四二―二五二二）
二五二三	三		茂	鹿兒島の砲戰。 大和の亂。七卿落。	萩原廣道（二四七三―二五二三） 六人部是香歿す。 草徑集（大隈言道）出板。

	二五二四	元治　元	蛤門の變。下關の砲戰。	中島廣足（二四五二―二五二四）
	二五二五	慶應　元	〔慶〕平野國臣、久坂玄瑞歿す。長州征伐。	平賀元義（二四六〇―二五二五）
	二五二六	二	長州再征。	柳原安子歿す。
	二五二七	三	〔喜〕討幕の詔出づ。大政奉還。王政復古。	野村望東尼（二四六六―二五二七） 安藤野雁（二四七〇―二五二七）
明	二五二八	明治　元	鳥羽、伏見の戰。江戸平定。東北平定。	橘曙覽（二四七二―二五二八） 大隈言道（二四五八―二五二八）
	二五二九	二	東京奠都。版籍奉還。	宮中に歌道御用掛を置かる。
	二五三〇	三		
	二五三一	四	廢藩置縣。岩倉具視歐米に派遣さる。	井上文雄（二四六〇―二五三一） 大國隆正（二四五二―二五三一）
	二五三二	五		

皇紀	明治	事項	人物
二五三三	六	征韓論。	八田知紀（二四五九—二五三三）。臣民一般に題を賜はり、歌御會始の和歌を詠進せしめ給ふ。
二五三四	七	佐賀の亂。臺灣征討。	
二五三五	八		太田垣蓮月（二四五一—二五三五）
二五三六	九	萩の亂。	僧閑眞（二四七二—二五三二）
二五三七	一〇	西南の役。	
二五四〇	一三		僧辨玉（二四七八—二五四〇）
二五四八	二一		福田行誠（二四六六—二五四八）

和歌史年表終

昭和十三年九月十日普及版印刷
昭和十三年九月十五日普及版發行

（非賣品）

校註國歌大系
第廿三卷



編輯者　中山泰昌

東京市神田區錦町一丁目五番地
發行者　小川菊松

東京市豐島區巣鴨五丁目一〇八二番地
印刷者　矢島勇三郎

東京市豐島區巣鴨五丁目一〇八二番地
印刷所　矢島印刷所

東京市神田區錦町一丁目五番地
發行所　株式會社　誠文堂新光社
電話神田　自二一二六番　至二一二九番
振替東京　四五三四〇番

昭和五年十二月十七日印刷　昭和五年十二月二十日發行






EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 03030 7276